THE CENTRAL REVIEW

中央公論

昭和三年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

十一月號

第四十三年第十一號　第四百九十號



(1) 經濟學總論　東京帝大教授 經濟學博士　土方成美著
(2) 經濟原論　慶應義塾大學教授　小泉信三著
(3) 經濟學原論　大阪商大學長 法學博士　河田嗣郎著
附錄 限界效用理論　プラーグ大學教授 東京帝國大學講師　アルフレッド・アモン著
(4) マルクス經濟學　高畠素之著
(5) 歐洲經濟史　東京帝大教授　本位田祥男著
(6) 日本經濟史　大阪商大教授 經濟學博士　本庄榮治郎　京大教授　黑正巖　共著
(7) 經濟學史　慶大教授　高橋誠一郎著
(8) 社會政策原理　東京帝國大學教授　河合榮治郎著
(9) 社會問題各論　早大教授 經濟學博士　林癸未夫著

貨幣論

(10) 前篇 貨幣論
後篇 貨幣各論　東京帝國大學助教授　橋爪明男著
紙幣論　東京帝大教授 法學博士　山崎覺次郎著
鑄貨論　東京商大教授 經濟學博士　高垣寅次郎著
各國貨幣制度　東京帝大教授 法學博士　荒木光太郎著
(11) 銀行論　東京商大教授 經濟學博士　高垣寅次郎著
(12) 金融論　東京朝日新聞主幹　牧野輝智著
(13) 景氣變動論　九州帝大教授 文學博士　高田保馬著
(14) 農業政策　東京帝大教授 農學博士　那須皓著
商業政策　東京商大教授 法學博士　上田貞次郎著

商業問題

(15) 第一編 商業概論　東京商大教授 法學博士　內池廉吉著
第二編 物價問題　東京帝大教授 法學博士　河津暹著
第三編 日本取引所論　慶應義塾大學教授 法學博士　向井鹿松著
第四編 外國貿易　東京帝國大學助教授　油本豐吉著
(16) 工業政策　九州帝國大學講師　小島精一著
交通政策　慶應義塾大學教授　增井幸雄著
(17) 殖民政策　京都帝大教授 法學博士　山本美越乃著
土地經濟論　大阪商大學長 法學博士　河田嗣郎著
人口論　經濟學博士　永井亨著
(18) 財政學　京都帝大教授 法學博士　神戸正雄著
(19) 保險學　京都帝大教授 經濟學博士　小島昌太郎著
(20) 統計學　京都帝大教授 經濟學博士　汐見三郎著
(21) 會計學　東京商科大學教授　高瀨莊太郎著
經營經濟學　東京帝國大學教授　中西寅雄著
別卷 現代經濟學辭典兼總索引

現代產業叢書

(1) 農業・鑛業編
第一編 農業　東京帝大教授 農學博士　那須皓著
第二編 林業　東京帝大教授 林學博士　薗部一郎著
第三編 水產業　前水產局長 男爵　村上隆吉著
第四編 石炭　前燃料研究所所長　吉村萬治著
第五編 石油　貴族院議員　內藤久寬著

(2) 金融・保險編
第一編 金融　貴族院議員　井上準之助著
第二編 銀行　三井銀行常務取締役　池田成彬著
第三編 信託　三井信託社長　米山梅吉著
第四編 保險　第一相互保險社長　矢野恒太著
第五編 保險　東京帝大教授 法學博士　森莊三郎著

(3) 商業・交通編
第一編 貿易　三井物產常務取締役　安川雄之助著
第二編 爲替　橫濱正金銀行頭取　兒玉謙次著
第三編 取引所　東京株式取引所常務　長滿欽司著
第四編 海運　大阪商船常務取締役　村田省藏著
第五編 鐵道　前鐵道次官　中川正左著

(4) 工業編 上卷
第一編 紡績　鐘紡社長　武藤山治著
第二編 蠶糸　貴族院議員　今井五介著
第三編 化學工業　貴族院議員　稻畑勝太郎著
第四編 製紙　王子製紙社長　藤原銀次郎著
第五編 製糖　日糖社長 貴族院議員　藤山雷太著

(5) 工業編 下卷
第一編 麥酒　大日本麥酒常務取締役　高杉晋著
第二編 瓦斯　東京瓦斯專務 工學博士　杉浦宗三郎著
第三編 電氣　東邦電力社長　松永安左衛門著
第四編 製鐵　三菱製鐵取締役 工學博士　河村驍著
第五編 造船　浦賀船渠社長 工學博士　今岡純一郎著

(6) 世界產業大觀　東朝主幹　牧野輝智著
(7) 日本經濟圖表　經濟學博士　土方成美編
(8) 世界經濟圖表　經濟學博士　土方成美編

海軍中將子爵 小笠原長生著

鐵櫻漫談

四六版

ボプリン美裝函入

定價貳圓

送料拾貳錢

最新刊

思想善導の絕好指針は是れ!

名は漫談とあるも單に興味本位の漫談ではない。身は華胄界に生れ、海軍軍人として日清日露の兩役を經て來た著者が、深い體驗と廣い交遊を基として編述した本書は眞に思想善導の絕好指針である。殊に著者が親しく知遇を受けた東鄕乃木兩大將の逸話の如きは未だ世に知られざるもの其の面目に躍如たるものがある。其他篇中に現はるゝ人物に、劍豪あり、任俠あり、名優あり、忠僕あり、何れも著者が目睹し體驗したる活教訓である。一般家庭の讀物及び學校の教材として特に本書を推薦する。

附錄 帝國海軍史論 我が國に於ける唯一の海軍沿革史

◇內容◇

布哇政變前後
佐久間艇長
水軍と海戰
兩雄意氣投合
勇將と名優
觀音と忠僕
二大俠と私
雅號
忘られぬ旅行
書道
思出の三書翰
帝國海軍史論

東京牛込 早稻田大學出版部發行 振替 東京一一二三 大阪六八九〇〇

經濟學の世界的權威・一般經濟學・新興經濟學の最高權威・總動員・全國民必讀せよ。

改造社版 經濟學全集

その規模の雄大なる、且つ一般經濟學、新興經濟學の最高權威を會同せしめたる點に於て世界に類例がない。我國民は何人もこれだけの經濟基礎學の智識なくては今後の經濟難を打開して生活の安定を期することは出來ない。殊に四十七卷皆新稿（第二卷の總論及生産篇のみ改訂）にして一冊の分量が五百頁乃至一千頁なるに於て本集一卷は普通全集の二倍の原稿を收錄す。而して河上、福田氏の兩權威が各二冊宛を分担して本全集を絶對支持せるは我經濟學界始まつて以來の一大壯觀だ。その學說の深遠と廣汎と機構の世界的創意に富める改造社ならで誰が企劃し、誰が遂行し得る？ 我社は世界に於ける出版界の革命者である。廉價全集の創始者である。今我社は永年の訓練と總經驗とを本全集の完成に集注して七千萬國民に應ふる所あらんとす。我民衆諸君の絶對支持を俟つ。

第一回配本法學博士福田德三著「經濟學原理」（九六六頁）第二回配本法學博士河上肇著「經濟學大綱」（九〇二頁）

東京・芝・愛宕下町 改造社

新参

社會統計論一斑 法學博士 高野岩三郎

恐慌に關する諸學說 京大助教授 谷口吉彦

日本の企業聯合 早大 出井盛之

た
に加

資本論體系　櫛田民藏

財政制度論　帝大教授　大内兵衛

日本の企業職分　教授　出井盛之

豫約募集　壹冊壹圓

御申込は即刻各書店に

振替東京八四〇二



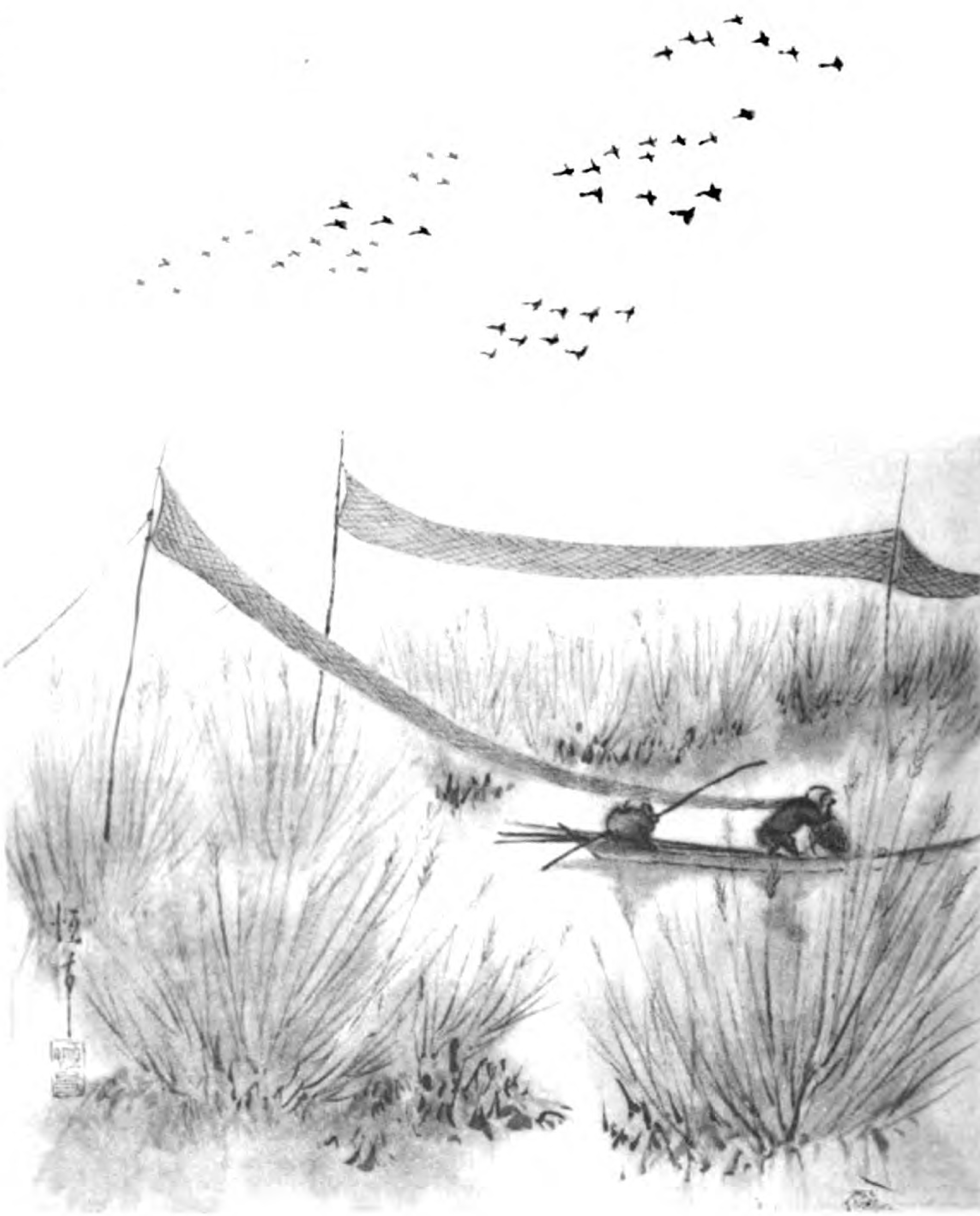
ジャーナリズムの怪傑ハースト……岸東人……一二五

ファン心理

○愚かなファンより……片岡鐵兵……一三九
○負けさせたくない心……澤田正二郎……一四一
○勝てよＫＯ……水木京太……一四二



○なぜ慶應が好きか……尾上菊五郎
○時代遅れのファン……今東光
○早稲田チームの缺點……平林初之輔
發賣禁止內輪咄……立花高四郎
藏書票……碎庵生
歌舞伎と青い眼……他和律



鳥猟

森田恒友筆

◆◆愈々出でて、愈々興味を加ふるは、婦人公論御愛讀の諸兄姉の齊しく認めらるゝ處であります。眞に讀みごたへのあるものとして、最も面白き雜誌として、婦人雜誌中斷然頭角を拔くものは獨り本誌あるのみと、我等は信じて居ります。我十一月號に於ては、現今の過渡時代、混沌時代に於て、いかに在來の結婚形態が惱み多きものであるかを深刻に解剖いたしました。眞摯なる態度にて、その眞實なる姿を摘抉し、如何にあるか？ 如何にあるべきか？の問題を提供いたしました。讀者諸兄姉に多大なるセンセーションを生ずると思ひます。賣切れぬうちにお早く!!

婦人公論「十一月特輯 結婚多難號」

◆◆處女性の結婚における意義……帆足理一郎

結婚多難の試練を經て

◇◇別れた愛兒の姿を夢に見る……花柳はるみ

◇◇信賴しきつた夫に裏切られて……江越初代

◇◇夫の戀愛の火を消すまで……生田花世

◇結婚多難の現代的特徵——若き日と美しき魂のために……吉田絃二郎

●年少の夫を持つ妻の惱み……山田さち子　●媒酌結婚の喜劇……靜雄

戀愛難

◇聰明な母……教子
◇童貞を探す……葉子
◇嚴格な家庭……美智子
◇愛され過ぎて……綾子

妻の秘密

◇メニウの秘密……三郎
◇無言の戀人……いね子
◇戀ではない……章子
◇忘れ得ぬ人……七枝

夫の秘密

◇ラブ・アフェア……京子
◇夫妻の秘密……和維
◇ダダイスト……美佐子
◇子供がない……喜美子

◆娘を結婚させた親の經驗・お互の理解……小崎夫人・酒を飲まぬ……安部夫人・

裸婦を描く 時の氣持

●中川紀元● ●島 葵● ●前田寛治● ●深澤紅子●

誰にも言はなかつた話

◆仲のいゝ時の話……小島政二郎
◆投票の捏造……上司小劍
◆石階千五百段……西條八十
◆白粉の匂ひの秘密……佐々木味津三
◆飢餓の名を借りて……水島爾保布

悲しき破局

〔―心の惱みを涙とともに封じて― 原阿佐緒氏は遂にその愛の巣から敢然として飛出した。其惱ましき手記。〕……原阿佐緒

TEA TIME

◇戀とTRIFLES……下村千秋
◇初戀の記憶……岡田光一郎
◇溫泉場の靈感……師川貞子
●野球を觀る人へ……近藤彌一
●涙の力走……人見絹枝

家庭記事

◇白粉焦けの人の化粧法と豫防
◇女學生用ショールの編み方
◇小學生用オーバーの編み方
◇毛絲編物の簡單な洗濯法
◇毛皮襟巻の流行
◇道具なしで出來る家庭向き支那料理
◇牡蠣と松茸の西洋料理

戲曲

◆公園裏……宇野千代

長編三種

◆脂粉の風……今東光
◆土に癒ゆる……徳田秋聲
◆憂欝な愛人……松岡讓

東京・丸ビル・七七六
中央公論社
定價七十錢・送料二錢

如何して市會を廓清するか

——(卷頭言)——

一、ある特殊な商賣を始めようとて或人が友達に相談すると、其筋の許可を得るには斯んな人に頼むに限るとて市會議員某を紹介して呉れた。數度訪ねて相談を重ねた結果が運動費二萬圓入用と吹かれて驚いて引き退つたと云ふ。後に聞くと、此議員は二業地開設に運動し、その報酬として分けて貰つた土地の賣却に依て巨萬の利得を收め、今もその醜業者仲間の頭株になつて附近の住民達から何を賴んでも埒を明けて呉れる人と崇められ、所謂信望隆々たるものがあるとやら。彼れ今昨今の問題に關連して同じく獄窓に呻吟して居るか否かはまだ確めてない。

市會議員の醜狀は實は今に始まつたことではない。その多くが市に取て所謂獅子身中の蟲に外ならぬことは一見猶且つ極めて明白である。然るにも拘らず、市民有權者が依然として貴き一票を彼等に投じ、少數憂世の士の屢々發せる警醒の叫を他所にして近き將來に於てなほ舊態の改まるべくも見えぬのは何たる事であらう。併し今更一般市民の無頓着なるを責めたとて始まらない。無論市會廓淸の根本要件は市民各自の覺醒に在るは疑ないが、(從てまた無產黨の人達などに依て市政現狀の調査乃至暴露等の正確なる資料が提供せられ更に又之に基いて一般市民の智見の開發せられんことは最も望ましいことである)、折角覺醒しても之を協動せしめる仕組みと訓練とが無ければ本當の淨化廓淸の力とはならぬ。市民の現狀に於てその玆處に到るには尙ほ若干の時期を要する樣である。故に市民覺醒と云ふ根本策は固より之を忽諸に附すべからざるも、差當り之のみに依て廓淸淨化の急要に應じ得ざることは、篤と覺悟して掛る必要があらう。

二、然らば外にどんな應急策があるか。私の考では二つある。一は既成政黨に對する公開的抗議である。と云ふ意味は、今日の所謂醜類は何れも皆一面に於ては一種の手腕家であり、夫れ〴〵政黨の爲には從來多大の貢獻を爲して居る。或る意味では、政黨が黨勢擴張の上に彼等の小才を利用したが爲に遂に彼等の醜行をも寬過せざるを得なかつたのだとも云へる。要するに彼等は皆政黨に取ては大事な人物なのだ。從てその曲庇を恃んで傍若無人に振舞つたと云ふ傾きも慥にある。故に私共の眼からすれば、斯かる事態を生じたに付ては聊も各政黨の幹部が大なる德義上の責任を負はねばならぬと考へる。少くとも我々に大に彼等を詰責するの權利があると信ずる。斯くして市民中の識者が、之等醜類の處分に關し勇敢に政黨幹部に迫る所あらば、依て以てまた弊害を將來に警むるの一助となり得よう。

三、次は從來とは全く違つた系統から市會議員を送るの新制を按出することである。市會議員選擧に職能代表主義を加味すべしとは昨今頻りに說かるる所だ。之を採用すべしとするに相當の理由あるは云ふ迄もないが、單に淸新分子を送るの應急手段としても之は大に攻究するの必要ありと私は考へて居る。細目は玆に詳說するの限りではないが、例へば教員組合、商業會議所、勞働組合、俸給生活者組合等より送らるる議員が從來の議員と相對立して市政を議する樣になつたら、市會の面目は必ずや大に一新せらるるであらうと考へる。

中央公論



第四十三年第十一號
十一月號
四百九十號

問題の中學改善案を論評す

杉森孝次郎

一、二年の錯位

二年までは、すべての生徒を一様に教育し、三年から上を二種にわける點に先づ注意する。

最初の二學年の畫一的教育は個性發見に到達するまでの類性教育の段階であることは「第一學年及第二學年に於て所定

の學科を一樣に必修せしむるは心理發達の程度を顧慮したる結果にして、且此の期間に於て各生徒の知能、趣味、特長等を調査し之に基づきて第三學年以上の學習を有効適切に指導せんが爲なり」（「國民」今年九月十二日）と、當の調査委員會が明白に自認してゐる事柄でもある。恐らく何人もが氣づくであらう通り、この點に關しては、なぜ小學校を八年に延ばして、中學校の最初の二年を廢用にしないかといふ疑問と遺憾が避けられない。

義務教育としての小學校教育は最も基礎的な、その意味に於いて最も綜合的なものであることを條件として、社會人の類性完成の過程に於ける最初の一段階であらねばならん。すでに義務教育としての小學校の發達した制度を有するわが日本の社會の如きにあつては、類性完成の最初的段階を途中で斷絶し、中學の二年を經過して始めてそれがものになるやうな制度を保守または更設することは甚だ不賢明だ。この機會にも、義務教育延長の必要と、それを姑息、等閑、怠慢に附することの罪惡とは熾烈に感ぜられる。今度の案も、それが政府側から出たものであり、大膽なる制度改善をもつて自ら任じ、他から目せらるるが如きものでありながら、その折角の改制案が、劈頭第一に、小學校の內容的未完成を依然保守する性質のものであることは、一つの大きな不注意であるばかりでなく、無責任だとさへいへる。

その上さらに二年の中學教育をうけないでは、小供の將來の志望、選擇、方途が、教育者から見て何分きめられないと概略わかつてゐながら、義務教育をその二年前に斷絶することは、國家として、一つの無責任でなくてなにか。小學校卒業者にして中學校入學を、家の貧ゆゑに、單に志願することをすら最初から絕望する幼少國民の數が、入學者に比して、壓倒的に大である現實の眼前に於いて、またそれを眼前に置いて、その無責任は殊に强大だ。

二、二部別の困難

次ぎに、論議の焦點となつてゐる第三學年以後の二種別案を見る。

區々たる世論がある通り、現情では、第一部志願者があまりにすくなからう。第一に私立に於いてだが、第二に官、公立に於いてさへ、さなきだに巨額の物的設備費を要するがゆゑの困難を有するその部の維持、經營をさらにいよ／＼困難に導くほどにその志願者は少數であらう。この危虞、懸念は事實的根據を持つ。遠くは實科中學校、近くは實科高等女學校が示した運命だけでも、その悲觀を暗示するに十分だ。それよりも有力な判斷が現にある。それは中等實業學校志願者が、中學校志願者に比して、はるかに數量的下位にあることだ。單なる數量的比較は必ずしも問題でない。それが兒童自身及びその父兄の自發的意思の直接表現たる意味を、その數字面以上の開きに於いてさへ、明確に有するものであることを忘れない限り、何人か、今度の二部別案に面して、その第一部の可能、即ちそれが立ち行くことの難易を問題としないことができよう。

世評のなかには、第一部を構成する生徒ありとせば、それは頭腦上、高級學校志望を不適とする部類のものであらう、といふのがある。われらは恐れる。今度の改制案だけのものであつては、その第一部生たるものは、頭腦的不適者であるよりも主として、またすくなくとも、頭腦的不適者のみならず、私有財産的不適者であることをだ。問題はこゝに及んで遽かに深刻化する。

實に、改制案の發生因を分析したなら、そこには例の試驗地獄救濟問題が、多種のうちの一として、あつたことが確認されよう。あの問題が、もとより、いはゆる内申、考査等の末梢的方法によつて解決されうるものでは斷じてなかつた。全學校體系の一面に於ける實際化と、教育の機會を私財の有無から完全に獨立させることが、解決の最低限必要であることは、私は當時これを「試驗地獄救濟の根本問題」（中央公論昭和二年十一月）その他に於いて論告した。現代の日本に於いて、中學校は目的に於いて大學であり、大學は事實上、特權階級の一特權だ。私財の有無が大學、したがつてまた中學校を使用することの能不能を決定する事實が關する限り、この判斷は精確に妥當する。教育期の子弟には通則として私

財はない筈だ。されば、學費の有無は直接に當の子弟自身の性質では決してなく、かれらの父兄の富または貧の制度的反映にほかならない。子弟自身からいへば、それゆゑに、かれら自身の財力がかれらの中學校使用、大學使用をゆるすことは、かれらがすくなくともそれだけの特權階級者であることだ。どうしてかといふに、同じ社會内に、かれらと同様にわかく、同様に本質的成長力の持ちぬしであり、したがつて同様に理想や志望に燃ゆる人口があつて、しかもその人口は家の貧ゆゑにその使用をゆるされないからだ。

大學の正しき社會的存在理由は二種に識別される。一は純粹の教養目的の達成であり、他は社會有用の學藝力の養成だ。前者は高級教養の本質的必要及び能力を有するすべての個人――すくなくとも國民内の――に、かれの私財の有無に關せず、開放されることを至當とする機會だ。そして後者は高級學藝の修得に本質的即ち性能的に適する個々人にのみ、同じく私財の有無に關せず、開放されることを至當とする機會だ。もしも大學がその標榜通り知能的内容に於いて高級のものであるならば、教養目的からしてもこれを有意義に使用しうる本質的適能者はおのづから數に於いて制限なきをえず、專門家養成の目的からしても然らざるをえない。勿論或程度の制限は現に存する。しかし、私財の有無を絶對に條件とせず、本質的資格を純粹に問ふ制度を設けたならば、大學生はすくなくとも一面に於いて現在よりも減ずる可能は確實だ。一面に於いてとは有産子弟の方面に於いてだ。全學校體系の一面に於ける實際化とさきに私が呼んだところのものは社會的有用化のことであつて、專門は、それが眞價あるものである限り、すべてその範疇内に屬する。眞に能く專門家となるために青年が大學に、したがつて少年が中學校に殺到する狀態の出現及び發達があるとするならば、それはいづれの時代に於いても最も歡迎すべき理由ある一事象であつて、そのための費用や設備をば、さしあたり具體的には國家として、極力工夫すべき理由こそあれ、廻避すべき理由は斷じてない。それは最も確實な、そして有利な「投資」の一種にほかならないからだ。しかしわが大學したがつてまた中學校の制度的及び具體的現在は決してこの理想または註文に滿足を

與ふる性質のものではない。現在通りの大學はもつと減却され、縮小される社會的必要がある。したがつて現在通りの大學を目的とする現在通りの中學校がもつと減却され、縮小される社會的必要がある。そして、現在通りならぬ、もつと社會的に有用な、その意味に於いて實際的な大學が新設、增設される社會的必要がある。したがつて、そのやうな新大學を目的とする新中學校が、新、增設される社會的必要がある。問題の二部別提案は、不完全ながら、そして多少無意識的または無自覺的ながら、この國民的、社會的眞必要を反映する。

どうしてかといふに、その提案に於いては、中學校減殺の本能または傾向と、實業學校增殖の傾向または本能とが作用してゐる。その本能、傾向の所在は主として社會の深處にある。そして今度の案の直接當事者の位置はその社會所有を極めて複雜な制限下に反映するひとつの位置にほかならない。その複雜な制限の或ものは聰明だが、他の或ものは歷史的殊に最近の社會事情だ。しかし、それらの制限にもかかはらず、中學校減殺、實業學校增殖の意味は「行動觀察」的「精神分析」的方法の社會學的適用によつて把握される。

中學校減殺は論理的には大學減殺であり實業學校增殖は論理的には大學の社會化だ。

しかし、問題の提案に於いては、その意味及び論理は甚だ不完全に實現されてゐる。なぜなら、あれでは、いはゆる第二部生は時代と社會が必要とする敎育實際化の洗禮をうけ足らず、いはゆる第一部生は、直接に社會に飛び出す準備に於いて、名實兩備の實業學校出身者に劣る。即ち、第二部生は敎育實際化をわづかにかぐ程度にとどまつて體驗、實得するに到らず、第一部生は農、工、商を不完全に修得して職業界の不適者となる虞れが十分にある。

一案としては、義務敎育を八年化し、現在の實業學校に質、數量の兩面から新發達を與へ、中學校をば七年制高等學校の傾向に隨つて、ただし年限と內容に整理、改善を施すことを條件として、純化し、そしてそれを大學に、それも時代と社會の新事情に開眼して改善された大學に關聯させる系統的變化が注意される。現在の文部省案が包含する聰明と衝動

は、結局、その方向にサプリメートされる初發的段階のものとして見るときに最も有意義だ。

三、教育の實際化

生産だけが社會價を持つ。消費は、それだけでは、利己だ。もしも一人が、あるひは一團體がすこしも生産せずに專ら消費するならば、その一人または一團體はその社會の他部から見て寄生的害蟲か、搾取的盜賊かだ。何人も消費せずに生存することはできない。人は通則として生産的實力の可能的または現在的所有者だ。

生産には物質的及び精神的兩種が便宜的に識別される。そのいづれもが他人によつて消費される必要あるものの生産である限り社會價を持つ。しかし、事實として、物的生産には曖昧とごまかしがない。事柄の性質上これは必然だ。他面に於いて、精神的生産は甚だしば〳〵それの社會價に於いて單純と明確を缺く。その虚に乘じて、事實上、精神的生産の看板下に、そして甚だしば〳〵多少の自覺下にさへも、實は社會價なき生活、行動、消費がなされる。現代に、封建制の殘存と、資本主義の發達とを病根、禍源としてその弊はむしろ滔天的でさへある。

大學を見ても、したがつてまたそれを目的とする中學校を見ても、實に於いて消費主義者養成所たる性質をいちじるしく帶んでゐる。正義的見地からしてこれが許容すべからざる現實であることはいふまでもないが、社會保存の國民的、功利的見地からしても、反省、批判、改正の必要は急を告げてゐる。「實際生活に有用なる智能を養ひ且勤勞を愛好するの精神を涵養する爲作業料を新設」、「作業料は之を基本科目とし五學年を通じて之を課し作業に依り勤勞を愛好するの氣風を養ひ兼ねて日常生活上有用なる智能を得しむるを以て旨とし園藝工作其の他の作業を其の內容と爲すこと」（「東京日日」今年九月三十日）といふ、文政審議會への中學改善諮詢案內の表述は、おのづからまたこの時代的、國民的必要を多少とも反映してゐる。全中學教育の一面に於ける作業化は、消費主義的時代病を救治する、そして生産主義的見地、習性、及

び或程度まではまた熟練、技能を新時代の國民一般に養成する効果を持つ

ついでながら注意するが、「園藝工作」とあるのは、すくなくとも語面から判斷する限り、不十分だ。その工作を「實科は園藝、手工其の他の作業に依り勤勞の習慣を養ふを主とすること」（「國民」前掲紙）といふが如き文部省側の表述と照らし合はせて考ふれば、それは主として手工業を意味するかの如くだ。しかし、現代は、それの經濟的生産の方法に於いては斷然機械だ。手工業は現代に於いては實用でなく藝術だ。園藝がまたすくなくともそれの語面に於いてはあまりにすくなく實用的生産であり、あまりに多く藝術的生産だ。勿論、手工や園藝の存在理由は永久に消滅しない。機械の發達は、實は、藝術的意義に於いて最も豐富な手工、園藝等に十分な時間的及び精力的機會を獻與することをこそ自然的結果及び意識的目的とすべきだ。されば、中學校が園藝や手工に、十分に藝術的な見地と方法とにしたがつて精力と時間を割りあてることは至極當然でさへある。問題は、しかしながら、文部省側の眞意が機械工業としての工作に主としてあるのか、手工としてのそれに主としてあるのか、兩者にあるとしてその割り合ひはどの邊か、園藝と農業とを全然同一視したのか、等をもつと明確に表示すべきこと、そしてそれらが明示されたのちに、その適不適に關して生ずる。

ただ、藝術的意義に解釋される園藝及び手工ならば、それは教育實際化の範疇内には屬しない。それは「勤勞」、「實科」等を裏書きする資格に於いても甚だ不十分だ。勿論、しかし、經濟的生産過程そのものを、それの經濟的見地からの價値、能率をすこしも犧牲とすることなしに、同時に藝術價あるものとする餘地、可能が存する限り、それを充足、實現すべきであることは私もこれを十分に理解してゐる。ただ、手工といへば、それは斷じて個人單位の作業または仕事であり、現代の經濟的生産方法は明確に組織的集團力を絕對必要的に單位とする機械であること、機械使用であることは、自明的に平凡な知識かも知れないが、この際、あらためて注意する。

四、社會科學の必要

いはゆる社會科學は、それのいはゆる研究結社的行動が關する限り、最近の日本に於いて、ほとんど完全にいはゆる彈壓され了したるの觀と槪がある。

これを國家的見地から是認すべき唯一の理由は、その社會科學研究結社と稱するものが、實に於いてその名にそむかないものでないことに存せねばならん。なぜなら、社會科學こそは、それが眞實に、正直にその名によつて代表されうるものである限り、現代の時務の時務に屬する。

現代の歴史的位置を問題とせよ。それは産業革命をばすでになしとげたが、それに追ひつく、またはそれを追ひ越す政治的進化をば全然忘却したかの如き、怠慢、未着手の狀態にほとんどある。現代の百惡は、物質技術が長足に進歩して、社會技術がはるかの後方に傳統、習性の殼を固陋、頑冥に保守しつつあることによつて最も便宜多く說明される（私は最近にはこの見地を「經濟が反映する現代の位置——歴史哲學的一考察——」、早稻田政治經濟學雜誌今年九月、に於いて論述した）。陽明の言として傳せらるる通り、知は行の始、行は知の成だ。物質技術の現に見る通りの發達は物質認識の相當發達を原因とする現象にほかならない。社會技術の現にあるが如き低級發達は社會認識の相當に低級な發達を反映するものにほかならない。社會は人間自身ともいふべきものだ。自然は、または物質は、即ち物的自然、物的世界は人間から見て環境だ。われらは環境認識に於いては比較的に長大歩を投じた。機械と自然科學がこれを證する。われら自身の認識をば、われらはいまなほ極度に等閑に附しつつあり、甚だしば〳〵極度に忌避、呪咀さへしつつあるとほとんど記述される。これは、もし惡でないとしても、滔天の愚でなくてなにか。

政府はいはゆる社會科學研究會なるものを彈壓し去つた。名に於いて社會科學であり、實に於いて他の或もの、社會的

に有害なものであるとそれを認めたがゆゑであらねばならん。文字通りの純眞な意味に於いての社會科學研究を政府が意識的に彈壓する理由はない。されば政府は、すくなくとも文部省としては、いはゆる社會科學研究なるものを彈壓し去つた關係からしても、この際殊に、眞の社會科學とはこれぞとばかりに、いはば妖雲を排して天日を指示、公供しくる自然、當然の意思、企畫があらねばならん。

「公民科」の新設は最もこの點に關係を有するものと見ねばならん。「尙憲政自治の民たるの素養を與ふるは當今の急務なるを以て、從來の法制及經濟を必修科目中より除き新に公民科を置きて其の時數を倍加せり」（「國民」前掲紙）といふ文部省側の改善案の部分、「新に公民科を設けて基本科目となし從來の法制經濟の知識的敎育に傾きしに鑑みその敎授は特に遵法の精神と共存共榮の本義とを會得せしめ公共のために奉仕し協同して事に當るの氣風を養ひ公民的陶冶をなすを旨とし殊に道德、歷史、地理、實業等の敎授と聯繫を保たしむること」（「東京日日」前掲紙）といふ文政審議會への諮詢案の部分等をわれらは注意せねばならん。「憲政自治の民たるの素養を與ふるは當今の急務」といふ。その急務は、もとより、憲政に關する、いなむしろ綜合社會技術そのものに關する、卽ち廣義、全義の政治そのものに關する根本的理解、認識、批判、理想を國民全體が確實に把握する一層根本的な急務を假定したものであらねばならん。さうでないならば、その自治は十分に道德的でない。「その敎授は……殊に道德……等の敎授と聯繫を保たしむること」とあり、他面に於いて「必修科目」の標項下に「第四學年、道德の原理、社會生活の原理。第五學年、國民道德、現代思想の批判」とある等の材料からしても、道德に十分なる關心が拂はれてゐると勿論見られる。そしてこれは至極當然だ。

問題は、道德とは何ぞやといふ問ひに對する最善の答へを持ち合せてゐるべきことだ。名こそ道德であつても、內容は千差萬別たりうる。そも〳〵、一つの問題に對して二つの、いはんやそれ以上の數の眞正なる見解はありえない。地球が太陽を廻るか、太陽が地球を廻るかといふ問ひに對しては、コパーニカス系の答解のみが眞正であつて、法王系の答解は

斷じて不眞正であつた。三角形の内角の和は二直角大か、それよりも大または小かといふ問題に對しては、眞正なる答解は最初の一つだけだ。

人間も、社會も、人格も、個性も、精神も、心理も、廣義、眞義に於いて或「もの」以外のものではない。それらのものが或存在であることがすでに自明的にそれを論證する。かくして、道徳とは何ぞやといふ一問に對して正しき二つの答へは、いはんやそれ以上の數の答へは、斷じてありえない。

「道徳の原理、社會生活の原理」とあるところに、かばかりの思想はもとより包含されてあらねばならん。「憲政自治」といひ、「遵法」といひ、「公民的陶治」といひ、これらはことごとく、眞正または最善の道徳意識を權威とするものであらねばならん。法必ずしも善法ならず。されば教育の見地からしては、善法とは何ぞ、惡法とは何ぞといふ批判的能力をも十分に養成せねばならん。

原則意識に於いて淺薄な國民を造つてはならん。原則意識淺き國民は原則意識なき國民だともいへる。淺き原則は生活の綜合、統一または統制にたへない。それではその原則は原則價に缺ける。それは名と意識に於いて原則であつても實に於いて原則でない。淺き厚則は淺き生活をのみ統制しうる。淺き原則によつては深き生活は排除され、無視されるのみならず迫害される。

興國の第一義は深い原則のほかにない。愛國とは深い原則によつてその國を經營することだ。省へりみるに、日本の現在の原則はどの位深いものであるか。理想的見地からしては、何人もそれを十分に深いと判斷することはできない。理想的見地にも高低、深淺別は無限にある。低い、淺い理想的見地では話にならない。現に日本に存する最高、最深の理想的見地をわれらは、國民、國家、政府、教育者の資格に於いては、採用すべき義務がある。

その最高的、最深的理想意識から考察するに、改善案には、或程度までは當然豫期さるる如く、幾多の錯節があり、遺

憾がある。しかし、すべての具體的事情を忘れない限り、われらは、いま遥かに、現在の文部省側からなる提案に單純なる理想的期待をも、註文をも勿論しない。しかし、必ずしも最重要の關心點ではないが、なほかつ例へば「從來の法制經濟の知識的教育に傾きしに鑑みその教授は特に遵法の精神と共存共榮の本義とを會得せしめ公共のために奉仕し協同して事に當るの氣風を養ひ公民的陶冶をなすを旨とし」とあるが如き、また多少の遺憾なしとしない。從來の法制經濟が知識的教育に傾いたと見られる根據も甚だ制限あるものだ。われらは、從來の法制經濟は知的に徹底と完全を缺いた點においてむしろ最もあきたらなく思ふ。

新興日本一の要件は、實に最も本質的な一要件は、國民殊に青年階級に知識慾、研究慾の旺盛至極であることに存せねばならん。無知を條件とするいかなる善もが實は惡だ。無知そのものが一とつの本質惡だが、無知を原因とするすべての善が眞實には善にあらずして惡だ。知識が不幸を或部分に構成することはあらうとも、その不幸は他の部分に構成される幸福によつて壓倒される微弱なものだ。それは個人に於いて然るが如く社會に於いてまた然り。

そもそも、現代は、日本のみならず全社會的に、社會認識の幼稚ゆゑに最も受難しつつある。現代は、まさしく、社會認識の産苦の前兆に於いていちじるしい。この時にあたつて、職に文政の局にあるものが、この時代的眞必要に開眼すべき責任は過說しがたい。われらは當路の人々が精確に、詳細に、果たしてどれほどの探憂と遠慮または賢明なる決意とを有するかをばもとより知らない。しかし、そこになほ大なる反省、發達の餘地が存するであらうことは十分に觀察される。

考へることは知ることの一部だ。知らさないことは、教育の方針としては、禁物中の禁物だ。教育實際化、實科新設の意圖は、もとより少年をして、また青年をして、考へさせないためでは決してない筈だ。社會を考へさせないため、考へる時間と精力となからしめるため、考へない習性を少年、青年に植えつけるための實科新設では斷じてない。盲目的に、奴隷的に「勤勞の習慣を養ふ」ための實科新設では勿論ない。公民科新設の趣旨も、またもとより、現在の社會組織の原則を問題とせず、現制の範圍内にてひとへに遵法、共存共榮、公共奉仕、協同、公民的陶冶を目的とするが如き淺薄なも

のではない。そんなものであつてはならない。どうしてかといふに、そんなことでは、その事自身或巨大なる道德惡だが、また日本が伸びない。それは立ち行かなくさへなるであらう。

改善案を一貫して國民意識の强烈がもとより注意される。この事實の社會的、歴史的背景、事情、事件等ももとより理解され、想察される。國民意識はよろしい。問題はそれが十分に聰明なもの、道德的なものであらねばならぬことだ。生産が消費を決定する力は一般的に强大だ。今日、文部省が或新制度を設け、それによつて教育を生産するならば、被教育者の頭腦、習性は久しうして、あるひは久しからずして、その方面に決定され、形成される可能性は大きい。政府の施設、制度による行動には强制力がある。それだけにその生産がその消費を決定する力は大だ。されば、國家は、この際、國民意識を教育上に强調するにあたつても、それは健全なる原則によつて極めて注意深く支配されたもの、支配されるものであらねばならん。さうでないならば、結果に於いて國民の最善保存、即ち進歩的保存が受難する。

要は實に道德にある。この點もとより改善案が反覆力說するところであつて、要は實にその道德と呼び、道德と意識するところのものが最善または眞正の道德であるべきことに萬全を期するにある。

五、種々

改善案は、教科書改善をも當然一要項と認め、そしてそこでは「著者の創見を促すやう取扱ふの必要ありと信ず」とある。たしかに流弊を射た一言だといはねばならん。問題は、ただ、眞に能く著者の創見を促すためには、道德、政治の全き環境にむかつて適當の改善を實現する條件的または準備的必要に十分開眼すべきにある。かつて文部省は高等學校入學試驗に關する一とつの心得として「推理」、「理解」、「判斷」等の德に歡迎すべき新評價を示したことがあつた。それはつひ今春の事であつた。その場合にも、それが十分に有意義であるためには、それは政治、經濟、道德のいかなる現象、またいかなる原則にもさうした理性の光りを自由に導く用意を必要とするものであつた。その用意を缺いた理性主義が淺く行

きづまる遺憾物である如く、同様の用意を缺いた創見奨勵も一つの末梢藝たるをまぬかれない。

制度及び思想の、即ち學說及び常識の原則的改善に意識と注意が不十分であることが常に何よりも遺憾だといふ感を禁じえない。「小學校教育の基礎により一層高等の程度に於いて道德教育及び國民教育を施」す（諮詢案）とあるが、その小學校教育そのものが、基礎としてまたすでに改善されべき要點を持つものであることを忘れない限り、系統的改善の必要はいよ〳〵具體的だ。

「獨立自主の精神を養ひ、」「專ら心力の啓發を旨とし徒に專門的學術の體系に泥むことなく」、「青年の濶達なる氣風を養はんことを期すべきこと」（諮詢案）等とあるが、これらも、原則意識の十分なる開拓を條件としてのみ眞實には可能な事であつて、その條件を缺く限り、それらも姑息、不徹底、淺薄、卑屈なものであることをまぬかれることはできない。それらのことは聰明、眞理愛、智識慾、理性の自由等を條件としてのみ可能であることを十分に理解すべきだ。

さきに私は實科教育の普及と徹底の必要に關して論述したが、その實科教育の行はるるところ、そこには同時に必ず徹底した社會認識、道德論、哲學の教育を要する。われらは古代ギリシヤ人の如くに工人を賤視的に差別待遇すべき位置にも、時代にも絶對に生活しない。おの〳〵の工人、勞働者、技師、農人、商人は同時に必ず發達した社會認識、道德意識の持ちぬしであるやうに教育が組織されねばならん。

歸納的教育方法は物質技術、物質認識の方面、即ち實科的及び理科的方面に極度に新發達を與へられる必要があるが、それは社會認識、道德の方面、即ち公民科的方面に、それ以上もの力說に於いてさうされる必要がある。昂奮せずに研究し、思索し、討議しうることが、その習性の發達が、今日、社會認識を發達させるための先要的一件だが、これは、早くから學校教育の組織內に社會認識、道德研究を導入することを要求する。そして、それの一方法は歸納的であり、他の方法は實驗的であらねばならん。

歸納的方法は生徒各自、集團的には級自身の、またその學校自身の直接的關心の世界內、身邊的經驗の範圍內に考察、

問題の材料と機械を選擇し、そしてそれの研究、思索を遂行するにある。生徒をして各自的及び組織的に、教師の指導下に、その方法を實行せしめるにある。農、工、商の各方面に於いて、またわたつて、物質技術及び社會技術の兩側面にその仕事は常にありあまる。この方法こそ、生徒を本質的に伸ばし、國民を發明的、創造的に導く一とつの主要方法だ。

實驗的方法は、すくなくとも或程度のたしかさを有する原則、理念から出發して、これを事實、經驗、具體、現象に適用して見ることによつてその原則、理念の價値を確知する行動だ。

現存の演繹は、即ち既成の秩序及び理念は、勇敢なる歸納的行動によつて純化され、改廢されねばならん。そして、發達した原則が、制度が發見され、確設されねばならん。これは中學校教育に待つべき部分をも大きく持つ。

改善案に於ける歸納的及び實驗的方法奬勵の部分は、ただそれを社會認識方面、道徳研究方面にも十分に、いなむしろその方面にこそ殊に意識的に十分に、實現すべきことを條件として專ら肯定される。私自身は、最近にはその見地を、他の重要なる諸見地と共に、「教育の根本問題」（「改造」今年五月）に於いても論述するところがあつた。改善案は、甚だ制限されたかたちに於いてではあるが、或點に於いて同一方向の一現象だ。

もしそれ、必修科目を減却し、選擇科目を增加する方針、少時間ながら自由研究の時間新設、夜間中學校に對する新評價、私立中學校に對する新評價、支那語の加設、貧兒に對する新評價等及び等に對しては、ただその方針と趣旨の徹底と普及を註文條件として贊同の意を表するほかない。例へば外國語についていふならば、支那語以外にも加設を、たとひいますぐにでなくとも成るべく早く、適當とすべきものが一、二のみならずある。露、伊、西、葡語等はこれに屬する。また例へば貧兒に對する新評價についていふならば、「貧困家庭の優良兒教育」などいはずに、單に貧困家庭の小兒教育といふだけの見地がもとより希望される。「優良」を問題にするならば、「優秀なる成績を以て尋常小學校を卒業したる者」を條件にするならば、その優良、優秀なる成績をば、いかなる富豪、權力者の小供にも精確に同樣にそれを問題とし、條件とするでなければ決して完全でない。

警官論

高畠素之

一

あらゆる動物は自由を求めて活動する。自由とはいろ〳〵な欲望が支障なく充たされることである。動物にとつては、食慾性慾を充たすことが唯一の本能的衝動をなし、その結果は自己及び子孫の生命の保存となる。人間にとつても、食慾性慾は第一の基本的欲望である。然し、人間の欲望は單にそれのみでなく、優越慾、名利慾といふが如く、各種各樣の派生的欲望を有し、而もこれらの派生的な欲望が、單なる食慾性慾に代り人間の行動を支配するやうになる。ダーウヰン流の生存競爭がそのまま人間の上に當嵌まらないのはこれがためで、人間は單に生きるためにのみ活動してゐるのでなく、各種の派生的欲望を充足するためにも活動してゐるのである。あらゆる文化現象はそこから生ずる。單に生きることだけが目的だつたら、今日の社會問題も生じなかつたであらう。

人間の欲望は多岐多樣なると共に、程度に於いても限りがない。何處まで行つてもこれで滿足といふ限點には達しないのである。だから、人間は絶えず不自由を感じてゐる。不自由を感じてゐるから、自由にあこがれる。自由といふ言葉ほど、チヤーミングな言葉はあるまい。自由は、過去未來に亘る人類の永遠の理想であらう。

あらゆるユートピアは、自由の理想郷を描いてゐる。人性及び社會の分析反省により現實の條件を考慮することなく、頭の中で空想し得る最も完全な自由郷を描き出すといふのが、空想的社會主義の特色である。英國に於ける無政府主義思想の鼻祖ゴットウヰンの如きは、單に生活の自由ばかりでなく、生命の

自由をさへ空想した。即ち、人間は將來、不老不死の境涯にまで達するだらうといふのである。だが、斯ういふ樂天主義は、單に社會主義的思想のみの特色ではない。アダム・スミスは個人的自由を主張し、自由なる利己（自愛心）追求によつて、社會の最大幸福が得られると唱へた。然し、利己心と利己心との衝突がいろ〳〵な不都合を醸すことは、實際上の經驗が敎ふるところである。そこでスミスは、各人の自由なる利己追求が許された場合には、神樣がうまく調節統合して吳れるだらうと信じた。これは彼れの倫理學上の理想だが、ヨリ實際的な經濟學上の思想に於いては、スミスもそれほど樂天的たるを得ず、個人の利己追求は『他人の生命財産を侵かさぬ』範圍に制限せられねばならず、この制限は國家によつて實行さるべきであるとした。然し、國家の干涉はこの點に止まるべきであり、それ以外の目的から個人の活動に干涉するのは百害あつて一利なしとしたところに、ブルヂオア自由主義の代表者たるスミスの面目がある。そこでラッサレはいふ。ブルヂオアの國家は夜警だけの意味しか持たない、と。

一體、國家に關しては樣々の思想があるけれども、國家を善と觀る說と、國家を惡と見る說との二つに大別し得る。ラッサレなどの思想は國家を善と觀るもので、彼れに依れば、人類の歷史は窮乏、無智、貧困、無力等と戰つて、これを征服する行程である。斯かる行程は自由の發展を意味するものであるが、人間は個別的の力を以つてしてはこの目的を達成することが出來ない。個別的の力で達成し得ない目的を、集合的の力によつて達成せしめるものが、即ち國家である。そこでラッサレに依れば、國家の發展完成は、個人の發展完成を意味することになる。

だが、これは甚だしく倫理的理想主義的な國家觀である。現實の國家は決して自由を本質とするものでない。却つて、その反對に、强制權力を以つて個々人の自由を拘束し統制することが國家の第一義的性質をなしてゐる。この點は、國家を惡と見る無政府主義やマルクス主義の方が、ヨリ現實的であるといへやう。無政府主義は社會の一切の惡は强制即ち自由の拘束より生ずるとなし、强制權力の源は國家であるから、國家は萬惡の根元であると主張し、國家を破壞し去ることが、第一に必要だと主張する。マルクス主義に於いては、國家よりも勞働搾取といふことが先きに立ち、國家は勞働搾取の維持のために生じた强制組織であるとする。それ故、階級搾取が廢止されれば、國家の必要もなくなつて、國家は自然消滅に歸するといふ。で、終局においては、マルクス主義も無政府主義と同樣に、國家た

き社會、自由に對する拘束のない社會を理想とするのである。

けれども、個人の自由に對する拘束乃至制限のない社會を理想するといふのは、これは極めて空想的ではなからうか。私も、國家の第一要素は強制秩序、即ち自由に對する拘束乃至制限にあると考へる。けれども私は斯かるが故にこそ、國家は必然に存在すべきものと信ずるのである

人性に關する樂觀說と悲觀說、換言すれば性善觀と性惡觀とは、いづれを選ぶも本人の性向に從つて自由であるが、人生の現實を直視するとき、私は何うしても樂觀的たるを得ない。人間はどうヒイキ目に見ても手前勝手な代物である。他人の事よりも先づ自分の都合を考へる。他人はどうでも構はないとはいふまいが、とにかく自分の都合、自分の利益、自分の快樂、自分の人氣、自分の權勢が先きに立つ。勿論、他人の便宜を考へぬこともないが、これとて他人の便宜それ自身が目的ではなく、他人の便宜を計ることに伴ふいろ／＼な自己的關心の滿足が目的なのである。斯ういふと、世の中には身を殺して仁をなす聖賢君子もあるではないかと反對する人があらうが、然しこの樣な聖人とか君子とか殉教者とかいふ者は、尋常の範圍に屬しない『變異者』である。百本に一本毛ばかりの唐蜀黍ができたとて、それを以て唐蜀黍一般を律することはできぬ。

人は斯くの如く自己本位的である。他人の便宜よりも先づ自分の都合を考へる。この自己本位的傾向を惡といふならば、人の性は惡である。だから、社會は惡と惡との寄合ひ、エゴイズムとエゴイズムとの對立である。スミスはこの對立が神樣によつて調和されると考へたが、その神樣といふのは個人の魂に宿る立派な精神と解してよからう。教養は、他人に都合の惡いことがやがて自分にも都合の惡いことを反省させ、自律的に我儘勝手をつつしむやうにさせる。だが、この樣な自律的抑制だけで社會の一般的調和統合がとれるほど、人の性が善であるならば、社會には強制秩序といふものは現はれなかつた筈である。

人の性が惡なればこそ、強制秩序が必要になつて來る。強制秩序の目的は、惡と惡との調節を計るにある。人間の欲望は無限に發展し、利己追求の樣相は欲望の發展と共に變化する。早い話が、中世的の經濟では一家の生計を立てるといふことが主なる目的であつたが、現在では家計は家計、事業は事業と區別され、只だ金儲けのために金儲けすることが資本家の目的となつてゐる。そこで中世には見られなかつた新しい利己衝突が生じ、隨つて新たなる制度によりてこれを調節する必要を生じたのである。制度の完備とか改良とかいふことは、利己衝突の現狀を調節するに最も適した制度を作ることを意味する。

二

制度などといふ窮窟なものが何等存在しなかつた極めて原始的な社會も想像し得る。人間が單なる血族群をなして、獸群と大差ない生活をしてゐた頃には、制度などはなかつたらうと思はれる。然し、社會が發達して來るに從ひ、いろ／＼な制度が現はれ、タブーの如き原始的なものから今日の法律に至るまで、また種々なる習慣的制裁から成文的の方法に至るまで、いろいろな發達階段を示してゐる。人間の社會的生活が複雜となり、諸種の欲望が發展すると共に、制度の完備が進んで來た。而して各方面の制度の運用を統一的に執行する機關として、社會的自然陶汰の結果玆に國家なるものが現はれて來た。制度は個人の行動に對する繩墨である。然し、人間は自分勝手なものであるから、都合次第では制度を無視する。無視されても口を出せないやうでは何等の効果もないから、強制權力を以つて制度の裏打ちをなし、制度の規定を侵す者がある場合には強權にものをいはせる。國家は各種の制度規律を強制的に執行する組織的機關なのである。

　エゴイズムの權化たる人間が集合生活を營む以上、自己本位的欲望の衝突は避けられない。この衝突を調節するためには、何等かの強制秩序、即ち自由に對する拘束乃至制限が必要である。そこで、國家といふ形態の社會に限らず、如何なる社會にも統制機能は働らいてゐる。然し國家に於いては、この統制の機能が、他の社會的諸機能から總括的に分化獨立して、それを運用すべき強制權力及び支配器官が特殊の社會群によつて掌握される。この社會群を支配階級といふ。そこで、國家の第一要素は強制秩序であるが、その強制秩序が支配階級に依つて執行される點に、他の社會から區別される特徴があるといへる。

　原始的な社會には統制機能が働らいてゐても、その機能の分化獨立がない。恰も下等な腔腸動物の消化機能が他の諸機能から分化獨立せずして、全身を以つて同時に消化機能にもその他の諸機能にも役立たせてゐるが如くである。然るに、高等生物となるに從ひ、それ／＼の身體諸機能が分化獨立して、消化營養のためには胃腸といふ特殊の器官が具はるやうになる。社會の統制機能もこれと同樣であつて、社會の發達に伴ひそれが次第に分化され特殊化されて來る。この統制機能分化は、原始的の種族社會に於いても既に可なり進んでゐることを見出す。けれども、統制機能がそれ自身として總括的に分化獨立するといふところにはまだ達してゐない。

　この機能分化の傾向は、一の種族社會が他の種族社會を征服

して服從的の地位に置き、斯くして支配種族と被支配種族との階級的區分を確立するに至つたとき、明瞭な形を採つて現はれる。即ち、支配種族が專ら社會統制上の機能及び器官を掌握し、單なる社會統制が階級的支配となる。そこに、國家成立の直接の前提が橫はるのである。

種族征服と同時に、又はその後に及んで、國家の內部に勞働搾取の關係が成立する。斯くして支配關係は搾取關係と結合し、經濟上の搾取者は同時にまた支配階級となり、國家を以つて搾取維持の機關にも役立たせるやうになる。

マルクス主義の國家觀は、この搾取關係と支配關係との結合を重く見、國家が搾取維持に利用される點を强調する餘り、國家の本質は勞働搾取を維持するための强制秩序たるところにあると主張するに至つた。けれども、この考へ方の誤りなる所以は、既述の說明によつて明かである。

勞働搾取の事實はなくなつても、國家の存在すべき理由は殘る。人間は經濟的慾望にのみ生きるものではない。人間の自己本位的行動を促すべき動機は多岐多端である。隨つて、勞働搾取から生ずる利害衝突は、搾取の廢止によつて無くなるとしても尙ほ幾多の自己本位的衝突は殘存し、社會は依然として强制秩序の必要から免れることが出來ない。殊に經濟上の優越競爭がなくなつた曉には、政治的支配の優越慾はます／＼熾烈となるに違ひなく、優越者の一群に依る支配機能及び支配器官の掌握は必然的に豫想される。

三

國家は個々人のエゴイズムを調節統合するために出來た强制秩序である。國家の成立を必要ならしめたものは人間のエゴイズムである。人間のエゴイズムは、人間そのものであるといつて差支ない。人間からエゴイズムを取り去れば、殘るところはほんの人間的形骸だけである。だから、國家ができて統制秩序が確立されてから後も、人間のエゴイズムは依然としてますます發動し、エゴイズムの追求を拘束制限するところの强制權力を邪魔物扱ひにする。事ごとに不自由を訴へて、自分勝手な熱を上げる。

一面ではまた、人間のエゴイズムには支配優越的の慾望が含まれてゐるから、强制權力の擔當者は、强制權力の保持そのことのうちに自己のエゴイズムを充たさんとし、ます／＼保守的となり威壓的となる。人民の邪魔物扱や不平に對抗して、不必要な威勢を張つて見たり、滑稽に近い頑固を通したり、時には無情冷酷な惡魔的快感をすら享樂するの弊に陷る。

强制權力の體當者たる官憲も、一般民衆も、虚心坦懐に國民的社會生活上に於ける强制秩序の役目を理解し、互讓すれば事は簡單圓滿に進む筈だが、さう行かぬところが飽くまでエゴイズムの權化同志である。人間は自律的には己れを律することが出來ない。欲望が强ければ强いほど、多ければ多いほど、それはます／＼困難である。宗教は欲望の單純化を教へ、修道者はいろ／＼な欲望を殺す工風に精進する。けれども、その道で一番嚴格な修業をする禪寺の坊主でも、本山の座主爭ひか何かで忽ち馬脚を露出する。欲望を殺すといふのが抑々人性に逆行する話なので、動物でも人間でも、欲望を充たすところに生活の意義がある。然し個々人が勝手な振舞をすれば、收まりがつかないから、そこで已むを得ず、制度の繩張りをして此處から外へ出るなと制札を掲げる。さういふ制限が善いとか惡いとかいつても仕方がないのである。

目先きの見え透く單純な事柄でも、自律的な抑制、即ち公徳心といふが如きものは、容易に行はれない。電車に乘るのに、乘る方より降りる方がさき、先を爭はないで順番にといふ規律を守れば、すら／＼と早く行くことは分り切つてゐるのだが、そんな事ですら動もすると亂れ勝ちである。尤も、都會に住み慣れた者は、毎日／＼の經驗でその必要を痛感してゐるから、幾分電車道徳なども發達してゐるが、慣れない地方人などと來ては隨分厚釜しく規律破りをする。

我國の一般社會的な發達は加速度的の速さを以つて進んでゐる。殊に都會の發達は著るしい。人口の密集、家屋の櫛比、交通機關の發達、職業の多岐、これらの様々な條件は、泥棒、火事、誘惑、疾病、衝突、墜落、轢殺、刃傷、賣淫等、公共の安寧秩序を傷けるべき無數の原因を醸成する。更らにヨリ廣汎な一般的な問題としては、勞働問題、婦人問題、思想問題等、新しい諸問題が外延的にも內包的にも發展して、底止するところを知らない。これらの新事情に應じて社會的秩序を保つ方法としては、各個人の自律や公共道徳に訴へても無効なことは分り切つてゐる。そこで、强制的秩序はます／＼必要となり、規則の網の目はます／＼細かくなる。直接民衆と接觸して、これらの强制規律を勵行する任に當る警察官の仕事はます／＼多くなり重要になる。

個人的自由を拘束する諸種の警察法規は、斯かる必要から生じたのだが、個人的利害を專ら視野に置く民衆にはその意味がよく徹底しない。何かの場合、例へば自分の家に泥棒でも這入つたとか、自分の子供が餅菓子に中毒したとかいふ様な、直接自分の利害に關係した事が起つた場合には、大いに警察的取締

りの必要を感ずるが、晝夜中フラ〳〵歩いて巡査に調べられたといつては警官が人民を泥棒扱ひにすると憤慨し、自分の店で賣るラムネに警官がケチをつけたといつては不平をいふ。何でも自分に直接都合の好い時だけ警官を有難がつて、のど元すぎれば直ぐにそれを邪魔物扱ひする。大震災當時に於ける軍隊や警官に對する信頼感謝は、今わづかに記憶の底に殘つてゐるに過ぎなからう。

警察官の有難味を忘れるはまだしも、これを邪魔物扱ひし、白眼視するといふのは、甚だ我儘勝手な了見であるが、然し一方から見れば、警官側にも一半の責任がある。警官も人間だから矢張りエゴイズムで動く。權力を示すといふことは、警官のエゴイスチツクな優越感を滿足させる。殊に下級の警察官諸公に至つては、經濟上その他の部面では甚だ惠まれない狀態にあるから、職務上權力の方で優越欲を滿足させ、鬱憤の埋合せをつけようとする。斯かる埋合せの必要を感じないとしても、權力行使に伴ふ優越的快感はます〳〵權力に執着せしめ、權力の失墜に對して極度の警戒を感ずるに至る。そこで、棍棒を持つよりは劍を下げることの方に贊成し、諸願諸屆もなるべく簡單平易でないことを要求し、物の言ひ樣、身のこなしにも、わざと角をつけて威嚴を保たうとする。斯ういふ警官心理は人民の輕侮的言動に對して極度に神經質な巡査諸君の態度に於いても窺はれる。

一體、警官に限らず役人心理といふものは、常人の心理とは格別なところがある。家庭に歸れば近所づき合ひの好い、至極物柔かな人でも、役所へ出て制服を着ると恐ろしく横柄になる。これは權力の威嚴を保つための必要に出づるものだらうが、役所では言葉の使ひ方などにも或る標準を指定してあるのではないかと思はれる。裁判官が被告を呼ぶには、たとひ被告が知人であつても『その方は』と呼ぶきまりらしいが、警官なども特別な用語法を指定されてゐるのではないか。而も言葉の適用使ひ分けは極めて外形的劃一的に決定されるやうである。浴衣の着流しで交番に物を尋ねた場合と、洋服でも着てキチンとした身なりで物を尋ねた場合とでは、警官の言葉使ひが違ふなどは、その一例である。尤も、人口千か二千の田舍なら兎も角、無數の人間のウヨ〳〵してゐる大都會などでは、身なりででも差別をつけるのほかはなからうが。

然し、この種の役人氣質、官僚式は、民衆の無用な反感を挑發する場合が少くない。警官は取締るのが役目、民衆は取締まられるのが當然なのだが、何の氣もなくやる一寸した落度でも頭ごなしに犯人扱ひにされたり、本署へ願事に行つて馬鹿にさ

面倒な手續を踏まされたりすると、大抵柔順な者でも反感や憤滿を抱きたくなる。それでなくてさへ、いろ／＼な規則の不自由に對する鬱憤は、規則の勵行者たる警官へ向けられたがるのに、斯かる無用の反感まで附け加へられるとなれば、民衆の警官敵視傾向はます／＼强まらざるを得ない。

四

民衆の對警官反感に迎合するのは、大方の新聞紙の通弊である。巡査が人權蹂躙をやつたといふやうな問題があると、鬼の首でも取つたやうに騷ぎたて、尾ひれをつけて警官一般を揶揄輕蔑したやうな記事を掲げる。讀者はこれを讀んで溜飮を下げ、從つて新聞の賣高が增加する譯だらうが、社會の木鐸を以つて任ずる新聞紙が斯かる賣らんかな主義にばかり目がくれて、警官の職務の本質に對する誤つた觀念を誘導する如きは、不心得千萬ではないか。警官の中から、たま／＼惡者が出たからとて、敎育家の中からも時々不德漢が飛び出すのと同樣、お互ひに人間の淺間しさで是非もない。どこの社會部面へ行つても、不了見を起す者はゐる。また、警官の官僚的な威張りなども、惡いことには違ひないけれども、さういふ欠點が警官の本領なのではない。警官は社會的强制秩序の執行機關として存在するのである。勝手氣儘な人間の利己心が警官の存在を邪魔物に感ずるからとて、警官を廢したら早速その晩から泥棒が橫行するだらう。不都合な利己的行爲を取締るためには、警官でなければならぬといふ理窟はない。震災當時のやうに、自警團でも間に合はぬことはない。然して、晝間職業に從事して夜間自警團に出動するやうなことでは、當人も厄介だし警戒の機能も充分果たす譯には行かないから、そこで警察制度が設けられ、この社會的機能を專門獨立的に擔當する警官が採用されたのである。

警官の官僚的弊風も、近來はよほど改められて來たやうだ。殊に都會の警官は大分よくなつたことが目につく。これは、警官の職務がます／＼民衆の日常生活と密接な關係を保つやうになり、その結果警官の民衆化といふやうな要求が起つたために影響されたところが多いと思ふ。今日の警官は、昔の岡つ引き番太郎の如く犯罪人を捕へるのみが職能ではない。司法警察は警察の一部をなすに過ぎぬ。風紀、衞生、交通、消防等の各方面に亙つて、警察官の職務はます／＼多くなり、それだけ民衆との日常交涉が頻繁密接となつて來た。活動へ行けば警官席がある。街を歩くと交通巡査が立つてゐる。演說會でも野球でも、人の大勢集まる場所には必ず巡査が來てゐる。斯ういふ風

に頻繁密接に接觸することになると、民衆と警官の兩方に親和の心持が湧くのは當然だし、またさうして互讓妥協が行はれなければ事は圓滑にはかどらない。田舍へ行くとまだ隨分舊式な横柄振りを守つてゐる警官もあるやうだが、それは右のやうな都會的原因がないからである。社會的生活の發達が遲れてゐる田舍では、人々が公共的の規律に服することに慣れないから、警官も自然威壓的に出ることになるのであらう。勿論、このほか、役人の少ない、偉さうな人の少ない田舍では、警官が鳥なき里の蝙蝠を極め込むといふやうな傾向も數へられるであらう。

五

警官の不良行爲が、近來しきりに摘發されてゐる。警官も慾の塊りなる人間の片われだから、よくない了見を起すまいものでもない。巡査が刑事部屋で女に戯れたとか、留置場で怪しからぬ振舞に及んだとか、密會男女を捕へて脅迫したとか、最近目立つてこの種の事件が傳へられるが、實際それほど非道い狀態なのだらうか。新聞紙から受ける感じでは、警官の多數が油斷のならない惡漢のやうに思はれるが、實際そんなにまで警官は腐敗してゐるのであらうか。どうもさうは考へられない。新聞紙といふものは一體民衆の野卑な感情に迎合する傾があり、その結果なんでもかでも警官をやッつけるといふ心理から、事を大げさにするのではないかと思ふ。例へば、留置場で濫りに開くべからざる扉を開いて女にからかつたといふやうな事件を、何かそれ以上の醜態でも演じたかのやうに書き立てることもあらう。

然し、新聞紙の報道がまるで根も葉もない譯ではなからう。多少の事實は存在するに相違ない。而も斯ういふ事實が、頻々として生ずるといふのは、自殺者の流行心理などと同じ作用が働くからではあるまいか。この一二年來、夫婦自殺や親子自殺が流行した。我子を殺して死出の途づれにするといふ樣な殘酷な自殺方法は、從來餘り聞かなかつたところである。然るに、偶々さういふ事件があつて、これを新聞雜誌が盛んに書き立て、世間に深く印象せしめたために、その暗示が後々の自殺者に影響を及ぼす。さもなければ、社會的條件が特にこの一二年來變化した譯でもないのに、親子自殺夫婦自殺が特に頻出した理由は分らない。不良警官の輩出もこれと同じく、新聞紙などが大げさに書き立てるために、暗示的な流行を來たすのではないか。

近頃は新聞にも共產主義カブレの學生上りが這入り込んで、非國家的の片鱗をすきさへあれば覗かせてゐるが、特に目立つ

のは軍隊及び警官に對する蔑視的傾向である。大演習でもあると思ひ出したやうに軍隊の記事を掲げるが、通常は大抵の軍隊記事を無視或は輕視し、偶々大きな見出しでもつけて書き立てることがあれば、それは軍人が車掌と喧嘩したといふ如き軍人を嘲笑するに都合の好い事件が多い。警官に對してもさうである。警官のアラ探しを特種と心得てゐる。ふだん偉さうな格構をしてゐる者、嚴粛な職務に從事してゐる者が、偉いこと、嚴粛なこととは正反對の不徳行爲を曝露するのは、見物人の心にいかにも痛快な興味を起させるが、近來の新聞の調子は單純にそれだけの動機ばかりで軍隊や警官を目の敵にするやうには見えぬ。共産主義カブレの權力否定、軍隊否定の思想が大ぶん新聞の中樞に喰込んでゐることは否定できない。

六

然し、一面に於いては、警官が悪徳の誘惑に陥り易い事實もある。警官は權力を背景とする故、弱い者いぢめをやらうとすればやり易い。婦人容疑者などに對した場合、ふとした衝動に驅られてとかく手が出し好いのではなからうか。その點は、醫師が婦人患者の信頼をうけ秘密を握ることによつて、とかく不良なる了見を起し易いのと似てゐる。婦人の問題ばかりでなく、警官は世間の後暗い連中の間に出入し、水商賣などにも密接な關係を持つので、斯ういふ連中から誘惑もされるし、また進んで弱味につけ込む可能性もある。ニセ刑事でさへ種々悪事を働きうるのだから、本物がやつたら隨分アクドい事もできるに違ひない。

斯う考へると、警官は常人よりも餘程悪事をし易い地位にゐるといへる。而も現在に於いて、時々問題が起るだけで、それ程ひどい非難を招いてゐないところから見れば、警官の規律は可なり嚴重に守られてゐるとせねばならぬ。

日本の警察制度は、世界に於いて最も完備したものと聞く。これは我々の大いに喜ぶべきことである。日本のやうに人口稠密で、而も資源が少なく、經濟的に餘裕のない國では、犯罪や事故の及ぼす影響は極めて大きい。アメリカあたりのやうに、仕事があり餘り報酬の高いところでは、一晩强盗に襲はれて洗ひざらひ財産を持つて行かれて仕舞つたところで、明日から働きさへすればそれで好い。ところが、日本ではさうは行かぬ。一度全燒けにでも遭つたら一生うだつのあがらないことになる場合が多い。

斯ういふ餘裕のない、精一杯にやつてゐる國では、社會の秩序的活動に何か故障が起れば非常に大きな影響を來す。だか

ら、出來るだけ完全に統制秩序を整備し、その勵行に特別の注意を拂はねばならぬ。現在に於いて、日本の警察制度は外國のそれに比し遜色がないとしても、まだ／＼幾多の改良すべき點を持つてゐる筈だ。組織の上でも、人物の上でも。

交番の改良法なども考へられてゐるやうだが、これなどは直ぐにも實行できる手近な問題である。司法警察獨立の問題などは、關係範圍が廣いから簡單に片づける譯に行くまいが、とにかく色々と最善の方法を考へるべきである。

人の問題については、警官の素質向上といふことが可なり矢釜しくいはれてゐる。然し、待遇の考慮を拔きにした犧牲獻身の要望は蟲が好すぎるのみでなく効果もあるまい。百人に一人や、千人に一人は、道樂半分に巡査を拜命する物好きもあらうが、普通はみな生活のための職業と心得て奉職するのである。これは巡査に限つたことでなく、人はみな報酬が得たいから働く。自分の力量才幹に應じて、なるべく厚く酬いられるところへ行かうとする。

現在の警官の勤勞に對する報酬は決して厚いとはいはれない。高等小學卒業程度の學力を有し身心健全な者だつたら、どこへ行つても稼げる程の俸給しか貰つてゐない。而もこの頃のピストル事件の頻發によつても知られるやうに、警官の職務は絶えず危險に曝され、その上世人には毛嫌ひされる。決して樂な商賣でない。それに出世の望も至つて乏しく、學校出の天降りが好い椅子を殘らず塞いでしまふ。これでは、本氣になつて腰を入れる巡査も少ないのがあたり前で、有能の材はみな一時の腰掛けのつもりだから、折を見ては他所へ行つてしまひ、後には氣のきかない連中ばかりが殘ることになる。絶えず入れ換りが行はれて、新米と殘留鈍才組とが大部分を占めるといふ有樣では、練達優良の警官を見出すことが困難なのは無理もない。

警官の素質を向上させるためには、物質的待遇をよくすることが第一に必要な根本條件だが他面ではまた、警官に對する世間の偏見的蔑視反感を一掃することも大きな影響があらう。即ち、國民的社會生活上、强制秩序の必要缺くべからざる所以を理解し、警察はこの社會的統制機能の一機關たることを認識し、正當の尊敬と同情とを以つて警官に對したならば、警官自身の自重心も高まり、民衆に對する對抗的敵視もなくなり、從來世間的印象から警官となるのを厭がつてゐたやうな人たちも、進んで警官となるやうになるに違ひない。これも餘り大きくは考へたくないが、天下國家のため少なくも或る程度の効果があることは確かだらう。

「憂鬱」なる政局の展望

既成政黨の分離結合と無產政黨の統一

田所輝明

一、「憂鬱」なる政局

樞密院のクーデターによる組閣以來、總選擧、特別議會を通じて、田中内閣の一つ一つの政治は凡てこれ民衆に對する正面からの攻擊であつた。かくて輿論の首の座に置かれた田中内閣は、しかも再度の内閣改造を餘儀なくされた程に不斷の動搖と不安にあつた。亢奮した人々の群は絕えざる緊張の斷續を以つて、この反動政治の破局を間近かに待ち望んだ。一方、『進步』の假面の下に總選擧に乘り出した民政黨は、總選擧を成功的に戰つた。この『强力』なる野黨の上に濱口內閣の出現を夢みたのは獨り病床の安部磯雄氏のみではなかつた。けれども田中內閣は强引に押し通し、しかも民政黨は何等明白なる對立を展開せず、寧ろ對立を縮少しその無氣力なる野黨振りは、遂に床次派其他の脫黨によつて全く無力化された。かくして田中內閣は安定し、その反動政治は葬列のそれの如く永遠に續くかに見ゆる。一方普選によつて表面に現はれ、政局に新らしき波紋を描くべく豫想された無產政黨は、未だに豆大の小黨の對立の中にある。しかも無產政黨統一は依然として聲明の欺瞞である。

押しの强い圖太い政府と變り映えのなさ相な無氣力にして無力の野黨、子供らしき無產黨――かくして今日迄政治に關心し來つた人々の群は、今や極度の弛緩に襲はれて、この混迷の政局を『憂鬱』と觀念する。それは眞に光なき『憂鬱』なる政局ではある。だが人々の『憂鬱』の本質はどこにあるのか？想ふに政局に行詰りを感じ、政局に發展性を認め得ないからであらう。與黨と野黨の間に何等の銳い對立が展開されずに、かへつてそれが解消され近くがためであらう。しかし人々が政局に行詰りを

感ずるのは、更らに以上に彼等の政治の見方が行詰つてゐるからである。人々の政局の見方は與黨と野黨の對立、政友と民政の血戰、云ひ得べくんば二大政黨の對立である。かゝる觀點からするが故に、人々は凡ての政治的事象の意義を見失ひ、そこに與黨と野黨の對立が解消し行くとき、只管に退嬰な停滯を感じ、『憂鬱』を觀念する。資本主義の發達は階級對立を發展した。階級對立の遞増は階級內部の對立の遞減を導く。プロレタリアートとの鋭化する對立の前に、ブルジョア諸黨間の對立の激化は許されない。ブルジョア的政治思想は『國民』を見得るが階級には盲目である。蓋し見ることを欲せざる程しかく大なる盲目はなきが故に。

人の何たるかは彼の云ふ所によつて判斷することは出來ぬ。吾々は資本主義の現勢と階級對立の觀點からのみ凡ての政治的事象を正しく説明し理會し得る。かくて吾々はこの『憂鬱』なる政局の全過程の中に、既成政黨の分離結合と無產政黨の統一の全動向と發展性を發見し、ブルジョアジーとプロレタリアートの對立の上にある政局の前景を描く。かゝる展望を試みつゝ政治時評を綴る。

二、既成政黨を操る見えざる手

餘りにも明白であるが故に、凡ての統計的說明を省略して階級の政治的地位を素描きにして先きを急ぐ。

後進資本主義ではあるが急劇を以つて進んだ日本資本主義は歐洲大戰を經て、後期帝國主義として自らを完成した。現時の生產は會社企業であるがそれは小數の大會社の支配下にあり、それ等の大會社はカルテルの形に於いて產業を獨占してゐる。會社の上には銀行がある。銀行資本は產業資本に接合され金融資本として全經濟を支配してゐる。而して銀行は實に三井、三菱、第一、安田、住友の所謂五大銀行の統制下にある。殊にその卓出するものは三井と三菱である。この二つの大資本は金融界を支配し、產業界に於いては凡ての生產手段產業（石炭、製鐵、造船、機械）を獨占し、更らに貿易に於いて巨大なる商業資本を運轉してゐる。かくて吾國資本主義經濟はこの双頭の金融寡頭支配の下にある。政治は經濟の表現の故に、それは帝國主義ブルジョアジーの政治的制覇を意味する。

政治の主人なる帝國主義ブルジョアジーは他の社會群と如何に對立するか？第一に同一基礎の上に生長したプロレタリアートと鋭く對立し、その對立は鋭化する。プロレタリアートのみはブルヂョアジーの本質的に且つ最後までの對立物である。この外に小ブルジョアジー――所謂知識階級と小商人、職人、小

製業者――と農民がある。所謂知識階級は社會の事務管理のためにブルジョアジーの必要のための生産物であるが、小商人小製業者等の小市民と農民は封建時代の殘存であり、今やブルジョアジーとプロレタリアートに分化しつつある過渡的階級である。彼等は自己の中産階級的地位を擁護するためにブルジョアジーと戰ふが、同時に資本主義秩序の平和の中にのみ自己の生活が存する故にプロレタリアートの社會變革には反對し、不斷に兩基本的社會階級間をうろつき動搖する。それは大資本の制限、輕い稅金を要求し、民主主義を要求する。而して、ブルジョアジーの帝國主義的諸政策の負擔のために彼等は反抗を重ねてゐる。農民はその政治的無關心の故に今も既成政黨の主なる投票者となつてゐるが、その下層はプロレタリアートと同一の地位にある。この小市民と農民に重要に影響する一要件は、吾國にはブルジョアジーの政治的制覇が嚴存するにも拘らず政治的自由の徹底がない（制限普選の出たのは昨日であつた！）それは主としてブルジョアジーが封建的支配勢力の克服に際して自己保全のために決定的なる大衆鬪爭により得ず、主として封建勢力の經濟的基礎の衰失を動因とする過程的置換によつたからである。封建勢力はブルジョアジーの支柱として存し、そのための政治的讓步はブルジョア政治に必要以上の反動性を帶ばしめてゐる。かくてそれは小市民と農民のブルジョアジーへの對立を强めてゐる。

かゝる諸形勢がブルジョアジーとプロレタリアートの、この基本的對立者のそれ〲の階級戰略を決定する。吾々は三つの權力中心を持つ――ブルジョアジー、プロレタリアート、農民及小市民。ブルジョアジーはプロレタリアートを孤立化するために小市民と農民を奪取せねばならぬ。後者は前者を無力化するために少くとも小市民と農民の下層を味方にせねばならぬ。全世界の凡ての資本家國家に於いて、今や兩階級間に熾烈なる農民及び小市民の奪取戰が展開されてゐる。ブルジョア戰略の執行者なる既成政黨は旣によくそのために戰つてゐる。普選法、陪審法の施行、自作農創成案がそれである。しかもそれによるプロレタリアートの進出を注意深く防衞して、普選には制限を附し、同時に治安維持法、暴力行爲法を制定し、警察犯處罰令、違警罪即決令、行政執行法、治安警察法等の合法的拷問諸法をそのまゝにし、小作法、組合法の設定を忌避してゐる。之に對しプロレタリア戰略のためにデモクラシーを目ざして勞働者と農民と小市民の無產黨が戰つてゐる。

三、政友會と民政黨の同一性

政黨は階級の部分であり階級闘爭の機關である。政友民政は共に同一なる帝國主義ブルジョアジーの見えざる手によつて操らるゝ文樂座の人形である。政友會の政治、民政黨の政治はそれ等の政治にあらずして、同一なる帝國主義ブルジョアジーの政治である。

吾國のブルジョア政治思想家は、憲政常道――政黨內閣制――と二大政黨對立主義を政治の理想として長い間持ちつゞけた。歐洲大戰を通じての異常なる資本の發達――封建諸勢力の克服によつて政黨內閣制は一應確立されたかに見ゆる。けれども、時既に二大政黨對立主義はその基礎を喪失して了つてゐた。即ち帝國主義後期に於ける、內の階級對立の激化と外の他國ブルジョアジーとの對立の鋭化によつて、かゝるブルジョアジー階級內の對立が許されない。二大政黨對立主義は、英國の永き保守黨と自由黨の對立に見るが如く、資本主義初期の現象である。プロレタリアートが未成形であつて、それ等の政治的要求がブルジョアジーの急進的政黨に吸集さるるときにのみ可能である。階級對立が微弱であるが故に階級內の對立――金融資本と産業資本の對立。封建勢力とブルジョアジーの對立――が明確に展開され得る。かくてそこに金融資本と地主貴族の保守黨と産業資本、小ブルジョアジー、プロレタリアートの自由黨の對立が可能であつた。かゝるときにのみ『明るい憲政』が實現され得る。現在の我國のブルジョアジーの階級內部に於いても、金融資本と産業資本、封建勢力とブルジョアジー等の對立はあるが、かゝる小對立は階級對立の前面には、階級利害の防衛のために斷乎として無視される。かくて政友民政は一丸として吾々に當面するばかりでなく、その實踐に於いていよ／＼その別異性を失ひ同一性を發展してくる。

吾々が既に見た如くブルジョアジーの戰略はかうであつた。歐洲大戰から返り血を浴びて拔け出た吾國のブルジョアジーは、內には封建勢力を克服して政治的主人となり、同時にプロレタリアートと鋭く對立し、小ブルジョア、農民と對立した。外には、戰鬪的帝國主義ブルジョアジーとして『ビッグ・スリー』の仲間入りをして英米ブルジョアと對立し、同時に一方は『勞農ロシア』他方は革命支那――支那のブルジョアジーと民衆――に對立する。こゝに於いて二面の表現をする一つの行動戰略が生れる。一つは積極面（保守性）――封建勢力を自己の支柱として有するための政治的讓步――必要以上の反動性、資本主義安定のためのプロレタリアに對する彈壓性、英米ブルジョアジーに對する强硬外交、支那民衆に對する抑壓（北方軍閥擁護）等。他は消極面（進步性）――小ブルジョア及び農民

を奪取するための政治的デモクラシーの部分的伸張、英米ブルジョアジーに對立するための支那ブルジョアジーとの可能な妥協等。積極面の表現が治安維持法暴力行爲法の制定、對支出兵であり、消極面の表現が普選法、陪審法の實施、南京共同出兵の拒絶に表現されてゐる。

政友會は三井を中心とする金融資本の下に地主、農民を支柱とし、民政黨は三菱の金融資本の下に小ブルジョアを支柱とする故に、さゝやかな對立こそあれ、要するに帝國主義ブルジョアジーの行動戰略に於いて前者は主として治安維持法面を後者は主として普通選擧法面を代表するに過ぎない。今や積極面の強行が必要であるが故に、見えざる手の壓力によつて民政黨は自已を多少犠牲にしても、田中大將のひく強引の急ピッチに整調せしめられてゐる。

四、イン・ザ・ネーム・オブ・ピープルス

以上の如きブルジョア戰略を思ひ合すとき、人々は政友會の反動政治を容易に肯定するが、民政黨の進歩的假面を容易に看破し得ない。蓋し多くの人々は政黨を同一政治思想による集團と概念するが故に。既成政黨には綱領といふものはないが、民政黨のそれは幾分綱領らしいものである。その綱領は政治に於いて議會中心主義（ブルジョア・デモクラシー）、經濟に於いては自由競爭主義、國際關係に於いては平和主義と國際協調主義を唄つてゐる。これはその表現に於いて見るとき自由主義的ブルジョアジーの要求である。しかし乍ら人は歷史を超ゆることは出來ない。彼のなし得る限度は社會の發達の段階の許す範圍である。資本主義には二つの時代がある。一つは自由資本主義時代であり、他は獨占資本主義時代である。自由資本主義時代は、資本主義の成長期であり、ブルジョアジーが封建勢力に對して革命的であり、デモクラシーのために戰ひ、政治上には自由主義を採用する。經濟上では産業資本が支配し、自由競爭を原則とし、主として消費貨物を生産し、貿易は消費品の輸出であり、從つて國際關係は概して平和主義である。獨占資本主義は即ち帝國主義である。ブルジョアジーが反動的となり、彈壓政治を布き、金融資本が支配し、自由競爭は獨占に代り、生産は生産手段貨物となり、貿易は資本輸出で、國際關係は市場、資源、植民地の爭奪及び輸出資本擁護のための戰爭時代である。階級對立、戰爭の危機、弱小民族の反抗の時代である。民政黨の綱領は自由資本主義時代のブルジョジーの可能性を示すもので、現代——帝國主義時代のそれではない。それは全くの羊頭狗肉である。そのためには議論よりも民政黨とは研究會と妥協

した憲政會と普選に最後迄反對した清浦内閣の足輕黨政友本黨との合作であることを想起する方が速い。かゝる民政黨の『進歩』の假面は第一回普選に於ける投票かき集めのための大膽なる化粧であつた。

吾々は政友會と民政黨の同一性を述べて來たが、これを更らに實踐に於いて見よう。

財政上に於いて政友會の積極政策と民政黨の消極政策が對立してゐるやうに見ゆる。けれども實踐に於いてはどうか？　消極豫算が十四五億であり積極豫算が十五六億である。想ふにブルジョアジーにとつて現時は經濟再建の時代である。積極主義のために增税すればプロレタリアートは勿論、小ブルジョアジー、農民の反抗を呼び起し、公債主義をとれば公債市場の暴落を導く。かくて『ない袖は振れぬ』といふ三土財政は濱口財政の踏襲の域を出ない。但し兩者とも軍事費に對しては積極主義であるのは勿論である。時には責任支出が議會協贊額の數十倍になる程度にまで。

また勞働政策――思想政策はどうであるか？　田中内閣は共產黨事件を生存鬪爭の具に供したが故に、特に大がかりなデマゴーグをなし、勞農黨を解散し、緊急勅令で治安法を改正し、『赤色』教授を追放した。けれども、治安法を作つたのは加藤内閣であり、農民勞働黨を解散したのは若槻内閣であり、社會科學研究會に最初の手入れしたのは岡田文相である。どれがどれ程異るのか？

特別議會以來繰り返へされた『憲法の名に於いて』なされた政友と民政の對立鬪爭を見る。鈴木内相の議會否認の聲明に對する野黨の攻勢、政友會及び全反動團體による民政黨の『議會中心主義』への攻撃、不戰條約の『イン・ザ・ネーム・オブ・ピープルス』に對する論議――一體何がどうしたといふのか？　吾吾には唯々嘗つて濱口總裁を朝憲紊亂で告發した建國會が、こんどは田中首相を不敬罪で告發したといふ新聞記事を見て微苦笑するのみである。つまらぬことはよして、もつと別な『人民の爲に』なるやうなことを『人民に代つて』でも『人民の名に於いて』でもやつて載きたいものである。

東京市會（善哉言や！　盜狂姿怪！）の醜疑獄に於いて、何れが何れより、より綱紀肅正に忠實であるといふのか？　吾々は嘗つて民衆の法廷が有罪を宣した怪文書を不起訴にした檢事局が今度もまた民衆が既に起訴してゐる『府の大官』を捕縛しないかどうかを見るのみである！

五、田中外交と幣原外交の『鬪爭』

政友と民政の外交政策の對立は田中外交と幣原外交の『鬪爭』によつて表現されてゐる。民政黨は數次對支外交聲明書の訂正版を發行し、政友會は對支出兵の政略的價値が過ぎ去つたので後退を始め、今やその姉妹を判別することが出來なくなつた。しかし、過日も東京朝日に於いて永井前外務參與官と植原現參與官とが、永々しい文字の鬪爭を展開してゐた。

「永井前參與官は幣原外交の軟弱ならざるを辯明し『一面支那の國民的宿望中道理あるものはこれを承認して新興支那と日本との間に不可分の情誼を結ぶと共に、他面支那に於ける我既得の權利利益を確保し、進んで經濟的進出の機會を開拓するがために全力を傾けた』と幣原外交を定義し、田中外交の援奉政策と濟南事件を攻擊してゐる。これに對し、植原現參與官は田中外交は强硬一天張りにあらずと辯じ『田中外相は我國家百年の經綸を基礎とし、その對支策につき徹底的目標を有する。即ちこれは支那に於ける無盡藏の物資と四億民衆の消費力の利用である。然し支那の無限の富源を開發しこれを利用するには、强固なる中央政府の建設が絶對必要要件である。されば田中男は政情安定し、一日も早く國內の和平統一を熱望するのみならず、支那國民のこれに對する努力に對して深厚なる同情を有し出來る限りの應援を惜しむものではない』と田中外交を說明し、幣原外交の南京事件と英國の共同出兵提議の拒絶を非難してゐる。」

これを比較するとき文章として永井參與官に一日の長ある以外、田中外交と幣原外交の別異性を見ることは出來ぬ。同一軟弱ならざる帝國主義外交である。日本ブルジョアジーの對支外交の根本は何處にあるか？ 既に述べたやうに支那の資源と市場の獲得、滿洲及び山東を中心にする輸出資十八億六千萬圓（六月、政府調査）の擁護は日本資本主義にとつて絶對的である。そのために支那のブルジョアジーの革命勢力及び英米ブルジョアジーと鋭く對立する。田中外交は『排日による小貿易業者の一時の損益』を犧牲にしても斷乎たる態度をとれと稱して出兵し、滿洲保全を策したのは一面に於いて對支出兵が田中內閣の政略であつた爲に現地保護のための出兵を行つたのであらうと共に、國民革命が山東、滿洲の野に近づいて來たからである。幣原外交が英國の出兵提議に反對したのは、英國ブルジョアジーとの對立のためであり、問題が英國の支配地帶なる長江沿岸であつたからである。若し若槻內閣が存續して、國民革命が山東、滿洲に近づいたときには恐らくは出兵を辭さなかつたであらう。現に十三年秋の第二奉直戰爭に於いては、『滿蒙權益擁護』の覺書を發し、郭松齡反亂に際しては斷然援張政策をとり、兩

度とも兵を動かしてゐる。田中外交も排日運動のための對支貿易の中絶によつて小貿易業者の反抗が大となるにつれ、一方政略的意義も失はれたので、第二奉直戰當時の幣原外交の硬度に逆還元しつゝある。

六、田中内閣の存續性の基礎

樞密院のクーデターによる組閣、選擧干渉、第一第二怪文書、議會否認の聲明、特權法の黨略的亂用、亂脈の人事行政、共産黨事件と對支出兵の政略的運用、勞農黨の解散、優諚問題、内閣連帶制の破棄――吾々は田中内閣の上に比類なき反動政治を見る。吾々は批評の言葉を知らずに、唯、無産黨が暴露戰を十年組織するよりも、より大規模なる民衆の啓蒙の貨物教授をなしたことを擧ろ田中内閣に謝すべきであらう。

この田中内閣は今や吾々の前に一つのスローガンを掲げて立ちはだかつた。曰く――外交と思想の國論統一！　これは大膽なる要求である。この『國論』とは勿論ブルジョア諸政黨の意見の統一であつて、それは田中大將をして呼ばしめる見えざる手の要求である。『外交』は即ち對支外交である。他國のブルジョアジーに對抗する問題の故に全ブルジョアジーは團結せよ！『思想』は對プロレタリアートの問題の故に全ブルジョアジーは階級一致せよ！　しかもそれは吾々が見るが如く統一されたではないか。これを田中内閣にとつて見れば、政略的に運用した對支外交と共産黨事件の後始末でもある。前者に對しては民衆を犧牲にする巨額の軍事費による數次の出兵と張學良に對する『勸告』。後者に對しては治安維持法の緊急勅令による改正、思想善導のための漢學の復興と急進教授及び學生の追放、二百萬の思想警察費による全國思想サーベル戰線の配置。元來妾宅と待合の政治家共が、ハンマーを振る勞働者や田圃を這ふ農民の思想を善導するなんてことは身分不相應のことではあるが、漢學者の失業救濟やサーベル線を張つて大衆の精神と肉體を捕縛するよりも、その費用で失業救濟でもする方がより善導に近いであらう。殊に治安法を死刑に改正した一點は、禁錮一年の治安警察法時代に結社被告が二十九人で、懲役十年の治安維持法時代に被告が五百名に増加し、死刑時代にはどうなるかを考へ合はさねばならぬ。死刑は彼等をして『ピス健』『ピス平』と同一ならしむるが故に、既成政治家のよくする春秋の筆法を用ゆれば、昭和三年十月二日夜東京淺草の一角に於いて共産黨幾黨をして巡査部長高木信平を射撃せしめたる者は果して何人であるか？

かゝる反動政治の根據は、世人の云ふが如く軍閥内閣の故

でなく、ブルジョア戰略の執行のためである。同様にその田中内閣の存續の基礎は久原遞相の云ふが如く、本性たがはざる『醉拂ひ内閣』の故でなく、ブルジョア戰略の遂行のために、現時に於いては、その『治安維持法面』の經續を必要とするからである。對外帝國主義政策の遂行のために民衆への負擔の加重、資本主義安定のための資本攻勢――産業合理化の下に賃銀の切下と時間の延長、解雇、農村に於ける立毛差押と立入禁止。この凡ては大衆の反抗を呼び起す。そのためには最も反動的政府を必要とする。英國に於けるボールドウインの保守黨、佛國に於けるポアンカレーの國民聯合、獨逸に於けるルーテルの右黨聯合が選ばれてかなりに續いたやうに、吾國に於いては田中大將の政友會が强行軍を継續してゐる。田中内閣の反動性と存續性がかゝるブルジョアジー當面の戰略にあるとすれば、田中内閣は容易に倒れないであらうし、同時にその打倒有資格者は民政黨にあらずしてその本質的對立者なる無産黨である。若しもブルジョア戰略の『積極面』が行詰つたときは、戰爭に爆發するか、或は『消極面』の民政黨の組閣するときである。そのときと雖も民政黨は打倒したにあらずして、見えざる手によつて交迭されたのみである。

七、床次黨及び憲政一新會

田中内閣の反動性と存續性が既に見た如くブルジョアジー當面の戰略とその遂行にあるとすれば、その完全遂行のためには田中内閣を安定せねばならぬ。田中内閣の安定は即ちブルジョアジー政權の當面の安定を意味する。こゝに於いてか、無産黨のキアスチングヴオート――『小數獨裁』の不安定を除去するために『政府の魔の手』が民政黨に伸びてゆく。これ床次派が『對支政策、思想問題、財政緊縮、金輸解禁の四大政策を實施せんに現に在るが如き勢力相若ける二大政黨の對抗による政界の不安定を以つてしては到底望むべからず』との宣言を掲げての脫黨であり憲政一新會の出現である。

曾つて特別議會に於いて、無産黨のキアスチングヴオートを封じて政局安定の役割を演じたのは『新自由主義』の紫の旗を掲げた明政會であつた。彼等は政友民政の聯合代理店として、前者には内相を後者には不信任案を犧牲にせしめて、無産黨進出の機會を作る解散を回避した。床次黨その他はより有力なる明政會に外ならぬ。即ちその役割は（一）ブルジョアジー當面の戰略遂行のために田中内閣を安定させ階級鬪爭を行ふこと、（二）議會に於ける無産黨のキアスチングヴオートを完全に封

し、同時に全プロレタリアートの進出を阻止すること。

これに對し十月二日の民政黨幹事會は『第一回普選に當り現内閣の倒壞を絕叫して當選したる代議士はそのために一路邁進すべきにも拘らず』脫黨するとは『憲政の汚辱』であつて『國民的制裁』を要求すると決議し憤慨してゐる。かゝる憤慨をなし得るのは大衆であつて彼等ではない。ブルジョアジーにとつては脫黨者に『階級的褒賞』を與へねばならぬのだ。しかし民政黨よ悲しむ勿れ！對支貿易の激減による小市民の反抗の增大によつてか、財政のより緊縮を必要としてか、ブルジョア戰略の積極面が行詰つたその時には、見えざる手は民政黨を起用してその消極面を遂行させるであらう。そのときこそ濱口內閣の『魔の手』が政友會に伸びるときである。かゝる既成政黨の不斷の分離結合こそは單一全なるブルジョア政黨への過程である。

八、無產政黨統一の問題

巨大の無產諸黨の指導精神、その對立的消長は階級對立の立場から見たとき問題でない。『石炭』さへあつたら遺憾ながら——全く遺憾なことだが無條件の金が十萬圓もあつたら、どの黨でも對立的には他黨を壓し得る。勞農黨の嘗つての活潑さもそれである。しかしそれも階級の對立から見た場合問題ではない。全黨の統一によつて始めて問題になり得るのみである。統一のみが無產黨の凡ての課題である。それが積極面であらうと消極面であらうと帝國主義ブルジョア戰略は大衆に對しては、右翼への分割支配的懷柔を加味した反動と彈壓と攻勢である。かくて尖鋭化しゆく階級對立の壓力はプロレタリア階級内の小對立を打破せずには措かぬ。今や高まりゆく大衆の統一への要求が統一を獲得するのは短き時間の問題である。

吾々の前には日本農民黨、社會民衆黨、日本勞農黨、（無產大衆黨）舊勞農黨及び數多の地方政黨がある。農民黨は農民（自作、自作兼小作、小作）と小商人を、社民、日勞、舊勞農の三黨は勞働者、農民、小市民（俸給生活者、小商人、下級官公吏、商業使用人）を各構成要素としてゐる。而して農民黨は農業國の域を脫しない日本の現狀を卑俗に認識し、自作農意識——農民主義を指導精神として、都市と農村の文明の對立を强調し、農民の政治的無關心を基礎として、農村選擧に於ける既成政黨の無產黨への抵抗線を形成してゐる。他の三黨は同一構成を有するが、社民黨は尨大なる小市民層（現時に於ける無產黨への投票はこの層から與へられる）の存在に目を奪はれ、勤勞階級（小市民、勞働者、農民）の名の下に階級對立をぼかし、現實主義の旗の下に階級協調主義を指導精神とし、支配階級の分

割支配に迎合して客觀的に都市に於ける既成政黨の抵抗線を形成してゐる。日勞黨と舊勞農黨とは共に勞働者を主體として、勞働者と農民を主勢力と小市民を從屬的要素とする點に同一であるが、その指導精神に於いて學者は階級的大衆政黨主義を後者は階級的前衛黨主義をとる點に異る。

統一問題に於いて、農民黨は勞農團結の政黨との合同を拒絕し、社民黨は『大右翼結成』の統一方針の下に深く自らを守り、統一の鬪爭は日勞と舊勞農の間に於いて戰はされた。

舊勞農黨は今日明かなる如く共產黨の指導下にあつた。共產黨は元來凡ての大衆政黨の內に校隊を有することによつて、凡ての上に立つ階級的構造を有すべきにもかゝはらず、かの福本主義――『分離結合の理論』――宗派的分裂主義によつて、自ちを舊勞農黨の內部にのみ解消し、舊勞農黨にそのまゝ共產黨的性質を强制した。ために舊勞農黨は『全無產階級的政治鬪爭意識(共產主義)によつて無產階級陣營內に於ける凡ての非階級的要素を克服しつくしてその全勢力を目的意識的に統一されたる指導及び結成』すべしと叫び他無產政黨を假面非無產黨と規定し、それからの分離と對立を說き、他黨を潰して大衆をとるの極左分裂主義の方針をとつた。故に合同には反對し、對立鬪爭のための協同戰線の持かけを以つて日勞黨に迫つた。

日勞黨は左右兩翼の批判の上に立つその立黨精神に於いて統一のための政黨である。それは社民黨の小ブルジョア的階級協調主義と舊勞農黨の前衛政黨主義に反對し、凡ての指導原理――共產主義、社會民主主義、組合主義――を合流し、帝國主義ブルジョアジーに對抗するための民主主義のための階級的大衆政黨――單一政黨――を要求し、統一政策には大右翼結成と宗派的分裂主義(對立分離主義)の左右の分裂主義に反對し、階級的大衆統一主義をとつた。この鬪爭の道程に於いて舊勞農黨の大衆統一主義は、文字通りの單一政黨主義から日勞黨の宗流分裂主義と社民の小ブルジョア協調主義の精算の上に立つ大衆政黨主義に變質して來たことは爭はれない。

舊勞農黨と日勞黨との鬪爭の道程に於いて舊勞農黨の內部に宗派主義と大衆主義の對立が生じ、この對立のために舊勞農黨の指導部は對立鬪爭を共同鬪爭に分裂を統一に轉換したが、それも『社會民主主義反對』を條件とした合同の故に依然として對立の延長であり、ために同黨の解散を期として、この黨內の對立は分離にまで發展し、そこに無產大衆黨が出現した。日勞黨はこの同質なる無產大衆黨と一先づ合同し、舊勞農黨の農民大衆及び地方政黨をこれに加へ、社民に統一鬪爭を向けんとしたが、(一)舊勞農黨への對立意識の殘存、(二)無產大衆黨の全

國化の不充分特に勞働者分子の組織不充分、(三) 日勞黨に於ける中間派的イデオロギーの殘存等々によつて、それは近き將來へ持ちこされた。

九、第三インタナショナルの退潮と第二インタナショナルの進出

社民黨の統一方針――大右翼結成は西尾代議士の説明によれば、凡ての右翼結合を總同盟の下に、農民黨と日勞黨の右翼とを社民黨に統一し、無產陣營を大きく左右の對立に整理して支配階級の分割支配の流れに乘らんとするものである。社民黨の指導精神は小ブルジョア主義である。それは既に述べたやうに小ブルジョア民主主義である。大右翼結成は小ブルジョアの指導下にプロレタリアートを移行せしめて、ブルジョアジーの最小抵抗線の形成にある。社民黨は在來その指導精神を呼ぶに現實主義を以つてしたが、九月二十七日の執行委員會は『合同方針は從來通り大右翼結成を以つて進む。即ち社會民主主義を明確にして共產主義と資本主義の双方に反對の立場をとる』と決定し、社會民主主義の下の大右翼結成を叫んでゐる。社會民主主義は歐洲大戰前の舊第二インタナショナルの指導原理としては社會主義であつた。それは世界資本主義の直接鬪爭前時代に於けるプロレタリアートの理想を中心としたイデオロギーである。大戰以後――直接鬪爭時代には、それは第三インタナショナルの革命主義と獨裁主義に對立する新第二インタナショナルの指導原理としての改良主義、單純議會主義である。それは小ブルジョアジーと勞働貴族の手段を中心としたイデオロギーである。量は質を決定する如く手段は目的を決定する。今日に於ける社會民主主義は資本主義と共に『共產主義の反對立場をとる』小ブルジョア民主主義である。社民黨幹部は他黨の指導原理を外來思潮とするが、この社會民主主義は何よりの舶來物である。社會民主主義は歐洲のブルジョアジーが、自由資本主義時代には封建勢力に對抗するために豐富な內國資源によつて、大戰前の帝國主義前期には他國ブルジョアジーと世界市場の爭覇戰のために、植民地搾取による盛んなる食卓のこぼれパンによつて、買收し飼養した勞働貴族の上に咲いた毒草である。日本には勞働貴族の溫床があるか?反動の帝國主義ブルジョジー、貧弱なる內國資源、支那民族の反抗!ブルジョジーの自己安定のための政治的經濟的搾取はプロレタリアートの反抗を呼び起すのみである。世人は社會民衆黨の四人の代議士を議會主義――社會民主主義の勝利の如く考へてゐる。四人の當選は勞農の二人、日勞の一人に對する勝利に過ぎないばかりでな

く、それは他を「赤化」黨と呼ぶことによる、分割支配への應化による勝利である。その生長は左を制するために右を援くるブルジョアジー製の家庭の溫床に於いてであつて、大地につながる溫床に於いてではない。川崎市議戰に社民は四名當選した。成功である。しかしそこには松岡式團體交渉權——會社組合的罷工なし組合による關東總同盟の根據地である。それは京濱の評議會勢力を驅逐するための會社の分割支配の所産である。かかる地區に於いては、重役が立候補せぬ限り投票は社民に集る。採算點の下降した資本家は、左翼の勢力の消滅と共に、自己の抵抗戰を打破する。大衆は幹部の慰留にも拘らず蹶起を餘儀なくされる。吾々はこれを野田に見た。會社が政治的對抗したとき四名の當選は可能であるか？ 吾々はこれを足尾に見る。故にこそ、既にその質と量に於いて、階級的組合らしき唯一の勞働組合なる關西總同盟——關西社民大衆は、小ブルジョアジー指導要素に反對し、大右翼結成に對抗して全政黨統一の要求を發展せしめてゐるではないか！

　對立分離主義、大衆統一主義、大右翼結成主義、も一つ大左翼結成主義——の四つの統一政策がある。嘗つて左翼陣營から上つた大左翼結成主義は大右翼結成主義に對立する如く見ゆるが實は對立分離主義に對立し、共産黨は宗派的に勞農黨のみに解消せずに勞農、日勞を無條件に合同して共産黨の影響力を大にせよといふのであつた。しかしこれは對立分離主義の消失の餘りに大なりしによつて、對立分離主義と共に今日に於いては成功的ではない。吾々は日勞黨を中心に、無産大衆黨、舊勞農黨の農民大衆、地方政黨、社民の勞働者要素の合同の上に階級的大衆統一主義の勝利を見る。これが善くも惡しくも、孤立せる共産黨と小ブルジョア分子とが舊勞農黨（新黨準備會）と社民黨から逸脱するであらう動向を見る。

　けれども大右翼結成は華々しく戰ふであらうやうに見える。今日までの無産黨の陣營は共産黨の時代——『舊勞農黨』——第三インタナショナルの時代であつた。これが退潮の時代に面して、第二インタナショナルの時代がしばし展開するかに見ゆる。日本は東洋の憲兵である。世界の問題は太平洋である。一國のブルジョア政府が左に對し右を援くると同樣に、それ等の聯盟なる國際聯盟は國際勞働局——第二インタナショナルの勢力を以つて東洋の第三インタナショナルの勢力を驅逐するのは當然であらう。海員組合及び海軍聯盟の政治的進出、第三インタナショナルの汎太平洋勞働會議に對抗する第二インタナショナルのアジア勞働會議、第三のロゾフスキーの渡日行きに代つて、佛國プロレタリアートの背教者ではあるが、世界プ

ルジョアジーの『人類の鬪將』、佛國ブルジョアジーの前軍需大臣アルベール・トーマ閣下の來朝。社民黨の農民黨及び日勞黨へのあはたゞしき働きかけ――凡ては急調をひいてゐる。御免を蒙つて反動的な云方をすれば、舶來の『赤い石炭』と『黃い石炭』が二彩を色どつて天日を暗くする壯觀を展開するかも知れぬ。御盛んなことではある。しかし國產奬勵の貧しい和炭が遂には勝つのではあるまいか。

十、全政局の展望

與へられたページが既につきたので、論理の發展には別の機會を持つとして、こゝで殆どドグマの形で結論せねばならぬ。『變貌』なる政局の全動向の中に立つてその彼方を展望するとき、吾々はかうした政局――陣營の配置を見る。全既成政黨は分離結合して單一ブルジョア政黨を結成し、その過程から小ブルジョア分子が落伍する。全無產政黨の統一の過程から小ブルジョア要素と官業的勞働貴族と既成政黨より落伍せる小ブルジョア分子による小ブルジョア政黨と小さな共產黨と勞働者農民を主勢とする壓倒的なる階級的大衆政黨が分出するかに見ゆる。ブルジョア黨と大衆的無產黨の間に眞の階級的政戰が展開さるゝであらう。無產政黨統一の壓力は大衆の壓力であり、不可避的なるブルジョア攻勢による階級對立の壓力である。小ブルジョア黨をどれだけ小さくするかはプロレタリアートのエネルギーと戰略であり、共產黨が孤立するか否かは根本的戰略の立直しにかかる。ブルジョア黨が單一政黨になるか、分派的單一勢力になるかは、主として戰爭の危機――他國ブルジョアジーとの對立――と階級對立の發展にかゝる。（十月六日）

「中央公論」を通して日本民族に愬ふ

國民政府特使　王　大　楨

一

日支兩民族の窮局の願望は何か？

御承知の如く、中華民國は無盡藏に近い資源を有する農業國であり、加へて四億の人口を有つ一大消費國である。また貴國はさかんなる新進の商工國である。此の兩國が接壤國である以上、中華民國は商工國の日本から安い工業品を輸入し、日本に向つては農産物其他の原料を多量に輸出することにすれば、相互に利害一致することゝなるのである。日支兩民族の窮局の願望は要するにこの利害の一致でなければならぬ。然し乍ら斯の如き簡單明瞭なる經濟的提携すら、今日までの所不幸にして所期の目的を達して居ない。否、それどころか、兩國民の感情は千里を隔てゝ相容れざる遠さに居る。それは兩民族相互に理解と尊重に缺けて居た結果的事實として、不自然な軍事的政治的障害物が、兩國民の間に横はつた。そして兩國民感情の間隔は、遂に利害を超越して、經濟的、外交的關係の上に、まことに好ましからざる影響を與へたのであつた。

然し、地球は廻り時は來た。中華民國は、今や連年の内部的紛爭を一掃して、政治的社會的機構に目ざましい一新紀元を劃した。——國民革命の達成これである。日支兩國は、今や兩民族の親和協力を妨げたところの過去の一切の惡因緣を排除して、直に平等的基調の下に、日支兩國共存共榮の新果を結成せしむべく、滿腔の努力を傾倒すべき大なる責任に直面してゐると私は痛感する。さうして此の新しき兩國の外交の新基調の發足は、兩國民各々が、過去に爲したる行狀を靜かに反省するところから、徐に指示されるであらう。

二

中華は、清朝以來、各國との間に條約を締結し、修交關係を續けて來たが、夫等は孰れも中華民族の權威と價値とを不當に安く評價した所謂不平等條約であつて、御話にならぬ片手落の條約であつた。然も我々は内にあつては國家國民を售る國賊的舊軍閥の横暴に惱まされた。内、舊軍閥の專恣横暴、外、帝國主義國家の侵略壓迫――中華民族は内外の此の二大羈絆を脱しない限り、到底救はるべくもない。我々の先輩及び同志は、此の桎梏から解放されむとして、故國の山河に血塗らすこと、茲に歳あり、遂に今日漸く國民革命の第一期を完了した。今回の革命に依つて、新中華の礎石は先づ搖ぎなく据へ付けられたものと確信する。

新興の意氣に燃えた光輝ある明治の維新史を繙けば、當時貴國も亦、諸外國の壓迫に惱み、不平等條約に縛ばられた時代もあつて、具さに新興國としての辛酸を喫せられた樣であるが、革命後の今日の中華は、恰も貴國が、曾て經驗されたと等しき苦痛を現に如實に體驗しつゝある。我等の知るところの日本の武士道は、强きを挫き弱きを扶けるのを以てその眞髓とした筈である。我等は希求す、貴國が、中華民族の今日の惱みを、善隣の惱みとして、將又亞細亞の惱みとして、好意的同情的眼を以て眺められむことを。否、尚一歩を進めて、同一民族の先覺として、中華民族四億の大なる苦悶を匡救すべく、敢然率先的に最惠國となつて頂きたいのである。

凡そ國と國との係爭を處理するに、武力に訴へるは最も拙策であり、舊式の手段であることは、尚ほ個人的關係の場合に於ても然るが如くである。なるほど武力的手段によつて一時的に表面的に紛爭は解決するかも知れぬが、それが爲め、一方國民の胸奧に殘る綿々たる怨恨報復の情は、遂に兩國をして、永久に不幸なる關係に置くであらうことは、世界の外交史が、幾多の先例と教訓を我々に示して居る事實に依つて明かである。即ち武力又は暴力を背景として壓迫されたものは、時あれば必ず彈ね返さんとする感情に滿たされる。アルサス、ロートレンを介在して、結んで釋くる事なき佛獨の關係は奈何、また貴國が曾て三國干渉に會して遼東半島還附の餘儀なきに至つた當時の事情は如何、悲憤の涙とゝもに擧國臥薪嘗膽、終に國運を賭する大戰爭、日露戰爭は展開したのではなかつたか。而うして我々は、日露大戰役の結果、日本の手中に歸した滿洲をして、希くば日華兩民族爭鬪の禍根たらしめたくない。第二のアルサス、ローレンたらしめたくないのである。

要するに外交の要諦は、個人の私交と同じく、相手の心を掴むに在る。一つの權益を認めるとか、認めぬなどと言ふこと

は、誰れにでも出來るであらう、けれどもそんなものは外交ではない。相手が全幅の信頼を捧げて、打ち寛げた此方の胸に飛び込んで來るやうに仕向ける、それこそ眞の外交でないであらうか。

三

德川末期、澎湃として貴國の國內に漲溢した尊王攘夷の國民的要望は、遂に德川三百年に亘る封建政治を打破したる明治維新の大業に依つて新日本の建設に成功された。――夫と同じやうに、我等は過去十數年の久しき革命運動の結果、漸く舊軍閥を打倒して、新中華の建設に到達せんとしてゐる。然るに今日の中華の革命達成に對して、貴國識者の中には二樣の觀察を下して居る、即ち

一は革命的見地から、中華の現狀は革命の一段落となす

一は動亂の見地から、今日の內亂は一時的閑熄に過ぎぬとなす

今次の革命を以て、動亂の一時的終熄と做す觀點は、眞に中華に對して、理解あるものと言ふことは出來ぬ。成る程、中華は第一次革命より今日まで、實に十有七年間、殆んど戰爭に亞ぐに戰爭を以てした。けれども仔細に內亂の本質を顧みるならば、民國元年の第一次革命の如きは、單に清朝の顚覆のみに終り、深く國民的要望を背景としてゐなかつた。爾後數次の革命も亦、遺憾ながら眞の革命と云ふ事はできなかつた。是等は概ね名を革命に藉るとは云へ、民衆の敵たる野心家や、一部の舊式勢力家に利用された傾きがあつた。然も他日勢力を把持する是等舊勢力は專ら私心を擅にして、純眞なる革命遂行の途上に大なる障害物となつたのである。故に孫總理の遺訓を奉ずる中國國民黨は如上過去に於ける失敗の苦汁に鑑み革命運動の實行に當り最も注意戒心したのは、舊軍閥舊勢力との名分なき妥協苟合であつた。それがために失敗するも致し方なし、幾度でも出直す決心堅く、革命搖籃の地、廣東を進發して、靑天白日旗の下に、北伐の師を進めたのであつた。

民國十三年秋、十月、廣東を出發して北伐の壯途に上つた革命軍の意氣まさに軒昂たるものがあつた。先づ兩廣（廣東廣西）を抑へて、その前衛部隊が湖南省から江西省に入らんとする時、偶々東南五省に覇を唱へてゐた孫傳芳軍に遭遇した。此の時孫傳芳は五省聯盟軍を組織してその盟主の地位に座し、東南五省三十萬の大軍に號令してゐた。そうして賢明なる孫傳芳は、聯盟五省の保境安民を條件として、革命軍との妥協を提議して來た。然し乍ら、三民主義を奉ぜざる孫傳芳の此の提議

は、素より地盤主義の變名に外ならなかつた。乃ち斷乎としてその提議を斥け、革命軍は敢然五省聯盟軍と開戰した。戰運利あらず、文字通り惡戰苦鬪の結果、不幸革命軍の敗戰となつた。革命軍も四分五裂の慘狀となり、我等は兵を養ひ時を待つの外なかつた――輕卒なる支那觀察者が、革命軍の前途に失望と嘲笑の瞳を投げかけたのは實に此の時であつたと記憶する。

四

けれども革命に從ふ者の眞劍さは是れしきの艱苦の前に屈すべきでなかつた。陣容を新たにして再び征途に就き、遂に今日舊軍閥の破片を北方に追ひ詰めた。そうして本年六月六日、蔣介石氏は、國民革命軍總司令の名に於て中華全國を光輝ある青天白日旗の下に統一するに至つたことを、北京碧雲寺に在る故孫總理の靈に報告することが出來たのであつた。

今回の革命は、實に中華四千年の歷史に特筆さるべき大戰爭、大覇業であるが、過去八十年來、未だ斯の如き徹底的な大戰爭は曾て無かつた。我々は中華の革命戰は、徹底的にやられねば、到底内亂の根を拔くことが出來ないと信じて居る。即ち矢折れ刀盡きるまで戰ひ拔かぬ限り、内亂は絕えないのである。されば今日に於て我等の祖國中華は、徹底的内亂の苦杯を滿喫した。軍閥は斃れた、民衆は疲れた、――中華民國瘦しと雖も、是れ以上軍閥の眞似をする勇氣を有つものはないであらう。例令あるとしても民衆が承知せぬ。勿論ひろい四百餘州の事であり、革命の餘燼全く收まり切らない今日であるから、今後とも政治的に多少の紛爭があるかも知れぬ。また地方的に起る小勢力の小競合の如き絕れぬ現象と思ふ。けれども、今日の國民政府が勢力を失墜してしまふが如き事は、斷じてあり得ないと確信を以て斷言できる。否、寧ろ、小競合があればある程、國民政府の礎石は、民國に對するその統制力を增して行くばかりである。それは恰も貴國が、明治維新の大業を擧げつゝあつたにも拘はらず一方には、政治上見解を異にし、又は群雄の感情の睽隔から、或は佐賀の亂となり、或ひは西南の役となつた。而うして明治政府の基礎は、是等の内亂に反比例して、益々鞏固になつて行つた、これと同じプロセスを經過しつゝあるのである。即ち今次の革命を以て、動亂の一時的終熄なりとするのは甚だ當らぬ短見なりと斷ぜざるを得ない。我々の同志は、斯の如く中華の統一に向つて全力を傾到すると同時に、革命軍中の過激なる分子を一掃してその巨步は中道を力強く踏みしめつゝある。軍政の一段落を告げたる今日、故孫總理の遺訓たる建國方略に基き、五權憲法に據る五院の確立となり、新中

革の建設は着々として進みつゝあるのだ。

五

清朝以來、内は軍閥の專恣横暴に委し、外からは帝國主義的國家の貪婪飽くなき迫害を甘受した過去現在の中華は、未だ半植民地の情ない狀態を脱する能はず、従つてその國民生活は、悲慘を極めて居る。殊に不平等條約は中華民國を高手小手に縛り上げてその自由を剝奪しておいて、搾取を擅にせんとする強盜的鐵鎖でなければならぬ。我々中華民族は、何故、列國から斯の如き羈紲の辱めを受けねばならないのか。……然し今や將に此の鐵鎖を斷ち切る時が來た。今次の革命は實に中華民族四億が、全世界に向つて、生存權確保の一大デモンストレイションを起したものとも言ふべきである。中華民族解放の叫びを擧げたのである。

我々は先づ軍閥を打倒して、内患の根を拔いた。然らば今後殘された問題は何か？ それは國際關係の根本的改善である。中華民國と列國とが、對等の立場にあつて、平等互惠の條約を結ばんとする願望是である。

顧みれば中華民國が過去に於て列國との間に締結せる條約は、不合理極まるものであつた。列國の多くは中華に對して臨時條約の改訂の發言權を有して居るけれども、中華から列國に對しては、條約改訂の申し出でをする事が出來ない取極めになつて居る。斯の如き片手落な條約が世界の何處にあらうか。然も中華は此の不平等條約の改訂を爲さない限り國家としても民族としても、生きて行けないのだ。我々はどうすればよいのであらう。今假りに中華から、締約列國に對して不平等條約の撤廢を持ち出したとすれば如何、ベルジウム國の如きは現に中華民國に改訂權なきを理由として、にべもなく拒否されたのである。けれども我々は是に屈せず、條約期限の滿期を待ち、或ひは、國情の重大なる變化を理由として、續々不平等條約廢棄の手段に出でんとするものである。

然し乍ら我々は當初、何れの國に對しても一様に條約廢棄の提議を爲せるにあらず、例へばベルジウム、イタリイ、スペイン、ポルトガル等の諸國に對しては、斷然條約廢棄の通告をなしたが、日本に對しては最も愼重なる態度を以て臨んだ。北京政府時代既に日本に對しては、期限滿了を待つて條約改訂をなすべき提議を發した、日支新條約未だ成らざるに北京政府は斃れた。玆に於て國民政府は外交上一般の慣例と、條約解除の原則に依つて、日本に對し條約廢棄の通告を發したのである。さは言へ、臨時辨法の即時適用の如きは、始めから深甚なる考

を拂ふて居るのである。國際法上條約文に對する見解の相異もあらんかなれど、日本に發せる國民政府の外交的通牒は、決して國際信義を無視して徒らに勞農ロシアの顰に倣ふものではない。寧ろ我々は事實、日本に對しては最も穩便に、謙抑の態度を失はず、只管その同情的好意的態度に訴へたつもりである。

國民政府の日本に對してなせる條約廢棄の通告は、曾て我々の學んだ世界の國際法學者並に日本の學者の教ふるところに準據したものであつて、その法律的根據の一例として、私の恩師たる帝大の山田三良博士の國際公法に對する見解を擧げたいと思ふ。山田博士に從へば、條約の消滅と解除の條件は（一）條約期限の滿期の場合（二）締約當時より重大なる事情の變遷と云ふ事が明かに例示されてゐる。即ち今回の條約問題は、兩つながら右の原則に正に該當するものであると思ふ。時代と方法とに於て多少異るとは云へ、貴國と同じ經路を辿り、而して貴國學者の教ふるところに從つて進まんとする新興中華民國の手を取つて、更生の前途を遮ぎる荊棘を切り拓いて與れるこそ、先進たる貴國の襟度でなければならぬ。善隣日本が今に於て他國に先んじて、舊條約の廢棄を容れ新條約の締結に應ぜられるならば、これは正に中華に對して同病相憐、推己及人の役目を演ずるものである。

結語

我等は列國に對する中華民國の要望が、何日の日にか、必ず容れらるべきを確信するものであるが、果して然らば率先して我等の要望を容れて與れた國に對しては、心からの敬意と、好印象を貽し、更に强い信頼の念を湧起するであらう。此の見易き大勢の歸趨を察せずして、他國に氣兼ねして徒らに躊躇逡巡する必要もなからうと思ふ。我等の信ずる日本は、果して孰れの途を執らんとするのであるか。――我々は日本民族から率先的に平等の待遇を與へられむことを、同文同種の光榮として熱望せざるを得ない。

世界各國が「赤露」と稱して畏怖し嫌忌し敬遠せる勞農露國に對して、敢然率先して新條約を締結せるは日本ではなかつたか。日本はその結果幾多の收穫を收めた筈である。――地理的にも民族的にも最も密接せる關係にある日本は中華民國の正當なる要求に對して、寬容を以て之を容れて貰ひたい。そうして日華兩國が新なる國際關係の上に立ち、相共にアジアの平和と繁榮のために、新世界に向つて朗かな祝福の曉鐘を打ち鳴したいものである。（完）

蔣介石と馮玉祥

（亂世支那に踊る二大人物の立場と新支那の行途）

橘　樸

蔣介石の思想的背景

蔡痩鶴氏の「蔣介石全集」によれば、彼れの父は地位の低い地方官吏で、其母は中流商家の出であつた。小學校を卒業すると、彼れの叔父は彼を寧波の商店に奉公させやうとしたが、母及び彼自身は之に反對して保定軍官學堂に入つたと云ふことである。蔣氏の日本留學中國民黨の前身たる中華革命同盟會が一九〇五年秋東京に成立し、蔣氏は其最初からの會員であつた。一九一五年彼はその傲岸な氣質に禍されて仲間から排斥を受け、上海交易所の株式仲買人と早變りして「半年後には數十萬元をもうけて儼然たる富商となつた」と云ふことである。蔡氏の傳記には蔣氏の父の學位及び官階に就て何の記すところもないが、思ふに官僚の名に値する程の閲歴でなく、従て彼の家も亦郷紳の列に加はる資格を持たなかつたものであらう。それでも兎に角官吏を出した家筋だから普通の庶民とは異つた社會的地位を保つて居たことは考へられるが、併し母が商家の出であり、叔父は彼の丁稚奉公を主張し、後又蔣氏自身も政治生活に蹉跌して取引所に飛込んだことなどを考へ合せると、彼の家庭及び彼自身の生活氣分は共に中産上層者的——小資産階級的のものであつたことが明白に認められるやうに思ふ。ところで清末以後に擡出した多くのインテリゲンチャ達は總て中産家庭の出身である。第一期の中産インテリゲンチャは、其先輩達が科擧によりて官僚階級に入込んだやうに、彼等は其修めた新學問を頼みとして支配者の地位を手に入れることを其理想として居た。一九一一年の政治革命は主として彼等の手で行はれたものであり、従て其成功も失敗も共に全く彼等の前記の如き慾求の

結果であつた。換言すれば古い器に盛られて居た官僚階級イデオロギーを只新しい器に盛り換へたのが所謂辛亥革命の全意義であつた。袁世凱が此等のインテリゲンチャを土台として帝政の復興を企てたのも、右の如き安直な政治革命の當然の歸結であつた。然るに辛亥革命、一九一九年の五四運動及び一九二四年の國民黨改造と云ふ三次の洗禮を受けた小資產階級インテリゲンチャは、不可避的に新しいイデオロギーを懷き始めた。記述を簡明にする爲に、五四運動以來勃興した種々なる改造思想を左に表記しやう。

一、自由民主主義
二、無政府主義的孫文主義
三、儒教主義的孫文主義
四、資本家的孫文主義
五、小資本家的孫文主義
六、無產者（農民及勞働者）的孫文主義
七、共產主義

右の內第一から第六までが、小資產階級インテリゲンチャの中から發生した改造思想である。第七も其發芽時代には勿論小資產階級インテリゲンチャの智的興味の對象とされて居たが、彼等の勢力と信用とは苦しい試練の度重なると共に衰へさるを得なかつた。自由民主主義思想は米國及び英國留學出身者を中堅とし、國內的には北京大學を中心として五四運動の全期間に花々しく活動したが、民族運動の對象が日本から英國に移り行くと共に、民衆運動の指導權を孫文主義者及び共產主義者に讓らねばならなかつた。無政府主義的孫文思想を代表するものは古いフランス留學出身者で、其最高指導者は右翼國民黨の大立物なる李煜瀛（石曾）氏である。李氏はプルードン主義を以て孫文主義を解釋する人で、共產主義者に倣つて「民主集中制」を黨及び國家組織の原則の一つとした孫文の立場から見て、李氏のプルードン主義に胚胎する地方分權論は、動もすれば異端視され易い。殊に彼の地方分權論が國民黨部內の軍閥に利用せられて居る許りでなく、元老派と呼ばるる李氏の一味が現に廣西軍閥と聯盟して、黨及び國家の統一を妨げつゝある事實に徵して特に其感が深い。私はこの一派——元老派及び廣西派——を假りに國民黨の極右翼とする。儒教主義的孫文主義思想は戴季陶（天仇）及び胡漢民氏を中心とし、此れ又廣西派と關係が深い。孫文主義の儒教主義的解釋は、第一に孫文の「民族主義」に其立脚點を發見し得ると同時に、孟軻の王道政治學說と孫文の民生主義思想とを連結することによりて、そこにも一つの足場を作ることが出來る。從て彼等は自治の正統性を確信す

るらしいが、併し孫文の晩年に開示した理論及方法に照らして、儒教主義的解釋も亦正鵠を得たもので無いと云はねばなるまい。資本家的孫文主義は纒つた理論として何人からも提唱されたものでは無く、殊に孫文の民生主義理論から云へば先づ成立しないものではあるが、併し長期革命のたどり來つた現階段に立脚し、且つ浙江及び江蘇の新興資產階級が南京政府を挾んで軍閥勢力との間に爭覇戰を行ひつゝある眼前の事實に顧るとき、資產階級の代理者たる南京政府の財政、工商、交通各部長がそれ〲の政策を定立して資本家革命の途に急ぎつゝあることは必ずしも誤つて居るとは云はれまい。所謂資本家的孫文主義と自由民主主義との間には如何なる相違があるか。これは何人も一應懷くべき疑問であらうと思ふ。自由民主主義は無條件の資本主義國家を建設することを目標とし、從てそれは結局新しい一つの帝國主義國家の出現を豫想するものであるが、所謂資本家的孫文主義は孫文の所謂民生主義的方法なる國家資本主義政策及び勞農政策の効果により、資本主義國家の帝國主義國家への進展を制抑することが出來ると云ふのである。彼等は斯樣な立場から自由民主主義及び國家主義を排斥する。この派の理論的體系は前にも述べたやうに之を見出すことが困難であるが、周佛海氏の「三民主義之理論的體系」などは大體之に當ると見てよからう。

次は小資本家的孫文主義であるが、此派に屬するものは所謂左翼國民黨即ち八月の第五次全體會議で日本人間にも廣く知れ渡つた廣東派である。廣東派の首領は有名な汪精衞（兆銘）氏であるが、目下國內に踏止まつて奮鬪して居るものは首として陳公博氏である。廣東派は孫文思想の正統的繼承者である。國民黨諸派中最も多く無產者及び青年の人氣を集中して居ると云つても必ずしも誇張でない。外人中の國民黨通なるジョージ・ソコルスキー氏は陳氏の活動振りに關して、彼は週刊「革命評論」を發行して僅か三ケ月目に六萬部以上を出して居る。これは支那を通して少くも三十萬人の讀者を有することを意味する。曾て共產黨員であり今は其指導者を失つて居るところの學生や勞働者や青年士官、內訌に飽きた黨務從事員や失意の國民政府官吏達、總てこれ等の人々が陳氏の指導を求めつゝある。最近保守派の國民黨員から聞くところによれば、若し汪精衞と陳公博とが全國各都市を遊說し得たならば、彼等は舌の先で政府を支配することが出來やう。南京政府の彼等に對する恐怖は茲にある（北支那ヘラルド八月十一日號）と述べて居る。然らば此人氣は果して何處から生れたか。それは主として言論の賜であり、殊に第五次全體會議に「政治分會」廢止の主張を提

げて見事に廣西軍閥及び元老派の聯合勢力を打破つた武者振りに基く。彼等の支那改造に關する主張を約說すれば小資產階級、農民及び勞働者を結束して軍閥及び帝國主義者の手から徹底的に支那を解放しやうと云ふにある。改造の方法として彼等の特に重要視するものは、孫文の主著の一なる「中國實業發展計畫」に準據する國家資本主義政策の斷行を直ちに開始することにある。彼等はこれによりて「非資本主義革命」の途を步むものだと云ふが、併し彼等の途は必ずしも無產者的のものではない。平たく云へば結局中產者を中心としこれに農民及勞働者を結合させる。斯樣な社會的勢力を組織して、其上に國民黨の基礎を置かうとするものである。此派の主張は事實上資本家的孫文主義と五十步百步のものに過ぎないが、併し前者には一九二六年十月の所謂聯席會議及び一九二七年三月の第三次全體會議が決議した左翼的諸政綱と云ふ寶物があり、靑年や無產者が渇仰するこれ等の寶物は、當然資本家的孫文主義者に厄介視され且つ暗闇に默殺されて居る。無產者的孫文主義は、近頃評判の高い所謂第三黨である。第三黨は上海で「突擊」と名づくる機關雜誌を發行し相當に活動して居るとのことであるが、まだ正式には纏つた政綱を發表する迄になつて居ないと云ふことだから、私も彼等の最近の文獻を蒐集する興味を持ち得ないで居る。併し所謂第三黨が一九二七年八月の國共分裂後間もなく組織された「中國國民黨革命委員會」の系統を引くものであることは明白だから、其當時に作られた綱領なり計畫なりを見れば、大體の樣子は知れる道理である。昨年十月初旬即ち革命委員會所屬の軍隊が廣東省東部地方を經略して居た當時、廈門で逮捕された露西亞人軍事顧問の行李の中から革命委員會の「政治大綱」と題する文書が發見された。其要旨は、革命委員會なる政黨の指導の下に、農村は農民により都市は勞働者によりて行政委員會なる政治機關を組織し、過渡時期に於て「農工專制政權」を樹立すると云ふにある。各小都市及農村行政委員會の上級行政機關として縣行政委員會が設けられ、之れが國民大會議員の選擧區となるのであるが、國民大會議員の中八〇乃至九〇パーセントは農民代表たることを要すると規定してある。彼等が革命手段としての暴動を是認し且つその目標を所謂農工專制政權即ちサウエートの設立に置いた所から見ると、共產黨との區別が附き兼ねるやうに見へるが、事實は必ずしもさうでない。第一に彼等は孫文の主張に從つて政黨獨裁を標榜し、第二に都市のことは勞働者に又農村のことは農民に委ねて孫文の所謂民權主義の精神を尊重し、第三には國民大會に於ける農民代表者の絕對多數を保障し從て農民黨たる色彩が頗る鮮かである。第

三黨の首領は孫文未亡人であり彼女は國共分裂の際汪精衛氏等の行動を非難し、孫文が如何に支那國民中の最大多數を占める小農民の生活不安を除くことに焦慮して居たかを說き、眞に聲淚共に下る底の聲明書を出したことがある。思ふに孫夫人のこの解釋が今も尙第三黨の政治方針の根軸となつて居るであらう。最後に共產主義であるが、これは支那の現狀が尙ほ所謂資本家的民主主義革命の時代にあると認めて居ると云ふ以外、別に茲に詳解する必要はあるまいと思ふ。

扨て然らば我が蔣介石氏は、先に列擧した各派の孰れに屬するか。秦氏の著書によれば蔣氏が國民黨員から擯斥されて株屋となつたのは一九一五年のことで、小成金の安樂な生活も長く彼の足を引留めることが出來ず、一九一七年十二月に彼は孫文の跡を慕ふて廣東に下つた。此後孫文の蔣氏に對する信賴は徐々に高まつたらしく、一九二二年六月に孫文が陳炯明に叛かれて廣東落ちを餘儀なくされた當時、蔣氏得意の作たる「孫大統領廣州蒙難記」にも記るされてあるやうに、彼は旣に孫文股肱の一人と爲つた。併し蔣氏が國民黨内の大立物となり得たのは、一九二四年六月に有名な黃埔軍官學校を創立し、黨の先輩なる廖仲愷及びロシア人の教官達から援助を得て下級將校の養成を始めた以後のことである。斯樣なわけで蔣氏と孫文との間柄は他の重要黨員に較べると、寧ろ緣故の淺い方であつた。これにも拘はらず彼の孫文に寄せた英雄崇拜的情操は、何人も及び難い程に熱烈なものであつた。國民黨員で孫文を崇拜しないものもあるまいが、蔣氏ほど純眞にして且つ熱情的なのは稀であると思ふ。實に蔣氏から見れば、孫文は一點一畫の例外もなく彼の全體である。孫文と共に考へ、孫文と共に行ひ、孫文と共に革命すると云ふことが此忠實にして謙虛なる弟子の願望の全部である。蔣氏が孫文未亡人の妹と結婚し、旅行にも散步にも必ず手を組合せて居るのを見て「徒らに總理の皮相を眞似るものだ」と冷評する黨員もあるが、皮相と眞相との區別なく、孫文と共に生きる以外に自身の生活は無いと思ひ込んで居るところに蔣氏の强みがあるのだ。ところで孫文は一九二五年三月に北京で僵れた。本年七月六日、國民革命軍の首領達が北京郊外の西山碧雲寺に安置された孫文の遺骸の前で「北伐完成」の報告祭を行つたときに蔣氏の讀上げた祭文を見ると、彼が遙かに孫文の訃を聞いた時の心持がよく現れて居る。それは次の如くである。

總理の哀耗の(粵廣東)に抵りし時に方りて、中正(蔣介石)は正に陳逆を殲除しつゝ軍を興寧に駐む。「政黨の精神は領袖に在らず」との總理の遺言を追憶するに、我が同志に對

する永訣の暗示にあらざらんや。中正は軍中に服務して、病にも藥餌を親らする能はず、歿しても殯殮を視るに及ばず。我が父師を念ふも亦得べからず。戎衣に涕を雪いで、痛狄憾何ぞ窮まらん。玆より以還、只志を繼ぎ事を述べ、痛く自ら策勉しつゝ、全部の遺教を恪遵して、益々革命の爲に力をつくさんとす。

「全部の遺教を恪遵」することが蔣氏の切なる願望であることは疑はれぬが、併し蔣氏には容易に孫文の「全部」を了得することが出來ない。孫文在世中の蔣氏の演說や文章を今日讀返へして見ると眞に隔世の感がある。當時の左傾し切つた彼の叫びは、其實孫文の聲に過ぎなかつたのである。孫文と訣れてからの蔣氏は先輩たる汪兆銘及び廖仲愷氏の指導に從ふことにより て、同じ途轍を邁進することが出來た。然るに孫文の死後半歳目の一九二五年八月に廖仲愷は橫死を遂げた。此人は非常に優れた實行家で、一面に國民政府財政の立直しを行つて軍閥の基礎を鋤き返すと同時に、自ら勞働運動や農民運動やあるひは香港に對する深刻な民族運動の先頭に乘出して、それとなく共產黨員の非國民黨的行動を抑へた。故に廖仲愷の居る間は、蔣氏も共產主義者に對して後顧の憂を感じなかつたものである。

然るに殘つた汪兆銘氏は理論的指導者としてこそ優れて居たが、共產黨員の民衆運動に於ける專恣なる行動を制馭する力に欠けて居た。庇を貸して母家を取られると云ふ心配が漸く國民黨員の間に高まつてそれが遂に蔣氏をも動かし、少くも一九二六年三月の所謂中山艦事件以來、共產主義者は孫文の遺産たる國民黨破壞の陰謀を蓄へてゐると信ずるに到つた。この先入見にとらはれた後の彼は、先師の遺した左翼民主主義的理論及政策を悉皆打忘れ、事每に共產黨と衝突しつゝ知らず識らずの中に急速に右傾した。客觀的には孫文に背くことの甚だしきものであつたが、併し主觀的には疑ひもなく孫文崇拜の灼熱せる感情に導かれたものであり、この事情を洞察した汪氏その他の左翼の人々は、少くとも昨年秋以來は蔣氏を疑ひもせねば蔑しみもしなかつた。何となれば其時以來蔣氏は前非を悔いて、理論的に汪氏の許に立歸つたからである。

但し理論的には比較的容易に孫文主義解釋に於ける廣東派の正統性を認め得た蔣氏も、事實的には一九二六年七月即ち彼が國民革命軍總司令として所謂北伐の征途に上つて以來、彼の身邊に結び付いた種々の因緣から容易に脫離することが出來ない。私は今蔣氏の國民黨改造（一九二四年一月）以來彼の步み來つた思想的經路の跡を尋ねて、彼の現在の立場を明かにして見やう。

蔣の歩んで來た道

一九二四年一月から翌年三月迄は孫文在世の時代であり、此時代の彼が全然孫文の影響の下に考へ、且動いて居たものであることは申すに及ぶまい。孫文の死は彼の心に衝撃を與へたが、併し一方には國民黨内に於ける共産主義者の勢力がまだ著しく伸ぶるに至らず、殊に汪精衛及廖仲愷と云ふ大黒柱が屹立して居た爲に、彼は孫文から與へられた軌道の上を中央政治軍事學校（黄埔軍官學校の新名稱）の弟子達と共に、何等の不安なく邁進することが出來た。但し此幸福な時代は僅か半歳、鐵腕的政治家にして同時に火の如き民衆指導者たりし廖仲愷が兇彈に斃れた瞬間に終りを告げた。蔣氏の共産主義者に對する疑惑は先づ一九二六年三月のクーデターとなり（汪兆銘氏も此時蔣氏等の嫌疑を避けて歐洲に身を避けた）次に同年五月の「黨務整理案」となり（之によりて黨内共産主義者の行動及び權限に著しい制限が加へられた）、更に同年七月の獨裁官的軍司令官制度の制定となり、彼自身の獨裁官就任となつた。茲に於て彼が中國共産黨、國民黨内の共産主義者及び之を支持する左翼國民黨員の非難の的となつたことは、所謂騎虎の勢ひ、誠に止み難い成行であつた。出征以來湖南湖北は一瞬の間に征服せられ、江西省も相當苦戰の後同年十一月初旬に平定を了つたのであるが、この四ヶ月間に蔣氏及び之を助けた同盟の共産黨人及（[illegible]江）氏等の一派と、ボローヂン氏を事實上の首腦とする左翼國民黨及び共産主義者の一派とは、遂に兩立し得ない迄の敵對關係に陷つて仕舞つた。兩派の中心政治機關所在地の名に因んで、前者は南昌派（江西省）後者は武漢派（湖北省の大都市なる武昌、漢口及漢陽の總稱）と呼ばれた。

蔣氏は其後も麾下の國民革命軍を督勵して次々に安徽浙江及び江蘇に侵入して、一九二七年三月廿一日には革命軍第一路總司令白崇禧氏が上海を占領した。茲に北伐事業は一段落を告げ、四月十八日に蔣氏を首班とする右翼國民政府が南京に樹立せられた。それより二日前の十六日に、武漢の左翼國民政府は蔣氏の一切の官職を褫ふ命令を發して居る。それは兎も角、南京政府で蔣氏の軍事獨裁權力を支持した人々が、胡漢民氏をも含めた所謂元老派の全體を網羅して居たことは注目に値する。所謂中山艦事件を動機とした一九二六年三月の廣東クーデターから翌年四月の南京政府設立に至る十四ヶ月間の蔣氏の右翼的行動は、孫文の指示した途に外れて居たことは勿論、思想的にも階級的にも何等判然たる背景を持つものでは無かつた。只共産黨員及び左翼的國民黨が孫文の遺産たる國民黨を亡ぼす

うと云ふ獨斷に出發した義憤及び持前の負けぬ氣に引廻はされたものだと批評する外なささうに思ふ。但し蔣氏の此態度は偶偶李石曾氏等の無政府主義的孫文主義及び胡漢民氏等の儒教主義的孫文主義の軌道と相通ずるものがあつた。故にこの時代の蔣氏は無政府主義的及儒教主義的孫文主義を、其行動の思想的背景として居たと云ふことが出來やう。

　蔣氏は浙江人であり、殊に上海總商會の牛耳を執る所謂寧波幇――浙東財閥――は蔣氏も之に屬するところの浙江省東部出身者の資本家團體である。一方蔣氏の政治的支持者たる元老派の張靜江氏は寧波幇の資本家達の間に深い潜勢力を持つて居るので、宛も共產主義者の勞働運動に困り拔て居た上海資本家階級は、寧波幇の首領なる虞和德（字洽卿）及び張靜江氏を通して蔣氏に接近し、「打倒共產黨」を條件として南京政府に對する財政的援助を約束し、彼等は驚くべき熱心と實力とを以て其責を果した。

　一九二七年四月以來の今日に至る蔣氏の覇權は主として上海を中心とする浙江及江蘇資本家階級を背景としたものであり、其反對給附として資本家階級は南京政府に對し强い發言權を與へられた。爾後蔣介石氏の國民黨員としての立場は、彼が意識するとせざると、又好むと好まざるとに論なく、曩きの無政府主義的乃至儒教的孫文主義から不可避的に資本家孫文主義へと移り行いた。而して今日の彼の立場も亦實に玆にある。ところで蔣氏は此立場に安心して居るかと云ふと、明かにさうでないらしい處がある。蔣氏は同年八月中旬、突然下野の宣言を發表して中外を驚かした。其原因は之を要するに獨裁官として、拾收すべからざる失政の責を一身に負はなければならなかつたところにある。

　彼は下野後間もなく日本に向つたが、其前に中央軍事政治學校の舊弟子達に與へた留別書の中に、自分は革命者が其進路を見誤らざらん爲の用意として社會科學の智識を習得して居なくてはならないことを痛感した。これ等の智識を習得する爲に兩三年の豫定で歐米漫遊の途に上る旨を述べて居る。所謂社會科學が何を意味するかを別とし、兎に角彼が深刻に昨非を省悟し得たことだけは右の言葉で充分推測出來ると思ふ。二ケ年留學の豫定を果し得ずして一ケ月後に再び上海の土を踏んだが、歸國後彼の第一に着手したことは汪兆銘氏との提携であり、汪氏は勿論快く之に應じた。併し蔣氏のこの計畫も亦從來の同志なる胡漢民氏や李石曾氏等に反對されて實現の機會を得ず、彼の右翼との聯盟は本年二月の第四次全體會議を經て直に第五次全體會議に及んだ。而かも第四次及第五次會議に於ける蔣氏の態

度には思想的に見て相當の變化があり、殊に蔣氏の背景たる江浙資本家階級の、元老派の背景たる廣西軍閥に對する政治的勢力の比率には一層著しい變化があつた。更に第四次會議當時には全く氣勢の上らなかつた廣東派も、今日では陳公博氏等の努力により全國の學生、農民及勞働者の人氣を集中して居ることは前記の如くである。

　支那資産階級は今や軍閥及び官僚階級を何等かの手段で克服せねばならぬ歴史的使命を負はされて居る。此使命は勿論國民革命のプログラムの中に欠く可からざる一席を占め得るものである。吾人は蔣氏が一方に資本家階級を導いて此使命の爲に努力せしむると同時に、他面小資本家的孫文主義者と提携して資本家勢力の過度の膨脹を牽制することが、孫文の民生主義に托した理想の途に合致する所以であらうと思ふ。

馮玉祥の階級的立場

　馮氏に對しては誤解と無理解とが非常に廣く行はれて居る。獨り日本の資本家又は軍人や英國の新聞記者又は貿易商許りでなく、支那人の間にすら疑惑や憎惡や恐怖がかなり行渡つて居るやうに見へる。然るにこの無數の誤解又は無理解者達と雖も、馮氏が勞働者や農民や小商人や兵卒や學生達の間には一つの偶像として素晴らしい人氣を負ふて居ることを認めないものは無い。彼等はこの人氣の原因を輕率にも馮氏の技巧の効果に歸してそれで滿足して居るやうだが、如何に無智で浮動し易い支那の民衆でもそれ程簡單に取扱へるものではない。支那に眞面目な關心を持つ人々は、決して前記の如き卑俗なる說明に滿足するものであるまいと思ふ。

　馮氏の人氣の由つて來るところを窺ふには特別の鍵を要する。彼は常に自らの素性を述べて「私は田舎大工の伜で、行伍出身で、從て當然無學である」と云ふ。勿論自慢なわけではあるまいが、彼は實に率直に斯の如く告白するのである。この言葉及び態度が彼に關する謎を解く爲の唯一の鍵であり、而かもこの鍵だけで充分なほど有効な手掛かりでもある。

　先づ馮氏は田舎大工の家に生れて、多分其少年時代を農家の手傳などにこき使はれながら送つたものであらう。青年時代には鋸や鉋を持つて父の仕事を助けたかも知れない。田舎大工と云ふからには、それは中産者たる親方又は手工業者に非ずして、恐らく農村手工勞働者であつたらう。

　支那では南北を通して無産者の秘密又は半秘密的結社が隈なく其勢力の網を張つて居り、分益小作農の一部分と農村勞働者の大部分とが、其不安定な生活を擁護する爲に、此等の結社に

結び付いて居る。前にも一寸述べたやうに、支那の無産者は官僚階級から與へられたところの家族制度、中産上層者が好んで支持し中産下層者が辛ふじて受入れて居るところの家族組織に對して、例外なく反感を持つて居る。それは彼等の經濟能力がこれ等の制度又は組織に從ふに適せず、而かも之に從はざれば自身の屬する家族又は部落の構成員たる面目を失つて其仲間から排除されねばならぬからである。それに拘はらず彼等は先祖代々懷き續けて來た家族主義思想の影響から離れることは出來ないで、家族制度及組織の冷酷と殘忍とを呪ひつゝ、多數のものが異郷に放浪しながらも、矢張り家族主義思想を土台とした結社を作る。

此種の結社をその社會紐帶に從つて分類すれば、第一が親分乾分關係、第二が兄弟分關係、第三が師弟關係である。右の内で第一及第二は申す迄もなく親族關係を擬制したもので、その紐帶は直接に家族主義的性質を持つ。第三は河南山東の紅槍會又は大刀會や北江蘇の小刀會のやうな郷土自衞を目的とするものと、北支那東部及び東三省の在理教のやうな無産者の一般的相互扶助を目的とするものとがある。前者にあつては迷信的行事及び武術を村民に傳授するところの「法師」なるものがあり、同一法師の弟子間には兄弟關係が擬制される。後者にあつては之れが男體又は女體の觀世音を本尊とする宗教結社であるところから「公所」なる教會堂と「當家」なる牧師とがあり、同一當家の弟子間に兄弟關係が擬制される外、當家なる言が示すやうに（當家とは普通に一家の家長を意味する）一つの公所を組織する團體が一つの家族に擬制されて居る。第一及び第二類の結社は揚子江以南に勢力を有し、第一種を青幇、第二種を總稱して紅幇と呼ぶ。

馮氏の故郷なる安徽省は紅幇青幇及び紅槍會系結社の入亂れた地方であるが、就中に紅幇の勢力が大きいと云はれて居る。馮氏父子が之等の結社と直接關係があつたと斷定することは勿論輕率だが、併し彼等がその孰れかに好意を持ち或程度の影響を受けたことだけは疑を容れないと思ふ。それは多分中産下層に屬する農家に生れたと思はれる孫文すら、その幼時に洪秀全の物語りや「反清復明」をモットーとする三合會の消息に興味を持ち、彼の所謂民族主義思想の萌芽がここに孕まれたと傳へられる事實から類推しても、至つてたやすく承認し得るところである。

馮氏は袁世凱軍閥の系統に屬する陸建章の軍隊に雇はれて兵卒となつた。今の兵卒は大小軍閥による軍備の擴張及び軍隊生活の不安定から著しく其性質を惡くしたが、清末時代に於ける

兵卒の素質及生活はそれ程墮落したものではなかつた。支那には好鐵不當釘、好人不當兵と云ふ有名な諺があるが、此場合の好不好は官僚階級又は中產階級の標準で下された批判であり、それとは著しく異つた標準を持つ無產者の間には通用しないものである。兵卒及びそれから經上つた下級將校の營內生活氣分は無產者特有のもので、平たく云へば水滸傳式である。

水滸傳は多分明末の產物で、宋代に橫行した大土匪團に關する「宣和遺事」の記述を材料としたものであるが、水滸傳に描かれた社會相は全然明末的であり、即ち官僚階級は其爛熟時代に入つて官紀を紊し鄉黨を壓迫する一方に、農村は人口過剩の爲に失業者を續出して、一般に「亂を思ふ」と云ふ社會不安の空氣が濃厚になつて居た。それで失業無產者中の勇敢にしてアンビシアスの連中が徒黨を組み、水滸傳によれば到る處に「好漢」の武裝的集團が「替天行道」の標語の下に「嘍囉」を招いて「山寨」を構へて居た。所謂替天行道が梁山泊を始めとして當時の多くの土匪團の存在理由であつたらしい。天とは申迄もなく支那の民族神たる上帝即ち宋以後の所謂玉皇である。道が何を意味するかは甚だ明瞭を欠くが、宋江を首領とする梁山泊の豪傑どもは、民衆の武裝機關を以て自ら任じ「君側の奸」たる官僚階級を膺懲する使命を負ふて居ると信じて居たやうに見へる。彼等は最も勇敢にこの「道」を行つたのであるが、今水滸傳の記事に根據して梁山泊土匪團の敵と味方とを別けて見ると、敵は官僚階級及びこれと結托する中產上層者、官僚の手先たる下級官吏及び土豪であり、味方は無產者、有德又は不幸なる中產階級、中下級軍人などである。この分類は大體に於て今日の革命理論に當てはまるものであり、馮氏が無產者の家庭及び營舍生活の間に自然に燒き附けられたであらうところの素朴的階級觀念も亦大體こうした內容のものであつたらう。但し水滸傳を現代支那を對象とする革命思想の經典として考へる場合には、そこに大きな欠陷のあるのを見のがすことは出來ない。それは七十回本にしても百二十回本にしても略ぼ同樣である。百二十回本では梁山泊土匪團が朝廷に歸順し、其正規軍として忠義を盡すと云ふことになつて居るから、作者は彼の革命思想を自らの筆で抹殺したことになる。七十回本は副首領盧俊義の凶夢で結んで居り、さすがに文藝批評の大家たる金聖嘆の細工だけに豐かな餘韻を持たせてあるが併し、革命理論としては尻切れ蜻蛉で、一番大切な結論を欠くことになる。

支那の無產者達は世の中が亂れて生活が不安になつて來ると、常に「眞命天子」の出現を祈る。この迷信は河南山東の紅槍會にも四川の神匪にも廣東の神打子にも全國的に行渡つたも

のであるらしい。思ふに眞命天子の信仰は猶太人のメシヤ思想と共通したもので、苦勞の多い民族の宗教政治的憧憬に外ならぬと思ふ。兩者の相違は眞命天子思想が比較的稀薄な宗教性と比較的濃厚な政治性とを備へて居るに對し、メシヤ思想は著しくそれの政治性を稀薄ならしめた。基督教は申迄もなく、古代の信仰を其儘繼承する猶太教徒の間にすら今尙ほ政治及宗教の二元並立的要求として殘つて居る。

それは兎に角、水滸傳作者の解決し得なかつた無產者的革命思想の結論が民衆の間には眞命天子の出現を待望むと云ふ至つて卒淡な併し案外眞劍な迷信に結晶されて居る次第である。基督教をさへ未練氣もなく振り捨てて、今日では無產者革命思想の結論を「革命的」乃至「科學的」三民主義の中に發見し得たと信じて居る馮氏でも、曾ては矢張り眞命天子の影像を胸に描いた時代が必ずあつたことと思ふ。

馮氏に對する西洋人の誤解の一大原因が、彼の基督教に對する「輕薄」な態度に根據を置いて居ることは必ずしも無理でない。私は今や此點に關して馮氏の立場を辯護する機會に到達した。支那の基督教信者には大別して二つの種類がある。第一はインテリゲンチャ的信徒團、第二は無產者的信徒團である。この二つの群は精神的にも物質的にも何等の聯絡なく、信仰內容に於てすら殆ど全く共通する所なしと見て差支ない。之れは勿論布教者達の期待するところで無いが、社會環境の威力はそれに頓着なく、勝手に基督教を受納するものの信仰內容を別々に決定して仕舞ふ。玆に無產者信徒團の信仰內容及信仰生活を考察する前提として、私は新教派布教師が無智な社會に對して如何樣に說明し、又此說明が民衆から如何樣に理會されるかを略說しやう。基督教會は此方面の需要に應ずる爲に多種類の通俗的小冊子を用意したが、新教系統の內で最も優れた文字と認められる「張袁兩友相論」の中から、數句を引出して見やう。此小冊子は張なる信者と袁なる未信者との問答體で、基督信仰の重要項目を通俗的に解說することを目的として居る。先づ神に關する問答の一部を引用すれば。

袁　上帝とはどんなものです。

張　それは天地萬物の本源、全能、至智、至恩、至義、至聖、の上に極りなき憐愛の情を湛へた存在であります。

袁　それならば「天」と同しものではありませんか。

張　違ひます。

袁　どう違ふのです。

張　例へば此机ですが、これは大工の作つたものではあるが、机を大工だとは云へますまい。

袁　勿論です。

張　上帝と天との關係も其通りで、天は被造物、上帝は創造者であります。

袁　上帝は天地を管理しますか。

張　其通りです。神は天地人物の主宰であるから、人類の尊敬に値するものは上帝の外にありません。

この問答の中にも基督教の神と支那の民族神なる天即ち玉皇との異同が少し許り取扱はれて居るが、右問答中の「天」に關する解釋は誤つて居る。支那の民族宗教に於ける天は、天地と對立する二元的存在でもなければ又勿論被造物でもない。彼は「天地人物の主宰」たることに於て基督教の神と同様であり、此點に於て神と玉皇との相違點は只前者が創造者であるに對して、後者はそうでないと云ふ點だけである。

何故支那人が彼等の玉皇に萬物創造の勞を執らせなかつたかと云ふと、それは勞働を卑視する根深い偏見に由來するもので、從て支那の民族神は猶太の民族神よりも貴族的、非無產者的であると云へやう。孰れにしても無智なる支那の民衆は、前記の如き類似點を辿つて、比較的容易に基督教の神を受入れることが出來るであらう。但し彼等の入信は玉皇を媒介者とするものなるが故に、素朴な人々の胸に宿る基督教の神は、屢々玉皇の映像に過ぎないことも亦免れ難い道理である。これは單に私の推定のみならず、新舊二教の信徒の信仰內容に就て私の實驗し得たところである。舊教徒のマリア信仰に至つては此種の混淆が一層著しく、失笑を禁じ得ないやうな事例もあり、布教師の勞苦に對して氣の毒な感じを催すこともあり、又時には布教師達が此混淆を利用して功名を急いだ痕跡を發見することもある。平たく云へばマリヤは觀音老母即ち女身の觀世音として子を授ける役目を負はされたり、殊に北支那地方では有名な泰山の女神「碧霞元君」の代替物として家族守護に利用されるのである。支那の無產者達に取つて一番の難物は基督を理解することであるらしい。

張　耶蘇とは上帝の息子の名前です。

袁　上帝の息子と云ふと、どう云ふ意味ですか。上帝にも息子があるのですか。

張　上帝は唯一の存在ですが、其本體には聖父、聖子、聖神の三位を備へて居られます。それは上帝が三人あると云ふ意味ではなくて、上帝はどこ迄も只一つであられます。

袁　それならば上帝を別に耶蘇と呼ぶのはどうしたわけです。

張　耶蘇とは原來救ひの意味である。上帝が此世に降つて人を救ふ場合に耶蘇と味ばれるのであります。

袁　耶蘇は一體我々と同類の人間なのですか。

張　耶蘇は上帝と一性一體であり、至聖全能であります。耶蘇の教は獨り修身齊家治國の範圍に止まらず、廣く人類を悔改めしめ彼等の靈魂を救ふて永生の幸福を授ける。所謂聖賢の教は現世に於ける眼前の問題を取扱ふに過ぎないのに、耶蘇は贖罪、復活、審世と云ふが如き死後の問題をも包括し、殊に彼は單に教を垂れたと云ふ許りでなく、人類に代つて難を受け世間の爲に罪を贖ひ、自らの生命を捐てて地獄に落ちる罪人の永劫の苦を免れしめた。

基督の功德及神性に關しては尙多くの說明があるが、先を急ぐから是れ位に止めて置かう。兎に角基督を神の息子と云つたり又基督が身を犧牲にして人世の爲に救贖の門戶を開いたと云つたのでは、支那の無産者達は決して之を理解することが出來ない。併し新約書に記るされた程度の奇蹟や犧牲的行爲や又基督を信ずることの來世的効果などは、彼を神の一機能の具體的表現、支那流に云へば「分身」として說明すれば、比較的容易に了解出來るであらう。何となれば支那民俗宗教の至高神たる玉皇も亦獨一的存在であり、第二次以下の神々は無數にあるが、彼等は殆ど例外なくその權能を玉皇から分與されて居るに過ぎないと信じられて居るからである。只支那信仰と猶太信仰との相違は、前者が分權的となつて居るのに後者が絕體集權的であると云ふ點である。

基督の場合は神又はマリヤの場合ほどすらすらとは行兼ねるであらうが、それでも矢張り前記の如き支那神學の根本原則を手引として基督の神性を承認することは、無知な無産者達に取つても決して不可能のことで無い。この場合にも程度の相違こそあれ信徒の胸に宿る基督の映像に淺からぬ支那民族宗教的色彩が附與されることは申迄もない。

斯の如き心理的徑路を辿つて基督教に歸依した無産者達は、其宗教生活に於て自然に一つの結社を構成する。教會及び布教師を宗教生活の中心とする點から云へば、それは北方の在理教集團に似て居る。義和團事件以前には、布教師がその治外法權を濫用して信徒を保護した結果甚だしきは社會的及び法律的犯罪者の隱れ場となつたこともあるが、更に太平天國初期の事實に溯ると、洪秀全の廣西省で組織した「上帝會」は同地方の無產者間に偉大な勢力を持つた三點會（三合會の別名）と姉妹關係を結ぶところの秘密結社であつた。結社生活が支那の無產者

間に自衛の意味で重要視されて居ることは前に述べたが、無産者の持前なるこの結社傾向が、基督教を無産者に近づけると同時に、無産者の基督教集團の持つ社會的機能の内容を決定する有力な一つの因素であることに注意せねばならぬ。平たく謂へば基督教的結社も亦青帮紅帮乃至大刀會と云ふが如き無產者結社と共通した社會的機能を持つと斷定しても、必ずしも突飛ではあるまいと考へる。

我が馮氏も亦恐らくその營舍生活中に、斯の如き信仰內容を懷き且つ結社の社會的機能を認識して基督教に入信したものであらう。併し基督教の教理を受納して見たところで、無產者的革命思想に何等の結論をも與へられないことは、格別入信以前と異ならぬ。初期教會時代の素朴な共產傾向や近世の所謂基督教社會主義と云つたやうなものもあるが、前者は道教教會組織の始祖と云はれる後漢の張陵が第二世紀に四川省で、ペテロの羅馬で行つたよりは遙かに大規模且つ整備した方法に依つて行はれたところであり、後者は惟心的換言すれば空想的結構に過ぎないから、支那の無產者に取つて何等新しい力を與へ得ない。

馮氏の基督教信仰はソウエート露西亞との具體的關係の發生した一九二五年春以來うやむやの中に消え失せたもののやうであるが、彼の無產者的革命思想は、理論的にも方法的にも、基督教から與へられたところは全く無かつたらしい。地位が高まり勢力の增すに連れて彼れの注意が基督教を離れ、國民黨又は共產黨と云ふが如き政治的革命團體の方面に轉向したことは、梁山泊的無產者革命思想の代表者を以て自任する彼れの立場から見て、至つて自然の成行であつた。

馮氏の幕僚は近頃「國民軍歷史」の編纂に從事して居るらしい。その總論の一部分が北京に於ける彼の機關紙「京報」に連載されたことがある。その記述によれば彼と國民黨との間に始めて連絡のついたのは民國九年夏のことであつた。それは孫文が彼の教友なる徐謙氏を遣はして漢口で會見させたことであつた。翌年春馮氏は河南省信陽の駐屯地から使者を廣州に出して孫文に謁せしめた。民國十三年十月馮氏は突然北京に乘込んで直隸派の政府及び宣統帝を追拂ひ、有名な「首都革命」を行つて遙かに孫文の北上を請ふた。

民國十五年春馮氏はロシアを訪ふ爲めに庫倫に赴き、同地で徐謙氏の紹介により始めて正式に國民黨に加入した。同年五月ロシアに入り「鮮明なる旗幟と正確なる主義とを持つた革命政黨が一定の政治目標に向つて奮鬪するに非らざれば、革命の成就は望まれない。今日革命を指導する資格を備へた政黨は、

一の中國國民黨のみである」と云ふことを悟つたと記してある。馮氏が訪露の旅を了つて間もなく部下に與へた訓話の中に「世人は私がモスクワで共産主義を教はつて來たと評判して居るやうだが、其實私が彼地で教へられたところは、三民主義の價値である。私は此旅行で三民主義への確信を得た」旨を述べたことがある。前引文と照合して、馮氏が孫文思想を如何に解釋し、それから何を與へられたかの輪廓を見ることが出來るやうに思ふ。

彼は七月にモスクワを辭して九月に南口戰敗後に於ける第一國民軍の新根據地なる五原縣に歸着し、ここで全國民軍の國民黨加入宣言を發した。彼と第三國際との具體的且繼續的な關係は一九二五年即ち民國十四年四月、ロシアから派遣された第一次馮玉祥軍附軍事指導團長ペー・チエンチン氏の着任に始まると見てよからう。其以後に開展されたロシア對馮氏の關係を紹介する爲に、チエンチン氏其他關係ロシア人の報告書等を一と通り揃へて見たのであるが、餘り長くなり過ぎたからそれは全然割愛することとし、只兩者の關係は互に相手方の利用價値を認めて極力利用し合つたと云ふに止まり、從て内外人の今尚ほ疑つて居るやうな主義的關係は絕對に成立しなかつたと信じて誤り無い。それは馮氏の懷いて來た支那無産者的革命思想の持つ理論的性質から見ても當然のことであつた。

然らば馮氏は孫文思想の中から果して何を發見したであらうか。理論としては「民生主義」及びそれの左翼的解釋であり、方法としては孫文が晩年に示した急進的態度、及び彼の死後第二期國民黨全國代表大會（一九二六年一月）、國民黨中央及地方黨部聯席會議（同年十月）、及び第三次國民黨中央執行委員會全體會議（一九二七年三月）の決定した左翼的指標である。尤も彼れはこれ等の理論及び方法を鵜呑にして居るのでは無い。何となれば彼は支那無産者の要求を彼自身の要求として居ると同時に、彼は疑もなく一つの軍閥的勢力の執念深き把持者であるからである。この矛盾を彼は民衆を擁護し其要求を實現させる爲の武力と主張することによりて一應は抹消し得るであらうが、併し行政及財政の實際的運用の上に幾多の矛盾の横たはることを如何ともし難い。

彼は左翼國民黨の示した支那革命の理論及方法を受入れることによりて、水滸傳以來無産者の間に解き難い謎として久しく持て剩されて居た難問題を解決する鍵を得た。併しこの鍵を急激且無條件で使用することは、彼の軍閥的勢力の財政的根據を自ら破壞する恐れがある。彼は恐らくこの大きなヂレンマに惱んで居ることと思ふ。而かも機智に富み通融無礙の才能を備へ

た馮氏のことであるから、彼れは資本家的孫文主義と小資本家的孫文主義との間を巧に遊弋することによりて、自らの內包する矛盾を彌縫しつゝ、徐々に支那無產者的革命を押進めて行くことが出來ると思ふ

結語

豫定の行数の二倍近くを費し私の有する餘暇の全部を割て書いたものではあるが、特に馮玉祥氏に關する部分では、例へば共產黨關係や彼の無產者的革命思想に關する具體的立證と云ふが如き極めて重要な問題に手を着けることが出來なかつた。從て全體が著しく不完全且つ跛行的なものとなり了つたことを、改て玆に陳謝する次第である。それは兎に角、支那改造の現過程に於ける二人の大立物の內、蔣介石氏は忠實にして且つ正統的な意味での孫文の映像たることにより、馮玉祥氏は獨自の階級的立場から出發して孫文の晩年に於ける革命思想の眞髓を把握することによりて、表面の常に危機を孕んで居るらしい不安定な關係に拘はらず、この兩者は結局相融洽しつゝ同じ道程を進み得る運命を負ふて居ると云へやう。前記の如き立場から此二人の革命家が期せずして落合つたその道程は、所謂左翼國民黨首領汪兆銘氏等の夙に踏み來り且つ指示し來つた其道程に外ならぬ。現在は資本家階級及び軍閥の聯合統治時代であり、蔣氏は資本家階級を代表して政治及び軍事的に全國の覇權を掌握しつゝ軍閥及び右翼政治家との協調及鬪爭の衝に當り、馮氏は前線から引下つて蔣氏を援助する地位に立つて居る。

兩者ともまだ表立つて左翼國民黨勢力と握手することを時期尙早と認めて居るやうであるが、而かも蔣氏は昨年九月の所謂「汪蔣合作」の聲明にせよ、又本年八月の第五次全體會議に於ける廣東派庇護にせよ、彼の近き將來に於ける進路は既に動かすべからざるものとなつて居る。馮氏の態度は蔣氏ほど明白でないが、而かも民衆運動及彼の同志たる國民政府外交部長王正廷氏及び其補佐者を通して現はれる對外行動の實踐的方面を見ると、馮氏が蔣氏よりも一歩先きに左翼國民黨の道程に踏込んで居ると斷定する世評に、相當な根據があると認めねばなるまい。

之を要するに當分のところ、支那は何處に行くかと云ふ疑問に對する解答は、蔣氏が資產階級及中產上層を、馮氏が無產及び中產下層を率ひつゝ、共に汪兆銘氏の指示する途に從つて左傾して行くと云ふにあらう。但し國民黨の關する限り左傾の限界は社會民主主義の範圍に止まるであらう。(完)

經濟時評

恩給制度の改正を評す

牧野輝智

就職口の相談に來た或る退役將校の述懐である。『私は教導團出身であるが、二回戰役に出たため將校に昇進し、在職九ケ年、廿九歳の時恩給を受けることになり中尉で現役を退き郷里に歸臥した。其の時の收入は恩給と年金を合せ年額四百八十圓、月に割つて四十圓であつた。郷里の人々は私の身分を羨み、小學校の校長さんでさへ朝から夕まで働いて一ケ月の俸給は廿五圓に過ぎないのに君は遊んでゐても四十圓の月給取りだ。それも一生失業の憂ない月給取りだなどと稱したものです。私自身も郷黨の羨望を浴び、いゝ氣になりうか〳〵と廿年の歳月を過し今年は五十歳になるが、子供は殖へる、物價は騰貴する、其の後恩給收入は法律の改正により幾分增加したけれど金の値打は二十年前と比較にならない程下落し、今では生長した子供に教育を受けさせることも出來ずほと〳〵困り切つてゐる。廿九歳といふ働き盛りに恩給を受ける身分になつたことを今では却つて恨めしく思つてゐる云云』と。

私が此の實話を茲に引用したのは今日の恩給制度の不備を實證するの一例となさんが爲である。幸にして現行の恩給制度に對しては大改正を加ふの必要あることが一般識者に認識され、行政制度審議會では既に其の改正綱領を決定し、目下法制局にて法案の作製中であると傳へられる。行政制度審議會で決定した綱領は次の如くである。

一、既得權を侵害しないこと

二、恩給資格取得年限を延長すること

A、文官は現在の十五ケ年を二十年とすること

B、武官は現在の十一年を十五ケ年とすること

三、恩給の一時的減額

四、恩給受領者に金融の便を與ふること

現行の恩給制度に大改正を加ふるの必要に就ては二つの根據がある。一つは財政上の理由で、他の一つは制度其のものの不備の爲め不公正の結果を生じ、或は却つて弊害を生ずることである。此の內でも財政上の理由は特に重大なものであると思ふ。試みに年々の恩給費が如何に急增し、我財政を壓迫しつゝあるかを計數にて示せば左の如し。(單位千圓)

	恩給費	歳計總額	
大正三年度	二三、二八一	六四八、四二〇	三・六%
大正四年度	二四、四六八	五八三、二六九	四・二%
大正五年度	二五、四九一	五九〇、七九五	四・三%
大正六年度	二六、四七〇	七三五、〇二四	三・六%
大正七年度	二八、〇一〇	一、〇一七、〇五三	二・七%
大正八年度	三〇、八一七	一、一七二、三二八	二・六%
大正九年度	四五、八三四	一、三五九、九七八	三・四%
大正十年度	六三、一〇五	一、四八九、八五五	四・二%
大正十一年度	六四、六一八	一、四二九、六八九	四・五%
大正十二年度	七四、八九四	一、五二一、〇五〇	四・九%
大正十三年度	一一五、五七〇	一、六二五、〇二四	七%
大正十四年度	一二〇、六〇一	一、五二四、九八五	七・九%
大正十五年度 昭和元年度	一二三、八七五	一、六六六、七七四	七・四%
昭和二年度	一二五、〇六三	一、七五八、九六九	七・二%
昭和三年度	一二九、〇八二	一、七七四、一八三	七・三%

【備考】昭和三年度は不成立豫算の計數である。

歐洲大戰開始の年即ち大正三年度に於ける恩給費の總額は二千三百萬圓であつたが、今日は年額一億三千萬圓に增加してゐる。十五ケ年間に六倍の增加である。是を總豫算との比率からいふと大正三年頃は三分六厘に過ぎなかつたものが今日は七分三厘に增加してゐるのである。尤も恩給費急增の有力なる原因は大正十二年の恩給法改正であるが、其の後に於ても恩給費は年々增加一方である。是は財政上看過し難い問題である。此の傾向を緩和する爲め行政制度審議會の改正綱領では文官及び武官の恩給受領資格年限を前者は五年後者は四年延長してゐるが其の趣旨は無論當然のことであるけれども之では財政上幾何の負擔緩和にもならない。私は財政負擔の點からばかりでなく、文武官の間に恩給權の公平を保たしむるために、之は文武官を通じて廿ケ年位に延長す可きものではないかと思ふ。恩給受領資格に就て文武官の間に差別を設けたのは、軍人は職務上の危險が多いためであらうと察せられるけれども、平時にありては文官でも武官でも職務上の危險に差別はない。戰時には停年加算の恩典がある。軍人の平時の通常の陸上勤務を文官より危險だと看做す可き理由は一つもない。故に原則として文武官とも恩給受領資格の初年限を同一にすることは公平であり且

つ合理的であると云はねばならぬ。斯くすれば本文の劈頭に述べた實例の如く卅九才のうら若さにて恩給を受領し無爲徒食の日を送るやうな弊害をも幾分矯めることが出來るのである。行政府議會の原案が此の點に就て依然在來の區別を墨守してゐることは私の贊同し得ないことである。

私は恩給費に對する財政上の負擔を緩和するためには特殊財源を設け之に充當することが必要であると思ふ。往年政府部内にて恩給費に充當するため二、三億圓の基金を設定し、其利子を以て恩給費を支出すべしといふ意見が行はれたことを漏れ聞いたことがある。しかしそれは恩給費が千萬圓か千五百萬圓位に止まる場合には實行必ずしも不可能でないけれども、今日のやうに一億三千萬圓にも達する場合には二十六億圓の基金を有せねばならぬこととなり、到底實行し難い空論である。故に恩給費の大部分が結局國庫の負擔であることは免れないことであるが、それにしても其の一部分を特定財源に求むることは不可能でない。不可能でないばかりか寧ろ公正の手段である。其の具體的手段としては現職にある文武官をして毎月其の俸給の百分の三位を恩給費財源として據出せしむることである。今日でも文官は恩給法納金として俸給の百分の一を納金してゐる。是を百分の三程度に引上げることは大した苦痛ではないと思ふ。假し幾分の苦痛があるにしても將來自分等の受く可き恩給に對し、現職にある間に百分の三程度の納金をなすは當然忍ばねばならぬことである。更に進んで現制度に於て最も不都合であることは文官は僅少の恩給納金をなしてゐるに拘らず、陸海軍人は一文の納金をもなしてゐないことである。恩給費の内譯からいふ文官二五に對し武官は七五である。是を詳細の計數にて示すと左の如し。

恩給費の文武官内譯――(單位千圓)

	昭和三年度不成立豫算	昭和二年度豫算
文官	二三、五二二	二二、二一一
同遺族扶助料	四、七九二	四、五三〇
合計	二八、三一四	二六、七四一
陸軍々人	四六、九一一	四七、六七三
同遺族扶助料	一五、八三八	一五、九七二
海軍々人	二一、五五一	二〇、四八六
同遺族扶助料	三、一五三	三、〇五六
合計	八七、四五三	八七、一八七

斯の如く文官の恩給費二千八百萬圓に對し、武官の恩給費は八千七百萬圓である。文官が少額ではあるが、恩給法納金をなしてゐるに其の三倍の恩給費を國庫に支出せしめてゐる陸海軍人が何等の負擔をなさないことは不公平である。從つて負擔の

公正といふ點からいふも、文武官均等に恩給法納金をなさしむることは必要であるが、是を文武官共通に俸給百分の三位に定めたならば、是により、恩給費の一部を調達し得るのである。斯の如く一方には恩給資格取得年限の延長により恩給受領者の數を減少し、他方には文武官共通に恩給法納金を負擔せしめたならば、消極積極の兩方面から恩給費に對する財政負擔を緩和せしむることが出來る譯である。

恩給法の改正に對し一部の論者は恩給率の引下げを主張してゐる。今日國庫の恩給費負擔が急増した理由は大正十二年に恩給法を改正し、恩給率を思切つて引上げたからである。其の結果として大正十二年度までは恩給年額六、七千萬圓であつたものが、大正十三年度には一躍して一億一千五百萬圓に増加してゐる。大正十二年の恩給法改正の重大理由は物價が激騰し恩給による生活者の苦痛の甚しい狀態を緩和するためであつたが、最近には物價も相當に低落してゐる。從つて恩給率を幾分引下げるも差支ない道理だといふのである。成る程是にも一理はあるけれども、私は恩給率を今日よりも引下げることには贊同を表しかねる者である。現在の恩給定率によるも官吏の恩給は退職當時の俸給の三分一に初まり在職四十年に及んで俸給の二分の一まで進み、其の後は勤續が四十年を超過しても俸給二分の一に止めることになつてゐる。年若くして退職し爾後徒食に其の日を過す如き不心得者の續出は法律の規定にても防止することを努めねばならぬが、二十年以上の勤續をなしたものに三分ノ一の恩給を與へ、四十年勤續したものに二分の一の恩給金を給付する如きは決して高率であるとはいへない。特に公務のため不具廢疾となつたやうな者に對しては十分の恩給を與へ、廢兵が見すぼらしい姿にて門に立つやうな現狀を一掃したいと思ふのである。故に行政制度審議會の綱領が恩給率の引下を考へてゐないことは寧ろ當然のことであつて、却て特殊の功勞ある退官者に對し現制度以上の優遇法を考ふることが社會政策上必要ではないかと思はれるのである。

最後に行政制度審議會の決定項目中には恩給受領者に金融の便を與ふることといふ一項がある。是は改正案の特色といふ可き點であるが、其の實行は却々容易ではないけれども、是非實現させて恩給生活者の窮狀を救助したいものだと思ふ。今日恩給生活者の多數が高利の借金の爲め苦んでゐることは殆と周知の事實である。恩給法の改正に當りては其の給付する恩給金の効能を十分に受領者に享受せしむることを考へねばならぬ。それには恩給金に對する低利金融の道を開くことが肝要であるが、審議會案はたゞ其の趣旨を述べただけで具體的の方法には全然

觸れてゐない。是に就て思出されるのは最近米國のナショナル・シチー・バンクがサラリー・マンに對し少額低利の金融の便を開いたことである。ナショナル・シチー銀行の此の計畫は社會政策的意義を多分に有する者で、一口五十弗以上五千弗以下、相手は善良なるサラリー・マン物上擔保を要せず、而かも金利は百弗に對し六弗である。之は同銀行頭取ミッチエル氏がサラリー・マンの生活苦を緩和するために發案し實行したものであるが、此の計畫には庶民金融の見地から大に學ぶ可きものがあるやうに思ふ。翻つて恩給受領者の低利金融の問題を考ふると、是は信用貸ではなく、一種の擔保付貸出であるから回收の確實といふ長所を備へてゐる。從つて其金利はずつと安くしてよろしい譯であるが、私は國家として是に干與するならば、預金部の資金を是に充當することが當然の提案であると信ずる。預金部の資金は細民の貯蓄金であるから、是を庶民金融の資として提供せよといふのは合理的の主張であると考ふるが、其の具體的手段としては預金部資金中の一定額を貸出資金とし、全國の郵便局をして貯金事務のみならず、小額の貸出事務をも行はしめることである。是は庶民金融の最も有効なる具體的方法として私の提唱せんと欲する所であるが、此の方法にして行はるれば恩給受領者の金融をも其の貸付は事務の一部として之を行はしむることが出來るのである。是は可なり重大なる新施設であるが、頁に國民多數の實生活に觸れたる重大施設として識者の十分攻究す可き問題であると信ずる。

× × × × ×

政黨政治の缺點は常に運動陳情等に動かされ、國費の加重となるべき新施設を餘儀なくせられることである。鐵道新線の濫設の如きは其の顯著なる一例であるが、恩給費の激增にも此の嫌が明かに存してゐる。即ち大正十二年の恩給法改正は退職官吏（特に軍人）の恩給法改正運動の結果とも稱す可きもので、勿論其の間に相當傾聽すべき理由もあつたとはいへ、是等の運動者の好感を買はんとする政府者の企圖にも十分內在してゐたのである。然るに今回の恩給法改正計畫は、官吏の利益の一部を犧牲として、從つて是等の人々に好感を買ひ得ないことを覺悟しながら、國家財政の負擔輕減といふ重大見地からして是を實行せんとするのである。是は現內閣の計畫として、吾人の稱贊を表するに吝ならざるものであるが、其の綱領の內容に就ては未だ不徹底の譏を免れないものが存してゐる（例へば文武官共通の納付金問題）。是等の點に就て更に愼重に考慮し、國家財政國民經濟上而して社會政策上、十分に恩給制度改正の意義を發揮せんことを希望する次第である。

社會時評

合同問題側面觀

吉野作造

一

無產階級の諸團體は最近の年次大會を機とし、或は組合の資格に於て或は政黨の資格に於て、それ〴〵合同問題に對する態度を表明した。無產諸政黨間に合同の機運の動きはじめたとは前號の本欄に於ても說いたが、九月から十月に入りてはそれが段々具體的の形に現はれたのだ。但だ其結果が豫期に反して案外合同の機運を促進して居ないことは既に新聞紙の報ずる通りである。併しそれは單に表面だけの事で、裏面に在ては合同論にからむでの動搖は各方面に於て現に盛に釀成されつゝあるのではあるまいか。局外に居る私共には本當の眞相は分らぬのかも知れないが、この數ヶ月にわたる冷靜なる觀察はまた私をして自ら一種の豫想を懷かしめぬでない。是れこの側面觀を草する所以であるが、假りにこの觀測が當らぬとしても、少くとも私の立論の趣旨は、合同方策を按ずる人達に取て或は多少の參考になるかとも考へる。いづれにしても私は、局外の第三者の地位に在る讀者に公平なる資料を提供すると云ふ積りで、玆に自分の觀る所を卒直に書いて見る。

二

先づ各團體の云ひ分を吟味して見よう。

社會民衆黨は曰ふ「我等は資本主義を排すると同時に共產主義を排す」と。資本主義の排擊は各無產黨一般の共通標語だから問題はないとして、共產主義の排斥といふことは慥に同黨の

著しい特色となつて居る。從て同黨が單一大衆政黨主義を承認するものでないことも亦明白と謂はねばならぬ。

社會民衆黨と對蹠的の立場にあるものは謂ふ迄もなく新黨準備會である。未だ正式に政黨の形をなしては居ぬが、之を實質的に一政治團體と觀ることは差支あるまい。この派は形式上は單一政黨主義者だけれども、最近に於ては合同を呼び掛ける相手は日勞黨だけだと明言して居るし、從來また事毎に社會民主主義の排擊を力説して來た關係もあるから、事實に於て眞の單一政黨主義者でないことは社會民衆黨と異る所はない。彼等は眞の無產階級は社會民主々義などを奉ずる筈のものではない、共產主義に十分の自覺を持たぬのは所謂指導者にあやまられて居る結果に外ならぬ、之等の所謂指導者の假面を剝ぎ之を驅逐して大衆を我黨の傘下にあつむるは自分達に課せられたる重要の任務であると信じて居る。從て彼等は自分達に對立するものとしての社會民主々義の論理的獨立性を承認しない。故に彼等の主觀に於ては、無產階級の政治運動といへば單一結成の外にあり得ないのである。併し彼等の主觀的信仰が果して客觀的にも妥當なりや否やは、少くとも局外者に取ては全く別の問題だ。疑のない眼前の事實としては、何人も共產主義に對立しての社會民主々義の儼存を認めざるわけには行くまい。是れ獨り我國のみの現象ではない、歐洲諸國に於ても同樣だ、否、歐洲諸國に於ける最近の形勢に促されて我國に於ても二者の對立抗爭が漸次尖銳になりつゝあるとも云へるのだ。兎に角斯うした二つの立場がある以上、その一方を固執して他方を排擊する者を單一政黨主義者と呼ぶ能はざるは當然であらう。

故に私は曰ふ、社會民衆黨と新黨準備會とは最も明白に單一政黨主義を否認するものであると。

右の二黨に對し正反對の立場を執るものを日勞黨とする。左右の分裂を非として起つた日勞黨——所謂中間派なる別名を自他共に許して居つた日勞黨が、初めから偏執的立場を執り得ぬは分つて居るが、最近の中央委員會の決議は更に一層鮮明にこの點を表白して居る。曰く、大右翼結成或は大左翼結成の名の下に行はるる統一論は、無產政黨を永遠に分裂せしむるものであるから、飽くまで單一大衆政黨の實現を目標として之が達成に必要なる行動を開始すと。之を表面から眞ツ正直に解すれば、日勞黨は單一大衆結成に熱心なるの餘り、之を碍ぐるものとして凡ての部分的結成に反對せんとするものの如くである。今後之を目標として必要なる行動を開始すると云ふだけを聞けば、同黨に單一結成可能の確信と並に之に關する相當の成算があるやうだが、事實果して然りや否やは大なる疑問の樣でもあ

る。

無産大衆黨のこの點に關する宣明は、理論に於て明確を缺くも、實際に於ては最もよく其の現在の立場を語るものと私は觀た。曰く、右翼結成を克服しつゝ可能な範圍に於ける順次的合同に歩を進めると。更に實際問題として速に日勞黨との提携を成就せしめ同時にまた社會民衆黨内の先進分子とも協動するを辭せないと附言して居る。右翼結成の克服と云ふことは新黨準備會の主張する社會民主々義の排撃と云ふことゝ何れ丈の相違あるかは分らないが、合同の範圍の社會民衆黨にまで延びることを厭はぬ點から觀れば、此と彼とは必しも實際方策を同うするものではないらしい。右翼結成に捲き込まれるのは嫌だ左翼結成に捲き込むのはいゝと、頗る虫のいゝ所に目標を置いて居る所に、無産大衆黨の特色を見るべきである。

日本農民黨は最近の大會に於て現狀維持の宣明に落ち付いたが、會議の席上に唯ならぬ波瀾が捲き起り、遂に一二幹部の脫退を見るにさへ至つたことを思へば、所謂現狀維持の宣言は或は迂濶に合同問題に手を觸れられぬと云ふ所から來た窮餘の一策かとも思はれぬでない。合同問題に付き各種の意見の紛糾して居る點から、或は日農黨を以て今日の無産政黨界一班の縮圖なりと觀ていゝのかも分らぬ。但し合同問題が盛になればなる程、斯うした政黨は益々不安動搖の地位に陷る運命を免れないものである。

三

以上の狀勢から合同問題が今後どう發展するかを考察するに當り、我々の腦中に先づ次の諸問題が湧起する。

一、無産政黨の四分五裂の現狀は何れの點より觀ても此上いつまでも看過し得ない。もッと大きなものに纏つて欲しいと云ふ事は、一般狀勢の要望であり又直接之に關係する者の熱求でもある。この事に付てはまづ一點の疑もないと謂ていゝ。

二、合同が必要だからとて、それが單一結成でなければならぬか否かは別問題である。理論としても單一でなければならぬとするものと左右兩翼に二大結成に纏まるのが必然の歸結だとするものとあるが、實際の勢は今のところ左右兩翼の對立は到底避け難いやうだ。理論の問題として又實際狀勢の判斷としてこの點は今後我々の最も愼重な省慮を要する所であらう。

三、假りに近き將來に於て兎も角も左右兩翼の大結成を見るものとすれば、それは現在の無産政黨の孰れかを中心とすることなくして實現するだらうか、又さうでないとすれば孰れの政黨が左右兩翼の各々の中心となるだらうか。この點に關する

私の觀測を卒直に語ることを許さるるなら、第一に右翼結成は必ずや社會民衆黨を中心とするに間違なかるべく、第二に左翼結成は稍弱い意味に於て無産大衆黨を中心とするだらうと思ふ。左翼無産運動の活動力としては或は新黨準備會の方に許さねばならぬのかも知れぬが、彼れが合法的政黨と云ふ地位にまで墮して來るなら別に無産大衆黨外に異を樹てるの理由はなく、無産大衆黨に據らずとして別派をなすの必要に立脚する限り不幸にして官憲の公認を得る見込はない（それは或意味に於て何れの方面から觀ても好ましいことではないが）。從て左翼結成の任務は今のところ無産大衆黨に課せられて居ると見るの外はないやうだ。唯この黨は此大任を果すべく未だ十分の陣形を爲して居ない。今後新黨準備會なり日勞黨なりより大に有力なる新分子を誘致するの必要があらう。

四、事態を冷靜に觀察すれば、今日既に左右兩翼の大結成の爲の機運は大に動きはじめて居る。現に先き頃の大會に於て日農黨では、社會民衆黨と合同すべきや日勞黨と合同すべきやが問題となり、又その日勞黨でも、無産大衆黨と合同すべきや社會民衆黨と合同すべきやが八釜しい問題となつたではないか。斯うした內部の紛擾は今後恐らく益々盛になると私は觀て居る。人或は之を以て併合黨の陰密なる策動に歸するものあるも、必しもさうばかりとは限らない。機運一度醸成すれば勢の趨る所如何ともすることが出來ないのである。而して斯かる機運の進展に由て直接に多大の影響を蒙るものは、謂ふ迄もなく日勞黨と日農黨とである。この兩黨の今後の形勢は吾人の最も注目を要するものであらう。

五、右の如き新機運に對し敢然反抗の態度を表明したものは日勞黨である。彼れは左右兩翼に纏まるのは無産階級を永遠に分裂せしむるものだからとて、單一大衆結成を標榜して堂々と獨立の陣を張らうとして居る。單一大衆結成と云ふことの理論上の當否は姑く別として、現に左右兩翼の異分子を包含する日勞黨としては、さうした特殊の構成にも拘らず渾然たる一體を成せるの實蹟を先づ以て自ら天下に示さずしては、その單一結成主義にも何となく影が薄い樣な感がする。若し道路傳ふる所の如く、黨內に左右兩翼の見解の相違あり或は右翼結成を可とし或は左翼結成を可とし、而して論爭激越を極むることの不祥なる結果を慮り暫く現狀持續と云ふに妥協點を求めて遂に單一結成論を標置したのだとすれば、事實に於て日勞黨は既に單一結成主義を棄てたものと謂はなければなるまい。この點に於て日農黨の方は、負け惜しみを云はない丈け、局外の我々に取ては狀況鮮明頗る分りがよくて氣持はいゝ。

六、して見ると、日勞黨と日農黨との將來は合同機運の進展に大關係あるものと觀なければならぬ。日勞黨の一部と社會民衆黨の一部との接近よりして直に右翼大結成を期待したり又日勞黨の單一結成主義の宣明によりて早くも右翼合同の頓挫を說くが如きは極めて皮相の見だ。外部の動きの何であれ、合同の機運の左右兩翼に於て大に欝勃たるものあるは具眼者の看過し得ざる所である。只問題はこの當然の要求が合同の機運に對する實際的障碍を如何に克服するかに在る。然らばその實際的障碍とは何か。次に項を改めて說かう。

四

合同問題に對する實際的障碍の第一は指導精神の明確ならざることである。指導精神明ならざれば何が味方で何が敵か分らないことになる。一身の去就を全然感情に託することから無產階級を救ひ出すには、何よりも先づこの指導精神を明にすることが必要であらう。

左右兩翼といふ。一體左翼とは何か又右翼とは何か。所謂左翼は社會民主々義を排擊すると云ひ又所謂右翼は共產主義を排斥すると云ふ。謂ふ所の社會民主々義と共產主義とは一體何の標準に依て分けるのか。私はよく某々は共產派だと云ふことを聞かされるが、未だ何故に共產派なりやを說明して貰つたとはない。社會民衆黨に籍を置く某々君の社會民主々義者と呼ばるるを別に怪みもせぬが、彼れの奉ずる主義が何故に無產大衆黨の某々君と殊別せられねばならぬかを疑つたことも屢々ある。我々の眞に敵とせねばならぬものは何か我々は如何なる人達と安じて協動することが出來るのかをはツきりと突きとめたらモ少し廣く提携協力の範圍を開拓し得るやうに思ふ。之に付ては私に一つの見解があるが別の機會に說くことにしよう。

合同問題に對する實際的障碍の第二は黨派的因循である。折角集つたものを解體するに忍びずとなし理義の要求に面を背けて一時の偷安を貪ることである。日勞黨と日農黨とが丁度之れだと云つたらお叱りを蒙るかも知れぬが、私は無產階級の政治的進展の大局の上に非常な妨碍を與ふるものと信ずるが故に、斯く思ふ所を率直にいふの外はない。無產政黨が本來全國的に單一結成を爲すべきものとすれば日勞黨の如きはその正當なる小模型であつたに相違ない。そしてその各種の異分子を集めた特殊の構成を提げて一黨としての統一ある行動を爲すに見事な成功を示しでもしたなら、如何に單一主義者を喜ばしたであらう。それはどうでもいゝとして、今や無產政黨の運命に關する理論上並に實際上の決論が單一結成主義を容れぬことになつた

以上、日勞黨の如きは到底永くその存在を續け得るものではあるまい。それを折角集つたのだからとて無理に解體を回避して一時の彌縫に腐心するは、大勢に逆行する無用の努力の外の何ものでもないと考へる。無産階級運動の大局より打算し小黨派的偏執をすててその當然の途を勇敢に進まんことは私の切に希望する所である。

以上の二大障碍の外更に細かいものを擧ぐればまだ澤山ある。就中兩翼の中心勢力たるべき社會民衆黨及無産大衆黨に構成上多少の不純分子を交ふる如きは、速に清算されねばならぬのであらう。之れ事柄の小さい割に案外大きな効果を有つても居る樣である。切に幹部諸氏の猛省を煩したい。

小寺謙吉氏の聲明書を讀む

九月下旬小寺謙吉氏より「除名に對する聲明書附床次顧問脱黨の眞相」と題する小冊子の寄贈に接した。謝辭に代へて讀後の印象を飾る所なく書いて見る。

二十頁足らずの小冊子だが、大部分の紙數は附錄の「床次顧問脱黨の眞相」で占められて居る。完全に床次擁護を以て終始して居るのが若干不快の因となつたが、その又脱黨の理由を主として後任總裁問題に歸して居るのは、本當に床次氏の眞意を傳ふるものか否かを疑ひたくなる。小寺氏は曰ふ、故加藤伯意中の後繼總裁は床次氏であつた、最近の民政黨は安達・江木・町田一派の跋扈に左右され、爲に床次氏の存在は全く無視されて行く／＼濱口氏の後釜には幣原氏が擁立されんとするの形勢となつたと。若しこれが床次氏の脱黨の眞因だとすれば、床次と云ふ人は益々以て下らぬ男になり下つてしまふ。小寺氏と床次氏とどう云ふ關係に在るのかは私の知る所でないが、小寺氏の辯明が却て著しく床次氏の德を傷くるに役立つのみなることは、私の甚だ遺憾とする所である。

僅々二三頁に書き縮められた小寺氏自身の除名聲明書の方には、却て二三の重要問題が暗示されて居る。『既成政黨の打破、現在政界の革新、徹底的國策樹立等の吃緊的諸問題に向つて勇往邁進せむことを期す』る氏に依て、差當り次の三點について示教を得ば、獨り私のみの幸福ではない。

一、何故に外交問題を政爭の具に供して悪いか。尤も政爭の具に供すると云ふ意味を、事柄自身の是非善惡に拘らず政府倒壞の目的の爲に漫然と反對すると云ふに解するのなら、政爭の具に供すべからざるは獨り外交問題のみに限るのではない、反對の爲の反對は内政外交兩面を通じて忠良なる國民の最も厭ふ所である。之に反して若し、是を是とし非を非とする立場から自ら信ずる所に據つて反對の意見と鬪ふと云ふのなら、是れ正に政治家當然の奉公の使命ではあるまいか。外交問題なるの故を以て、所信を封じて政府の誤つた方策を支持せねばならぬ理窟は何處にもない。現に小寺氏も『退嬰萎縮徒らに消極主義を標榜せる幣原對支外交をば絶對に排斥する』と宣言して居るではないか。その好む所に偏して或時は外交を政爭の具に供すべからずと云ひ或時は絶對に之を排斥すべしと云ふ。小寺氏の眞意が何處に在るのか、私共の常識は頓と之を解するに苦むのである。尤も積極的外交方針は擧國一致之を支持せよとは、侵略的帝國主義の旺盛を極めた時代に、短見輕燥なる政治家から熱心に主張されたことはある。反對の意見を少しでも封じ込めようと焦る當局者が窮餘之を利用することあるを外にして、今頃斯んな愚論を説き廻る者は極東のわが日本に於ても疾うの昔になくなつた筈だと思ふが如何。

二、黨員の醜行に關する責任者の制裁の問題に付ては、今少し立ち入つた説明を承りたいものだ。黨員に醜行ある場合、殊にそれが刑事問題となつた場合、黨として其本人に相當の制裁を加ふべきは申す迄もない。こゝに責任者といふのは當該本人以外の第三者を指すのであらう。尤も黨員の醜行に付ては必ず黨内の第三者が責任を負はねばならぬと云ふ理窟はないから、玆で問題となるのは、當該本人の醜行が直接又は間接に黨の事務に關係を有する場合に限るとすべきである。さすればこの所謂第三者は概して有力なる幹部たるを常とすることになる。即ちこの際幹部のどれだけの人が如何なる種類の制裁を蒙るべきやが問題となるのである。

議員が運動に依て或利權を或人に得さしたとする。その利權の分配に依て儲けた金の一部を政黨に寄附すれば、彼れは即ち該政黨の重視する所となる。黨に寄與する方法は必しも金を寄附することとは限らない、之を他人に與へて政界にそれ〳〵の地位を作らしめてもいゝ、すると彼れには若干の子分が出來て、イザと云ふ時黨の爲に大に役に立つからである。今度捕つた中島守利・三木武吉など云ふ人が政界に重きを爲したのは、主としては之が爲だと云ふ者がある。まだ捕まりはせぬか、同

じ頃の黨界勢力家として前田法制局長官、宮田警視總監、鳩山內閣書記官長などの名を擧ぐるものもあるが、之は恐らく誣妄の言であらう。併し孰れにしても斯種惡事醜行の明白なりとせられた者が黨界に於て重きを爲し、少くともその罪蹟の寛過せられしの事實は掩ふことは出來ぬ。故に今日東京市會の疑獄に關連して多年市民の惜んでおかざりし醜惡が暴露せられた以上、道德的責任の更に遡つて此等の醜類を利用せし黨界幹部の誰彼にまで及ぶのは已むを得ないのである。

更に一歩を進めて私は政策的に斯んな事を考へて居る。市會議員等をして將來斷じて同じ過誤を繰り返さざらしめん爲にも、この際黨界幹部の責任を糺すは吃緊の必要であると。黨界の有力者が斯種の小才を喜んで利用する限り、あゝした醜狀は到底熄むものでない。小供の惡戲をとめるには親爺を抑へるに限る。その親爺が圖々しく恥を知らないのだから困るのだ。先きに清浦內閣の藏相として驚くべき政治的罪惡を犯した勝田主計氏が譯もなく文部大臣の榮位を與へられる當世だ。到底政黨の自制に恃むべからずとせば、所謂責任の糺彈は自ら別途に工夫されねばならぬのである。既成政黨を打破して政界の革新を達成せんと奮起せる小寺氏に、這個の重要問題に關し如何の秘策妙計ありやを伺ひたい。

三、「近時我が政黨は政策本位を主とせずして政權本位に堕せるの傾向ある」を慨し、小寺氏が寧ろ民政黨の除名處分を潔とせざるはいゝ。併し今後の政治運動を如何にして政策本位の常道に復歸せしむるか。その詳細な具體案が伴はなければ、折角の立言も書生机上の空論と同視さるゝの懸念があらう。

私の考では、政黨は元來政策本位であると同時にまた政權本位であるべきものと思ふ。政策本位たるべしと云ふに概して異論はない樣だが、政權本位と云ふと如何にも政黨が邪道に踏み込んだかに考ふるのは大なる誤りである。政黨を厄介視した昔の藩閥官僚は好んで斯んな事を言つたものだが、時勢の變つた今日仍ほ政權爭奪を惡事の樣に考へるのはをかしい。政黨は元來その經綸を天下に行はんための團結ではないか。政權獲得に遲疑氣兼ねするが如き政黨は、速力の遲い東京の電車の樣なもので、第三者を齒痒がらせること夥しい。政友會の不評判と相並んで、最近民政黨の意氣の揚らざるに國民の憤慨するもこの爲ではないか。鬪志滿々政權爭奪にも十二分の活躍狂奔を示さんことは、私共の普ねく各政黨に望む所である。

と云つて私は小寺氏の立言に反對せんとするのではない。同氏の肚裡を忖度しその言ひ足らぬ所を補足するまでである。同

氏は近時の政黨が政策本位を主とせずして政權本位に傾せるを警めた。必ずしも政黨を以て前者にのみ立脚すべく斷じて後者に據るべからずと說くのではあるまい。後者にのみ主力を注いで前者を疎かにするのが惡いと云ふのなら固より全然私も同感だ。たゞ之には由て來る所がある。從て如何にして政黨を本來當然の常規の上に引き戾すかは決して單純なる問題でない。自ら永く黨弊の裡に生活し遂にその積惡に忍び得ずして局外より其刷新を呼號するに至れる小寺氏に、特に私はこの問題に關する具體案を聞いて見たいと思ふのである。

元來政黨は、政策本位に立脚することが其儘直に政權本位に據る所以である場合に、始めてその當然の規道を樂に步み得るものである。立派な政策を掲げて之を實行するの誠意を示せば、國民多數の同情は投票となりて自派の議員を增すの結果を來し之に由てやがて政權も取れると云ふのなら、早く政權に有り付かんとして、何れの政黨も一生懸命立派な政策を攻究按出するに努力するであらうし、立派な政策の宣明に依て國民の同情を得れば、いやでも應でも政權は自派に歸することにならう。だからこの二つの方針は本來決して相矛盾衝突すべきものではないのである。所が事實之が必ずしも右述ぶる如き結構な形にのみは現はれないので困る。

禍の源は、第一にどんな立派な政策を掲げても國民が必ず之を支持すると限らないと云ふ點にある。尤も從來の政黨は義理にも碌な政策を見せてゐないと云へば夫れ迄だ、見せたとて國民に十分之を判斷する能力がないではないかと云はれても仕方がない。併し昨今は新聞などもなか〳〵見事な發達を見せて、輿論代表の同時に又輿論指導の機關としての任務を立派につくして居る。少くとも之等有力なる言論機關の批判がモ少し實際政界に影響を與へても然るべきだと思ふが、まだ〳〵私共の期待する所までは行つてない。併し之に付ては獨り人民大衆の曚昧無頓着をのみ責めるのは無理だ。眞の最大の責任者は陰に陽に民智の開發を阻止した過去の先輩政客にあると考へる。いづれにしても今日の我國の政界に於ては、兎に角いゝ事をしただけでは天下は取れないと云ふことになつて居る。乃ち政權の獲得の爲には自らまた別種の活動によらざるべからざる所以である。

善を遂げても善の報ひの來ると限らぬ世の中に在て、唯々善を勸めと云つたのでは何にもならぬ。今日政黨に向つて政權本位を離れよと云ふは結果に於て自殺を勸むるにひとしい。政黨は專ら政權の獲得を生命とするものだからである。たゞ之に狂奔熱中する餘り、政策の如何を疎略に取扱はれては困る。而し

て本來相併行すべき二つの方針が現に我國の政界に於て矛盾衝突の醜狀を呈するのは、其責寧ろ多くは政黨以外に在る。故に私共は眞に政界革新の實を擧げんとせば、一方には黨界の醜狀を赤裸々に暴露して間接に國民大衆の眼を開くと共に、他方には政黨をして自ら斯くならざるを得ざらしむる處にの根源鋭きメスを加へなくてはならぬと考へて居る。

之等の點に付て多年政界の濁流に悩まれし小寺氏より詳細の改革案を承るを得ば幸甚である。

小題小言

選擧費用と無產黨候補者

東京朝日新聞に「卓を圍んで」と云ふ續きものが載つてゐる。朝野の名士なるものが一夕の雜談に駄辯を弄する會合の速記であるらしい。十月初旬の記事の中に三土藏相の選擧費用の推算が出てゐた、一選擧に總計八千萬圓はかゝると云ふのだ。一人で三十萬圓以上使つた者も尠からず平均すると一人當り八萬圓だらうと云ふ說明に對し、他に當落を一緒にすれば平均一萬圓、當選者だけを取れば三萬圓位の所でないかと云ふ意見もあつたが、三土藏相はどんなに少く見ても平均六萬圓は下らないと斷言して居る。大藏大臣の言だから斯う云ふ方面にも間違なからうと信じていゝかどうか分らないが、兎に角斯人から斯事を聞いたと云ふことは、後日の爲に記憶して置いていゝと思ふ。但し無產黨候補者に關して彼れが「……金がないと思つたがなか／＼持つてゐる、金を持つてゐるかゐないかは選擧の情勢を見たら直ぐわかる、演說のやり方有志の走り回る工合を見たら直ぐわかる」と放言したのは、如何に大山郁夫君にひどく窘められたからとは云へ、餘りにも事實を無視した僻見である。但し私共は彼れの言葉に依て次の二つの事を學び得たことを喜ぶ。一は今日の無產政黨の內情は全然既成政黨の幹部には分つてゐないと云ふこと、他は無產黨候補の活躍振りに依て選擧費用の巨額なるべきを斷定する所より推して、既成政黨の選擧運動が如何にだらしなく高價に行はれてゐるかを想像し得たこと是れ。

利害の認識よりも奉仕の徹底

どんな急用があらうと成る丈けは電車にも乘らないと云ふＡ君が、威勢よく、圓タクでやつて來た。悠然と構へて別に差迫つた用事もない樣なので一體どうしたのかと訊ねると、組合の用で何處其處へ往つた歸り、無沙汰の見舞に一寸寄つて見たのだ

と云ふ。A君はこの夏友人のB君C君を語らつて組合を作り新しい商賣を始めたのである。

自分ひとりの仕事なら電車賃をも儉約しようと云ふ程の締り屋が、他人と共同の仕事となると、知らず識らず不要の浪費を惜まなくなる。これも多勢で責任を分擔するのなら格別、相手がたつた二人きりだとすれば例へば三圓の自働車代もその三分の一は現に自分の負擔となるのに、一向之を意に留めず却て役得の樣にでも心得て居るらしいのが不思議で堪らない。併し考へて見れば斯んな例は世間にザラに在る。

二人三人の連帶に在てすら利害の打算の昏迷すること斯の如しとせば、數千數百の多勢となつては、利害の說得が公共財物愛護の奬勵に何の役にも立たぬは怪むに足らない。怪しからぬ人物を議員に擧ぐるは詰りは銘々の懷を傷めることに終るのだと敎へても、更に政界廓淸の實効を見る能はさるはこの爲めである。國民一般が眞面目にならなければ政治家の專恣横暴の熄む時はない。その結果我々は物質的にも不當の損害を負はされることになるのだが、たツた二人三人と連帶する場合ですら利害の打算が頓と薄弱になる市民を捉へて、數千數萬の人々と分擔すべき損害に銳敏になれと勸めるは、所謂木に據て魚を求むるの類ではあるまいか。

故に私は思ふ、假に社會連帶の論理を說き損害分擔の打算を明にすることは、必ずしも市民の公人的覺醒を促す捷徑ではないと。

獨り我國に限ることではないが、前記の如き場合に多少でも成功の跡を示して居る處ありとすれば、その秘訣の少くとも最も重なるものは「奉仕」の觀念の普及である。私は近頃殊に我國に於て、公民教育が先づ「奉仕」の意義を徹底せしむることから始めらるべきを切實に痛感して居る。

泥仕合

泥仕合と云ふものは政治界特有の現象だと思つてゐたのに、それが學界にまで侵入して來そうなのに昨今私共は大に周章狼狽させられて居る。

他の惡聲を高調することは如何なる場合に於ても我の立場を建設する所以ではない。隣りの惡口をいへばお客が必ず我が店に集ると思ふのは下司の錯覺だ。それにも拘らず、他を罵倒することに由て辛うじて我の存在を天下に示さんと心掛くる者の案外に多いのは痛歎の至りである。

尤も一旦險要の地位を占めたが最後凡ゆる機會を利用して斷じて敵の奪還を許さぬと云ふ政界に在ては、反對の爲の反對

手段を擇ぶの遑なきは已むを得ない。無論寛過し得べきことではないが、政界に泥仕合の屢々闘はるるは先づ仕方がないと諦める餘地もある。之を眞似てか、無産運動の部内に於て相手方の讒誣中傷を大衆獲得の戰法と心得てゐる者の多い事にも、之れまで隨分いやな思をさせられた。喧嘩する當人は一生懸命かも知れないが、局外から觀てこれ程醜い爭はない。

先き頃日本評論社と改造社とが經濟學全集の販賣を競うて危うく泥仕合の激戰を見んとしたのは學界の不祥事たるを失はない。兩社にはそれ〲辯解の理窟はあらうが、單なる外形より觀ただけでも、あゝした紛爭は學問とは頗る不似合の現象である。況んやこの紛爭の渦中に社會に信望ある學者までを捉し來るに於てをや。

併し兩社が早く此事に氣付いてか忽ち其鋒先を斂めたのは喜ばしい。私共は無用の宣傳に浮身をやつすことは宜い加減に切りあげて、内容的に眞にいゝものを出されんことを望まざるを得ぬ。

政黨評判記

明治廿三年の暮に出版された「政黨評判記」と云ふ小冊子を見た。丁度第一期帝國議會開會の直前に書かれたものだ。著者は利光鶴松氏、今は實業界に隱れてゐるが一時は星亨の幕下として一種の盛名を恣にした人である。併し今玆處で私は利光氏の事や又此小冊子の事を詳に紹介する意圖ではない。その中に今も昔も變らぬ政界陰微の運動方法が書いてあるのを面白いと思つたから、唯それだけを語らうと思ふのである。

利光氏は、當時の政界が公私の別を辨へず單に黨籍を異にするの故を以て罵詈讒謗を逞うするの弊を論じ、而して其の重なる原因を政界先輩の煽揚に歸して居る。曰く「私交ヲ紊ラシムルハ先輩自身ニ取リテ黨運ノ隆盛ニ於テ甚ダ利益ナルコトアリ。無智ノ徒ハ今日ノ甲黨員ニシテ明日ノ乙黨員トナルコトアリ、浮萍變轉確立スルコト能ハサルヲ以テ、之カ確立ヲ計ルニハ、私交ヲ紊ラシメ天地ヲ制限セシムルノ良策ナレハナリ」と。政黨の宣傳より民衆の良心を解放するは依然として今日にも必要である。私が最近の無産政黨の大衆獲得の戰術に不滿なるも畢竟之が爲に外ならぬ。

ついでにモ一つ「政黨評判記」の文字を引かう。之は私の言葉に直して書く。先達て山梨縣下に於て、數十名の有志家が、我々早晩志を得ば相當の官位を授けようとの契約證を入れて金を借りたと云ふ噂を耳にしたが、マサカそんな馬鹿な事もあるまいと一笑に附して居たのに、段々聞くと其の單なる風說に非

るを確め、且更に斯の如きの寧ろ黨界一般の常態たることを明にしてびツくりしたと云ふのである。黨界の小才子が其地位を利用して私を圖ることも、亦今日に始まつたものではないらしい。事前に於ける官位授與の豫約と、職權の濫用に依る現實の利權の授受と、品は變れど心事の陋劣に至ては彼此全くその揆を一にして居る。

そしてわざ〳〵一書を著して此事を天下に警告した利光氏彼自身が、其の後の經歴に於て同じ樣な非難から全く脫し得なかつたことは、私をしてまたいろ〳〵の事を考へしめたのであつた。

無産階級運動に於ける左右兩翼の對立

彼と我と根本的に立場が違ふなどと云つて居る者が、鼻を突き合はして談合して見ると、案外相互の見解に多分の共通點を見出す場合が多い。私は近頃無産階級運動に於ける左右兩翼の對立に就ても、もう一歩を進めて虛心に話し合つて見たら、或は意外の結果を見るのではあるまいかと考へられてならない。

尤も無産階級運動に於ける現實主義と絕對主義との思想上の對立は到底免れない運命だらう。併し最後の目標を百里の遠きに置いても一擧に之に達するを不可能と觀て、一旦現實の許す範圍に步を進むることを以て滿足しようと云ふのなら、實際は動の方策に於て兩派の間に全然妥協の出來ぬこともあるまい。たゞ現實主義には若干の步を進むるに安んじて拂ふべき努力を吝むの弊なきに非ず、甚しきは巧に相手方の欺瞞する所となりて遂に最後の目標に到らんとするの決意を鈍らすこともないでない。その反對に絕對主義にはまた、最後の目標に達するの現實的不能は革命的手段に依て之を突破するに難からずと爲し、五十里を以て安んずべしとする者こそ却て我々の闘志を鈍らす獅子身中の蟲なれとて、當の敵よりも先づ味方の陣營内に於ける現實派を戰の門出の血祭に上げんと焦るものがある。所謂共產主義者の社會民主々義に對する關係は是れだ。例へば我國でも、大山郁夫君が三井三菱乃至淺野安田以上に鈴木文治君を憎むと云ふ樣なことがあつては、この對立する二派に何等かの形の調和提携をもたらす見込はない。

右の點を外にして、跡に無産階級運動を分裂せしめねばならぬ何ものが殘るか。或は曰ふ、俺は今まで左翼を標榜して來た、今更右翼と一緒にはなれぬと。又或は曰ふ、左翼の排斥すべき所以を說いて大衆を結束して來た面目上、今更無條件で之と提携するわけに行くまいぢやないかと。左右兩翼の對立は論理上必至の勢であることは私も認めるが、今日の所謂左翼右翼

は抑も何に依て分れてゐるのか。無我無中でその所屬をきめて居るものの尠からざるは今日左翼に屬せるものが一旦の事に激して明日籍を右翼に轉ずるの事實に觀ても明ではないか。少くとも今日の無產階級運動は餘りに左右兩翼の名義に囚はれて居るの嫌はないか。

私は今日一部の人の說くが如く資本主義の結束的攻擊が峻烈を極めて居るとは思はない、少くとも日本のブルジョア階級は西洋諸國のそれに比して其勢は未だ至て劣弱である。且又日本の資本主義は世界に跨るそれの一環として其有力なる支持を受けて居ると云ふ說にも一應の理屈は認めるが、我國の現狀の說明としては文字通りに之を受取るを躊躇したい。だからと云つて私は無產階級の結束を急務でないと主張せんとするのではない。寧ろその急務なるを痛感するからこそ、架空に近い理論を以て民衆一時の昂奮を誘致するの愚と危險とを明にして置きたいと思ふのである。別に理窟を並べるまでもなく、無產階級運動の正しき結束をはかるは正に今日の急務なのだ。之が思ふ通りに運ばないので我々が——從てまた日本の一般社會がどれ丈け損害を蒙つて居るか分らない。這の大局に着眼して私は無產運動に從事する人達に篤とも一度考直して貰ひたいと思ふのである。

加之機運は相當に熟して居る。この夏以來諸政黨の間に合同問題の論議が頻々と起つたのも、形は左翼結成とか右翼合同とかの偏頗な顯はれを示して居るけれども、畢竟此上四分五裂を許さざる機運の促す所に外ならない。從來の行掛りをすて、大局の見地から、この新しい機運を適當に開展して吳れる達識の士は居ないか。

それにしても必要なるは、無產運動の事に當る人達が、右や左の名義に拘らず、モ一度出發點に還つて銘々の立脚地を考直すことである。

御わび

前號本欄六六頁上段初行に左記の表題を脫した。疎漏の點深く讀者の寬恕を乞ふ。

「對支政策の國民的不滿」

海外近事

ムッソリニと伊國皇帝との確執

一

イタリーの獨裁政治が、その專制の羽をのすに止まるところなく、ついに皇位繼承、皇帝の權力、上下兩院の構成及び職能等にも干渉することになつたといふので、世界は今更その徹底振りに驚いてゐるやうである。

殊に日本においてムッソリニの持て方は法外のものであつた。マルクスやエンゲルスやレニンの著作集が、日本のやうに賣れたことは他に類例がないであらうやうに、ムッソリニに關する著書が、幾種類も出て、これが十數萬部を賣盡したといふ例は、恐らくは他國において見るを得ない現象であらう。いづれは武士道といふ直接行動の教へで訓練されて來た國民だけに、左右兩翼何れともあれ、暴力主義で行くものに人氣があるのを知ることが出來やう。

併しそのムッソリニも日本に關する限り終焉の時期が來た。かれの獨裁力が「皇位繼承、皇帝の權力」に手がかゝり、エマニユエル三世を帝位から動かすことをすら企劃して居ると傳へらるゝに及んで、日本ではもうこれ以上、ムッソリニを擁ぎまはるものはあるまい。今までムッソリニでなければ、日も夜も明けなかつた人達が、どんな顔をしてゐるか、お伺ひしたいものである。

ところでこの獨裁政治の内容だが、今回の擧——ファシスト黨最高評議會がイタリーの最高獨裁の機關となつた事——は、これを歴史的に見れば、ファッシズムの當然の進化といつてもいゝと思ふ。ファッシストは始めまづ民衆と闘ひ、勞働組合と闘ひ、議會と闘ひ、法王と闘ひ、これ等を悉く征服し得て、最後にその闘爭の鋭鋒をイタリー皇室に向けて來たといふべきである。エマニユエル三世陛下は、下院を解散されて後、退位さるゝ意志あるやうに傳へられて居るが、かうなればファシストとイタリー皇室との對立である。ムッソリニとしては如何なる場合でも『第二位』を以て滿足しては居るまい。

二

かうした事情を説く前に、われ等はムッソリニが今何絶對獨裁權を有してゐる事實を明らかにしてをかう。即ち表面では「ファッシスト最高評議會」などといつてゐるけれども、實際を割つて見れば、これはムッソリニ一人に歸するといふことなのである。

今年の七月半ばイタリー内閣には二人の閣員の交迭があつた。一人は大藏大臣のヴォルピ伯で、他は教育大臣のフェデレ氏である。二人の辭職説は以前から一部に傳へられてはゐたが、閣員の更迭の如きは普通の内閣なら容易の業ではないのみならず、ヴォルピ藏相は、リラを安定した財界の功勞者として政治界、實業界に重きをなしてゐた。然るにムッソリニはこれ等の更迭について何人にも相談せずに、極めて易々として決行してしまつた。そしてその更迭の最も重大な原因は藏相は、財政々策の成功者として、勢力を持ち始めたからであり、また文相は嘗て自由國民黨員として、ムッソリニと意見をやゝ異にしてゐるからである。即ちムッソリニが、他の省に自由に干渉し得ざるに至るか、それとも

意見を異にすることが明瞭になれば、かれは直ちにその當事者の更迭を斷行するのだ。

これと同じ頃、次官の更迭も行はれた。遞信次官にリカルヂといふ二十九歳の青年が任命されたが、かれは當時旅行中で、旅先きで友人から長距離電話を以て祝賀の言葉を受けた。かれはそれが冗談だらうと思つて始めは信じなかつたが、その後電報で早速新任するやうに命ぜられ、始めてこれを信じ得た次第であつた。

また土木省（パブリック・ウオークス）の次官も新任したが、當人のヂクロランザは故郷で事業を營んでゐる。然るに突然ローマに來て新任しろといふ電報が來た。かれは自己一身の理由を以てこれを斷るわけにゆかぬのである。

同じ事が新しく教育大臣に就任したベルゾにもある。かれは今まで經濟大臣であつたがこの公務を帶びて大會社を視察中、ムツソリニから轉任命令が來た。かれは講演視察その他の約束が殘つてゐるにも拘はらず、匆々としてローマに引きあげた。

以上の例證でもムツソリニの獨裁振りの一端が分るであらう。イタリーの內閣閣員は首相を除いて十三ある。その內ムツソリニ自身が六つまでを兼任して居る。その上立派な大臣がある各省さへも自由に引き廻してゐるのだから、かれは驅引きなく「總理大臣兼各省大臣」といつていゝのである。

三

ムツソリニが新選擧法を制定して、全く議會の機能を奪つてしまつたことは、曾てこの欄で紹介した通りである。併しムツソリニには始めから議會などは眼中になかつた。

元來、イタリーの議會は政府に對して監督者の地位にあり、內閣の起倒をその掌中に握つてゐたのだが、ムツソリニ執政になつて何回にも亘つて議會の權能か縮少された結果、最早政變が議會から起るやうなことは絶對になくなつた。又これを儀禮の方面から見ても從來下院議長の宮中席次は、總理大臣の上席と定まつてゐたのだが、確か昨年、議會はムツソリニ首相に遠慮して、總理大臣を以て宮中席次の首位とするに至つた。

ムツソリニの新選擧法は本年三月十六日に下院を通過した。反對投票は僅かに二票しかなかつた。それが五月十二日に上院に廻附された。ムツソリニの威勢に恐れて居る時ではあるけれども、上院には多少の反對があるのを免がれなかつた。議案は二百〇七票に對し四十六票の反對があつた。そればかりではない。ムツソリニが出席を勸めたに拘はらず、百名の上院議員は議會に出席しなかつた。

この議案について今はフランスに亡命してゐる前首相のニツチは猛烈なファッシズム攻擊を發表した。それには一部にこんな議論がある――

「過去六ケ年の間、イタリーの憲法は每日、武裝せる少數者……一九二二年暴力を以て政府をとつたところの……のために破壞され、暴行されて來た。併しながら今や憲法は公然破棄されてしまつた。今までは表面だけにしても下院と上院があつた。新法は下院を無くした、否、單に無くしたばかりでなくて、これを惡化して、イタリー國民によつて選ばれるのでなくて、ファッシスト黨により指名されるに至つた」

反對黨（公然存在はしないが）の間には、この法律が有效になつた日から、イタリー議會が制定し、かつ政府が實行した如何なる問題も承認することを拒絶するだらうとの説がある。何故ならこの法律は明らかに憲法違反

だからといふのである。

併し反對者が何といはふとも、ムツソリニはそんなことに屁古垂れはしない。殊にムツソリニも少し煙つたかつたところのギリオツチ(首相に五回なつた政治家)は、先頃八十六歳の高齢で死んだ。この人は他の同僚が殆んど亡命し、或は隱退した間にあつて、最後まで議會にあり、新選擧法に對しては流石に反對して、その雄辯を揮つたのであつた。この政治家が逝つて最早微温的にすら、アツシストに反對する者がなくなつた。

四

ムツソリニは始めは羅馬法王には出來るだけ好意を寄せて來た。羅馬法王十一世は社會の下層からはひあがつて、宗教上の謂はゞ帝王になつた人で、學者であり、歷史家であり世界の尊敬を集めてゐる人である。ムツソリニが始めはこの人格に、尊敬を拂つたのは無論であるが、併しそれよりも何しろラテン系の國民として、ローマ法王の勢力が絶大の勢力を占めてゐるイタリー國民を治める上に、カソリツクを利用することの賢なるを考へたのが重要な理由である。

かうした考へから從來イタリーの國家主權と法王廳との間に何十年も結んで解けなかつた一定の獨立地帶に對する法王の主權を認める問題も、ムツソリニは好意ある態度を持して、これが解決をすら傳へられたのであつた。

併しムツソリニは如何なる場合でも、フアツシズム及び國家の機關になるものでなければ許容しない。法王との關係は今年の始め、イタリーの小學校に強制的な宗教教育を施すことに關する問題から、意見が分れて反目するに至つた。ムツソリニにしてみれば、宗教は國家——即ちフアツシストの政治を助けてのみ存在の意義あるものである。即ち宗教は國家の道具であつて、國家が法王からその方針について干渉さるべきものではなく、また國家以外に獨立して存在するものでもないと考へてゐる。

このムツソリニと法王との確執を露骨に現はしたのは、かれがカソリツク教のボーイスカウトを解散した事件である。かれは今年の春お手のものゝ命令を出だして、

「少年に對して藝術、精神的乃至は體力的訓練を施す團體にして、ナショナル、バリラ(フアツシストの少年訓練團體)に屬せざるものは、一切これを禁止す。地方においてはこの法律は發布一ケ月後に有效となる」

と發表した。

イタリーにおいては國家が直接關係せざるカソリツクの團體は、將來一切禁止される筈である。法王もムツソリニとの確執においては手痛い敗北を蒙つたのである。

五

かうして接觸する總べてのものを征服し盡して、最後に鬪爭の對照となつたものは、イタリー皇帝エマニユエル三世なのである。

そも〳〵イタリーの憲法は、一八四八年のそれからに基礎をいたもので、國家の執行權は完全に皇帝にあり、皇帝は責任内閣を通じてその行政權を行ふのである。そして皇帝はその皇位を襲ぐに當つて、憲法を保持することを誓つたのに顧みて、憲法が破壞されざるため防禦すべき役目は、重に皇帝自身が負はねばならぬものである。

イタリー皇帝は、從來かうした憲法上の解釋の上から、またムツソリニと個人上の關係

から、ファッシスト内閣に對して決して友如として居らなかつた。從來も退位して、ファッシストに同情を有するアオスタ大公（皇帝の從兄）に位を讓るであらうとの說もあつたほどである。

この事が最も明瞭になつたのは先頃の新選擧法案通過の際に前首相ギリオッチが、この法案に反對してなした時の演說である。かれは新法が憲法違反なる旨を繰り返し「新法はファッシズムのために、憲法によつて位にある現帝政より明らかに離れ去らしめられたことを示するものである」と述べた。從來ギリオッチその他の元老政治家連は、皇帝に忠言して、もし皇帝がその位置にあられながら、憲法破壞を防止することもが出來ないならば、寧ろ退位されよといつたといはれる。その當時、イタリーの政界消息通は、ギリオッチの演說は議會の壇上から公然皇帝の退位を勸告したものだと解釋してゐる。

ムッソリニとしても憲法上、國家の執行權を有する皇帝が、自分に好意を持たないとあつては、獨裁政治上に畫龍點睛を欠くものである。從つて何かの形式でこれをどうかしたいのは容易に想像し得ることである。これが今回ファスシストの最高評議會で「憲法に關する諸問題即ち皇位繼承、皇帝の權力」にまで立ち入るべきことを決議した理由であつて、それは一面皇帝に對する挑戰と見ることも出來やう。

然らばエマニユエル三世陛下は今後如何なる態度に出られるであらうか。陛下は國民の間に極めて人望があられる。もしムッソリニと確執の結果退位せらるゝやうなことがあれば、新聞電報にある通りその前に下院を解散して國民の意志を問ふ方法に出られるかも知れない。何故なら議會の解散權は皇帝の手にあるからである。

一方ムッソリニはこれに對し喜んで應戰するであらうし、その後へはファッシスト同情者の新皇帝を押すであらう。こゝに現皇帝が自己の御意志を襲ぐべきものを押さるゝのと衝突するは明らかである。

獨裁專制の行きつく先きは何れぞ。日本の電報はまだこの事に關し詳しく傳へて來ないが、われ等は興味を以てその將來を觀んとする。

文藝時論

正宗白鳥

「坂本龍馬」

幕末の世相と人物とは、新講談的通俗小說、あるひは大衆向きの演劇の題材に適應してゐるらしく、いろ／＼な作家によつて頻繁に取扱はれた。この頃でも、たまに通俗雜誌のところ／＼を開けて見ると、新選組とか近藤勇とかいふ文字が目につくことがある。幕府の末期ばかりでなく、明治の英雄も評傳や演劇の好題目として流行しだしたやうである。

近い過去の事は人の興味を惹き易い上に、維新前後は、精神的にも外形的にも動搖の激しかつた時代だから、どの方面から見ても面白い觀察が下される譯であるが、多くの講談的小說や、劍劇的脚色の取るに足らないのは云ふまでもなく、周到なる史實の研究から出來上つた傳記にも創作にも、私は、も一度剝いだ所を見せて貰ひたいやうに思ふことが多い。德川時代に著はされた德川時代史は諛史であることを免れない。明治初期を描いても、科學者の態度にて、讓歩なき眞實を究めることは困難なのではあるまいか。六ケしい理論は別としても、維新の功勞者と云はれる薩長土肥をはじめその他の諸藩の英雄にしても、果して今傳へられてゐるやうに先見の明があつたのであらうか。私はつねに疑つてゐる。

私は、今度眞山青果氏の史劇「坂本龍馬」を通讀して、あの人心動搖の時代を追想して興味を覺えた。青果氏はある時代を描かんとする時には、それに關係のあるあらゆる文獻を調査し盡すと云はれてゐるが、この新作に於ても、一語一句にも事實の根據をもつてゐるらしく思はれる。事件と人物とに架空の影はあまり差してゐないやうである。私は、この戲曲を

讀んで、まづ活寫されたる幕末史の一片に接した感じがした。新興の意氣を持つた勤王黨の面目をうつして、將來の新日本についていろ／＼な暗示を試みてゐる。私は、年少の頃、福地櫻痴の「幕府衰亡論」を愛讀したのであつたが、あれには、幕府の衰亡し行く事實が分り易くよく書かれてあつた。櫻痴は成島柳北その他の幕臣のやうに、感傷的でなく、舊時代にも新時代にも適應して世を渡る人であつたが、幕府側に立つて衰亡を說いてゐるところがあつた。櫻痴の舊い著書以外に、幕府側の幕末史も、文運隆盛の今日は、頻繁に出てゐるのであらうが、私はまだ讀んでゐない。近藤勇などを講談的英雄に仕上げて活躍させてゐるのは、幕末を卑俗な色彩で色取るやうなものである。私は眞山氏のやうな眼識のある老練な作家が、衰亡し行く團體の方を題材として、時代と人とを生き／＼と描いたら面白いだらうと思つてゐる。

「坂本龍馬」は、この頃讀んだ歷史劇のうちでは、最も印象の鮮かなものであつた。この作者のこれまでの戲曲のうちでも、傑れた一つである。澤田一座によつて異常の人氣を得たといふことであるが、これは舞臺で、觀るよりも書齋で讀んで想像した方がいゝやうである。私は讀みながら、東北人たる作者が、西國の人と土地を書いてゐることを感じた。眞實に即した立場から云ふと、西國の地方色や西國人らしい情調に乏しいと云つていゝ。默阿彌の「島千鳥」の松島千太と明石の島藏とには、大まかながらも、東北人と中國人との面目が現はれてゐる。德富蘆花の「黑潮」に出て來る肥後人や長州人にも、何處となくその出生地の面影が見られる。眞山氏の新作の人物には「土佐つぽ」らしいところや、長州人らしいところが、さう現はれてゐないやうである。言葉に土佐訛や薩長の土語を殆んど用ひなかつたのは、取つて付けたやうに所々に用ひるよりも、却つてサッパリしていゝのであるが、それにしても、臺詞に土の臭ひがない。田舍の靑武士が一知半解の理窟を振舞してゐばれてゐるにしては、臺詞が調ひ過ぎてゐる。中村吉藏氏の「井伊大老」などの幕末物の西國武士の無器用な、締りのない臺詞に、どことなくあの頃の若い下級の武士らしい趣きがあつたやうに思ふ。

しかし、現代の寫實劇とは違つて、過去の時代を題材としたものは、周到な客觀性を具へて現はし得られるものではな

いので「坂本龍馬」くらゐに人と時とを書き現はせたら、史劇として上乘としていゝのである。時代を見る目のある物分りのいゝ才人の苦しみといふやうなものが、全篇を通じて我々の心を惹く

「平將門」「雲右衞門」それから、この「坂本龍馬」について考へながら、私は作者の主觀の動きに心を馳せた。この作者がまだ新進作家と云はれてゐた時分に書いた「第一人者」や「生れざりしならば」をおぼろに記憶から浮べても見た。これ等初期のものは生な理窟を並べたぎごちないものだつたが、その後二十年、近作に於ては作者の精進のあとが目さましく見えるのである。作劇の實際に多年經驗を重ねてゐるほどあつて、間の拔けたところも誤魔化したところもない。描かんとするところは大抵危なげなく描かれてゐる。「坂本龍馬」のうちで、生氣の乏しいのは「茶屋魚しなの奥座敷」など、京都女の顏を出すところであるが、全體眞山氏にしても中村氏にしても、舞臺に女を出すときまづい。山本有三氏もあまりうまくない。そこへ行くと、谷崎氏のものは、實演には適しないのであらうが、谷崎好みの女性といふ範圍を限られてゐるにしても、女らしい肉體と情趣をもつて、鮮明にそこへ現はれてゐる。岸田國士氏のものにも、ある種の女性がよく描かれてゐる。しかし、概して、現代の日本の戲曲の大家は、女性を充分にあつかひこなしてゐないのである。新日本の劇壇にはいつまで經つても、傑れた新しい女優が出て來ないが、傑れた女優をして充分に手腕を發揮さすに足る名脚本はことに乏しいやうである。

それは兎に角、「坂本龍馬」を讀み、その他の青果氏の近作を連想して私の最も强く感じたことは、作者がこれ等の戲曲に於て自己の鬱憤を强烈に洩らしてゐることである。「生れざりせば」にも、やたらに生を呪ふやうな調子があつたやうであつたが、この頃は作劇術の傑れて來たとゝもに、ある人間ある時代を具象的に描きながら、自己の鬱憤を洩らしてゐるやうに見える。こんなことは私の新發見でもなく、「眞山君の脚本の人物は、みんな作者自身だ」といふ批評は、屢々私の耳に觸れてゐるのであるが、その作者型の人物と云ふのが、他の作者の作者型とはちがつて、世人に對し、あるひは生

存に對して、八つ當りの鬱憤を洩らしてゐるところに特色がある。「君等は雙方ともに、封建制度の幽靈を脊負ふてゐるのだ。我藩の面目、彼藩の耻辱、體面、名聲、小さな私情に溺れて、人間全體を忘れてゐるのだ。……切られてもいゝから云ふが、大名もおれも、同じ土の上の蛆蟲だ。その位牌知行の名譽を守つて、わが主他人の主人、その區別を立てて何になる。……みな封建の舊思想に煩ひされて、自分自身を盲目にしてゐるのだ」と云つた、やうな痛快な氣焔を、坂本龍馬は頻繁に吐いてゐるが、西郷大久保木戸の所謂維新の三傑以上に、將來を見透した先見の明のあつた人間のゐたことを、私ははじめて知るとゝもに、作者が坂本龍馬に化して、いゝ氣持で周圍を揶揄し足蹴にしてゐるのを感じた。第二幕の赤間ケ關旅館で、彼れが、何某等の正義派のぼんくらや、桂や中岡を前にして、先見の明を振廻して、彼等を翻弄するところなんかは、舞臺効果も多いだらうが、芝居を二の次にして、戯曲に於ても作者と人生を見ようとしてゐる私は、此處に作者の心の飛躍を見て興味を覺えるのである。新進作家時代の青果氏が、文壇を睥睨して、周圍の甲乙丙丁を雜輩呼はりしてゐたことを私は思出す。

龍馬は周圍の人々を不明な雜輩視していゝ氣になるばかりでなく、「……おれは同志の者にいつもはぐれて行く。……素質があるのぢやないだらうか（涙の溢るゝ目を親友に向けて）武市、おれはそれを思ふと耐らないほど、心が寂しくなるんだ」と云つたり、「僕あこの頃……牢屋へ入りたいと思つてゐます。誰れか僕の手足を縛りつけて、例へ僕の頭が働いても、僕の身體が動き得ないやうに、……固く嚴重に、僕を縛つて置いてくれないかと……切實にそれを望んでゐます」と云つたりしてゐる。かういふ感慨も史實に根據を持つてゐるのであらうが、私の耳には、龍馬の聲としてよりも、作者の聲として一層つよく聞えるのである。……將門にしても雲右衞門にしても、龍馬にしても、それ等が過去の彼等であるとともに、現在の作者の分身であることに、私は戯曲的興味を感じるのである。

中村吉藏氏の歴史劇や現代劇にも、作者の史眼のきらめきがあつたり、「社會主義的見解が横溢してゐたりする。山本有

三氏の戯曲にも人間のある心理が鮮かに取扱はれてゐる。しかし、眞山氏のには、他の作者のよりもつと強く主觀が燃燒してゐる。材料についての客觀的研究も行屆いてゐるのであらうが、さういふ材料のなかへ自己を叩付けてゐる。その意氣は昔、この作家が小說を書いてゐた時分と同樣である。本來戯曲といふものは、純粹に客觀性を具備してゐる文學であるやうに說かれてゐて、シエークスピアが最高のお手本のやうに、私なども思はされてゐたが、しかし、この頃はさうばかりは思はれなくなつた。……眞山氏の如き、昔はその小說に於て、端的に自己の性癖を放散して、讀者をしてをりをりその臭氣に耐えがたく思はせた作家が、戯曲の形を取つて、ことに史上の人物と事件に自己を沒入させたがために、多數の見物が、舞台の作者に魅了されるの觀があるのは面白い。見物は「維新の豪傑、坂本龍馬はあんな男だつたのか」と感歎するのであらうが、實は作者眞山青果の鬱憤晴らしを當てつけられてゐるのに、それに勘付かないでゐるのだと、私はひそかに面白く思つてゐる。それだからこそ、「龍馬も生き〱としてゐるのだ。將門も生々してゐたのだ。史上の人物を何十年前何百年前の史上の人物そつくりに描出したつもりでゐる多くの作家は、大抵生命の乏しい形骸を並べてゐるに過ぎないのだ。

坂本龍馬は兎に角眞山式にピン〱跳ねてゐるのが、私には面白かつた。

眞山君の新作を味讀した後、私は二十年前を回顧した。私や眞山君が新進作家として持囃された時代を思ひ出すと、私はこの年までよく生きて來たと思ふ。また何かしら次ぎから次ぎへとよく書いて來たと思ふ。あの頃の眞山君は、生活の態度に於ても、創作の態度に於ても、奔放不羈であつたが、私は、小さく自己を守つてコツ〱と書くだけであつた。執筆に當つて何の抱負もあつたのではなかつた。たゞ自分の有りつたけの力で、そのをり〱の雜誌の依賴に應じて、長短さま〱なものを書きつゞけたのに過ぎなかつた。十年も二十年も名聲を保持して、日本文壇の一つの椅子に座を占めて

ゐられやうとは豫期してゐなかつた。

私は、學窓に於て坪内博士のシエークスピア劇の講義を聽いて、客觀的態度が文學の極致である所以を教示された時分にも、小杉天外氏が寫實主義を新文學の信條として硯友社風の常套を脱した小說を續けさまに著はすのを見てゐた時分にも、先進者の文學觀として、そのまゝ受入れながらも、自分を全然離れんとする態度が何故に傑れてゐるかゞ分らなかつた。たとへそれが傑れてゐるにしても、自分の心を鏡にして、森羅萬象を映すだけでは、人間として詰らないではないかと思はれてゐた。あの頃でも、高山樗牛などは、文學の主觀性を高唱して、バイロンなどを讃美してゐた。次いで起つた自然主義文學時代には、「自己を離れる」といふことが、作家としての重要な要素のやうに强調せられて、私の作品でも、をり〳〵自己を離れて世相人事を描いてゐるといふ評語によつて推讃されたことがあつた。

しかし、私自身は、自己を脫離して書かうとしたこともなかつたし、書けたものもなかつたと思つてゐる。「自己から遊離した藝術」は、以前から田山花袋氏が唱え、最近志賀直哉氏もその全集の序文に於て唱え、さういふ藝術が藝術の極致らしく、私にも思はれないこともないが、要するにそれも一つの妄念に過ぎないのではあるまいか。少くも私は、自分の書いたものは、今考へると、自己に執したものばかりであつた。瑣末な行動に於て自己を直寫するしないはどちらでもいいことなので、周圍から材料を取り來つても、あるひは史上の人物を拉し來つても、私としては、そこに自己の影を認め、自己の心臟の鼓動を感じてゐるのである。私の作中の人物は、屢々卑小の根性を現はしてゐると評されたが、それなら、私自身がさういふ素質を有つてゐるのである。人間の醜惡を客觀的にうつして、作者は超然としてゐるのではなくつて、そこに描かれてゐるのは、自己自からの影に過ぎないのだ。だから、私は自分の書いたものは、自分と密接な關係を保つてゐるので、空疎なものではないと思つてゐる。

新進作家時代に壓倒的の筆力を有つてゐた眞山君は、文壇の一員としては、運惡く健脚を踏み外して、長い間隱忍の生

涯を過してゐたやうであつたが、その間に、自己の天分を廢滅させることはなかつた。むしろ、得意だつた若い時分に、すさみかけてゐた技能を、艱苦によつて鍛えたやうなものであつた。復活した眞山君の戲曲家としての面目には、昔とちがつた心魂の冴えを現はしてゐるのである。しかし、今日の眞山君も、昔の彼れの如く、自己を直截に現はすのがその本領であつて、維新の時世と人物を取扱ふのも、今日の文壇と文壇人を取扱ふのと同じやうなものなのだ。私は自分の執筆態度に引比べて考へた。そして「自己遊離」なんかは、藝術家の夢のやうに思はれた。

新作家としての用意

前途の豫想は、大抵外れ勝ちなものである。日本の文學藝術の將來だつて、どう變化するか、誰れにも明瞭に分る筈がない。よく自分に都合のいゝやうに、先きのことを極めてかゝつて、前祝ひの酒でも飲みたがる者があるが、さうして空想に醉つてゐる間が、人間の極樂なのである。

有產階級に取つては、國家社會の狀態が現在のまゝであるのが望ましく、無產階級に取つては、現狀打破が望ましく、既成作家は世上の思潮好尙の動かざるを欲し、新進作家はそれ等が急速に變化せんことを渴望することは、火を見るよりも明かで、論ずるまでもないのであるが、さういふ自己生存上の必要の心理に基づく者も、率直に表はされないで、いろ〳〵な形を帶びて現はれるのである。各人各樣の鬪爭の樣は、隨所に見聞されるのである。

私などが文學の批評をするに當つて、いかに冷靜な科學的態度を持してゐるつもりでゐても、自己保存の慾念に佞ねることを免れないのである。また、それだからこそ評論の筆に力も入るのである。すべてを有るがまゝに見て、私心を挿まず、眉一つ動かさないでゐることは、少くも文學の領域に於ては爲遂げられさうでない。

だから、私は、近來頻繁に發表してゐる文學雜感でも、自己の趣味好尙を脫却した、文字通りの無私公平の心境から流れ出てゐるとは强辯しない。蓼喰ふ蟲も好き〴〵の人の心である。私にも理窟なしに好き嫌ひがある。知らず識らず境遇に感化されて、時代の樣式を模倣することもあるし、人が左せんとすれば、我れは右に向はんとし、人が右せんとすれば、左に傾かんとする性癖をも我々は有つてゐる。……そこに千差萬別の面白さがある譯である。

明治以來、硯友社の文學、自然主義の文學、享樂派の文學、人道主義の文學、それ〴〵の特色を有つた文學が相繼いで起つて、ある時期の間文壇で幅を利かせたのであつたが、この頃は、ある系統の文學が主要の地位を占めて世を風靡してゐるやうには思はれない。數年來、社會思潮の動搖につれて、文學の方でも、プロレタリア文學と名付けられた一派が起つて、意氣が盛んであるらしいが、私の見たところでは、藝術としてまだ未熟至極であつて、讀者の心を捉へる力がまだ備はつてゐさうでない彼等が一般の民衆に讀ますために書いてゐるとしたら、隨分の見當違ひであつて、一般の民衆が貧乏くさいプロレタリア文學なんか愛讀する筈がない。大多數の筋肉勞働者は今なほ、淸水次郎長の講談や、神與崎五郎東下りの浪花節に陶醉するのだ。地方の多くの靑年は、鶴見祐輔君の「英雄待望論」などを讀んで感激するのだ。

世人がさういふ者を愛讀する心理は私にも解らないことはない。人間は何等かの形に於て、傑れたる者を崇拜してその前に跪きたがるものである。そして、自分も他を跪かせる力あるものになりたがるのである。傑れたる文章、傑れたる演技、傑れたる事業に於て他を壓せんと志すばかりでなく、衣服の美や邸宅の壯に於ても、他に誇らんとするものなのだ。平等は人間の欲するところではないのだ。

個人の卓越性を强調し、自分を卓越した一人である如き口吻を洩らす武者小路實篤氏のみが卓越慾を有つてゐるのではない。氏は常人よりもいくらか多量にこの慾念を有つてゐると云へる程度であらう。氏の天才辯や英雄振りを嘲笑する連中だつて、これ相應に自己をえらく見せようと努力してゐるのである。小つぽけな同人雜誌の六號雜文を見ても、淺劣な

文字を羅列しながら、自己の卓見をほこりたがつてゐることが見え透くではないか。何かの獨創の見識を吐露して卓越をほこれなければ、せめて時世の流行に阿附して進んだ顔や分つた顔をして、卓越區域の住民の一人となつたつもりでゐるのである。プロレタリア文學の專門雜誌だつて例外でないことは云ふまでもない。

おの〱、自己の卓越を示さんと努力してゐるに關はず、今日は「卓越」の目的を遂するのが、以前よりも餘程六ケしくなつて來た。我々が文壇に現はれた時分には、讀書範圍が狹小で、相當の作家でも物質的報酬は甚だ貧弱であつたが、才能のある者が名を成すにはたやすかつた。作品發表機關の乏しかつた時代に、名をなすのがたやすかつたと云ふのは矛盾してゐるやうであるが、あの頃は、文學に志す者の道は多岐でなかつた。周圍のいろ〱のものに迷はされないで、一つの道を進んで行かれた。ところが、今日の文壇の有樣では俗才をさま〲に働かさなければならない。……今、參考のために、「文藝戰線」十月號を開いてところ〲見てゐると、細田民樹君が黑島君の短篇集「橇」を評したうちに、「自然主義が人生の眞を言ひながら、それを社會機構の上に見得なくなつたところに、もう嘘があるんだ。所謂人生の眞から遠ざかつて行く嘘がね」と論斷してゐて、それとちがつて、黑島君の作品は、社會機構の上に人生を見得てゐると思つてゐるやうである。この態度が現代の作家としての最も正しいものであり、最も身を立て名を成すに適したものであるかと云ふに、さう單純に極められないやうである。社會機構の上に人生を見ると云つても、千差萬別で一樣に律しがたいのであるが、プロレタリアの立場に立つて有產階級に逆ふことを作文の規準として筆を執つてゐさへすれば、いつか今日の文壇に雄飛し得られる當てがあるのであらうか。さう極つてしまへば懷疑なしに進んで行かれるので、事がたやすいのであるが、果してさう極められるのであらうか。細田君自身も「婦人雜誌」の小說でも何でもその態度で書いて、今だけの盛名を獲得してゐるのであらうか。田山花袋氏は往年自然主義を高唱して盛んに創作を發表してゐた時分には、今から顧みると偏狹膚淺のやうに思はれる主義を自から信じて疑ふことなく、すべてその主義で徹しようとした。成果はどうであらう

とも、氏としては遺憾のない譯であつた。細田君も一點の疑ひのないまでに信じて胸に懐いてゐる文學觀を、自己の作品のすべてに應用してゐるのかも知れないし、今後も所信を徹して行くのかも知れないが、昔、田山式文學觀に追隨した年少の徒で末流に墮して世に顧みられなくなつたものが少くなかつた如く、今細田式文學觀に雷同するものゝ將來も、そんな風になりはしないかと、私には氣遣はれる。

田山氏もある時期の文壇での英雄であつた。細田君も現今の文壇での英雄である。（英雄を軍人や政治家にのみ限るのは舊式の見解であつて、今日は、鶴見君の英雄待望論に於ても、「新日本の新しき生命を呼び起す英雄兒は、いまどこに居るのだ。第二の南洲と第二の山陽と、第二の龍馬と、第二の甲東と、第二の馬琴は、いまどこに居るのだ」と叫ばれたり、「紫式部の日本、柿本人麿の日本、左甚五郎と團十郎の日本」と云はれたりして、藝術家も英雄の仲間入りすることとなつてゐる）しかし、今日は、田山氏時代とは違つて、細田君などの一人が新文學の權威ある指針となつてゐるのではなくつて、同じ境域に彷徨してゐる連中にでも、細田君などを蔑視してゐるものが少くないかも知れない。今月何處からかはじめて寄贈された「戰旗」といふ雜誌と、從來をり／＼讀んでゐた「文藝戰線」とを、一木一草の綠色もない岩石沙礫の道を辿る思ひをして讀比べて見ると、主張を同じうしてゐると思はれてゐたこれ等の雜誌でも、盛んに小ぜり合ひをしてゐるのである。ここにも群雄割據か群小割據かの世態が見られるのである。

煩瑣な爭ひはあつても、所謂「社會機構の上に人生の眞」を見るのが、現代文壇の最新思想であると假定して、新思想には敏感な青年が、容易に感染するとしても、現今の文學發表機關たる雜誌が、さういふ思想の具體化したる文學を、喜んで受入れるであらうか。一方でさういふ思想を唯一の眞理として信仰しながら、婦人雜誌や娯樂雜誌に筆を執る時分には、態度を變へなければならぬのではあるまいか。若しさうだつたら、作者の心の使ひ分けが、中途半端なみじめなものに思はれるのである。雜誌社や新聞社の思惑は顧慮するに慣ひしない。自己の所信を貫徹して何等の讓步をも試みない

と、口や筆ばかりでなく、實際に現はす作家が世に一人でもあるならば、それは非凡な藝術家と云ふべく、私はさういふ異例な人間を問題としてゐるのではない。

現實の世では、雜誌社などの意向を無にして、一すじに自己の道を進む譯に行かなくなりかゝつてゐる。以前だつてさうでないこともなかつたが、今日は一層その傾向がひどくなりかゝつてゐる。私はさきに「プロレタリア文學」といふものについて云つたが、その他の一系統の文學についても同じことが云はれるのである。文學者は、政府の檢閲制度の酷烈を憤つて、言論の自由を要求してゐるが、言論は政府の力で束縛されてゐるばかりではない。大雜誌社や大書店の意向に置かなければ、文筆で衣食し文筆業者として成功することが、六ケしくなるに違ひない。數年來、大雜誌社大書店の威力が文壇人を壓迫しかけてゐることは、私自身も感じてゐる。美術品に對する有力な書畫屋以上に、「ある作品をよく賣る」のも「ある作家の評判をよくする」のも、おれの力だと、彼等をして思はしめるやうになりつゝある。かう云つても、私はさして義憤を起してゐるのではない。時代は變遷極まりなきもので、現代に生きんためには現代に順應するやうに努める外はないのだ。しかし、年少にして文學に志す者は、どんな態度を取つて現代に順應したらいゝのであらうか。前途が茫漠として道が見つからないやうである。

明治以來いろ／＼な作家の築き上げた文學は、過去の文學史に埋藏すべきもので、將來は新たなる文學史が開展されるのかも知れない。功名慾の熾んな若き文學志望者は、新しい境地を切開かなければならぬのであるが、それには、明治大正の文壇では左程必要でなかつた世才俗才を機敏に發揮しなければならないだらう。自分の好みに從つてコツ／＼藝を勵むだけでは目ざましい効果を現はすことは出來ないだらう。昔の名人氣質なんかは時世にそぐはないやうに思はれだした。……時勢の感化は不思議なもので、私にさへ、葛西善藏君のやうな生活振りは前代の文人氣質の遺風に過ぎないので、後人の範となすべきものでないやうに思はれだした。「虚名に捉はれず、物慾の虜とならず、專念一意藝道を勵め」といふ

訓戒は、事理に疎い黴の生へたものに思はれだした。文學が以前よりも一層多く社會性を帶びる上は、社會の需要に應じる商品としての考慮を要するのである。我々がさう思ひたくない氣持があるのは、文學に對して、過去の神秘的迷妄に捉はれてゐるためであらう。……我々の如く數十年來、過去の文學の雰圍氣に浸つて來たものは、今更どうしようもないことであるが、新代の青年は、書店や雜誌店の意向と歩調を合せて大衆を釣つて進んで行くのが得策かも知れない。衆愚と歩調を合せながらこれを征服して行くのが、新代の文學的英雄兒の心得であるかも知れない。しかし、これはたやすい仕事ではないので、少くも、プロレタリアの理窟なんかを眞に向けて、文學道を金科玉條として守つてゐては、駄目なのだ。

今に、鶴見祐輔君などの渴望してゐる新代の天才新代の英雄が、文壇にも現はれて一代を風靡するかも知れないが、それは、明治以來のどの文學系統にも屬しないとゝもに、プロレタリア文學の乾燥無味な理論に拘泥しない英雄兒であるに違ひない。

堂々たるマルクス學の大家でも、資本力の強い書店には引摺り廻はされるのである。微々たる文學者などが二三の大書店に對抗しやうとしても、それは蟷螂の斧である。さうした趨勢はます／＼強くなりつゝあるのだ。將來の作家たるもの、よくそれを心に置いて進まなければならない。世馴れない純眞な心から、煽動的言論に無雜作に乘せられて、後悔の種を播かないやうに注意すべし。



世界の景氣を見る

太田正孝

一

今年の四月二十三日の晩のことであつた。年の頃五十前後に見ゆる紳士と、若い美しい女とが、ロンドンはハイドパークの芝生（?）のうへで話しをしてゐる。青葉をわたる風の心地よいといふわが國の氣候よりも、北國の夕べの冷氣をもつてゐると想像しよう。二人は身を摺り寄せるやうにして、何やら樂しさうに話をしてゐる。しかもこれは、遠目には夫婦ものとは見えない。どうやら異様である。これを通りすがりの女巡査が見つけて、あやしいなとおもふ。折から巡回して來た男の巡査に告げる。——巡査は警察へ同行さして、型の如く調べた。——おどろいたのは、男は世界的に名の賣れてゐる經濟學者のマネー氏である。サーの肩書さへもつてゐる。正確にいへば、サー・レオ・チオザ・マネー（Sir Leo Chioza Money）である。女は只のタイピストで、名をサヴイツヂ（Savidge）といふ。調べられた結果は、別段あやしい咎むべきほどのものでないことがわかつて、つき放された。けれども問題は、それだけでは濟まない。マネー氏は、とくに女に對する警視廳の調べ方が惡いといつて、勞働黨の人達に告げる。勞働黨は、これを議會に持ち出して、當局者に質問する。當局者は、また本人を呼び出して、先きの日の調べ方について調べてみる。しかもその調べ方が、また良くない。時間の點や、

女の家への連絡をつけることなどが問題となつた。かやうにして、この事件がキツカケとなつて、警視廳の改革が提議され、つひにその參議會が設けられることになり、差し當りは、女を訊問するときには、女巡査を附き添はしておかねばならぬ――たゞし女の方で、その必要がないといふときはこの限りにあらずといふことに定められたのである。

これは私が友人から當時のタイムスを引つぱり出しつゝ話すのを聞いたもので、多少は聞きとつた私のソコツから事實に相違した點があるかも知らないが、その輪廓には大差がないとおもふ。私はロンドンへ着くと間もなくこの話を聞いて、さすがはイギリスであり、うらやましいことであるとおもつた。何となれば、假りにかういふ話材に相當するものが日本の警視廳あたりから新聞記者の耳に入つたとすれば、私の知り得る範圍において誤りないとすれば、日本の新聞のうちには、極めてセンセーショナルな取り扱ひをし、――大きい活字で、人目を惹くやうな見出しをつけて、學者として公けの席に出て顏むけの出來ないほどにコキおろし、當人の寫眞まで入れ、近ごろ惡るい癖である想像まで加へてニユウスらしい報道するであらうのに、ロンドンタイムスは、はじめに一寸書いただけで、あとはミス・サヴイツチ事件として、マネー氏の名さへも出さないからである。しかも、問題そのものは生かしておいて、警察制度の改善を論題として社說の材料とすることを忘れないからである。いつもながら、彼等はプライヴエトのことには觸れない。やりくちが、きれいである。社會事實に對する態度が眞面目である。また、政治家とても、これをキツカケにして議會の問題とし、同じく警察制度の改善にまで漕ぎつけ、政治上の效果をも合せ得やうとする賢さと有益さとが見出されるからである。フランスあたりの新聞記者仲間には、またしてもイギリス式の他愛もないことゝであると笑つてゐるものもあつたが、私はさうとらない。今度の外遊中の獲物であるとさへ思つてゐるのである。

だから、日本へ歸つたら、そのことを說いてみやうとおもつた。また、說いても見た。しかし日條に新聞に出る社會種を讀み、政治は進むどころか、政治家の腐つた腹綿をさらけ出したり政權爭奪の見にくい姿を見せつけられてゐては、手の付けやうもない。いさゝかなりとも日本のためになることがあつたらばとおもつて出掛けた私は、前途をおもつて力を落してゐるが、それでも後日のためにもならうかと、こゝに思ひ出づるままを綴つて見ることにしたのである。ゆく道は遠くともあれ、目標の色づけが出來てくれるだけでも、このことが無駄でないと信じたからである。

私は、アメリカを經て、ヨーロッパを見て、印度洋を通つて歸つた。わづか百二十日の旅路である。一箇所の滯在にしても二週間を越してゐるものは少ない。そして半分に近い日數は、太平洋と大西洋と印度洋といふやうに、船のうへで過してしまつた。それは、疲れた頭をやすめるサナトリュムでもあり、見聞などを整理する勉强室でもあつた。とにかく短かい期間であるから、その見聞とても少ない。たゞ、今度は十五年目ぶりであるとはいひながら、さきに見物のために割かれた時間は全然省くことにし、專ら經濟事情や新聞經營の視察見學に充てたのであるから、時間の長短ばかりで見學の深みを測定することは出來ないと辯じておかう。――私の見學はまづアメリカから始める。

二

アメリカは、何といつても景氣のよい國だ。數年前のそれほどではないが、とにかく他の國とは比べものにならない狀態である。金がうなつてゐる。尤も金の保有高だけでは、その國の景氣はわからない。世界の金が百八十四億圓かあるなかで、アメリカの分が八十三億圓餘、フランスが二十一億圓餘、イギリスが十四億圓餘、日本が十二億七千萬圓餘、スペインが十億圓餘であるといふのが昨年末の調べである。しかし、二番目であるフランスにも、四番目である日本にも、五番目であるスペインにも景氣は來てゐない。それどころか、日本やスペインは未だに金の輸出解禁をせず、金融の國際常道にさへはいつてゐない。たゞアメリカだけは、かうした金が、日本やフランスなどのやうに無理をして集めたものでなく、いはゞ自然に流れ込んだものであるから、景氣の一端を表現したものといふことが出來よう。尤も昨年末から本年にかけて金の流出が、フランスの金解禁準備のためにする引き出しともからんで、少なからずあつた。それはとにかく、アメリカは景氣を打つてゐるが、決して一時的の浮かれ景氣ではない。否、本年四五月ごろ浮いた浮いたの投機心があると見たため、金融界は警戒して、準備銀行の多くが四分五厘まで金利を高めたといふほどの注意ぶりである。それはさておいて、如何にしてアメリカの景氣が續いてゐるかといへば、何といつても經濟の潛在力として大切な天然資源に富んでゐるといふことにあるのは、いふを待たない。農產物に、林產物に、鑛產物に、水產物に、何でも豐かにもつてゐる。ないものとては熱帶地方の產物ぐらゐなものにすぎない。まことに、うらやましい。生活の第一義たる衣食住の資源さへ充分に得られなく、これを外國に仰ぎ、たゞ誇り得るもの

とては水力と水産物ぐらゐにすぎなく、それとても資金關係などでおもふやうにゆかぬといふわが國とは比べものにならないからである。しかも、かういふ資源を開發し生産力を進めることについてアメリカ人が努力してゐることは、またおどろくべきほどである。ちかごろ、メーザー氏の『アメリカン・プロスペリテー』といふ――汽車のなかで讀むぐらゐの輕るい本が出てゐるが、如何にしてアメリカが今日の繁榮を來すことが出來たか、その結果がどうなるといふことについて説かれてゐる。あるひは生産のうへから、あるひは販賣組のうへから、あるひは消費のうへから、いろ／＼と説かれてゐる。――私は、こんな本を讀んだり實際に見聞したところを合せてみると、やつぱり、産業の合理化によつて生産力を進めてゐるといふことに落ち着いて來る。つまりは、事業の機械化である。能率の增進である。人間を機械に逐はれるものとするかに見ゆるテーラーシステムの實施である。かうした能率增進の産業合理化運動は、さらに劃一化運動に向つて進んでゐる。商務省内には劃一局が設けられ、内外通商局には簡易化實施部があつて、熱心に活動してゐる。これによつて、工場を簡易にし、浪費することを防ぎ、生産類を增し、生産費を減じ、賣價を引下げ、しかも多大の利益を得ようとするのである。それは纖維工業とか、電氣事業とか、印刷業などに行はれて、立派な實績を納めてゐる。かういふ産業上のやりくちは、一般生活にもおよんでゐるので、それが旅人の眼にふれるものも少なくない。いはゞ、生活の合理化である。生活方式の簡易化である。事務の機械化である。また、すべてをビジネス化することである。四辻の交通整理をするのは、一人の巡査でなくて、『進め』『止れ』の標札だけを時間的に出す自働機械である。その標札の動くに從つて、人も自働車も、みづから交通を整理するのである。そして、キツイ顏をした巡査を見る必要もなく、事故の起ることも少ないのであるから、助かる。家庭やホテルなどの電力化も、おどろくべきものが少なくない。私は、あるタイピストの會議で、名宛などを書くときに、コンマやピリオドがなくても明確に分かる場合には、そのコンマやピリオドを省くことにするといふ決議をしたといふ話しを聞いて、合理化運動が、そんな些細な點にまで行つてゐるかとおどろいたのである。もちろん、産業の合理化とか簡易化とか劃一化といふことは、人間を機械化してしまつたり、折角複雜化することによつて向上の道を辿つてゐる文化を逆轉さす意味ともなり、必ずしも禮贊すべきことではないかも知れない。さりながら、生活の第一義が、よく生きることであり、産業の第一義が、まづ多く安く生産することにあ

るといふ意味においては、産業の合理化劃一化運動は、注目すべきものであることを記せねばならぬ。仕事のビジネス化といへば、私はハリウッドの活動寫眞撮影場を見にいつたとき、あるレストラントのオーケストラのなかに、日本の木魚を——大中小さまざまのものを叩いて、高く低くいろいろの音色を出さして他の樂器と調子を合してゐるのを見て、アメリカ人が、なかなかに外國のものを請け入れ、しかもこれをビジネス化してゐるのに感心せざるを得なかつた。まして、お寺の陰氣くさいところにおいてのみ聞くべくならされてゐるものを、かやうなところで見ようとは思つてゐなかつたからである。なほアメリカへ來て、禁酒法が如何に行はれており、それが産業上、とくに勞働の能率に如何なる結果をあらはしてゐるかといふことは、私の興味をもつてゐたところであつた。この點について、アメリカへゆかれた人たちは、酒は飲める自由であると答へる人が多い。なるほど飲める。高いが飲める。しかし、大體においては、ドライカントリーの實があがつてゐるとみるのが正しいではなからうか。例外はある。それはすべての規則の實行についてと同じである。丁度世のなかに道德律はあつても、裏面に、あるひは公然と破戒が行はれてゐるのと同じである。禁酒の事實が經濟上にあらはれた形は、月曜日の勞働能率のうへに現はれてゐる。——かつて外國の新聞記者の間に『月曜日の自殺』といふ言葉が行はれたことがある。週末に賃銀をもらつて一杯引つかけに出掛ける。すきな女とも會ふ。そして樂しい日曜日は、短く暮れてゆく。月曜日の朝になつてみると、サイフは文無し。可愛い女にまた會ふまでには六日の勞苦をつゞけねばならぬ。浮世だ。死んでしまへといふのが、この熟語の說き明かしである。ともかく、これまで月曜日は、出勤率にしても、仕事の出來高にしてもあがらないものとされてゐた。しかるに禁酒法の實施されて以來、勞働の能率のあがつてゐることは見のがすべからざる事實であるといふ。もちろん、酒を飲まなくてはおさまらないものが、金がなくて惡るい酒。——メチルアルコールの混じたものなど——をあほるために國民保健上に害をおよぼすことがあるといふことも事實である。しかし大體において經濟上勞働能率に關するかぎりにおいては、禁酒法實施の功德をたゝへねばならないと信ずる。——それはさておいて、かやうにしてアメリカの生産力が增し、しかも供給過多にもならずに産業が滑らかに運ばれてゐるのは、國民の消費力が强いからである。それは、大廣告によつて消費者の心をそゝるからでもある。一日の新聞が何十ページかを刷り、その約半分が廣告で埋められ、その廣告中に、自動車とか、家具とか、

とくに女の衣裳や身の飾り物などの多いのは、如實に消費力の強さと範圍とを察する材料となるであらう。そのうへに月賦販賣制度によつて、――たとへば安いサラリーマンでも自動車が買へるといつたやうに――消費の手輕な實施が出來ることになつてゐる。さうして國民は、日に變り月に進む流行を逐ふことが出來るのである。――ヒゲを生やしてゐる人、編みあげの靴を穿いてゐる人、ステッキをもつてゐる人、髮の毛を長くしてゐる女――それは少くとも都大路ではアメリカ人としてぶつかることは非常に珍しい。とにかくアメリカ人は流行を逐ひつつ、踊りぬいてゐるのである。――踊りといへば、なかには十日あまりも踊りぬいて、世界一の忍耐ダンスをしたといふ記錄をつくるといふ猛果かな人たちもゐる。世界一は、アメリカとアメリカ人の幻であり、しかも現實でもある。

三

私は、海を越えてヨーロッパへ渡ることにする。

この舞臺の背景は、まだ世界戰爭の餘燼で塗られてゐる。

悲しみを見んとするものは、まづ、ヴェルダンにゆけ。その昔し森林であつた一帶の地域は、砲火に跡方もなく燒きつくされて、形ばかりの黑い色をした木がさみしく立つてゐるばかりである。そして夏草が、一面に茂つてゐる。野菊が咲いてゐる。血に染んで咲き出たかとみえる深紅の虞美人草が一杯に咲き亂れてゐる。つはものどもの夢の跡ではない――戰士の屍は未だに掘り出されないものや、掘り出されても棺に入れたまゝで葬られないものが數多くある。ドイツ側の戰死者にいたつては、手もつけられてゐないといふ。劍を銃突につけたまゝ埋められ――自然の墓としてゐる一列の兵隊もある。戰に勝つたけれど、かやうにフランスは、悲しい。――ドイツは、どうだ。私はライン川を下つてみた。ハイネの詩に歌はれたローレライの眺めは昔しながらに旅人の心を引く。コブレンツでおりた。仰げば、對岸のドイツ領に聳へてゐる城砦に翻つてゐるのは、フランスの國旗ではないか。いはゆるラインランドの撤兵問題は、かうして旅人の哀愁を買つてゐる。ベルリンに行けば、町の姿に交通の繁みに十五年前と大差なく見うけられるが、それでも戰ひの傷みは殘つてゐる。工場にも商店にも手を失ひ足を失ひ、明るみを失つた戰時負傷者がゐるではないか。四十人以上の從業員をもつものは一名以上の戰時負傷者を雇ふ義務があり、さらに四十名を越ゆるごとに一名を增すことになつてゐるからである。シーメンスの工場を見學したところ、そこには戰時負傷者が二千人もゐるとのことであつた。さらにドイツ人と話しをし

てゐるうちに氣のつくのは、とかく彼等の口から不用意に出る『戰前は』といふ言葉である。ヴエルサイユに城下の盟ひをさして以來五十有餘年、ビスマークやカイザアの築きあげたドイツ文化とその繁榮、それが戰前までつゞいた彼等の誇りであり、あくがれである。その戰前の狀態にかへしてみたいといふのである。いかにも、哀調である。かやうにしてドイツも、やつぱり悲しい。――しからばイギリスは、どうだ。こゝとても明らさまではないが、やつぱり戰爭の傷みはある。ロンドン兒も流行に醉ふ昔の力はない。質素だ。物質問題に逐はれて、神に仕へることさへ、おろそかになり勝ちである。イギリス特有の日曜日も、しづ心なくすごし、神の前に祈るどころか、郊外にドライヴして辛ふじて生活のあえぎを醫しつゝあるものも少なくない。

かやうに押しなべて世界戰爭の傷みは、各國に殘つてゐる。かういふ姿を見るにつけても、戰爭は避けなければならないとおもふ。よしんば戰はねばならないことになつたとしたならば、どうしても勝たなければならないとおもふ。とくに敗けたみじめさは再び起き上るのに非常に骨が折れるといふ教訓を示してゐるからである。

しからば、ヨーロッパには復興復舊あるひは躍進の跡が見えないのかといふに、――さうでない。――それを證べてみやう

まづ、ドイツは、どうだ。一見したところ、ドイツ人は戰前のやうな活氣がない。意久地がないやうにも見える。戰前私たちは輕蔑の眼で見られたことが少なくなつたが、今度會つて來たドイツ人の殆んどすべては、むしろ尊敬しすぎるほどの態度に出てゐた。昔の書生が僅かばかり社會的に働くやうになつたから、そのためであるとはおもへない。一般に、さうおもはれる。けれども、ひるがへつて戰後のやりくちと實績とを見ると、なか〳〵にドイツの侮れないことが少なからずある。つまり、ドイツ民族は、忍耐してゐるのだ。隱忍してゐるのだ。さう見るのでなければ諒解することの出來ない事實が多いからである。

かつてスティンネスは、『戰場で失つたものは、平和の産業で取りもどして見せる』といつたことがある。もちろん部分的にはうまく行つてゐない點もあるが、全體としてドイツ復興の跡は、工業においても、農業においても、商業交通業においても數字のあらはしてゐるとほりである。見事である。この點については、くだ〳〵しい統計をあげるまでもない。問題は、如何にしてドイツは復興することが出來たかといふことにある。―

—ドイツの革命は勞働者の勝利であつたが、彼等は、つゝましやかに資本家と協調する態度に出てゐる。アメリカの勞働者が資金を積んで資本家に近づいて手を握りつゝあるといふ協調ぶりとはちがつてゐる。ドイツのそれは、經營上の協調である。ドイツ國の復興のため、あるひはドイツ民の躍進のためにする協調である。アメリカや他のヨーロッパ諸國の勞働者にくらべて二割方も少ない賃銀で滿足し、一週間六十時間も働くといふのも、やがて樂しむべき日の來るべきことを期してゐるからである。賃銀の爭ひが全くないといふのではないが、非常に少ない。ルール占領のときやつた以來ストライキの戰陣も張らうとはしない。いはゞドイツの勞働者は、國家的自覺ある——愛國的のプロレタリアートである。社會黨も、開戰のとき世界の社會主義者から裏切りものとさへいはれたくらゐであるが、今日も資本家黨たる人民黨や民主黨と結んでゐる。なほ産業合理化といふことも、第一に手をつけたのはアメリカであるが、これに倣つて進んで來たドイツは、いまは却つてお手本以上の研究を積み、それを實施してゐるといふ狀況である。工場の經營にせよ、事務の運行にせよ、組織立てるとか、理詰めに整理してゆくといふことについては、ドイツ人は生れながらの天才をもつてゐるといつてよいほどである。機械の改善、發明の應用も、戰前にまけぬ勢で進んでゐる。新しい染料などは、戰後に八萬種も發明されたといふではないか。學者や技師たちのさうした發明中、ソロバンのとれる商品となつてゐるものも百種近くあるといふではないか。おそろしいことである。また、專賣特許の認可も年々二萬件見當にのぼつてゐるといふではないか。人造絹糸布の製造にも成功し、人造樟腦もいま一歩にして日本製品に近づくといはれてゐる。かうした不斷の科學の進步と研究とは、つねに實際界に役立ちつゝあるのである。もしそれ、科學の力を軍備に應用する點に至つても、刮目すべきものがある。兵員の數こそ少なくせられたとはいひながら、毒瓦斯の研究に熱中して、殺人機に代へたり、飛行機を增大し自働車を增加したりなどして、いつにても徵發されて軍備に化け得る力となし——潜在的兵力を作りつゝある。まことに、おそろしい國である。そのうへに、ドイツは國際協調主義を經濟上に働かして、少なからぬ産業發展上に便宜を得てゐる。いまのところドイツにつぎこまれてゐる外國資本は、二十億圓を突破してゐるといはれてゐる。それが産業上の油となり、それを合理化運動によつて、さらに經濟的に利用してゐるのである。死んだスチンネスのコンツエルンも、國際的に繫げられてゐた。ラーテナウのフランス協定案といひ、ストレーゼマンの外交のやり

くちといひ、みた經濟上に國際協調をして、ドイツの躍進に資しようとするのである。ドウズ案にしても、さうだ。資本家のうちには、ドウズ案によつて賠償を實行してゆかなければならぬから、いくらまうけても追ひつかないといふやうなことをいふものが少なくい。旅行しても、ドイツの汽車はドーズ案を載せて走るから重い――遅いといふ。なるほどドース案實行の苦しみはあるであらう。ダルムスタツト・ウント・ナチヨナルバンクの副頭取のゴールドシユミツト君にしても、シーメンスの理事エルハルト君にしても、ライヒスタークの議長レーヴエ君にしても、ベルリンの新聞幹部どころの人たちにしても、私の會つた人たちの多くは、ドウズ案を改訂してもらはなければならないことをとなへてゐる。殊に本年から賠償のスダンダードイヤーに入つたからである。しかし、同時にドウズ案によつてドイツが如何に利し、また、この案あることを資本家が口實に使つてゐることも、注意しなければならぬことであらう。それはとにかく、國際協調のやりくちは、いろ〳〵な宣傳にも現はれてゐる。迂愚な私などは、ドイツ政府からの思ひがけない念を入れた待遇を受け、事業の紹介や工場の見學の便まで、こちらから頼んだ以上にやつてくれたことが、やはり、さういふ考から出てゐることを今にして氣付いたほどである。また、本年ケルン市に開かれた世界新聞博覽會を覗いてみても、各國に對する宣傳上の注意深さを知ることが出來る。かやうにして、みづからを廣告し、みづからの商品を世界に紹介し、外資を借り、國際協調の基調のもとに經濟力を進めつつある。やがては相爭ふにいたるであらうことの想像せられるアメリカとも手を握り澤山の資本を入れてもらひ、助けられてゐるやうな顔をして、すく〳〵とその經濟力を伸しつつある。――なほ、ドイツの復興にあたつては、資本家も、勞働者も、學者も、政府も、みな一つ心になつて働いてゐることを忘れてはならぬ。さらに、青年たちが愛國心を養つて將來活躍せんとしつつあることも、また見のがすべからざる事實である。ドイツは敗けた。しかし躍進しつゝある。すごい。おそろしい。――ひるがへつて、祖國を見よ。不景氣は、大正九年以來今日まで九年の永きに渡つてゐるではないか。その間經濟には良くなる姿として見るべきものが、まことに少ないではないか。そして一と言目には、震災に遇つたことを、いひわけにしてゐる。私はあれまでにヤツツケられたドイツの復興を見ると、日本のいまの狀態が恥しくなる。震災を口實にすることが、如何にもさもしくなる。この意味においてドイツの隱忍と復興とは、まさしく他山の石ではあるまいか。

四

私は、フランスへゆく。

私はアメリカを去つて二日目の六月二十三日に船中でフランスが金解禁をしたといふニュスを知つて、とう／＼我等は最後に取り殘されてしまつたなとおもつた。かへりみれば、ツイ一昨年までフランスは、フランの下落で苦しんでゐた。財政上破産してしまふではないかとさへおもはれた。しかるに以來ポアンカレー氏は幣制改革にたゆむことなく力をそゝぎ、つい見事に金解禁にまで漕ぎつけてしまつた。まことに、人もいふごとく、彼はミラクルな財政家である。それにはフランスの農民をはじめ一般民衆に重金思想が強く、兌換のためにする金を積むことの苦しみが並大抵でなかつたらしい。平仄を合はしたフランス銀行のやりくちもよかつた。かやうにして舊貨幣價値を切り捨てゝ五分の一にし、兌換を恢復し、新發券制度をつくることにしたのである。しかも、他力に依賴することなく獨力を以て、すらりとやつてのけたのである。いま國際金融の變遷を辿つてゐるのは、日本とスペインとバルカンの二三の國にすぎない。とくに、なさけないのは日本である。成金時代まで經て來たのに、何事だ。しかも、この問題にも、やつぱり震災を引き合ひに出して辯解しようとするものがあるが、もうこれは口實とするには少しく古くなつてはゐないか。まして問題は日本銀行制度の改善ともからんで、始末がつけ得られるではないか。――どうする。――解禁されておそれるのは、流出してゆくであらう正貨の高である。それは二億圓見當とみてゐる人が多い。大事をとつて三億圓とみてもよい。それが出て行つてもかまはぬ制度にすればよい。出ていつておそれるのは兌換券制度のうへにあるであらう。しかし、現在の如く十二億圓見當の兌換券に對して十億圓あまり、言葉をかへていへば九割にもわたる準備をしておく必要と實益とが、どこにあるのか。アメリカ準備銀行の四割をはじめとして、ドイツもベルギーも四割になつてゐる。英蘭銀行の實績も三割八分であるといふではないか。ロシアは二割五分であり、フランスの新制度も三割五分である。さりとは九割は多すぎないか。多すぎるとなれば、いふまでもなく死藏である。もつたいない。それも高い利子で借りたものがあるとすれば馬鹿氣きつたことである。さなくとも爲替相場の不安定のために、貿易は害され、たゞ投機者流に利用されてゐるのみである。平價になるまで待つ必要はない。人工を加へてやる實益もない。いまのところ即時解禁に進むのが、せめてもの賢こさである。――それはさておいて、フラン

スはこれから金融力を増してバルカンにも手を延ばさうとさへしてゐる。そしてブルガリアとかルーマニアにも金本位制に復歸するために力を貸すであらうやに傳へられてゐる。さらに金利關係からみると、フランスは三分五厘であるから、イギリスよりも一分安いことになる。そして外國貨幣手形三百億フランをもつてゐるうちに少なからぬポンド手形があるのであるから、引あげられでもすることになれば、イギリスにとつては重大事であらうとさへ噂されてゐる。もとより、そんなことはしないであらうが、フランスの力は、そこまで來てゐることを知つておかねばならぬ。

　フランス國民が貯蓄思想に富んでゐることは、戰前と變らなくなつた。ロシアに借りたほされた恨みはあるが、いまは昔ながらの貯蓄力を高め公債投資などにも進んでゐる。私のいつてゐたところ——パリの香水屋さんで富豪であるコツテイ氏が、カイヨウ問題でおなじみのフヒガロ新聞を經營する傍に、政治上の勢力を張る目的で一般民衆新聞を作つて、普通新聞紙の賣價の半分で賣り出し、パリの諸新聞紙と戰ひ、非常に擴張し、どうやら勝ちつゝあることを見たが、パリ市民中には、この新聞を一年とれば他の新聞をとる場合に比較して靴が二足も買へるといふ細かい計算をしてゐることを聞いて、フランス人の勘定ぶかいことの一端を知り、それが貯蓄心に役立てゐることを解し得たのである。

　なほフランスのおそろしいのは發明發見の力である。長男が生れたら技術家にするとさへいはれてゐる。しかし今までは、いろ〳〵の發明や發見をしても、これが利用や應用や實用になると、他の國にとられてしまつたことが少なくない。私はパリで、リンドバーク氏の横斷飛行に用ゐたコンパスが——このコンパスあつてこそ飛行を仕遂げることが出來たといはれたほどである——フランスのデュノア教授の發明にかゝるもので特許期間の十五年目が切れやうとするとき、わづか八千フランで賣つたものであることを知つて、おどろいた。しかも、デュノア教授は、買手のないときによく買つてくれたといひ、少しもくやしがらず、さらによりよいものを發明してみようといつたと傳へられてゐる。すべてこの調子であるが、フランス人も最近眼さめて來て、その利用にも心をむけ、かつ産業の合理化にも進みつゝあることを注意しなければならぬ。もとより、それはドイツほどではないが——

五

をはりに、イギリスを覗く。

イギリスは、産業革命以來ながく經濟上覇者の地位にあつた。産業革命は、その後ドイツにフランスに――ヨーロッパ全體に飛火した。それは資本主義といふ容器に盛られて社會主義者からいたく叩かれて來たものである。その火元であるイギリスも、今日は經濟上の覇者たる地位をアメリカに奪はれてゐるやに見られてゐる。古い國だ。老大國だ。しかし老ひたるは、直に衰へたるものとして早呑み込みにすることは出來ない。イギリスの經濟も、經濟を表現してゐる政治も、そこに底力の强いものがあるからである。ながくかゝつて築きあげた誇りがあるからである。政治なども、勞働黨が勢力を得るやうになつてから議員の作法や行儀が惡るくなつたといはれてゐるが、それでも各國のそれよりは作法も行儀もよい。憲政の運用にいたつては、マグナカルタ以來何百年間の歴史がつながつて妙を得てゐることは、本文のはじめに書いた一例をもつても知ることが出來るであらう。經濟についても、さうだ。私は津島財務官について、英蘭銀行や、ウエストミンスターバンク（五大銀行の一つで、その理事者たるレイ君は日本の公債化について功もあり、井上準之助氏や土方久徵氏の銀行實務の師匠役であつた人である）や海上保險のロイズなどを見學して、イギリス人一流のやりくちを見たのである。聞くところによれば、イギリスでは銀行や會社などが破産した場合にも、八割見當は返されるとのことである。また、會社經營などうまく行かなくて、整理をし減資したときも、それが却つて好評を得て、減資前よりも株の値段のあがることも少くないといふ。無理をふきかけたり配當のみをむさぼり得ようとする株主は少ない。株主も不景氣にも堪え忍び得るだけの力をもつてゐるからである。ゆとりがあるからである。政治とても、さうだ。政權をとらなければ黨員が離散するとか、政黨が持ちこたへられないといふのとはちがふ。ゆとりがある。のんびりしてゐる。だから、そこに堅實性も生れて來るのである。イギリス人は、ズルいといふ。たとへば旅人の誰れもがスウエズ運河を通る際、運河會社の株の大部分はイギリスのものとなつたと聞いて、うまいことをするといつて、やつかむ。しかし、うまいことをすることが出來る狀態におかれてゐるからであるといふことも忘れてはならない。もちろん、私とてもイギリス人のやりくちの氣にくはぬ點の少くないことも知つてゐるが、全部がわるいときめてしまふことは出來ないとおもふ。とくに堅實性については、經濟についても政治についても、イギリスに學ぶべき點が少くないとおもふ。たとへば、こゝに財政問題の一つをとらへてみる。――イギリスは戰前二億ポンドすなはち約二十億圓の豫算でやりく

つてゆつた。それが戰爭とともに増大して、千九百十七年には、二十六億七千萬ポンドすなはち約二百七十七億圓にまで上つたのである。戰後これをどう縮めてゆくかといふことは政治家の問題であり、國民經濟にひびき、國民生活一般にわたる問題であつた。しかも、問題の重要性は財政の縮少の一點にあることを各政黨とも知つてゐる。そして、そのために力を傾けた。自由黨が天下を取つたときも、勞働黨が政權を得たときも、いまの保守黨の内容になつてもそれが一貫した政策となつて、ゐる。曰く經費を節減すること。曰く減税を斷行すること。曰く公債を整理すること。これを、いづれの政府も行ひつゞけてゐるところにイギリスの財政策の特色がある。千九百二十六年炭坑さわぎのときは不幸にして炭坑補助金などのため一時財政が膨脹したが、今日に至つては戰前の狀況に引もどされてゐる。かうして民力を養ひ、かうして早くも金解禁に漕ぎつけることが出來たのである。ことに明年度は藏相チヤアチル氏は地方税の輕減を行ふことを聲明してゐる。それがまた反對黨たる自由黨のロイドジヨウジ氏からも、勞働黨のスノーデン氏からも、ヤンヤと褒められてゐる。反對黨は讃辭を惜んでゐない。——そんな態度に出るやうに日本の政治家がなるのはいつのことであらう。國民全體も國民生活の實體に無頓着であつて、いつの日になつて復興の實を舉げ得るか前途遼遠しとみるとき、私は、この老大國に教へらるべきことの多いことを知る。

× × × × ×

私の旅程は短かかつた。見はてぬ夢のうらめしきふし〴〵も、かず〳〵ある。それでも、天然資源の豐かなアメリカが更に産業合理化運動をつゞけてゐることや、ドイツの隱忍性とその復興力のおそろしいことや、フランスの金解禁問題に對する不斷の努力や、イギリスの政治經濟の堅實性など、おぼろげながら、つかみ得て歸つたつもりである。——これからは、その實現について一段の力を入れねばならぬとおもつてゐる。

——昭和三年十月八日故山にて稿——

動物影繪

藤澤清造

象に乘る

これは、僕がまだ、盲は一生泣かない者だと思ひ、醫者は、永久に死なない者だとのみ信じてゐた頃のでき事だつた。僕が、ある晩ふとした事から、象の背中へのつたのは。と言つたところで、これ決して、夢の中などで、それを敢へてしたのではないから、此の點だけは安心して、僕は諸君に、諸君の持つてゐる時間を少しばり、僕のために割いて貰ひたいと思ふ。

時候は、春だつたか、秋だつたか、其處のところははつきりしない。何しろ其の頃の僕は、人間といふ者は、こころからではなく、眼でもつて泣く者だと思つてゐたのだから、もう時候の覺えなどは持つてゐないのである。

唯何かの係はりから、例へば、今これを戯曲の材料にでもするとして、是が非でも、時候をきめて掛からなければならないとなると、僕は、それを秋にしたいと思ふ。何故といへば、もう此の時は、夏だつたか、冬だつたか、さうした時候についての、はつきりした覺えはないけれど、たしかに時間は、夜だつた事だけは、もう爭ふ餘地がない。として思ひ出されて來るこの思ひ出のそこについてゐる洋燈のひかりが、ところは北國の小さな港町である、そこの冷冷とした空氣のなかから、たより無げに瞬いてゐるさまが、僕のこころへ浮びあがつて來るからである。

若しことを此處迄はこんで來たついでに、僕をして、敢へて誇張の色彩をなすらして貰へるなら、靜まり返つたその夜は、耳さへ澄まして居れば、何處からともなく、寒寒と寄せてはか

へす波の音が、僕の耳について來たとも言ひたい。さうだ。僕はいま、時候が秋のをはりだつた事を説かうとして、何氣なく波を持ちだしたが、其の夜僕が象にのつた場所である芝居小屋なるものは、風のある日には、絶えず打ちよする波に洗はれて居ようといふ、海邊近くに建つてゐたのである。

當時芝居小屋といへば、僕達の町では、この小屋一軒あるきりだつた。あれで見物は、二三百人はいれただらう。それは、何等の装飾とてもない、狹くて見窄らしい小屋だつた。

この小屋へ、その年の秋、熊や、虎や、象を持つた、猛獸使ひの一座が掛かつたのである。固より僕は、その夜そこへ入つたのも、金を出して入つたのではなかつた。何しろ、盆や正月にも、小使として貰ふ金は、多くも唯の一錢を出なかつた當時の僕には、それはいくらだつたか覺えては居ないけれど、とにかく子供とても、十錢以上は取つただらうと思ふその入場料などは、持つてゐよう筈がなかつた。では、どうして僕はそこへ入つたのだらうか。

それは、其處に札を賣つてゐた親爺の親切さからして、僕は入つたのではなく、入れて貰つたのである。此の札賣りは、新庄屋と呼ばれてゐた。それは、全部といつても好いくらゐ、歯がぬけてゐる所爲だらう。彼の頬は、ふかく息をすひ込んだ時のやうになつてゐた。そして、彼の頭ははげて、剃りたてのやうになつてゐて、地肌は一面赤銅色にそめなされてゐた。

ところで、此の札賣りは、どうした因縁からか知らないが、僕の父とは、それ相當に親しい仲だつた。だから彼は、壯士芝居などの掛かつた時には、よく僕を、無料でもつて中へいれてくれた者だつた。そして、其の時も、やはり其のてつだつた。——其の時も僕は、隨分と長い間、札賣り場のそばに立つてゐたのである。時候が秋のをはりだとすれば、僕はきつと、素肌に木綿縞筒袖の綿入れを着てゐたことだらう。それを、思ひきり短かに着て、足袋もはかない足を、秋風の吹きなぶるが儘にうち委してゐた事だらう。そして、打ッちがへた兩手をふところつて、物欲しさうな眼を、新庄屋の眼のなかへ持ちこんで居たことだらう。

さうだ。何んのことはない。餓えに追はれてゐる野良犬のやうな眼を、僕は新庄屋の眼のなかへ持ちこんで居たことだらう。そして、十分置き、十五分置きくらゐに、一人宛やつてくる見物が、新庄屋の手からして、入場券を買つていく毎に僕は、さもしい眼をあげて、彼の眼のなかを覗つたことだらう。心窃に僕は、

「はいれ。はいれ。うるさい餓鬼めが。」といふ、新庄屋、

が、いまにも降つてくるかと思ひながら、蛇度この一事をくり返してゐた事だらう。と氣にたがはず、其の夜もやがての事、その聲が降つてきた。と僕は、われを忘れて、木戸口へまはつて、履いてゐた燒杉の駒下駄を手にもつが早いか、鼬鼠のやうにして中へはいつて行つた。

　中へはいると僕は、もう鼬鼠にはやがはりして、其處の步みを驅けたものだつた。其の時木戸番の聲として、

「坐らんか。坐らんか。」と言ふのが、僕の耳へついて來たけれど、風のやうにして驅けてゐた僕は、それが聞えれば聞えるほど、餘計と夢中でもつて、小一まで飛んで行つた。などと書いてゐると、事が長くなりさうである。

　話の中心といふのは、僕が生れた能登の七尾でもつて、印度だか、アフリカだか知らないけれど、とにかく、さうした熱帶地方に棲む、あの象のせなかへ乘つたことを書くのに繫つてあるのだから、何もいたづらな道草などを、食つてゐなくとも好いわけである。それに事實は、今もいつたやうに、もう此の頃になると、はつきりとした、時候の記憶さへも持つてゐない僕には、同じやうに、其の夜、その小屋へは、幾人位の見物がはいつて居たか、また、其の夜はそこでもつて、どうした曲藝がおこなはれたか、それに就いても、これと言ふ記憶を持つてはゐない。唯覺えてゐるのは、僕が象にのつた事と、もう一つは、半裸體になつた猛獸使ひが、檻のなかから引出してきた、一頭の黑熊相手に、一大格鬪をしてみせた位のものである。その頃は僕の國など、まだまだ洋燈一點張りだつた。だから、見物のことは、言つてみると、皆黃昏時のやうな、その明るさの下でもつて行なはれたのである。

　いや、斷りがまた長くなつた。それでは、愈僕が、象にのつた顚末を書くことにしよう。

　これは蛇度、氣の利いた鍋のなかへ、石ころでも入れて、搖けにふり廻すやうな、ベルの音があつてから始まつたのだらうとは思ふけれど、それももう今の僕には覺えがない。と見ると、舞臺の上へ、三尺ばかりの鐵棒を手にした、一個の猛獸使ひにともなはれて、一頭の象が出てきた。

　象の大きさは、あれで身のたけ、四尺位あつただらうか。その後、僕が上野動物園などでえた智識でもつて考へると、この時のこの象は、いうに生後二十ケ月は、經つてゐる者のやうだつた。何しろ、物の本でもつて、その形はいく度かみては居たけれど、正眞正銘、生きた實物を眼にしたのは、この時がはじめだつたから、それと氣づくと、僕は、莚のうへに据えてゐた腰をおこして、舞臺端へ出ていつた。そして僕は、ちようど眼

を、蝸牛の觸角のやうに鋒えさせて、一心に象のはうへ持つていつた。

と其處には、細くて小さな眼があつた。これは、「象のやうな」といふ體の大きさから言へば、鉛筆を削ずる時のナイフで以て、ちよつとから刀を入れたも同様だつた。それから、中へは茶でも入つてゐるやうに、少しとがつて見える頭の左右には、それ相當に奮發してつけたやうな、ゆつたりと垂れた耳があつた。が何んとしても驚いたのは、蛭のやうに長い鼻だつた。

さうだ。それは長さばかりではなかつた。下へ眞直ぐにさがつてゐる時でも、其のさきの方は、絶えず左右へ動いてゐた。かと思ふと、今度はそれが、ずつと上のはうへ持ちあげられたりしたが、此の動きかたなど、やはり蛭を思はせる物があつた。

で、僕はそれらに穴をあけてからだつた。今度は、灰のなかに漬てあつた澁紙を、そこへ張つたやうな足。それは、逞しさうだつたけれど、同時に、少しくたびれて居るやうに思はれる前脚へ、僕が眼を持つていつてゐた時だつたと思ふ。一人の口上言ひがいふのだつた。——

「これより、御見物のお子供衆を三人相煩はし、これなる象の背中へとは、上らせてお眼にかけます。」と言ふのが、僕の耳にもついてきた。一一、斷るがものはないけれど、此の口上も僕がいま意譯したのである。かうもあつただらうかと思ふところを。

それから、これもまた、例の氣の利いた鍋をひつぱつて、砂利道を駈けてゐるやうな、ベルの音があつてからだつたと思ふが、たしかな事は覺えてゐない。それと、此の前後に、お坐りをしたり、碁盤乘りなどをやつたかやらなかつたか、其のへんの事も、今の僕には、一向に覺えがない。僕達を乘せた以外、他になにか違つた藝當があつたやうにも思はれるけれど、今の僕には、一向にはつきりとした覺えがない。

で、口上がをはると、口上言ひは、そこいらにゐる子供をつかまへて、舞臺へあがるやうに勸誘した。繰返し繰返し勸誘した。と二人の子供が、舞臺へ出ていつたものの、三人にはもう一人不足だつた。其處で、その穴埋にえらばれたのが僕だつた。

僕は、鳶に油揚げをさらはれたやうな氣持でもつて、舞台へ出ていく子供をみてゐた。と口上言ひは、

「坊ツちやん、出ませんか。」と言つたかと思ふと、彼はもう僕の手を取つて、僕を舞台へひきあげて了つた。其の間、厭應などいつてゐる暇がなかつた。

舞台へあがると僕達は、横に並んで下手寄りに立たされた。

其の時僕は、まともに日をうけた、氷のやうな氣持ちがしてならなかつた。――何しろ、はつきりした數は分らなかつたけれど、兎に角そこには、數多の見物が、みな眼をひからして居るだらうと思つたからだ。だから、舞台にあがつて、其處に立たせられると、獨りでに僕の頭はさがつて了つた。

と其處でまた、口上言ひは口上を言つたやうである。――「此處へならびましたる子供衆、これをこれから、いよいよ象の背中へとは上らせます。」とでも言つたのだらう。これが終ると、まづ上手寄りに立つてゐた一人の子が、象の背中へあげられた。次は僕の番だつた。

僕も前の子供とおなじやうに、其處へ出てゐた助手の手でもつて、一個の毬なみに抱きあげられた。そして、僕の小さな膝頭が、象の持つてゐる牙のあたりへ來たかと思ふと、象は、蛭のやうな鼻でもつて、僕を受取るが早いか、もう彼の背中へとは捲きあげてゐた。これが一瞬間中の仕事だつた。

僕が、象の背中へ捲きあげられると、また其處にゐた助手達が、左右から近寄つてきて、丁度僕を背中の眞中へおくつてくれた。何しろ、象の背中は、大太鼓の腹ほどあつた。だから、其處へまたぐと、僕は、僕の股を、思ひきり廣げねばならなかつた。それだけにまた、其處にさうして乘つてゐるのが不安だつた。

それは丁度、一本の裸木の上へあがつて、腰をかけてゐるも同様だつた。だから僕は、溺れようとする者が、一束の藁にでも取りすがるやうにして、象の背中へ、僕の兩手を吸ひつかせて居たものである。

本當なら、其處へ突ツぷして居たかつたのだけれど、何分にも、多くの見物をまへにして居ては、流石に、さうした不體裁なことは出來なかつた。となると、僕は、體は起してゐても、いや、體を起してゐただけに、餘計と爪をたてんばかりにして、兩手へ體中の力をいれて取縋つてゐたのである。

其の時だつた。僕は、灰のなかへ漬てあつた澁紙を、べた一面にはりつけたやうになつてゐる象の皮膚には、ところどころに、あの棕櫚の箒柄のしたにある繊維のやうな毛のあるのを知つたのは。と同時に僕は、この毛を一本拔いてやらうかと思つた。が其の刹那、僕には、かつて人から聞いたことのある、或るはなしが思ひ出されてきた。

話といふのは、アフリカだか、印度だかの、とある町を、一頭の象があるいて居たといふのである。ところで此の象、その通りにある仕立物屋の前へくると、つとあの長い鼻を、店頭へのばしたと言ふのである。と其處にゐた一人の職人が、手にし

てゐた針でもつて、その鼻をつゝついたのださうである。で、突ツつかれると象は、そこから離れていつたが、慌てのこと、其處へたち返つて來たかと見る間に、いきなり、鼻のなか一杯にためてゐた水を、折から、仕立物屋でもつて仕立てゐた品物のうへを目掛けて、一氣に吹きかけたと言ふそれなのである。

　これを思ひ出すと、一旦さう思ひ立つた僕の氣持ちは、たちどころで以て、火を見た馬のやうになつて了つた。――僕が、象の毛を一本抜くのは好い。だが象のやつ、ちやんとそれを知つてゐて、今度僕が下へおりる時、いきなり象は、あの長い鼻でもつて、僕を捲いたうへ、土間の眞中目掛けて、叩きつけはしないだらうかと思ふと、一旦さう思ひ立つた僕の氣持ちは、もう火を見た馬のやうになつてしまつた。

　其處へ、もう一人殘つてゐた子供が、象の背中へあがつてきた。彼は、僕の前にまたがつて居たのである。それを見た時に、僕はまた思ひかへした。

「待てよ。いくら象が利口だといつても、現在象の背中へ乘つてゐる者は三人なのだ。とすれば、その中の一人である僕が、一本の毛をひつこ抜いたところで、象には、それが僕だか、または他の二人中の一人だか、其處のところはつきりしまい。」

とかう思つた僕は、山の上から、谷間を目掛けて動き出した石のやうになつて、象の毛を一本抜き取つてしまつた。

　其處へまた、口上言ひが口にする口上が聞へてきた。それは、

「首尾よく、三人の子供衆を乘せましたうへは、元の通りおろさせて見せます。」と言つた風な、意味合だつたと思ふ。これを例に依つて例のごとく、氣の利いた鍋に細つけて、砂利道をひきずり廻すやうな、ベルの音のあとからして言つたのである。が僕は、それを耳にしてゐる間も、もう氣が氣でなかつた。僕は今にも、死の國へ送られはしないかといふ考へでもつて、胸のうちが一杯だつた。

　その中、あがつて來た時とは反對の順でもつて、一人一人僕達は舞台へおろされた。それは皆、あがつて來た時もどうやら、象の鼻に依つて運ばれたのだつた。がこれを見知つた時には、もう僕の魂は、身にそつては居なかつた。

　先づ、僕のまへに居た子供がおろされると、次がまた僕の番だつた。僕は、またも助手達の手に依つて、象の首筋になるあたりまで體を持つていかれると、其處へなよなよとした鼻がやつて來た。その時僕は、いよいよ、これが最後だと思つた。と次の瞬間には、僕は一人の助手の手に依つて抱きとられてゐた。これを知つた時には、うれしさの餘り僕のこころは、……

れた護謨毬のやうにはずんできた。」

で、其の後も時時、僕は思ひ出すのである。例へば僕が、子供のある家へ遊びに行つてゐて、其處の子供の持つてゐる繪草紙を、何氣なく繰つてゐるとする。と其處へ象が出てくると、屹度僕は、此の時のことを思ひ出す。同様に、何時か上野動物園の象が、そこに雇はれてゐた象使ひを鼻にかけて、瀕死の重傷を負はしたといふ記事の出てゐる新聞。あれを見てゐた時にも、僕は、此の時のことを思ひ出したものだつた。

さうだ。其の後上野動物園へやつてきた、夫婦象のどつちかが、其處に雇はれてゐた象使ひを鼻にかけて、瀕死の重傷を負はしたといふのや、同じく、以前上野動物園にゐた象に、鎖をつけてあるのを目にした外國人は、日本人の殘忍冷酷さを憤つて、人道問題を叫んだなどといふ記事を讀むと、僕は何時でも、きまつて此の時のことを思ひ出した。

今では僕も、諺などの裏に秘められてある意味を、ひとりでに探しだす事が出來るやうになつてゐる。例へば、僕の國では、夜手足の爪を取ると、親の死にめに會へないと言ひつたへてゐる。此處のこころは、僅に行燈しか持つてゐない時代のことにしてみると、夜爪を取るのは好いけれど、往往爪は、叩いてひびも入れず、灰にいけた鷄卵も同様、ともすると四邊へととびたがるものである。飛んでそれが、火にでも入るが最後、爪特有の悪臭が鼻をついて來るから、それを慮つた結果が、夜の爪取りを嚴禁したのだらう。

ところで、もう親をも失つてゐる程の者は、この間の消息を知つてゐるから、今更それを說く要もないだらうけれど、まだ健全な兩親を持つてゐるやうな者は、無知なままに、此の危險さを敢へてしようとする。此處においてか、尋常一様なことを言つただけでは、所詮止さうともしない彼等に對して、親の死にめに會へないと言ふ、人生における一大不孝不幸事をもつて、これに臨んだのだらう。と言ふ位は分るのである。

その僕が、まだ幼かつた所爲だらうけれど、あの時にかぎつて、どうしたらああした事にまで、心を打顫はしたのかと思ふと、獨りでに微笑が口にのぼつてくる。それは、僕が手足を眞黑にして、餘所の子供と喧嘩して、敗けてゐる時の寫眞。それでも見てゐる時のやうな、溜らない懷しさとともに、溜らない哀れさを覺えてくる。

物言ふ態

其の後といつても、これは藤井六輔が、虎や獅子に扮する時

にかぎられて居るのである。が何時もその前後に、僕が川村花菱に會ふと、川村がいふのである。——

「藤井が行つた？——君のところへ、藤井が行つた？」

初めのほどは、僕もそれが何を意味するものか、一向に讀めなかつたから、默つてゐた。と川村はいふのである。後を追つかけて。——

「藤井が、君のとこへ、渡りをつけに行かなかつた。やつこさん、今度またライオンをやると言ふぢやないか。」と言はれて僕は、

「ああ、さうか。」と思つた。と言ふのは、僕も一度、川村の描いた戯曲「熊と人と」中の熊になつた事があるからである。しかもこれは、當時好評されたものだつたからである。

其の頃僕は、演藝畫報社の走りづかひをしてゐた。其の僕がある日、其の頃まだ千駄ケ谷にゐた川村花菱のところへ、原稿をたのみに行つたのである。

で、僕は、通されるままに、川村の屋敷へはいつて行つたのである。と、其の次の間から、——其の部屋は、ふだん川村が書齋につかつてゐるのだが、其處から、頻りと人聲が洩れてきた。僕は、玄關にたつた時、其處に幾足かの下駄がならんで居るのをみたから、それを頭に描きながら、川村に聞いてみたのである。——

「お客さまですか。」と言つて。

「なあに、客ぢやないがね。」

「隨分今日は、人が見えてゐるやうですね。」

川村の、氣のない返事をうけて、僕はまたかう言つた。

「あれですよ。實は僕達、此の頃芝居をやつて見ようと思つてね。それで今日は、本讀みをしたり、役割を定めたりしてるんですがね。」

「道理で、僕、大變賑やかだと思ひました。」

「でね。今役揉めをしてね、僕、怒つてるところなんですよ。」

「それやないでせう。だつて、皆さんのおやりになる芝居に、役揉めなんてことは。」

「ところであるんですよ。それで今、困つてるんですよ。」

「一體、どうした役なんです。其の揉めてる役といふのは。」

「それは、熊ですがね。」と言つて、此處でもつて川村が、その戯曲の筋からして語りだした。

それは、いつか『歌舞伎』に出したもので、作者は川村自身だといふこと。舞臺は北國のある停車場の待合室で、そこで以て、トヤしてゐた新派劇の太夫元が、その座員一同と、見世物師のつれてゐる一頭の熊ととりかへるのだと言ふことをはな

てくれた。

「何しろ君、この芝居は、熊が主人公なんだからね。いや、主人公といつちや語弊があるけど、とにかく熊は、重い役なんだからね。ところで、此の重い役も、動物だつてんで、なり手がないんだからね。」

川村花菱は、筋を賣つてから、更にかう言つてぼやいた者である。

「そんなやつはないね。假りにも、新しい俳優にならうと言ふ者達でゐて。」

事實その時の僕は、眼の前へ糞土をつきつけられたやうな氣持ちがした。――其の時は、わづかに川村から、戯曲の荒筋を聞いたゞけだつたから、無論その戯曲の佳否などは分らなかつた。だが僕は、川村とゝもに、新劇の樹立をはからうとして居る若い俳優達が、熊と聞くと、すぐ舊劇でいふ馬の脚を連想して、これを忌避しようとする無知さ加減と、自信のなさ加減とが癪だつた。だから、自然に、

「そんなやつはないね。云々」といつた僕の詞が、火のやうになつて居たのは、當然過ぎるくらゐ當然なことだつた。

それをまた川村がみて取つたのだらう。僕がさう言ふか言はない中に、彼は、

「どうだらう。君、一つやつてくれませんか。」と言つてきた。

「やつても好ござんす。僕で好ければ。」

「君で結構。」

話は、これでついて了つた。何んのことはない。それは、お茶漬でもかツこむ時のやうにして、さら〳〵とついて了つたのである。

それから僕は、川村の書齋にゐた俳優達に引合はされた。それは皆、僕には初對面の人達だつた。

それから僕は、其の場でもつて、戯曲「熊と人と」を讀んだ。そして、稽古日の打合せなどをした。とは言ふものゝ、正直なところ僕には、芝居が開くまで、唯一度も稽古をした覺えがない。

成程、僕のやる役は熊だつたから、動きはあつても、臺詞などはなかつた。一つは此の點から來てゐたのかも知れない。僕にかぎつては、唯の一度も稽古をした覺えがない。いや、たつた一度ある。後にも前にも、たつた一度ある。僕の知つてゐる限りでは。

ところは、神樂坂の途中にある、神樂俱樂部といふ貸席の階上だつた。時は、初日の前の夜だつた。これも、川村花菱の方では、舞臺稽古でもする氣でもつて集つたのかも知れないけれ

ど、事實は、唯單に衣裳調べで終つたらしかつた。少くとも、僕の記憶はいまさう言つてゐる。

實は、僕もその夜、舞台稽古にちかい稽古がある積りでもつて出掛けたのである。それは僕だつて、僕の役は、一言だつて臺詞のない役のことは知つてゐた。だが、熊にも出入りするきつかけもあれば、それに連れての動きもあらうと言ふものだから、僕は、それだけの事は、一應教はつたり、呑みこんだりして置きたかつた。

ところで、行つて見ると、當夜僕は、南部から借りたのだと言ふ、熊の縫ひぐるみを見ただけで以て、それを體にだつて着けなかつた。當夜、さういふ番組は、僕に與へられて居なかつた。が好いことには、これより前僕は、一度上野動物園へいつて、ぢつくり熊をみて置いた。これが初日になると、僕にとつて、どんなに力になつてくれたか知れない。

はな僕は、川村からして、熊にならないかと言はれると、間もなくこれは是非一度、上野の動物園へいつて見る必要があると思つた。行つて、仔細に熊をみてくる必要があると思つた。だから僕は、ある日隙をぬすんで、熊見物にでかけたのである。

動物園には、幾頭かの熊がゐる。そして、熊のはいつてゐる檻のまへには、定つて鐵葉でこしらへた皿があつて、中へは芋が入れてある。で、僕は、その價をそこに設けてある錢入れのなかへ入れては、幾皿かの芋を熊達にくれてやつた。そして、僕は、置物のやうに眼をすえて、ぢつと熊をみてきた。

熊は、張り子の虎のやうに、絶えず首をうごかしてゐた。唯違つてゐたのは、虎の首は左右へ振るのに引替へ、熊は上下にうごかしてゐた。そして、熊は、芋をなげてやつても、猿や犬のやうに、決して、がつがつ食べはしなかつた。其の落着きやうは、芋を口にしても、一向それと氣づかずに居るといつた風があつた。一體に熊の持つてゐる態度には、正月が十もあるものと思つて、生きてゐるといつた風があつた。それを見て僕は思つた。

「これだ。熊の特性は。」と、「此の意氣でもつて、舞台を勤めてやらう。」と。そして、これが當つたのである。

僕達が、神樂倶樂部に集つたその翌日が、僕達のやつた「創作試演會」の初日だつた。場所は藥店で、その後キネマの常設場になつてゐるけれど、これも當時は、高等演藝館といふ貸席だつた。

何んでもこの時には、「熊と人と」の外に、もう一つ二つ違つた戯曲があつた。そして、演出順は、それらが皆前で、「熊と人

と」が一等後だつた。

で、前の幕がまだ切れない内だつた。僕は、衣裳屋の手を借りて、熊のこしらへに掛かつた。先づ僕は、シャツとヅボン下だけになつて、それへ手足のついた縫ひぐるみを着た。そして、頭は、その上で以てつけるのだつた。さうだ。これは頭ばかりではなかつた。足も、縫ひぐるみを着たあとで以て穿くのだつた。がかうして、身拵へをして了ふと、丁度溫室のなかにでも居るやうに、全身がいきり立つてきた。だから僕は、衣裳屋から注意されるままに、僕の出場がくるまで頭だけ外して、其處にある椅子にかけて休んでゐた。

その間にも、氣になつたのは、自分の出來榮如何だつた。それを思ふと、頭は外してゐても、僕のこころは、また火を掛けられたやうになつてきた。

やがて、「熊と人と」の幕があいた。かと思ふと、その中僕の出場がやつてきた。――僕は、僕の首につけられた、紅白綯ひまぜの太い繩をひかれて、舞台へ出ていくのだつた。繩の引手は、笹本光廣といふのがやつてゐた見世物師だつた。が困つたのは、頭をつけてからの僕だつた。

何しろ熊の頭は、うつむいた僕の頭のてつぺんへ、正面向きよろしく計つてつけるのだから、僕には何處がどこやら、一寸前は闇なのだ。その癖、僕はうつむいて居るのだから、足元はよく分るのだけれど。で、此の爲に、舞台へ出ていく時など、其處にある張物へぶつかつたりした。と言ふのは、僕をひいていく笹本が、首根ツこでも持つて、つれ出してくれれば好かつたのに、彼はさうはせず、恐ろしい物にでも對する時のやうに、遠く僕とは離れた繩尻を持つてゐたからだつた。

で、僕の熊は、かうして、醉拂ひもどうやうになつて舞台へ出ていくと、其處には、僕と取りかへられようとしてゐる新派の役者達と、その太夫元とがうち揃つて、僕を待つてゐるのだつた。此處でもつて、もう一つ附加へるなら、當夜の見物一同も、彼等同樣、僕の出を待つてゐたかも知れない。などと言ふのは常談である。

さて、此方は見世物師である。彼は、僕を太夫元達の前につれ出すと、其處でもつて、僕に藝當をやらせるのだつた。彼は、交換條件の一つとして、僕の熊が、非常に藝にたくみであると言つた手前、それを此處でもつてやらせるのだつた。

はな、舞台へ出てくる時からと言はんよりも、もう舞台裏でもつて、兩手兩足をついた時からして、僕は出來るだけ、熊の本性を模さうとしてゐた。つまり僕は、どう笹本の手に依つて急きたてられようとも、僕は、僕の分をまもつて、鈍重さを失

ふまいと思つてゐた。――神の子のやうな朗らかさを內に秘めて、外はあくまで鈍重にうごいてゐるやうな熊の分をまもつて、僕は、その前には一歩も、笹本に歩みよらうなどとは思はなかつた。僕は、さうした無邪氣さ、さうした緩漫さは、それまで馴染んでゐた者の手からして、見ず知らずの者の手へ渡されていく悲しい光景へは、如何にも對照の妙をなして、屹度心ある見物を泣かしめるだらうと思つてゐた。

その僕だから、僕は、舞台片隅になる、上手寄りへひき出されても、これは喜びの眞ッただ中につッ立つて居りでもする者のやうに、相變らず、首を上下する事と、肩を動かす事だけは忘れなかつた。其の僕をつかまへて、笹本は、藝をさせようと言ふのだつた。彼は、僕の足元へ一本の青竹をおいて、これを持つて立てといふのだつた。

僕は、二三度その詞を耳にしても、尙それが聞えない物のやうにして、前通りの動作をつづけてゐた。と親のこころ、子知らずと言ふのだらうか。笹本は癇癪をおこして、彼が手にしてゐた青竹でもつて、僕の頭を打つてきた。其の時だつた。僕は思はず言つたものだつた。――

「痛いよ。痛いよ。」と。

それから僕は、おもむろに、足元へおかれてある青竹を兩手でもつて持ちあげた物の、すぐこれを又元のところへ落してしまつた。これを一兩囘繰返へしてから、やつとの事で、兩手に持つて立上つてやつた。と氣の早い太夫元は、

「ぢや君、取換へよう。」と言つてきたから、僕の熊の藝は、これで以て幕になつてしまつた。が樂屋でもつて、縫ひぐるみを取つてからだつた。川村花菱が、

「うまいよ。」と言つた下へ「うむ。」と言ふのをつけ加へたかと思ふと、後は眼をおし開いたまま、すつと息を呑んでしまつた。無論その中へは、多分にお世辭もまじつて居ただらうけれど、僕には、溜らなくそれがうれしかつた。少くとも僕は、川村からかう言はれると、重荷をおろした時のやうに、心のやわらぐのを覺えた。

それから、これは、書かでもの事かも知らないけれど、此の事があつた後、暫くして、僕はまた、中村吉藏氏のところへ、原稿をたのみに行つたのである。と中村氏はいふのだつた。――

「此の間君は、熊になつたんだつて？うまかつたさうだね。僕、行かなかつたけれど、僕のとこの書生がみてきて、さう言つてゐた。」

中村氏は、かう口の中へいつぱい入れた麥飯に、大きな羽根をつけて放つ時のやうな、同氏持ちまへの調子でもつて言ふのだつた。それを耳にすると、僕は、意中の人から、口說かれでもしたやうな思ひがした。お蔭で僕の眼から、火がとび出した

りした。

それから、これも前同樣、言はでもの事かも知れないけれど、僕は、二日目に高山簑一郎に會つたのである。――高山簑一郎は、その後名を晃とあらためたが、此の男は、井上正夫の義理の弟である。そして、彼は、「熊と人と」では、太夫元になつて居たのである。が此の男、僕に言ふのだつた。――

「昨夜僕、家へかへると、僕んちの子供が、『あら、叔父ちやん、熊をどうしたの。』と言ふんだ。『叔父ちやん、熊をつれて來なかつたの。』と言ふんだ。みんな、腹を抱へちやつた。――昨日おふくろが、子供をつれて、見にきたんだ。」

「ぢや、今夜跳ねてから行かう。ところで此の熊、酒も飲めば、飯も食べるからね。その方の支度をたのむぜ。」

僕は、また其の時かう言つた。そして、僕達は笑つた。

また此の時以來である。僕の勤めてゐた演藝畫報社の連中が、僕に、

「熊公」といふニックネームをつけたのは。

「おい熊公。ライオンへ行かうか。」

「おい熊公。どうだい、景氣は。」などと言つたのは。

考へてみると、確これは、大正二年の出來事だつた。大正二年の、春三月の出來事だつた。だからそれは、今から十五年前で、僕が二十五の時だつた。

ジャーナリズムの怪傑ハースト

岸　東人

一　ハーストの後ハーストなからん

二十九歳の雜誌記者ハームズウォース（後のノースクリッフ卿）が保守黨のイーヴニング・ニューズを買收した時、フリート街は「雜誌の編輯と新聞の編輯とは全然別物である。中にも日刊新聞は生命ある有機體だ。」と云つてけちをつけた。然しイーヴニング・ニューズは立派にものになつた。のみならずロード・ノースクリッフの名はデーリー・メールやタイムズの存在とともに永遠に殘ることとなつた。二十四歳のウイリアム・ランドルフ・ハーストがサンフランシスコ・エグザミナーの全權を握つた時にはサンフランシスコ全體が嗤つた。そして『あの脛の長い、優しい聲の氣取屋が新聞記者の威嚴と責任を知つてゐるだらうか。』と云つたものだ。苟んぞ知らんやハーストは新ジャーナリズムの怪力亂神であつた。彼の黄色新聞（エーロー・ペーパー）は風を呼び雲を捲いて米國新聞界に君臨した。そして彼は今日二十七の新聞、十二の雜誌を所有する外、更に通信事業、映畫等の八社を經營しつゝある。就中ニューヨーク・イーヴニング・ジャーナルは毎週二十五萬弗の收益を擧げ、ハーストの全經營より生ずる年收は優に一億五千萬弗を超えるのである。ジャーナリズムの商業化は彼に於て完全なるサンプルを見るを得たのだ。

今日ハーストと「黄色」とは殆ど同義語の如く解されてゐる。彼の黄色新聞は米國のジャーナリズムを最下級まで墮落せしめたと云はれてゐる。然しハースト自身は「世間では俺の新聞を煽動的だと云ふが、事實は俺の新聞が單にストライキングだと云ふに過ぎないのだ。そして俺は保守主義者で、世間の攻撃は俺の氣を惡くさせる爲か嫉妬に過ぎぬ。」と嘯いてゐる。

ハーストを識る或ものは彼をグラッドストーン、ピット、パーネルに比し讃歎して止まない。然るに或ものは彼をネロ、カリギュラ、イアーゴーと同一視し眞に唾棄すべしと云ひ、倚てアル・スミスは壇上で彼を「暗中に横行する惡疫」と罵つた。而も何人も彼を一種の傑物なりとするに異議はない。そして彼が何であるにせよ、彼が百パーセントの新聞記者たることは周知の事實である。これハーストを云々する何人と雖も「ノースクリッフ卿逝いてノースクリッフ卿なく、ハーストの後ハーストなからん。」と云ふに躊躇せぬ所以である。

二　ハーヴアードを追はれるまで

何人も少年時代の記憶を辿ると、必ず傳記的興味を覺えるものであるが、ハーストの場合もまたその例に洩れぬ。ハーストは一八六三年四月二十九日にサンフランシスコで生れた。彼の父ジョージ・ハーストはミヅーリの農夫であつたが、アナコンダの鑛山を發見して大成金になつた。自らジェファアソン流民主黨員と稱してゐたが、晩年上院議員に選出された。彼は賭博を好み、サラブレッド種の馬を多數に飼ひ自ら競馬の騎手として出場したが、人好きのする親切もので、人々は彼をアンクル・ジョージと呼んで敬意を拂つてゐた。彼が死んだ時、アナコンダ鑛山の外に千七百萬弗の財産が未亡人の手に遺された。

ハーストの少年時代はサンフランシスコに於てまたはサンタ・ルシカの山中にある牧場で過された。そこでハーストは彼の父を王侯のやうに尊敬する百姓たちを見た。また父を訪問して來る西部地方の有力者たちの話に耳を傾けたり、彼等がポーカーに耽るのを眺めてゐた。メキシコの農場へ連れて行かれた時は、父の友人である大統領ディアズの宮殿を訪れた。そして農場ではバンジョーを奏することを知り、カウボーイの挽歌を聞覺えた。彼は今日でも物眞似が上手で、音樂が好きであるが、ヴォードヴイールへ出しても相當の報酬が與へられるだけの技倆を有つてゐると噂されてゐる

ハーストは一八八二年にハーヴアード大學へ入學した。彼の學業成績は平凡であつて、運動競技には全く參加しなかつた。彼はなかなかの洒落者で、ピカデイリーと云つた服を着、派手なネクタイをつけてゐた。飄輕で惡戯を好み、よくヴォードヴイールの眞似をして人を喜ばせた。當時、ハーヴアードの學生が雜誌ランプーンを發行してゐたが、ハーストはその事務を擔任してゐた。

彼はまたその頃、ボストン・グローブの所有者テーラーへの紹介狀を手に入れ、グローブ社を參觀して編輯、印刷、販賣等

の研究を始めた。また各地の新聞を集めて比較研究をやつてゐたが、或日友人等に向ひ「米國で最もよい新聞を作つてゐるのは誰だか知つてゐるか。それはニューヨーク・ワールドのピューリツアーである。俺は彼のやり方を研究してゐるのだ。俺は彼が何をしようとしてゐるかも分るやうな氣がする。多分俺は新聞を經營するだらう。さうしたら君等に仕事をやらせるぞ。」と云つたりした。

持つて生れた親分氣質があり、その上父親からは學生としては身分不相應な小遣を送つて來るので、ハーストは腕白連から一味の首領に推されてゐた。そしてこの仲間はよくビールを煽つて氣焔を擧げるのを常とした。ハーストの腕白が昂じて一度は停學を命じられたが、遂に放校處分を受けることゝなつた。或日ハースト等の一群がボストンへ出かけ夜明頃まで遊び抜いたが、朝の食事時間に何人かのメッセンジャー・ボーイが教授たちの住宅のベルを鳴した。そして「この品物を教授御自身に御渡しして領收書を戴くやうに云はれました。」と口上を述べた。その教授たちは老教授連で、また最も學者らしい紳士たちであつた。彼等が不思議の思ひで包を開くと、中から出たのは家庭用のありふれた器具であつたが、それに各教授の顔が描いてあつた。ハーストの放校は運命の必然であつた。然しハーストはハーヴァードのコースを修了しなかつたことを後で屢後悔してゐる。

三　最善か最惡か

ハーヴァードを追はれたハーストは新聞界に身を投じようと決心した。そして新聞研究のためニューヨークへやつて來た。その年の九月、ピューリツアーはワールドが米國未曾有の發行部數に達したのを祝し銀メダルを作つて喜んでゐた。ヴイラードが「新聞及び新聞記者」の中で述べてゐるところによると、ハーストがニューヨークへ來た時、彼は最善の新聞を作るべきか、最惡の新聞を作るべきかについて大いに考慮を費した。そして彼は小さくて學者風なイーヴニング・ポースト、穩健なタイムズやトリビューン、小氣味のよいサン、さては小ペンネツトのヘラルドをも採らず、俗臭紛々たるピューリツアーに學ばんとした。ピューリツアーの理論は甚だ簡單であつた。「讀者！讀者！讀者の注意を捉へよ！」が即ちそれだ。今日のワールドはウオールター・リツプマンその他の高材逸足を網羅して一流新聞たる聲價を維持してゐるが、當年のワールドは實に今日のハースト系新聞の如きものであつた。

ハーストはピューリツアーを研究し、ピューリツアーをキヤ

タログにし、更にピューリツァー以上を期待しながら一束のワールドを抱へてサンフランシスコへ歸つて行つた。

四　エグザミナー

ハーストの父ジョージは豫て民主黨の機關紙サンフランシスコ・エグザミナーに金を出してゐたが、終ひにエグザミナーを自分のものにして貸金に棒を引いてしまつた。ニューヨークから歸つたハーストがエグザミナーの全權を讓り受けたのはそれから間もない一八八七年三月のことで、彼の年齡僅に二十三年と十ケ月であつた。

ハーストがエグザミナーの椅子に座つてから一ケ月も經たぬ中に、エグザミナーの評判が打つて變つて好くなつた。二年目には西部一流の大新聞となり、數年の中には太平洋岸唯一の新聞成金と謳はれるに至つた。ハーストの成功の秘訣は何か。彼は先づ民主主義を高調した。そして特權階級に挑戰し、あらゆる惡弊を攻擊した。斬新奇拔な編輯法を試みた。名記者を聘するためには距離、金、勞力の如何を問はなかつた。そして彼は部下と爾汝相呼んだ。賞與は雨の如く撒かれた。また彼はあらゆる機會に於て自家廣告を忘れなかつた。彼が六萬弗を投じてアクイラ及びヴアムースと呼ぶ速力二十五ノットのヨットを造らせた如きもその一例である。彼の派手好きは遂に浪費（ウェーストフル）ウイリーと云ふ異名を生んだ。然し彼がエグザミナーを有利な事業に仕上げ、一つの勢力として認められるやうになつた時、人々の顏から嘲笑が消えて行つた。そしてマーク・トウエーン、マクス・オレル、ガートルード・アサートン及びヨアキン・ミラー等を特別寄稿家の中に數へるやうになり、トーマス・ナストもまた招聘に應じて來た。

一八八九年十月二十日發行のエグザミナーは四十頁に増頁し、「日刊新聞の覇王」と云ふスローガンを掲げ、爾後十頁發行を廣告した。ハーストはこの年から移民問題を提唱し、今日に至るまで白人勞働者保護のために全力を擧げて倦むところがない。この點に於て彼は正に日本の正面の敵であつたのだ。

五　ジャーナルの買收

ニューヨーク・モーニング・ジャーナルの所有者マクリーンがエグザミナーの支配人パーマーからジャーナル買收の話を持ちかけられた時、マクリーンは「イエース！僕はハースト君が僕のパートナーになることを承知する。僕の權利の半分を三十六萬弗で讓らう。」と云つたら、パーマーは手を振つて「若し君が僕同樣にハーストを識つてゐるなら、君がハーストと一所に

新聞經營が出來るものでないことが分る。」と答へた。マクリーンが「それなら幾らで買うか。」と問ひ返すと「十八萬弗即金」とパーマーが答へた。それから一時間後に下町のホテルの一室でパーマーがハーストと向ひ合つた時、パーマーが「しまつた。十萬弗でも買へたかも知れぬ。」と云ふと、ハーストはそれを遮りながら幸福さうな顏で「ネヴアー・マインド！我々はこれから大仕事をするのだ。」とはしやいでゐた。かくてモーニング・ジャーナルはハーストのものになり、一八九五年十月九日以後ニューヨーク・ジャーナルの名の下に發行された。ハーストが三十二歳の時である。

當時父ハーストは既に他界し、アナコンダ鑛山及び千七百萬弗の遺產は未亡人フエーブの手に保管されてゐた。ジャーナル買收資金は未亡人がアナコンダの權利を賣つて愛兒に餞したのであつて、フエーブは賣却金の全額七百五十萬弗をハーストに渡した。新聞勢力によるニューヨークの風靡、世界一の發行部數、ジャーナリズムの覇王を夢みるハーストが世界の前に亂舞する日が遂に來たのだ。

六　ワールドに挑戰

曾てハーストに新聞の典型を教へたものはニューヨーク・ワールドであつた。否ピユーリツアーであつた。然るに今やハーストはピユーリツアーに向つて十年研磨の劍を拔かんとするのである。ワールド葬らずんばジャーナル立たず。ハーストの決心は堅い。曾てハーストはエグザミナーの收益を見るまでに四十五萬弗を投じた。今またジャーナルのために幾許を投ぜんとするか。ハーストは父の遺產千七百萬弗の中から前拂ひして貰へる金及びエグザミナーの收益の最後の一仙をも賭けるべく準備した。實際ジャーナルが財政上の難關を通過するまでには母親から貰つた七百五十萬弗は將に盡きやうとしてゐた。

ハーストは如何なる方法でワールドに挑戰したか。彼は頁の大きさと活字の組方とは全然ワールドを眞似た。ニューズの扱ひ方もワールドに倣つた。たゞ定價はワールドの半額一仙にした。ハーストの戰術に曰く「誰でも高いものより安いものを取る。」と。やがてワールドも一仙に値下げした。挑戰に應じたのである。形勢を窺ふこと二ケ月、周圍が已に有利に轉廻しつゝあると見たハーストは突如として猛襲を開始した。彼は人を引拔くべく競爭者の事務所に屢姿を現した。社員の俸給を倍額にした。ニューヨーク空前絶後の花火を觀せた。素晴らしい記事が相次いで掲載された。記者の活動は職業的刑事をして顏色なからしめた。そしてジャーナルの部數は二萬から十五萬に飛躍

し、ワールドの部數を三萬五千に閉塞した。

彼の周圍には漸次名記者が集つて來た。ジュリアス・チェーンバー、ジュリアン・ラルフ、ステフエン・クレーンその他錚々たるものがゐた。或日ハーストはワールドの評判者ゴッダードを晝食に招いた。そして招聘の話を持ち出した。ゴッダードは卒直に「それは耳寄りな話だ。然し僕は安定を不安定と交換したくない。ざつくばらんに云ふと、僕は君がニューヨークで三ケ月持ち堪へるか何うか疑問にしてゐるのだ。」と云つた。するとハーストは微苦笑を洩しながら無言のまゝ、チョッキのポケットからくしやくしやになつた紙切を取出しテーブルの上へ投げ出した。ゴッダードが開いて見ると、ウエルズ・フアーゴー會社の三萬五千弗の小切手であつた。ハーストはもの靜に「皆でも、その中幾らでも取りたまへ。それは僕がニューヨークに當分ゐるつもりの證明になるだらう。」と云つた。ゴッダードは「話は分つた。」とばかりにジャーナルの人間になつてしまつた。

ゴッダードの外に、ピューリッツアーの股肱ガーヴアロー來り、ピューリッツアーと喧嘩別れをしたブリスベーンもまた來た。ブリスベーンは商才があり、今日ではハーストの腹心の一人であるが、ハーストはブリスベーンに一週三千弗を拂つてゐる。操觚者としては世界最高の報酬であらう。曾てケーニヒスベルクがハーストに向ひ「一人に一週三千弗は大金だ。」と云つたら、ハーストは平然として「僕は幾人ものブリスベーンが欲しいのだ。」と云つた。但しこれはケーニヒスベルクを激勵するためのデリケートな暗示であつたが、ケーニヒスベクも今日ではブリスベーン同等の待遇を受けてゐるのである。

ハーストの人材主義はエグザミナーの昔からのことで、このため彼自らも多大の犠牲を拂つて來たが、彼の事業が今日あるを得たのは全く人材主義の賜物である。そしてハーストはこれ等の連中と、ともに働き、ともに遊び、ともに食ひ、眠をもともにしたのであつた。ハーストが深夜に屢自ら植字室に出かけ職工を手傳つたことは有名な話で、彼の鮮かな紙面整理の手腕はジャーナル同人間の驚異であつた。今日のニューヨーク・アメリカンはジャーナルの後身で、一九〇二年秋に改稱されたものである。

七　新ジャーナリズム

「ロード・ノースクリッフ」の筆者ウイルソンの語るところによると、ノースクリッフ卿は、卿が新ジャーナリズムの創始者

であると云ふ説を否定してゐる。果して何人が創始者であつたかは別問題として、ハーストが新ジャーナリズムの提唱者の一人であり、また實行者であることは云ふまでもない。彼はジャーナル紙上に "While Others Talk the Journal Acts." 及び "What Is Everybody's Business Is the *Journal's* Business." 等のモットーを掲げて、一個人の機關ではなく、輿論の發表機關たることを本領とする新ジャーナリズムを標榜し、ジャーナリズムの社會奉仕を天下に宣言した。彼が自ら民衆の味方、公共利益の擁護者を以て任じたのはエグザミナー時代からのことであつて、トラストの攻撃を開始したのはルーズヴエルトがまだニューヨークの警察官であつた時代である。爾來、鐵道、石油、瓦斯、砂糖、牛肉、石炭等の問題のため、彼は屢法廷で資本家を攻撃し六十五歳の今日に至つても尙止めぬのである。

キューバ獨立運動及び米西戰爭はハーストの最も華々しい活動舞台であつた。キューバ獨立の志士等がスペイン政府の壓迫を被るや、ハーストは人道のため米國政府はよろしく干渉すべしと主張した。彼がキューバに特派した畫家レミントンがハーストに向つて「各方面平靜なり、何等事件なし、戰爭なかるべし、歸國を望む。」と打電したら、ハーストが「留まれ、君は繪を提供せよ、僕は戰爭を提供すべし。」と返電したのはこの時である。

一八九七年の八月ハーストはジャーナルの一室で各地から來た電報を讀んでゐたが、彼の眼はハバナ發の次の如き電報に引きつけられて行つた「前キューバ共和國大統領の姪にして十七才の美少女エヴアンジエリナ・シスネロスは、パイン島に監禁されをる政治犯人の暴動に加擔したる廉にて二十年間アフリカ海岸に幽閉さるゝことに決定せり。」ハーストは一讀の後、暫く默想してゐたが、忽ち「我スペインに勝てり。」と叫んだ。そして直ちに部下の一人を呼びシスネロス釋放の請願書に全米婦人のサインを求めてスペインの攝政王母に送ることを命ずるとともに、勇敢無比の記者デッカーに命じハヴアナに赴き牢獄を破壞してシスネロスを救ひ出させようとした。

十月十日の朝、市民はジャーナルを手にして思はず歡聲を擧げた。大活字を用ひた見出が次の如く讀まれた。「ジャーナルはエヴアンジエリナ・シスネロス孃を救出せり。一米國新聞は何ケ月に亘る外交當局の最善なる努力を以てしても全く失敗に終れるものを一擧に成し遂げたり。彼女は勇敢なる特派員により慘苦のハヴアナ牢獄より救ひ出され、今や米國旗の保護の下にニューヨークに向ひつゝあり。」そして一行がニューヨークに到着するや、十萬の市民と陸軍音樂隊は革命の少女と勇敢なるデ

ツカー記者をマディソン廣場で歡迎した。これ正にジャーナルのモットー "While Others Talk the *Journal* Acts." を實行したのであつて、新ジャーナリズムのため萬丈の氣焔を吐いたものである。そして彼の主戰論は輿論を動し遂に米國をしてスペインと開戰させるに至つた。

八　新聞材料の買收

ハーストは新聞を最も愛した。同時に新聞をば興味あるものにすることを考へた。そして彼は「さうしなければ、我々は闇の中で女に秋波を送る男のやうなものだ。我々は自分が何をしてゐるかを知つてゐるが、公衆はそんなことは知らない。」と云つた。

ニューヨークのブロードウエー二十六號にスタンダード石油會社の事務所がある。會社に傭はれてゐる二人のボーイ、一人をウインクフイールド、も一人をスタンプと云つた。ウインクフイールドは賭博が好きで屢金に困つてゐた。そのあげく彼が案出した一策は、會社の書類を持出して新聞記者に賣付けることであつた。そこで彼はスタンプを籠絡しハーストの部下の一記者と連絡をつけた。やがて二人は副社長アーチボルドのファイルの中から發信のコピーを抜き取り、その夜の中に寫眞に撮つてしまつた。そして翌朝早く元のファイルに納めておいた。それが何回行はれたか不明であるが、彼等が受取つた報酬は總計二萬五百弗であると傳へられてゐる。一九〇四年の大統領選擧直後のことであつた。

一九〇八年の大統領選擧には民主黨はブライアンを推し、共和黨はタフトを擁いでゐたが、獨立黨からヒスゲンが名乘を擧げた。九月十一日ハーストは獨立黨のためオハイオのコロンバスで演説することになつた。國民は第三黨に多大の期待をした。從つてハーストの人氣はすさまじいものがあつた。壇上に立つたハーストは劈頭に於て「諸君！我獨立黨は米國の政治に於る黃金の魔力が遂に國民の投票よりも有力なものになつたことを斷言する。」と云つた。そしてアーチボルドが上院議員フオレーカーその他に贈賄した事實を、寫眞に撮つた手紙によつて指摘した。全國民の興奮は遂に絶頂に達した、これが有名なスタンダード事件であるが、大統領ルーズヴエルトはこれを評して「今日まで何人も疑問としながら證明し得なかつたことを遂に證明したものである。」と云つた。

ハーストの第六感によつて剔抉された大小の事件は殆ど枚擧に暇がない。彼は讀者の注意を引くやうな新聞を作るためには殆ど手段を選ばない。彼は部下の記者を戒めて「新聞が賣れる

やうにするのに、新聞記者として重要なことは、公衆が興奮した時に同じく興奮することである。公衆は事件の報道の外に公衆自身の感情をも現してゐると思はれる新聞を買ふものだ。」と云つてゐる。こゝにハーストの強味と弱味とが潜むのである。これ時ありて彼が萬人の喝采を博し、一度誤れば批難攻撃の的となる所以である。

　昨年秋、ハーストはメキシコ大統領カイエス及びメキシコ官吏の保管する書類中から盗み出したと云ふ書類を發表した。その書類の内容は、メキシコ政府及び日本政府は合衆國の安全に對し陰謀を企て、メキシコ政府は四名の合衆國上院議員及び若干の米國記者、僧侶等を買收するため百二十一萬弗を國庫から支出したことを證明するものであつた。この報道は先年のスタンダード事件を知つてゐる國民を少からず興奮させたが、當時この陰謀剔抉が如何に人心を動搖させたかは、米國上院が直ちに調査委員を任命した一事でも分るのである。

　然るに調査の結果、右書類は僞物であり、ハーストが發表に先だち正確な調査をしなかつたことが分つた。ハーストが調査員の喚問を受けた時、彼は「右書類が全く信用すべきものゝ如く思はれた。」と云ひ張つたが、調査委員は遂に本年一月十一日、ハーストの報道は全然無根なることを公表するに至つた。そしてあとにはハーストが右書類の提供者に一萬弗の報酬を與へたといふ噂が殘された。

　かくて事件は一應解決したが、一時米墨關係が非常な緊張を示したので、米國政府は大西洋横斷飛行の勇士リンドバーグに命じ平和の使者としてメキシコ訪問飛行を行はせた。

　當時全米の新聞はハーストの不信に對して猛烈な攻撃を加へ、世人はハースト主義に乘せられたことを後悔した。

九　ハーストの政治的野心

　大統領選擧を眼前に控へた一九〇〇年の或日、ハーストは民主黨の大統領候補者たらんとするブライアンからシカゴに於る民主黨機關紙の發刊を勸説された、同時に民主黨の政治家等は民主黨クラブ聯盟なるものを組織し、ハーストを總裁に推した。シカゴ・アメリカンはかくして發行され、ハーストは實際政治に一歩を踏み出すこととなつた。

　ブライアンは候補者指名に落選した。然しながら一九〇〇年の大統領選擧運動はハーストをして民主的思潮の將來を察知せしめた。當時民衆は犯罪的富豪を攻撃せんとして自分等の指導者を求めてゐた。民衆は富豪等の罪惡が剔抉されるのを喜んだ。富豪等の沈默は罪惡の自覺を意味するものと信じられてゐ

た。そして新聞または演壇に於て富豪を攻擊する闘士は常に喝采された。ハーストは心に呟いた「富豪等は民衆に大學と圖書館を寄附した。然し民衆に民主的政府を與へるものはこの俺だ。」と。彼は又「大統領たる近道は政界で一役持つにある。」と考へた。こゝに於て一九〇二年の秋、彼はタマニー・ホールの首領マーフイーと握手した。そして直ちに下院議員に立候補したが、レコード破りの多數を以つて當選した。

議會に於る彼は甚だしく議會の尊嚴を無視して極端なる自己發揮をやつた。彼は他人と行動をともにしなかつた。從つて各派から指彈された。彼は人氣のある議案を提出しそれを自分の新聞で廣告することを怠らなかつた。彼は鐵道賃金を値下げするため各州の聯合委員會を作ることを提議したが、直ちに葬り去られた。次いで全國道路の改良案、政府工場に於る八時間勞働案、裁判官の增俸案、上院議員の民選案、政府の電信直營案トラスト退治を有効ならしめるためシャーマン法を刑法となす案等々を矢繼ぎ早に提出したものである。

一九〇四年は大統領選擧期であつた。ハーストは彼の部下及びハースト系新聞の好意を必要とする政治家等から立候補を慫慂された。彼は好機會を捕へるに躊躇しなかつた。然し民主黨大會の結果、候補者指名の榮冠はパーカーの上に落ちた。一說に彼は勝算なきを豫知してゐたが、自己の實力を知らんことを希望したのであると云はれてゐる。彼はこの運動のため二百萬弗を消費した。

一九〇五年にハーストは三年前の味方タマニー・ホールを敵側に廻してニューヨーク市長の椅子を爭つたが、タマニー市長の字名あるマツクレランのため僅少の差でしてやられた。ハーストのタマニー・ホール攻擊は猛烈を極め、イーヴニング・ジヤーナルは獄衣を纏つたマーフイーの漫畫を掲げ、人民の敵、投票の盜賊と惡罵した。

ハーストは翌一九〇六年には更にニューヨーク州知事たらんとしたが、ヒユーズをして名をなさしめてしまつた。一九〇五年及び一九〇六年の選擧戰は多年特權階級に對抗して來た彼、ボス殺しの彼が、何等政黨の後援を有せずしてハースト對ハースト反對派の一戰を試みたものであつて、彼は敗れたりと雖も天下にハースト黨あることを知り欣然たるものがあつた。

然るに一九一八年に至りかのアル・スミスがニューヨーク州知事となつたことは、ハーストにとつて一凶兆であつた。一九一九年の夏、有力なる一牛乳會社が値上を斷行するやハーストはスミスの干渉を要求した。これに對しスミスが「知事は物價を決定する權能を有たぬ」と答へたのに端を發し、ハーストは

猛烈なスミス攻撃を開始した。そこでスミスはカーネギー・ホールの演壇上からハーストに一矢を報ひたが、彼を「暗中に横行する悪疫」とまで罵つたのはこの時である。スミスのこの演説は直ちに全米に喧傳され、スミスは多數の共鳴者を見出した。

一九二二年はハーストの政治的生涯に重大意義を齎した。何となれば彼はスミスを敵としてニューヨーク州知事の地位を爭つたが、衆望を擔ひ且つタマニー・ホールの後援を有するスミスのため見事に敗北し、爾來政界に野心を絶つたと稱せられるからである。

本文を草しつゝある時、ニューヨーク發聯合通信は、目下パリに滞在中のハーストが二十七のハースト系新聞を擧げて共和黨大統領候補フーヴアーを應援すべく決心せる由を報じて來た。これハーストがシカゴ・アメリカン以來の民主黨との關係を拋棄してスミスを攻撃せんとするものであつて、その攻撃の猛烈なるべきこと想像に餘りある。

一〇　ハーストの結婚

ハーストは多忙な男だ。彼は仕事を殆ど電信と電話でかたづける。彼は信書のファイルを有たない。彼はその位多忙な人間ではあるが、常に忙中閑日月を見出すことを忘れない。彼は年に二回キャリフオーニアに歸るが、途中シカゴに滞在して自己經營の新聞を視察し鞭撻する。彼は毎年夏ヨーロッパに遊び、繪畫、彫刻等を許す限り買入れる。彼のコレクションは多數のエジプト、ローマ、ギリシヤの古代遺物を網羅してゐる。稀代の翡翠、花瓶、二つの木乃伊等は英國博物館でさへ見られぬものである。彼はまた大の演劇好きで劇壇の人々とも交際が多い。

一九〇二年の秋のことであつた。ヘラルド・スクエアー・セアターで喜劇「パリから來た娘」が人氣を呼んでゐた。ルイス・マン、クラヽ・リプマン、ジョセフ・ハーバート等がスターしてゐる一座である。一座の中にウイルソン姉妹として知られてゐる二人の娘がゐた。姉をミリセント、妹をアニタと呼んだ。二人の父はヴオードヴィールのダンサーとして有名であつたジョージ・ウイルソンである。

或夜ハーストは「パリから來た娘」を觀た。そしてミリセントの美貌と華やかさに魅せられた。ハーストは毎夜、部下のパンコーストを同伴してはヘラルド・スクエアー・セアターに現れた。そしてアニタとパンコーストが附添役の格でミツドナイト・サッパーの卓に着くのを例とした。當時モーニング・テレグラフが人氣投票をやつたところ、ミリセントの票數が躍進的に

增加して遂に一等の名譽を擔つた。云ふまでもなくハーストの盡力の結果である。

ハーストとミリセントとの間に戀が成立つた。そしてジヤーナルの事務所と劇場との間に花と贈物がしきりに往き來した。ハーストはレキシントン街一二三番の邸宅を買入れ部下のアーサーを住はせておいたが、ハーストは二階の廣間を使用してゐた。ハーストとミリセントがグラマーシー公園を手に手を取つて散歩するのが屢見られた。

一九〇三年四月二十八日、ハーストの第四十回の誕生日にグレース・チヤーチで二人の結婚式が擧げられた。そしてその日の午後、二人はヨーロッパへの長いハニムーンに出發した。

二　雜誌と映畫

ハーストは一九〇三年の晩夏の頃ロンドンに滯在してゐた。或蒸暑い朝、彼はバスロープを着、スリツパーを穿いたまゝ新聞雜誌を見ちらしてゐたが、そのうち彼の眼は自動車雜誌カーに吸ひつけられた。それから數時間後、一通の電報がニユーヨーク事務所のヴタツシー宛に飛ばされた。「自働車專門の雜誌發行に決した、君の監督を望む、郵送のカーを見られ度し。――ハースト」

やがて雜誌モーターが發行された。これがハーストの最初の雜誌である。そしてモーターは自動車雜誌として世界第一の成功を收めた。ハーストは次で一九〇五年にコスモポリタン(後に英國版をも發行した)を發行した。これまた發行部數百萬を超えた。ハーストはモーター・ボーテイング、ワールド・ツーデー、ハースツ・インターナショナル(コスモポリタンに合併)その他の雜誌を次々に發行したが、就中グツド・ハウスキーピングは年々二百萬弗の收益を見つゝある。同誌が成功した理由の一つは、有名なるワイリー博士を聘してグツド・ハウスキーピング研究所なるものを設け、食糧品の檢査を行つて有害食品の廣告を拒絕したことにある。その結果「ワイリー免許」に多大の權威を生じ「ワイリー免許」を得んとする廣告が激增し莫大な廣告料收入を得たのである。

モーター創刊以來、ハーストは約二十種の雜誌を發行した。尤もその中には廢刊したものも合併したものもあり、現在では十二雜誌を經營してゐるのである。

次にハーストの興味を惹いたのは映畫であつた。彼はインターナショナル・ニユーズ・リール・プロダクション(時報專門)及びコスモポリタン・プロダクションを設立した。一九一六年のことであるが、ハーストは映畫フアンの好尙が必ず藝術的映

に轉換すべきを豫想し、ニューヨークのイースト・サイドに一大撮影場を設け、監督としてアーバンを聘し高級映畫の製作に着手した。然るにその遺口が全くハースト式で、例へば女優の衣裳にアイリッシュ・レースを使ふとなると、ベルファストから最良品を多量に取り寄せたものだ。從つて普通なら二三十萬弗で濟む撮影費がその十倍もかゝつてしまつた。その結果、前者は成功して世界的に歡迎されてゐるが、後者は大失敗に終り映畫王を夢みたハーストも多大の努力を拂つた後遂に手を引いた。彼の損失實に七百萬弗と稱せられる。

コスモポリタン・プロダクションは遂に閉鎖されたが、一人の映畫スター即ちマリオン・デヴィースを世に出したことは慰むるに足るものがある。彼女はハーストの舊友レデラーの義妹であるが、今日米國に於て最高給を得てゐる五人のスターの一人である。

一二　ハーストと米國民

ハーストが操觚界に入つてから四十年、その間彼は常に民衆の味方であつた。彼はウイルソンがまだ大學總長であつた頃に國民發議權（イニシエーティーヴ）、國民決議權（レフエレンダム）、撤回法（リコール）等の制度を主張した。急進黨のラフオレットがまだ政界の表面に現はれぬ時分から既に上院議員の民選を唱へてゐた。彼は新ジャーナリズムを獲得しそれを實行に移した。ジャーナリズムに近代式大企業の組織を與へたのもまた彼である。世界大戰勃發後、英國政府及フランス政府がハーストの國際新聞通信社に對し通信檢閲後の改竄を禁ぜんとした時、彼は「米國人のための米國新聞」を主張し、言論の自由のため敢然として兩國政府と戰つた。彼が新聞と雜誌を通じて知識を普及した功績は蓋計り知れない。

然らば彼は米國民のリーダーであり尊敬の的となつてゐるか事實は決してさうではない。米國民は彼の報道、彼の高壓力の論説によつて單に享樂の機會を與へられるに過ぎないのだ。彼の主張が何であつても、讀者は彼の動機に信をおかぬのである。世界大戰の當時、彼はアイルランドの獨立を援助し、また米國の參戰に反對した。加之米國の參戰後と雖も聯合國を攻撃して獨逸を賞揚し、或は戰爭反對を唱へたりした。このため彼は一時國民の怨府となつたのみならず國外に於る信用をも大いに失つた。ハーストに對する國民の態度がかくの如くであるから、彼が大政黨をリードしまたは大統領たる日は未來永劫に來らぬであらう。況やアル・スミスの擡頭はハーストの政治的野心に對して益々重壓を加へつゝあるをや。

ハースト夫人は今は五人の男兒のよき母である。彼女は頭腦

明晰な婦人で好んで、公共事業に盡力する。夫人はまた企業的才能に富みロンドンで發行するナッシュス・マガジーンを主宰しつゝあるが、今日同誌はヨーロッパ第一の發行部數を誇つてゐる。夫人はまた民主黨に入黨してゐるが、曾て黨では下院議員に立候補することを勸めた。

ハーストの長子ジョージは今年二十四歳であるが、新聞事業が好きでエグザミナーに勤務し、編輯、營業等の全般に亘つて研究しつゝある。人あり、「ハーストなき後何人が後繼者たるか。」をハーストの要人の一人に尋ねたら、彼は「誰でも金庫に最も近い人間。」と答へたさうだ。或はこの皮肉が事實となつて現れるかも知れぬ。曾てハーストは「新聞事業は自分の知つてゐる仕事の中で最善のものだ。自分が若し再生出來たら、自分は新聞記者になる。そして前世よりよい記者にならうとするだらう。」と語つた。米國に第二のハースト出るや否やはともかくとして、ハーストを失つたら、米國の民衆が一種の寂寥を感ずるであらうことは想像に難くない。

本社新舊社長送迎會

本社前社長麻田駒之助氏が多年本邦文化の上に盡粹された功勞に酬へ、新たに社長に就任された島中雄作氏の前途を祝福するの會は、學界、文壇、論壇、政界諸名士發企の下に、九月二十五日午后六時より丸ビル精養軒で催された。當日出席者百五十名非常な盛會を極めた。

會は吉野作造氏司會の下に行はれ、德富蘇峰氏、高島米峰氏、早川鐵冶氏、里見弴氏、久米正雄氏、上司小劍諸氏の祝辭あり、之に對して、麻田、島中新舊兩社長の挨拶があり、次いで安部磯雄氏起つて「中央公論社萬歳」の發聲に參會者一同唱和の裡に閉會。

左に當日の出席者を錄する（五十音順）

安部磯雄、淺原六朗、稻毛詛風、生田葵、石井滿、今村力三郎、今井邦子、石川武美、生田花世、池谷信三郎、宇野千代、宇野浩二、江木翼、岡田信一郎、岡田三郎、岡本一平、小汀利得、小川未明、小野俊一、小寺菊子、大山覺威、鵜久允、大野保平、上司小劍、加藤朝鳥、河井醉茗、上泉秀信、川合貞、片岡鐵兵、清澤冽、岸田國士、北澤新次郎、北川千代、久保田万太郎、久米正雄、小村俊三郎、小島政二郎、小島烏水、今東光、小杉天外、佐佐木茂索、佐佐木ふさ、里見弴、笹川臨風、堺利彦、佐佐木信綱、白柳秀湖、下村千秋、四條隆信、島中雄三、杉山義顯、關露香、鈴木博尚、相馬由也、田中王堂、田中貢太郎、田村松魚、高野敬錄、高畠華子、高島米峰、高須芳次郎、高柳賢三、高木島三、千葉龜雄、近松秋江、都河龍、中谷三、德富蘇峰、德田秋聲、豐島與志雄、中村武羅夫、永田衛吉、中村吉藏、中島德藏、長谷川孝太郎、長田秀雄、長田幹彦、長井庄一郎、永見德太郎、西川文子、野間清治、野々村賢彌、馬場恒吾、原田實、早川雪洲、林房雄、長谷川時雨、廣津和郎、福島一郎、藤森成吉、藤澤衛彦、福田良太郎、帆足理一郎、細田民樹、細田源吉、米田實、前田夕暮、正宗白鳥、正宗得三郎、三輪田元道、三宅周太郎、三宅やす子、宮駿六、宮島新三郎、室伏高信、村松梢風、森口多里、安成二郎、矢田挿雲、山本實彦、山本有三、與謝野晶子、横光利一、吉井勇、吉江喬松、吉野作造、吉井哲三、若杉鳥子、和田古作、渡邊銕藏の諸氏。

ファン心理

愚かなファンより

片岡鐵兵

今は忙しい身體になつたので、野球にも餘り行かなくなつたが、それでも、頭がつまつて仕事に行惱む日に空が晴れてゐて面白い試合があるといへば、ぶらりと出掛けるのに躊躇はしないものだ。

時々はワイフもつれて行くが、このワイフが亦、去年の秋のリイグ戰からの病みつきで、野球見物用の座蒲團など拵へてゐるほどの、ファン(ファンと云ふ字の女性は無いのか知ら。もしないのなら斯く野球好きの多くなつた日には女の名譽のために拵へておく必要があらう。ファネスとか、ファンヌとか云ふやうな字を)なのである。

私は早大びゐき。といふのは別に理屈があるからではない。學校關係から云へば、寧ろ慶應ファンであるべきだし、早大文學部に好意や憬れを持つてゐるわけでもないのだ。ところが、野球だけに早大びゐきを昔から變へないでゐる。

おそよ相撲とか野球とか、さうした勝負ごとに對するひゐきなどいふものは、正義感が干與しない限り、その動機は下らない。早稻田の近くだとか、あの關取とは面識だとか、そんな偶然の原因から、好きや嫌ひが出來て來る。彼奴が負けて與れゝばと願つたり、勝つて欲しいと望んだり、他人のことで力瘤を入れては、時間と精力を浪費する。野球に於て、さうした我々自身を屢々見出しては苦笑するのだ。

私が十二三の小學生の時、早大野球部が米國への遠征から歸つて、キヤプテンの橋戸頑鐵氏が、「最近野球術」を著した。定價は確か三十錢位だつたと思ふが、私はその頃中學生だつた從兄と半分づつ金を出し合つて、一部買ひ求め、貪るやうに讀み耽つた。

私が早大びゐきであるのは、さういふ所に端を發してゐる。幼い時の頭に浸み込んだのだから、仲々拔け切れない。又、拔け切つたところで、生活がかはるわけでもなし、拔け切れないでも、不自由なものでもなし、要するにどうだつて好い負擔(?)だから、自然のまゝの早稻田びゐきで、今日まで通ほしてゐる。

然し、このファンのひゐきと云ふ奴は、それほど呑氣なものではない。ゲエムを見てゐて、早稻田の危機に際會すれば、忽ち緊張する。早稻田勝つか負けるかゞ、その瞬間、敵の投手が投げるボオルを、打者が打つか打たぬかに存する時、私は何故今日野球なんか見たのだらうと後悔す

る。こんなに心配するのなら、わざわざ來るんぢやなかつたのに……。

ひゐきの守備はいつもハラハラさせる。敵の打つた球が遊撃を襲へば、宮永たのむと叫びたくもなる。味方のピッチャアは馬鹿にコントロオルがわるい。ツウワウでもう四球を豫想する。全く取越し苦勞だ。また味方が攻める時には、打者のバツトが、しめつたバット（煙草の）やうに融通のきかない感じだ。

早稻田びゐきにとつて、憎くさも憎きは明治の中村、同じく永澤だ。どうもこの二人は敵ながら天晴れと云はずに居られない。

慶應の宮武も、私は好きだ。いつか――慶法戰で吉田が投げた球が宮武の身體にあたつた。デット・ボオルだ。吉田が何か詫び言を云ふと、一壘へ走りながら宮武、左の肘かなんかボオルの當つた個所をさし示しながら「いや、大丈夫です、こゝですから」とか何とか答へながら、そのまゝ走つて行つた時の彼には、その善良な氣質が躍如として、又なく感じが好かつた。

ワイフはワイフで「秋田さんが出るから」と云つて、法政の試合を見に行きたがる。

私はまた、立教の片田、帝大の東などが好きだ。

野球を見てゐると、自分でもやつて見たくなる。去年は、横光、石濱などでチームを作り、歌舞伎座と一戰に及んだ。場所は畏く勿れ神宮球場だ。私は二十年振りに硬いボオルを握つたのだが、シイト・ノックでヘトヘトに疲れ、いざプレイとなり、ブウッとサイレンが鳴つた時（おお、ユニフオムを着、グラウヴをはめ、グラウンドに立つてあのサイレンを聽からとは！）私はやめてしまひたくなつた。

歌舞伎座は殆ど全選手が慶應學生の精兵でピチピチしたプレイ振りだつた。とても齒が立たない。味方は、持つて行つた二本のバットを二本とも折り、仕方がないから敵方から一本借りたら、それも割つてしまつた。みんな、一體どんな振り方をしたのか？ 私は安打一本、バンド一つの、三振一度の成績で、五回までやると、もう鬪志なく、十對三でコオルド・ゲームにして貰つた。

新宿の方から行く道順で、私は神宮ではたいぐわい三壘側のスタンドに行くが、それがひゐきの側でない時――たとへば三田稻門戰なら、三壘スタンド三田側である場合など、三田の旗色が良いにしろ惡いにしろあたりの何百人の心理が一つの氣流となつて私の胸に突きあたつて來るのを感じる。それが敵方の心理であるだけ、その反對の立場からは、手にとるごとく理解される。

「勝たなくても好いさ。こんなに面白いゲームを見たら滿足だよ」

味方が負けても、何所かに慰めを見出さうとしてゐる。

が、この言葉から、

「ゲームが面白くなくても、勝てば好い」といふ言葉も抽き出して來られる。

そして、この二つの言葉は、ファンにとつて兩方とも眞理である。

この兩面の眞理から、私は私どもファンが選手たちによつて巧まずして翻弄されてゐるのを知る。我々ファンは、みじめな存在ではないか！

「カツプを出したり、色々とスポオツを奬勵することだな。國民のセンセエシヨンを、そんな所に集中させて、日常の不滿を忘却させるに限る」我々愚かなファンを尻目にかけて、爲政者たちはそんな事を云つてるかも知れない。

負けさせたくない心

澤田正二郎

こゝ幾年來、避暑避寒の長滯留は勿論、たつた一日悠乎休んで物見遊山を樂しむ暇もない慌しい生活に追はれてゐながら、野球だけは、隨分無理な暇を盜んで覗きに行つてゐる。いや、單に見にゆくばかりでなく、最近數年間は自分の劇團一座の內部にも特に野球部といふものを作つて、時には私自身、ユニホームに身を固めてボックスに立つことも屢々であつた。全く、職業の芝居の外に殆ど何の道樂をも自ら求めない私にとつて、馬と野球だけが、道樂と言へば道樂と言へやう。してみると私もまた一個の熱心な野球ファンたるを免れない。

○

だが、もし、ファンと言ふ意味を狹く解釋して、例へば、何大學のチームにばかり一生懸命の肩をもち、そのチームの勝利にのみ變身をやつして逆上せあがるといふのがファンであるといふのなら、私は反對に全然ファンたる資格のない人間だ。何となれば、私にはどうしても、ある特定チームの勝利ばかりを祈る氣持にはなれないからである。勿論、私も早稻田を出た關係上、學校にゐた時には、早稻田が大敵を仆したからといつては有頂天になり、敗けたからといつては人並以上の悲憤慷慨もしないではなかつたし、今でも早稻田稻門の名には或種の大きな感激をもつてゐるが、さてスタンドに陣取つて、兩軍の奮鬪を見てゐると、すぐ冷靜に返つてしまつて、一方のみのために祈るといふやうな氣持は全然無くなつてしまふのである。私の野球趣味は、野球技そのものであつて、どうも應援氣分ではないらしい。

と、言つてしまふと、いかにも通らしく、或はいかにも不人情に聞こえるか知れないが、これは全く私の實感だから致し方がない。勿論、私といふ男は、決してそんな野球通でも、無感情な人間でもない。これは實に、長年の俳優生活からきた私自身の不思議な經驗である。

それはどういふことか。

○

一と口に言へば「身につまされる」といふことである。

先づ私が野球場のスタンドに落付く。兩軍選手の練習からシート・ノック、やがてプレーの聲がかゝる。緊張しきつた選手の面持、見てゐるともう堪まらなくなる。全くその時、私の胸の血は涙ぐましいほど感激してくるのである。この晴れの戰場に出るまで、彼等はどんな苦しい猛練習をしたゞらう、そして晝間の練習中は勿論、夜の目も忘れぬ今日までの彼等の苦心の代償を、今こそ懸命に求めてゐるのだ。さう思ふと、私の胸はつまつてくる。これこそ初日の舞臺に立つ私自身の姿ではないか。狂言の選定に、演出の苦心に、夢寐の暇にも絕へない苦惱と稽古を重ねて、その努力苦心の收穫を今こそ公に示し訴へる舞臺の上――これ

ほど悲壯な氣持、これほど緊張した氣持があらうか。私はすぐ、汗にまみれ泥にまみれ、脛を剝ぎ肱を傷けての彼等の懸命な今日までの練習努力がまざ／＼目に見える氣がしてくる。そこで、一球の捌き、一棍の響きにも、彼等の動作の一つ／＼が、まるで自分でやつてるやうな異常な緊張に夢中になつてしまふ。だからエラーを見る時などは、人事ながらもヒヤツとする。そのうちゲームは一回、二回と進んで、いつか兩軍の得點に差が生じてくる。さあさうなるとそこで初めて、私の心にある贔負心に似たものが湧いてくる。それは負けてる方へ引かれる心だ。何とかして相手の得點に追つ付かせたい！ 急に私の心に新しい不思議な感情が働き出す。がしかし、若し幸に後者が逐つ付いて、更に形勢逆轉、一點でも相手を追越さうものなら、私の心も反對に、今度は新たに追越された方に、追ひ付かせてやりたくて一ぱいになる。結局詮じつめてみると、何方も負けさせたくないことになるのだ。勝敗必ず決すべき野球技の見物に、これはまた矛盾した話だなどと、笑つてはいけない。私はいつも、それでハラ／＼して見てゐるのだ。努力精進の裏切られるといふこと、これほど悲慘な姿はない。俳優生活にゐる私の日常が、餘りに多く、努力の結果に身の興亡を賭して暮してゐるからだ。偶然の勝利を望んで身を切る努力を經驗しないものにはこの人情は解らない。

○

では、なぜ勝ち負けのある野球の競技を見るのだ。これは私に、何故負け嫌ひのお前が、勝敗常なき演劇に身をおくかと、かういふのと同じ質問だ。私の希望は、たゞ不斷の努力を積んで、これを懸命の力でためす壯烈な人生に接したいのだ。一生懸命の姿、これほど麗しい尊い姿があらうか。だから私は、何よりも、練習不足のゲームが一番不快だ。實を言へば私の一座にも、最近まで東鐵[illegible]電の猛者と伯仲の技を有つチームがあつたのだが、夜を深かす職業柄と、練習場のないため、肝腎な練習が不可能だつたから、惜しいことゝは思ひながら斷然解散させてしまつた。(三、一〇、六)

勝てよＫＯ

水木京太

正直のところ、私はいつでも勝てよ慶應である。それは野球だけに限らない。庭球とラグビイとを問はない、見たことはないがボオトでも角力でもさうである。だからたゞのひゐきといふには、公明正大を缺く少少不穩當なフアンかも知れないが、私はこれを別に恥だとは思つてゐない。――それぞれの學校を出た早稻田びゐき明治びゐきの心情も、結局母校の選手のフアイン・プレイを望み勝利を祈ることに歸するのではあるまいか。私はそれを當り前だと思つてゐる。

ひゐきの引き倒しとよく云ふが、私は私なりの見方から俳優では尾上菊五郎と山本安英とのひゐきを以て任じてゐる者である。しかし同じく期待に目を輝かせて接するとは云へ、その人達の舞臺を鑑賞する時と慶應テイムの仕合を見物する時とは、大部氣組みのちがふのを否まれないそれは藝術とスポオツとの相違から來るものを云ふのではない。塾生の仕合の場合には自分も片棒かついで戰に臨んでゐる氣持になる。――その理由は至極簡單である。私が慶應ボオイであり、更に今でも三田山上

で學生の群に交つて暮らしてゐる人間だからである。

ことに五六年前豫科に關係してゐた時分は、個人的にも選手を知る機會があつたから、仕合については一層關心を持つてゐた。教へ子などと云へばこつちがいやに氣むさくなるが、教室ではおとなしい學生に過ぎない青年が、衆望を荷つて懸命にグランドで戰つてゐる樣を目睹したらその健氣さに是非とも勝たせたいと祈る氣持になるのは當然であらう。中でY君は愛すべき好青年だつた。いつか避暑地で一緒になつて、われわれ素人仕合の審判を頼んだりもしたことがあるが、本科に進んでからも銀座や芝居で逢つては無邪氣な立話しを交す仲だつた。

「どう、この頃體の工合は。秋出られるかい。」

「えゝ、大丈夫だとは思ひますが。」

「實塚つて云ふと、君はきつと來てるんだね。」

「皮肉だな先生は。――いつか僕の作文に、テイム・ワアクがないなんて云つたりして。」

さういふY君が本三になり主將となつた時、早慶戰が復活された。戸塚のグランドに溢れる觀衆の中で、私は多くの慶應ボオイと共に塾の勝利を祈りながら、特にこの病主將の野球生活に花を飾らせたい氣持も強かつたことは事實である。私は文學部へ轉じてから、知り合ひの選手を一人も持たない。わが「三田文學」には殆んど毎號スポオツの記事が載る程仲間にも好きはゐるけれど、上手はゐないと見えて文學部からは選手が出てゐない。私はその後は選手の消息を同僚の井汲清治君から聞く位のものである。

去年だつたか、三田文學の同人が大阪へ講演に行く時、丁度三田稻門戰で下阪する慶應早稻田の現選手一行と同車した。その時、迂闊な話だが、これまでグランドと新聞だけで姿を見てゐた早稻田の選手も、わが慶應の選手と同じやうに、實に無邪氣で快活な學生なのを發見して大變愉快だつた。なるほど、どこの選手だつてまだ少年くさい青年な筈だつた。巨人だとか怪腕だとか、それは運動記事の形容詞で――兩軍いづれも學生服の談笑者ばかりで、トランプに飽きると入り代り立ち代り食堂車へ行つては、お腹をさすつて出て來るのを見て、思はず微笑まれるのだつた。

各大學のテイムとも、優り劣りのない愉快な學生の集りであらう。だからこそリイグ戰も面白く見られるわけだが、野球フアンの私も慶應ボオイたる以上は、特に母校の選手を愛しその勝利を念じたとて別段不合理にも恥辱にもなるまい。――選手に個人的の知己はないが、この頃の塾のテイムに私の私かに傾倒してゐるひゐき役者が一枚ゐる。それは腰本監督である。去秋の「文藝春秋」座談會、大阪三田會での卓上演說、最近の「三田新聞」座談會――それらに依つても、同監督がいかに腹の据はつた信念のある頼りになる人であるかゞわかる。塾の野球部が同氏の如きガッチリした人に陶冶されることは、われ〳〵慶應フアンのよろこびでなければならぬ。

序だが私が學生だつた大正初頭は、早慶戰中絶時代なので、血を躍らすやうな仕合は對一高戰だけだつた。明治は塾の投手だつた石川などが行つてから陣容を整へ出したと覺えてゐる。だからその頃の對明治戰は、手ならしの内輪仕合といふ氣がして見物してゐても闘志が湧かなかつた。――私には未だにその氣持がとれない。法政立教と戰ふ時よりも勝負が氣にならない位だが、或時代の慶應フアンにこの氣持のあることを附言しても徒事ではあるまい。

ともあれ、仕合をやる以上は勝てよ慶應である。勝てば愉快だから。——ことに傳統的のよき敵であり、互角の力量ある早稻田テイムとの場合は猶更である。——私はこの種の慶應びゐきなのである。

なぜ慶應が好きか？

六代目　尾上菊五郎

なぜ慶應が好きか？……といふ下題で何か書けと註文された私は今更の樣に私はなぜ慶應が好きなのか、またなぜ好かねばならぬのかをいろ〳〵と考へて見た。が別に大した理由のあらう筈もない、心當りのことを思ひ出すまゝに簡單に書き並べて見る。

兎角世間といふやつは何彼とうるさいものだ。そしていつも矢おもてに立つて働いてゐる者等は良かれ惡かれ事每に無暗矢鱈に槍玉にあげられてしまうのであるが、私が何んなに野球狂であらうと、またそれが爲めに何んなに慶應が好きであらうと何んでもない筈だらうに、尾上菊五郎なるが故にいろ〳〵とむづかしく、面倒なとりざたをされるのは少くとも私自身では面白くもない事だし迷惑な事でもあると思つてゐる。

私はもつと遠慮もなく、氣兼ねもなく心のまゝに野球を愛したいといつも願つてゐる。

なぜ慶應が好きか？……と問はれたら私は直ぐ、私は眞底から野球が大好きであるからだと答へる。そしてこれだけ答へれば充分だらうと思ふ。

私は正に野球が好きであるから慶應が好きなのであつて、同時にまた私は野球が好きであるが故に早稻田も、明治も帝大も立教も法政も皆んな好きなのである。

所で私は今から言ふと、私がたゞ慶應だけが好きで他校のチームが嫌ひでありながら、私が人氣稼業なるが故に、こんな御世辭つたらしい事を言ふのだらうと思はれるかも知れないが、決してそんな理由のものでない、野球の場合に限らず生來私といふ男は何んな場合でもお世辭つたらしい事は何よりも大嫌ひである事は世間でよく知つての通りだ。

然し、少くとも現在の私はいろ〳〵の事情から早稻田や明治や帝大や立教やそして法政よりも一層慶應といふものに接近してゐる、そのチームの內情にも通じても居れば、從つてそのチームの戰跡をもより以上に心にかけるといふ事になるのであるが、これは人情のしからしむる處當然な事だらうと思ふ。

私は次に前に述べた、いろ〳〵の事情について極く簡單に說明を加へて置く。

以前私が初めて野球を初めた當時は私はまだ野球道の多くの人達と交渉も少く、早稻田を卒業して私の所へ來て私の身のまはりの雜務をやつてくれる事になつた柳澤といふ男を中心に、河野君の依賴で寶塚の協會から理由があつて私が預つてゐる山本（今大連實業にゐる）等がゐてしきりに私の野球熱を昂め、間もなく、大加大もやつて來る、（立石も大每にゐる）も引取つて養ふ、柳田も市村座に入るといふ事になつて、私の率ひる寺島チームも強くなれば、私自身の野球眼もやつと廣々として來たといふ理で、その頃は皆んな早稻田系統の人達ばかりで、從つて高松

君、有田君、大橋君、根本君等といろ〳〵な人が私の家や芝居へよく遊びにも來てゐた。そしてその頃の私は早稲田のチームの内情にも通じまたその戰跡を一番心にかけてゐる理由でもあつた。

けど、私の野球熱はそんなことでは止まらず、月日に進昇して、野球道の多くの人達とも交際する樣になり、間もなくナインスター・クラブの設立を見るに至つたが、もうその頃には私は一等多く深く慶應系の人達と友達となつた理由だ。

ナインスター・クラブの大半は三田クラブの人達でその人達はといふと、櫻井君、小山君、三宅君、島田君、新田君、野坂君なんといふ面面で、私はかうした斯界の識者の多くを身近く友達に得て一層野球を知り、野球を愛す事になつて行つたのである。私は毎日の樣に今でもクラブの人達と必らず一緒になつて遊んだり、話したりしてゐる。そしてそれが一番愉快だと思つてゐる。

勿論ナインスター・クラブも今では、駿台の小西君や稲門の石井君等が入會して大變にぎやかなクラブになつては居るが、かうなると私は自然に、何處の學校のチームよりも一番慶應に接近する事になり、その内情にも通ずる事になるといふ理由だ。

勿論その間小西君を介して、明治の人達とも大部仲良になり、永澤君錢村君、中村君、田部君なんていふ連中も練習の休みの時にはよく芝居の方へ遊びにもやつて來る位だ。

また大每の連中等も上京すると、皆んな揃つて私の所へ遊びに來てくれる。

錢村君が或日岡田君に「寺島といふ人は慶應が好きで、野球は二のつぎだと思つてゐたが會つて見ると、ありや本當の野球狂なんですね」と言つたことがあるそうだが、前にも言つた通り私は根からの野球好きであつて、それが爲めには誰にもまねる事の出來ない本當に堅實で眞面目な錢村君のいつものプレー振りも眞心から愛する事も出來る積りだ。

大分ごた〳〵とごたくを列べたててしまつたがまだ私はいろ〳〵な事情の二、三を附き添へて置かねばならない。それは、私は幼少の頃關澤の大先生の家へしばらく預けられて面倒を見てもらつた事があるといふ事。また、昔からいつも芝居道での道づれである田村の家の親子が慶應出である上に、近くは私のせがれの丑之助も、右近も皆んな慶應のお世話になつてゐる。

「若き血に燃ゆるも‥‥」せがれ丑之助に習つて覺え唱つてゐる親父である私なのだ。

そんなこんなで現在の私は確かに慶應が一番好きだ‥‥といふ事になる理由だ。

時代遅れのファン

今　東　光

——依然たる僕は、慶應チームのファンだ。

小さい頃のファンだつた僕は、慶應當年の名選手菅瀬の投球振りや、輕快な佐々木の面影を眞似したものである。父が船乘りだつた關係上、僕は若冠の頃まで神戸市に住んでゐたが、此の開港場は早くから野球や蹴球やゴルフやクリッケットが行はれたらしい。あの頃を回顧すると高

速度映畫のスローモーションで、それ等の様々のシルエットが浮んで來る。居留地の青い海のやうな芝生のグラウンドで、クリケット倶樂部が慶應の遠征軍と白熱戰を演じた光景などが、そゞろに懷しく想ひ描かれる。驚異すべき夢は、アメリカの巨人軍(ジャイアント)だつた……

僕が關西學院の生徒となり、野球部に籍を置いた時分は、關西學院もなかなか強かつた。早稻田大學で鳴らした松田捨吉氏がコーチャーで、今の柳田兄弟(剛誠氏は今年の甲子園中學野球大會での審判だつた)、それに死んだ左利きの松田君、明石君、竹中君などが選手だつた。その頃強いチームとして知られた横濱商業が遠征して來た。確か居留地のグラウンドで交戰した。横濱商業は投手山口君、捕手平井君、遊擊加藤君だつたと覺えてゐる。

僕が文學に志を變へて、ベースボールから遠去つた時分には、もう之等の選手は日本の有數のプレーヤーになつてゐた。僕は故松田君や明石君や竹中君が慶應選手として戰ふのを影ながら見たり聞いたりしてゐたのである。

僕自身、かつては野球部に籍を置き、慶應義塾の選手になることを唯一の望みとしたこともあつたので、僕は毎に終始一貫した慶應ファンだつた。關西學院では僕が一年の時に明石君は四年だつた。故松田君の弟とは同年級で兄さんが三年、竹中君は一年上の二年生だつた。しかも竹中君とは夏期水泳の五十町遠泳の時は確か共に並んで敏馬(みるめ)の濱から泳いだ筈である。こんな小さな記憶がいよいよ同君等が學院の中學部を卒業して慶應に入つても、僕を忘れ難いものにした。その後、僕の舍弟が慶應の理財科に學んだりしたので、僕の慶應品屓はいよいよ強く厚いものになつた。

僕は慶應が勝つと嬉しい。しかしながら武運拙なく敗けても、その敗けつ振りがいよいよ氣に入るのだ。惚れて見るとアバタも靨に見えるさうだが、實際このファン心理なども誰し「惚れ」の一種に過ぎない。よく角力などを見てゐる人の中で、勝角力にばかり聲援してゐるのがあるが、あれなどは愚の骨頂だ。勝つても負けても角力の女房が離緣を取らないやうなものでなければ、少くとも品屓の味ひや樂しみなどは摑めるものではない。デムプシイの女房など、その點、言語同斷と言はなければならない——デムプシイはタニーに二度敗けたので若し三度敗けたら離婚訴訟を提出すると女房が脅迫してゐる。

それでは慶應ナインの何所が好いと言はれると困る。漠然と言へば、あの一體にスマートな感じが好いのかもしれない。何所のチームに比較しても一番灰汁(あく)拔けがしてゐるやうな氣がする。

その代り大學チームとしては、一般にプロフエッショナルな感じがするだけ、見た眼に何だか勝負が汚い。それは學生らしい無邪氣さが勝負の上に橫溢しないためかもしれない。それだけ玄人臭いのだ。

僕は近頃、仕事の性質上、さうして文壇人の有數なファン諸君のやうに、務めてまで見る機會を多く失つてゐる。しかしシーズンが來れば矢張り何よりあの一種奇妙に魅力のある野球記事に、より多く興味を惹かれる。僕の舍弟など慶應が戰ふ時は、必らず會社をずる休みして、女房まで同伴して出かけて行く。若い夫婦のそのファン振りは常に僕を瞠目

せしめる。早くスタンドに婦人席を設けるやうにしなければならないと思ふ。さうして事實、これは今日の若い日本婦人のひとしく希望してゐるところではあるまいか。

今日の慶應チームは何といつても宮武の投球、福島の猛打を擧げなければなるまい。しかし今更ら僕ごとき門外のファンの言ふまでもなく慶應チームの各員に就いては普く人の知るところだ。僕は塚越のスピードとコントロールに將來の希望を繋ぐものであることを言ひ添へて置きたい。

かへす〴〵今秋の早慶戰は見物だらうと、それを今から樂しみにしてしてゐる。

早稻田チームの缺點

平林初之輔

僕は、野球は勿論早稻田びいきであるが、それは、早稻田が母校であり、今でも早稻田に關係があり、その上、僕の住んでゐる家が大抵早稻田の近くにあつたので自然、早稻田チームの出る試合を數多く見て、一種の親しみをもつてゐるからだらうと思ふ。それにもう一つ、早稻田のプレーヤーは、フエヤプレーヤーであるといふことも關係してゐると思ふ。試合中に、審判に文句をつけたり、いやな態度に出たりすることが比較的少ないので、その點は氣持ちがよい。

普通の心理から言ふと、あばたもゑくぼといふわけで、ひいきにしてゐる者の缺點は見えないで、長所ばかりが眼につくものらしいが、僕はどういふものか、殊に近頃は早稻田のチームの缺點ばかりが眼についてしようがない。

第一早稻田チームには元氣がなくなつた。一番打者の水原、キヤプテンの井口などに特に近頃元氣の喪失が眼立つ。バツター・ボツクスへ出る時の直觀で、今度は打つなと思ふと大抵適中するものだが、この頃はまた駄目だと思ふ時が多い。そしてこの直觀も大抵適中する。

次に作戰がどうも拙づい。チヤンスをものにすることの拙劣さ、選手交替の機の宜しからざること等、見てゐて氣が氣でない。ノー・アウトで二走者が出てゐる時に、むざ〳〵得點の機會を失ふやうな無駄なことをするのは、このチームだけだ。慶應や明治なら決してこんなことはないと思ふ。

ファンの心理は妙なもので、實驗心理學で錯覺の實驗をするときに、同じ面積の二つの正方形でも色や模樣や、隣接してゐる他の圖形との關係上大小の差があるやうに見えることがある。それと同じ現象がグラウンドに起る。ひいきにしてゐるチームが守備にたつと、グラウンドが急に大きくなつて、隙だらけに見えて、どこへ打つても安打になりさうに見える。相手方が守備に廻るとその反對に、急にグラウンドが狹くなつて、安打の打てさうな餘地がないやうに見える。

自分のひいきにしてゐるチームが相手方に一點リードされてゐる時、

見物人の心が一番緊張する時はこの時である。そして頼みにしてゐた上位の打者がむざ／＼と凡打に死ぬ時などはじつとして見てをられない。

僕は早稻田のチームが第一回戰で敗けた時は第二回戰には大抵見にゆかないことにしてゐる。それは二回戰に敗けてしまへば見てゐても興味がないし、勝ては決勝戰が見られると思ふからだ。このシーズンでも立敎との二回戰は、見にゆかずに家で中繼放送をきいてゐた。

早稻田の選手の打法が近頃一變したと評する人がある。勿論よい方へ變つたのではなくて惡變したのである。立敎の辻に打撃を封じられ、今春美事にノック・アウトした法政の圓城寺の球さへ打ちあぐんでゐるとすれば、中村、宮武の球がどれだけ打てるか心細いものだが、ファンの心理は妙なもので、見ないうちは、案外これ等の大物には勝てさうな氣がするのである。

早稻田に今のところ、多少安心のできるのは守備である。立敎に對しても一回戰の法政に對しても全く試合は消極的であつた。法政の一回戰に勝つたのも相手の過失と味方の守備とで勝つたやうなもので、試合は全體として押されてゐた。

市岡監督も氣の毒ではあるが、この成績に對しては責任をもたねばなるまい。それはキャプテンの井口も輕率で、よいキャプテンとは言へぬ。

その他の選手諸君も一體に不元氣で、チーム全體に暗雲低迷といふところだ。

ピッチング・スタッフの豐富なことも以前には取り柄であつたのが、近頃では却つて他力本願になる傾向があつて、このチームの强味ではなくて弱味となつてゐる。このことは、本誌前號に大達の岩淵君が書いてゐたことに同感である。

早稻田を除くと、その日の試合で一點か二點の差で敗けてゐる方に肩をもつが、段ちがひに敗けてしまふと、ひいきが却つて愛憎づかしになる。何と言つてもこの邊は强いチームでなければ人氣が集らない。たとへば一昨年から昨春の鈴木、吉田全盛時代の法政の如き、急に好きになつたものだ。

何しろ弱いチームを應援してゐるファンは試合を見るたびに壽命の三日や四日はたしかにちゞまるやうな氣がする。神經衰弱症が近頃多いのは運動競技を見物する時のオーヴァー・エキサイトメントにても原因がありはしないかと思はれる位だ。

發賣禁止內輪咄

立花高四郎

一

廣い意味で、如何なる出版物がよく發賣頒布を禁止されるか、差押處分に附せられるかと言つたら、これまでに發賣頒布を禁止されて居る出版物を例示すれば、何の雜作もなくコンナものかと即座に解決される問題であるが、それは罷りならないことであるので、その昔將軍樣時代に行はれたとか云ふ系脈を見る程度で、出版物が發賣頒布を禁止される場合を色々な方面から考察して見たいと思ふ。であるから內輪咄と題してあつても、秘密公開で、好奇心をそゝる譯のものではない、羊頭狗肉と言はれても、甘じてその非難を受けなければならぬ心苦しさがある。事實、發賣禁止のものだからと言つて、世間の人をアツと驚かすに足る程のものが、十が十ある譯のものでもない、それは先月號が發賣禁止になつたから、今月號がよく賣れるといふことが、近頃はないさうで、廣告手段に發賣禁止を使つても、効果が極めて薄弱であることで證明されるやうに思ふ。殊に、新聞紙法第二十三條第二項に依つて、內務大臣が斯々の事項は新聞紙に揭載しない樣にと差止めた事項を、新聞紙に揭載したが爲めに、發賣頒布を禁止された新聞記事なぞを、差止解除後、再讀して見られたら、容易に禁止理由を發見されない程に、平々凡々な記事であつたりすることがあるであらう。

社會敎育パンフレット第廿六輯、新聞紙の自由と拘束(東京朝日新聞主幹美土路昌一)を見ると、新聞に對する三つの拘束として、第一法律による記事の制限拘束。第二新聞の主義、或は言を換へて云へば新聞作成者の主義、及びそれに從つて記事選擇の標準による制限。第三新聞經營に資本的の拘束と制限。

を擧げて居るが、新聞紙出版物發賣禁止は正に第一種の制限拘束に對する違反に依つて發生せるものである。即ち新聞紙は新聞紙法第二十三條、出版物は出版法第十九條に依つて發賣頒布を禁止されるのである。尙新聞紙の處分（山田一隆著出版警察・圖書出版の心得による）を表示すると左の如くなる。

- 新聞紙ノ處分
  - 行政處分
    - 內務大臣ノ發賣頒布禁止及差押處分（風俗ヲ壞亂シ又ハ安寧秩序ヲ妨害シタル事項ヲ揭載シタルトキ）
      - 內國ニ於テ發行セルモノニ對シ
      - 外國ニ於テ印刷シタルモノ內國ニ於テ發行シタルモノニ對シ
    - 同一主旨事項揭載差止處分（前項禁止ノ場合ニ於テ）
    - 移入輸入差止處分（外國又ハ本法ヲ施行セサル土地ニ於テ發行スルモノニシテ特ニ一ケ年ニ二回發賣頒布禁止處分ヲ受ケタルトキ）
    - 地方官廳ノ發行差止處分（規定ノ屆出ヲ爲サス又屆出ヲ爲スモ實ヲ以テセサル場合又ハ保證金ヲ納付スヘキ新聞紙ニシテ保證金ヲ納付セス若クハ其缺損ヲ生シタルトキコレカ塡補ヲ爲サヽルトキ其正當ノ屆出ヲ爲スマテ又は保證金ヲ納付又ハ塡補スルマテ）
    - 地方官廳ノ差押處分（新聞紙法第四十三條ニ於ケル發行禁止ノ裁判ニ違反シテ發行シタル新聞紙ニ對シ）
  - 司法處分
    - 發行禁止處分（新聞紙法第四十三條）（第四十條乃至第四十二條ニ依リ處罰スル場合裁判所ニ於テ其發行ヲ絕對ニ禁止スルモノ）
    - 第二十一條乃至第四十二條罰則適用

斯樣な譯で、發禁は差止を前提として起る場合と、差止なぞの有無に拘はらず處分がある場合とがある。前者を政策的と呼ぶならば、後者は本質的と稱へなければなるまい。それで新聞記事差止にも、何々に關する事項は一切新聞紙に揭載せざる樣、即ち絕對に書かない樣にと云ふ場合が其一、何々に關する事項は揭載しない樣に、場合により、その記事の內容如何によつては、その記事の程度によつては、禁止處分に附せられることがあるかも知れないと云ふのが其二、何々に關する記事は可成揭載せられない樣に、即ち懇談的に不揭載方を注意する場合が其三であつて、新聞雜誌編輯者は勿論執筆者も亦大に心得置く可きことである。所が新聞紙法第十九條による、檢事局からする記事差止と、內務省から出る記事差止とを混同される場合があつたりするが、一事件で差止が二重に出る場合もある。檢事局の記事差止を冒して差止記事を揭載した場合、發禁になるかならぬかその場合々々の事である、但し新聞紙法第三十六條の罰金は覺悟しなければならぬ。併し內務省から出る記事差止に違反した場合は發禁が來るものと思はねばならず、司法處分の方は何とも言へないことになる。夫から禁止命令に、何々と題する記事あるものと云つた風に、限定的なものがあり、單に號數のみの場合とがある、後者はどれと明示されないが全體

としての調子が安寧風俗上面白くない場合のことである。また一々指示すれば出來ないことはないかも知らぬが、餘りに指定記事が多項目に渉る場合であるかも知れない。それだから同一新聞紙で同一號數であつても、禁止命令書に記事の指定がある場合には、指定記事のない新聞紙は差押執行を免れることになるのである。この外近頃は、行政處分にも、司法處分にも附せられないが、所掲記事の爲め一種の私的制裁、例へばボイコツトの如きものが流行するやうである。新聞雜誌が商品化するに從つて、イヤ既に商品化して居る今日、號數等に一切かまはず新聞雜誌全體に對して連續的非買非購讀同盟は相當猖獗であるに相違なく、時に依つては、發禁よりもその方が彈壓の甚しいものであるかも知れないと考へられる。

二

大正十五年十一月一日附『文藝市場』近代筆禍文獻號卷頭文『發賣禁止の問題』(山内房吉) から孫引すると、『高畠素之氏によれば、「政府といふものは元々さういふもので、自分達の政策なり、國家の安寧秩序なりに就て有害危險なりと認めたならば、それを防壓する權利と力とを持つてゐるものだ。」だから、その官憲に「睨まれるなんてドヂだ」といふことになる。(「解放」九月號』と云ふ一節があるが、睨まれると云ふ言葉が如何にも、發禁が感情的に行はれるものゝ如く思はせられる、また圖書檢閲事務關係者は私情で動いて居るやうに見える。此處で檢閲事務關係者を辯護するではないが、執筆者の誰彼によつて、その文章を睨むのではない、文章自體を睨むのである。そしてその文章と所掲雜誌や新聞の性質、購讀者の種類階級等に對する大體觀察を行なつて、發賣の可否を決するやうなことはありさうに思はれる。言ふ迄もなく、發禁の標準など云ふものは、一定不變のものであらうか、時と場所、あの時あの場合、この時この場合、多少の流動性を帶びた取扱ひ方をする所に、行政上の妙味が出て來るのでないかとも思考される、檢閲關係者の趣味嗜好主義主張等に依つて、當然發禁になる可きものが發禁にならなかつたり、憎惡や私的感情で、發禁の程度に達しないものを發禁にすると云つたことは、あり得べからざることである、もしありとすれば、それは發禁を喰つた人の邪推の中にあるのであつて、事實はないと信ずる。全く檢閲と云つた仕事に個性發揮は絶對の禁物であるが、右の如く發禁の不當を叫ぶ一方には、發禁にしないのは不當であると非難する人士もある。矯激な文字を羅列した人身攻撃の文章、社會公益の爲めに筆誅を加へると言ひ乍ら、その内實は恐喝不成功の腹イセであ

ると云ふ、執筆の動機極めて不純なものである場合なぞ、隨分急迫した攻撃記事がある、その時何故禁止しない、當局は何故不問にして置くと云ふことがある樣である、併しその時には既に關係者が刑事犯として取調べを受けて居ると云ふ場合もあるやうである、但し筆端たまたま、發行暗殺を煽動教唆するやうな趣が見える場合は、無論發禁になるであらう。また左樣な出版物は何等社會を稗益しない、社會風敎上有害である、人類の福利を增進する所以でないと云ふ理由で、即ち凡ての印刷物を敎化價値から批判して、爲めにならないものであるから發禁然る可きであると主張する人がある、例へば婦人雜誌に掲載される性關係記事に對して右樣の判斷を試みられる、その場合、出版物の檢閲がしかく左樣に積極的に出られるものであるか、(映畫や演劇の檢閲の場合も何等變る所はないが、)其點に就いても考へなければなるまい、勿論性敎育の爲の記事でも、ある程度を超えて居る場合は行政處分にするであらうと思はれる。また銀行會社の營業狀態に就いての記事なぞで、問題にされた銀行會社が非常な打撃を蒙る、其處で該記事の掲載差止や、出版物の頒布差止め方に就いて、事情開陳の手段に及むだりする場合があるやうであるが、その記事が財界攪亂、社會的大不安を招來する理由にならない限り問題にならず、單に銀行會社當事者の不利益損失に關係重大だけでは、發禁理由としては薄弱なものであらうと思はれる。

次に文字的報道と繪畫寫眞による繪畫的報道との間に、檢閲の立場から、差別がある樣に見たり考へたりするらしいが、表現形式の特質によつて、同一內容のものであつても、差別的取扱は免れまい、即ち直接法で、具體的な印象を與へ、見るものの知識程度や判斷力に關係する所が微弱であるのは繪畫的報道であらうし、文字と云ふ記號を材料として、腦裡にイリユーヂヨンを漸次描いて行くと云ふ文字的報道とは一緒にならないであらう、支那人の言葉に、一畫百萬言に優ると云ふ相變らず白髮三千丈式の文句があるが、寫眞繪畫的報道はセワシナイ當世に在つては、適當な手段であるかも知れず、漫畫や社會諷刺畫が發禁の理由を作ることは、別して不思議でも何でもないことであらう。その中には、黃金狼守錢奴某と肖像を寫眞版でか〻げて置き、その橫に『身を殺して仁を成すものなきや』と云つた暗示に豐かな文字を附加してある樣な、文字と繪畫との結合によつて、表面甚だ穩健であるが如く、實は頗る過激なものがあつたりする。而して發禁の難に遭へば、單なる繪ではないかと行政處分の不穩當を叫ぶ事例、必らずしも皆無ではないらしいが、單なる一枚の繪畫と云ふことは、絕對自由でないこと、

文字の場合よりも一層愼重な態度で取扱はる可きものであることを忘れてはならない。安寧方面ばかりでなく、風俗方面からも同樣に注意すべきものが多いのである。

これは新聞雜誌の編輯者が廣告部員とよく聯絡を取つて注意しなければならぬことであるが、通信販賣業者の申込む所謂不良廣告や、淋病梅毒其他性病に關する廣告、性慾增進藥品の廣告、化粧品の廣告等に就いての注意である。虛僞であるとか、誇大であるとかを別問題として、發禁處分の危險區域内にあるものである、であるから、編輯標語として『廣告も亦記事なり』を提出し度い考へを持つて居る。

三

一體、春畫や淫本、淫本類似のもの、極端な裸體寫眞なぞが公刊を認められさうもないことは、常識判斷でも解る話である。外國では公々然販賣して居ると云ふ人もあるが、それは海外旅行者に對して、特別な場合に於てお目にかゝるもので、一般的には矢張國禁の書でなければなるまいと思ふ。先年國際聯盟會議で、この種出版物は世界的に取締らうと云ふ話があつたさうで、そのレポートなぞ見たことがあるが、我國通信販賣業者の取扱ふものゝ中、大部分は正式の出版手續を踏むで居り、内容に於て一向に差支ないものであるが、これを尋常一樣の手段で販賣して居つたのでは、甘い汁が吸へない、此處で廣告文に馬力をかける、二度と見られないとか、早く購入しないと發禁になるかも知れないとか、淫本そのものであるかの如く見せかける、自然と文章は誇張澤山形容澤山になり、全體を通じて見る場合は不穩當迄に行かないものを、敢て購買力をそゝる目的で、都合のよい本文の一部を廣告の中に引用紹介して、催情挑發的態度に出る場合が多い。斯樣な廣告を揭載する新聞紙の品位問題は別として、また行政處分は受けなかつたが、司法處分に問はれた事例が今までに無いでもなかつた樣である。廣告も亦記事であることを忘れてはならぬ。花柳病治療法廣告で（多分淋病に關したものであつたと思ふ）發禁處分になつた例なぞもあつたやうだ。醫師法第七條には、技能療法又は經歷に關する廣告を爲すことを得ずとなつて居る。賣藥法第九條には賣藥に關する廣告、賣藥の容器若くは被包又は賣藥に添附し若くは添附せずして頒布する文書には左記の事項を記載することを得ずとなつて居る。

一、猥褻に涉る記事又は圖畫
二、避姙又は墮胎を暗示する記事
三、虛僞誇大の證明若くは醫師其の他の者が効能を保證した

るものと世人をして誤解せしむる虞ある記事

四、醫治の無効を暗示し或は暗に醫師を誹謗するが如き記事

右の外、化粧品の廣告には裸體美人寫眞繪畫を挿入する場合があり、藝妓附云々の料理店の廣告、貸座敷の廣告等注意を怠ると、發禁のウキ目を見ないとも限らず、紙幣類似廣告も時にあるやうで、意匠する人達は、通貨及證券模造取締法（明治二八、四、五法律第六號）及び紙幣類似證券取締法（明治三九、五、八法律第五一號）位は見て置く必要がある。尙序乍ら、誇大又は虛僞の廣告に就いては、警察犯處罰令第二條に依つて處分される事があるから、一般的新聞紙法や出版方面からの注意の外、特別法のあるものに就いては復一應研究しなければならぬ、發禁警戒だけでは不充分である。

廣告も亦記事なりの次には、六號活字のウメ草も亦記事なりと云ふ標語を上呈したい。締切時間は切迫する、相當のスペースがある、何か適當なウメ草はなからうかと、古い原稿を探し始めたとする、編輯者に取つては非常に危險な時機である、仕舞ひ込んだ原稿には何か曰くが附いて居たからこそ、おくらにしたのであるのに、その際は泡を喰つて居つて忘れたと云ふ譯でなく、六號活字だから何にかまはないであらう位に、理由にはならぬことを理由にして、ツイたゝき込むで納まり、不幸にもその六號活字のウメ草が因を爲して發禁處分になつた實例かあつた樣で、編輯者たるものは、最後のウメ草なら、寫眞に繪の說明に至る迄、周到な注意を怠つてはならぬのである。是等は餘り急ぐから筆禍を受けるので、單行本發行者の間にも同樣なことがある、來月廻しにならぬ樣に資金の廻收を圖る者に、出版物の內容不問なぞ殊にやりもせず、出版業の手始めにと急ぎに急いで發行する、そして計らずも發禁の災厄に會つて、折角田舍にあつた少しばかりの田畑を賣却して作つて來た資金を零にしたと云ふ悲劇がないでもない。出版業者は如何に出版を急ぐ場合があつても、必らず原稿である間に精讀して公刊可能性の有無に就いて研究するのでなければならぬ、例に依つて標語めいたものを作るなら『不見轉で印刷にかゝるな』である。

原稿精讀で絕對安心が出來るかと云ふと、まだ／＼である發禁豫防の第一步に過ぎない、隨分印刷技術上の過失の爲め取り返しのつかぬ、發禁位では事濟みにならぬ大問題が起つたことがある。大正七年の米騷動當時にその一例話がある。その當時、支那米輸入に關する記事は一切新聞紙に掲載されないことになつて居たと記憶する。然るに都下の某紙は『印度、支那米……』と認めた記事を掲載した爲め、終に發賣頒布が禁止された、印刷常識のあるものは直ちに氣附くであらう、該記事の

記者は『印度支那米、……』と書いたのである、所が大組の際に、コンマを落して、落したコンマを『印度』の次に挿し込むだのである。全く職工の過失であるに相違ない、さらばと云つて印刷面は疑ふ可くもない、明白に『支那米』とある爲めに、行政處分を免れることは出來ない。斯樣な次第で、新聞社あたりでは、小ゲラの校正はもとより大組のゲラに就いて、最後の嚴密な校正を勵行しなければならぬ。新聞社の內狀に就いては詳しくは知らぬけれど、印刷部員にも記事差止關係事項を徹底さして置かなければなるまいと思ふ。社に依つては、校閱部長の職制を設けて一層遺漏なきを期して居るやうで、昭和三年三月卅日附『新聞之新聞』第八百九十六號に、大每校正部長平野岑一氏の『恐るべき誤植と活字の誤』と題せる一文が掲載されて居るが、新聞雜誌關係者以外の人々の參考までに抄錄して見る。

『新聞の競爭はます〲はげしく分秒をあらそひ、他紙に先んじて最新最良のニュースを一つでも多く載せようとする。自然その間にギャップが出來て、原稿の上にまたは組版の上に、いろ〲の誤を生む。最重の負荷のかゝるときに、最も誤が多いことは、實驗心理學者の教へるところであるが、百パーセントの正確といふことは神でない限り望まれない。まして「時間」といふ無慈悲な制限がいばらの鞭をもつてうしろから脅かしてゐる、時間の壓迫が加はるだけ思考と仕事の速度が合はぬ。氣はあせる、手は頭ほど働かぬ。いら〲するその隙から「誤謬」や「過失」が忍び込むのである。

けふは組版、殊に大組について記してみたい、この大組といふものは、活版場として最後の締めくくりの作業であり、最も老巧なものがこれに當るのであるが、降版時刻が切迫すると、飛むだしくじりをやる、その第一が組違ひである、これがために大抵二つの記事が譯のわからぬものになつてしまふ。讀者にとつてこれほど迷惑な話はない、つぎに差替棄からゲラ組を運ぶときに活字がぬけ落ちる、大組中に、行の上下二三ほぐれる。二三行横に倒れる、何分十段の記事面であると、見出しを除いて七八千の小さな活字を指先一つで動かすのであるからこれらの粗相は不思議でないといへる。しかしながら、もしその誤のまゝ印刷されると、單に讀者が當惑するばかりでなく、記事の性質によつては、どんな誤解を招くかも知れない。

皇室御關係記事については、一字半句の誤があつても畏れ多いことであるから、わが社では筆者から編輯係、文選係、植字係、校正係、差替係、大組係と順をおうて相戒め、特に丁重な手續きをとつてゐる。あるひは原稿や、ゲラ刷に一々

「特」といふ印を捺して關係者の注意を求め、あるひは尊稱などの連續活字を特製して、誤字の出來ないやうに萬全を期してゐる次第である。

校正としてはゲラ刷が校了になつても、それは半ばに過ぎない。大刷引合せといふ最も重要な仕事がすんで初めて完成されるのである。大刷引合せ係は、誤を正す最後の人である。一々ゲラ刷と引合せながら、まづ第一に組違ひがないかに眼をくばるのであるが、活版場から大組の粗相について注意をうけたら、その個所を特に十分に點檢する義務がある。ある印刷所で註文を引受けた、一候補者の推薦狀に「冀上候」が「糞上候」となつてゐた。その代金はもちろん、その他の註文の印刷代も拂つてくれなかつた――」

前記の如く技術上の過失が珍聞の材料になる程度は罪が輕いが、筆禍事件を惹起するやうでは深刻に過ぎる。技術者決して發禁と無關係でないのである。校了は決勝點である、見本刷の在閲を勵行することは、最善の發禁豫防法である。

それから流行記事掲載競爭中スポイルすることがある。例へばある時代に、婦人雜誌が競つて、婦人の貞操蹂躙記事を滿載したことがある、所謂告白もの全盛時代があつたが、多數の犧性者を出して競爭は中止された、流行記事にも一段の注意が必要である、販賣部の要求を無制限に認めて居ると大失敗を來すものである。

四

前節では不注意の場合に起る發禁事件に就いて考察して見たが、注意して居ても、その注意が不徹底であつたり、我田引水的であつたりして、結局は發禁になつたと云ふ事例もまたあるであらうと思はれる。その場合、執筆者なり、編輯發行人なりは必らず言ふ樣である。「隨分〇〇を入れてあるがいけないですか、」「遠慮して書いた積りであるが」とか述べられるやうである。しかし一般讀者になつて考へて見ることである。〇〇や、××がある爲めに〇〇や、××の部分を一層想像力を逞しくして讀むことはないか、そして〇〇が消極的である場合に、容易に〇〇の部分の文字が判讀出來ないことはない樣である、して見ると〇〇は文字よりも印象强烈になる、檢閱關係者からは滑稽に考へられないこともないであらう。次に『遠慮して書いた』と云ふ事である、換言すると、執筆者なり發行編輯人の標準に從ふと、この程度位はよからうと云ふのであつて、安寧と謂はず、風俗と謂はず、其人達のグループにある標準で、社會一般標準と一致するかどうかは疑問である。遠慮は對社會的

影響の方面から遠慮しなければならぬ、個人的影響、自己反省ばかりでは不充分である。検閲上から特殊待遇の要求はなかなか六ツかしい問題である。大正十五年一月十五日附『警察新報』第十一巻第一號には、久慈内務事務官「検閲者獨語」が掲載されて居つて、その邊の事情がよく説明されて居ると思ふから紹介して見やう。

『常に我々の遺憾に感じてゐる事は、作者、出版業者の一部が、或は我々の出版物検閲上最も注意してゐるところの、出版物の對社會的若くは對民衆的の影響と云ふことを少しく曲解して居るかに思はれる點のあることとである。

而して右の説明としては、或一つの出版物が發賣頒布禁止及び差押處分を受けた場合、當局に其の理由を詰問しに來る作者、出版業者の言を擧げることが出來る。彼等のAは曰ふ『此の書の定價は二圓である。可なり高價であると云はなければならないに拘らず、敢て此の書を購買せんとする者は其の常識程度に於て相當高い者と云はなければならない。而して此の書は、それ等の常識程度相當高き者に對しては、決して少しの悪影響をも及ぼすべき心配はない』と。Bは曰ふ。『此の書は特志の研究者のみを以つて組織したところの會の會員のみへ頒つものであるから、少しも廣く社會へ影響を及ぼすべき理由がない』と。更にCは論ずる。『此の書の内容は可なり難解であつて全部無味乾燥なる理論のみの記述である。斯の如き純學術的の書籍は、之を理解し充分咀嚼し得る程度の學識を備へた者でなければ決して購讀することなく、而して之を理解し得る者ならば、何等此の書に依りて悪影響を蒙るの惧がない』と。最後には云ふ『此の文書若くは圖畫は世界でも有名なる藝術品の極致である。獨り我國のみに於て之を禁止するのは餘りに不當である』と。そこで私は論者に借問したいのである。A及びBの論者は其の比較的高價なる出版物又は最初に頒布範圍の特定されたる出版物が果して貸與に依り若くは古本屋の店頭に並ぶことに依つて轉々し又は私立圖書館の無料貸出に供せられる日の絶對にないことをも保證するつもりであらうか。少くとも富裕なる有閑階級者若くは特志の會員と稱する者が必ずしも高級なる常識の所有者であるとは斷定し得ないのではなからうか。又Cの論者の如くに購讀者は理解能力者と斷定するのは餘りに輕率獨斷に失する者ではないであらうか。最後に、Dの論者は根本に於て國家の出版警察なるものを認めて居るのであらうかどうか。それとも又藝術的極致品は如何なる人情風俗を異にする國民に對しても、其の藝術的價値を認めしむる偉力を有すと同時

に、何等の悪影響をも及ぼすべきものでないことを確信して居るのであらうか。遂に我々淺學の者の能く了解し能はざるところであると云はねばならない。云々」

久慈事務官の獨語は、レーモント原著加藤朝鳥譯『農民』が問題になつた際のもので、小說や物語は、題材が既に感心しない場合と、描寫の點で問題になる場合があるのでないかと思ふ。從つて、改正さる可き出版法の制限事項となつて居る、皇室の尊嚴を冒瀆する事項、朝憲を紊亂し社會を擾亂し、其他安寧秩序を妨害する事項、犯罪煽動曲庇、犯罪人の賞恤、亂倫猥褻、名譽毀損（モデル小說から起る懸念あり）等に就いて餘程警戒してかゝらなければならぬ。是等に關しては後節に詳細說明する積りである。それから新聞雜誌等に連載中は無事であつて、單行本になつた場合に禁止することがある。新聞雜誌の場合はどちらかと云へば斷片的であり、單行本になつた場合は、印象がまとまると云ふ譯であらうと思ふが、新聞雜誌の際に、當局から注意を受けた個所があつた場合は、其等をまとめて一冊にする時に、忘れない樣に、注意個所を抹消するなり訂正するなりして、其儘にして置いてはならいものである、この種事例必らず僅少ではないのであつて、發禁になつてから、さう云へばアノ時に注意されたと思ひ出しても、後の祭である。

五

評論文をかく場合に、既に發賣禁止になつて居る出版物の一部を引例して、同樣發賣頒布を禁止されると云ふこともよくあることである。大本敎とは皇室の尊嚴を冒瀆するけしからぬものであるとして、批判攻擊する場合に、ソモ〳〵大本敎なるものの內容は如何なるものであるかを紹介しなければならぬ、攻擊の目標をハツキリさせて置くことは評論家は當然とするであらう、けれど既に發禁になつて居る出版物お筆先など詳しく出して來ると、工合は面白くないのである。この場合、筆者の態度に於ては結構である。不穩思想撲滅と云つたものであるから、併し評論文は再び不穩思想の宣傳を手傳ふ嫌ひがあることになつて來る。つまり執筆の動機はよくて、結果たる文章が惡いと云ふ事になるのだが、評論文の外に、外交問題に關した記事が往々にしてこの經路を辿ることがある、愛國の至誠に燃えて、某國の我國に對する態度を論難批評する、筆端たま〳〵矯激で、在留某國人の身邊危險を覺えしむる程であると、やはりその記事は社會に流布することを差止められるであらう、熱狂

して居る筆者は、その處置を不當とするであらうが、兩國交戰狀態ならばイザ知らず、和平の時には、國際儀禮と云ふこともあるのだから、冷靜な態度で論評しなければならぬと考へられる。

研究と發表との關係がハッキリせぬ爲めに、間違を惹起し易い。研究したものは、何等拘束を受けることなくして、學者のやつた仕事であるから、自由に文章で報告發表出來るかと云ふと、これがまた輕卒に振舞へないことがある。森戶氏のクロパトキンの研究事件は餘りに有名になり過ぎて居る程に、この間の經路を物語つて居る、思想方面の記事で、宣傳の爲めの研究か、眞面目な學徒として學問の爲の研究か、混同されると云ふことは、ありがちの話であつて、單純に思想の內容を文獻にあるがまゝを紹介記述するのと、之れに對して紹介者の私見が加へられたり、現代社會と結び附けたりすることは、發禁へ一歩進めたことになるかも知れない。併し斯の如き問題は思想方面と限らず、醫學關係、殊に性に關する記事で同樣なことがあるだらうと思はれる、醫學專門雜誌では何等奇とするに足らないものであつても、通俗娛樂雜誌なぞに掲載された場合、セックスの記事が異樣に光ると云ふ現象を起すであらう、勿論セックスの記事でも原語を澤山挿入してあつて、一般人には讀み難いものであれば格別、さうでなくて露骨に記述して、誰にも讀み得る場合、即ち科學的記述と通俗的記述との差別が發禁になるかならぬかの岐路になるであらうと云ふのである。通俗衞生書、生殖器圖解なぞで禁止になつて居るのは、筆者が不注意であつた爲めと思はれる、最も安價版で、地方靑年を得意として、名を學術的にかりて、生殖作用を說明する手合は、始めから野心があつてのことで、科學的も學術的もあつたものではない。

研究と發表との關係の次には、外國出版物と譯書との關係がある。外國出版物で既に輸入禁止になつて居るものが、和譯されて刊行することは先づ不可能であらう、しかし抄譯して、當局が面白くないと思ひさうな個所をカットして出す場合には差支ないかも知れない。要するに書目の問題よりも日本文の內容次第と云ふことになるのだが、時には書目がよく斯界に知れ渡つて居つて、例へば西鶴のもの、デカメロン、覺悟禪と云つたもの、題目でオドカスと云つた場合は、發禁にはならなくても別に問題が起るかも知れない、いづれにしても事實問題で此の際どうと斷定的なことは言はれない。また外國書では輸入禁止

されず、同書の譯文が禁止になる場合は澤山あるやうである。丸善へ行つても何處へ行つても、原書はあるではないか、何故反譯のこれが惡いと云ふ言葉をきくのは、かゝる場合のことである。惡い理由は、日本語であるが爲めに、一般人によまれる、社會的影響が絶大であると云ふにあるだらうと思はれる。

次に、時事問題のパンフレットなぞを發行する時に、取扱はんとする時事問題が、當時檢事局や內務省あたりで、掲載差止になつて居るものであるかどうか一應は考究する必要がある。でないと折角の出版物が發賣頒布することが出來ない。併し何か爲めにせんとして、その間の事情に精通して居ながら、差止中の事項をパンフレットとして秘密裡に刊行するものがないとも限らぬ、世間で怪文書と云ふものゝ中には、斯う言つたものも含まれて居るらしい。夫から一度は差支ない出版物として刊行を認められて居たものが、再版發行の時期、再版した時の社會狀態によつて、總選擧と云つたものがあつたりする場合には、選擧法との關係に就いて考慮する必要がある。

全集もの、古典文學の複製の場合に、編輯者が機械的に働いて居ると、禁止出版物を混入出版する場合がある。古典文學の方面では西鶴、春水、種彥、のもの、黃表紙、古川柳等であつて少しの注意を拂ふことに依つて、筆禍はまぬかれるのである。

尙新聞記事の內で、何が一番よく發禁と緣があるかと、雜誌の種類に依つて、何が一番よく發禁になるか、出來るだけ系統をたてゝ記述して見たい腹案もあつたが、今の所いろ〳〵な都合で其處まで手がのびない。以上で總論的な觀察を終つたつもりで、以下安寧と云ひ、風俗と云ふ方面から、發禁の理由を考へて見たい。(つゞく)

Onoto the Pen

群を拔く

大空に向つて高さを競ふ林の樹々の様に數多くある萬年筆の中で、オノトが一本の巨木の樣に斷然群を拔いて世間の好評を博しあらゆる階級の方々から愛用されて居ると云ふ事實こそは、オノトの實質的優秀さの生きた證據で御座います。

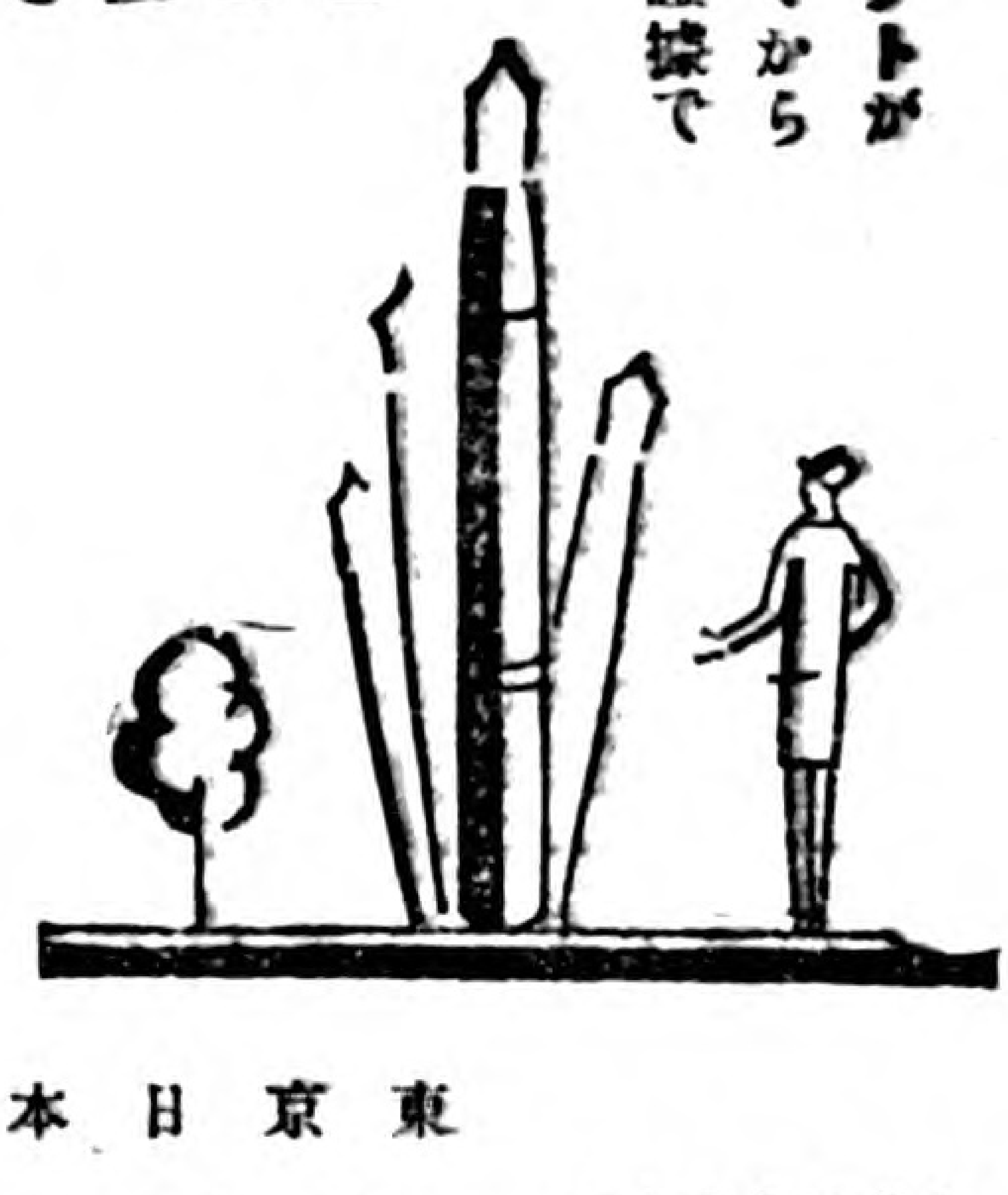
使へば使ふ程書きよくなる

オノト萬年筆　七圓五十錢以上

アテナ萬年筆　三圓五十錢以上

萬年筆用　アテナインキ　三十五錢

送料各十八錢　（カタログ進呈）



"VALET" Auto Strop Safety Razor

¥1.80

バレー自働研安全剃刀

自働研ぎの裝置は極めて簡單で、初めてバレーを手にする人にも容易に研ぐ事が出來ます上に、玄人が研いだよりもよく切れるのです。バレーが大變に評判のよいのは何故だらうかと云ふ御疑問は、一度バレーを御使ひになれば忽ち氷解いたします。

價一圓八十錢　（刄三枚、皮砥一本付）

送料十八錢

他に二円、三円三十錢、四円八十錢、十三円五十錢以上等あり

販賣所　大百貨店著名洋物雜貨金物店等

取次所　中央公論社代理部にて取次ます



東京日本橋通三丁目

丸善株式會社

大阪　神戸　京都　名古屋

横濱　福岡　仙臺　札幌

東京＝神田・芝三田・早稲田・丸ビル

八ポイント欄

一、「この八ポイント欄」は有名無名を問はず、普く世の篤學者、趣味家、好事家、旅行家のために開放して隠れたる智識と湮れたる珠玉とを集めて之を天下に紹介しようと思ふ。故に「八ポイント欄」への投書を特に歡迎する。

一、原稿は出所責任を明かにするため筆者不明のものは採らない。紙上の變名も許さない。そして掲載した分には十圓以上の謝禮をするが、枚數は四百字詰五枚以内にコンデンスして頂きたいことを希望する。

藏書票

魯庵生

エキスリブリス即ち藏書票は殆んど誰にも通ずる新語たらんとしてゐる。此の新語創造の本家爭ひなぞをしたく無く、又誰が初めて譯出した語でも關はぬが、此の譯語を初めて使用し出した頃(日露戰役頃?)は度々質問されて、ピエロンやウエステンのエキスリブリス集の圖を丸善の夏の配り團扇に應用した時にマッチのペーパーかなぞと問はれて、誰にも一度も感服されなかつたものだ。其頃二三の趣味家と日本にも藏印と並んで流行らしたら面白からうと咄し合つたのが傳はつて、エキスリブリス本來の目的よりは餘興の「蒐集」「交換」がモウ納札でもマッチのペーパーでも無からうといふ連中に共鳴されて、二三の納札趣味家に發起されたのが最初のエキスリブリスの會であつた。(明治の末か、大正の初め?)が、最初はエキスリブリスが何の事だか解らなかつたので餘り成績が芳ばしく無かつたらしいが、納札家が事實上の主催者で、エキスリブリスが何であつても關はず、唯燐票大の小さな納札を作つて交換するのが目的であるやうに履違ひされてボツ〳〵流行り出した。虚實は知らぬが、最初にエキスリブリスを作つたのが書籍を一冊も持つてゐない人だといふやうな滑稽なゴシップが噂された。が、先鞭を着けたのが納札家であつたから、夫から夫と(主として納札連に)同好者が殖えて、今では東京大阪に數四(?)のエキスリブリスの會が出來て、交換や蒐集が一部には盛んに行はれてゐるさうだ。が、エキスリブリス本來の目的は履違ひされて書籍に緣の遠い連中の間にヨリ多く熱中されるので、愛書家や藏書家の多くが無關心であるといふのは皮肉である。

だが、日本ばかりで無く、エキスリブリスの本家の西洋でも高名な人のエキスリブリスは餘り面白いものでは無い。眞僞は知らぬがトルストイのエキスリブリスとして或る本に載つてるのを見ると極めて簡單なものだつた。露西亞の有名な梵文學者ベエトリンクの藏書に貼つてあつたエキスリブリス

は自筆の署名だけの姓氏であつた。大ならッライリーフかタイトル・ページへ直接に署名して置いたが宜さゝうなものだが、ワザ〳〵究明に紙片へ書いて貼付けた處が學者らしい。日本に縁の深いアーネスト・サトウのは漢字入の藏書印式のエキスリブリスで、學者の藏書票としては氣の利いた相應に凝つたものだが、學者のは大抵面白くないものだ。隨つてエキスリブリスの本は澤山あるが、(私の狭い見聞で口幅つたい事は餘り云はれないが、)高名な學者や文人のエキスリブリスといふものは餘り見えない。尤も文庫や蒐書家のエキスリブリスといふものは有る。有名なグローリヤ・クラブのエキスリブリスなぞは歴代エキスリブリス中の最も勝れたものだ。

閑話休題としてエキスリブリスは本と獨逸に濫觴する。獨逸ではビブリオテクァイヘンと稱するが、羅甸名のエキスリブリスの方が通りがイヽので、今では矢張エキスリブリスと稱してゐる。英國でもブックプレートよりはエキスリブリスの方が通稱となつてる。日本でも藏書票ナドといふ平手な譯語を用ゐるより原名を稱する方がエキスリブリスの氣分が出る。

イツが起源だか種々の說があつて一定しないが、エキスリブリス學者として聞ゆるライニンゲン・ウエステルブルヒの說だと、ビイベラハカウルムがエキスリブリスの發祥地で、千四百七十年頃だとされてをる。即ち日本の文明年中である。ベネヂクト上人の御影に家紋を附けたもので、一番最古と推定されるが、眞の使用者の何人であつたかは判明しない。明白に解つてるのではバックスハイムの僧院のヒルデブランド・ブランデンブルヒのエキスリブリスで、此のブランデンブルヒを創始者とするのが通說である。此のブランデンブルヒのエキスリブリスは最始の作としては圖樣は幼稚だが、着彩版の相當手數の掛つたものである。

歐羅巴では版畫の元祖と稱されるのはアルブレヒト・デユラーで、版畫の種類は何でもデユラーへ持つて行くが、エキスリブリスも亦デユラーを祖先とする說がある。尤もデユラー以前と明かに推定されるエキスリブリスが現に殘つてゐるが、其の製作者が判然しないので、其の雕版者の明白であるのはデユラーである。デユラーの作つたパークハイマーのエキスリブリスの如きは最始のエキスリブリス中の珍品と稱されてる。

一體十七八世紀頃までのエキスリブリスは大抵家紋を中央に、上部或は下部に姓氏を雕付けたゞけの一度摺の(上品と云へば上品の)一向面白くないものだが、獨逸のだけは同じ家紋でも裝飾の輪廓をつけ或は二三度摺とした極めて趣味の深いものだ。英吉利のは殊に生眞面目で頗る無意氣である。獨逸ではクリンゲルのやうな一ト癖も二タ癖もある畫家がエキスリブリスに身を入れて工風をし、最近には日本へも來たオーリックのやうな版畫の凝り屋がエキスリブリス專門家と稱されるほど極めて趣味のある作をしてゐる。(此のオーリックが日本の美術家及び鑑賞家にエキスリブリス趣味を吹込んだのだ。)英吉利ではウオーター・クレーンが近世式のエキスリブリスを作つてゐるが、

タレーンのは餘り生帳面過ぎて圖案も稍や月並の嫌ひがある。ツイ此頃死んだ高名な女優のエレン・テリーは立派な書齋を持つてるといふ評判だつたが、此のテリー丈のエキスリブリスは息子さんの新らしい舞臺粧飾家のゴールヅン・クレイグの圖案だけあつて、英人の意匠の兎角に四角四面なエキスリブリスの中にアカデミック離れのした新味を出してゐる。

大號特選畫報欄に數例を示したエキスリブリスは左の上の二圖を除く四圖は現代のエキスリブリス圖案家のオツトオ・ウツペロードのエチングである。エチングの鐵筆の冴えは爰にはハッキリと露はれないが、現代有數のエチング畫家たる技術は容易に想像されやう。絃の亂れた琴を撫彈する圖のマリー・デユーカのエキスリブリスは何といふ人の圖案であつたか忘れて了つたが、假の畫意は想像されない事も無い。數年前の『ドイツチエ・クンスト』に載つたものであるが、近代エキスリブリス中の最も勝れた意匠である。一番上のジヤコビイといふ人のエキスリブリスは(之も圖案家を忘れて了つたが)、松下の瀰佛は日本の意匠から憶付いたので、菩提樹の實の珠數を輪郭として繞らしたのは横濱趣味の嫌ひが感ういふ日本趣味の圖案がエキスリブリスにまで及んだ一例として擧げる。エキスリブリスに就ては猶精しく調べて再記する機會があらうと信ずる。

歌舞伎と青い眼

他和律

日本式の大提灯を玄關正面にブラ下げた、モスクワの第二藝術座で、生れてはじめて歌舞伎芝居に見參しようとあつて、それこそ『案内記』と首ツ引きで、しきりにオペラ・グラスのくもりを氣にしながら、一千三百とかある椅子の上にあふれ出したロシヤのお客さんの眼の前で、花々しくフタをあけた例の左團次一座の評判はどんなものであつたか知ら？

果して歌舞伎劇なるものは、駐日ロシヤ大使から、「珍重とすべく又た素晴らしき芝居」と折紙をつけられたやうに、演劇としての價値を――、そして左團次の手腕は、代理大使から「まづ現ロシヤのシヤリヤーピンの名聲と比べることが出來る」と讃がれたやうに、俳優としての價値を――それ〲赤いお客さんに承認されたかどうか。

何しろロシヤ人には、日本人が『キモノ』といふものを着、『オビ』を締め、それから『タビ』を穿く、つまり、日本人はかうかういふ恰好をしてゐる國民だと、人種誌のABCから說明して掛からねばならないのだから、歌舞伎劇にたいする今言つたやうな取越苦勞をさせられるのも決して無理ではあるまい。

だが、爰では、さういふむ難かしい問題なんどは失敬して了つて、たゞ赤いお客さんの、その青い目の玉に映つたものの中で、「もつとも奇拔な！」と思はれるやうなところを、試みに五つ六つ拾ひ上げて見ることゝしよう。

『花　道』

さしあたり舞臺はどうか、そこで使はれる大道具小道具はどうかと點檢すると、ロシヤ人に何よりも面白がられてゐるのは、『ゲザ』でもなければ、『クロンボ』でもなくて、實は『ハナミチ』と稱せられるものであるのであつて、歌舞伎通をもつて自任(？)してゐるアルキン君あたりは、わざ〳〵此れに有名な『花の道』といふ譯語を與へ、また、本舞臺にたいして、『第二の舞臺』などといふウマイ說明までしてゐるのであつて、謂ふところの『ハナミチ』がはなはだ珍重がられてゐるわけは、無論ロシヤの劇場にはさういふものが何處にも見當らないからだ。

『三　味　線』

珍重がられてゐるものは、『花道』の他では――ロシヤのギタアであると看做さるる『サミセン』と、太鼓であると看做さるる『ツヾミ』とであつて、この二つの樂器の彈奏を聽いてゐると、「非常に味のある音樂的効果を得るばかりではなく、とくに『サミセン』の音は、ちよつと古代ギリシヤ悲劇の中のコーラス」を思はせるとある。

『長　袴』

もう一つは長袴であつて、一アルシン半（一アルシンは我が二尺三寸餘）もあるやうなその馬鹿々々しく長つたらしいものの中には、兩足がこつそり仕舞つてあるけれども、少しも觸れ合ふことがなく、そして轉ぶこともなく無事に步けるといふのは、どうも不思議でならないといふ風に觀測してゐる。

『書　割』

書割にたいしては大して言ふほどのこともないが、それでも、この黑と白との繪具を使つた美術品は『版畫』見たやうなものを感じさせ、書割と衣裳との色の配合はやがて一つのハーモニーを作り、その「ハーモニー化の中には色彩の心理的及び肉體的効果がある」――と言つたやうな喧しい議論をする者もゐないことはない。

『からだ全體で』演出

舞臺や道具立てのことは夫れ位にして、舞臺の上で見る俳優の演技といふことに移るとすると、ロシヤの役者は普通「顏」ばかりを働かせるが、日本の役者は顏ばかりでなしに、手でも、足でも、腰でも、おまけに『眼』まで働かせるのであつて、簡單にいへば――一人で「芝居もし、歌ひもし、踊りもする」と見て、「俳優即踊り手」と言つた風な定義を下してから、「そんなにからだ全體で演ずるやうな役者には未だ餘りお目にかかつた事がない」――などと大いに感心してゐる。

『女　形』

中んづく、異國のお客さんを驚かしたのは、いはゆる『ヲンナガタ』と稱するものであつて、歌舞伎俳優は男が女の役をすると說明したあとで、惚れ〳〵するやうな宮仕への美しい若い女や、皺くちやの汚らしい田舍の婆さんまでを、女ではなく男がマンマと

やつて退けるのはどうも參つてしまう、アレではもう「手品を見てゐるやうだ」と言つてから、狐につまゝれたやうな怪訝な顏付をしてゐる者もある。

『ハラキリ』

だが、一の替り『忠臣藏』、二の替り『番町皿屋敷』、三の替り『修善寺』…と言つた風に、それからそれへと上演されたものの内では、何はおいても『忠臣藏』の判官切腹の場が大向ふの拍手喝采を博したやうで、左團次の扮する由良之助が例の『花道』を驅けて來て、いよ〳〵主の君がご自害なされたと知つた時のシーンは、それを見てゐたロシヤ人の青い眼をもホロリとさせ、中にはハンケチをそつとポケツトか何處かから取り出した者もあるといふ位評判で、外國人にはさらでだに有名だつた『ハラキリ』はいよ〳〵有名になつたとかと言ふ。

『科白その他』

以下、科白の言ひ廻し方が馬鹿に音樂的であるとか、おはやしの驅け聲が氣に入らないとか、舞臺の上をはだしで歩かれるのは面白らないとか、といふやうないろ〳〵な話もあるが、大分長廣舌になつたからこの邊で一と先づペンを拭ふ事とする。

とにかく、左團次一座のロシヤ巡業は大いに成功したと言へると思ふけれども、何しろお客さんは『案内記』と首ッ引きで芝居を見るのであるから、どの邊まで歌舞伎が解つたかは一寸疑問といへば言へないこともない。しかし、一ルーブルから五ルーブルそこ〳〵の入場切符が、おしまひには四五十ルーブルまでのプレミアムがつくほど、連日連夜大入滿員であつたさうだから、こゝでもめでたし！　めでたし！」と手を打つて幕を下ろしても誰も不服を言ふ者はなからう。（了）

新聞雜誌號外考

外骨

新聞紙が我國に初めて現はれたのは文久年代であるが、それ以來明治の初年にかけて外篇とか、集外とかと題して、本篇本集と同質同型のものを刊行した例は多くあつたが、後に所謂號外と稱した樣な臨時刊行の片々たるものはなかつた。我輩が今日の新聞號外の先驅と認めるものは、明治九年十月廿九日出版の「讀賣新聞附錄」（本號特選寫眞(1)參照）と題する唐紙縱七寸横一尺の一枚摺で、熊本に於ける神風連の騷動を臨時に報道したものである。その附記に

「これは看客方へ進上いたしますから代料には及びません」

とあり、又その冒頭に

「今日は日曜日にて新聞はお休で有ますが今度の熊本さわぎにつき皆さんがいかにも心配なさる樣子ゆゑ先日からの續きを別に摺立て昨日の風聞をおめにかけます云々」

とあつて、その性質上附錄ではなく、臨時報道の號外であることが知れる。この時は未だ「號外」といふ言葉がなくて附錄と題したの

であらう。超えて翌十年九月九日に出版した最小型のものには「讀賣新聞號外」と題してある。(寫眞(1)參照)

同年の西南戰爭に際しては、東京日々新聞郵便報知新聞、東京横濱毎日新聞等の各社でも、本紙記事締切後に到着した戰時電報を、小型の唐紙に、附錄とも號外とも名づけずに本紙に挾み込んで配達する事が行はれた。それがいつか「號外」と題して別配達をもするに至つたので、前記の「讀賣新聞號外」もその例に倣つたものであらう。そこで新聞號外の始原は西南役の夏頃であらうと推測する。新聞事業の創始も發達も必ず戰時にありと云ふが、この號外の如きも矢張り戰爭に伴つて萌芽した事實は、新聞研究家の注目すべき事項であらう。 この例が漸々發展して、戰時ならずとも緊急報道を要する事件を號外として發行する事となり、日清日露兩役の際などは、諸新聞社の出した號外の現存してゐるものゝみでも、數千枚を數ふる程の發達を遂げた。

然し乍らこの號外といふ名稱を利用して、下らぬ事を記した廣告用のものを發行し、それを遞税遞送の減價で配布するものが續出したので、後の第三種郵便物認可規則には、「號外とは次期の發行を待つ可らざる緊急報道のものをいひ、然らざるものは減税にて遞送するを許さず」と規定さるゝに至つたのである。

こゝに號外發達上の舊時代に於ける一奇事を附記する。それは東京日々新聞日報社が五厘の「郵便はがき」に印刷して配布した號外のことである。(寫眞(2)參照)明治十九年八月十九日、韓地京城の暴動につき、他の二三新聞が人心を惑亂すべき無根の事を報道したりとして、その辯妄記事をハガキに印刷して即日讀者へ郵送したものである。

これを以て見ても、當時の大新聞と稱せらるゝ程のものにして如何に少數の讀者しか有してゐなかつたかといふこと、又賣捌店なる販賣機關の發達が如何に幼稚であつたかといふことが證せられる。

次に雜誌の號外についてゞあるが、これには二種ある。 しかし何れも日刊新聞の如き緊急報道のものではない。その一は、本誌の記事とは異つた長文の特別記事を同型の書册として發行したもので、寫眞(3)に示した「花月新誌」の號外などがそれである。又他の一は、本誌の第一號を發刊するに先立つて同型の見本を發行し、それに「號外」と題したのである。 明治十三年以後に發行した數十種の詩文雜誌は概ねこの種の號外を發行してゐる。

右の第一はその性質上別册附錄とも稱すべきもので、無料進呈のものも中にはあるが多くは餘分の臨時收入を得んが爲めの企てであつた。これが進展して後には臨時增刊の大册物の發行となつたのである。

又第二の見本としての號外は、殆ど皆無料として宣傳用に配布し、次の第一號よりの代價を徴收するの便に供したものである。 この例は明治十七八年頃まで盛んに行はれ、その後は廢絶したに不拘、その餘波は後々までも傳はつて、新雜誌發行の場合、見本としての無代送附を要求する横着者が生ずるに至つて、今にその弊が絶えない。

本社新舊社長送迎會

去る九月廿五日夜、精養軒に於て島中新社長を迎へ、麻田前社長を送るの會が催された。朝野の名士百五十名來會、稀に見る盛會でありました。





サロン――島中社長（中央）を中心に、（右）德富蘇峯氏、（左）安部磯雄氏



メーン テーブル――向つて左より、江木翼氏、德富蘇峯氏、麻田前社長、島中社長、安部磯雄氏、吉野作造氏、（右側）、近松秋江氏、山本有三氏、岸田國士氏





1は「勞働者よ、ブルジョアのスポーツ團體から脱け出して來い」といふ標語を掲げてデモをしてゐる獨逸のプロスポーツ團員。2は平衡運動をしてゐる獨逸の婦人勞働者。

勞働者のスポーツ

村山知義

ブルジョアジーは四年目毎にオリムピックを祝ふ。ソヴイエート共和國のプロレタリアートは今年、アムステルダム(皮肉ではないか！)のオリムピックに對抗して、彼等自身のスポーツの競技會を持つた。「スパルタキアーデ」！アムステルダムに出場せずにモスカウのスパルタキアーデにドイツやフインランドやメキシコからスポーツマンやスポーツウーマンが參加した。

「スポーツのためのスポーツ」は民衆に對する痲醉劑でしかない。スポーツは民衆を政治に無關心にし「灰色」にするための優秀な手段である。大きなスポーツクラブの對立や鳴物入の競技會や、祭りや、レコード爭ひや、ジヤーナリズムの伴奏やは巧みに階級對立の事實をおほひかくす。だが國家は更に積極的にスポーツを利用する。プロレタリアの税の上にお尻を据えたブルジョアのスポーツのレコードを國別で爭はせることに依つて愛國心を刺激する。または物質的精神的の補助を與へて灰色スポーツ團を作り、彈丸の餌食の養成所にさへする。

プロレタリアはプロレタリアのスポーツを持て！ プロレタリアのスポーツ團體を持て！ プロレタリアの競技會を持て！ かうして、就中ソヴイエート共和國と獨逸では勞働者のスポーツが盛に行はれてゐる。



3



4

3はスパルタキアードのために熱心に練習するロシアの婦人勞働者。4は巾飛びをするロシアの婦人工場勞働者。5はスパルタキアードで優勝したロシア勞働者のフットボール・チーム。



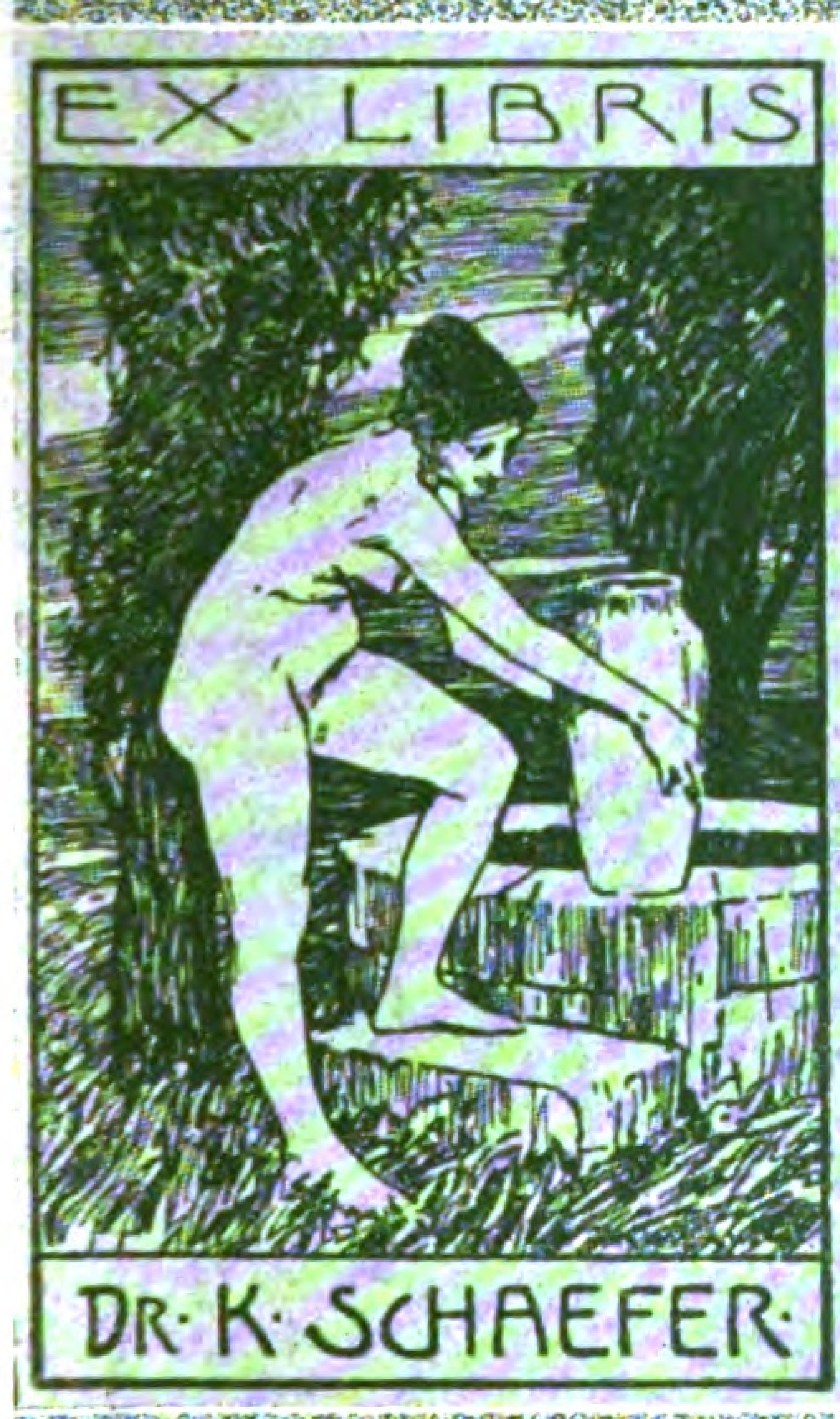
5

エッキス・リブリス

内田魯庵









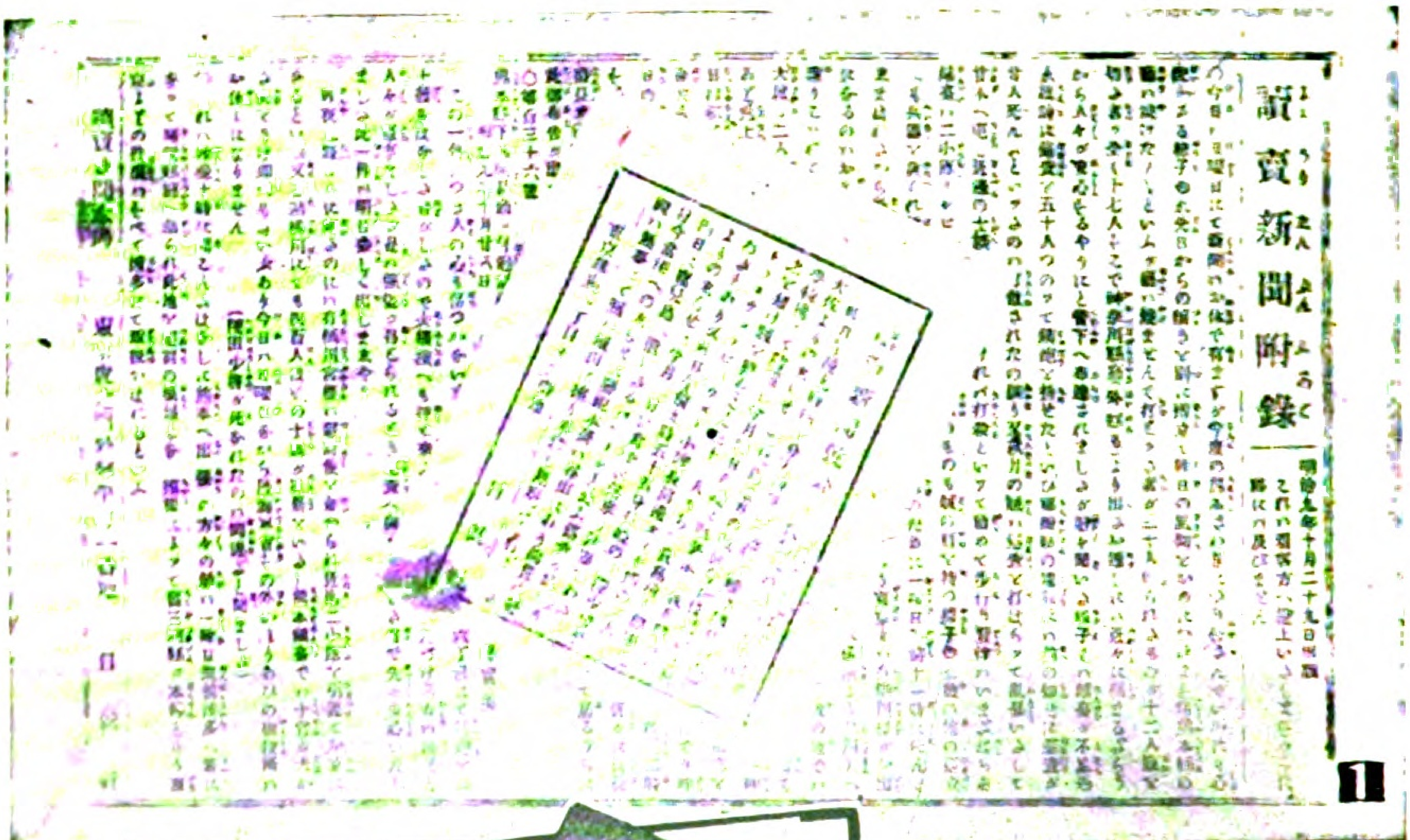




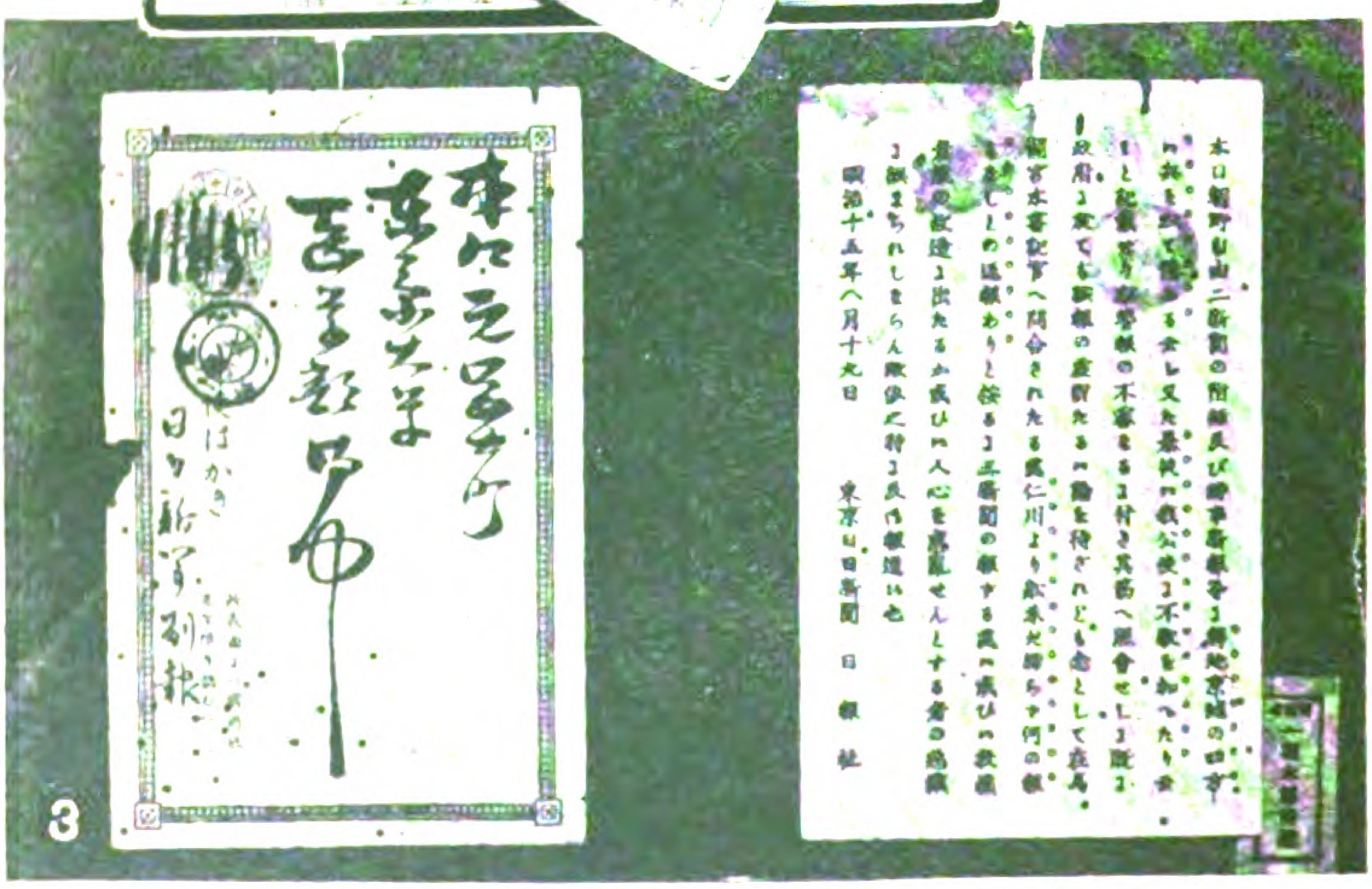
（本號ハポイント欄參照）

新聞雜誌の號外の起源

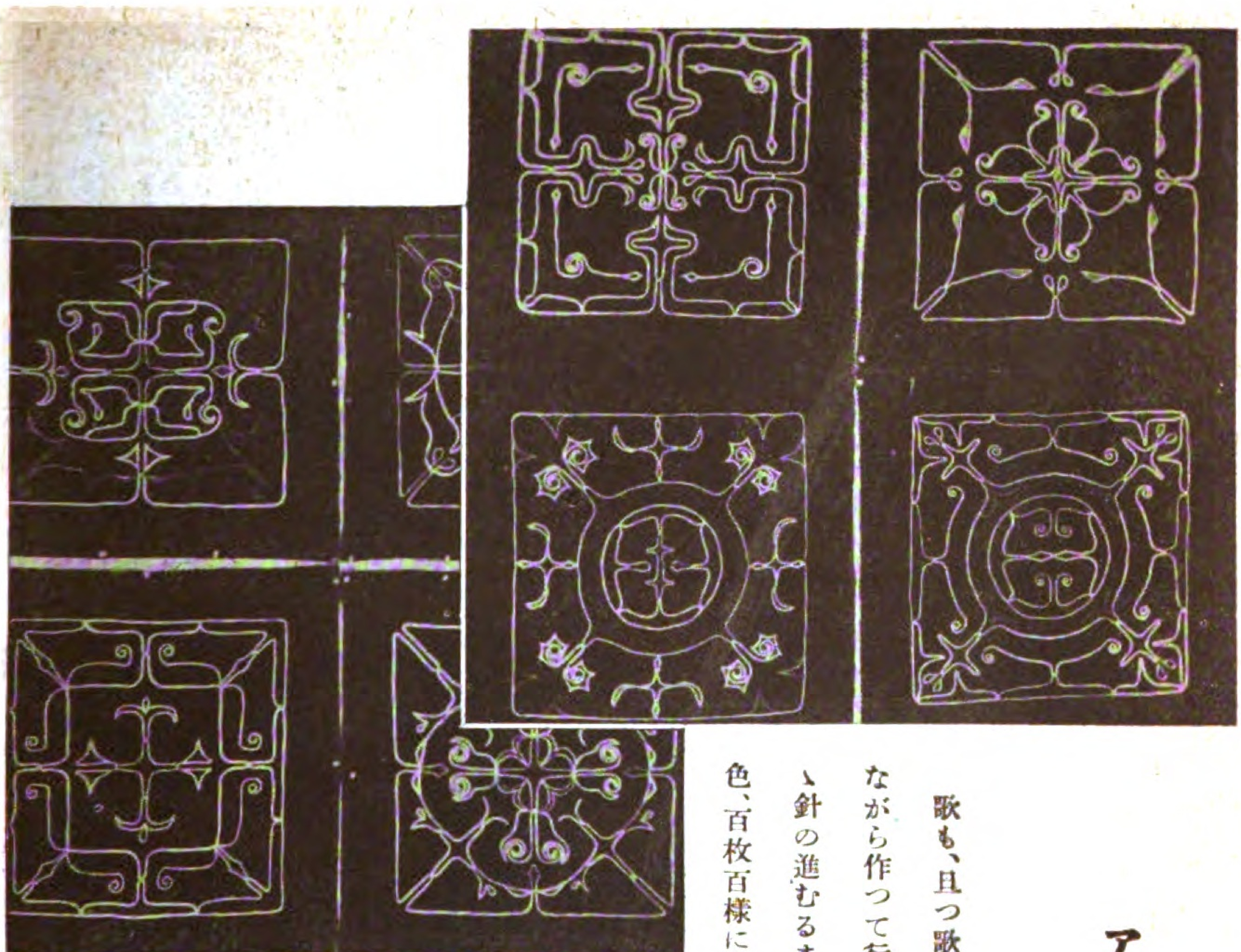
外骨


讀賣新聞附錄
明治九年十月二十九日




明治十五年八月十九日　東京日日新聞　日報社

（本號八ポイント版參照）



アイヌ婦女子の藝術

金田一京助

歌も、且つ歌ひ且つ作りて、甞つて書いて推敲すること無く、作りながら歌ひ、歌ひながら作つて行くアイヌの人達の、男子の彫刻、女子の刺繡、みなやはり、刀の向くまゝ針の進むまゝ、別に下繪を書くといふこと無しにたゞ興の趣くまゝに、十枚十色、百枚百樣に成つて行くので、さながら、有色の即興詩、曲線の抒情歌である。

此は幌別の名族、金成氏の長女イメカノ刀自の作なる座蒲團の模樣八枚を寫したものである。天鵞絨の地に、藍黄綠紫の絹絲を以てした絢爛目を奪ふ色調である。アイヌ語に曲線をモレウといひ、曲線に圍まれた小さな空間はシキ（眼の意）と呼ばれ、あらゆる紋樣は、このモレウとシキとの錯綜から成る。手の込んだ紋樣は六眼の模樣、八眼の模樣などとたゝへられる。この眼こそは恐らくこの紋樣の源始の晝因で、今日は全く紋樣化してしまつてゐるけれど、もと邪視（デヴル・アイ）を睨み返して身を護る呪的意義をもつたものであつたことが、この眼の名から仄かに想見されるのである。





神津島の風俗

藤木喜久麿

今夏伊豆の神津島に約二十日餘りを遊んだ。其の間に同島の鎭守である府社物忌奈命神社の大祭があつた。此の日は島中の幼老男女のすべてが參詣するのであつたが、其の中に唯一人此の老婆が古風な衣裳を着けて居るのが特別に眼に寫つた、兼てから伊豆七島の女の古風俗として、平常にも椐々樣の衣服を着けてゐたと云ふ事は、聞いては居たが實際に見るのは初めてゞあつた。

着々は帷子で、薄藍色の地に菊と萩を白く染ぬき、花の紅と黄、葉の綠色等を筆で描き込んだ古風な染法のものであつた、此の衣服は今年八十歳程になる此の老婆が十五歳の時に作つて貰つたのだと云つて居た、帶は普通の西陣もの丶赤味勝ちの縞ものを二重程廻して、前で一重結びにして殘りをだらりと下げて居た、帶の前結びは禮裝であつて葬祭にに限られて平素は二寸位の平絎の紐を前でこま結びにかつきりと結ぶのである。髪はいぼぢりと云ふ髷に結んで紅木綿で鉢卷をしてゐる。

谷譲次・空の旅

―本號「虹を渡る日」參照―



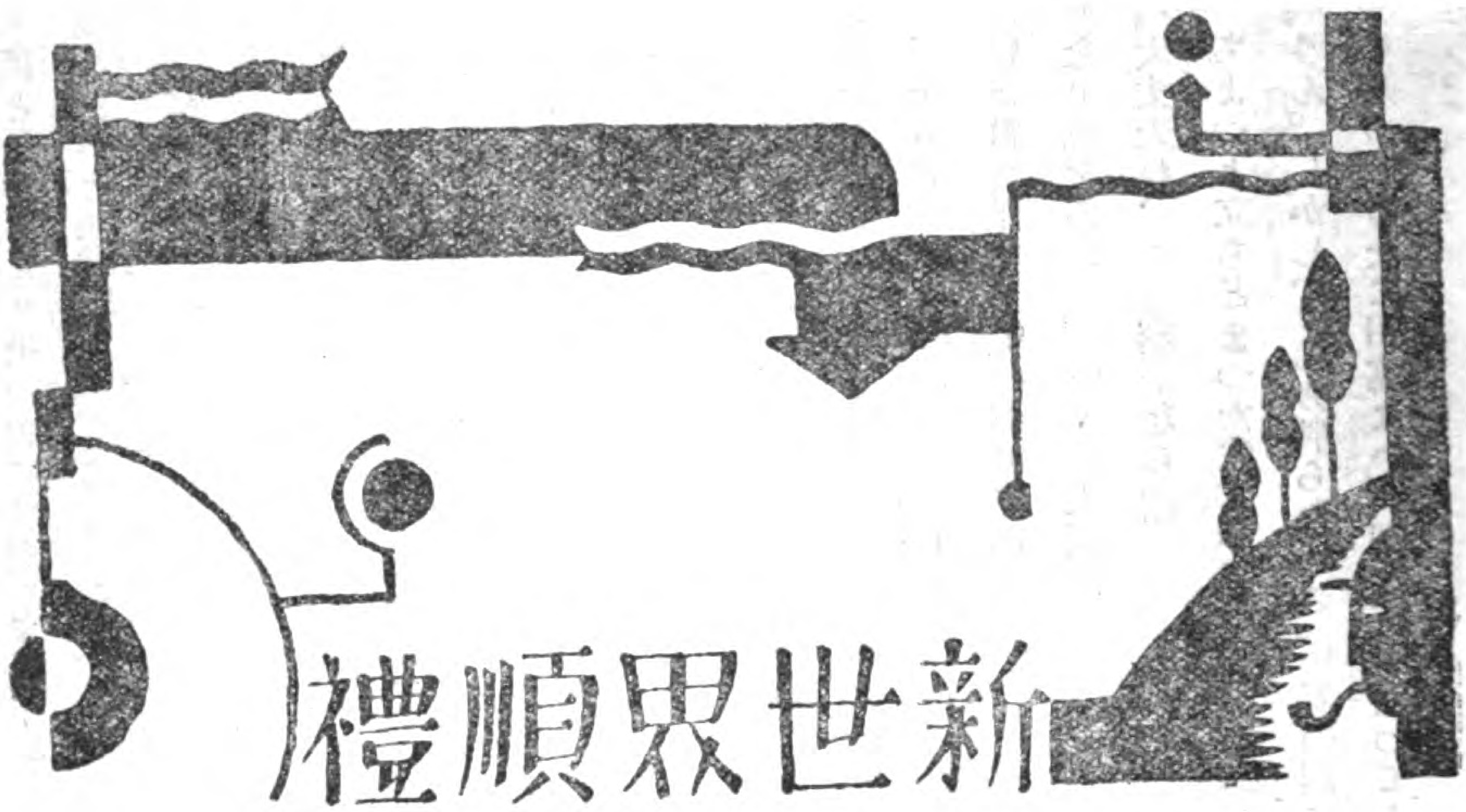


（上）ロンドン郊外クロイドンの空の港（エア・ポート）

（中）七月二十一日パリ郊外ブウルジエ飛行場に著いた谷譲次氏並に和子夫人



（下）谷譲次氏夫妻の搭乗せるシルバア・ウイング號の客室



虹を渡る日

谷 譲次

とりつぷ・あ・ら・もうど

BUMP!

ロンドン巴里間航空旅行。

一九二八年――A・D――七月はじめ、それこそどしんと押し寄せてきた暑さの波に揉まれて、山高帽と皮手袋と圓踵の女靴と、石炭とキドニイ・パイと――つまり老ろんどんそれじしんが、影のない樹立ちも、ほこりの白い街路も、商店の軒覆の下をつたはつていく大男の巡査も、みんな一やうにまつくろなはんけちで眞黑な汗をふきながら――now、つまり、珍しくあつい以外には、先づ、しごく平和な夏の英都の或る日の正午ちかく、詳しく言へば午前十時四十五分だつた。いまや自動車の急流ひきも切らないウェストミンスタア橋の方角からあれよといふ間に一台駈けぬけてきたTAXIが、リジエン

ト街とチヤアルス街の角にぴたり靜止すると、そこの石造建築物のまへに手荷物とゝもにひらりと地に下り立つた男女の東洋人があつた。

旅裝と覺悟こゝにまつたく成り、勇氣りんりんとしてあたりを拂はんばかり——AHA！ 言ふまでもなくそれは、これから巴里へ飛ばうとしてゐる私と彼女だつた。

とまあ、思ひたまへ。

BUMP！

物語のいとぐちである。

さて——。

そこで、くだんの石造建築物の正面階段を登りながら、出來るだけ悠然と天を仰ぐと、空氣の層がやたらに靑く高く立つて、テムズの河畔（エンバクメント）にはずらりと木かげに駄馬がやすみ、駄馬に蠅が群れ飛び、蠅の羽に陽が光つて、川づらの工作船が鈍いうなり聲をあげる。いゝお天氣だ。

『大丈夫ね、この調子なら。』

ちよつと立ちどまつた彼女が、かうかすかな聲を發する。

『うん。しかし、それあ判らないさ。』私の眼はいさゝか意地わるく笑つてゐたに相違ない。『何と言つたたつて人間のすることだから。』

『あら！ だつて、こんなしづかな日。風はなし——。』

なんかと、私と彼女のあひだに、けさからもう何度となく繰り返された會話の反覆がまたしばしつゞいたのち、たゞちにふたりは敢然と民族的威容をとゝのへてその建物の内部へ進入した。

とまあ、思ひたまへ。

BUMP！

いふまでもなく、チヤアルス街とリジエント街の角は、帝國空路會社（インピリアル・エアウエイ）の倫敦における「空の家（エア・ハウス）」いはゞ空の旅客の集合場である。空の事務所（エア・オフイス）なのだ。

Oh! The Air House!

なんとこの新語の有つ科學的夢幻派の色あひ（ヌアンス）——十年まへそも地球上の誰がこんな言葉を考へ得たらう？——その超近代さ、自然への挑戰！ CHIC！ CHIC！ Très chic! あるとら・もだあん！ 私たちが、たしかに生きてゐる證據にじぶん達のなまの神經をぎりぎり痛感する歡喜の頂天は、まさに空の旅行の呈供する thrills につきると言はなければなるまい。なぜならそれは、この速力狂想時代の尖銳、觸角、突線、何でもいゝ、世紀の感激そのものであり、たましひを奥齒に嚙みしめて味はふ場合だからだ——といふんで、ちよいと巴里ま

で、なんかと、まあたゞ「人のする飛行なるものをわれもしてみんとて」、こんにちこゝにぶらりと立ちあらはれた私達である。

が、ＢＵＭＰ！

このチヤアルス街空中館（エア・ハウス）、飛行旅客の待合室へ踏みこんだ刹那、ひとつの正直な反省的心狀（ムウド）が、電波のやうに全身を走り過ぎたことを私は告白しなければならない。

もつと超特近代的に無賴であるべき瞬間に、不必要な「冷た（コウルド）い足（フイート）」が私達をとらへたのだ。懷疑――自己保護――そしてagain、懷疑。

こゝにおいて私と私の常識が押問答をはじめる。

『飛行機といふものは絶對に落ちないか。』

『勿論、けつして落ちない――とは斷言出來ない。しかし、旅客機ならまづ九十九パーセントまでは安全だといつてよからう。安全剃刀の安全なるがごとく、それは日常的に安全なのだ。』

『さうかなあ。けど九十九パーセントつてのがどうも氣になるね。あとの一パーセントはいつたい何だい？』

『それは何かの故障・錯誤・違算――きつと今までの飛行術の知らなかつた、ぜんぜん新しい、ほんの針のさきみたいに小さな誤謬の突發可能性さ。それでも空中では優に致命的であり得るにきまつてるからね。とにかく萬能にほど遠い人間が、特定の一目的のほか何らの用をなさない機械なるものをあやつつて高くたかく地を離れるのだから、こりやあ君、比較的危險率――それとも不安率と言ひ直さうか――の多い理屈ぢやないか。』

と。

つねに冷淡な常識は、こゝで私を突つぱなしてしまふ。ＢＵＭＰ！

自殺的行爲――墜落中の心理――その感情・光景――新聞記事――それらが私にじつに如實に想描される。

「Ｉ・Ａの旅客機墜落
　大木を打つて一同慘死
　　不運の乘客中に日本人夫婦」

Or――。

「飛行史上に大きな謎
　原因不明の旅客機墜落
　　眼もあてられぬ現場」

Enough!

だが、これらは不必要な恐怖のための恐怖、單なる不吉のための不吉で、言はゞたぶんの變態的興味をふくんでゐるかも知れないが、つぎに私は、このチヤアルス街エア・ハウスの第一歩に、ＡＨＡＧＨ！　より精神的に深刻な悩みをくぐらなけれ

ばならなかつた。

　科學はいま人間をいゝ氣にあまやかしてゐる。一たい、この思ひあがつたちよこ才きわまる科學を過信し、あの、生を享けて以來頭上にいたゞいてきた大空へ、圖々しくもぬけぬけと舞ひ上つたりしてもいゝものだらうか。それとも、原始人の恭敬篤實なこゝろにかへり、天を懼れ頭を垂れ、蹣跚如、かたつむりのごとく遲々として地を往くはうが、すくなくともこのさい「穩當」ではなからうか。思ふに、人類――ことに東洋の――にとつて、空は直ちにみそらであり天上であり、すでに立派に宗教概念の領域に屬する。この聖なる空間をぷろぺらで搔きみだし、鳥族のやうに空を流れるさへあるに、あまつさへこれを近代的だなぞと誇稱して迷業になつてゐるうちにこれだけでも冒瀆、不遜、そのうへ人は誰でももろもろの罪業ふかい生物だと聞く。天罰たちどころに到つて――現實にＢＵＭＰ！　なんてことになりはしまいか。

　とかういふと、いよいよ空の家(エア・ハウス)へまで出張つて來てから、かなり長い思索の時間をもつたやうに聞こえるが、じつは只――出來るだけ悠然とこのチヤアルス街角の入口をまたぎながら、雲のない蒼穹――いまに私と彼女がそこへいくのだ――と、テムズ河畔にいこふ馱馬の列と、馱馬にからかふ蠅のむれと、蠅の羽を濡らす光線と、その周圍、さんさんたる陽ざしのなかに默つて並ぶ善きふるき倫敦の建物と――とにかく「墜落・慘死」にはあまり緣のありさうもない樂天的風景に接して大いに意を强うし、思はず、

『大丈夫ね、このぶんなら。』

『うん。しかし、それあ判らないさ。何しろ萬能にほど遠い人間が、特定の一目的のほか用をなさない機械なるものをあやつつて、高く地面を下にするんだから――。』

『あら！　だつてこんな靜かな日――。』

　などと私と彼女がさゝやきあつたとたん、それはほんの瞬間的に私を襲つた一種の「はかなさ」にすぎなかつたものを、いまあとからかうして解剖し描寫してゐるだけのことなのだ。が、運命へ向つて骰子を振る氣もち――とでもいはうか、底に悲壯な一大決意がよこたはつてゐるのは事實で、こればかりは、いかに老練な飛行家でも、その一つひとつの飛行ごとに新しく經驗するところの內的動搖であるに相違ない。この壯烈な賭博感にのみ、近代人を魅縛し去らずにはおかない飛行のＣＨＩＣがあるのだ。

　空の誘惑。

　ＡＨ！　The Air Line!

やつぱり何といふ「どれ・しつく」!—Ultra modern!

BUMP!

『正午十二時の飛行ですね?』

聲が私を哲學から呼び戻す。「科學信ずるに足るや、はたまた信ずべからざるか」の大きな、そして何時まで經つても堂々めぐりの問題から——。

で、われに返つてこゝチヤアルス・リジエント街の角、I・A社「空の家（エア・ハウス）」の內部を見わたすと、茶いろのゴルフ服に身を固めた顏色どす黑い異形の一人物と、あきらかに結婚によるその相棒（パル）とおぼしく、小（ち）つぽけなくせにいやに巴里めかしてこましやくれた女とが、相方ともに決死の二字——漢字である——を眉間に漂はせ、世にもさつそうとして濶歩してきたんだから、覺悟のほども察しられて、みんなおどろいてこつちを見てゐる。とにかく、係員はびつくりしたやうな聲を出した。

『銀翼號（シルヴァアウイング）——正午十二時の飛行ですね?』

『さうです。』飛行機にはもう飽きあきしてゐるといふ顏で、私が答へる。『ちよいと巴里まで。』

『は。旅券、切符をお出し下さい。それからこの表へ御記入のうへ署名願ひます。』

旅券はいゝ。切符も二週間まへから買つてある。そこで、彼女とゝもにかたはらの机にならんで、めいめいに渡された紙片へ所要事項を書きいれ出したが、彼女曰く。

『嫌ね。何だか遺言を書いてるやうで。』

『國籍、氏名、年齡、住處——なるほどこれさへ殘つてれば、どこの誰が死んだのかすぐ判るわけだな。これあ何だ、えゝと、たとへ墜落卽死致し候とも、ゆめ御社を恨むやうさらさら御座なく候。後日のためよつてくだんのごとし、か——はゝあ、こゝへ署名するんだな。』

なに、たゞいつもの出入國の形式に過ぎないんだが、蟲のしらせとみえて、どうもこんなやうな書類に見えてしやうがない。

停車場の待合室そつくりな部屋に、旅行者のむれが不安げにうろうろしてゐる。その一人ひとりが、外套手荷物その他機上へ運び入れるもののすべてを身につけたまゝ、順々に計重器のうへに立たされて、體重とその衣類手廻品の總合重量を取られる。彼女が呼び上げられたとき、中世以來の騎士道により私がそのハンド・バッグを持つてゐてやらうとしたら、

『彼女をして自身そのハンド・バッグを持たしめよ。しかしてわれらをして彼女並びに彼女の身邊の全部に關する最も正確に近き重さの數字を知らしめ……。』

BUMP！私は叱られてしまつた。

「倫敦巴里間――帝國航空路」といふ繪紙が荷物にべたべた貼られる。だんだんこゝろもちが輕く――飛ぶまへだから――なる。右往左往する旅情、制服の事務員、案内者、立ちばなし、別れの挨拶、笑ひ聲、あわたゞしさ――からなるともう普通の待合室と何らの變りもない空の停車場だ。たゞ客種がよく、あらゆる設備がはるかにモダンで grand luxe なだけだ。が、エア・ハウスといふのは空中旅客の市内集散所で、もちろんじつさいの「空の港(エア・ポウト)」はロンドン郊外サレイ州のクロイドンにある。客はI・A社の自動車に乘せられて十一時に市の空中館を出るんだが、その十五分まへ、すなはち十時四十五分には必ず出頭するやうにと前日社から電話でお達しのあつたのは、つまり出發まへにこれだけの手つゞきを濟ます餘猶を見ておくためだつた。

Imperial Airways, Ltd――LONDON to PARIS

時間表――廿四時制

日曜以外　毎日　クロイドン發

A　七時四五分

B　十六時三十分

C　十二時

飛行時間　二時間半から四時間

乘機賃、發着飛行場と市内空中館間の自動車賃を含む。

A　は四磅十四志六片

B　は五磅五志

C　は五磅十五志六片

で、ABCと出發の時間が違ひ、各機の大小、新舊、速力、設備、二エンヂンか三エンヂンかによつて運賃にも保險的性質の差異をきたすわけ。つまりこれが等別で、Cが一等、Bが二、Aは三等にあたる。私たちは萬善を期してCをえらんだことといふまでもない。

手荷物規則

ひとりにつき三十封度まで無代

三十封度以上は、一封度に三片のわりで申し受けます。

ちなみに私たちは、大型スウツケイス二個、帽子箱一個、グリツプ一個、小鞄二個、ホウルドオウル一個、ケインサツク一個、シネ・コダツク及附屬品一個、これだけ持ち込んで超過二磅五志九片を拂つた。

倫敦から巴里へは、おなじクロイドン飛行場(エロドロム)からやはり一日三回ふらんすのエア・ユニオンの機が飛ぶから、都合六回の離陸があるわけだが、夏はそのすべてが滿員で、すくなくとも二

三週間まへから申込まなければなかなか切符が手にはいらないくらゐの盛況である。

エア・ハウスには、最後に人心をおちつけさせるため、奥にこぢんまりした別室がしつらへてある。そこへ腰を据えて飛行場への出發を待つてゐると、女給が出現して、

『お辨當(ランチ)の御用——ランチはいかゞ？』

よつて機上で消費すべく二人前のランチを命じ、代金を拂つて受取りがはりの切符を貰ふ。これを飛行機のなかで呈示してランチ包みと交換するのだ。

そばで品のいゝ英吉利の若奥さんが何國(どこ)かのお婆さんとさかんにおしやべりしてゐる。

『はあ。ちよつと巴里まで。』

奥さんの宣言である。このお婆さんも乘客とみえていさゝか心配さうに、

『大丈夫でございませうねえ今日なんか——こんなしづかな日。風はなし——。』

『あたくしなんか隨分みなからおどかされましたけれど、でも、この頃では何んなに風が吹きましても平氣ださうでございますよ。』自信あるものゝごとく奥さんはつゞける。『何でも出發のまへの晩は總がかりで徹夜して、エンヂンから機體からすつかり檢査してこれでいゝとならなければ決して飛ばないんださうでございますよ。けれど、なにしろ人間のすることで御座いますから——。』

『ほんとにねえ。』

やがて、自動車の出る合圖。

空の旅人を滿載した二台の大きなくるまが、日光・無風・暑熱の場末をクロイドンへ——。

車中、じぶんへの私語。

『どうだい、胸騷ぎはやまつたかい。』

安心立命！

安心立命！

あん・しん・りつ・めい！

そのうちに新開地のクロイドンの「空の港」だ。飛行場(エロドロウム)だ。巨大な建物。壯麗な新築飛行ホテル。整然たる發着所。待合室。繪葉書たばこ類賣場。食堂。化粧室。乘客と見送人の雜沓。ふたゝび旅券檢査。私たちにもバアンス夫人の一家と、彼女のあそび友達ミス・ノリスとが早くから見おくりにきてゐる。

『ほんとにいゝお天氣——。』

「大丈夫ですわね、このぶんなら。』

『えゝ。こんなしづかな日。風はなし——。』
ぢ・ぢ・ぢ・ぢい——呼鈴（ベル）。
『巴里行き！巴里ゆき！』
これで、ぞろぞろ野原へ吐き出される。茫漠たる青ぐさの展開。しばらく踏みおさめの土。
あ！ならんでる、並んでる！地に翼をおろして！
飛行機・複葉・とんぼ・無數の水々しい飛行機——新鮮な果實のやうな悪戯心に滿ちた反撥と彈力をぢつと押さへて、OH！お前たちはいま乘るべき微風を待つてゐるのか。
引力への反逆者よ！
思ふさま地を蹴れ！

雲を驅る惡魔

GRRRR——。
すでにプロペラの廻轉をはじめてゐる淡灰色の莫大な妖怪が、前世界の動物のやうな筋骨だらけのからだをジエリイみたいにこまかくふるはせて、おとなしく私たちの眼前にある。
定期旅客機「銀のつばさ」である。なんと雲に擦り切れ、空によごれたそのすがたの頼母しく見えたことよ！
あんなに積んで飛べるかしらと思ふほど、客ぜんたいのトランクやらスウツケイスやら鞄やらを山のやうに機の一部へ押しこんでゐる。廣場のせいか、飛行場へ出てみると風がある。帽子の吹きとばされさうな強さだ。
『あら！ひどい風ね。』
『かうなると運を天にまかせるんだね、文字どほり。』
見送り人の一團が遠くに——こわいとみえてそばへは來ないで——かたまつて矢鱈に手をふつたりカメラを向けたりしてゐる。このところちよつと「生きては再び地を踏まず」といつた氣慨が私たちを東洋的に昂然とさせる。言はれるまゝ機のまへに並んでミス・ノリスのれんずへ社交用微笑を送りこんだのち、車掌——ぢやない、機掌だ——に急せたてられて、他の乘客とゝもにどやどやと階段をのぼつて機の横腹に開いてゐる入口をくゞる。
フオウドのタキシが走り出すまへのやうな、へんに舞踏的な震動だ。
が、何といふ愉快な小客間（プチ・サロン）！機首が高いので坂のやうに傾斜してゐる細長いキヤビンに、兩側に窓、みどり色のカアテン、それに沿つて片つぽに十人づつ廿の座席、綠いろ——そもそも綠色は人の神經を鎭靜させる効用をもつ——ひろうど張りのふ

くよかな肘掛椅子、上に網棚、まんなかに通路、綸笠をかぶった雷燈、白服の給仕がひとり――「空をゆく應接室」といってい〻。

一同また〻く間に席へつく。中央部が一ばんい〻と聞いてゐたので、ふたりは素走つこく立ちまはつて背後から五番目へ左右に別れて腰をおろす。妙にしらじらと冴えわたつて、死生命あり論ずるに足らずといつた心境だ。おもむろに眼をうつして機内を見まわす。

女、十六人――内譯、七十才あまりの老婆ひとり、中老七人、若い細君――彼女を入れて――四人、女學生三人、五六才の少女ひとり。

男、四人――うち自分を含む。但し男女とも國籍不明。これだけが「死なばもろとも」のみちづれである。

Grrrr――が高くなり加速度になり、見送人は一さう遠くへ追ひやられる。出發が近いのだらう。みんな無言で一せいに椅子のはしを掴む。と、正面の小窓をとほして飛行士の運轉房(カックピット)が見える。そら！　乘つてきた。色の黒い「空先案内(パイロット)」の横顏。や！　笑つてるぞ！　機外の助手に手を上げて――白い歯、太い首、われらの英雄よ！　君はゆうべ充分の眠りをとつてくれたらうな。身心爽快だらうな。とにかくかうしていま廿二個の生命――私と彼女と君じしんとボウイさんのとを通算して――が、すつかり君ひとりの技能と沈着と「突嗟の考察(クヰックマインド)」とにかゝつてゐるのだ。君、この飛行さへ無事にやりとげたら、僕は同乘客に演說して君のためにトロフイを贈らう。ブライトンに別莊を建てゝ獻じやう。君の子供たちの教育は一さい僕らが負擔してもい〻――。

空は誘惑してやまない。

飛行士の巾のひろい脊中がまへゝしやがんだ。

BUMP!

機は地上をすべり出す。

――GRRRR轟々爆々―― and then, BUMP!

BUMP!

BUMP!

BUMP!

はじめは遅く、やうやく早く、それからあせるやうに跑くやうに、咆哮し吹號して機は滑走をつゞける。

もう誰もそとへなぞ何らの注意をはらふ人はない。みな凝結したやうに無言のまゝ「人生の足が土をはなれる瞬間」を待つとしづかに期待してゐる。

私は心搏する――倫敦から巴里へ弧のやうに架けられた七色

の虹の橋を。

前世紀人のえがたいその虹を踏んで私たちはいま天を渡らうとしてゐるのだ。

虹の橋——何といふ人類の夢の實現！　なんといふ際限もない科學の征服慾！

まるで射撃中の野砲の内部にでもゐるやう、ぷろぺらと機關の音・音・音が完全に鼓膜を獨占して、耳のそばで何か言はれても金魚があくびしてるやうに口の開閉が見えるだけだ。

となりの彼女がしきりに私を突ついては前を指さす。そしてさかんに何か耳へ詰めてゐる。

へんなことをすると思つてよく見ると、虹の橋なんかとひとり勝手に感激してゐて氣がつかなかつたが、前列の椅子の背に、なにか書いたものといつしよに一きれの綿がはさんである。

「「空の旅行者への注意」——とあるから、さつそく讀んでみると、左のごとし。

「「帝國空路社（インピリアル・エアウエイス）——ＬＴＤ——は、この、天空旅行の便宜のために、特に以下列記されたる個條を必ず一讀あるべく、われらの乘客各位がそれほど充分親切であらんことを乞ひねがふものなり。何となれば、そはこれらの事項を各位の滿足にまで說明すればなり。

一、飛行機——空における——の正規の運動。

二、いかにして最大の安樂のうちに天を往くべきか。

三、非常時の對策、およびその場合の心得。」

第三がずきんと私の胸を衝いたことといふまでもない。すなはち、あへて依賴を俟たずとも急遽一讀すべく充分以上に親切である。

「べつに飛行機に乘るために特別の着物は要りません。長時間のドライヴに適當なものなら何でも間にあひます。

離陸のさい、たとへ機が飛行場の隅へぶつかりさうに突進することがあつても決して驚いたりあわてたりしてはなりません。飛行機はつねに風へむかつて離着陸するものですから、かうしてしばらく滑走してゐるうちに、いつとはなしに自然に地面から浮かぶのです。

この綿をむしつて耳へおつめ下さい。エンヂンの音から聽覺を保護するために。

氣壓の關係で一時かるいつんぼになることがあります。さうしたら鼻の穴をつまんでおいて力（りき）んで下さい。あるひは降機（ランヂング）のときにちよつと唾を飲みこんでもよろしい。すぐ直ります。

方向をかへる場合、飛行機はよく水平を破つて一ぽうに急傾斜しますが、これはまつたく安全な行動であります。いはゆる眞空(エア)ぼけつとなるものは絶對に存在しません。ＢＵＭＰと稱する小急下降運動は、ちようど船に波浪が作用するやうに、氣流の上下動に乘つて機が小刻みに揺れるだけのことです。

高いビルデングのうへから下を覗いたりする時の眼のくらくらとする感じは、飛行機には全然ありません。地上とのあひだに何らの物的接續(コネクション)がないからであります。

船に弱い人でも飛行機には醉ひません。すこしでも氣分のわるい方には、一こと仰言れば、ボウイが備付けの藥品をさしあげます。吐嚢(カスピドア)も一つづつ皆さんの足もとにあります。が、空醉ひ(エア・シクネス)にいちばんいいのは新鮮な冷たい空氣です。自由に窓をおあけ下さい。

本社の大陸定期飛行機には、すべて後部にＷＣがついてをります。そして何んなに皆さんが動きまはつても、そのため機が平衡(バランス)をうしなうやうなことは斷じてありません。

飲料水はちよつとボウイへ。ウヰスキイ・ワインその他の酒類飲み物も積んでをります。

喫煙はもちろん、いかなる目的にもせよ機内で燐寸をすることは政府の規則により固くおことわり申します。

何によらず、飛行機の窓からけつしてものを棄てないやう願ひます。

もしその必要があれば、乘客はキャビン正面の口孔(アパアチュア)をとほして飛行士と會話することが出來ます。

あなたの飛行士は過般の大戰の勇士、千風萬雲の古つはものであります。そして飛行中、彼はつねに無線電話で目的地と通信を交換し、天候氣流その他に關して絶えず豐富な報道を供給され、いかなる狀況にもその用意がととのひ、事實Ｉ・Ａ社はいま全員全力をあげて あなたの安全を守護してゐるのです。

海峽横斷のさい萬一(エマアジエンシイ)のために――ちようど汽船とおなじに――救命帶がそなへつけてあります。」

と それから圖解で救命帶の着用方を詳説し、なほ、

「キャビンの天井に非常口があります。いざといふ時は下がつてゐる輪を強く引き、出口を破り開けて下さい。

エンヂンの音が止まりさうに低くなつても、決してびつくりすることはありません。それは着陸の準備か、あるひは單にあなたの飛行士が、彼の判斷において、速力をよわめるか又はもつと低く飛んだはうがいゝと考へて、さう實

行してゐるまでのことですから――御安心下さい。」

もう一まい紙がはいつてゐる。それには「銀翼(シルヴァ・ウイング)號に關する事實(ザム・ファクツ)の一部」とあつて、

本機「銀のつばさ」は、アラン・カブへム卿が倫敦ケイプ・タウン間、ならびに英濠往復飛行に使用して大成功をおさめたるアウムストロング・シドレイ式三八五・四二五馬力冷空ジャガア・エンヂン三個により推進(プロペル)さる。

正エンヂンは操縦席(カク・ピット)の前面、機の鼻さきに位し、他の二つの補機關は兩翼の中間にあり。

本機は特に長時間飛行のため建造され、キャビンの通風暖房照明等すべて最も近代的デザインになる。

中央エンヂンの後部は防火壁にして、石油は上翼下二個のタンク內に貯藏さる。

本機の最大速力は一時間百哩以上。

滿載時の重量は約七噸半なり。」

から一氣に讀みおはつた私は、あわてゝ綿を千切つて耳へ詰めながら見まはすと、成程みんな耳の穴を白くふさいでゐる。

BUMP!

と、風をついて滑走(タクシ)してゐた機が――じつさい何時からともなく――ふわりと宙乘りをはじめたらしい。いまゝで機窓の直ぐそとにあつた地面がどんどん下へ沈みつゝある。

天文とジュラルミンと大膽細心と石油の共同作業は、こゝに開始された。

飛び出したのだ。

Off she goes――The Silver Wing!

OH! Glory! 何といふ刹那的な煽情(センセイション)! 刺激・陶醉・優越感・壓されるこゝろ――このGRRRと、そしてBUMP!

生きながらの昇天だ。人と鞄と旅行免狀とランチ包みとボウイさんとの。

はつはつはつは!

ほう・ほう・ほ!

聲は搔き消されて聞こえないが、乘客は誰もかれも大きな口をあけて笑つてゐる。皆げらげら笑つてる。何だか無暗におかしいのだ。けふから新しい生命を貰つて、全くべつの動物になつた氣がする。それが可笑しくておかしくてたまらない。赤んぼのやうな根據のないうれしさだ。

で、あはゝはゝ!

私も笑ふ。うんと、うんと笑つてやれ。

HO・HO・HO!

が、機が飛行場を離出して、すぐそばのアパートメントの中層とすれすれに飛び、あけはなした窓をとほして一家庭の寢臺、絨毯、机、そのうへの本、ちようど戸(ドア)を押して這入つてきた女、それらが大きく大きく——實際よりずつと大きく——あざやかに閃過(フラッシ)したとき、私はふつと惡魔になつた氣がした。

さうだ。けさテムズの岸で馬にからかつてゐた蠅。私はいまあの一匹に化けてゐるのだ。

だからぶうんとこの窓枠へ飛び下りて、それから机、書物と順々にとまつて、そこで首をかしげて兩手をこすらう——。

惡魔だ。

BUMP! そして Rolling。

機は「無」のなかを一路駈け上つてゐる。太陽をめざし、神を望んで。

Bapteme de L'Air!

大きな赤い屋根、頭からすぐ脚の生えてゐる人間たち、一枚二枚と數へられる自動車——何うしてこの町はかう平べつたいんだらう？

やー！ 丸い穴、四角い穴、何だ、煙突だ。やあ、テニスをしてらあ！ 馬鹿だなあ、よして上を見てらあ。顏が靴をはいてるぞ！ やあい、手なんか弱すない！

きちようめんに長方形なテニス・コウトとその附近がむらさき色に澱んで見える。飛行機の影が落ちてゐるのだ。

BUMP!

すでに高度は千米以上。百米の速力。これから千乃至五千の高さを搖曳して飛ぶ。一分間に汽車の窓から見る視野の卄倍が一秒のあひだに私たちのまへ——いや、下にあるわけで、機の直下の一地點だけでも、まさに六哩平方にあたる勘定だ。

もう疾うにクロイドンを飛び出したのだらう、人家がまばらになつて、バリカンのあとみたいな耕地がGrrrrと斜めにゆるくうしろへ流れつゝある。

空の濁つてゐるのが倫敦の方角らしい。

機首はきまつた——一直線に巴里ブウルジエへ！

かうなると私たちには何らの恐怖も危惧もない。あるのは只こみ上げてくる愉悦と單純な驚異の連續だけだ。

洋々たる「空の怒濤」。

おとこの雲。

おんなの雲。

こどもの雲。

みんな仲よく私たちのまはりに遊んでる。さわいでる。笑つてる。

笑ふと言へば、いままで他愛なく笑つてゐた機内の人々は、急にじぶん達の笑ひに氣がついて、その笑つたことが耻しいやうにあわてゝ「人間界」の威儀をつくり出した。そこで狂奔する音響のなかで、私のうしろのお婆さんは毎日郵報(デエリイ・メイル)を擴げ出し、商人らしい中年の紳士は小鞄をあけて書類を讀みはじめ、女學生は林檎を剝き、女の兒は窓へつかまり、その母親は背後から女の兒をつかまへ、もうひとりの若い男はよろけながらWCへ立ち、ボウイが飲み物を賣りにくる——いかにも旅行の一頁(ページ)らしい光景。

彼女が私へノウトを渡す。筆談だ。書いてある。

『イカガ？』

私が返事をかく。

『ヘイキ。』

彼女がほゝえむ。私もほゝえむ。それからまた、むさぼるやうに二人は下界の觀察だ。

プロペラの音、その風、自信に滿ちみちて大きくうなづく銀いろの翼、私の窓のそとに泣くやうにふるへてゐる、一本の寒い綱(ロウプ)。

地球はいま私たちに關係なく廻つてゐる。

何たるそれはのろくさい文明であらう！　じつに笑ふに耐へた平面・矮小・狹隘・滑稽そのもの、社會であり歷史であり思想であり「人生の悲劇または喜劇」であらう！　なんといふバセテックなにんげん日々の希望であり Pathoであり微笑であることよ！

上から見る生活の白じらしいはかなさ——島はすべて虛無主義者に相違ないと私は思ふ。

機内はあかるい。天井に薄い布を張つた菱形の非常口があるからだ。裂く羽目(リッピング・パネル)である。Ripping panel——in case of emergency, pull ring sharply. から讀める。忘れてゐた氣味のわるい思ひがふつとまた頭を出しかける。No Smoking とも大書してある。Not Even Abdullas とすぐあとに斷つてある。アブドユラは輕いから煙草ぢやないなんていふ人もあるとみえる。ちよつと引つぱれば取れるやうに、頭のうへに救命帶が細い糸一ぽんで吊してある。これも見てゐてあんまり氣もちのいいものぢやない。Life Belt, Pull Only in Emergency——。

私は思ひ出す。つひ一週間ほどまへ、なんとかスタインといふ倫敦財界の大頭——すでに何とかスタインである以上、それはつねに財界の黑幕にきまつてる——が、海峽のうへで飛行機から落ちて、新聞と取引所をはじめロンドンぜんたいが大さわぎをしてゐたことを。そして、その死骸がきのふ海岸で發見さ

れて先刻クロイドン飛行場にさういふ掲示が出てゐたことを。一昨日はまた、旅客機ではないが、このI・Aの飛行機がBUMPと落ちて、ちよつとJoy-rideとしやれてゐた會社の女タイピストと事務員の一行を飛行家とゝもに全部恨みつこなしに殺してゐる。じつはこれらの事實は、私が考へまい考へまいと努力してゐたところのものだが、「裂く羽目（リツピング・パネル）」だの救命帶だのをぢつと見てゐると、私はいつしか、いまこの天空のうへで故障が起つて――操縦者（パイロット）の心臓痲痺・突然の發狂といふこともあり得る。――客一同は總立ちになり、誰かゞ躍り上つてリツピング・パネルを破り、彼女は私にしがみつき、女たちは泣き叫び、男はたゞうろうろし――そのあひだも、一團の火焰と化した機は螺旋をえがいて落下しつゝある！　としたら何うだ！　などと、内心安全を確信してゐればこそ、とかくこんな場面も空想にのぼるんだらうが、いまゝでの空の犠牲者――早い話しが何とかスタインにしろI・Aのタイピストにしろ――は、誰でもこの、ぼんやりながら根強い、自分だけは大丈夫にきまつてゐるといふ内心の確信にまかせて機上の人となつたに相違ない。

さう思ふと、何とも飛んだことをしたやうな氣がしてくる――――ものゝ、この快翔に一たい何が起り得るといふのだ？

あゝ、惡魔だつた。そも惡魔に、落ちたり死んだりすることが考へられやうか。惡魔！　惡魔！　赤いもゝひきに赤いまんと、蝸牛の頭巾に小意氣な髭のメフィストフエレスは、いま銀のつばさを一ぱいに張つてこの大ぞらを飛行してゐる。悠々とそして閑々と。法規と禮讓と道徳とあらゆる小善とを勇敢に無視して、其のうへを往く「空の無頼漢（アパツシェ）」だ。何といふ近代的無責任なCHIC！

BUMP！そしてRolling。

窓から手を出す。指が切れて飛びさうだ。つめたいのか痛いのかちよつと感覺の判斷に迷ふ。

ボウイが正面壁間（ブルワアク）の黒板へ何か書き出す。みなの眼が白墨へあつまる。NOW　OVERと上にぺんきで出てゐて、ボウイのチョウクがあとをつけ足す。

NOW OVER Sevenoak.

セヴノウクの町だ。

はゝあ、固まつてる。うすつぺらな家が、後園（ベツク・ガアデン）が、洗濯物が、木が路が人が。

鷄？　それとも犬かしら？　白い廣場に何かぽつんと黒點が見える。ゆらゆらとセヴノウクがうしろへすつ飛んだ。

畑だ。森だ。野だ。

畑は黄・赤・白の幾何的だんだら、森は黒い集團、野は雲の投

影。

機は早い。

NOW OVER Tombridge.

おや！帯が落ちてる。何だ、國道(ハイウエイ)ぢやないか。ばかに曲りくねつてるなあ。無數のぽちぽちがぢつとしてる。自動車の列だ。あれでも早いつもりで走つてるんだらう。そのうへをすうつと飛行機の影が刷いてゆく。

川がある。橋がある。人が渡つてる。

川は白い絹絲、橋は六號活字の一、人はペンさきのダツトだ。すぐうへに太陽があり、まはりにはうすい雲が飛び去り、下は一めんに不可思議なパノラマ——すべての王國と共和國と財貨と野心と光榮と、それらがみな私の所屬をねがつてひろがつてゐる。何といふ地上の媚態、嬌姿！　だが、現世(うつしよ)の舞台は何と悪魔の眼にあわれに貧しく映ることよ！

私たちが夢にも知らないうちに、科學はこの赫灼たる動きとパッションをこゝろゆくまで享樂してゐたのだ。銀翼號と他の飛行機たちよ！　このとほり頭を下げる。おんみらこそは新世紀の藝術だ。私たちの最大の傑作——あ！　汽車だよあれは。二寸ほどの列車！　おい、見ろみろ、はつはつは、何てしたり顔の、こましやくれた爬蟲類だらう！

NOW OVER Dungeness.

谷・巨木・まつくろな突起。

岩・白砂・かどやくうんも。

地形に變化が多いと機は動揺する。それを逃げて一段たかく上げ舵をとつた時、私たちの下にまんまんたる青い敷物があつた。

ドウヴア海峡だ。

AHA！水銀の池。

乘客はみんな窓から覗いて、またへらへら笑ひ出した。何となく馬鹿々々しく擽ぐつたいのだ。いやにしとやかに陽に光つて、さわるとぺこんと凹みさうな、ふつくらとした水の肌——こいつは落ちても痛くないぞ。

しかし、何とこれは美々しく印刷された地圖だらう！　日の矢と、それを反射する段々の小皺と。

海峡の色は私の食慾をそゝる。

みんなと一しよに私たちも空中でランチをたべる。魔法つかひの會食。舌のサンドウイッチにトマト・桃・バナヽ。彼女は水をもらふ。飲みながらほゝえむ。私もほゝえむ。

彼女の口が大きく動いて、三つの日本發音を私に暗示する——

—オ・フ・ネ、と。

やあ！ ほんとにオフネだ、オフネだ！ 赤い立派なオフネが一さう眞下の水に泳いでゐる。これは汽船でもなければ、船でもない。たしかにおもちやの坊やのオフネだ。それにしても、何てまあ横に廣い坊やのオフネだらう！

ドウヴアはいそがしい。灰色の軍艦もむこうに海の陽炎に包まれてゐる。

あ！ なかまだ！ 三台の飛行機！ 二つは上に、ひとつは下に。AH！ 殷賑をきわめる空の交通整理よ！ 行つてしまつた。

BUMP！ 空の波だ。

一同はつとして「うゝ！」と唸る。

BUMP！

UUGH！

BUMP！

UUGH！

しばらくがぶりがつゞく。ボウイが紙に書いて苦悶中の女客へ見せてまはる。

Bumps will soon be less.

同じ悪魔でも、やはり女の方はすこしデリケイトに出來てるらしい。いぎりすの奥さんなんか、けつして下を見ないやうに

眞正面に眼を据ゑたきりだ。お婆さんは相變らず新聞を讀み商人はしきりに書類をしらべ、私は首をのばしてふらんすの海岸線を待つてゐる。

すると、出てきた。

くつきりとした地と水のさかひ。屈折する陸の進出と海の侵蝕。佛蘭西の濱は赤土の露出だ。それに白い浪がよせてゐる。

この絢爛（ゴウジヤス）な感情・王者のこゝろ。

私の全神經がぷろぺらとゝもにしんしんと喜悅の音を立てる。

百姓家。一つ光る湖、NO！ 硝子窓だ。

NOW OVER Le Touquet.

機は早い。

もう佛蘭西語の地名。

BUMP！

UUGH！

NOW OVER Abbeville.

巴里は近い。向うむきの嚮先案内（パイロット）の首がますます太くなる。

君！ もつともつとスピイドを出したまへ！

蟠踞する丘と玉突台のやうな牧場と。

部落。共有地。並木。小市街。

無視する。歡過する。抹殺する。

やがて巴里――異國者の開港場。

その巴里が、2・30PMのプウルジエが、ふたゝび「社會」が人性が生活が、いまぐんぐん機の下に盛れあがつてきてゐる。

やあい！　子供が走つてるぞ！　ふらんすの子供が！

踏切りに荷馬車と人が重なつて、汽車の通りすぎるのを待つてらあ。

その上を機は草原の中空へ――プルウジエ飛行場だ。

虹の橋のおはり。惡魔ももとの人間に還元しなければならない。で、お婆さんは新聞をたゝみ、男はねくたいへ手をやり、女は一せいにバツグをあけて鼻のあたまを叩き出す。

BUMP！

BUMP！

BUMP！

なつかしい地面が見るみる眼下に迫つてきてゐる。晝の中のにほひ・石ころ・土・草の葉――色のくろい操縱者の横顔が笑ふ。下の佛蘭西の助手へ手をあげて――。

彼女から私への最後の筆談。

『ヒコウカニナリタイ。』

都會の顔

ちようどいつか、そしてどこかですれ違つた通行人のなかに、性格的な人の顔が何といふことなしに長く頭にこびりついてゐて、それがときどき譯もなくふつと思ひ出されるやうなことがあるのとおなじに、旅にも、何ら特別の意味もないのに、どういふものか何時までも忘れられない不思議な小都會といふのがある

それはなにもその町の有つゴセツク建築の伽藍でもなければ、おれんじ色の照明にウオルツの流れる大ホテルの舞踏場でもない。さらにベデカに特筆大書してある「最新流行」の產地たる散歩街や、歷史的由緒のふかい廣場や、文豪の家や博物館では決してない。では何がそれほどその町を印象づけるか、といふと、そこには分解して言へない一つの空氣があるのだ。

旅の藝術（アウト）は、こつちがあゝまで受動的に白紙（ブランク）のまゝで、つぎつぎに眼まぐるしくあらはれる未知に備へずしてそなへ、すべてをこゝろゆつくりと送迎してゆく手法にある。さうすると深夜に汽車のとまつた山間の寒驛にも、高架線の下に一瞥した廢墟のやうな田舍町にも、夏ぐさにうづもれた線路の枕木の黄い

ろい花にも、その一つひとつに君は自分を見出すだらう。さうしてそれらに君じしんの姿を見た以上、山間の小驛も廢墟のやうな田舍町も枕木の黃色い花も、しつくりと旅のこゝろに解けあつていつまでも君を離れないであらう。

この、人見知りをしない Care-free さで、ぶらりと君がひとつの町へ下りたとする。

新しい不可思議な色彩が君のまへにある。

奇妙な文字の看板、安つぽい椅子の海が步道へはみ出てゐるキヤフエ、悲しい眼の女たち、意氣な軍服と口笛の靑年士官、モウニング・コウトに片眼鏡の紳士、どなるやうに客を呼ぶタキシ、四五人で笑ひさゞめいてゆく町の娘、見なれない電車、灯に踊る停車場まへの裸像の噴水、兵卒のやうな巡査、駈けよつてくる花賣り女――騷音は都會の挨拶（ゲリイテング）だ。

ちがつた外見の、けれど內容のおなじ生活がこゝにも集合してゐる。しみじみさういふ氣がする。そのせいだらう、もし其のとき君が、前に一度、夢でか現實にか、この町へ來たことがあるやうな氣がしたら、そしてまた、家のならびや往來の走りぐあひが君の想像してゐたところと全く同一なら――多くの場合さうだが――君はどんなにその町を愛し、そこに狎れ親しんでもさしつかへない。君はすでに町をつかんでゐるからだ。

このあたらしい都會でぴたりとくる感じ――私はそれを町の顏と呼ぶ。

へんなことには、都會の顏は近代化した大通りやいはゆる「見物の場處（プレイス・オヴ・インタレスト）」にはけつして見られない。老婆と主婦と雜貨と發音が鳩といつしよに渦をまく朝の市場、しみだらけの歪んだ壁と、小さな窓と、はだしの子供たちの狹い裏まち。それに坂だ！――私は何うしてたう坂と橫丁と市場が好きなんだらう？――これらに私は、ぢいつと私を見つめてゐる「町の顏」を發見する。

かういふ「町の顏」のなかで、性格的に印象を打つて長くあたまにこびりついてゐる多くの「顏」を私は持つ――そのうちでも白耳義の首府（メトロポリス）ブラツセルは、私にとつて忘れられない「都會の顏」の一つだ。その、千百一の物語を藏してゐさうな裏まちと市場と市街の坂と、私はこの歐羅巴の片隅に「存在をゆるされて」ゐるブラツセルの可憐さ――それは孤兒の少女に似た――をいまだに大事にこゝろの底にしまひこんでゐる。

ブラツセルでは私たちはブラツセルを生きた。そのあひだ駿日がつゞいてゐた。着いたのは夜だつた。

着くのは、あたらしい町へつくのは夜に限る。晝だと、旅につかれた君の眼に一ばんさきにうつるのは白つぽい欠點だ。そ

して、そこにあるのは何處も同じ實務の世界だけだ。が、それがもし夜なら、闇黒と灯に美化された都會が素顏を包んで君をむかへる。そして、そこにあるのは浪漫の世界だけだ。あくる朝ホテルの窓をあけてほんとの町を發見する。旅人はどうしても夜ついた都會を愛するわけだ。だから、あたらしい町へはいるのは夜にかぎる。

で、着いたのは夜だつた。巴里からブラッセルの「南の停車場（ガル・ド・ユ・ミ）」へ。

ブラッセル・すなぶつしやつと

セン河にまたがり「沼の上の宮殿（ブルックツエル）」の轉訛。

オテル・ドユ・ヴィユ――市役所。ゴセツクとルイ十四世式の効果的合成。十五世紀の建築。

アンシヤン美術館――ルウベンス・ルウベンス・そしてルウベンス。

正義の殿堂（プラス・ドュ・ヂユステス）――裁判所。前庭の階段にならぶ雄辯家の立像。シセロ、デモステネス、アルピアン。丘。中世紀的市街の鳥瞰。

しようべん小僧――ここでいふマネケンである。ルウ・ドユ・レテユルとルウ・ドユ・シエンの角。ちよいとした狹い裏通りの曲りかどに、凹んだ壁を脊にして、この一尺ほどの不屆きなブロンズはいつもさうさうと水の音を立てゝゐる。はだかの子供。一ばん古いブラッセル市民。傳説に曰く。むかしベルギイがどこかの國と戰つて、旗色わるく既にあやふく見えたとき、時の王樣だつたこの小さな小供がちよこちよこと第一線へ走り出て、そこで敵へむかつて快然と放尿した。それから勢ひを盛り返して難なく勝つたその記念だとある。なるほど言ひさうなことだ。が、マネケンと稱するわけは、この小僧はなかなか衣裳持ちで、市に何か儀式があるごとに其の場合に應じた着物をきせられる。そこで衣裳人形（マネケン）の名、日本からも陣羽織が來てゐる。町の非常な人氣者で、四五年まへ或る老婦人は遺產一千法（フラン）をそつくりしようべん小僧の維持費に寄附して死んだ。兩側とも土產ものの店――「英語を話します」「獨逸語もわかります」と窓に廣告してある。這入つてみる。マネケンの置物、マネケンの鈴（ベル）、マネケンの灰皿、マネケンの匙、マネケンのWhatnot――。

無名戰士の墓――コングレス柱（コウラム）の下。一九二二年十一月十一日以來、晝夜とろとろと燃えつゞけてゐる火。脫帽。

ヴエルツ美術館――ドユ・ヴオウテイア街。アントニイ・ヴエルツ――一八〇六・一八六五――の個人美術館。もと彼の住宅兼工房だつた建物に、大膽・異風・寫實、そしてかなりの肉感・殘忍・狂的・大作のコレクシオンが出來てゐる。いかに大作である

かは、そのうちのあるものを描くため彼は場所に困つて寺院を借りやうとしたところが、僧侶が彼を異端者あつかひして貸す貸さないで一悶着あつたといふのでも知れやう。代表作。パトロクラスを爭ふ。天國に對する地獄の叛逆。惡魔の鏡。死刑囚の幻想。地獄におけるナポレオン。秘密。薔薇、その他。隅の犬小屋と犬の繪も有名だ。つひ先ごろまで幕のむこうに隱しておいてわづかに小穴から覗かせたといふ作も、いまは全部公開してゐる。飢餓・發狂・犯罪と題する、狂女が赤んぼの足を切つて鍋へ入れてゐるところ、など・など・などがそれだ。「期待」は、裸女が寢室のとばりをあけて人を待つてゐる圖、「好奇心」では、これもやはり裸體の女が浴室らしい部屋の戸を細目にひらいてゐる。孤兒、生葬、クワシモド、燒けどした子供――等すべて世紀末的なグロテスクネスの極致だと言へる。ヴエルツはよく狂人だつたと誤りつたへられてゐるが、それほどの血みどろさ、ゆがんだ見方、變態さだ。しかし、成功か不成功か、とにかく彼は繪筆にものを言はせやうとしてゐる。ひとつの理想主義、革命的社會思想、階級意識、「戰爭と力への反撥――さういつたものを取材（テイマ）とする繪が藝術であつていゝか何うかは第二の問題として――かれの繪は最も端的にそれを摘出し、議論し、口角泡をとばして、畫室へ這入るとけんけんがくがくの聲が四方の壁に沸き立つてゐるやうな氣がする。使命をもつ繪――ひつきようヴエルツは十九世紀の漫畫（カリカチュア）だつた。が、この狂犬才もたしかに人類生活の一飛石たるを失はない。如何にそれが氣味のわるい飛石にしろ――かういふとヴエルツは、その「自畫像」に記して時人に示した著名な文句を、そのまゝ繰り返すに相違ない。「一たい繪畫において批評といふことは可能かね?」

In matter of painting, is riticism possible

白耳義博物館――化石、前世界のとかげの大群。一訪にあたひす。

大廣場（グラン・プラアス）――夜あけから八時まで朝露と大きな日傘と花のマアケツトだ。ようろつぱで最も美しい中世紀廣場（スクエア）のひとつ。大きな犬が馬のかはりに牛乳や野菜の車をひいて、でこぼこの石だたみのまはりを豐かな裝飾の建物がとりまいてゐる。その一つ「ギルド・ハウス」の二六・二七番に、一八五二年にヴイクタア・ユウゴウが住んでゐたことがある。

サンカンテネイル公園の芝生と池、宮殿のうへの並木街――ブラツセルの美は街路樹と街路樹の影にある――私たちは一日に何度となく其の下を往つたり來たりした。ぱらぱらと小雨がおちる。木かげのベンチに腰をおろす。疲れるとまた歩き出す。一ぽん路を下町へおりると南の停車場だつた。

お祭りで、片側にずうつと見世物小屋が並んでゐた。

靴をとられさうに砂のふかい歩道にそつて、力持ち、怪動物、毛だらけの女、めりい・ごう・らうんど、人體内器のつくり物、覗き眼鏡、手相判斷、拳闘仕合、尻ふりダンス「モンマルトルの一夜」、蛙男、早取寫眞、「女入るへからず」、みにあちゆあ自動車競爭、ジプシイ占ひブランシエ孃の「水晶のお告げ（クリスタル・ゲイツング）」、「生理醫學男女人形、影繪の肖像畫、ふたゝび「巴里の夜」、大蛇、一寸法師、あふりか產食人種、飛入り歡迎「モンテ・カアロ」の勝負、當て物、キユウピイ倒し、だんすする馬、電氣賭博に海底旅行——樂隊・雜踏・燈火・異臭・呼聲・溫氣（うん）。肩、肩、肩、肩。上氣した人の眼、眼、眼。何しろ今夜は町の祭りだ。

一法から三法出して、私たちもその見世物の全部を軒なみに覗いてあるく。「顏ぢうに毛の生えてゐる女」のまへで私がセ・ビアン！トレ・ビアンと大聲を發したら、見物の善男善女頰をかがやかしてトレ・ビアン！と和唱し私語きあつた。正直で單純で熱情的な雜典とフレミシユの混血族である。しんから感嘆してゐるのだ。たゞ一つ「蛙男」にはへんに吐きたくさせられた。これはほん物の不具者で、身長一尺未滿——年齡五十歲前後——のからだに分別くさい巨大な顏が載つかつて、しかも極端にほそい小さな兩手には水搔きのやうなものがついてゐる。

それが、何らの興味もなしにしづかに佛蘭西語の俗歌をうたつてゐた。これは私も彼女も當分食慾に支障をきたしたほどの眺めだつた。

アイスクリイムを買ひながらタキシを呼びとめ、そのタキシのなかでアイスクリイムを食べつゝ歸途につく。うしろからはまだ、祭りの雜音が夜風とゝもにタキシを追つてきてゐた。

星あかりだ。あしたの天氣は樂觀していゝ。

嘆きの原

尼院の森（ボア・ドユ・ラ・コム）、ソワァニの森——このソワァニはブラッセルの「ボア・ドユ・ブロウニユ」だ——とにかく、みどりの反映で自動車内が、乘つてゐる私も彼女も眞つ靑に見えるほど、何時までもいつまでも森のなかばかり走つてる。森だからやたらに大木が生えて、その古い大木がまた出鱈目に枝を張つて、枝の交錯から午後の陽が洩れて、土と朽葉のにほひがつめたく鼻をついて、湖があつたり、薪をしよつた女が小路に自動車をよけてゐたり——そのうちに森を出たと思つたら、いきなり宿場みたいな埃くさい町の眞ん中へ停めて、運轉手の赤ら顏が私たちを振りかへつた。

『あれです！　一八一五年六月十七、十八の兩日、ウエリントン將軍の參謀本部となつた家は。いまは村の郵便局ですがね。』

私たちはウオタァルウ古戰場へ行く途中だつた。いや、もうここがウオタァルウの町だといふ。見ると、いかさま「すつかり當時を心得て」ゐさうな建物が、ふるくて汚ないくせに妙に威張つて建つてゐる。ここにおいてか私は、『はゝあ、さうかね。大したもんだね。』

と一つ、亞米利加人の觀光客みたいに曖昧に感心しておいて、彼女を促し、ショファを引具してちよつとそのウエリントン大公の參謀本部を訪問する。

二階が本部兼居間兼寢室だ。「すつかり當時を心得て」ゐさうなお婆さん――この家の主婦兼ウオタァルウ郵便局長――が出て來て、

『これが將軍の使つた椅子と机。』

『はゝあ、大したもんですな。』

『これが將軍の寢台。』

『へえい！　大したもんですな。』

『これが將軍の――これが將軍の――これが將軍の――。』

彈丸だの槍だのぼろぼろの肩章だの――もちろんすべて將軍の――一まはりを見て戶外へ出る。

『これが將軍の踏んだ階段だね。』

私がかういつて木の梯子段をこつこつ蹴つたら、運轉手は眉を上げて保證した。

『もちろん、さうです。』

じぶんのものみたいだ。この運轉手はブラッセルの町で拾つたのだが、若いにしてはじつによく「當時を心得」てゐて、把輪（ホイル）を握りながら、散策中の鷄や犬や、時には村人をあやふく轢きさうになるのもかまはず、はんぶんうしろを向いて盛んに饒舌り散らす。

『えゝ、七日の十一時ごろから明け方へかけて土砂ぶり、ナポレオンの兵隊は足拵へがよくなかつた――おまけに大きな溝がありましてね、いまそこへ行きますが。』

そこへ行かうとして曲り角へ出る。オテル・ドュ・コロウヌと看板を上げた村の倶樂部みたいなさゝやかな居酒屋がある。

『一八六一年、ユウゴーはこの家に滯在して、あの「あゝ無情（レ・ミゼラブル）」のなかのウオタアルゥのところを書いたんです。やつぱり實感を得に來たんでせうなあ。』

こゝでも運轉手は自分が書いたやうな顏をする。ぞろぞろ下りて這入りこむ。

『ユウゴウのゐた部屋を見たい。』

『ビイルか葡萄酒かレモナアドか、何を飲む？』

バアのむかうに控へてる女は一こうに要領を得ない。その要領を得ないところを摑まへていろいろに詰問すると、まことユウゴウのゐたことは事實に相違ないが、もう代が變つてすつかり判らなくなつてゐるといふ。この問答を聞いて、むかうで村の坊さんがひとりでにやにや笑つてる。仕方がないから運轉手君と三人でレモナアドの大杯を傾ける。こいつに酒精分を許しては大へんだからだ。

それからまた田舍みち。モン聖ジヤンの野原。こゝがほんとの戰場だ。陽がかんかん照つて「土のピラミツド」が立つてる。下に「當時のパノラマ」の見世物がある。這入つてうつかりしてるとのこのこ案内者がついてきて勝手にまくし立てる。

『この時ナポレオンは兵七萬一千九百四十七を擁し、あれなる高い百姓家ブランシノアに陣取りまして午前九時、あひ變らずかう左手をうしろに廻して白馬に股がり――それに對し聯合軍は、こちらのブラン・ラルウの街道を押さへ――。』

見たやうなことを言つてる。

『はゝあ、何うも大したもんだな。』

『大變でしたらうねえ、ほんとに。』

程よく感心してピラミツドへ登ると、頂上に獅子像が頑張つてゐて、いま見たパノラマの現場は指呼のうちだ。

天地悠久と雲が流れて、白耳義の野づらはうらうらと燃えてゐる。こゝにも「すつかり當時を心得」たのが網を張つてゐて、

『あれ！　あすこに見えまする一本の木――奧さん、見えますか？――あれがナポレオン軍苦戰のあと。それから、むかうにぽつちり窓の光つてをります一軒家は――。』

『はゝあ、どうも大したもんだな。』

『大へんでしたらうね、ほんとに。』

下りてみると、日向の自動車のなかで運轉手がぐつすり居眠してゐた。たうとうこつそり呑つたとみえて、車內にぷうんと香ひが漂つてゐる。これで鷄も犬も人も轢かずに、ソワアニユの森では大木をよけて無事にブラツセルまで歸れるかしら？　なあに、いくら醉つても、じぶんの車だけは大事にするだらう。

ウオタアルウ古戰場で、私は計らずも一句うかんだ。ものになつてるか何うか、お笑ひにまで――。

夏草やつはものどもの夢のあと

オリムピツク1928

日光・群集・筋肉・國旗。
開會式。曇天。寒風。
近代的古代希臘之圖。
放鳩。奏樂。
各國選手入場――ＡＢＣ順。
亞弗利加。みどりの上着に白のずぼん。
獨逸（アルマニユ）。上、濃紺。下、白。
ブルガリアは騎兵だ。
加奈陀。上、白。下、赤。
智利は白。
埃及。赤い帽子。青いコウト。灰色のぱんつ。
亞米利加。上、青。下、白。
旗手ワイズミユラア。
ハイチ。黑人、一人。
伊太利。こうと灰色。うすい青のずぼん。
日本。上、青。下、白。役員はフロツクコウトに赤靴だ。
旗手高石。
墨西哥。白に赤襟。
モナコ。白衣にあかい帽子。九人。
パナマ。ひとり。

參加國全四十五。
宣誓。演說。
演說。演說。演說。
　日光・群集・筋肉・國旗。
百米。二百メートル。
四百米。タイム五六秒五分の一、五分の三。
ピストルとストツプ・ウオツチ。
續出する新記錄。
世界レコウド。
また世界レコウド。
國家として切るテイプの淸新さ。
オフイシエル・プログラマ！の叫び聲。
高飛び。槍投げ。
豫選。準決勝、そして決勝。
メインマストの國旗。全スタンド起立。
脫帽。國歌だ。
ナガタニ――イ！
オダア！
氷谷は２５４。
織田は２５７。

沖田。258。
南部。255。
人見。265。
あれは誰だ？
667――加奈陀のウイリアムス。
553はあめりかのパドツク。
日光・群集・筋肉・國旗。
五色の輪の踊るオリムピツクの旗。
あ！　おそこへ行く――。
いま誰かと立ち話してゐる超人ヌルミ。
おなじく人間機關車のリトラ。
ハアドル、それから走り巾とび。
ホツプ・ステツプ＆ジヤンプ。
257――わあつ！　日本の織田だ！
結果、一五二一。
セレモニ・オリムピイク！
オダ・ヤポンの聲。
日章旗！　涙！
君が代が和蘭の空へ。
あゝ、スポウツに稀りて白熱する帝國主義！

帝國主義禮讃。
勝つことの禮讃。
少年のやうな愛國心！
日光・群集・筋肉・國旗。

おらんだ國巡遊手引き

自序として、和蘭に關する必要な智識を、まづ二三左に列擧しやう。

ハランド――どうも獨立國らしく思はれる。地理についでは、地理の本の和蘭の條參照のこと。こゝでは只その地形を略說せんに、概して土地、海面より低く――他の多くの國は幾らか海よりも高きを原則とす――、一望さへぎるものなき平原にして、たまたま丘、もしくは山と見ゆるものあるは、怠惰なる牛の座して動かざるなり。また時に遙かに連山の巍峨たるに接することあれど、すべて雲の峰なれば須臾にして散逸するをつねとす。

氣候。驟雨多し。青天に葉書を出しに行くにも洋傘を忘るべからず。

歷史。歷史の本に詳し。

名所。國をあげて遊覽客のためにのみ存在す。

國民性。偉大なる饒舌家。老若男女を問はずよく外國語――日本語以外――をあやつり、即時職業的ガイドに變ず。自己ならびに過去を語るを好み、向上心に乏しく、安逸と獨逸風のビールと乾酪をむさぼる。人を見ると名刺をつき出し、署名を求むる癖あり。皮膚赤く、髪白く――小兒も――頰飽くまでふくれ、溫順なる家畜の相を呈し、世辭に長ず。

名物。風車、木靴、にせダイヤ、おらんだ人形、銀細工、ゆだや人。運河。

アムステルダム――ことしはオリムピツクといふ柄にもない重荷をしよつて町ぢう汗たらたらだつた。おかげで私たちも暑い思ひをする。

宮殿――百貨店と間違へて靴下を買ひに這入つたりしないやう注意を要す――猶太區域(ゲツトウ)、レンブラントの家、コスタアのだいやもんど工場、國立美術館――レンブラントの Night Watch、エル・グレコ、ゴヤ、ルノアウル、ドラクロア、ミレイ、マネエ、モネエ、ドガ、ゴツホ、ゴウガン、ETC。

一度停車場までの橋下からベルグマンの水(ウオタ)タキシで市内の運河めぐりに出ること。

フオレンダムとマルケンの島――遊覽船で一日。風と浪とに送られて――それだけ。

ヘイグ――モウリツホイス美術館のレムブラント筆解剖(アナトミカル・)の閾(レツスン)、イエフアンエンプウルトの牢獄、これはいま博物館になつて昔からの拷問刑罰の器具を細大洩れなく蒐めてある。ヘイグでのA・NO1。

ちよつと電車でシユヘヴエニンゲンの海水浴場へ行くといい。人ごみのカシノで食事し、一ギルダ出して人混みの棧橋を歩いてしまふと、まづおらんだはこれでENDだ。

で、END。

和蘭で感心するもの、雲の變化。

かんしん出來ないもの、人心と綠茶(グリン・テイ)――とにかく私たちはホテルでこの茶を飲まされ、ふたりとも廿四時間立てつゞけに眠つて折角のゲイムを一日ミスしてしまつた。察するところ蘭醫の藥草だつたに相違ない。眼がさめたからいゝやうなものゝよつぽど訴訟を起さうかと――覺めてから――思つた。こゝに特におらんだの綠茶に對し、同胞旅客に向つて一大警告を發するゆえんである。

飛ばない鷲の巣

せまい田舎みちの兩側に木造の低い家がならんで、道には馬糞の纖維が眞晝のファンタジイを踊り、二階の張出しでは若い女が揺り椅子に腰かけて編物をしてゐた。そして――いまどき若い女が神妙に揺り椅子に腰かけて編物をするくらゐだから、その周圍の風景も押して知れやう。すなはち、化けさうな自轉車があちこち入口の前に寢そべり、それを揶揄してひまはりが即興歌をうたひ、何かくわへた大猫がゆつくりと街道を横ぎり、そのあとからもう一匹の大猫がゆつくりとつゞき、塵埃の白い窓枠に干してある二足の木靴が戀をさゝやき、村の肉屋は豚肉のうへに居眠り、それへ村の醫者が挨拶して通り、どこからか厩のにほひとハモニカの音律が絡みあつて流れ、横丁にはすぐ麥畑がひらけ、退屈し切つた麥に光る風がわたり、さうしてそれらのすべてのうへに夏の陽がぢいぢいと照りつけたり、楡のてつぺんにしつこい蟬の聲があつたり、小犬がじぶんの尾と遊んでゐたり、それを發見した二階の女が編物を中止して笑つたり、その笑ひに一家眷族みな出てきて盛大に笑ひこけたり、そこへ、話しに聞いたばかりで未だ實物を見たことのない日本人が、しかも夫婦で來てゐるとあつて、唯一の旅人御宿ホテル・パブストのまへに村ぜんたいが押しあひへしあひ、氣味わるさうに凝視し批評しにやにやし、おい、おれにもすこし見せろ、だの、やあ、何か饒舌つてらあ、眞黒な髮の毛だなあ、ことのと、いや、そのうるさいつたら――さて、ひとりでいゝ氣に進めてきたが、こゝらでちよつとテンポをゆるめて場處の觀念を明白にしておく必要があると思ふ。さうしないと、どこで何を騷いでるんだか一向わからないから――そこで、なにを隱さうこの僻村こそは、和蘭ユウトラクト在なになに郡大字何とかドユウルンの部落である。

では、一たいどうして私たちが、この何なに郡大字なんとかのドユウルン村へこつぜんと姿を現はしたかといふと、なにもわざわざ小犬がしつぽに――小犬じしんの――戯れるのを見に來たわけではない。これには一條の立派な理由があるのだ。

知つてる人は知つてるだらう。前獨逸皇帝ウイルヘルム二世は、いまこのドユウルンの寒村で配所の Moon を見てゐるのだ。

順序としてそもそもからはじめる。

私たちはアムステルダム市にひとりの知友をもつ。ヴアン・ボウル氏と言つて船具會社の重役だが、ある日私たちが通行人のなかゝら物色して卒爾ながらと途を訊いたのがこの親切なヴアン・ボウル氏で、翌日氏は、どこか會社の近處の食料品店で見つけたが、これは日本人の飲料であらう、よろしく召上れと

名刺をつけて、給仕を私たちのホテルへつかはし、日本醤油(ヤポン・ソウヤ)――ヨコハマ太田製FUJI印し――の一瓶を贈つてくれた――何をいふにも旅中の身、はなはだ心苦しい次第だが、これはまだ貰ひつぱなしになつてゐる――りなんかして、その「ソウヤ」はばかに鹽辛く――といふわけ。そこで話しを醤油からカイゼルへ戻すと、これが縁で短期の交際を開始した私たちとヴアン・ボウル氏が、一夕ファイエンダムの大通りを散歩しながら、

私『この田舍のドユウルンに――。』

氏『えゝ。カイゼルがゐますよ。ドユウルンは私の故郷で、このあひだもちよつと歸つてきました。』

私『これあ有難い！あなたの御盡力で彼に會へないでせうか。』

氏『彼つて、カイゼルにですか。會つて何うするんです？』

私『どうつて只あひたいんです。ぜひ一つ何とかして下さい。』

氏『さあ、困りましたな。私もべつに識つてゐるわけではなし、公式に面會を申込んだつて、勿論そりやあ全然駄目にきまつてますし――。』

と、暫時沈思默考してゐた氏が、あゝ！お待ちなさい、いゝことがある！と傍らの珈琲店の食卓ですらすらと認めてくれた一通の紹介狀、これを持つていらつしやいといふ。見ると、紹介狀はドユウルンなるホテル・パプストのおやぢへ宛てたものだ。私がつひ、こんなものでいゝんですかといふ顏をしたら、かの親切なるヴアン・ボウルは、まあ試しに行つて御らんなさいと葉卷のけむりのなかで笑つたのである。Well、その翌朝、皆はいそげとあつて直ぐさま汽車に揺られ、荷物のごとく乘合自動車に運ばれてかうして野越え山こえ――おらんだのことだから山はないが――ドユウルン村へと辿り着いた私と彼女だ。

猫・木靴・ひまわり・麥の農村の平和と、ホテルの主人の晝寢とを一しよに妨げてしまふ。いやに太陽の近い感じのする暑さだ。

やゝあつて出てきたあるじパプスト氏は、村びとの環視のなかで急がずあわてず先づ紹介狀の封を切り、それから眼鏡を出していろいろに据りを直し、長いことかゝつて一讀再讀し、つぎに俄か作りの威嚴をもつて私たちの相貌風體を細密に檢査して、のちおもむろに口を切つた。

『お前さん方、ほんとの日本人かね？』

私があわてゝ、其のほんとの眞正眞銘の日本人なることを力說し主張すると、かれパプスト老は急に述懷的口調になつて、

『しばらく日本人を見ませんでしたよ。さうさ、かれこれもう六七年になるかなあ、夏でした。いや、秋？左様、やはり夏だつたね、年寄りの日本人の行商人がひとり繪を賣りにきたね。

日本の繪さ。うちへ泊つてこのさきの――。』

何うも綿々として盡きない。仕方がないから默つて笑つてゐると、老人もひとりでに事務へ返つて、最後にもう一度手紙を讀みなほしてから、特權をもつ人の非常な重要さでつぎのやうに言つた。

第一に、私たちはいま一に運命の動きにかかる冒險（アドヴェンチュア）に面してゐる事實を、はつきりと自覺しなければならないこと。なぜなら、Old Bill――おやぢはカイゼルのことをさう呼んでゐた。オウルド・ビル、つまり年老ひた前獨帝ウイリアムだ――――にうまく會へるか何うかは、たゞ運命が私達のうへに微笑むか否かによつてのみ決するのだから。といふのは、老ビル（オウルド）はよくふらふら風に吹かれてドユウルンの村をあるいてゐる事がある。そして、おもてへ出だすと、このホテルへなぞ毎日のやうにやつて來て、そこの椅子に――とパプスト氏は應接間（パアラア）にある奇妙な三角形の椅子をゆびさして――半日でも腰をおろして世間ばなしをして行く。が、それは多く冬のことで、夏はあんまり外出しないやうだ。それでも絶對に出てこないとは限らない。現に十日ほど前もぶらりと這入つて來て、子供――パプスト氏には七八つの女の兒がある――の頭を撫でたり、アムステルダムの新聞を讀んだりして歸つて行つたから、ことによるとまた今日あたりへうぜんと入來しないともいへない。もとより必ずくるとは斷言できない。しかし、かうしてゐるうちにも、そこらへぬうつと出現するかも知れないし、さうかといつて、運がわるければ、何日待つても一歩も邸のそとへ出ないこともあらう。だから、どうせ來たものだから、今夜はゆつくり一泊して機會の到來を祈るがいい――とかういふのだ。そして、老人はつけ足した。

『オウルド・ビリイはこの客間がばかに氣に入りましてね、お屋敷のなかへこれとおんなじ部屋を一室つくらせましたよ。』

さういつて彼は、その自慢の應接室へ私たちを招じ入れた。それはさして廣くもない黑い板張りの一間で、カアテンから机かけ敷物にいたるまですべて和蘭領ジャヴアの物產をもつて裝飾してある、ちよつと東洋的な、感じのいい部屋だつた。極彩色の古風な大時計がことに私たちの眼を惹いた――それはいいとしてカイゼルだが、かう聞いてみると悲觀せざるを得ないやうでもあるし、一面また、何しろ相手が生きてる人間のことだから、いまにもやつて來ないとは保證出來ないので、大いに勇躍していゝやうにも思はれる。どつちにしろ絶對にこつちから襲つて行くみちのない以上、全く老人のいふとほり運命を信じ且つ祈りつゝ暫らく待つてみるよりほか何らの方法もないと

いふことになる。で、この「神さまに忘れられた」ドユウルンに、あはれ一夜をあかすことに決心してゐると、パプスト老は二人のボウイをはじめ女中下男の一同をあつめて、誰でも何處かでカイゼル、もしくはカイゼルに似た人——背ろ姿でもいゝ——を見かけたものは、宙を飛んで急を私たちに告げよと申し渡してゐる。珍しい日本人が舞ひこんできたので老人何でもする氣でゐるのだ。召使ひ一統も命をかしこんで「YA・YA!」と口ぐちに答へてゐる。私も知らん顔もしてゐられないから、老人へは葉卷を二本、他の連中へもそこばくの黄白を撒いて「どうぞ宜しく」とやつた。

が、何時とも知れないその報告を當てに、ホテルの二階にのんべんだらりとしてゐるわけにも往かないから、またパプスト氏をつかまへてカイゼルの現在の人相をくわしく訊き質すと、彼——といふのは老人のいはゆるオウルド・ビリイ——は、この頃好んで、昔よく流行つた灰色の兩前の服を着て、からだは痩せて高く、ふるい麥藁帽子の下から白髪を覗かせ、それに赤黒い顔と白い顋ひげ、すこし左の肩を上げ氣味に、ステツキでそこらの草や石をやたらに叩きながら忙がしくて耐らないといつたやうにせつかちに歩く——といふ。これも何うも平凡で、こんなお爺さんはざらにゐるさうだが、カイゼルなら村の人がみんな挨拶するからすぐ判るといふので、そこでドン・キホウテとセルヴアンテスのやうに、ふたりはいよいよ自らカイゼルをさがして午後のドユウルンの村落へ立ちいでた。

さうするとやはり往還すぢに馬糞がダンスし、そのなかを猫が悠歩し、猫に日向葵が話しかけ、木と家と乾草の塚と私たちの影がいたづらにくつきりと地を這つて、白日に物音ひとつなく、かうしてあるいてゐても何時かうとうとと眠りさうになる。それでも私は、カイゼルに出會ひ次第取るべき態度、いふべき文句の數々を心中ひそかにとゝのへてゐた。何でもいゝから見つけるや否、敬意と質問を引つさげて獵犬のごとくどこまでも肉迫することだ。さう私は決心してゐた。

せまい村うちだから、すぐにカイゼル幽閉の家のまへゝ出た。ちよつと土地の豪農といつた構へで、アウチ風の門に番人が立つてゐる。私がきく。

『EX・カイゼルはいまゐますか。何してゐます?』彼は笑つて答へない。しばらくしてこんなことを言つた。

『薔薇園(ロザリアム)を見せてあげませう——カイゼルのばら山を。』

そして切符のやうなものを二枚渡して呉れたので、念のため、

『幾らですか。』

『おぼしめしで結構です。』

思ふにカイゼルへのお賽錢であらう、そばに一文字に小穴のあいた木箱と訪問者名簿が置いてある。そこで私は金一ギルダ地を其の穴へ落してみ、日本語で日本東京と下へ名前を書いた。

むかうに本館が見えて、あけはなした窓に白いレイスが動いてゐる。傷ついたゲルマンの鷲の鳥籠だ。立つて眺めてゐると、うしろに人のけはひがした。獨逸の兒島高德に相違ない。老夫婦が一組、私たちがゐるのも眼にはいらないふうで、感慨無量といつた顏で佇んでゐた。

それからロザリアムへまはる。邸宅と小道をへだてた一劃で、もとの皇帝ウイリアム二世は、こゝで餘念もなく薔薇をつくつてゐるのだ。ちようど季節もよかつた。前陛下の御丹精になる色とりどりの花が咲き亂れ、そここゝに二三の園丁が鋏の音を立て、上には、夏の空に團々たる雲のかたまりが靜止してゐた。こゝにも兒島高德らしい獨逸人がかなり逍遙してゐる。その兒島君のひとりに賴んで、薔薇を背景に私たちをスナツプしてもらふ。

邸は高い木に取りまかれ、鐵柵がめぐらしてある。その直ぐそとに小徑がついてゐて、落葉を踏みしだいた靴のあとが、ていんめんとして去るに忍びない獨逸製兒島高德の胸中と、私たちのやうな無責任な旅行者のものずきとを語つてゐる。

刑事のやうに私たちも長いこと家の周圍に張り込んだ。樹がくれの池にさゞ波が立つて、二階に見える眞鍮のベツドの端が夕陽にきらめくまで——。

氣早に歩く灰いろの背廣、草を打つステツキ——それは私の幻想だつた。

ドユウルンに夜がきて、夜が明けた。

運命はついに私達のうへにほゝゑまなかつたが、私は何はなかつたことを感謝してゐる。前帝王が路傍に私といふ無禮者の奇襲を受けていらいらする場面——老ひたるウヰルヘルムはいま心しづかに薔薇をつくつてゐる。君！ これでもう澤山ぢやありませんか。

あくる日はまた白日に物音ひとつない青天だつた。

ユウトラクト街道に馬糞の粉末が卷き上り、そのなかをのそりと猫が横ぎり、もう一匹よこぎり、二階ではきのふの女が編物をつゞけ、それへ日向葵が秋波を送り、退屈し切つた麥の穗が——ユウトラクトの停車場で、ハンブルグ行きの汽車を待つあひだ、私たちはかの親切なるアムステルダムの紳士、ヴアン・ボウル氏へ一葉を飛ばした。

カイゼルに會ひ、いろいろと談じ、食事をともにしました。特にあなたへ宜しくとのことでした。

關西食道樂案內

關西美食錄

永見德太郎

長崎といふ土地は、料理の發達したところである。西洋や支那の文明が滔々と這入り來た門戸だけあつて、卓袱料理や、支那料理、洋食の旨さ、材料の新鮮さは、他地所に比べて劣るものでない、その故鄕を離れて、東京に住むやうになつた私は、江戸前と威張つた東京料理で、これは結構だと、味覺を眞に樂しましてくれるものにまだ出逢はない。天ぷら、うなぎ、壽司の他には。

一年に一度位、關西に行く事があるので、京・坂の旅の日こそは、食道樂を充分に貪り、まるで餓鬼が食物にありつくやうな氣がするほど、あちらのは結構である。

料理を味ふには、第一氣分の平安な時で、安閑とした落附を持つて靜かに箸を握り、厨人の苦心を思ひ乍ら食ふことであらうが、殊に京・阪地方では、多くの場合家が古風、食器が粹なもの、料理が自然の風味を毀さぬやうに、あつさりとした加工が施されてゐるのは、嬉しい條件に相違あるまい。

多くの武士が、江戸に住んで居た時代には、大阪は、町人の都で、贅六と呼ばれた富豪が、割據してゐた黄金世界であつた。

日本永代藏に

扶桑第一の大商人の心も大腹中にして、それ程の世をわたるなる、難波橋より西見渡しの百景、數千軒の問丸、甍をならべ、白大雪の曙をうばふ、杉ばへの俵物山もさながら……商人あまた有るか中の島に岡、肥前木屋深江屋肥後屋鹽屋大塚屋桑名屋鴻池屋紙屋備前屋宇和島屋塚口屋淀屋など、此所久しき分限にして……。

ブルジョア階級は、昔から今に至る迄、その好むものに衣裳、食物その他の趣好に、歡樂の耽溺をつくす事は、何時の世にも離れ得可きではあるまい。絢爛たる成金風が洗練されたる枯淡な妙に變轉して、其處には、物持長者として高尙な好みの進歩が窺がはれやう。舊家が殘り、その氣風が去らぬ難波の地には、昭和の現代にもずばぬけた美食味が珍重せられるのも傳統的と見れば、何等の不思議はない。たしかに、商・工業地。手つ取早く言へば、金の都の大阪を、中心とする爲めに

は、關西各地の食物に奢侈のあとが夢にだになく、ます／＼發達の色を現はすのではあるまいか？

大阪を振り出しに、美食行脚の杖をひいて見やう。

牛肉と言へば、すぐ神戸牛を思ひ出す位有名である――廣島の大山から來るのだ――！が、それは以前のことで、今では、大阪の方に旨い家が澤山ある。電車に乘ると、車内の廣告にふるつたのが眼につく。

有藝仲居は藝者にあらず　うちへ知れてもおこられぬ。

これが牛肉店大市で、最近メキ／＼と繁昌し初めて來た。有藝仲居さんなる美人が居て、腕に綠かけ、三味線を彈き、客を遊ばさせるといふ風で、なか／＼濃艶な藝者あがりがゐて、粹客を待ちうけて居る。

松島のいろはは、牛肉店として一番名を賣つた店で、もとは五六の支店等も持つてゐたのであつた。此いろはと、關係の深い人が、本三宅（宗右衞門町）を開店した。此處は、有藝仲居さんは居ないが、お行儀のよい綺麗なのが控へる、牛肉は、大市より旨い。ヘットを注文すると、四角形の部厚に切つて出すのは極上で、それを大根おろしにつけてやると、とてもいゝ。或食通は、ロンドンに行つても、こんな美味なビフテーキは得がたいと稱讃してゐる位である。

あみ清本店（本野橋東詰）では、肉の厚いのが自慢。森田（浪華淨瑠）は昔鳴らした店――共に、東京では食へない代物に違ない。

三島亭支店（難波新地）は、本店が京都で、有名な一軒であるが、支店の方は、牛肉の味より粹人の間に持囃されてゐる。二人連で行つて、何時間も落附て遊べるとの噂である。

肉の味噌漬は、神戸の三ッ輪と聞いてゐるが、私は一向感心しなかつた。

すつぽんは、伊勢屋となだまん（料理屋の方）が上等で、こまやも一寸食へるとの事だが、京都のだいいちには、遙に及ばない。伊勢屋では、一寸やつても一人前拾四五圓もかかるだらう。一體に關西では、牛肉やすつぽんの添物が、ゴタ／＼盛られるのは氣になる。やはり東京のやうに、肉の時には、葱だけそへる、と言ふ風にして貰ひたい。本三宅でも、こまやでも、蕪・みつば・甑その他等々々と、野菜市場の見本のやうにチョツポリづつ、並べるのはよくない、すつぽんや牛肉は、なる可く副食物の味と混同しないで喰べるのがよいと思ふから。

ふぐは、小料理屋等で、注文すると出してくれるが、菜の花が美しく咲く頃のは、菜種ふぐと言つて、一番危險率が多いから、君子危きに近よらずである。ふぐのことを、大阪では、テッと呼ぶ。無鐵砲のテッと、鐵砲もたまにアタルから――。或家では、サカナという暗語を用ひて、ふぐと言ふ客には、出さないことに決めてゐる。ふぐでは、肝や鰭酒は旨い。

初春には、白魚がよい。人間の食慾は、知らず識らずの中に、洗練されると共に、殘酷性を忘れて、平氣で食へるやうになる。白魚のおどり喰ひがそれである。支那に行くと、生乍らの小蟹を燒酎の壺に追ひこんで、醉ひ殺しにしたのを、醉蟹と名附けて珍味とする。白魚のこれが、それと同じで、風流と言つてよいか、野蠻と言つてよいか判斷に苦しむが、旨いといふより粹なもの乙なものであるかもしれぬ。滾ぎつた鍋に生のよい白魚を入れると、熱度にたまりかねて、豆腐の中へもぐりこんでしまふ。これを白魚のおどり喰ひと稱して、紫藤（淸頓堀）、かき卉（渡邊橋

北詰)の川魚料理屋で食べさせるが、うなぎ屋のひし富(宗右衛門町)でもやつてゐる。ただ珍らしいと言ふだけで、大して旨いものではない。こんな風にして、白魚を風味するよりも、生たままのをコップに入れ、それに酢をかけてやる方が、もつと白魚の味があつて好い、これは私獨特の考案になるものである。

生たままで喰ふのに、もう一つある。それは、車海老の小さいのを喰べる海老のおどりすしである。醤油を刷毛に含ませて、握りすしの海老につけると、海老の肉がピリ〳〵と縮む、半分食べて見ると、殘りのがまだ動く。小町すし(道頓堀)、すし捨(道頓堀、一名捨やん。)梅園(松坂屋前、びしやもん門前)その他數軒で出來る。

關西料理が、東京に侵入して來るやうに、關東流のものが、又大阪、京都、神戸へも入りこんで居るのが目立のは、すしの勢力であらう。切角の大阪ずしを、押へやうとしてゐる模樣である。かはりもののすしを掲げておかう。鮑の池(地名。天滿天神境内)のおけずしは、おけに入れた小さいすしで、稻荷ずしは、素的だ。二鶴(法善寺が本家、あとは支店)の夫婦すしも逃してはなるまい、これは主人夫婦でやつてゐたから、その名がある、所謂健國美談共稼とでも言はうか? 魚すき〇萬前の掛ずしは、長方形な大きさで雅ずし、これも結構。よし野(心齋橋淡路町)の箱ずし、ひさごのすずめずし、魚利(馬喰町四丁目)の彌次喜太ずしは、奇拔である、傘の中に、にぎり飯、その中に肴のつぶしたのや、小さい梅干を入れたり、外にごま鹽のを出したりする．御飯にすしの味をつけたのが秘傳であらう。昆布卷で、鯛、鯖を露くすしあひ(宗右衛門町、大和屋前)は、上味の上、長くもてるので調法。東京流のすしでは、すしとら(戎橋中筋角)と富貴すしとがよろしい。

私が何時でも、缺かしたことのないのは、魚すきの〇萬(戎橋南詰)である。此處が氣に入つた譯は、第一手つ取早く持つて來る、第二に、非常に安い事で、遠慮なく大食しても、財布が空になる心配がない。男衆が、大きな火を持つてまわつたり、おかわりの皿を、女中さんが手にしたりする混雜の室で、汗をふき〳〵、鯛を食ふのも大阪らしい氣分が、何處かにあつて面白い。

魚屋が、お得意をまわる時、「これは〇萬鯛だつせ。」と言つてる時がある。安い鯛を指す——それ程〇萬の名は高い。

道頓堀のあの人込や、芝居櫓、幟で賑ふ中央の角に、角屋が陣取つて、魚すきで客を呼ぶ。此處の三階にのぼつて往來を見下すと、芝居に行く連中や、カフエーを戀ふるモガ等が、現代の繪卷物から拔け出たやうである。魚すきの高級なのは、宗右衛門町の萬華であらう。南地情調の美妓を擁し、仲居に護られた大盡が、門をくぐるにもつて來いの樣に見受ける。

大阪の鯛は、明石鯛が多い。天保山沖で、鯛の頭を鈎でプチこむと、人々の口になる迄の間に、血のまわりがよくなるとの事である。鯛の一番旨いのは、伊豫のであるが、味が濃厚であるから毎日は倦る。これは潮燒にするがよい。鯛茶は、魚すきよりグツト上等になる。飯の上に、鯛をおいて熱い茶をサットかけ、さらつとかきこむ味は愉快至極。これは水茶屋(三津寺町)のお評判、一流の料理屋で注文しても作つてくれる。私の友人某が、あつさりと鯛茶に仕樣と、二人連で、或料亭でパクついてから勘定となると、金八十圓也

の勘定書を出されたので、眼をパチクリしたりと漂いてくる。等の逸話がある。鯛のさしみは、つる源（法善寺）のが極上等で、不思議な甘味がねつと

少し流出になるが、鮎の茶屋（毛馬の閘門）の小鮎は上々もの。うなぎは、如何しても東京のが秀れてゐる。大阪式のでは、瓢亭（北濱なにわ橋）くみの吉（大江橋）、東與。東京燒ではひし富（宗右衛門町）を指折らう。安くて民衆的なのは、出雲屋（道頓堀が本店その他支店）。はり半や、柴藤でも、註文すれば應ずる。

おでんは、東京の方が正しく、こちらは邪道と思つて、馬鹿にして居たが、反對な結果であつた。たこ梅（道頓堀）は何時行つても、あの黑い暖簾の中は、お客で一ぱい、身動も出來ぬ始末。蛸のあしに、辛（カラシ）をタップリつけて呉れる。そのからさが鼻から頭へと、ピンとくるのは、なあんとも言ひ様がない。固い蛸を、やはらかに煮てるのには感心した。

おでんの天ぷらも食へる。たこ梅は株式會社の組織だそうだ。これでは配當も多からうと、食慾と共に物質慾も、餘計なお世話になつて起てくる。たこ安（天神橋北詰）もよい。鮨を小さくさして、それを一寸おでんの鍋に入れたのを大根おろしでパクつくのも、味覺を樂しませるに充分、たこ、おでん、燒鳥、旨い〳〵。梅田驛前の何といふ露路であるか、チョイと這入ると此處にもたこ安が有つて、飯蛸が上等であつた。小便たんご（法善寺）のも惡くはない。

鯨をやはらかく、おいしく喰はせるところがあるから有難い、最も多に限るが。玉水（新町通）では京菜（いな）と、鯨肉を、大鍋でたぎらした中に、一寸入れたのを食べさせる。こんな旨い料理は又とないやうに思ふて鱈腹やると、馬鹿に勘定高いものになる。

天ぷらは、「東京のに負けへん。」と大阪人は自慢する。けれど、これは多く金ぷらである。その好みが異なるだけ、東京人と大阪人の區別があるのも、面黑いとでも言つて置かうか。

天とら（もとの文樂座裏）の親爺は、變骨で賣り出してゐる。今新（大川町）は金ぷら式で意張つて居る。大阪では東京式にすると客が來ないそうだ。天ぷら金ぷらの旨い拙いは、結局タネの問題ではあるまいか？　つる源（法善寺）のが、後まで。舌へ言ひ知れぬ甜のからみついて一等よいと思ふ。

小料理屋の多いには、驚かされた。特に道頓堀界隈を歩くと、その數の少なからぬので、なる程と、その發達を食はぬ前から考へて感心する。

築大地獄に、小つぼけな小料理屋があつたのに、二年あまり前。私達は其處で、大いにパクついた程、その味に凝つたものがあつたが、今は家が大きくなつて駄目になつたそうだ。料理屋が大きな構になると、何處も不思議に流行らぬやうになるのは妙だと、きくやのことを友人が私語た。なり（戎叢席前）に腰かけ、くじ酒をグット飲んでから、鯛、小鮎と茄子のてりやき、潮茶を順々に平らげてみる。一寸喰へる。福丸（御靈そば）、さわだ（雁喉場）、みどり（法善寺）一力（道頓堀裏）等もそれ〳〵の特長がある。夜明、入舟は朝歸り客を待つ家であるが、朝寢坊の私には用がなかつた。

とろゝ（堀江、あみだ池）の麥飯にとろろかけたのは有名であるが、有名な程ピリツト來なかつた。主人の道樂であらう、鶯のよく啼のを揃へてあるのは。せまい家の中には、風雅な趣が溢れて氣持がよい。酒でも大きいの

で出す。

しるや（心齋橋うなぎ谷）も有名な一軒に相違ない。白味噌の汁で、鰻、章魚、赤貝、鯨、鷄肉、貝等の好きなものを入れて稱美する、だが、あんまりおいしいと思はなかつた。雜煮も出來るそうだ。

鷄のすきやきは、はり半（宗右衛門町）と大豐（西横堀、すみや町）が代表のうちであらう。はり半では鶉のすきも出す。大豐の方では、水たきもやつてゐる。鷄料理としては、東京の方が一段の進歩があるが、すきやきは、大阪の方がよろしい。水だきは、長崎が本場であるが、福岡の新三浦屋のが一番よい、あそこの汁ときてはたまらないものである。圓まど、末廣も、鷄すきをやつてるが、あまり知られてゐないやうだ。

そばは、東京のものだけあつて、大阪のは問題にならぬ。さらしな（心齋橋）のは一寸食へる。鐵道大臣の小川平吉と同名異人が、築港附近で、宿屋をやつてゐるが、此處で東京そばを、以前喰はしたと聞いて居るが、わざ〱尋ねる元氣も出なかつた。

堂ビルに宿泊してゐたので、地下室の鶴屋に寄つて粥飯をやつたが、不味かつた。又ホテルの食堂ときてはお話にならなかつた。洋食と言へば、大阪は駄目らしい。それと同様に、支那料理も喰榮がなさそうだ。

風月（北濱）野田屋（天満橋）の洋食、天仙閣（川口）上海樓（川口）の支那料理は、上等だと聞いたが、如何だかと思つて喰べに行かなかつた。

料理は別として、室の立派なところでは、寫眞界に貢獻した光村利操の舊宅であつた菊水と、現長（松島）が異彩を放つてゐる。現長は、芝居の大道具と言ふ具合で、鷄すきで名高いが、便所に珊瑚樹があるといふ評判だ。何しろ簡易大盡氣分を味はうと思ふ輩は、押しかけて行く可しだ。

舟の中で喰はせるので、土佐料理を呼ものにするのがある。かき吉（港町驛近くの橋際）がそれで、自慢の鰹かよい。タタキは、濃厚な味を持つてゐる。厚切にした皮つきなのを一寸燒いて、にんにくや靑じそをつけて出す、とても頬べたが落そうだ。鰹の茶つけも上等。わざ〱土佐で捕つたのを使ふのだが、舟の都合で、時とするとヨコワを出す、ヨコワは、一寸鰹に似てゐるが、格段の相違が味の上で爭はれぬ。大阪人はヨコワと鰹を知らずに喰つてるのかも知れない。鯖の姿すしも此處のはよい。私はニンニクのあの辛さが好きで、澤山喰べ過たおかげで、四五日間は、その臭さがぬけずに弱つた。これは、臭氣を消す方法がいろ〱あるらしい、生芋を切つて喰べるか、白酒を飲めば効能覿面だとは、あとで敎へられたことだ。

大阪では、まだ〱旨い物屋が多いかと思ふ。宿屋の飯にしても、萬更でない。ことに酒ときたら、酒の本場を控へてゐるだけ、何處でのんでも結構――本來酒は飲ます家にて、味の異なるものだが――。二日醉や、頭が痛むことが無いから、斗酒あへて辭せざる私には、尙更有難い仕合せだ。

醉心・松竹梅・山海里（サンカイリ）の如き、高いのは何處で釀造するのか知らぬが、一流の家で、飲ませてくれる。灘の本釀、辰馬の白鷹、西宮酒造會社の日本盛なんども、好ましいものである。日本盛は、あまくて少し重いが、チビリ〱やるにはもつて來いのものであらう。同じ酒でも、西ノ宮附近のものは、上物を賣つて居る。廊町橫のおでん屋京樂で、あげ袋なんかを頰張りながら、盃を傾ける氣分も又特別であつた。西ノ宮は、流石酒造家の多い土

地だけあつて、女の兒が十何才にて、味を知り分て居るとさへ言はれて居るではないか。

岡本の谷崎潤一郎氏宅で、二度御馳走になつた茶粥と、信州の干そばの美味は、油つこいもの好きの私を、歔欷させた位旨かつた。今でも、咽喉のあたりに、その枯淡の味が浸こんで居るやうだ。茶粥は、近畿地方の名物に相違ない、上等米に、茶の香りがぬけぬやうに、竹の強火で煮る。薄桃の色がついた位のを喰べた。干そばは、信州より取よせたのを、すぐ口にしてはゐけない、二ケ月位たつたのを食ふ、とろろをタツプリかけ、淺草のりをつけて――だしの加減と、そのそばが、するくと舌の上を滑べるのは、あつさりし過る位に、淡淡たるところが欣ばしい。眞實に谷崎氏の心づかひを謝しながら、幾度もお代りをしたのであつた。

神戸では、寶家の長崎料理か上等である。名を忘れたが福原の或おでん屋では、苧やロツペキールヤの旨いのを出してくれた。支那料理では、第一樓を指折つていいだらう。アカデミー（三宮驛附近）の洋酒はよろしい。ブランデーとカクテルは氣に入つた。

住吉では、丸太格子の芋棒が自慢になるであらう、此處のは、大阪の地唄文句に、謠はれてゐるさうな。

料理人が大阪で修業する。材料が關西より來る――東京でうまいもの屋と言へば、關西風化したものと、よく聞いてゐる言葉を實地に見學して、その通りだと感心の首を傾けながら、野菜料理の京都への、私の行脚の足は向つて行く。

京都を聯想すると、すぐ鱧を思ひ浮べるやうに、その期節になると、宿屋でも料理屋でも友人の宅でも、食膳の上を賑はすものは、はもである。はもは、海のものであるのに、それが此山間で、交通も不便な――今はそうでもないが――土地柄で、その調味に異常な發達の跡がしのばれ、遠方の明石で捕れたのを此處で味ふなど妙である。

新古今の一條禪閣兼良の歌に

まつよひに更けゆく鐘の聲聞けば
あかぬわかれのとりはものかは

といふのがある。兼良は侍從職を勤めた人で、此和歌を詠んでから、誰いふとなく侍從と呼び、有名になつた人で、とりはものかはを、はもの皮にかけて、それと胡瓜と混ぜたのを、侍從なますと言はれるやうになつた。はもの骨切は庖刀加減が六ケ敷、これを樂に切るやうにならなくては、一人前の板場でない譯である。骨切はつけ燒にするのがよい。さしみは切おとしにする。はもを燒いたのに胡瓜を添えたのがはも胡、牛蒡を入れてはもで卷くとはも卷。燒はもに玉子の黄味をかけ、大根おろしをあしらふのが玉子かけ。にも松茸は、はもと松茸をすきやきにすること。かまぼこに、はもを入れるのも好まれる。

前にも述べた通り、實際、京にははもはつきもののやうである。一週間も滯在してると、はもも攻で閉口する。誰やら諷つた歌がよくそれを表現してゐる。

昨日もはもも今日も又はもも晩もはも
ハモ（加茂）の川原（皮等）に秋風ぞふく

豆腐は、京名物の一つとして、昔はやかましいものであつが、此頃では、豆腐百珍のや

うなものは、その料理が、殘つて來たから、自由に撰べない。わらじ屋と瓢亭では、大德寺豆腐といふやつを使ふ。これは厚さ二寸位長サ三尺位のがツト入で、高野豆腐に一寸似てゐる。煮しめを作るやうに、鹽で炊くと味がよくいただける。

鰻はわらじ屋（七條正面）が一等よいと思ふ。鮓では、京饌寮（まくづヶ原）のが一人前九十錢といふ安さで風味もよい。山科の花屋のは、素的だとの評判ではあるが、此處のは、非常に高級らしい。

是から食通の間に喜ばれるものは、鮎であらう。桂川、保津川、江州から來る。保津川の八木で捕れるのは、見た感じも、眞求の味にも、極上の上で、トラックで運ぶ時には、途中で水を幾度もかへ〳〵して夜明に着する。價もはつて、七寸一疋が一圓二十錢位の相場。鮎は生のよいものでないと駄目である。死んだのは、アガリと言つて安い。七寸一疋二十錢位見當だ。此アガリを、ムスメさんと渾名するのは可笑しい。如何して、そんな名をつけたかといふと、支那の賭博でアガリの事を、上莊（シャンチャン）と言ふから、その上をチヨウと讀んで、お孃さんに轉じ、孃より娘にし上一をアガリとした一つの符牒である。ムスメさんの價値が安いのは、恐らく鮎だけであらう。

ぎおん料理は、古典な物として保存して置く必用があらう。鳥居本（ぎおん）はそれを標榜する家で、石段・玄關・座敷のすべてが昔風のまま。座敷に坐つて眺むる庭園は、純京式であるのも、旅人にとつては、喜びの一つとなるにちがひない。ぎおん料理を味ふには、前日から頼んでをかねばならぬ。正保寺椀やお膳の內側は、赤・黃・青・茶の四色彩で塗られ、鐵鉢五ツ組の黑椀、二月堂形の机等。まづ箸を握る前に、器の好みが、誰人の眼をもひきつけるであらう。けんちん汁、お豆腐と賽切の人參に、野菜をチヨツト撮んだもの。寄せ揚、海老たたき、牛蒡を入れて團子にしてあげる。鋼香々合、お香物を刻み、甘酢に鯛の身をつけ生薑しぼりにする。和鷄人參、鷄の股肉を、骨つきにて人參と甘だき、葛を混ぜる。黃味すし、おしずしのあつさりとした中に甘味を持つ。鯛鹽燒、鯛の噛むし。──いい氣持に滿腹となつてくると共に調理の苦心が思はれてくる。

瓢亭は有名な家である。此處の朝粥、茶粥、特に玉子の半じゆくに至つては、料理の腕を大きくしても惜しくない氣がする。板場の細心な注意を買はねばなるまい。道具がよく、それに又、茶料理の味がよいと來てるから、味覺極樂黨には、持つて來いのところ。

芋棒の味を洒落してはならぬ。平野屋か芋棒かと言はれる程、平野屋（ぎおん）の芋棒の名は高い。蕪の岡を來て描いた丸腑に、芋と棒鱈をたいたのを出す、芋のやはらかさ、鱈のうまさは形容が出來ぬ。豆腐のあんかけも食へる。ただ困るのは、女中が石疊の上を、高下駄で歩くのでガタ〳〵音かして、料理とピツタリ來ない。もつとも大衆的の此處で、それを望むのは無理だらうが。

川魚では、鰉がよい。嵐山に行つて、千鳥の室から、美しい山や水を前にして、鰉を味ふと、のんびりした氣持になる。私は內貴清兵衞氏を別莊に尋ねて遊んだ時、その馳走になつたが、今だに旨さが口中にへばりついてゐるやうである。

古くからつづく家が、京洛に相當あるなかで、俵屋（北野天神前）が、四百年もつづいて、うどん屋をやつてゐる事を稱へねばなる

まい。三つ俵を描いた白暖簾をくぐると、煤ぶつた平家には、柱でも天井でも黒檀のやうな光りがある。名物を注文して棚を見ると、朱塗、黒塗、青貝の饅頭箱の小さいやうなのが、ならんでゐた。これは、室町御所御用の折、うどんを入れて運んだ遺物だとの事である。私の前に出された平べつたい大丼には、普通のうどんを五本位あはせた位の眞白な大きなのが、一本くる〱と渦巻いたやうに、薄いだしの中に見える。そのうどんの柔らかさつたらない、鰹と昆布のだしも結構、わきつけの生薑もよろしい。名物に旨いもの無しだが、俵屋のはお世辭なく旨い。その證據には何杯も、お代りした位であつた。「これは作るのが六ヶ敷ゥて、職人でも出來まへん、五尺の長サの手うちにして、一日二百人前を作りますよつて、えらう忙しい時には、朝のうちに賣切だつすせ、うどんの切れぬやうにつくるのが自慢だす。」と美しいお女将さんが、京辯の早口で說明してくれた。此名物一ぱい金七錢。

堺御門前の停留場で、電車をおりると、すぐ前に古風な入口があつ、それがみの庄である。ずつと座敷にあがると、種ヶ島・大砲・弓・矢・鐵砲がならんでゐる。まるで武德殿のやうな氣がするが、これは御主人の趣味とか。鮒汁のすうつと熱い赤味噌汁が、咽喉を流れる味は嬉しい。柳川や鮒卷に、玉子がタップり使はれて氣持がよい。かばやきの鮮さが氣に入り、天ぷらの牛煮が素晴しくつて、今でもそれを思ふと喉咽が鳴り出す。天ぷらにつけた輪切の芋もよかつた。此鮒は、わざ〱備前の產になるものを、取寄たのだ。四月から、味がよいとのことである。

すつぽんの元〆とでも言つてよい程、上等だと聞いただいいち（五番町）に行く。黑ずんだ格子作りに、行燈は有難いと思つて中に入る。客室は、新築したものであつた。京に來てから、鐵筋コンクリートが怨めしい位無氣味に見えたり、古風の家が反つて私の心を明るくしたりする。赤黑い素燒の鍋が、グツグツ煮たつてゐるのを、フウ〱口で吹き乍ら、すつぽんを撮んだり、汁を飲んだりするのは愉快だ。雜炊をつくつて貰つたら元氣がついて來た。一體京都は、ユツタリした土地であるから、何處でもお客の顏を見てから、ユツクリと料理を出すので、腹が空いて此處に飛びこんだので、からつきし力がなかつたのであつた。お腹のかげんが落つくと、すつぽんの韻が分つて來た。汁が複雜な味を持つて來た。

牛肉は、おきな（京極橫）が善いと聞いたが行けなかつた。

京も大阪と同じやうに、酒がよい。丹波の小鼓も一寸飲める。その名が何だか戀語にでも相應いので調べてみると、美談を聞く事を得た。

今から拾何年前に、俳句をよくして、京の萬亭を根城に、そればかりでなく大阪あたりまで、黄金を撒散らした吉野多左衞門と呼ぶ羽振のよい大盡があつた、彼の俳名は左衞門で、京城日報社長の椅子を占めても居たし、花柳の巷では、粹い人として、粹人として通つてゐた。多左衞門は、酒を愛する一人であつたが、或事より失脚すると共に、チブスにかかつて、淋しくも病院の一隅に、病ひの身を伏てゐたが、誰一人として落魄の身となつた彼を見舞に來るものとてはなかつた。その折、俳人の高濱虛子と萬屋旅館の若旦那金子竹二郎の二人が、突如彼を尋ねて慰めた。虛子は、道ばたに咲いてゐた野菊一本を、彼の枕邊に置くと、病人は蒼白い顏の中に、歡こ

びの色を濕はしたのであつた。多左衛門は、もと國民新聞社に居たこともあつたので、畫家の平福百穗と懇意な間柄であつた。彼の困窮を知ると、義狭心の强い百穗畫伯は、京都に來て畫會を開いた。一口金二十五圓の絹を賣つて、彼を扶けやうとしたのであつたが、買手がなかつた。丹波の作人で、酒屋を營む西山白雲のもとに、病氣全快後の彼はお世話になつた。そんな關係で、雜誌ほととぎすに、虛子が白雲方の此酒を、世に紹介したのであつた。小鼓は、京都で多く賣れてゐる。私は此美しい話を知つたときには、虛子・百穗・金子三氏のやさしい心根に泣かされたのであつた。

吉野亭（裏寺町）の湯豆腐、いがらし（大黒町）の小料理、ぎおん堂（ぎおん）の濱豆腐、ぎおんいずうの幕の內も、惡くはない。蛸長（宮川町入口）のおやぢは、おでんを喰ふお客を相手に政界を論じるといふ變りものである。

奈良に立寄つた時、松利のうなぎを喰べやうかと考へたが、大阪風であるので、中止して宇治に出。長い橋を渡る時、花屋敷の方を伸びあがつて見た。あそこで不如歸をきいた昔や、川魚の旨さを思ひ出しながら。黃檗の寺に參詣してから、門前の普茶料理の木魚の看板に吸ひこまれて、白雲庵に這入つた。

茶人好の庭を辿つて、座敷に落付くと、黃檗僧の額が澤山かけてあつた。

一、貧しくとも小綺麗に。二、飾らざるも形正しく。三、單純にして趣味深かれ。

が此料理のモットである。女中さんの給仕の代りに、若い角帶の男子の出てくるのもよい。食膳はチラリと見ても、趣があつた。附揚といふのは、芋、蓮、ういろうの天ぷら、雲片は、牛蒡・蓮・豆の煮物。澄子は、小さい豆腐揚の汁物。筝羹は、茄子・豆・慈姑・筍・揚豆腐・昆布の牛蒡卷。麻腐はこま豆腐。浸物は海草のモズク。その他味噌煮と香菜が出て、飯が薬的に旨い。蘭茶も飲ましてくれる。蘭茶は、京の文の助茶屋（高臺寺）で賣つてゐる。讃岐の五劒山の蘭花で作るとの事だ、茶屋の主人桂文之助は、落語家として鳴らした男であるが、今は高座を退いて、お客に甘ざけを飲ませて居る。

白雲庵の普茶料理は、何れも口に合ふ。長崎の卓袱料理が、支那料理に密接さがあるから、普茶の方も、大分卓袱に近い。隱元和尙が傳へたといふから、五辛酒肉をさけた精進料理である。酒を註文すると梅干を入れて出すそうだが、私は他に約束の時間があるので、急いで歸へらうとして便所に行くと、精進一步とした張紙のあつたには驚かされた。白のカッポー着をつけた老人が、庵の主人公らしい。庵主は黃檗の著述をして居る人だ、座りこんで話かけたら禪三昧境の愉快な物語もあらうと思つたが、すぐ家を出て京都行の電車に乘つたのであつた。（終）

本稿を草するにあたり、種々の便宜や御案內を賜はりし、谷崎潤一郎、金子竹二郎、三好米吉、粥川紳二、安藤德器、鬫森白洋、上田備山、立石順造、三陶貞吉諸氏へ謹んで謝意を表します。

大阪を食べて歩く

松崎天民

月に一度か、ふた月に一度は、大阪へ行く。いつも十日餘は滯在して、方々を食べて歩く。「さすがは大阪やな、酒も美味いし、食べ物も味が好い」と感心する。その食べ歩きのところ〴〵、いろんな印象を綴込んで、「大阪を食べて歩く」一篇を成す。但しこのところ、腎臟の方に故障があつて、飲むにも食べるにも、多少の不便はあつたが、在來の食道樂人、「食道樂」の編輯主幹、美味い不味いの差別ぐらゐは、滯りなく判りました。

一、天下茶屋の秋

大阪に着いたのが、九月十四日の晩、愚圖愚圖しては居られまへんとあつて、翌日の黄昏頃には、南海電車で天下茶屋へ出かけた。

日本全國に、鐵道の驛舍多しと雖も、古風な樓の一枚板に、墨痕淋漓と「天下茶屋驛」なんて、「こゝばかりだつしやろ」と、案内に立つた友達の藤さんが自慢である。大衆文藝の仇討でもあつたらしい天下茶屋は、その名からしてローマンスめいて居るが、今は大阪市西成區南吉田町――とあつて、殘暑の西陽がヂリ〳〵と、その暑いことわいな。

でも、驛を出てから、右へ小一丁、某の別宅とも見まがふ一構へ、瀟洒な門を入つて、離れ座敷へ招ぜられると、何處となく秋風が吹いて居るよな心地がした。まつ半、松はん、又は松半と云ふ割烹店で、出けてから一年餘りの家やさうなが、大阪の町中とは感じが異つて居て、一寸、落着いて飲めさうな氣分がした。何とかした横額の文字は忘れたが、床には松本幸四郎の「梅王」が、中座あたりの隈取りを其の儘に、茶室顯けと云つた風で、疊の日焦けも目立たぬ程度に、黒檀らしい大食卓にも、夕暮の埃が目に見えた。

おど〳〵した取なしの二十二三は、銀杏返しであつたらうか、「静子」と申しますにも、昨日今日、女中になつたばかりの初々しさが、天下茶屋らしいカラーに見えた。つき出しは栗のふくませに、小胡瓜の淺い鹽漬二本、それに食鹽を添へてあるのも、上方らしい用意であらう。品書きの中から、あれやこれやの末、鮎は吸物に、蟹はその儘に、海老は頭を取らず辛煮に、鮎は鹽燒にと註文して、酒はたしかに櫻正宗らしいのを、チビ〳〵初めて淡く醉つたが、二人で輕く二銚子では、何と云つても、食べる方が先に立つ。

そして小柄の二十五六、痩せて細そりと眼ばかりものを云ひさうなS卷が現れて、前のに代つて酌してくれた。東京辯の歯切れが好くて、取なしの何處やらに、脂粉の香が漾うて居ると見たも道理や。お若と云ふ假の名で、今は松半の女中に生きて居ても、昔は東京の新橋で、小やなと云つた中どころ、震災後は柳橋から、小たかと云つて出て居たさうな。一つには此のお若さんが呼物で、天下茶屋の松半は、千客萬來のさんざめきである。

但し鮎の吸物は、汁の味が出過ぎて居て、

鮎本來の風味が無かつたし、車海老も頭が無くて、私には物足らなかつた。況んや鮎の鹽燒など、季節外れと知りながら、註文した私の方が、とん馬やなと笑はれやう。たつたこれだけの淺酌で、松半の庖丁を是非する無謀を思ふと共に、不味い筈の大根の淺漬がとても美味くて、御飯を五六杯も食べたのが、お若と共に、松半を快い思ひ出にした。

大阪の郊外は、南にも北にも東にも、こんな食べ物屋が、次第に多くなつたさうな。

二、天ぷら五十年

「御當地にて私の天麩羅を賣始めましたのは明治十六年三月十六日で御座います」と、新案特許の「食堂まへ掛」に印刷してある御靈の梅月で、二十年振りに天麩羅を食べたのは、彼岸前の十七日も初夜であつた。

十人ばかりの小會合だつたが、つき出しは栗のふくませ、さしみは鯛に花丸白髮大根、椀盛はしんじよう、朝鮮瓜、松茸、たき合せは合鴨ロース、辛子ごぼう、平豆、寄唐からし。そこで天麩羅は車海老の大きいのに、穴子の大きいの、海老の寄せ揚げ、小松茸とあつた。次は酢の物にそぼろ胡瓜、うど、針しようが、ぐじの鹽燒にほうれん草のごまあへ、赤だしは海老丸、朝鮮瓜、茶せんねぎ、山椒とあり。水物や香の物にも美味いのが出て、一人前六七圓にして美味かつた。

老作家の菊池幽芳氏や、老畫家の須磨對水氏や、大阪研究會の南木萍水、漫談家の正岡蓉、詩人の金子光晴諸氏に、新京阪電車の畫友石田勝三郎なぞも居て、いろんな話に興じ合つた。天麩羅は何うやいな」の一段になると「不味くは無いけれど、海老にしても、穴子にしても、大き過ぎるぢやないか」とある。そこへ支配人なる人が挨拶に出て、「實はその今晩は、わざと大物を使ひましたのんで！」と、その夜の庖丁には並々ならぬ苦心をした由を云ふ。二十五六年から天麩羅を揚げて居る人が、當夜は更に腕に撚かけて、どんなもんぢやいの油加減、衣の厚薄、大阪で名代の梅月に、不味からう筈はなし。

「天麩羅はまだいけません」にひどく參つて、私は恐る〱海老一つ、松茸二つを食べたに過ぎぬが、梅月と私の間に、二十年相立ち申候月日の隔りが、何かにつけて感傷の種となつた。階下は民衆向の卓子式にして、日本齒の十八九が三五人、天井一つにも笑顏を見せて居るさうなが、東京の天金、茂竹、大新、橋善、中濟のとも、何處かに異つた風味が流れて居た。今、大阪では南の新屋敷に、新聞あがりの稲垣家が、堀川で美味いで知られて居るが、五十年の大老舗梅月には、梅月ならでは知られぬ古味が滲んで居やう。金麩羅だの、薄あげだの、黄の油だの椿だのと、いろんな特色が新時代でも、御靈の梅月は五十年、老舗に誇の堂々さが見えた。

泉鏡花の妖怪小說にでも出さうな、お葉さんと云ふ女中の取なしも、大阪の女にしては、珍しく小股が切れて、キビ〱した心地好さがあつた。鰻や天麩羅の風味に就いては、天下の食通を以て自任して居る人々に、うるさい一家言が多いもので、たれが何うの、だしが何うのと、いつも問題の種になるが、「大阪で天麩羅食べた」「何處でいな」「梅月で」とあつては、まア〱無事に通ると言ふもの。

南の麥宿には此の夏に、眞山青果氏に呼ばれて行つたが、鮎の鹽燒が美味かつたのみ、鰻には恐れをなして、途中で引下つたと覺えて居る。御靈の文樂は亡ひたけれども、梅月五十年の天麩羅は、今も榮えて斯の如し。

三、堂島川の懷古

十八日夜は堂島の魚岩で、食道樂會と言ふが開けた。新聞界の古老福良竹亭翁や、櫻正宗の濱田萬次郎君、それに私も當番幹事とあつて、會費五圓で山海の珍味を食べた。

魚岩の表二階、百疊敷に五十餘人、醫學博士緒方鷲雄、俳人靑木月斗、戲曲家食滿南北、三味線作譜家西山吟平、畫伯須磨對水、柳屋の三好米吉、宇治の普茶料理白雲庵の林春隆老人なんど、お歷々の顔も見えて、殘暑の一夜も涼しかつた。新町から大阪特産の雇仲居が五名、とても東京風の美女ではないが、座敷の取なしには馴れて居て、三味も彈きます、唄ひます、舞かて一つや二つぐらゐが、盃盤の間に興を添へた。

座附から汁、向附へぎ栗白すあへ、造りが鯛の細つくり、鰹湯引、黃菊、わさび、燒肴が甘鯛、あみ鹽から、靑唐辛子、焚合せが鰻いんろ煮、新菊、木の芽、小茶碗が鱧のひ、松茸、しようが、酢肴が蟹、あちやら、煮物が白魚玉じめ、口柚、冷物が柿と白葡萄と云つた六獻立。この中で話題になつたのは、鯛の細つくりと蟹の湯引であつたが、これに櫻正宗や、キリンビールで、五圓出しばなしと言ふ以上、美味い不味いを超越して、魚岩は損やろが、美味いと來て居て文句は無かつた。

今から二十餘年前、魚岩は渡邊橋北詰東側の路次の中に在つて、出前本位の腰掛け式だつたが、その頃から造りと燒肴とに、獨得の風味を見せて居た。今は故人の饗庭篁村翁や、幸堂得知翁が東京から來ると、いつも魚岩の腰掛けで、美酒佳肴に舌鼓を打つたもの。大阪の新聞社に勤めて居て、未だ若かつた當年の私なども、二十五錢の魚岩辨當、土田の箱辨と云ふことに、どんなに食欲を唆られたものやろか。當年の老女將は、今も尙ほ健在で、客の前に出て御愛想して居るが、昔おもへば耻かしや、魚岩で食べるにつけても、私は半生に悔が多い。——

灘萬、つる家、堺卯、播半とあるが中にも、播半は心齋橋が美味かつたし、土佐堀では午前十一時、板野友造前代議士や、大毎の伊藤欽文郎氏と食べて、不味かつたのに失望した。灘萬にはその昔、大阪で瓦斯問題が起つた時、故人の本多精一博士と、たつた一度の經驗があるばかり。堺卯は宴會の本場として、大阪時代を何度となくへゞれけたが、實味かつた食味生活の追懷は、魚岩に強く引かれる。路次の中の腰掛け式が、堂々たる表構へとなつて、今は一流の大割烹店とあるが、構への大きくなるに反比例して、味の落るが料理屋の習ひであるが中に、魚岩ばかりは造りや燒肴に、在りし日の風味が讀めて嬉しかつた。

そこで北のお茶屋へ電話して、おかみか女中かに、綺麗どころを三五人、引連させての晩飯から、北での散財は二上り三下り、やつちよろまかせのよいやまかせ……になるのんが、紳士紳商級のプログラムとある。友達に呼ばれての魚岩では、私も二三度、さうした經路を歩いて、へゞれけたもんやつた。

四、幻妙不思議鍋

大毎代理部東裏通りの芦月で晝飯、武橋北詰の喜久家で夕飯、それから送放、夜食は信濃橋の若葉——と云ふ風に、十九日は忙しかつた。東京の家に居ては、麥飯に澤庵、茄子のドブ漬、大根の大阪漬、梅干、らつきよ、目ざしで舌鼓打つて居る私であるが、一寸でも旅へ出ると、美味い物を食べて困る。

北の芦月は二度目であるが、宇治の林老人

に、來合せた新聞記者の佐藤君、それに藤さんが同行してくれて、評判の紙鍋で海魚のすき焼が美味かつた。この紙鍋と云ふ奴、紙製の鍋と思ひきや、銅製の鍋の形した鍋の上に、薄い美濃紙一枚を敷いて、それにだしを入れたり、鯛や海老やいかを入れて、ジワ〳〵と煮て食べるのである。林翁は默つて感心したらしく眺めて居るし、佐藤君は一不思議なものですなア。と、幻妙不思議がつて居た。

抑もその美濃紙一枚の上には、何か知らぬ油を布いてあつて、その油に曰く因縁秘仕掛がおますのやろ。少し遠い炭火ではあるが、汁のアクや魚の脂肪は、煮え立つと共に紙の裏面に廻つて、魚も汁も極めて美味く食べられるのが、芦月紙鍋の自慢だとある。つきだしの栗と海老も、氣が利いて居るし、鯛と云ひいかと云ひ海老と云ひ、同じ魚ずきでも、とても丸萬などの比ではない。上方の海魚は美味くて、殊に鯛、海老、いかの美味に降參して居るが、同じすき焼にしても、紙鍋ならずんば、斯うした自然の風味は出まいと、四人が一度に、つく〴〵感心した次第である。

一昨年の春、白砂青松の舞子の濱も、今は無い左海屋の淡路島を見る座敷で、伊勢海老や鯛の魚すきに、天下の美味と舌鼓うつたが、それにも倍増して、紙鍋の味には降參した。二階が二室の階下が一室、何も彼も大女の女將が切廻して、芳子と云ふ女中は煮るだけのことだつたが、「油の秘密は判りまへん」と云ふ。紙一枚が鍋の危なかしさも、時にとつての座興であるが、その煮た物が美味いとあつては、無條件に頭が下つてしまう。「このアクが裏側に廻ると云ふところが、面白いぢやありませんか。何かの油に混せ物をして居るのでせうが、一つ大いに研究しませうか」と、精進料理の大家林翁も感嘆して居た。

道頓堀には金鍋の肉屋があつて、黄金木綿に包んだのを、さも大切さうに出して、食べさせたものだつた。銀鍋はざらにあるし、朝鮮風の石鍋から、瓦斯、電氣と進歩發達した鍋の中に、美濃紙一枚の紙鍋は、何と云つても珍中の珍とある。「何でもあらへんもだすがな。そやけどな、しやべつてしもたら、人に眞似されますよつてに、秘密の法で威張つて居まんね。この冬には紙の他に、昆布鍋ちうのんを始める積りだすさかいに……」と、大きな女將は、ニコ〳〵笑つて居た。

大阪は廣い――東京にも無い紙鍋で、海魚を食はしをると、私はしみ〴〵さう思つた。そして歸りは、狐にでもつまゝれたやうな氣持で、暑い午下りの芦月を左様なら……。

五、食氣と色氣と

夜の下の關行特急が出る迄には、まだ四時間餘あると佐藤君は云ふ。七時半の漫談放送までには、まだ三時間餘あると私が云ふ。そこで二人は、道頓堀を歩いたり、スヾランや美人座に寄つたりして、冷たい物を飲んだり、東京の友達へ手紙を書いたりした。

戎橋北詰の眞久家の二階に上つて、早い晩飯を食べたのは、電燈がついた頃だつた。南大阪に於ける大衆的食堂として、天麩羅、壽司、料理、洋食何でも出來て、客筋が好くて、安くて、美味いと云ふことで、眞久家は評判になつて居る。東京風の握りが何んなに美味いのか、天麩羅が何の程度に食べられるのか、そんな事は大概の想像がつくけれど、和食が殊に美味いと云ふ話やつた。二階三階の構へが淺くて、あはたゞしくて落着きが無さ相なので、私は其の日まで眞久家へ入らなかつた。

二階はカフエーのやうな構へで、もう客が

滿員に近いほど、何の卓子も占領して居た。若い十七八のエプロンした女が、右往左往して居る姿も、目の廻るやうな忙しさや無いかいな。私達はそこで鯛のうしほ、鮎の鹽燒、むし蛤、漬物を注文して、すぐ飯にしたが、天ぷら御飯一圓といふのが、一番多く出て居るのも美味さうやつた。鯛のうしほにしても、むし蛤にしても、鮎鹽燒にしても、一流料理店の風味があつて、殊に漬物の美味いのに吃驚した。二人で三圓内外で、こんなに美味い晩飯が食べられると云ふことにも、初めて食べた喜久屋を、心地好いものに感心させた。

佐藤君に別れて、漫談「温泉情調」を放送して、宿へ歸る途中を、友達の待受けて居てくれた信濃橋の若葉へ廻つた。この若葉と云ふのは、古くから知られて居る美味い物屋で、構へもさう大きくはないが、灘酒とした意氣な造りが、食通人の間には取沙汰されて居ると云ふ。こちの赤出しやら、鯛のつくりやら、小いいもの焚出しやら、いろ／＼出て居る中でも、鰹の杉燒と云ふのが、私には珍しかつた。薄い杉板の中に魚を挾んで、臺で燒つて燒いてあるのが、見た眼にも風雅であるし、杉の香が魚に移つて、何とも云へぬ別な風味を醞醸して居た。他の數々の料理には、何の特色が無いにしても、若葉はこの杉燒一つで、客を引くには十分でおますやろ。

京都生れだといふお千代さんは、東京の女のやうにハキ／＼して、盃盤の中を處女らしく取なした。戀も苦勞も嘗めて來て、男と云ふものに幻滅を感じて居るらしいおまさ、おつるの二人に比べると、お千代は若葉の色氣盛り、ピカ一と云ふのやろ。飲ませ、食べさせるが本位の料理店にも、女どころの大阪には、びつくりするやうな美しい女中が居て、飲食の他なる氣分を、艶めかしう彩つて居ることが感ぜられた。カフエーや酒場ばかりが、女の世界でもなく、色香の市場でもなかつた。

それにしても、大阪は氣持の好い家で、安くて美味い物が食べられる點に於いて、とても東京どころの沙汰ではおまへん。

六、法善寺樂天地

二十日は南の法善寺横町や、樂天地裏の食べ物小路を、そこはかとなく步き廻つた。

法善寺ではみどり、二鶴、正辨丹吾、つる源などに、旅人でも數々の思ひ出があるに違ひない。若いK法學士に連れられて、初めて正辨丹吾の前に立つた時、謂ふ所の關東煮の風味の、とても水ッぽく甘いのに失望したに反して、その酒の味の佳いのに、私は何んなに狂喜したことであらう。大阪の酒は、どんな家で飲んでも美味く、たとへば名もない饂飩屋で、大急ぎで一杯引かけるやうな場合でも、上酒を飲み得た喜びを感じたものである。さうした私であり、大阪の酒の美味さに就いては、安心し切つて居る私であつたが、正辨丹吾の酒を飲むに及んで、私は大阪にも他には、實に不味い酒のあることを發見した。それほどそこの酒は、私は心地好い味覺と、陶醉とを與へたものであつた。

小鉢物の二鶴にしても、量は少いにせよ、價の安いのに反比例して、その風味の舌皷打つに足りたことは、二度や三度の經驗ではなかつた。今ではつる源と云ふ美味い物屋が出來て、西と云ふ若いデブの板場が、一流の材料を使用し、一流の美味を提供して居るが、そこは價も安くはないが、美味第一と云ふ點では、單に法善寺のみでなく、南大阪での大きな呼物と云つて宜からう。手狹な腰掛け式に小座敷一つの構へでも、美しい中年増の女中

が二三人も居て、一人前二圓からの天麩羅や、一圓八十錢からの鯛のつくりを食べさせられる點に、つる源の美味第一さが見える。腰掛け式の美味い物屋だと思つて入つても、二人で十圓內外の小金では、十二分に滿腹することは出來なかつた。西ボテはんは笑ひながら、「高いと云ははるけど、高い材料を使はにや、美味い物食べられへん」と、何處までも平然として居るのが面白かつた。

樂天地裏では何と云つても、喜久の家が手輕で、酒も食べ物も美味かつた。東海道線を名古屋への汽車中で、吉井勇氏と邂逅した時、彼は喜久の家のマッチを私にくれながら、「君、こゝへ行きましたか。とても酒が美味いし、料理も美味いですよ」と感嘆して居た。それから私は大阪に下車すると、友達と一緒にその喜久の家へ行つて、出來たばかりの二階の小座敷へ上つて、早い晩飯を食べて見たが、吉井勇我を欺かず、とても安くて美味かつた。蒿唐辛子の燒いたのや、鯛チリや、鮎の鹽燒や、鰯のうしほや、むし蛤や、それで二三本飲んで、飯を食べて、二人で八圓足らずと云ふ安さだつた。午後六時頃から十時頃まで、階下の卓子は滿員つゞきで、二階の小座敷も四疊半に二組四人入るほどに、驚くべき繁昌を見せて居た。

その橫町には、東京風の握り鮨すし捨があつて、柳屋夫妻と一緒に食べたが、生の海老やあわびは、とても美味かつたに反して、飯の風味は甘きに過ぎたし、握り加減も軟くてボロ／＼だつた。東京の大阪鮨は食べられても、大阪の東京鮨は問題になりまへんわ。

七、郊外の新代色

ニットーレコードに關係のある舊知M氏を住吉に訪うて、住吉公園の貸席さかゑで、遲い晝飯の馳走になつたは、二十一日の三時過ぎだつた。かるた、今葉、艶太郎など云ふ住吉藝妓が來て、海老の鬼から燒、野菜椀、鯛のつくりなど出たが、車海老の鬼から燒は、腐りかけて居る匂ひと風味が厭やつた。

何處から取寄せたのか知らぬが、「えらい濟まんことで！」とあつて、代りに出た伊勢海老の鬼から燒で、私達は滿足した。住吉公園一帶にも、待合らしい構への貸席が出來て、多くの藝妓が色香の出入を見せて居ることに、私は隔世の感があつた。安價に心安く散財させる設備は、大阪の郊外と云ふ郊外にも發展してゐるが、美味い物屋と云つては、甲陽園のつる家ぐらゐのものではおまへんか。それにしても、大大阪の歡樂機關と云ふものが、內から外へ向つて擴大し、進展して居る形が、今更のやうに面白く見かけられた。

阪急電車を十三から三國で下車して、停車場から小半丁のかたい屋で、藤さん達と晩飯を食べたのは、二十一日の晩八時頃やつたやろ。南海線の住吉で午飯を食べて、阪急線の三國で晩飯を食べると云ふことが、如何にも旅らしい氣分にした。かたい屋など云ふ屋號には、何の風情をも感ぜぬけれど、門構への廣々とした家で、六疊、八疊の小座敷も十七八、百疊敷の大廣間もあつて、大名入りのドンチャン騷ぎから、安來節、鴨綠江節の浮かれ沙汰にも、一歩を大阪から出たカラーが流れて、萬事が安直主義らしいのも、大衆本位らしいのも、私達には氣が措けなかつた。

造り、吸物、燒物、小鉢、たきだし、酢の物、小丼、ひやし物で、三圓と云ふ安價さも、かたい屋の呼物に違ひない。酒三本にビール二本、サイダー二本、美味い蕪の漬物で飯を食べて、三人で十二圓五十錢と云ふのも、感心して宜い安さだつた。それに十八九

から三十がらみの女中が、丸髷、銀杏返し、島田、耳隠し、オールバックと三十人から居て、弾きます、唄ひます、踊りますのも、カフェー氣分をお座敷で行つた遣り方で、たしかに繁昌の一因らしかつた。私達は靜に相談事があつて、隣座敷の安來節を敬遠し、洋風腰掛の一室に入つたが、そこにも百合子だの、米子だの、光子だの、靜子だのが、代る代る姿を出しては、咬るやうな笑顔を見せてくれた。

若い女で繁昌して居るカフェーを向ふへ廻して、日本料理にカフェー氣分を取入れたのが、かたい屋のねらひどころであらう。然もその女達は、何れも流轉の過ぐ世を持つて居るらしく、大抵の絃を弾き、大抵の唄をうたひ、大抵の男を手玉に取つて、面白く遊ばせることに、相當の才能を發揮して居た。大阪の場末や郊外へ行くと、料理屋にしてお茶屋を兼ね、女中にして藝妓を兼ねて居る便利を見るのも、昭和新時代と云ふのやろ。

美味い物を食べると云ふことにも、異性の醱酵する歡樂氣分を、必要とする世の中かな——と、今更のやうに、思ふこと多し。

八、百萬長者の鯛

「今晩は差支へがあるけれど、午やつたら構やへんで……。久し振りやないかいな、何處へでも御馳走するで……」と、昔馴染は有難いもの。大阪朝日新聞株式會社の專務取締役上野精一氏に招かれて、「そやつたら、今橋のつる家を頼みまつさ」次第である。

九月二十二日の午下り、差向いでは話がもてんで、柳屋の三好米吉どんに電話すると、茶色のピカピカした支那服着て、たつたこないだ朝日の旅客機で、東京から仙臺、花巻温泉、甲州は身延山に參詣して戻つたばかりとある。「陪賓と云ふ格やな、えらい濟まんことで……」と云つても、また一方の旗頭たるべき柳屋の、何とて物に動ずべきかは。大きなチャブ臺に相對して、扇風器に吹かれて居ると、大阪一流の割烹店、資産が五六百萬圓もあつて、多額納税者だと云ふつる家の白日も靜閑として山房に在るが如し。

しらすあへから鯛のつくり、まる吸、たき合せは赤い海老、蒸し鮑の酢の物に、名も知らぬ照り焼から、最後に出たのが鯛の山椒焼とある。三人で三十圓では心細いつる家の事とて、食意地の張つた私とても、これは珍しい二十年目の見參やつたが、世にこれほど美味い物が、つる家の名物として作ることを、實は其の時まで知らなんだ。十二疊半と七疊半の二室續いたことぶきの間は、木村武山のざくろが床の間で、棚間は「靜觀白雲起」と元田國東先生書し、一方には「青山白雲多」と、之れは相國寺の獨山和尚が、雄渾なところを見せて居るが、そないな見た目の御馳走よりも、鯛の山椒焼に心をひかれた。

去年の秋も十一月、音戸の瀬戸の料亭に迎へられて、鯛の名所の鯛のいきつくりに、感嘆し驚嘆したものだつたが、つる家の山椒焼はそれにも増して、鯛好きな私を驚嘆させた。「氣に入つて何よりや」と、上野はんは一寸箸をつけたばかり、柳屋に至つては、飲んではかり居て紅潮したが、生れて初めてめぐり逢つた山椒焼、やはか此の儘に置いて堪るべきぞ。目玉も皮も殘さす食べて、東京は神田の生れだと云ふお愛さん、二十六七の小肥りな愛嬌者に、嫌はれる不調實も恥ではなかつた。書硯廳と大阪府とに、入れ換つた木島さんや、牛島さんを云々しつゝ、お愛は大阪辯と東京辯とをチャンポンにして、鯛の山椒

焼かつる家の名代である所以を語つた。
そこで上野はんが「いつもの胡瓜ー」と命ずると、やがて大きな丼に、小胡瓜を丸く五分ぎりにしたのへ、一寸切りの昆布と鰹節とを惜しみなく加へ、二分の酢加減に醤油の味佳いのが、堂々と運び出された。漬物でなく、酢の物でなく、その中道をとつた風味のほど、これもつる家の特産らしく、とても乙な歯ざわりだつた。いつぞや高安吸江博士は悄然として「つる家もえいけど、あも過ぎてなア」とあつたが、私は鯛の山椒焼に、無條件で平服した。

法善寺のプロ氣分も愉快やけれど、つる家のブル意識だつて、世が世やつたらおもろいやおまへんか。

九、上方一の牛鍋

二十二日の晩は一人でブラリと神戸へ出かけて、花隈の菊水で肉を食べた。元町の三つ輪が美味いと云ふが、菊水も三つ輪の經營とあつて、座敷の構へが珍である。銀座の松喜だとか、四谷の三河屋だとか、京は三條寺町の三島だとか云ふが、神戸の花隈に菊水あつて、牛肉鍋のため萬丈の氣を吐いて居る。

何でも光村利藻さんの屋敷跡やさうなが、二十からの部屋〳〵に、花見茶屋だの、嵐山だの、高尾だの、め組だの、左甚五郎だの、二見が浦だの、お伊勢様だのと、天井から壁一面にかけての舞臺装置。そこで會席の和食も出來るし、肉鍋ジリ〳〵と初秋の一夜を、容色よしの女中相手に、へゞけれるも御勝手次第とある。その装飾が上方式に、少しくアクド過ぎると云つても、この廣い日本の肉屋で、菊水みたいな室かざりが、東京の何處にあるか、大阪の何處にあるか、九州の何處にあるか、北海道の何處にあるか。

名だけは別府温泉の氣持好い風呂に入つて、さてそのロース鍋と言ふのからして、神戸なればこその美味さとある。腎臓を病むで二ケ月、牛肉もいけません、お酒は勿論の私であるが、盃に二三杯と肉の二片、あとは漬物で飯にしたが、菊水探訪に事は足りた。中年増、新造が二十餘人、中には東京辯やら九州訛やら、憂きは流れの女達も、菊水にして仕合せ相に見えた。神戸の肉だけが美味いと言ふのでなく、京都の三島だつて安くて旨いし、大阪はあみ清を第一に、南と北の本みやけは、設備の上品さと氣分の爽快さに、肉屋情趣を離れた美味さを見せて居るわ。

それに大阪の大市は、女中三十人を有樂仲居として、赤前垂の色香も艶めかしう、お雪、お廣、お花、お芳に、市雪、市廣、市花、市芳と、市の字を冠しての藝名に、新時代人が歡樂欲求の急所を突いて見せる。たかゞ肉屋だ、鍋屋だと下目に見て馬鹿にでもして御ろうじろ、大市も怒るやろし、本みやけかて默つては居よるまいし、菊水はまた本場やでと意氣まいて肩をあげるは必定。とても立派な部屋に通つて、美しい女中はんに給仕してもろて、三圓内外の御あいそで事が足りる以上、肉の本場は何と言うたかて上方や。

大阪にはやとなの變形で、自由娘子と言ふのも出けて居たし、神戸は世界の出船入船、歐米の風も強く吹いて、バー以外、カフエー以外、レストラントの他に立つて、菊水見よやの鼻呼吸も、見ように依つてはモツサリした。東京の牛屋なんど、わりしたが何うの、ザクが何うのと云つても、食べて出るだけの設備であるが、菊水でも、大市でも、そこにゆつくりと享樂の氣分をたゝえて、遊ばせることにも忠實なは、何と言うたかて上方人の商賣上手とこそは感嘆すべけれ。

但しあみ清だけは今橋でも新町橋でも、食べるが本位の美味さであるが、名物は神戸の菊水、旅人らしい紳士までが、ゾロ／＼とお座敷見物も、日本一の眺めやろが……。

一〇、ひがい京美人

秋季皇靈祭のどんたくは、京都から電話に呼起されて、東京の河瀬さんとあり、蘇北翁から「來給へ」とのみ、旅の空はのん氣なもの。梅田から汽車で行くと、白川筋古門前上る入木氏の別邸にあつて、安田種次郎氏が東道し、何でも美味い物を食べなはれとある。

この秋の御大典に、朝香宮様をお迎へ申上げるとて、百萬長者の入木別邸、又の名を洛東御殿は、改築、増築で上を下への大混雜。然も御殿造りの堂々たる、庭苑の廣々として奥深き、思はずも「京の秋淺きを悔ず何となく心ゆたかに此の苑を見る」の一首をものして、立派な式紙に揮毫した。それより安田はんに連れられて、三條繩手は美濃吉へ自動車すると、これは又どんたく日の大入とあり、鴨川も三條大橋もあつたものかは。

浴衣に着換へて寛ろぐところへ、すつぽんが出る、鯉の赤出しが出る。鯉の酢味噌が出る、鮎のぎよでんが出る。「今夜は川魚づくしにしました」ところへ、京ならでは、美濃吉ならではの鯉が出て、初めて京に食べる心地がした。花見小路は一力の仲居頭、お梅はんで通つた人が、新しく開いた一梅の仲居はん、若いが丸髷のお花が來ると、次々に信勇だの、こい子だの、富千代だの、小勇だの、祇園の一二流どころが來て、愈よ鴨川情調となる。殊に信勇は旦那のために、一苦勞して來た年増とあり、菊池寛さん知つてます、谷崎潤一郎さん、よう呼ばれました、長田幹彦さんには舞子時分に、書かれましたと、ものに動せずへゞれけてあり。

何と云うても京の料理は、美濃吉にして川魚にとゞめをさすのか、鯉の酢味噌は酸味に過ぎ、鯉の赤出しにも戸惑ひしたが、鰉（ひがい）だけには降參した。瓢亭あり、平八茶屋あり、千もとあり、平野家あつても、美濃吉の鰉には、十餘年の思ひ出まで手傳ふて、京都に來た甲斐を覺えた。人に依つては鰉と云ふ奴、がり／＼して厭だと云ふが、そのがり／＼の香ばしさ、鮎とは異つた風味の上に、落ち難い要領あり。京の舞子はん達が表情には、何となくぼやけたピント外れがあつて、ねつからドーンと來なかつたが、この鰉食うためには、わざ／＼東京から特急に乘つて來ても、夢さら／＼後悔はおへんえ。

それから八坂新道は待合風の貸席久田家へ繰込んで、津田樓の主人が素人浪花節の雲右衛門を聴いたり、市子と云ふ派手な顔やら、京に名物のやとなはん、三流女優あがりの東京辯やら、大阪者の信子、黨などを見て、さざめき騒の四時に及んだ。そこでも京風の煮しめが出たけれど、美濃吉の鰉食べた後では、湯葉、しい茸、高野豆腐も乙でなく、一二杯の酒に醉うた顏して、唄などうたふ心侘しさに、京の秋の夜の暑かつたことわいな。

斯て二十四日の午前九時、大阪に逆戻ると、今度は神戸から電話あつて、善友二人が晩の六時、大阪で顔を合せて、大阪で食べやうとあり。扇風器の午睡の夢にまで、鰉を見て覺めてから、さて何處へ行つたものか。

一一、おもしろい北野

善友の一人を宇治電の老將軍、諸井圓吉翁となし、一人を神戸タイムスの社長、舟橋爵一君となす。いつも神戸では花隈に會して、魚善の料理の數々に、舌鼓うつを例とした

が、今度は大阪で飲まうとある。あれやこれやと詮議の末、安からう、美味からう、美人の酌人も添物だから……と、私が案内に立つて出かけたは、阪神北大阪線東北野停車場前の絹家。

　三國のかたい屋よりも規模は小さいが、どつちやが先か萬事がその意氣で、安くて美味くて心易く、それに脂粉の香を漾よはせ、二十二三から三十がらみ、秋波(ながしめ)も艶なのが、入かはり立かはり、酌してくれるで繁昌して居る。大阪法曹界の大先達、白川朋吉翁が醉餘のすさび、白河夜舟の軸やら額やら、四疊半にも六疊にも、八疊にも十疊にも、七八つは洋服のサラリーマンが、ストトン節に、鴨綠江に、安來節に他愛がない。カフエーが何ぢやいな、女給はんが何ぢやいな、こつちやは日本人の日本料理で、安く美味く面白く、お客はんを引いて見せます物凄さ。

　鯛さしに鮪をあしらつたのは、餘り感心しなかつたが、山のいもが出る、松茸のお椀が出る、鯛燒が出る、あいかもの煮たのが出る、鱧酢が出ると云つた工合で、何れも相當に食べられた。たとへば鱧酢にも胡瓜、うど、めうが、紫蘇を配してあるし、茶碗は鯉に松茸、ほうれん草と云つた塩梅が、決して三四流の獻立でないと見た。酒は東京人が名も知らぬ「白精」を使つてますが、酒精分がピーンと來るやうなのでなく、世が世なりせば落着いてへゞれけやうものを、水ばかり飲で御相手するのは、厭冷たさが先に立つて、夜はさすがに秋風の侘しさがこみあげて來る。

　それでも眼鏡のお勝、瘦せのお愛、滿洲で育つたお艶、ノッポのお光、ニコ〳〵のお春、婆さんのお峰、世帶くづしのお芳など、十七八人の中の七人までが、云ひ合せたやうなオールバック、七三、耳隱しの近代味で、チヤブ臺の周圍に陣取ると、何處となく色香の渦が卷起つて、享樂の醉が出る。雲州生れの踏井翁は、關の五本松と安來節を巧みにし、六十近い禿翁にも、この青春が殘つて居るかと張膽明目する程の咽喉のよさ。若い社長の舟橋兄にも、調子を外した義太夫の一手から、「秋の夜」の微妙さがあつて、お峰はんが彈く絃の音にも、旅に聽く哀調が咽んだ。

　一名を北野の妖怪屋敷などと云はれて、口善惡ない新聞人の一部にも、愛顧され持囃されて居る絹家さうな。肉屋の大市が有薦仲居で客を引き、ユニオンだ、赤玉だ、美人座だと、カフエーや酒場が美人女給で、榮えて居る大阪に、絹家のやうな日本料理が、魅力を醱酵して居るのも、昭和大阪の時代相を、一面から如實に見せて居ると云へやう。「いや、こないに、おもろいとこ、おまへんな」と、神戸の靑友達も、ハメを外して醉つたらし。

　食べると遊ぶとの微妙な交錯は、斯てカフエーから日本料理へ、還元するのか。

一二、カフエー氣分

　食べて歩くと云つたとて、大阪のカフエーにも、碌な食べる物はなく、ソーダ水一杯二十錢を飲んで、方々へ電話をかけさせて、一圓のチップを擲いて出るが落だとある。それでも北は太平ビルの地下室に、薄暗いパリヂヤンが名代とあり、南は道頓堀のユニオン、赤玉、宗右衛門町の美人座が、上方式の電光裝飾で、第一線に客を呼んで居ます。

　近く堂ビルに出來た花屋の酒場では、四人連れでウヰスキー三杯、南京豆、ソーダ水二杯、アイスウオーター三杯で、七圓六十錢

は安くなかつた。北の新地裏通りのバッカスは、梅田へこそ狹くて小さいが、藝妓はん連れての紳士面で、午前一時頃が賑はしく、北濱に灘萬の五階の酒場は、設備が瀟洒で、氣分が落着いて居るところから、今では大阪第一の酒場とある。北は櫻橋北の梅田に近いハルピンスタンドへでも入つて見ろ、琥珀のロシヤ女が二人、横濱のチャブ屋その儘の田舍出が八九人も居て、カフテール三杯にウヰスキー三杯、豆の袋で二十三圓餘りをぼられたとて、不平の持つて行きどころなし。

藝妓照葉で知られた高岡辰子のテルハの酒場にしても、二人連れでウヰスキー三杯、ビール一本、西瓜二人前に南京豆で、七圓四十錢は紳士税か。何でも彼でも一杯一圓均一は、横濱のキヨホテル、ナンバーナイン、マツホテルだけと思ひきや、大阪の酒場にも其の式が行はれて、四の五のと云ふだけが野暮やとある。それに比べると美人座、美人茶屋、ユニオン、赤玉、珊瑚、不動、マーチヤン、モモダニ、スヾラン、オリンピアなど、道頓堀から島の内に散在して居るカフエー、レストランは、決してボルと云ふでないが、美人不美人取まぜての女給本位で、水谷八重子さん、栁咲子さん、岡田嘉子さん、村田嘉久子さん、伏見直江さん、栗島澄子さんを、假の名にしての存在が、大阪式かと護摩しや。

今日のカフエーが、飲食に主體を置かず、女給の色香を第一義として居るは、特に目立つて大阪に見る現象と云つてよい。北は北海道から青森、秋田、南は鹿兒島、熊本、長崎で、中國、四國、山陰道、東京者まで流れ込んで、全國的の混亂を極めるところ、大阪のカフエーならでは、見られぬ女人分布と云ふべし。それで月に二百圓内外から、多い時には三百圓を掴ると云ふのだもの、猫も杓子もカフエーへ入りたがつて、チツプ欲しさの秋波を惜しみなく投げて居るのも、今更ながら世の中の廣さを思はせ、擬似性慾にあこがれて行く男の群の果敢さを思はしめる。

その大阪カフエーが、今や漸く行詰らんとして、チヤズバンド（邪頭蕃音と私は云ふ）だの、朝鮮音樂だの、出來損ひの馬鹿囃子などで、行人の足を呼止めたり、ステージダンスの性慾的示唆で、早くもキヤバレー時代に一轉化の傾向を見せ初めたは、大阪の町を往來の途上、見のがしてならぬ世相とある。

兎にも角にも、大阪はおもろい都。

一三、二十一貫五百

斯て大阪の最後の一夜は、二十五日を島の内も西横堀の新水橋東詰を南へ入つて、開業したばかりの貸席松平の貸座敷でさんざめいた。富田屋の女中はんやら、新町の小力婆さんやら、大和家の何とか云うんのや、南地の新聞甲乙やら、村さん、新さん、川さんの通人ぞろひが、大阪の遊びを見せてくれた。

それから北でグツスリ寢たが、洋食ぎらひか大阪では、殊に洋食を食べようと思はず、鰻の方も敬遠して、かき船にしても季節が早過ぎ、結局一泊三四圓の宿屋の漬物で茶漬の方が、美味かつたといふ始末。但し大阪の漬物たるや、料理屋の方では物の數に扱はず、轉た東京を懷しませたが、大阪人に云はせると、漬物の美味いのんは、東京よりも大阪やさうで、北の雙柳の漬物なんざア、とても好いですよと大阪の渡邊均兄まで、大阪の肩を持つて居た。漬物なんざア何うでも宜いと云ふところに。料理本位の大阪氣質が出て居る

のか、梅月、つる家、松牛、かたい屋、絹屋播半、菱富、つる源、どこでもこれはと飛びつくやうなのにめぐり逢はなんだ。

大毎代理部裏の三角は、東京人の經營とあつて、握りも本格で感心したが、材料が瀬戸内海と來ては、酒が灘の生一本と來ては、東京風の腰掛式にも、大阪の風味があつて、東京式の漬物が美味かつた。若し夫れたこ平、たこ安、たこ梅に至つては、蛸を軟かく煮た苦心のほどに、關東煮の風味を見せるもあつたが、所詮、東京のおでんと上方の關東煮は、同巧にして異味があり、同日には語れなかつた。況んや場違ひの鮪を使つて、東京者をアッと云はせようなんざア、思はざるの甚だしいものであつて、大阪は何處までも、鯛で押して行くが本格ではあるまいか。何の彼のと云つてる間に、百圓を食べてしまつて、東京へ歸る今日、心細いよ秋の風。──

心殘りは鯛船だつたが、それも恰度去年の今頃、廣島は江波の山文で、本場のをいろいろ食べた思ひ出に、辛抱しなさいと慰められた。羽田別莊の茶碗の風味、音戸の瀬戸の鯛のいきつくりから、伊豫は宇和島の蒲鉾、竹輪、土佐の高知は得月樓の鰹のたゝき、名古屋へ飛では八勝館のお椀など、大阪の旅の前にも、美味かつた假寢の思ひ出が、せめてもの心遣りか。東海道を名古屋に道草して、一路、東京に歸り來れば、秋風、既に都門に訪づれて、氣の早い淺漬大根が、べつたら市を待たずして、漬物屋の店頭に並んで居るのにも、東京に住む者の幸福を感じた。

──以上、そこはかとなき食べ歩き、通り一ぺんの日常記錄に墮したが、因つて以て食味王國の大阪世相の一面を、端的ながらも傳へ得たことに依つて、何も彼も勘辨しなはれ。おかげで腎臟の蛋白がまた殖えて、折角、一貫近くも痩せて居たのが、曰く二十一貫六百に、還元したこそうたてけれ。

──昭和三年九月三日朝──

新著月評

圓本經濟學

出井盛之

改造社版「經濟學全集」は福田德三博士の「經濟學原理」を、日本評論社版「現代經濟學全集」は土方成美博士の「經濟學總論」を、それぞれ第一回の配本として刊行した。今秋の我が讀書界に多大なセンセーションを惹き起した兩全集の內容につき、われわれが現實に接し得る最初の出版であるから、今ここに福田土方兩博士の書を手にして、禁じ難い興味を感ずるのである。

兩博士の著書は殆んど相伯仲したる量と外觀を以て現はれたと評するのが公平であらう。しかも價はともに驚異的低廉で、單行本では到底企て及ぶことのできないものである。內容に於て兩著作はそれぞれ異れる使命を有して居るから、これから推して競爭的二全集は、少しも排他的に存在をおのおの主張する必要はないと思ふ。故に讀書士人はこの內容豐富にして價格至廉の兩全集の一方を、その好むところに從つて支持するか、或は奮發して兩全集を併せ購讀して、この我が學界の意義ある決算的集成の成功を期待しても決して悔をのこすとは無いと確信する。かかる大規模の出版に於ては、著述は全く商品と化する勢を免かれ難い。その結果は極度の宣傳となり、やゝもすれば著者までその渦中に引き込められる危險がある。かかることは全集の意義と使命に反することになるのであるから、出版者はかかる危難を學者著作家に及ぼすことなきやう、充分の注意を拂ふ必要がある。

福田博士の「經濟學原理」は「國民經濟講話」に多少の筆を入れたものに過ぎないが、飽くまで通俗的にして、具體的引例に富んで居るから大衆的經濟學の書物としての特徵を具備して居る。之れに反して土方博士の「經濟學總論」は多くの豫備智識を持つた大學生あたりを目當として書かれてあるやうだ。從つて抽象的で論爭的で決して一般向きのものではない。學界の先覺福田博士が嚙み碎いた說明をなすに比べて、新進の土方博士が何等か創意を示さんとして生硬の論を吐くのは無理のないことではある。たゞ土方博士の行文には不必要な難澁がある。例へば次のセンテンスの如きである。「價格取引に於ては、各人は營利主義に支配せられて居て他人に少く與へ、多くを得んとして居るから、他人に多く與へなければならない（卽ち價格の高い）場合に何需要する人は勿論、之以下の提供によつても財貨を獲得しうる（卽ち價格の低い）場合には需要に參加するを以て、此點よりも需要は價格の低い時に多く、高い時に少い」（土方・總論・二〇六頁）。學者の務の一は新なる智識の貢獻をなすことにあるけれども、またすでに知られて居るところを最も明快な言葉によつて表現し、すべての人をして理解し易からしめるのも大切なる役目である。福田博士が「講話」を「原理」に訂正するに當つて甚だクラシカルな千八百九十年のツアイス工場の例（福田・原理・四七〇頁）はそのまゝとしても、もつと手近な現世紀に於ける實例を擧ぐることを閑却されて居ることや、土方博士「總論」の五一一頁の見出し、第六章經濟生活の均衡とあるは、大きな活字で「と發展」の三字を落して居るためか、この章に一向理論の發展のないのは、いづれも出版を急いだことに原因して居るのであらうと想像される。

兩博士の著述は、著者の博學であることを示すことにつとめて居る點に於て共通して居

る。福田博士が多識の學者であることは言ふまでもない。しかし「マニフアクチア」と工場混同の辯を同一の書物の中に幾度も繰り返されては(福田・原理五七八頁、七四〇頁)讀者は聊かあてられる。土方博士の價値論は結局「社會に於ける他人(個人の誤植ならん)の立場をも含んだ」限界主義で、「積極的見解」の基礎をつまり「同情」に求めて居るに過ぎない(土方・總論・二〇四頁)。それならスミスから左右田博士までを論じ立てないで、端的にアンダーソンあたりと共鳴する所以を、精細に說いたら如何であらう。

すべて經濟學原論は、經濟生活の實體を著者が把握したる處を、文字に表現した一箇の作品であるべきだ。畫壇の巨匠は想をこらせば淡彩素朴の筆に依て萬有の神秘を畫布の面に躍動たらしめる。先づ繪具を獨逸に仕入れ、これに配合するに英米佛などの材料を以てするが如き煩瑣は、その必要とするとではないであらう。わが學界の進步を阻むものは、思索よりも渉獵に價値を置く弊害である。蠶は四眠せずしては絹を吐かないといふ。わが國の經濟學徒は世界諸國より可成り營養を吸收した。しかるに今日學界に不振の聲あるは、營養不良よりも睡眠不足によるのであらうか。

谷口政秀著
職業選擇法
上野陽一

文部省の訓令がでゝから、個性調査、職業指導のことが、敎育社會で大變ヤカマしくいはれるやうになつた。本書はこの新しい問題について評論したもの、筆者は東大出身の新心理學者、新しい役者が新しい脚本を演出したものを、私に批評せよといふのである。

菊判を九ポで組んで堂々五〇〇頁に垂んとする分量である。決して小冊子でも何でもない、それを短時日に讀過して批評する？それは出來ないことだ。

しかし、有がたいことに、餅屋は餅屋で、さう一字々々拾つて讀まなくとも、大體どんなことがどんな主義方針でかゝれてゐるかは、大抵わかる、その大抵わかつたところに基づいて、紹介して見ると、かういふことになる。

まづ本書を三部に分つ、第一部は職業選擇簡易法といふ、本人の希望、周圍の人々の觀察などによるものを論じてゐる。ページ數五〇、まづこれは本書の總論と見るべきもので

シエペングラーの歷史主義的立場(笠信太郎著)「西歐の沒落」なる一書を世界に投じて、盛んなる波紋を起したオスワルド・スペングラーの思想的立場を檢討したものである。彼の思索的發足が歷史主義的である事は、彼が世界史の觀點から前著「西歐の沒落」に於て、西歐の未來を豫想しようとした企てに依つても窺ふ事が出來る。然らばドイツ學徒の歷史主義に於て、例へばヘエゲル及マルクス等と彼との差違は何處に在るか？この問に對して著者は、第一部、世界觀形式、第二部、社會・國家・經濟觀の二部門に分けて彼の思想體系を檢討してゐる。「世界史は一つの巨大なる生活である」と、含蓄ある言葉を投げかけた彼の全容を知る事は、時代人の務めであり、本書はそのための良き嚮導である。(菊判三五〇頁・定價三、〇〇・東京神田表神保町・同文館)

舞臺八十年(松助藝談・邦枝完二編)　劇界の至寶として惜まれた、逝ける老松助の藝談を輯編したのが本書である。その飾らず巧まず、素朴に語り行くまゝに、老松助の全容が躍つてゐる。啻に彼の藝道苦行錄と云ふばかりでなく、團菊全盛時代の藝道華やかなりし頃より、今日に及ぶ劇界裏面史とも云ふべきものである。(四六判二〇〇頁・定價二五〇・東京麴町三年町・大森書房)

自然科學の諸問題(木村德藏著)　本書は自然科學研究に對する新しい試みと云ふ事が出來よう。それは、「生命問題を中心とする自然科學の一考察」「生物は一種の機械なりや

あらう。第二部には實驗による職業選擇の方法を詳細に論じてゐる、ページ數三〇八、分量において本書の七〇%を占めてゐる、第三部は職業選定と題して、職業相談所に來た少年に對して、如何に處置すべきかにつき、具體的方案を示してゐる。

著者の勞作として最も感謝しなければならぬ部分は、職業選擇に際して用ひらるべき各種の實驗法に關し、多くの小學兒童について標準を作つた點にある。この標準として擧げられたものは、簡單なる數字にすぎないけれども、この數字をだすために、どれだけの知惠と骨折と時間と費用とを要したか、それは實際やつたことのあるものでなくては、わからない。著者が書中に時々その骨折を吹聽してゐるのも、無理のないことであらう。

それから、一般の社會は、職業の指導に、檢査機械を用ひると聞くと、スグにその檢査の結果が適當なる職業を具體的に示してくれるものと思つてゐる。これは大きな誤りである。機械だから精確に示してくれるものと考へるであらうが、機械を使用するものは、世間の人が機械を過信するために、大變な迷惑を感ずることがある。

著者はこの書において、この點を明瞭に說破してゐる、實驗法を三〇〇頁以上も說いておいて、しかも機械はすべてを語りうるものでないことを、くれ〲もくりかへしてゐる。いゝ態度である。

しかし職業指導に從事するものが、本書から最もよい示唆を得るのは、第二部でなくして、第三部であらう。できることなら、第二部のページをへらしても、第三部にも少し生きた材料を加へたかつた。

職業選定の標準として、職業の範圍の廣くなければならぬことを說き、軍人、教師、醫師、日用品商は、範圍が廣いから、今日尤も安定な生活をしてゐるとかいて、多少著者が現社會の實相に疎いことを示してゐる嫌ひもあるが、そんな枝葉のことは、本書の價値をキズつけるには足りない。(菊判・四五八頁・定價三、五〇・神田・富山房)

昆虫記

長谷川　如是閑

ファブルの昆虫記を讀んで虫のことを讀んだと思ふものは、決してファブルを讀んだものとはいはれない。ファブルの昆虫記は、昆虫の生活記錄ではなく、ファブルその人の生活

否や」「科學の將來は日本を如何に改造するか」等の特殊な考察に依つても見る事が出來る。(四六判二七〇頁・定價一、八〇・東京神田北神保町・新生堂)

施療室にて(平林たい子著)　プロ文壇の唯一の女流作家として氣を吐く平林氏の短篇集である。發表當時評判だつた「施療室にて」外近作十篇を收めてゐる。(菊判二六〇頁・定價一、〇〇・東京市外杉並町高圓寺・文藝戰線出版部)

石器時代(井田秀明著)　歷史以前――五千年前――の日本人の生活相を描き出した長篇小說である。史實に據るところなき原始生活の創作化は、文壇に何等かの問題を提供するものであらう。(四六判四八〇頁・定價二、〇〇・東京神田材木町・駿人社書房)

處世の大道(澁澤榮一著)　澁澤子の米壽紀念出版で、論語を處世訓とする子の言行錄である。又同時に論語を基調として見たる維新及明治大正の政治史、社會史とも云ふべく、讀物としても興趣深きものがある。(四六判一、〇〇〇頁・定價三、〇〇・東京芝愛宕町・實業之世界社)

雜誌「悲劇喜劇」　岸田國士氏の編輯で十月號から創刊された。その用紙、型等の好みも氣持ちよく、その編輯振りもすつきりしてゐて氣持ちがいゝ。眞に立派な誕生である。一讀者と共に、も一度、芝居といふものを觀直し」一面、研究的啓發的である以上に趣味的親和的ならしめる」抱負はこの第一號に充分現はれてゐる。(定價五〇・東京芝區高輪・第一書房)

記錄である。否、ヒューマニテイーそのものの記錄である。そこでは、科學とヒューマニテイーとがあの纎細なフランス的情緒のうちに溶け込んで、文字や形の小細工を全く離れた、眞からの散文詩となつて現はれてゐる。

フランスではファブルは大衆的の讀物になつてゐるといふことである。フランスの大衆のうちにも日本と同じやうに劍劇ものや怪奇ものが盛に讀物とされてゐることではあらうが、そのなかで、ファブルのやうな生活記錄に親しみを感じてゐる大衆のあることは、流石にフランスだ、と感心させられる。日本でもファブルは、もつと／＼讀まれなければならない。人間らしい生活感情のためにも、また科學の普及のためにも。

けれども、ファブルを日本語に直す資格のあるものはたんとない。それは語學の力や專門の知識やだけで出來る仕事ではない。生活記錄は、それの內藏する生活感情に觸れたものにして始めてその理解に徹底し得る。その意味の理解なしにファブルを譯さうとするのは、冐瀆である。その意味で、私はハアブルの譯者として椎名君その人のやうな適任者が他にあるか何うかを知らない。

椎名君は、フランスに長く居つて、フランス人を夫人とし、今もフランスに行つてゐるが、ただそれだけではない。君は世のつねのフランス通とは全く選を異にして、田園的フランスの空氣と水とにすつかりひたり込んだ人で、環境の違ひからファブル其人のやうな生活に沒頭する幸福をもち得ないのであらうが、然し、私は君を一見して、君の全身がファブル的情緒に震へてゐるらしいことを感じた程、ファブルを日本に移すに適してゐる人である。日本語の字句や形に於ては、君よりも達してゐる人はいくらでもあるだらうし、從つてファブルを横文字から竪文字へと移すには、もつと上手な人が外にもあらうが、ファブル的情緒を、私達の胸の底に移し植えてくれる點に於て、君ほど適當の人はなからうと思ふ。

これをもつて見ても、飜譯といふものが、決して容易の仕事でないことがわかる。原著者の文字に觸れたばかりで出來る仕事では無論ない。同じ横文字仲間の西洋人同士でさへ、眞面目な飜譯は大抵、一人の原著者を、一人の譯者が一生かかつてやるといふ流儀だ。胃藥も考へも違ふ日本人が、朝にカントを譯し、夕にトルストイを譯すといふやうな遣り方は、飜譯をしてゐるといはんよりは、

趣味の麻雀（杉浦末郎著）三六判二五四頁・定價一、五〇・大連市浪速町・大坂屋號書店

階級社會の藝術（プレハーノフ著・藏原惟人著）四六判二五二頁・定價一、〇〇・東京牛込神樂町・叢文閣

紅茶と葉巻（牧逸馬集）ユーモア全集の第四回配本である。筆者は今本誌特派員として新世界順禮の途にある谷讓次氏。水島爾保布氏の挿畫と相俟つて全卷ことごとく近代的哄笑の文學の精華たらざるはない。

フランス革命に於ける階級對立（カウツキー著・宗道太譯）パンフレット一一五頁・定價五〇・東京牛込神樂町・叢文閣

地代思想史（高畠素之著）社會科學叢書第十篇。內容を二篇に分ち、「初期の地代觀」としてフヰジオクラット、スミスの所說を、「地代學說の成立」の篇ではリカルド以下マルクス說を論述してゐる。氏獨自の簡明整然たる立論は、難解なる諸說を初學者にも徹底せしむるであらう。（四六判三四〇頁・定價一、五〇・東京丸ノ內昭和ビル・日本評論社）

國際政治と國際行政（蠟山政道著）本書は蠟山教授の過去八年間に於ける研鑽の結果に成れるものであり、斯學のために新生面を拓く近來の名著である。本書は國際政治（初めの三章）及び國際行政（終りの三章）を中心題目として、それに折々の國際的時事問題に即した研究（他の九章）を合せて編まれてゐる。著者は此等の諸題目に關して一

泥棒をしてゐるのだといつた方が本當である。日本で西洋人流の剋明な遣り方をやつてゐるのは、僅かに逍遙先生のセキスピア位のものであらう。

椎名君の昆虫記は、此の顛惡から超然たる極めて貴い飜譯物の一つであることは確だ。君は自分の好みから、偏つたことをいつてゐるかも知れないが、その非難を甘受しつゝ、本書を若い同胞諸君に勸める。（全十卷・一―四既刊・定價各一、〇〇・東京牛込神樂町・叢文閣）

萬葉集の文化史的研究

金田一京助

萬葉集は、現存する日本民族最古の純文學であつた。僧と難波の一緇徒の手に、近世國學の芽の培はれたのがこの書の注疏であつたが、爾後成長した國學時代の萬葉學は、やつぱり國學の爲の古文獻で、之を通して我が古代精神を知らうとする學者達の文化史料に外ならなかつた。萬葉集を純文藝の立場から研究し鑑賞したのは、寧ろ新しい事なのである。本當にその藝術的眞價の發見されたのは、或は子規以來だといへるかも知れない程。

然るに、今や土俗學や民俗學や、民衆文化の科學が汪然として起つて來、古事記も風土記も萬葉集も、この新興科學の光に照らされて、新時代の國學は、將に我古典の文化史的研究を根本的に建て直さうとしつゝある秋、突如、一代の好尚と人氣とを一身にあつめて西村教授の『萬葉集の文化史的研究』があらはれたのである。

本書は、第一章緒言、第二章人種學的考察、第三章工藝學的考察、第四章社會學的考察、第五章土俗學的考察、第六章結言から成る。中に就て、社會學的考察と、土俗學的考察との部門が、最も委しく又最も優れた部分である。著者は在來の史書の、やゝもすれば政治や軍事に偏するのに慊らず、自ら深く期して古代の民衆生活に着目し、萬葉集を史料に當時の文化をたづね、以て我が國民國家の淵源する所を詳かにせんとする大きなアンビションを以て本書を書かれたのである。そして、『此書が果してさうした新運動の先驅となり得るかどうかは知らないけれども、少くともさうした意圖の下に著はされたことを斷はつて置きたい』といふ言葉はうなづかれる。ただ、一等最初にある人種學的考察の部門は、一等貧弱な部門だつた。此は無理もない事で

貫した見識と獨自の研究方法とによつて一の學問的新領域の創造を企圖され、しかも尖鋭精確なる立論に於て見事に成功して居る。而して本書はまた、國際關係に多少とも關係ある人々にとつては必讀の啓蒙書として多大の價値を有つ。頁・定價二、五〇・東京神田中猿樂町・嚴松堂）

鐵桜漫談（小笠原長生著）　嘗て東京日日新聞に執筆せられた「鐵桜漫談」に新に數篇を加えて上梓されたもの。附錄「帝國海軍史論」（一四〇頁）は明治卅一年に執筆せられたものであるが、今その文獻的價値のみよりみるも、意義深きものがある。（四六判三五三頁・定價二、〇〇・東京牛込・早大出版部）

新教育學（B・ラッセル著・塚越菊治譯）
“On Education——Especially in Early Childhood, 1926” の飜譯である。その内容價値は、「ラ氏は、この書に於いて、教育の可能に極度の信、望、愛をかけ、與へられたまゝの原料から新時代の最適者たる知、仁、勇具足の人格を形成することを約束する」と杉森氏の序文に述べられた如くユニークなものである。譯者は既に同じくラ氏著「産業文明の前途」を飜譯して定評を得た人。良書として推奬するに憚らない。（四六判三九四頁・定價二、五〇・東京牛込早大出版部）

産業の武裝と勞働階級（ハァ・ヴァイス著・水野正次譯）　パンフレット一〇七頁・定價五〇・東京神田駿河台西紅梅町・同人社

ボルシェヴィキ黨の組織構成（カガノウ

誰が見たつて、あの歌集の中に、さう〳〵人種學的資料のあるべき様がないからである。それを著者は、題の爲に强いて稿を成した趣があつて、偶〻この部門が、累を全卷に及ぼす憂があるから、二版には、この章は思ひ切つて割愛された方がよいやうに思ふ。

全卷を通じて、萬葉二十卷の長歌短歌が、克明に涉獵引證されてゐて、具さにその慘澹たる苦心のあとが偲ばれる。けれど、どういふものか、學究的な嚴密さや窮屈さの代りに到るところ、のんびりした隨筆的な氣持、時としては漫談的な氣持にさへ出逢ふ。此は恐らく、本書の長所でもあり又短所でもある。

妄評多罪

伊能嘉矩氏の遺著「臺灣文化志」を見て

石田幹之助

臺灣が我が領有に歸してから三十餘年に成る。此間我が官民はこの新領土の學術的研究にどれだけの力を費し、どれだけの業績を收め得たか。遺憾乍らその研究は極めて旺盛であつたとは云へぬ。又その業績も非常にブリリアントなものが相次いで世に送られたとも云へぬ。ロシアがシベリアに對し、オランダが東印度に對し、ドイツがカメルーンやトーゴーに對し、又南洋諸島や膠州地方に對し、アメリカがフイリッピンに對してどれ程の研究をして來たか。これらの諸國がその新領土・植民地に對し、地理・歷史・言語・風俗・宗教・人種・動鑛物・地質・氣象等各般の事象に亘つて如何に精力を傾倒し、如何に光輝ある成果を收めたか。これは人のよく知る所である。これらに比して我が臺灣研究はどうか。甚だ殘念なことが多い。たゞ早田文藏博士の「臺灣植物志」の如き世界的の盛名を負つた大著があり、織田・岡松兩博士の監督の下に編纂された「臺灣舊慣調査報告」や「蕃族調査報告」の如き資料の寶庫とも云ふべき有益な出版物のあることだけがせめてもの誇りである。後者は織田博士の云はれた如く、我國に存し、又存した凡百の何々調査會と稱するものゝうち超群の成績を擧げた機關の編述に係るもので、その學界に於ける聲價と信用とは日と共に加はるものがある。然し、臺灣を全體として一と握みにし、その歷史・文化の各方面を一幅の鳥瞰圖に收め、然も各部とも十分なる根據の上に立ち、且つ相當詳密なる記述を含んだ一部の臺灣全志の如きものはまだ出づべくして出でなかつた。この時に方つて著者の

キッチ著・水野正次譯）パンフレット一三一頁・定價七〇・東京神田美土代町・白揚社

國體眞義（松宮春一郎編）四六判一六〇頁・定價八〇・東京小石川茗荷谷町・世界文庫刊行會

定本・俚謠正調（黑岩涙香選）正調庵涙香の遺された稿本を竹山人の序文を添えて一本とせるものである。（四六判二五三頁・定價一、五〇・東京小石川江戸川町・交蘭社）

タナプトシス（小酒井不木著）雜誌「內觀」に過去四年間に亘つて揭げられた同題名の業績を此度一本に纏めたのである。自ら生死の境を彷徨した博士が、死生に就て豐富なる材料を縱横に驅使して深き洞察を下されたものである。例によつて興趣深き書である。（四六判二六五頁・定價一、〇〇・東京市外上大崎・內觀社）

ソヴェト・ロシヤ辭典（ロシヤ問題研究所編著）「第一部」制度、組織、歷史、地理等「第二部」人名に分類し、各々精確簡明な解說が加えられ、更に附錄として數多の重要事項が採錄してある。現代ロシヤに就て正確なる知識を得んと欲する人々にとつて必須の書である。（四六判三〇三頁・定價二、〇〇・東京牛込鶴卷町・希望閣）

イエーツ舞踊詩劇集（南江二郎著）W. B. Yeats の 'Two plays for Dancers, The Only Jealousy of Emer' の二篇を飜譯し、各々に解說を加え、更に「イエーツの舞踊詩劇研究」なる論文を添えてある。その裝幀にも見るごとく眞摯なる研究と高き藝術の香とが

如き篤學の士が、その半生、否、殆どその一生を傾けて研究し、而も之を行るに燃えるやうな熱情を以てせられた本書の如きを得たとは獨り臺灣研究者の幸なるのみならず、我學界全體の輝きとして實に堪へない所である。

（一）

本書は合計三千頁を越える三卷の巨册、その網羅する所は臺灣の自然界に關するとを除いては記すべきもの、論ずべきもの殆ど餘す所なく、廣汎博搜を極めた大著であり、我が臺灣研究史上のモニユメンタル、ワークたるに恥ぢぬ。たゞ余は未だこれを通讀する暇もなく、又自分の專攻する所と隔りが大きい爲に十分に之を紹介批評する能力を缺く。然し一と度本書を手にせられた士は、諸名家の序跋に據りてその內容の如何を知り、著者の苦心の迹を尋ね、その特色の奈邊に存するかを明かにすることが出來る。出版者が喜んで頒たれるであらう所のプロスペクタスに就いて見るも、容易に本書の性質と價値とを知ることが出來よう。紹介と批評とに不適當なる余の如き、實は一字を下す必要を認めないのである。若し一言にして之を蔽ふならば清朝治下に於ける臺灣の文化總志にして既出の著述從來の諸說を集大成したものである。勿論獨創の見に富み、又自ら山野を跋涉して集めた資料も少くないがその長所とする所は搜羅集成の點である。而して今臺灣研究者が先づ求むるものはこの種の綜合的著述の正確にして權威あるものである。嚴正なる立場から、部分々々に就いて周到なる檢討を行ひ、一層精細な解剖を加へたなら或は不十分な所を發見するであらう。然しそれは本書にとつて何等その價値を損するものではない。今世の望む所が先以て本書の如きものであるを思ひ、又獨力でこの大著を完成された著者の境遇を考へ、更に又或る部門に關しては今日我等が見得る程の材料の無かつた時の事を顧ればそれは殆ど自明のことである。今迄臺灣に就いて少し深い知識を得ようとする時はどうして來たか。先づ漢籍が相應多く擧げられる。然し漢籍なるものが求めんとする問題に對して如何なる知識を如何樣な樣子に於て供給するかこれは少しく漢籍を扱つた人ならば十分に知る所であるがその雜駁散漫掴み所のないのに長嘆するであらう。少しく名著の名あるもので今日の眼から見て隔靴搔癢の恨を免れない又或る時代の史實に就いては勿論最も據るべく、最も信ずべき洋書がある。然しこれは今第一稀覯に屬し、且葡・西・蘭等の歐語に通ずるに非ざれば利用し難い。どうしてもこれらを蒐最した適當の通志が必要であつた。この意味に於いて本書の出版は極めて意義深いものと云ふべく、もし我國に臺灣學なるものがありとすれば、それはこれによつて大いなる進展を見ること、思はれる。

（二）

本書は試みにシベリア研究に例を求ればかのミッテンドルフや、シュレンクや、乃至ジェサップ探檢隊の業績にも比すべきものである。勿論內容に於いては大なる差があり、それらの業績が民族學言語學上の調査を主とするに

溢れてゐる。（菊判一四五頁・二百部限定・定價三、〇〇・東京麴町下六番町・厚生閣）

人體の趣味と神秘（高田義一郎著）　顯微鏡とメスとを離れて、髮、爪、骨等の人體に關する文獻による興趣深き解說。趣味の醫學として、また讀物として、一般に味讀さるべき快著である。（四六判・四三〇頁・定價一、六〇・東京日本橋本石町・廣文館）

屍蠟莊奇談（北名賴己著）　耽奇的物語六篇、いづれも異常の取材による力作である。（四六判・一二三頁・定價一、〇〇・東京牛込赤城下町・赤城書房）

大日本國語辭典（上田・松井兩博士共著）　冨山房が好個の御大典紀念事業として、現代日本が有する最も大なる、最も完備せる既刊の國語辭典を特價を以て江湖に頒たんとするものである。本辭典の眞價は既に定評があり、我國文化の一大標幟として、海外の大辭典と比倫するも何等の遜色なく、語彙二十餘萬語、三十有餘年の苦辛經營も、さぞと敬意を以て首肯される。最も本書の特長とすべきは、記紀・萬葉の古代語より、中世近世に至る凡ゆる文獻に依據し、更に現代巷間に行はるゝ日常語及外來語をも網羅して、實際生活の伴侶たらしめ、又熟語故事の辭典を兼ね備へ、部門を明確にし、出典を明かにし、圖解を附して理解を扶くる等一々擧ぐべきもない。此機會に於て公共團體は勿論、個人としても一本を備ふべきであらう。（特價豫約發賣・全五卷・特價五五、〇〇・東京九段坂下・冨山房）

對し、伊能氏の書は寧ろ歴史の哥といふべきものである。然し、その研究史上に於いて、或る基礎を作つたといふ意味が甚だロシア、アメリカの上掲諸著と似てゐると思ふ。但しミッデンドルフには有力なるコラボレーターがあり、シュレンクにもグルーベとかマキシモウィッツとか一流學者の協力があつた。ジェサップ探檢隊に至つてはボゴラス、ヨヘルソン、シテルンベルグ、ラウファー等世界の學壇に於いて一と云つて二と下らない名流を網羅してゐる。且つこれらは各々有力なる學士院とか博物館とかの背景を有し、莫大な費用をかけて行はれた調査の結果である。之に反して伊能氏は獨力佶据經營よくこの雄篇を完成されたのは大いに多としなければならぬ。いづれにせよ、ミッデンドルフやシュレンクの書が基礎となつてシベリア研究が今日の盛を致し、ジェサップ探檢隊の報告が典據となつて明日の壯觀を約するが如く、臺灣の研究は今始めてこの著に土臺を得、この書に出發點を得ることゝなつた。すべてはこれからである。新に手を著ける人は先づ本書に相談してからの事とするであらう。從來多少の造詣あるものもこの書に依つてそれを整理再省して見るのもよからう。要するに臺灣の文化史に關する範圍に於いてこの書は一の百科全書であり、市村博士の云はれた如くデパートメント・ストーアである。何でも備はり、又何人にも便利である。

○

繰返して云ふ、臺灣研究はこれからである。此書の成れるを機として、一人でもこの方面の眞面目な研究者の多く出ることを期待する。一體我が學界は新領土の研究といふことに就いてもつと興味を持つてもいゝと思ふ。西人の日本を訪ふ者は臺灣に多大の興味を懸けてゐる。余がこゝ數年間東洋文庫に於いて接した歐米人の多くは皆臺灣に旅し、人によつては縱横に之を跋破し、又數回に亘つて視察を試みてゐる。伯林のウィルヘルム研究所のゴルトシュミット博士、巴里のコレージ・ド・フランス教授シルヴァン・レヴィー博士などはそのうち大名ある人の一例である。各方面の學者が色々の方面から觀察調査を試みてゐる。獨り最も親しかるべき我が國の學者が比較的臺灣研究に關心の薄いのは遺憾である。例へば日本人、日本語の研究など、純粹の學的興味からは勿論、國民として十分明かにしておき度い問題の究明に於いても、臺灣の如き鄰地の部族・言語の研究などは徹底的に緊要なことである。研究の結果或種の關係のあることが分つても可、關係のなきことが判明しても立派な寄與である。かの「蕃族調査報告」の如きは最も傑出したものであるが、今日の眼から見ればなほ調査方法に缺くる所ある恨がある。土語の採集・說話・歌謠の蒐錄等に方つてもフォネティック・サインを用ゐ、蓄音機のレコードを使つて萬全を期する用意がなければならぬ。（大戰中、幾多の苦難を嘗めつゝあつた墺太利の如きが、學士院の事業として捕虜に就いて殊方別國の方言・歌謠の採蒐を行ひ立派なレコード・ライブラリーを持つてゐることなどは學問を重んずる國の風潮として敬服に堪へぬ所である）。臺灣に試むべき學術的事業は未だ澤山ある。英國の印度に於けるを見よ、Linguistic Survey of India は年々如何なる報告を出しつゝあるか、Archaeological Survey of India は如何なる事業を進め、如何に立派なる調査報告を公にしてゐるか。之に參するにジオロジカル、サーヴェー、サーヴェーあり、トポグラフィカル、サーヴェーあり、巴利佛典刊行會あり、佛教聖典刊行あり、印度聖典全集の發刊あり、印度碑銘彙集の年々刊行せらるゝあり、ボンベイ、カルカッタ、コロンボには亞細亞學會の活躍するあり、かくて佛蹟の發掘、壁畫彫刻の保存も成り、燦然たる地名辭典 Imperial Gazetteer of India も成る。盛なりと云ふべしである。これらはやがて移して我が南島にも行ふべき事業ではなからうか。云ふ勿れ、印度研究の盛は大英帝國の勢威と富とを後にすと。これあるも好學の精神が上下に漲り、篤學の士の多いことなくしてはこの好背景も空しいものであらう。我が臺灣が今後如何なる運命を辿るか、それは余には分らぬ。然し學問は永遠である。ショ翁の言を藉る迄もなく、Ewig ist die Wissenschaft. 研究は努めなければならぬ。この意味に於いて伊能氏の大著は前途遼遠な臺灣調査に常に顧みられる準據として、永くその名を忘れられぬものであらう。この書の上梓に方り我が學士院の示された好意や、福田・柳田二氏及び著者の門人知己諸氏の努力は屢々傳承してゐた所であるが、出版書肆の犧牲的精神と共に近來の快事として廣く之を傳へ度い

中央公論社代理部創設

東京市丸の内ビルディング七七六區
中央公論社代理部
振替東京七八四七五番
電話丸の内 二〇六番

代理部への御註文はすべて前金に限ります。御送金はなるべく振替を御利用下さい。
御註文の際は郵税をお忘れなく。
宛名は必ず「中央公論社代理部」として下さい。

此度中央公論の代理部を創設いたしました。數ヶ月前本社發行の婦人公論が、代理部事業を始めまして以來、非常な評判で、加ふるに多數の本誌讀者諸君からの希望もありまして、此際此等讀者諸君の便宜を圖るために、先づ左の計畫の下に事業を開始いたしました。
本社の代理部は、信用のある物品を責任を以て簡便確實にお取次する事を信條といたします。奮つて御利用下さい。
又物品の撰擇に迷はれる方には調査解答もいたしますし、左記物品以外の御希望もありましたら御遠慮なく御申越下さい。
次號から續々新計畫を發表いたします。今後の本社代理部に御期待下さい。

スプリングコート兼用
バーバリーレインコート

英國製と同様の生地を用ひた純國産品です。多額の運賃と少からぬ關税とを仕拂ふ必要がない丈、それ丈品質も、仕立も非常に吟味されたものです。



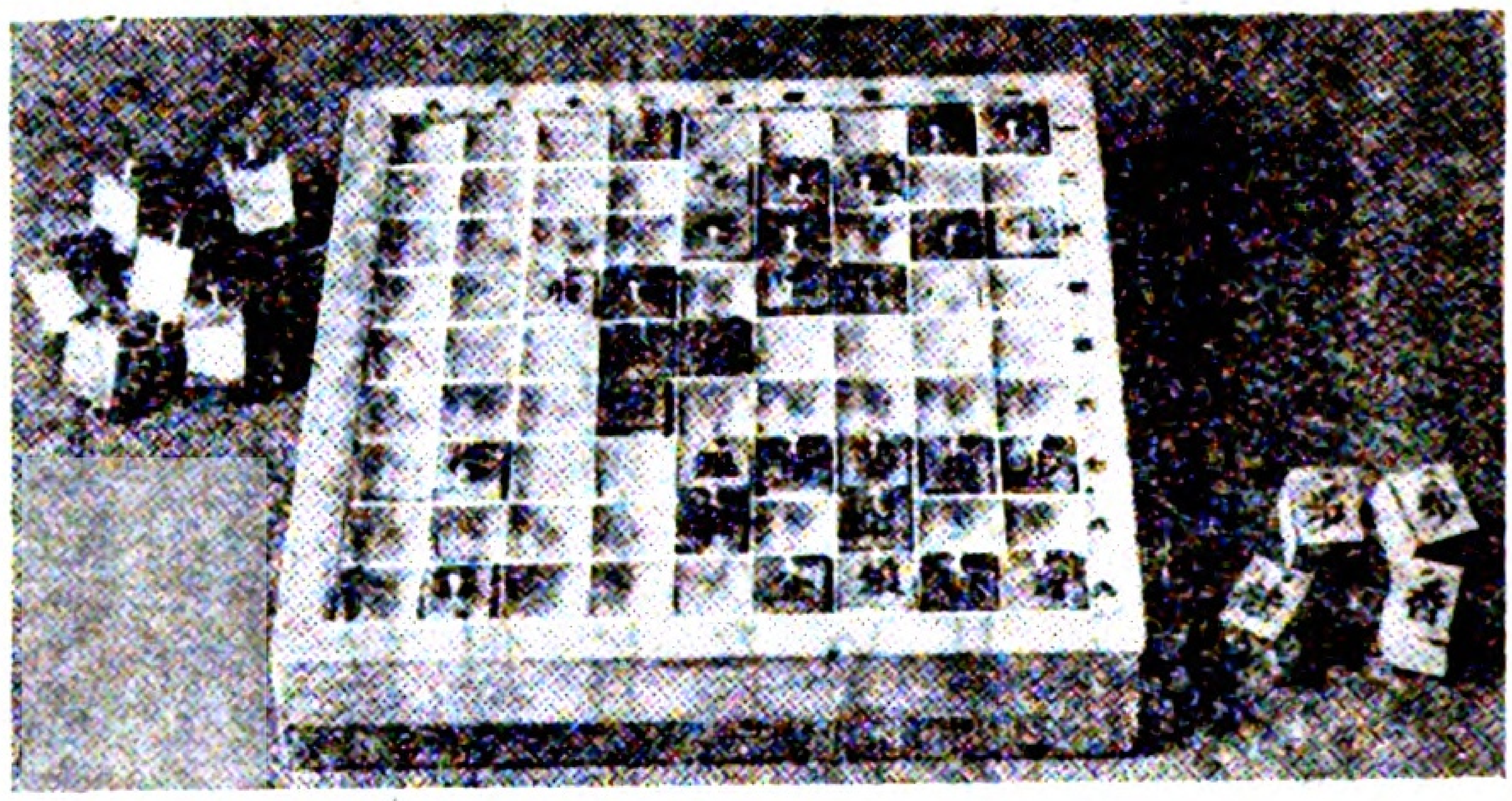
これならばスプクレグコートともなり、天候の危まれる日の外出に安心して着て出られます。
色はウス茶色とその少しく赤味がかつたものと別に紺のものとあり、寸法は丈襟下三尺六寸から四尺二寸まで二寸毎にそれぞれ取揃へてあります。
各種共一着 **金拾九圓**
送料市内十二錢 内地十八錢 領土四十五錢

純良レンコート

純良なイージーのレンコートをお頒ち致します。上等の羽二重に良質のゴムを裏附けしたもので、尚裏面には上品な縞柄が染出してありますから、その氣品の良さは從來の舶來品の比ではありません。
色はネヅミと少しく黒味がかつた茶の二種類で、盛んに海外に輸出されつゝあるものです。
各色共丈襟下三尺六寸ヨリ各二寸毎に四尺二寸まで取揃へてあります。
一着 **金拾參圓**
送料市内十二錢 地方十八錢 領土四十五錢

携帶用
輕便將棊盤

縱三寸七分橫三寸二分厚サ五分の輕便將棊盤です。木とアルミニームで造られてありますから、ポケットに入れて少しも重くなく駒には一個一個蟲針が附けてある等婦女子の眼にも可愛らしいものです。
駒は標準文字を用ひ盤には縱横に數字が記されてありますから、新聞を見乍らの研究には一層便利です。
其の他繁雜な業務の間に數分の閑を得て、又は忙しい旅の車中に或ひは湯上りの腹ばひのまゝで、



或ひは机上に、或ひは病床のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る好棊家にとつてこれ程便利なものはありません。

定價（駒全部附）　金壹圓八拾錢

送料市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

河獺トンビ襟

和服用二重マワシの何れにでも取附け自由に工夫されたカワウソのトンビ襟です。

春暖の日には簡單に取外しが出來て、嚴寒の候乃至新春の禮服の上を被ふ二重マワシの襟にこれがあるだけによつて少からぬ重々しさを加へます。

種類は餘りに贅澤に涉らない最も實用的な左の四種類とし、何れも確實なものばかりを選びました

定價一號　金七拾五圓
二號　金五拾圓
三號　金參拾五圓
四號　金貳拾五圓

送料は何れも市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

舶來・自働研式

バレイ安全剃刀

安全剃刀には多種多樣ありますが、バレイほど完全かつ簡便な優秀品はありません。巧妙な機械裝置によつて、いかなる素人にも立派に砥げます。從つて毎日使用しても一枚の刄が半年以上はもちます。その切れ味に就ては廣光の古銘刀のそれに匹敵することが既に證明されてゐます。

C型（革砥、替刄三枚つき レザー箱入）　一圓八十錢
同　同　二圓
B型（革砥、替刄一打つき ニツケル箱入）十三圓五十錢

送料市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

強精劑リンブリン

一時性の昂奮劑ではなく、其の吸收性は極めて敏活で、血肉細胞の新陳代謝を旺んにして、全身神經を强壯して、特に神經衰弱に偉效を奏する最新强精劑であります

類白色の錠子に造られた本劑は極めて佳快な獨自の芳香を放ち、藥劑の服用を擯忌する婦人であつても喜んで用ゆる事が出來ます。

定價（一週間分）　金參圓五拾錢

送料市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

紋染紙製

洋服カバー

防水防濕防蟲の效用を具備し、シカモ布よりも丈夫で洗濯が出來るといふ重寶な品です。この絞紙製品は婦人公論代理部で好評を博してゐますので、本誌でも特に格安にお取次いたします。

定價（大）一圓廿錢　（小）八十錢

高級で低廉な

アテナ萬年筆

使ふに從つて忽ち執筆者の手と書風になじみ、使へば使ふ程愈書きよくなるといふ定評を得てゐます。低廉にして、シカモ舶來品にも遜色なき高級品であります。（郵券二錢封入請求者に型錄進呈）

定價　二圓五十錢　四圓五十錢

回轉式自働吸入型

定價　三圓五十錢

送料市内十二錢　地方十八錢　領土四十五錢

送料市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

古書案内・取次

最近地方在住の讀者諸君の切望を容れ「古書案内部」を特設いたします。當分の間、讀者諸君の紹介註文にのみ應じます。但し左の條項嚴守のこと。

A、紹介は往復葉書又は返信料添付のこと。

B、註文は成可く振替を利用せられたし但し送本は前金後一週間以内の事。

C、宛名は中央公論社古書案内部。振替東京七八四七五番。

發聲映畫論

小山内薫

（一）はじめてフオノフイルムを見る

フオノフイルムといふものを私がはじめて見たのは大正十四年だつたと思ふ。場所は新橋演舞場だつた。

私は招待券を貰つて、何等の豫備知識もなしに、何の期待をもかけずに、唯何氣なしに見に行つたのである。恐らく、よくよく閑な晩だつたに違ひない。

映畫はどれもこれも短いもので、いづれもサムプル式なものだつた。だが、だんだん見てゐる内に、だんだん私は驚いて來た。

先づ感心したのは、音と繪とが如何にもよくシンクロナイズしてゐることである。勿論、私はまだその當時、フオノフイルムの原理も製作法も知らなかつた。どうして拵へるのか知らないが、實に巧く行つてるなと、唯單にさう思つたのである。

次に感じたのは、自分に響いて來る効果である。それは今までの映畫——音のない映畫——から受けたものとは全く別のものであつた。

オペラの一節らしいものがあつたが、それはあんまり感心しなかつた。ダンスの寫眞もあつたが、それは音樂をうまく合せるやうに演奏しさへすれば、強いてフオノにしないでも濟むやうに思つた。私が寧ろ新しい感激を覺えたのは實寫物だつた。

或群集を寫したのがあつた。それは大統領の選擧日か何かの寫眞だつた。その埒もない群集のどよめき、音樂隊の去來、さういつたものが「唯動くだけの寫眞」をどの位効果の深いものにしたか分からなかつた——私は思つた。若し、ナイアガラの寫眞を見ながら、あの大きな瀧の音が聞けたら、若し、倫敦の實寫を見ながら、あのバンク附近の雜音が聞けたらと。

だが、それよりももつと私を動かしたのは、あのロオゼンの

短いワイオリンソロだつた。曲はもう覺えてゐないが、あのモオションと音のエクスプレッションとの一致は、さながらその人をそこに見るやうな氣がした。私はかうした寫眞で、若しパデレウスキイが見且聞かれたらと思つた。若しブゾニが見且聞かれたらと思つた。

プログラムが終近くになつた頃、私は古い知人の皆川芳造氏に會つた。そして、はじめてこれらの映畫が氏に依つて輸入されたものであることを知つた。

氏は言つた。是非君に内證で見せたいものがあるから、繪が終つて客が歸つてしまふまで待つてゐて貰ひたいと。

私は待つと答へた。そして、どんなものが見られるのかと胸を躍かしながら、劇場が空になるまで待つてゐた。

突然、スクリインが明かるくなつた。そこに映し出されたのは、皆川氏自身の姿とその聲とであつた。それはフオノフイルム紹介の短い挨拶に過ぎなかつたが、はじめてスクリインから(實はラウドスピイカから)日本語を聞いた私は、また別な感激を覺えた。

實際、その時の私には、映畫の本質的理論も何もなかつた。唯「たいしたものが出來たものだ」と、一度に感激してしまつたのである。これはまだ見本に過ぎない。だが、見本に過ぎないものが既にこれだ。今後の發展は測り知ることが出來ない。私はさう思つて、唯もう夢中になつてしまつた。

思へば、今から三十幾年か前である。當時中學校の生徒だつた私は、ワイタスコオプと名づけられた「活動寫眞」を、生れてはじめて神田の錦輝館で見た。それは丁度このフオノフイルムと同じことで、いづれも短いサムプル式のものだつた。太平洋の波が海岸を洗つてゐる。そこへ犬が出て來る。波が崩れると犬が逃げる。唯それだけのものが幾度となく繰返される。エヂスンが工場の前で水まきをしてゐる。その前を電車が通る。唯それだけのものが何遍も繰返される。殊に、今考へてもをかしいのは、どこかの芝居の一節をその儘寫したものだらう。ジヤンヌダルクが火に燒かれるところ、スコツトランドのメアリ王妃が首を切られるところ、その短い場面が幾度となく繰返されるのだつた。ジヤンヌは幾度となく燒かれては、また生き返つて出て來た。メアリ、クイインも幾度となく首を落されては、また生き返つて出て來て、絹のハンケチで目を縛られた。

併し、それを見た時の私の感激は非常なものだつた。私は日記といふものを一向に書いたことがないが、その時のことだけは、たどたどしい幼い筆が、いまだに記錄を殘してゐる。

實際、フオノフイルムをはじめて見た時の私の驚異は、それ

に優るとも劣るものではなかつた。

それから幾日か經つて、私は松竹キネマの撮影監督牛原虚彦に會つた。

私は直ぐに訊いた。

「君は演舞場のフオノフイルムを見たか。」

「いいえ、見ませんでした。」

「それは惜しいことをした。驚くべき發明だ。少くとも、あれはキネマカラの比ではない。」

「そんなにうまく行つてゐますか。」

「勿論まだ未完成なものだし、どの程度までの利用が許されるかも知らない。併し、もうあすこまで行つてれば、どんどん發達する可能性があると思ふ。兎に角、映畫が聲を持つやうになつたといふことは、一大事件だ。先づシネリオが變つて來なければならない。役者の修行も變つて來なければならない。今直ぐさういふ時代が來るといふのではないが、君達も油斷をしてはゐられないと思ふな。さういふ時代の來た時、直ぐそれに應じられるだけの準備はして置かなければならんと思ふな。」

「それは大きにさうですねえ。」

二人の會話はこんなことで濟んでしまつた。松竹キネマの蒲田撮影所には嘗て私と苦業を共にした監督や撮影技師が澤山ゐる。私はこの人達の全部にこの問題が考へて貰ひたかつた。併し、それはついその儘に——目前の爲事が餘りにも多忙だつたからだらう——問題にならずにしまつた。

(二) 製作の經驗

皆川氏は單に米國製のフオノフイルムを日本に紹介するだけでは滿足しなかつた。氏は再び渡米して、親しくデフオレスト博士から、東洋に於ける撮影權を讓つて貰つて歸つて來た。

撮影技師としては、當時在米中だつた千葉凱夫君が、デフオレストのラボレイトリで總ての技術を學んで來た。その千葉君は、皆川氏が再度の渡米前、私が氏に推薦紹介した人である。

さういつた緣故から、私は昭和キネマの事業について、何かと口出しをする機會が多くなつた。併し、それは單に意見を述べるといふ程度で、直接自分がこの事業に關係しようなどとは夢にも思はなかつた。皆川氏も亦私の多忙であることを知つて、決してそんな要求は持ち出さなかつた。

さうしてゐる內に、私はふとこんなことを思ひついた。それは築地小劇場の俳優を使つて、試みにフオノフイルムに依る映畫劇を作つて見ようかといふ考へであつた。

私は早速皆川氏に賴んで見た。皆川氏は快く承諾してくれ

た。

「勿論、費用は出來るだけ節約する。尺數も出來るだけ短いものにする。併し、所謂興行價値のあるものを作ることは出來ない。それでも好いか。」私はかう確めた。皆川氏はそれをも快く受け入れてくれた。

發聲映畫の製作法に二つの式があることは、もう今では誰でも知つてゐる。一つはヂスク式で、これは蓄音器のレコオドを應用するのである。もう一つはフイルム式で、これは音波を光波に變じて、それをフイルムの端にプリントするのである。撮影に際してマイクロフオンを使ふことは兩方同じであるが、デフオレストのフオノフイルムは後者のフイルム式の方である。

發聲映畫の製作に關して、私達がまるで無經驗だつたことは言ふまでもなかつた。それ故、この利器を擁しながら、出來るだけ臺詞や物音を少くするやうに努めた。フオノを濫用せずに、利き目利き目に――實際効果の上がりさうな箇所のみに――それを使つた方が却つてよからうと思つたのである。さういつた意圖で作られたコンチニユイチが、フオノフイルムのそれとして貧弱極まるものであつたことは言ふまでもなかつた。

だが、爲方がない。現在の吾々としては――最初の試みとしては――それより外にしやうはない――私達はさう思つて、そのコンチニユイチを元に撮影を始めたのである。

私達は撮影をしながら、いろいろなことを學んだ。

先づ最初に知つたことは、フイルムに刻みつけられる聲なり音なりのテストが豫め出來ることである。それはラヂオと同じ原理で、マイクロフオンを通して、直接ラウドスピイカが移し傳へるところのものを聞けば、ほぼフイルムから出るサウンドと同じものが聞けるのである。

遠寫の場合に、聲が小さくなりはしないかといふ心配も最初はあつた。併し、スチユヂオには澤山のマイクロフオンが備へてあつて、或場合にはこれを高く釣り、或場合にはそれを道具の蔭に隱しなどして、どうにでも人物の側へ近く置くことが出來ることが分つた。と同時に、人物が小さく見える割合に、聲が大きく聞えて、その間のバランスが取れなくなる場合もあることを知つた。

カツチングのことも心配してゐたが、實際やつて見ると、音の波が線のやうにフイルムの一端に現れるので、多少の經驗さへ積めば、音を途中で切つてしまふやうな變のないとは分かつた。

或場合に、繪の方は成功して、音の方が不成功に終る場合が、ある。さういふ時も、細心な注意さへ拂へば、音の方だけを取り直して、全體のフイルムをプリントし直すことも出來ることが

分かつた。

勿論、繪だけの撮影だけから見れば、製作は複雜で面倒だが、最初に心配してゐたやうな音の撮影方面の疑問は、先づ一掃されたと言つてよかつた。

私達は一部分の撮影が終る毎に、それをポジにして映寫して見た。そして、惡いところは取り直すやうにした。

さて、映寫して見て、先づ最初に氣のついたことは、音のある部分の繪が、音のない部分の繪より、特別に「飛び出して來る」感じだつた。

映畫は畢竟二つのダイメンションしか持たないものである。その二つのダイメンションしか持たないものから音や聲が出るといふことは、畢竟「説明者が居る」といふことと同じ結果になりはしないか。先づ最初に起つた疑問はこれだつた。

次に起つた疑問は、ラヂオドラマに對する疑問と同じものだつた。ラジオに於いては、何よりも「聞える」――「はつきりと聞える」といふことが第一條件である。舞台では、目に訴へる部分があるので、はつきり聞き取れない臺詞でも、想像で補へる場合もあるが、ラジオで聞きとれない場合は、どうにも救ひ難いのである。また、調子を張る場合でも、あまり張り過ぎると、ラジオでは聲がわれる嫌がある。從つて、ラジオドラマでは、舞台の上でのやうに、思ひ切つて調子を張つたり、思ひ切つて調子を低くしたりすることが出來ないのである。つまり本式な臺詞廻しは出來ないといふことになるのである。

發聲映畫の場合は、目に訴へる部分が可なり多いわけであるから、本式な臺詞廻しが出來さうなものであるが、やはり生の人間がそこに出てゐるわけではないし、それに、フイルムから聲が出るといふところに見物は興味を持つのであらうから、やはりラヂオの場合と同じやうに「聞える」――「はつきりと聞える」といふことが第一條件になつて來るわけである。從つて、これもやはり、本格な藝術的な臺詞廻しを傳へる器ではないといふことになつて來る。

謂はばフオノフイルムは(ヂスク式のワイタフオンやムウヰイトオンは言ふまでもないことである)、蓄音器などと同じく、畢竟は「聲の罐詰」である。この罐詰がどれだけ藝術的に發達し得るか。その發達し得る程度が映畫その者の藝術的發達に追ひつけないとすれば、發聲映畫劇の前途も危ぶまれるわけである。

それから、もう一つ感じたことは、對話のシインがどうしても stationary (靜止的)になることである。或對話が劇的に高まる爲には多少の「時間」を要するものであるが、その「時間」はいくら短くしても、到底映畫的なカットの中へは縮めら

れないのである。

そこで、私達はかう言ふことを思ひついた。或對話をフォノにして、その對話をする二人のシインで始める。繪の方は直ぐにカットしてしまつて、フォノの方だけ對話を續けて取る。繪の續きは、あとで對話の內容に依つて、いろいろな場面でつなぐ。對話の終る時分に、また二人の姿を見せるといつた遣り方である。非常に注意深くやれば、フォノフイルムでは、かういふ方法がとれるのである。（ワイタフオンやムツヰイトオンに、まだかういふ方法をとつたのはないやうである）

つまり、二人の人物の對話が工場に關するものであつたら、畫面には工場の機械の動いてゐるところだけが見えて、これに關する二人の對話がどこからか聞えて來るといつたわけである。二人の話が日本アルプスに關するものだつたら、日本アルプスの實寫が移動で見えながら、同時にそれに關する對話が聞えて來るといつたわけである。かうでもすれば、對話の場合に、繪が「居坐り」になる弊を除くことが出來はしまいかなどとも考へた。

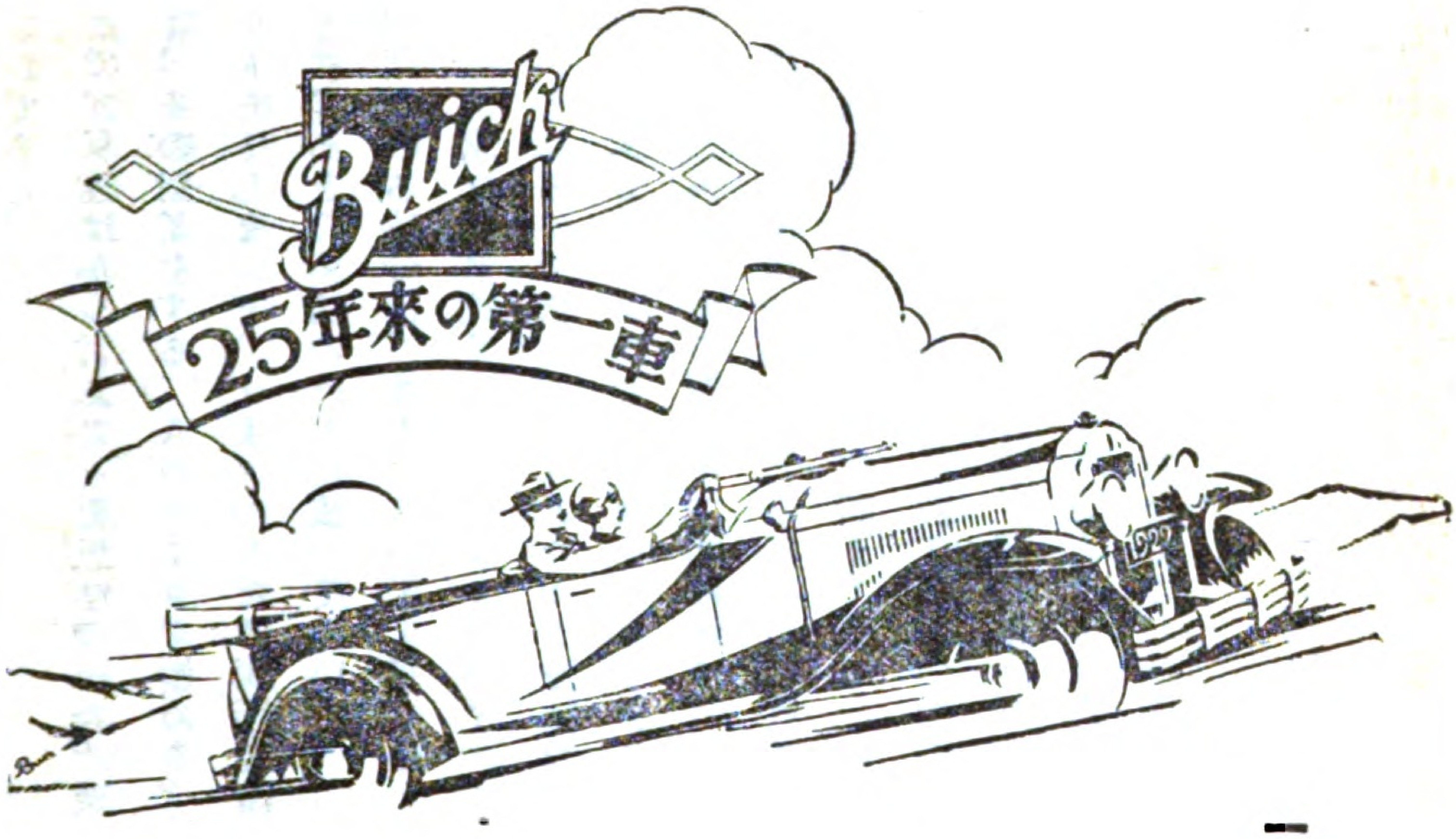
併し、これはまだやつて見たことではない。私達の第一回の試作は寧ろ餘り「音」を節約した爲に、そして、その音がまだ理想的にはひらなかつた爲に、本質的な映畫劇にもならなければ、發聲映畫としての効果を十分に發揮することも出來ない、謂はば中途半ぱなものになつてしまつた。

「併し、まだ私達の試みない一つの道がある。それは、オオルフォノといふ形式である。即ち、今度のやうに時々聲や音を入れるのではなくて、初から終まで、絕えず何かの聲や音を入れる方法である。さうすれば、特別に或部分の繪だけが「飛び出す」やうな憂はあるまい。私達はさう考へて、若し皆川氏が許すなら、第二回には試みにこの方法をとつて見ようと思つてゐる……」

私はその當時、こんなことを書いた。併し、それはいまだに實行出來ずにゐる。その後の双方の事情が變つて來たからではあるが、これはここに說くべき事柄ではない。

だが、今日の私にして見ると、發聲映畫といふものは兎も角も、發聲映畫劇といふものに對しては、もう餘り深い執着は持つてゐない。アメリカでトオキイがやかましくなつたのは、寧ろ私達が日本で最初の發聲映畫劇を試作した後であるが、それが問題になつて來れば來る程、それが盛になつて來れば來る程、私はそれに對して或大きな疑問を持ち始めた。

私は先づアメリカでそれが盛んになつて來た經路を探り、續いて發聲映畫殊に發聲映畫劇の本質論にはひりたいと思ふ。これはまだ、ほんの序說に過ぎない。（一九二八、一〇、一三）



二十五年來の第一車
新ビウイク號の發賣

目下陳列中

一九二九年式新ビウイク號を發賣するにあたり、弊社は又もや斯くも優秀なる新型を提供することにより、過ぐる二十五年間斯界の第一車たるビウイクの歴史に、更に光輝ある一頁を加へることが出來るのを欣快といたします。

此一九二九年式新型は、ビウイク創作二十五年來世界最高のものと認められてゐる工學的原理と機械的設計に基づき、之れに幾多の斬新なる現代的改良を加へて、茲に最もビウイクらしきビウイクを作り上げたのであります。かくして世間已に定評ある本車の價値と作動の上に、さしのぼる旭日の光のやうな一種すが〳〵しき美と氣品とを添へるに至りました。

一度御覽になれば直ぐお解りになりますが、本車設計技師の大膽にして而かも細心なる手腕は、飽まで信頼のできる本車の機構にふさはしき高雅端麗の外觀美を發揮することに成功しました。

自動車通は是非此の新型ビウイク號を御覽にならねばなりません。弊社販賣店の陳列所を直ぐさまお訪ね下さい。

日本ゼネラル・モータース株式會社

ビウイク號はゼネラル・モータースの製品なり

瞥見の支那

（この蕪雜な小篇を在北京の金井清君に呈す）

安倍能成

一

北京に居る親友の金井君が、自分の居る内に一度支那を見に來ないか、と度々勸めてくれた。今年の始にも暖くなると戰爭が起るから早く來いと云つてくれた。前々から支那を見たいと願つて居た私は、この好機會を利用してその宿願を果すことになつた。途中奉天に寄つて舊友と語り、北京では約十日を金井君の居館に厄介になつて、同君の厚意によつて短い日數の割合に有功な見物をすることが出來た。金井君は更に、折角の機會だから、天津、濟南、青島をも一見して行つたら、と勸めてくれた。かうして私は二十日ばかりの旅を滿洲、直隸、山東の間に試みたのである。が、この旅から歸つて落著くと間もなく、やがて北京は益々不安になり、濟南には悲しむべき流血の慘事が突發し、張作霖は非命に倒れた。私は金井君の勸告に從つて、私の旅が際どく時を得たことを喜ばずには居られなかつた。私が北京に居た三月の上旬から中旬頃には、張作霖はまだ總統府に頑張つて居たが、形勢は既に十分不安を見せて居た。濟南を通つた時には、南軍は四十

里を離れた徐州に居るといふ話だつたが、然し在留の邦人は割合に落著いて居た。支那に居ると人はおのづから政治に興味を持つて來るといふが、それは半分は朝に夕を圖られぬ賭事の興味であらう。私自身はこの支那の不安の中に居る一旅人として、頻に孟子の詞を思出して居た。梁の襄王が孟子に向つて卒然として「天下いづくにか定まらん」と問ふと、孟子は「一に定まらん」と答へた。この問答は如何にもその時の襄王と孟子とを眼前に躍動せしめる様な生きた文句であるが、然し天下が一に定まるのは分り切つた事であつて、人を馬鹿にした詞だとも考へて居た。然るに私は親しく支那を見て、この「一に定まらん」といふ詞の意味を具體的に解し得た様な氣がした。支那はああいふ大國であり、南と北とは地勢からも人情からも言語からも著しく異なつて居る。同じ北でも東三省は又東三省で別乾坤を形造つて居る。然るに東三省の專制君主たる張作霖はその安全な巣をのこのこと出て北京へやつて來た。南の方は南の方で遙々と山東の方を廻つて北京を衝かうとする。要するに中原に出て天下を取ることは、所謂軍閥的政治家でも所謂民衆的政治家でもその最後の標的であるらしい。支那ほどの大國でも分立では落著かず、何か知らぬが一つにならずには居られぬ必然性があるらしい。こんなことを考へるのは愚問に對する愚答の愚解かも知らぬが、兎に角私はさう考へた。襄王は更に「誰か之を一にせん」と問うて居る、さうして孟子は「人を殺すを嗜まざる者」が之を一にするだらうと答へて居る。この答が又私には非常に適切に響いたのである。汽車の窓から廣漠とした野原に事もなげに働いてゐる農夫を見たり、北京の往來でギヤンギヤン語り合つて居る市民などを見ると、行きずりの旅人には、惡政、虐政に苦んで居る民衆とも思へない程、春風駘蕩たる顔付きをして居るが、奉天の滿鐵公所の樓上から砲兵公廠にもうもうと立ちのぼる盛な黑烟を指して、あの烟が奉天票を低落させるのだと聞かされたり、當時の張作霖の北京に於ける搾取の猛烈さ、山東の張宗相の苛斂誅求などを聞かされると、軍閥政治家が民衆の怨恨の的となつて、誰でもいい、これに代る者をとの苦しい望にあえぐのは、餘りに尤もなことだと思へる。然らば三民主義を標榜したり、共産主義を主張する新しい政治家は、果してその標榜や主張通りに、民衆の爲の、

又民衆の力を活かす政治を志して居るか。さういふ點に於て舊政治家と本質的に異なつて居るか。支那の現代の政情や思想を新聞紙の卒讀以上に知らない私に其に關する判斷が出來る筈はない。漫然として北京の街頭を往來して居ても、そこに動ける民心の歸趨は中々看取出來る筈はない。私は私の知つて居る若い支那の學人に招待されて南の揚州料理の御馳走になつた時に、北京大學やその外の大學の教授や講師達にもあつた。然し彼等は南方派でも大人しい學者達であつたらしく別に氣焰も吐かなかつた。國民黨に屬する日本に育つた福建の或る青年は、自分達の國民黨員が南方の景氣がよいといつてはすぐ南方へ走り、北京に止まつて劃策する者の少い無氣力を嘲り、張作霖に殺された共産黨の領袖の李大釗が自ら奉ずること極めて薄く、主義に殉ずる態度の立派だつたことを讃へ、さうして私の問に對して共産黨の運動が本當に民衆に根據を有するといふことを語つた。然し又同じ國民黨に屬する東京帝國大學出身の或る法學士は、共産黨の農民運動を嗤ひ、農民は始めは何か旨いことがありさうなことをいふのでだまされるが、仕舞には唯會費を取立られるだけで何の効果もないといふことを氣付くに過ぎないといつた。支那の政治家は新も舊も唯自己の利益によつて動くばかりだ、といふ支那人通の見が眞か、或は新しい政治家に眞劍な民衆的態度を認めようとする新しい人々の見る所が中つて居るか私は知らない。然し眞に人を殺すを嗜まざる、眞に民衆を愛する力强い政治家が出たならば、恐らくは天下は一になるであらう。少くなくともかかる政治家によつて天下の一にせられんことは支那民衆の痛切な希望だといふことは確かであらう。

溫順な支那の農民こそ眞に良民の名にふさはしいものだと聞かされた。恐らくそれは事實であらう。兎に角支那の人民、殊に都會の住民、鐵道の沿線の住民の、人を殺すことを嗜む軍閥政治家の部下の（同じく人を殺すことを嗜む）無賴兇暴な兵士の毒手を恐れることは非常なものである。北京の前門（正陽門）外の大通は、銀座通りの樣に夜店が出て、ぶら〳〵と歩きながら小さな吸煙瓶の色々な時代の見本を集めるのにはいい、如何にも都會としての北京の色彩の濃厚な處であり、その近くの胡同（街路）には商店、劇場、妓屋其他を集めた殷賑な一區である。けれどもこの邊の大道商人は決し

てアンステーブルな平和がいつ破れて兵亂と掠奪が始まるか知れぬといふことを忘れない。掠奪の兵士が襲つて來る時、彼等が荷物を片づけて居留地の方へ逃げる素早さは驚くべきものだといふ。いつかこの邊の劇場で兵士が唯で無理に入場しようとするのを見た士官が、立所に兵士の首をはねてその劇場前に晒した珍事があつたさうである。この時その邊の商家が店を閉ぢた手際の敏活も實に感嘆に値したさうである。生きる爲にはかういふ技術にも熟達しなければならなかつた支那の民衆は實に同情に價するが、然し踏みにぢられても轍の下にしかれても直ぐその後から後から芽を出す雜草の樣にこの不安と混亂との中に、平氣で——少くとも平氣らしく——生きてゆく支那人の生活力も亦驚異に値するといはねばならない。

兎も角も支那は動きつつある。新しい善い支那が生れるか否かは分らないとしても、何れにしても著しく變りつつある。青島から大連の船中であつた南支那からの歸客は、南方殊に廣東に於ける青年男女のハイカラ振りの思ひ切つて居ることや、又廣東の市區改正が斷々乎として簡明直截に遂げられつつあることを語つた。私が國境の鴨綠江を渡つて安東から北京に至るまで、到る處の驛に見たものは「哈德門（ハーターメン）」といふ卷烟草の廣告であつた。哈德門は北京の崇文門のことである。私自身は滿洲と直隷との曠野を貫いて安東と北京とを連ねるこのペンキ塗の哈德門の廣告に、多大のシムボリカルな興味を覺えた。さうして今や支那を擧げて次第にペンキ化しつつあるな、と思つた。多くの輕薄や半可通や皮相や流行やを通じて如何ばかり眞に新しい生命が流れつつあるか。舊國なる支那に幾何の新たなる命ありと見るべきか、これは現代の支那に對する最大の關心事でなければならない。

二

始めて北京を見て先づ感じたことは、我々の親んで居た世界とは全然違つた世界へ來たといふエキゾチツクな感じであ

つた。殊にあの古い大きな城壁の古い大きな城門を列をなしてゆつくりゆつくりと出入する駱駝の群を見た時に、私は北の方に擴がる索莫たる蒙古の野を北京に結びつけないでは居られなかつた。さうしてこの思は私を遙かな深い旅情へ誘つてくれた。かういふ氣持は日本の都會に於ては決して味ひ得られぬものである。

私の意外に感じたことは、北京が實に樹木に富んで居ることであつた。私は綠樹が少くて黃塵のみが多い大都會を想像して來たのであつたが。唯戰亂と風塵とを避ける爲に早く來た私は、不幸にして新綠の北京を見ることが出來なかつた。私は到る處に青白い幹を持つた一種の氣味わるい美しさを持つた白松の綠を見たのみであつた。少くとも私の記憶には外の綠は殘らなかつた。足一歩を城外に出ると兩側を石垣で固めた道は殆どなかつた。道は不規則にそがれ、そこには黃土の斷面があらはであつた。かうした投げやりの道の側に灰黑色の磚で固めた塀をめぐらした家の門の側に、娘らしいのや主婦らしいのが立つて居たりする景色も、人の氣持をのんびりさす所はあつた。私は平生殊に人間がぐぢやぐぢやして粗末な人工のゴタゴタと煩はしい日本の都會の景色を厭ふて居るから、一層こんな感じも强くするのであらう。北京の狹い胡同の屋敷町は、やはり灰黑色の磚で作つた塀が建て續いて、その色は如何にも慰みない樣な氣がするが、大きな館の門の朱塗の扉や、その前に置かれた鐵金の唐獅子などの色彩はその爲に一層引きたつ。支那の到る處で見る紅いつやつやした色の串ざしの駄菓子賣や、姆につれられて遊んで居る支那の子供や、殊に時々道の側に橫臥してものうげに睡いて居る駱駝などは、この小路の情景をやはり棄て難いものにしてくれる。觀物として私の興味を引く街頭の景物はやはり古い支那のものが多い。眞中に格式の高い門を建て、左右に廻廊の樣な翼を連ねて、そこに大きな材木を一つ二つの飾の樣に橫へた材木屋にしても、店の眞中の高い所に關帝を祭つた食料品屋にしても、兎に角その裝飾には藝術的な或る美しさがある。それにつけても私の考へることは、現在日本の都會に建つて居る普通の商家位、薄つぺらな、どんな意味に於ても美しい所のない建築は恐らくあるまいといふことである。

北京を見た人は、誰しも「偉大なるデスポットの都！」と思はぬものはあるまい。それは兎に角偉大な都である。偉大な人間的作品である。けれどもその背後に强大なデスポットを想はずには居られない。城壁を見ても、城門を見ても、喇嘛敎の僧侶を養つておいた雍和宮を見ても、道士の棲む白雲觀を見ても、天壇の紫壁を遠望しても、大成殿を見ても、國子監を訪うても、そこには過去のデスポットの影が濃厚に浮んで來る。殊にその紫禁城に入つて、恐らくは世界に類のないであらう所の、あの大規模な宮殿を見る時、誰かデスポットの力の跡を思はずに居られよう。支那の新人達はこのデスポットの産物なるが故に、この偉大なる作品の價値をすら認めず、唯嫌惡の念のみが起るといふ感慨を洩した人があつたと聞く。けれども私は支那の新人が、デスポットの作品なるが故に、唯それを毛嫌して、或は手を加へてそれを破壞したり、又自然の崩壞力に任すことなしに、進んでこれを活用することを希望したい。その手本を我々は歐羅巴の古い文明國に於て十分に見ることが出來る。實際この都の古い建築は、單にそれがデスポットの作品であるといふ理由によつて棄て去られるには、餘りに偉大であり、貴重である。

けれども人から聞いた所によつても、私の見た所によつても、支那人は一向建築の保存には心を用ゐぬらしい。或人は舊いものを保存することをしないのを支那人の性質若くは習慣そのものに歸して居た。私にはそれは斷定し難い。舊い建物の保存せられないのは、一面からはこんな偉大な建築も唯デスポットの肆意によつて作られ、そこに民衆の欲望が基礎となつて居ないことに原因するとも考へられる。即ちデスポットがその暴力によつて無理に作つたものは、デスポットが居なくなれば、直ぐその支持を失つてしまふ。又そのデスポットの意志そのものに民衆的要素が少く、從つてその作品も民衆の生活と交渉する所が少ないといふこと、更に又兵亂の不安に惱まされる民衆、又は無知な民衆にはこんな作品を味ふ興味も餘裕もないこと、その外色々の原因が考へられるであらう。その理由が支那人自身にあるといふよりも、殊に現時の情勢がそれを許さぬと考へる理由も恐らくあり過ぎる程ある。

然しその理由は兎もあれ、事實北京の大きな建築は大方その廢滅を急ぎつつある。殊に喇嘛教の寺には、帝室の保護を失つたせいか、頽廢の跡が著しい。黄寺は固より雍和宮もさうである。支那のかういふ建築で目立つことは、釉薬の色の一向あせぬ碧瓦や黄瓦の間から荒草が亂雜に生えたり、又瓦だけ新しい色をして屋根は傾き、梁や柱が無殘に現はれた姿である。紫禁城も、袁世凱が近く重修したといふ太和殿や、その後の中和殿、保和殿、その兩翼に書畫と陶器とを陳列した文華殿、武英殿などには、頽破の姿は見えないが、故宮博物館の諸の宮殿にはもうそれが著しく見える。二百年（？）來人がはいつたことがないと斷はつてある一邸などには、何か特殊の歴史があるのかも知れないが、殊に哀れを覺えたのは、澤山の樂器を陳列した暢音閣の屋根が傾き、樂器は塵を蒙り、さうして磬が打たれぬに風に鳴つて居たことであつた。

宮城は黄瓦を以て葺いてあるが、この黄色が澄み渡つた青空と映發する色は何ともいへず美しい。又壁はぐるりの高い塀も大きな門のも皆赤黑い色を以て塗られて居る。このあくどい程濃厚な色彩が一向あくどくもなく、却て建築の大きさと重さと厚さとに調和して居ることを見ると、その背後に大規模な藝術的構想を考へずには居られない。私は景山の上から太和殿の一聯を中心とした百ではきくまいと思はれる程の宮殿の甍を目の前にした時にも驚いたが、表門の午門の次にある太和門内の太和殿の一廓の眺位、人工の大きさと美しさとを見せるものも少いと思つた。この彩壁と樓門とによつて圍まれた一境の廣さはどの位あるか知らないが、餘りの廣さに距離の目算を誤る程だといはれる。それは全體舗石を敷きつめて、そこに寸地も見えず、又一木もない。殿の前庭に美しい曲線を畫いた金水河と稱する溝があり、それに渡した單弧橋も、その河の兩側も、皆大理石の欄干を緣付けられて居る。殿の形は二層の屋根を有する比較的簡單なものであるが、そのどつしりと落着いたシムメトリイは見る眼に快感を與へずにはおかぬ。さうしてその上り口の階段、その周圍の欄干は同じく大理石を以て作り、これが前の金水河と共に何一つ自然を交へない純人工的なこの廣大な建築に何ともいへない優美の効果を與へて居る。黄瓦、紅壁、白欄、さうして空には澄みわたつた青空、この偉大なる諧調を作り上げたこ

の宮殿の建築者も亦偉大だといはねばならない。

日本の建築はそれに配合せられた要素として自然、殊に樹木や山水を等閑視し得るものは殆どない。然し支那には西洋に於けると同じ様にかうした自然を交へない純人間の世界を作り上げた建築が多い。そこに兎に角人間的欲望が日本の建築よりも濃厚に現はれて居る。私は西太后の離宮だつた北京近郊のあの有名な萬壽山を見た時にも實にこの感を深くした。あの昆明湖を湛へた庭園は實に廣大であるけれども、それは人間の造つた庭であることを濃厚に思はしめる。三層の佛香閣の下に大きな方形の石垣を置いた格好は、寧ろ醜な位であるが、それが烈しい人間的强行の産物であることは直に首肯せられる。我々はその極彩色に色どつた湖邊の廊を歩いたり、宮殿を覗ひ、回廊を歩み、段階を登りつつ、西太后がそこに試みたであらう放縦な神をも人をも恐れない樂欲の行爲を想像したりしたが、兎にもかくにもこの廣大な離宮の中には、極樂を地上に實現しようといふ意圖は實に歴々と覗ひ得られる。自然と合一しようとするのでない、人間樂欲の世界を無制限に堅固に作らうとする欲求である。それは結局はかないものではある、然しそこに兎も角も旺盛な人間的欲望の記念碑は認められる。これを日本の金閣、銀閣の奢りなどと比べるがいい、そこに時代の相違はあるにしても欲望のあくどさ、强さは到底同日の談ではあるまい。

三

北京はデスポットの都であり、支那は專制政治家の舞臺として恰當な國であつた、少くとも過去に於て多くの場合さうであつた。然らば支那の民衆は無力であるか。それは一應はたしかにさうの様である。けれどもデスポットが如何に歌つても民衆が踊らなければ何事も出來る筈はない。早い話が唯北京の宮殿だけを見ても、如何にデスポットの支配力が强いとした所が、全然無力な民衆が果してあれだけの大きな建築を造り得るであらうか。支那の民衆は意識的に自分で自分の力

を操縦し得ないであらう。然しそれは自然的に力を與へられて居ないのではあるまい。唯彼等は彼等自身の力を彼等自身によつて統一し集合することが出來ない。それが出來るにしても狹い範圍に限られて居る、彼等は彼等の力を自覺しない、けれども彼等の力は彼等の知つて居るよりも遙かに強いのだ。かういふ觀察は果して許されないであらうか。私は武英殿内に乾隆時代の多くの絢爛な磁器を見た。その各が皆藝術的に作品であるといふのではないが、然し兎に角豪華を極めた作品である。私はその時も思つた。乾隆帝（假にさう見る）の强制か激勵かがなかつたなら此等の作品は恐らく出來なかつたであらう。彼等は乾隆帝の鞭撻の下に乾隆帝を喜ばさんが爲にこの作品を作つたとも考へられよう。然し又乾隆帝は無名の作家をしてこの作品を成さしめる爲の操師として誰かより大なる操師に操られて居たとも考へられる。デスポットの下にも民衆の力は存外無視することは出來ない。

支那人の生活力の旺盛といふことは誰しもいふ。細かにいへば支那人にも地方的區別があつて何處の支那人もさうだとはいへぬのかも知れない。けれども我々には一般的に支那人がさうだといふ風に考へられる。生活力の旺盛の現れは一方には勤勞力の强大と他方には享樂欲の熾烈若くは執拗であらう。支那人の生活力の旺盛なことは足一歩國境を渡つて見ると支那人の樣子と朝鮮人の樣子とを比較しても直ぐ分る。寒天の下に蒲團の樣な寛濶な藍色の服を著て、赤ら顔をして悠揚と働いて居る支那人を見ることは、確かに不快でない。私は滿洲で聞いた「支那人は目的がはつきりして居る、それは金を儲けるといふことだ、日本人はそれがぐらついて居るから到底かなはない」といふ話を面白く思つた。實際大連では日本人の馬車屋は皆競爭に負けて止めてしまひ、日本人專門の豆腐屋も鼎屋も支那人のものになつてしまつたさうである。然し支那人の目的ははつきりと金にある、利益の爲には命も惜まない、といふことは唯金といふことだけで解釋し盡されるであらうか。私は支那人の生活の目的は金にシムボライズされては居るが、それは實は支那人が勤勞そのものを愛することとの標徴ではないか。さうして勤勞を愛することは畢竟ぢつとして居られない生活力の現れではないか。金の上にも金と

それを追求して止まないのは、實に本能的に强いその生活力に引きまはされて居るのではないか。單に金を愛するといふことだけで、人間はさう一生懸命になり得るものであらうか。日本でも生活力の强い鄙吝なといはれる程勤勞を尊ぶ地方に一面に宗教心が根强いといふ樣な現象は、同じやうなことを語つて居るのではないか。支那人のこの原始的本能的な根强い勤勞力、やがて生活力は滿洲を征服しようとしつつある。さうして朝鮮人は疲弊し、內地人は不景氣をこぼして居る朝鮮にも着々として然も確實に根を下しつゝある。文明的經濟的組織の中にこの原始的な勤勞の勝利は果して何を語らうとするか。かういふことが或は近い將來の大問題となりはしないかと思ふ位である。

享樂欲の滿足に止まらず、それまで發達しないもう少し手近の生活欲の滿足といふことについては、支那人は勝れた生活術の體得者たることを示して居る。先づ食物である。鐵道の驛で賣つて居る食物を見ても、確かに日本の色々な品數を名目的に並べたに過ぎない辨當などより遙かに實質的である。鷄の丸燒、肉饅頭、肉汁、それからパンに似た色々の穀粉製の食物など、兎に角腹に應へさうなものばかりである。勞働者の食ふ堅パンの樣なものも日本人が食へば復を痛めるさうだが、然し非常に實質的に力を著けるものだとの話である。北京の有名な料理屋でも四五度御馳走になつたが、料理は非常に旨く、營養は十分の樣な氣がした。(私は二十日ばかりの旅行に疲の少かつたことを支那料理のせいではないかと思ふ位である)、珍味は澤山あつた、唯然し部屋はやつぱり汚い、食器も立派ではない、給仕人も殺風景なものである。三百年の老舖だといふ料理屋のメヌーはこれも三百年立つたかと思ふ程油にしみて居た。支那通の話では器物の立派な料理屋もあるさうだし、又一說によると料理屋の料理はまづいので、本當の旨ひ料理は大官とか富豪とかの御馳走でなくば食へないといふことである。さういふことは私は知らない。けれども兎に角支那の料理屋が旨い身になるものを食はすといふ當面の目的に直進して、日本の料理屋の樣に附帶條件をやかましくいはない、といふ結論は下してもよささうである。

料理の序に、北京へ行く誰もが試みる正陽門外の正陽樓の成吉思汗料理と稱する(多分は蒙古系の)料理は面白い。そ

れは大きな火鉢の上に頑丈な金網をかけ、その上で大切れの羊の肉を炙つて、好い加減に焼けるとそれをこの店の秘傳とかいふきさんだ生葱を配した一種の三杯酢の様なものにつけて食ふのである。羊の脂肪がエホバの祭壇の如くもうもうと上るので、それは室外の庭で炙られる。火鉢を置いた台に六七人が片足をかけて、この原始味の豊かな料理を食ひ合ふのは愉快なことである。雪片がちら〳〵と降る夕べなどにはその味は一層深いであらう。善だとか美だとかいふ字が羊から來たといふことを始めて解し得たのは、私にはこの料理の賜物であつた。

濟南を歩いて居る時だつた。或る狭い賑かな街で、ぷん〳〵と豚の脂の香がすると同時に、商家の軒にかけた禽籠の禽がやかましく鳴いた。私はその時に此ある哉、と思つた。さうして支那人は豚肉を食つて鳴禽を樂むものだ、と獨語してひそかに得意であつた。しかし兎も角も支那の町には豚の香がきついと共に、鳥の聲も多いことは事實である。北京の宮城の濠の側を何か円形の風呂敷に包んだものを持つてゆつくりと往來して居る人物に何人も出會つた。あゝして小禽を鳴かせて居るのだと聞いた時には、その悠々たる閑日月を持つて居るのに一驚を喫した。實際富豪などの小禽の贅澤になれば日本人の想像以上だとも聞いた。これは然し金持ばかりではない。午門の上にある歴史博物館をK氏の厚意で閉鎖中に拘らず見せてもらつた時、一人の老翁が古銅器の文字の拓本をとつて居た。その側には支那流の細高い土製の風爐に鐵瓶(?)の湯がたぎつて居たが、今一つ何かここにふさはしくない聲がする。耳をすますと蟋蟀の聲であつた。彼は小さな蟲入れのこの蟲の聲を聞きつつ、人のない廣大な巨室の中に獨り靜かに働いて居るのであつた。K氏は顧て「かういふ所を見ないと支那人は分りません」と語りつつ微笑した。支那人が蟲入を懐に暖めて蟲に冬をこさすことや、小禽に藝を仕込む根氣に至つては、到底日本人の及ぶ能はざる所だといふことである。

私はこんなことを想起しつつ支那人の自然に對する態度を考へる。例へば我々が支那人の勝れた山水畫に見る様な、一口にいへば汎神論的な心持、即ち自然と人間とを一如にした様な境地、然も同時にその底に流れる雄渾な暢達な氣力、一

れは或は豚を食つて悠然鳴禽を聽く生活と同じ種類のものではないか。山水畫でなくても、例へば寒山拾得に見る一種の超脫味といはば圖太さとは、日本人がいきなり畫き得る境地とは思はれない。然も支那へ來て見ると乞食の中にも、生きた寒山拾得の姿を認め得るではないか。こんなに考へると支那の高士なんていふ連中は、皆盛に豚を食つた樣に思へて來る。陶淵明だとか、竹林の七賢なんかもきつとそんな人間だらうといひたくなる。豚を食つたか食はないかは暫く措いても、生活力が强くて餘裕がなければ悠然として南山を看る境地は中々生れて來ない、と考へるのはあながち無理でもあるまい。

支那人の享樂欲の滿足の社會的な現れ。こんなことも支那に興味を持つ者には確かに問題になる。さうして私の見聞から速斷すれば、支那人は日本人よりも遙かに衆と樂しんで樂むことの獨り樂して樂むにまさることを解して居る樣に思ふ。例へば北京には茶館といふ西洋のカフエーの樣なものがある。多くの人は自分で茶を携へ、そこでそれを入れてもらひ、點心をかぢりつつ半日をゆつくりと談笑するといふ。それは實に安價な享樂的社交的機關である。各個人がお互に無關心で居てさうして全體の空氣を樂まうといふ社會的訓練は、西洋人と同じく日本人よりも或は發達して居るのではないか。日本人は多くの場合固く小さくなるか、傍若無人に周圍を亂して憚らないかである。個人主義とそれに基づいた社會的訓練に於て、支那人に學ぶべき點がないともいへなからう。

最後に考へることは、この支那人の旺盛な享樂欲と儒敎との關係である。私は此點に特に興味を持つて、あちらでも多くの在留日本人にこの問を發して見た。然し支那の世相が皆さうである樣に、この問題も亦簡單に論理通りに片づけられさうにも見えない。私は唯ここに私の頭の中に往來した二三を書きつけるに止めておかう。我國人の常識としては儒敎は可なり禁欲的なストイックな嚴肅（リゴリスチック）な道德敎となつて居る。或人はこの一面を見て眞の儒敎は却て日本にのみ存するといひ、支那人の中にもさう考へて居る人があるさうである。然し儒敎の本來からいつて、儒敎は果してそんなに固苦しい禁欲的なものであらうか。儒敎はむしろ實際的な、現實生活に即してそれに秩序と方向とを規定しようとする敎であつて、その

理想主義的要素も人間自然の本性を調整しようとするにあつて、これを抑壓して此か彼かときめつけようとする程烈しいものではない。女を見て色情を起す者は姦淫する者なり、とは說かないで、慾情のその常規を逸すること、堦を越えたり缺隙を鑽つたりすることを禁じて居る。かういふことを考へれば支那人の享樂欲と儒教とは其程兩立し得ないものでもない、と考へも出來る。或は又之とは反對に享樂欲の强い支那人であればこそ、荀子流に禮を以て之を制する必要があり、その役目を儒教が務めるのだといふ解釋も成り立ち得なくはない。又他方面から考へれば、儒教は長い時代の力で支那人の生活に滲みこんでしまつた、さうして支那人を反省せしめる警策たるよりは、寧ろ支那人其者の生活様式（マニール）となつてしまつた、さういふ無意識的若くは半意識的な風習として僞善だとか矛盾だとかいふ小うるさい詮議は抜きにして通用して居る、そこが日本などと違ふ所だ、つまり日本では儒教は餘所行きの氣張つたものであるが、支那では樂な日常生活となつて居る、とも解せられよう。更に又進んで考へると、支那人は日本人よりも一層複雑であり、づうづうしくて物を氣にしない所があり、儒教は儒教、生活は生活といふことをちやんと心得て、その間をよろしく平氣にやつて居られる、ともいへよう。又もう一つ考へて見ると支那では儒教はもう形式的になつて支那人の生活を支配する力はない、事實近頃の青年などは儒教を時代遲れとして、之を冷然として否定して居る。そんな問題はてんで問題にならないともいへよう。最後にそれは形式としても士大夫、讀書人だけのことであつて、一般の民衆の間には色々な民間信仰があつてそれが彼等を支配して居る、儒教は此等多數の民衆を支配する力を有しないとも考へられよう。私はその何れに定むべきかを知らない。ここに思ひつきを記して識者の敎を待つ。

支那人の個人としての生活力の强さ、その彈力の豐富は、支那人をして壓へればひつこみ弛めれば膨れしめる。支那人はこの點に於て無氣味な不死身の性を持つて居る。けれどもこれは同時に强い力の前にはちぢみ上り、相手が弱いと見ればむやみにのさばるといふ厭ふべき性質ともなつて現はれるであらう。何といつても國土が廣く、資源が豐かで、人間の生活力が强い支那の前途は、實に我々の前に置かれた興味のある謎でなければならない。


寫眞材料界ノ
權威
アグファ
製品ヲ推薦ス
東京市麹町区丸ノ内仲通
十四号館五号
アグファ合名會社
大阪市東区南久宝寺町
四丁目七号地
アグファ合名會社



唐人お吉

——らしやめん創生記——

十一谷義三郎

——これ人倫部に入るべきか、畜類部に入るべきか、決しがたき動物の名なり。

（嘉永明治年間録）安政四丁巳四月の條に『亞人下田滯留中閨娼風說』の條あり、「亞人下田に滯留中、ハルリス儀、當五月より同所坂屋町きちと申藝子一ケ年給金百二十兩の仕切にて當金二十五兩にて召抱へ、柿崎村へきち休憩所出來罷在、毎夜玉泉寺へ通ひ候由、ヒウスケン儀はふじ九十兩、是又毎夜玉泉寺へ通ひ候由」——中略——未だラシヤメンの名無きが如きも、日米始めて通商條約を結びしは安政元年三月にして、國人皆外人を鬼畜視する際なるに、きちふじの二少女が、夜々玉泉寺へ通勤せる勇氣に驚く——石井研堂氏著「增訂明

治事物起源」八〇四頁

——武州横濱にて西洋人の妾となる女を異名して「らしやめん」と云ふ。哆囉を俗に羅紗と云ふ。之を織るに綿羊毛を用ゆ。綿羊は俗にらしやめんと云ふ。洋人犬を堂に上し又己が閨房中にも臥せしむ。國人誤て洋夷は犬及び綿羊を犯すと思ひ、その犬羊と同じく處女の夷妾となるを卑しめ、雜夫假名を付て羅紗めんと云ひ初しが遂に通稱の如くになる。此名目後人思ひ誤らんことを思ひて序に爰に筆す——喜田川守貞著「類聚近世風俗志」下卷一六六頁

一　唯一つある家

潮の狂ふ灘を右と左に控えた「追分け」——通船證と安息を求める豪快な渡り鳥が、毎日夥しく寄つて來、それらに女や墓地を賣ることによつて二世紀半ほど、賑かに生きて來た港町——別に物資の集散地などと云ふそれ自身の繁榮理由を持つわけでなく、たゞそんな、受け身の、字義通りお天氣次第な繁昌を幸運につゞけ、そこに自然と生れる刹那主義的な美徳と、また幾らかの惡徳とに、すつかりもう無神經になつてしまつてる町。

町で第一の商品——女——とその市場や、いや、細かい「町の心理」の照り曇りは、多分「唐人お吉」が語ることにしておいて、ほんのうわ水の二三滴を拾つてみても、生娘の破瓜をおほつぴらに商賣にしてる老人が、金を溜めてゐたり、涙壺を大小いく通りか支度して、他人の葬式に出かけ、金次第で泣き分けをする悲しい女商人が、立派に暮してゐたり、かと思ふと「あぽてえけ・ふあるまげんと」と、横文字の置看板を見世に据ゑた蘭藥屋が、新式過ぎて寂しいハイカラを誇つてゐたりする——妙な町。

町のすぐ前の、小灣を仕切つた古風な波除堤の松の間を、毎日、潮に洗はれた大きな朝日がのぼる。うしろは、嵐氣の冴えた低い山波で、それを喰み出た若い女親の乳房の形をした小山が、月にいつぺんづつ滿月を吐く。白絽の帶のやうな

三間道路が、その太陽と月の光に染まりながら、この小さな港町を「都大路」式に、格子に刻んでゐる。もし、手持ち無沙汰な獨善家が、町の生活に脊中を向けるなら、晩鐘も、暮雪も、晴嵐も「八景」は、馬鹿らしいほど手近に整つてをる──

さうして、そんな、いつも明るく、高く、澄んだ空の下に、濃藍色の灣の水と、青い丘と、水光り（みびかり）のする河とにとり卷かれて、八百軒ばかりの家が長方形に蹲くまり、持ち前のピクチヤレスクな生活を、呼吸してゐるのだが──その家が、どれもみんな、この戸外（そと）の明かさに無關心で、むしろ白眼視すると云つた風な、或は變に憚えた相貌を呈してゐる。まるで、かぶと蟲みたいな、脊の低い、鎧はれた土藏造り、もしくは、苔や魚鱗に蒼びた草家ばかりで、あの破瓜師も、淑賓りも、後家の内職の達磨宿も、料亭も、船宿も、そのほか、農工商いつさいの生活が、この二いろの、先祖累代の「墓」で營まれ、太陽（ひ）や風や月が、身輕に沁み透るやうな、すつきりとした家は、一世紀に一度も來ぬ海嘯のあとの、假小屋にしか見ることが出來ない。それさえぢきにまた、執拗に、石と土に鎧はれ、もしくは厚ぼつたい藁屑に蔽はれて、その子へ、またその子へ……

「江戸」の沁みた小柄な女主人が、こんな海港町へ懷郷病をひきおこして、山駕籠に揺られて戻つて來、町外れの丘寄りに、「新歸朝者」らしく、誇らしい「寮（ヴイラ）」を建てゝ住んだ。

何かきりぎりすでも這ひさうな華奢な出格子と二階の連子、青桐の葉の落ちて來る舟板塀、その前に、好來客（エルカムゲスト）専用の切り戸、表の入口の土間の、ちりめん磨きをかけた衿脱、その奥に天窓の懸け障子の明るい勝手、そちこちに晒し竹、胡麻竹──

これはむろん、この海港では驚嘆すべきニュー・スタイルで、八百軒にたつた一軒の家で、さうして彼女も──たつた

一人の女だつた。

明治は、そこにありながら、まだ神秘で、あの「花旗國（アメリカ）」へ漂うていつた播磨の舟乘りが、硝子の大姿見の魔術に眞蒼になつて立ち畏縮んだ時分のこと――女が、まだあの團扇型の唐金の鏡を翳して、しな〳〵と手へ來る封建的な重味を苦にしなかつた

女主人は、封地の關係から、選まれて江戸の伯爵級の大旗本の屋敷へいき、そこで、ほとんど四分の一世紀以上を、「おろかな」出世に過した。彼女のその半生を、ほんのカード式に締（シメ）てみると――

初め彼女は、お屋敷の、ものものしい鈴の口の奥で（大旗本家の二重じまりになつた奥と表の境ひうち）、令孃の「御相手」をしながら、金蒔繪式な教養と、くだけた市井の遊藝とをみつちり習得した。

やがてその令孃が結婚して、屋敷に新しい主人が出來、同時に彼女も、白髮の冷い老主人に從つて下屋敷に移り、其處で、その死期を前にした彼のために、ほんのしばらく、ベツドを暖めた。むろんこれは、彼女にとつて、最初で、また最後の、經驗だつた。

老主人の死後は、永らく、實に半生の大部分を、彼女の「名譽」と娶に浸りながら、新夫人のために、家政婦兼話し相手となつて暮した……

つまりこの女主人は、あの――女＝相ナシ――という、極度に非現代式な女性觀を、まつたく文字通りに裏書きして、魂の底まで沒表情な半生を送つたのだが、そんな生活への反抗が、ちりめん皺と一緒に、ひとりでに果敢ないホーム・シツクのかたちをとつて目醒めて來て、とうとうまた海港へ戻つて來たのだ。

身寄りは殆ど無くて、お齒黑のかすれた舊娘仲間が、船宿の帳場や草屋根の下などにそちこちくすぶつてはゐたが、それらも最初のうちは、何かしら彼女の「出世」に氣壓されて近寄つて來ない。時たま名主とか菩提寺の和尙が訪ねて來る

くらいで、また稀に、浦賀から海港の御用所へ來た江戸侍が、時世粧のゴシップを持つて來ると云つた風で、その日〳〵の氣持ちの掃け口に乏しく、江戸の長い手紙に親しんだり、短冊を汚したり、葛籠の底の紋染表紙の合卷や、時に花櫚木の三味線を弄つたりして、その「たつた一軒の家」で、「出世」の豫想外な寂しさを味はつてゐた。

だがこのまゝでは、結局、四分の一世紀餘りの貯金と、可成りな退職手當と、それに出世を持ちにして、寂し死に死んでしまふのがお終ひで、そこで、ふと好い思案を考へつき、それが、考へれば考へるほど、唯一つのものに思へて來て、もう何もかもなく實行にかゝつた。

子供――女――を培ふしごと。

必しもそれは「教育」を意味しない。また正しい善良な後繼者を殘さうとする地道な企てゞもない。彼女は、彼女が一生かゝつてとり遁したあれを、そこに幾倍にもしてとり戻さうとかゝつたのだから。

永い禁慾生活の根强い反動――內輪に上品に氾濫した艶な陽氣さ――が、彼女の皺んだ眼ぶちにこぼれ出して、彼女は、その「人形」漁りに夢中になつてゐた。

――お吉が、こんな「おばさま」の手に拾ひあげられた。

おばさまのこの「寮」から、町を對角線に拔けて、海港の一方を扼した小丘に登らうとする坂下町の端に、萎びた草屋根に一八花の生へた船大工の家がある。屋根のつまに苔が垂れ、柱が鈍く歪み、爐緣の土はぼろぼろだし摺り切れた疊に古茣座が入りまじり、まるで、死にかゝつた中風患者のやうな住居で、その狹い、闇い、家のうちに、若い夫婦と、彼等の妹――お吉と、彼等の赤ん坊とが、腐つた椽さきの、蔬菜畑の眩しさに眼を細めて、蠢めいてをつた。

曾て若い一人の船大工が、一人の船大工の娘と、このぼろぼろな爐邊に結婚式をあげ、鈍くだるい生活を蠢めきつゝ

け、どぶくろを少し許り過量に呑んで、姉娘とお吉とを産み、何の夢も見ずに、襤褸のやうに一生を終つていつたその家――さうしてその姉娘が、また此處に一人の若い船大工を迎へ、彼の得る銀三匁（約五錢）の日當で生活し、赤ん坊をこしらへ、もしどうでも、異人式に彼等の墓碑銘を刻むなら

――在世中ソノ兩親ノ生活ヲ忠實ニ踏ミ行ヒタル二人コヽニ眠ル――

若い亭主は、終日船造り場へいき、歸ると青海波錢單位の安道具の夜なべで、精も根もつかひ果し、女房は、家うちのいつさいの仕事のほかに、季節によつて、青海苔を繩へ、あさくさ海苔を簀の子へ、それぞれ天日に乾したり、蔬菜畑に出たり、結局二人とも疲れるだけ疲れ、彼等の兩親のした通りに、やつぱりどぶろくを少し許り過量に呑んで、さうして行燈の油皿の伴奏が始まると、やつとその日一日中での初めての、同時にまた最後の、微笑みをとり交す……

もう傳統的な「暮し」の重たさが若になつて、激情の泉に蓋をしてしまひ、家うちでも、また外に向つても、反感や發憤の巣くう隙が無く、從つて、ほんの限られた周圍からも、先代通りに、たかだか好人物扱ひにされるか、むしろ、默殺されることが多かつた。

お芥子の伸びたのを糸屑で絞つた幼いお吉が、こんな芽の無い生活の下積みになつて、もし機會が、氣紛れな手を彼女へ伸ばさなかつたら――いや、それはそれでまたよかつたかも知れない。

姉の疲れの沁みたもじり半天が、半分に裁たれて、お吉の肌を蔽うてゐた。義兄の紺のめくらの股引が千裂られて、彼女の脚を包んでをつた。それらと共に、勤勞が、當然彼女の手足と脊中へ纏ひついた。海苔掻き、草捲り、ムツキの濯ぎ洗濯、どぶろくの使ひ、それに、赤ん坊の甥が、始終彼女の骨の柔かな脊中をみしみしと壓してゐた。もし姉が寢つくやうな「天災」が來ると、この小さなお吉が、たちまち大人になつて、乾草を煎じたり、食器を洗つたり、麥粥の上わ水を赤ん坊の口へ啣ませたり、そんな役目を、もうひとかど勤め終ふせた。

此處では、子供らしい罪も、またそれへの罪も、むしろ贅澤だつた。怒鳴り、叩き、縛るなどと云ふ暇も、必要も出來てこなかつた。傳統的な勤勞と、傳統的な貧しさが、いつまでも瓦斯のやうに家うちに溜り、それをお吉も一緒になつて、無意識に、無抵抗に、默々と、呼吸して生きてゐたのだ。だからお吉は却つて——却つて、憫れも、うしろめたさも、僻みも、いつさい知らないで、ほどの好い天眞さをそのまゝ伸びてゐた！

彼女は彼女の勤勞の合ひ間に、貝殼に赤い糸屑を通して、赤ん坊の腰へ、守り袋に吊る下げた。蘿蔔の花に反古を被せ、草の莖の帶を結んで、大事に胸に抱きしめた。さうして、表の軒下で、または裏の脊戸口で、無心に空を見上げて、脊中を揺りながら、透きとほるやうな聲で子守歌をうたつた——

隣りも船大工、その隣りも船大工。大工町と名のついた海港の勞働者街の、低い草家が坂を下へつゞいてゐて、夜になると、夜なべの鉋と槌の音が、丘の松風を縫ふて、すい・すい・とんと聽えて來る。赤ん坊の寢つきがわるい時には、姉のふところから、お吉がぢきにひつしよつて、表の刎ね椽へ出、巧者な節廻しで、高らかにうたふのだが、それが風の都合で、この勞働者街に沁みわたり、時折り遠くの戸障子が明いて、髷の刷毛先を散らした首が覗き、夜なべの音がちよいと亂れ、またすい・すい・とんと急がしくつゞいてゆく。

さうして偶然こんな場合に、家の前を通りかゝつた男は、思はず微笑を浮べてお吉に近づいて來、その垢も何も月に洗はれた小さな顏を覗きこんで、ふいと彼女の美相にうたれ、それから、別に惡怯ぢもしずに、眸を見開いて、こちらへ微笑み返す素直さに、一層ひきこまれて、脊中の赤ん坊にまで愛撫を投げて、あゝあゝあの娘は！と、何となく快いあと味を、ちつと噛みしめながら、別れて行く

上り框に默火つてゐる窶れた行燈のあかりをうけて、土間の鉋屑の中に蹲くまつてる義兄が、お吉の唄に、ぼんやりと考へこむ。

――五兩！五兩と云ふ大金が、お吉を女衒に渡したらはいつて來る。見どころがあるから氣張るとあの男は云つた。手許に置いても先の長い話だとあの男は薦めた。苦界どころか、あの兒の出世だと請けあつた。何を馬鹿な！と俺は撥ねつけた………何を馬鹿な………五兩！………あゝかゝあのやつ！せめて髮でも結つたらどうだ。せめて帶でも締めたらどうだ！なんだ、俺の股引を刺してゐるのか！……何を馬鹿な！なにをばかなと、おれは、はねつけた――

すい・すい・とん…………

――八年四兩、と機屋（織物工場）の人買ひは云つた。四兩！だが俺はことわつた………これが女郎と云うぢやなし、年期さへ濟めば、立派に働きのある娘にして返しますよと彼奴は云つた。馬鹿な！その時は、蜀黍粉で骨と皮だけと俺が云ひ返してやつた……四兩！と指を四本俺の鼻のさきへ竝べたつけ………これが女郎といふぢやなし………いけねえ、だれが義姉を金でなんぞ！………四兩………いけねえ………ほう、あんなところに月が！壁がいつのまに落ちたんだ！？――

すい・すい・すい…………

女主人のあの氣紛れな思案は、名主などの口を通してぢきにぱつと噂になり、あちらこちらから獵運家が顔を出して、それぞれ「人形」の候補者に精一杯花を飾つて持ち込んだが、どれも彼女の氣に入らず、結局、出入りの大工が、ひとこと、ふと、お吉の評判をし、それがきつかけになつて、すら〳〵とことは片づいた。

女主人は、神信心にかこつけて、三四度、あの船大工町へ足を運んだ。髮は裏扮りの毛卷き茶筌――クエスチオン・マークを右へ倒して叩きをかけたやうな恰好のあの裏髮！――帶は平たい手套のやうな前結びにして、婢をつれ、いかにもお高く、そのくせ、こんな彼女に特有の、處女みたいな含羞をほのめかせて、古びた草家の多い「勞働者街」へ入つてい

き、丘に近いお吉の家の前を通り過ぎながら、それとなくその「銀三匁生活」を觀察した。

いちど、皆が留守で、お吉がひとり刎ね椽に凭れて、脊中の赤ん坊へ獨り言を云ひながら、草花のあねさまを作つてゐたが、そこへそつと、穢れのうつらぬほどに寄つていき

「姐やは、唄が上手だね。うたつてごらん。」と低聲で云つた。

お吉が、垢ずんだ顏を仰向けて、名主さまの奥さまよりまばゆいおばさまを、しばらくまじ〳〵と見上げた。それから急に、無邪氣な禮儀心を起して、誰かの「お通り」の時のやうに、地べたへ膝まづかうとし、赤ん坊の重味によろけてやつとそのまゝぴよこりとお辭儀をした。そしてまた顏をあげて、ぢつと笑ひながら、おばさまを見凝めた。

おばさまは上機嫌で

「唄をうたつてごらん。」と小聲でまた繰り返した。

すぐにお吉が、好きな得意な子守唄を、赤ん坊を揺り〳〵うたひ始めた。眸をまつすぐに、嵐氣の明るいなか空に据ゑて、もう偉いおばさまも何もなく

――オ江戸チヤチンチン縮緬ソダチ…………

おばさまは、少し頬を紅らめて幾度も點首き、さうしてお吉の掌へ、紙包みを落して引き揚げた。あとで、お吉が、その包みの中から、まわりに花びらのついた長方形の銀片をとり出し、それを草の莖で吊して、赤ん坊の眼の先へ振つて見せ

「ほら、嘉市(赤ん坊の名)、綺麗ねえ。ほら、何んだろ、これは?貝より、よつぽど、綺麗ねえ。」と話しかけたのだが……

……二十五錢銀貨は――「錢」ではなかつた。

その後二三日、例の出入りの大工が、使にたつて兩方の間を往來し、その結果、おばさまが、ふだんのまゝのお吉を

一晩あの舟板塀の圍ひうちへ泊めてみて、細かい「下タ見」を完全に終つた。

おばさまは、彼女を、湯殿へ一緒につれては入り、眉の剃りあとを確めながら、足の尖まですつかり洗つてみた。さうして、一人の女が、こんな子供でさへ、身に持ち得る「垢の分量」に、頭痛がするほどびつくりし、それから、やつと動悸を抑えて、この驚くべき蔽ひをおとしたお吉を、改めてぢつと見なほした。

江戸のお屋敷の鈴の口の中で、そこに使はれる娘の目鑑きを、二十年餘り、自分の仕事の一つにして來た彼女で——平べつたい爪も、しこつた胴と指も、怒張した歯グキも、太い鈍い髮の毛も、ぼこぼこと擴がつた鼻も、そのほか、ちよいと見てすぐ眼につくキズはもちろん、どんな生れつきの弱點が、どんな細かい技巧と用心とに隱されてゐやうとも、それを見逃す彼女ではなかつた。それはもう、あの馬市の買ひ上手が、馬の性行と病癖とを、たちどころに看破する、あんな辛辣な眼を、始終若い娘たちに注ぎつけて來た彼女だから。

そんなおばさまが、いま、可憐な分別と、女の子らしい飾り心とから、糠袋の痛さをぢつと耐へて眼を伏せてるお吉の、からだぢうを弄り廻したのだ。

「少し瘦せてるやうだが…………あゝこゝは、暮しの所爲ぢやない！」

お吉の片ッ方の、肉の薄い耳たぶを、華奢な指の端でつまんで、滿足らしく微笑みながら、さう彼女が、お肚で呟いた。

事實、それが、この「人形」に發見された、ほとんど唯つた一つの欠點で、ほかには、髮にも何處にも、影ほどのクセも無かつたし、足の裏にも、土踏まずの凹みが、ちやんとなだらかに附いてをつた。

かうして、見違へるやうに綺麗になつたお吉を、おばさまは、お屋敷時代の名殘りの白絹の襦袢に包んで、柔かな夜着の中へ入れた。頭の方のしるしに、緋ちりめんを匂ひ袋の形に縫ひつけた敷布團——紅絹とツムギのふんわりとした、い

くらお吉が悶掻いてみても、汗ばかり滲んで來て、いつこうぴたりと感觸の來ぬ、美しい寢床へ――
お吉はすつかり上氣せて、眼をぱちぱちさせてゐた。
飾糸のたらりと垂れた枕に、爍々と片頬を載せて
「お母さまは？お父さまは？…………」とそんなことを、それからそれへ、おばさまが、隣りの床から問ひかけた。
そしておばさまは、いつの間にか、彼女の「思案」を好い心持ちに追ひながら、眠りに陷ちていつた。
おばさまの質問が、だんだんうつゝになり、口の中で消え、遂に靜な寢息の音ばかりに變つてしまふと、そのあひだぢう、床ん中で、何かしら懸命な氣配りを、小さな頭で凝らしてゐたお吉が、生れて初めての惡性な疲勞にどつと包まれあとは何もかもいつさい夢中で、たゞ眠りに眠りつゞけたが…………………
しばらくすると、その彼女の、幼い首が、兩手が、兩足が、全身が、みんな反射的に、その場違ひな寢床を排擊し始め、天鵞絨の枕は外れ、紅絹裏の夜着はめくれ、下のツムギは皺だち、さうして袂の大きな白絹の寢卷を半分脫けかゝつた彼女が、そのまゝ、とう〳〵疊の上へ轉げ出て、其處で、やつと、ほんとうの安靜を得たらしく、スヤ〳〵と寢息の音をひゞかせた。
夜なかに、おばさまが、ふと彼女の寢言に眼を醒まし、急いで起きあがつて、この小さな叛逆者を、辛つと胸にひきずつて、もとの寢床へつれ戻した。
そしてウト〳〵すると
「むウう〻……」と微に呻き聲が起り、ぱつと冴えて
「痛いよ、痛いよ、引張ッちあ！……ね、ね、唄を………」と何か次第に低く、と思ふ間に、ぢきにまた、全然無意識な反射運動が催うして來て、彼女の上半身が、ぐい〳〵と乘り出してゆくのだつた。

「どうおしだ、え?」とおばさまが、もう一遍床を整へ、彼女の紅い汗ばんだ寢顏を、優しく覗きこんで訊ねた。

お吉は、それに、うつすらと笑ひ、そのまゝ寢入つた。

それが、しばらくたつと、またそれで……おばさまは、床の上へ起き直つて、溜息をついた。

「この兒はまあ、どこかゞ疾いのかねえ!?」

こんな夜更けの苦勞の味を、「出世」と釣り換へにして、いまゝで來たおばさまで、初めは、あんまりなお吉の「無作法」に茫と呆れ、それから變に珍らしくなり、お終ひにはつい可愛くさえなつて、世話のついでに、無心な口もとに見惚れたり、桃色の掌を弄つてみたり、だんだん引き込まれて、重い彼女を斜に膝へ載せて、二人つきりの、その、有明のともつた部屋を、そつと見廻したりした。

だが、それもいつときで、彼女はせい〳〵息を切り、生あくびを嚙み殺し、へとへとに參つてしまひ、幾度目かを最後にして、とうとう夜明けまでひと息に眠つてしまつた。

そこでお吉のからだが、むろんまた床を脫けて出、白絹の寢卷をさんざん揉みしだいて、片身をぴたりと疊にくつつけ、まるで自家の、古莫座と木綿と帆の切れつ端の、あの寢心地の好い寢床におさまつた氣持ちで、朝まで、靜に寢つゞけたのだつた……

「下タ見」が濟んだあと、女主人が、さわやかな石爐の傍に坐つて、薄茶の匂ひを嗅ぎながら、彼女の思案をまとめた。

お吉のあの薄い耳たぶを差引いても、あれほど筋の好い美相は、ちよいと珍らしい。それに第一、貧しい女親が、萎びた手を差し出して、こちらの弄愛を牽制する心配がない。それからあの、姉夫婦、あの好人物らしい扶養者らもよい。いつも、物欲しさうな顏をしずに、たま〳〵與へると、しみ〳〵物よろこびをする、忠實な牝犬のやうな二人……また依怙

地に毛を逆だてたり、謙遜しながら貪つたり、うるさく寄つて來る親類の無いのも、何よりだ——

そして、彼女は、まるで、いつぱし眼ハシの利く淑女が、氣紛れに、孤兒院などへ出かけていき、理想的な彼女の「人形」や、彼女の「奴隷」を掘りだした時の、あんな風な誇らしい悦びをよろこんだ……

かうしてお吉が、海港で「唯一つある家」へ、ふいと天上した。

まつたく水の違つた生活が、お吉の前にあつた。

彼女の髮や額が、何かしら意氣込んだおばさまの指先で、毎朝、涼しく、美しく扮られた。しつとりと襟まで垂れる廣袖が、絶えず彼女の足もとに縺れかゝつた。彼女の紅いろの細かい爪先が、おばさまの暖い掌の上で、屢々きびしく垢の檢閲を受けた。さうしてそんな美粧が、彼女のこれまでのあの勤勞のいつさいを封じてしまつた。

瞼の少し皺んだしかしまだ張りのあるおばさまの眼が、しよつちう若々と彼女の顏を覗きこんで「おばさまの好い兒におなり！」と命令した。

「おばさまの好い兒」は、鈴の音の聽える糸桝を持つて、この青桐を植ゑ込んだ家屋ん中に、溫和に、品よく、籠つてゐねばならぬ。戸外は、賤しい、怖い、惡い、人々の街だから——もう子守唄はいけない。子守は、ねんねこを被たオケラだ——水仕事や、走り使や、身の廻りのことは、みんな「好い兒」のすることではない。それは、腰のしこつた下婢の仕事だなどと……………

それから、毎日、彼女は、おばさまに連れられて、お湯へはいつた。あの薄暗い軒端の葭簀の間から、湯煙りが往來へ洩れてゐる、あんな、彼女の見馴れたのではなく、杉戸がちんと閉つたいつかのお湯殿で、——そん中で、そこらぢう、ひり〱と、おばさまの思ふ存分になり、もう頰ッぺたの皮も張ち切れるほどに茹だつて、やつとあがると、また、もの

ものしい鏡や蒔繪の櫛笥が彼女の細い膝をキシませるべく、待ち構えてをつた。

そのお粧りが濟むと、ひとしきり、笑つてみせたり、立つてみせたり、あちら向いてみせたり、などとおばさまの少し浮きたつた脣のひるがへるまゝに、顏や姿をつくつてみせねばならぬ。

寢床は、おばさまの例の絹夜具の中へ一緒に潛つて、息の生ま暖い、腰の冷いおばさまに、ひつたりと抱かれて寢た……

…………

移つた最初の四五日は、かうした疲れと、おどろきと、小供らしい氣配りとで、好い俱合に痺れて、彼女は、たゞおばさまの手に素直に操つられて過した。そのうちに然し、四邊への意識が少し冴えて來、と共に、何かしら幼い生活感が催うして、たとへば、青桐の上の夕明りの空や、勝手もとの朝のひゞきや、またおばさまの手が彼女を離れた瞬間ふいと沁みて來る孤獨、そ云つたものが、あの一八花の生へた草家のまぼろしを呼んで、繫帶や脣に殘つてる惰性が、子守唄の影を追ひ／＼細かく脣へだす。

「あゝオケラだ！　ねんねこを被たオケラさ！」とおばさまの口吻を眞似て、眉の無い額をさも／＼仰山に顰めたが、すぐその底から、赤ん坊の甥の泣き聲が、遠々しく聽えて來、脣に、脊中に、忍びやかな旋律が滲み、ふとまた、その「罪」に氣づき、眼ぶちを紅くしながら、おばさまを偸み見るのだつた。

彼女が顏を洗つたり、襁褓を濯いだりした家の前の流れの音が、雨聲のやうに、耳の邊りにたち罩めることもあつた。すい、すい、とん、と、夜なべのひゞきが、何處やら手近を掠めて去くこともあつた。

それらが、彼女の精一杯な自制に、だんだん執拗く絡んで來、音の無い笛のやうな溜息と一緒に、小さな疑問が、怯々と彼女の眸の先へ芽を出すのだつた。

「みんな賤しい人かしら？　赤ん坊も賤しい人かしら？　まあ赤ん坊が怖いんでせうか？……」

だが彼女は、何かしら慌て、兩手に抱えた糸鞠へ急いで耳を押しつけて、中の鈴の微な聲へと氣を外らした……

「おきち、おきち、」とおばさまの呼びつゞけるのが、ひゞかないで、疊の表に、時折り、小猫を呼ぶやうな音がした。すつかり夜伽のつもりのおばさまが、たあいなく眠り、お吉が、紅絹裏の蔭に、澄んだ眸の先へ指尖を縺れ合せて、ひとりゐた。銀砂子の散つたむさし野唐紙や、漆の好い簞笥などの面を、お吉の赤い子供帶が、ふら〳〵と音もなく過ぎて、表の出窓へ消えてゆくことがあつた。また庭の南天の葉が、彼女の細い銀磨きの髪飾りの上に、ぢつといつまでもそよいでゐたりした。

うつすらと透きとほる彼女の瞼の肉に、とき〴〵、青貝のやうな煌めきが宿り、それを、熱心な美容師のおばさまが、汗と一緒にして、さつさと仙女香で塗り隱した。

おどろくべき愼ましさで、いまゝであの「夜の無作法」を制して來たお吉であつた。それが、當然また始まつた。

「お吉はおばさまの好い兒だよ。いゝかえ、お吉。」と、おばさまが、寢床の上で、有明け行燈に品格を整へて「好い兒」の倫理と法律を說いた。

「おばさま、此處へも、明日から、帶をして寢ませう。」と、お吉が、自分の兩脚を叩いて、弱々しい笑顔をあげた。

「まあ、この兒は！」と云つたきり、おばさまは、お吉の胴を抱き締めて、好い兒〳〵と眠りに陷ちた。

だが、明日の晩も、その次の晩も、お吉の亂れ方は、一層劇しく、病的に募つていつた。その都度、おばさまは、胸をつかれ、股を蹴られ、びつくりして起き上り、また「好い兒」を繰り返して、寢るのだつたが、ある夜半、お吉が床の中で絕え入るやうに身を悶掻き、例の如く跳ね起きて調べると、いつの間に、どうしたのか、お吉の足首に、赤い糸の輪が、二重に嵌つて、ひしと肉に食ひ入り、兩脚の自由を、慘めに抑へてをつた。

「お吉や、お吉や………」とおばさまは、彼女の汗ばんだ髮やそこらを撫でながら、たゞわけもなく呼びつゞけたの

だつた――

小さな魂が、こんな風な消化不良をわづらつて、瞳子が寂しく攅まり、頬も熱ばみ、何處となく全身に過勞のあとがにじんでゐたが、おばさまの眼は、絶えずまるで、生れて初めて、天職を見つけたかのやうに、晴れ〴〵とこのお吉へ靡き、變に紅味の殘つた脣は、また根氣よく彼女へ「好い兒」道の講釋をつゞけ、それから、その指尖は、ちやうど花作りが花弄りをやめぬやうにせつせとお吉の上に動いてゐた。

――あのよくある消息辭のついた、いつも、二三行で濟むことに、卷紙の一尋半は潰す美文章家、あんな憐れな、寂しい、有閑(ひま)なおばさまで、彼女はあつた――

間もなく、然し、お吉の弱り方が、愈々はつきりと表へ顯れ、さすがのおばさまも、お吉の手應(てごた)への稀薄さに氣づいて、急にうろたへ始め、居間の隅へ、例の美しい寢床をとつて、彼女を無理にその中へ押し入れ、さうして枕許につきつきりで、車前草の實と、萬金丹と、それから齒ごたへの無い精底維、眞白な、子守唄嚴禁の、市松人形などを與へた。

「どうだえ。お吉?」と、何度も、何度も、彼女は、彼女の顏を覗き込んで、小さないてふの髮や耳たぶを、愛撫しながら訊くのであつた。

「起きませう。おばさま。」

「いゝえ、でもおまへ、頬がこんなに!……ほら、こゝもこんなに――」

「でも、どこもわるくは無いんですもの」

「いけないよ。好い兒は、そんな無理は……あゝ、おばさまが、三味線を彈いてみやう。」

で、おばさまは、三味線をちんまりと抱えて、例の横クエスチオン・マークの洋髮を、揺り揺り、低聲(こごゑ)に艶を浮かせて、爪彈きするのだつたが、それが、偶然にも、お吉のいつとう好い催眠劑となり、そこで、翌日も、またその翌日もと、つ

づけられた。

そのうちに、お吉の、ちぐはぐな「天上の亢奮」が、やうやく鎮まつて、何か正體の知れぬ諦めと、朧氣な希望とが入り混つて彼女のうちに起り、さうして彼女は、おばさまの、その、庭の照り返しを湛へた眸の、すぼんだり伸びたりする具合を、床ん中で、そつと口眞似したりするほど、活氣をとり戻してをつた。

やがて、床が拂はれ、「おばさまの好い兒」らしい修學が始まつた。讀み、書き、三味線はむろん、そのほか、おばさまの身についた高級な澤山の初學階梯――

ふた月ほどのうちに、お吉は、すつかりイタについて、おばさまを悦ばせた。もう彼女の足は、そらぞらしく畳を反撥しなくなつた。彼女は、その上に、指尖を揃へて、折紙のやうな禮儀を示すことが出來た。また、彼女は、姉を敬稱なしに幾度でもコキ使うと云ふ可なり困難なシゴトを覺えた。

そこで、初めて、この「青桐の植わつた牢屋」の、つや〱とした沓脱に、緋ちりめん緒の黑塗りのぼつくりが、時折り、くつきりとした影を印し、お吉が、小さな紋紙の日傘の下に、おばさまに手をひかれて、わざと、人影の尠い方へ散歩に――

海の男等の死骸や、難船を引き受けて、腹を切つた侍などで賑はつてる寺が、この小さな港町の脊中に、それぞれかつちりとした構へを持つて、數多く竝んでゐる。おばさまは、その一軒の方丈でお茶を呑み、お吉は、そんな墓の間の草花を摘んで、獨り言を云つたりして戻つて來る。

家の前を三四町ゆくと、町の北から波除堤内に流れ込んでる河はゞ四十間ばかりの渡船場で、それを渡つて黑い岩山の下を少しゆくと、島の青々と散つたこの港の小灣が展け、そこに、しばしば難破船の破體や、浮き荷、沈み荷、などの餘

背な奪ひ合ひの起る砂濱がある。その砂を踏んで、おばさまが、まぶしさうに歌などを考へ、お吉が、船と、船大工と、船大工町の一八花の生へた草家を……いや、彼女は、貝殼を目凝めて、盛んにお喋べりをする――

兎も角、「賤しい」街は、當分禁斷のお吉だつた――彼女には、「五錢生活の垢」をすつかり落して、「好い兒」になる義務があつたから…………

二　黑船神經・屯田女隊

「花旗國（アメリカ）」の「ヘロリ大將」が神奈川沖へ來た年の暮――

白髮少しばかり、脂肪は可なり殖えたおばさまと、緋鹿の子のばらと根に見える、あの一八五〇年代の高島田を持つたお吉とが、いつまでも唯一軒の、あの青桐の家にあつた。

お吉は、もうおばさまから、享けられるだけの教養を享けてしまつた。大きな假名文字の「むかし、おとこ」の物語、れんれゝれつれと折り返し（リフレイン）のついた戀慕流し、それから甘い美粧術と氣取つた女禮、お上品な Tea-ceremony、そのほか、おばさまのお屋敷時代のストックは、いつさい、新鮮な吸取紙みたいに吸收してしまつた。

それにまた、彼女は、そんな風に、おばさまを消化（こな）すと同時に、おばさまのあの目鑑き通りに、もしくは、彼女の入念な「培ひ方」の結果、美くしく花開いてゐた。

時代的に、テンポ不足で、少しグロテスクでさへあるが、一八五〇年代の、美人市場の最高標準は

――色白キ中ニ光（つや）アッテ中肉（ちうじし）ニシテ肌理濃カナリ〇面（かほ）ノソナヘ少シ方長（おもなが）ニテ髮ノ生際綺麗ニ尺長（たけ）ク光（つや）アッテ黑シ〇眉ハ三日月ナガク髮ノ生際ト眉トノ間マタ眼トノ間セマラズ〇眼細長ク魚尾（まなじり）下ラズ釣ラズ烏睛（くろたま）大ニシテ中ニ光（ひかり）アッテギラツカズ〇鼻梁（はなすぢ）サシ通リムツクリト高ク孔（あな）小サク闊ク向ヨリ見レバ孔見エズ〇口小サク脣イタツテ紅ク紅粉（べに）ヲサシタルガゴトシ齒大

小ナク白ク光アリ○耳大ニシテ聞クシカモ厚ク肉アッテツネ〳〵海紅色ヲ含ムナリ………

たゞお吉の耳は、おばさまの下夕見時代の缺點を持ちつゞけ、肉の薄く開いたあの不幸な開花耳で、それから、俘ヘチ〳〵チラ洩れる齒列びが、淡い親しみを呼ぶほど亂れ、それが缺點と云へば云へたが、ほかは、この標準に當て嵌つた。殊に、薄朧のやうな微た弛みを細く横に曳いた瞼の間に、大々と澄んでる黒眼は、何か清冽な魂の芽のやうで、非花旗國式ではあつても、必ずしも一時代のものではなかつた。

で、その全國的に、黒船神經のたつた年の暮――

此の海港にもヘロリ再渡來の不安な豫感が漲り、それが土着の海港人や出入りの船乘りたちの胸に、たとへばあの地球壞滅の風說が惹き起したやうに、神經病的な反作用を起して、海港のひとかどの船宿や料理屋はもちろん、貧しい寡婦の内職の達摩宿（席料二錢八毛也）にさえ、この年の瀨に狗の皮の三味線が亂調子にひゞいてをつた。

例のかぶと虫みたいな家ん中で、影に怯えてゐたひと組が、そんな雰圍氣につゝ突かれ、何かしら心細い怙衆意識を起し、町の名主や「年寄」まで擔ぎだして、ある料理屋の二階で、盛んな遊藝會を催した。それが、名主を通じて、やつと、偉いおばさまを動かし、その結果、ふいと、「人形」が、街の人々の前に、彼女の歷史的なデビウを持つた。

あの寮からは、始終、稽古三味線のひゞきが流れだしてゐたんだし、また時折り、それがやむと、お吉の姿が「好い見らしく」街へ顯れて來て、船大工町の方へ水々しく過ぎたんだし、從つて、彼女の生地の好さや、またおばさまの手の彼女への細かい動きは、もうみんなが充分に承知してゐたが、それにしても、このヘロリ遊藝會のお吉はおどろきだつた。

第一に彼女を包んだ飾り――

もし卒直に算勘的な比喩で云ふなら、たとへば、彼女の髮飾りは、この海港町の助役六人（年寄六人衆）の年俸合計を遥に超えてゐたらうし、彼女の帶は足輕五人を優に一年間「飼ふ」ことが出來たであらう。またもしそれらに、その裾の

花やかな晴着やその他を合せたら、西の遠州灘から東の相模灘を乗り切つて江戸へゆくあの壯快な帆ばたきを持つ廻船が、たちどころに出現しさうに見えた。ヘロリ大將のまぼろしに、一時的にもせよ刹那主義に陥ちてゐたみんなも、この黄金が鳴るやうな、飛び離れた濶達振りに膽をうたれたのだつた。

それから、ほんのツマのつもりだつた彼女のあけがらす——

その聲は、曾てあの勞働者街へ流れた子守唄が、年と共に清純に伸びたものだつたが、それが、旅び人通有のあの見聞自慢を封じるに充分なほどの美聲で、ちやうど廻船問屋へ來てゐた他國の手代や、また、千石積んだ渡り鳥の船頭らが、「あゝあの明烏」と、その時うけた感銘を、家への買ひ物と一緒に、潮の向うへ運んでいつた。

かうして彼女は、むしろその夜の番組全部を浚つてしまつたのだが、時が時だけに、みんなの歡呼は狂風のやうで、——當然、それが、おばさまへひゞいていつた。

黒船神經にのつたおばさまの好い兒のデビウ！

おばさまは、もう、訪客の尠い石爐のそばに、ぢつと屈んで、お吉に見惚れてるだけでは物足りなかつた。藝術家が自分の製作の評判を貪りに、人寄りのする中へ出かけるやうに、彼女も、大急ぎで、縞チリメンのハンテンをこしらへ、婢をつれて、あの青竹の先に木綿の小旗がひらひら出てる、垢まみれの——錢湯へいつた。

さうして、案の定、彼女は、そこの脱衣場で、ながしで、またざくろ風呂に茹だりながら、みんなのお吉への讃辭を貪ることが出來た。

で彼女は、それから當分毎日〲、金蒔繪式な硬さを變に崩して、錢湯通ひで、序に、その流し場で、少し恐縮してる常連の「海港藝者」を捕へて、京白粉の品評をやつたり、江戸の水、丁字香、伽羅油そのほかの褒貶など、精々若々しいゴシピングをゆつくりと樂しんで歸つて來る。始終こまごま美文を江戸へ書き、お吉の爲に、江戸のア・ラ・モオドの美

粧法への知識を磨いてゐた彼女であつた……

おばさまの、お上品に限られた交際圏が、こんなことから、急速に、ずうつと陽氣な方へ擴がり、つまり錢湯の常連「藝者」が、いつの間にか、そのままおばさまの方の定連となり、また友を呼んで、それがしばしばあの舟板塀の、好來客（エルカム・ゲスト）木戸を潜つて、飛び石を飛んで姿を現すやうになり、そのうちに、またおばさまが氣紛れて、彼女らへ三味線の稽古をつけたりし始めた――

おばさまの好客來！

このお客さんらは、此處特有の六錢二厘五毛の地獄と似たり寄つたりで、たゞ彼女等はみんな自分の家を持ち、それが二種類に分れ、甲種は世帶人で、乙種は――令嬢だつた。

乙種は、別に外交辭令でなく、文字通りに、中産階級以上の令嬢で、此のお天氣繁昌の港町では、未婚の處女を、「藝者」させることは、兩親の愛兒教育の原則で、つまり「藝者」は、令嬢達の、女大學で、女今川だつた。さうしてそのツトメは、甲種の一本暮しと一緒で……甲種を見やう。

都市計劃式なあの三間道路が、土と石を錯うた土藏家と、藁と石を具足にした藁家の家波を、幾ツかの長方形に分けてゐるが、そのどれか濱寄りの一ツをとりあげて、その家と家の間に、地圖以下の隙き間を見つけて這入つてゆく。左右は壁の代りに背の高さほど積みあげた、じめじめと青んだ石材。そこを抜けると、人は多分共處に、雜草に圍まれた共同井戸の歪んだ撥ね釣瓶を發見し、さうしてその廻りに不規則な距離に、朽ちた、小作人の住みさうな藁小屋――石と土で作つた壁連子の太い、豚小屋か物置のやうな平屋――それに向う家の黒い下見板を張つた脊中――も少し細かく見れば、そちこち日溜りに海苔やもろ鯵が干してあり、地上に大根が數へるほど屑を出し、そして家の附け根を赤黒い蟹が走つてゐるのが眼に寫る。やがてその欝陶しい平屋の間半の戸障子が明き、若い化粧した女が姿を現す。眞赤な前掛け、眞赤な

褌、素木に眞田緒のすがつた下駄をつつかけた足の踵が、皮膚が硬まり、細黑く皮裂れてゐる。それがちよいと空を仰いで、雲の動きを考へ「あゝ西風だ。」と多分氣がついて、相模灘を乘つ切つて來る菱垣船の威勢の好い動揺みを感じ、急にいそがしく先刻の露地を表へ出てゆく——そのあとのしんとした中へ、片方の藥小屋の椽先きから、やつぱり若い女が萎びた藺草履の上へ降り立ち、海苔やもろ鯵の簀の子を片づけ、それから、大根を一本引つこ拔いて井戸端へやつて來てごしごしと洗ふ。さらしの綿服、おなじく巾の廣い前掛け、前掛けの紐が質實に帶の代理をつとめてゐる。やがて大根をぶら提げて、彼女がその小屋の、投網などを片寄せた表勝手へ消え込む。そして暫くすると、小屋の中から、客を呼ぶ淸掻きめいた、三味線の音が、しやんしやんと聽えて來る…………

なほ退屈しずに彼女等の生活を追ふなら、人は、あの赤前垂に赤褌の女が、すでに二階の連子の短い、下の間口の鰐口に薄暗く開いた船宿へゆき、其處で、もう實に節倹な、實に忠實な、同時にしんみりと陽氣な、そんな家庭をその一室に作り出してるのを見る。彼女はふんどしを濯ぐであらう。彼女は米を磨ぐであらう。むろん彼女は唄ふであらう。始終また彼女は、媚びと微笑を忘れないであらう…………かうして彼女は、「彼」の滯在中、船御番所や問屋の用事を濟ませて別れてゆく最後の瞬間まで、極めて短い期間だが、この理想的な家庭を營みつゞけるのだ。彼が去ると、むろん彼女は第二の彼を迎へ、そこにまたあのつゝましい善良な營みを繰り返し、彼も亦充分に滿足して、少し許り彼女への回想を持つて去り、更に彼女は第三の——兎も角、彼女は、かうした此町特有の美德をつぎつぎにつなぎ合せて生活してゐるのだ。いやよく見ると、彼女にも、もつと花やかな、紅燈的な一面がある。それはあの藥小屋の女だが——彼女が赤褌で出かけなかつたのは、「彼女の船」が入港なんだからで、その代り人は、その夜、彼女がほとんど奇蹟的に盛裝して、銀簪、口紅、水色鹿の子の襟など、ひとかどの「町藝者」になつて、あの穢苦しい藥小屋を出、海港で第一流の料理屋へ這入ていくのを見たであらう…………

屯田兵式な、こんな彼女らが、毎日朝の間、三味線を抱えて「唯一つある家」の好來客門を潜つた。

さうしてその文机などの澄んだ場違ひな座敷で、上機嫌なおばさまの稽古をうけるのだが、おばさまは、何度も口を濕し、頬を染め、喘ぎ、そこでお吉が始終、代りに唄つたり語つたりし、みんなもその方が樂で、お終ひにはお吉を先生にしてしまひ、おばさまはたゞ傍にゐて、

あゝ彼女は髮が薄いとか、あゝ彼女の鼻は曲つてる、あゝあの眼は……などと例の目鑑きを、つまり、逆にお吉の夥しい美點をほくほくと數へ、そしてお吉の聲に聽き惚れてをつた。

稽古が濟むと、ひまな屯田女隊がゐ殘り、おばさまを取り卷いて、精々上品な雜談をやる。そこへ、お吉が、時によつて茶をたて、みんな恐縮して、口べりの青い泡を手の甲でこすりながら、折々云ひ合うのだつた。

「お吉さんみたいな人が出られるとねエ………」

「なにを………」とおばさまを盜み見て「でもほんとに何んでもお出來だからねエ。」

「いまだにお客に云はれるのさ、あんな明烏を語つて見ろつて。」

「ほんとうさ。お吉さんが出られたら、どんなにか肩身が廣いだろ。」

「あゝ。それこそ船がつくよ。」

「なんの……黑船がつきはしませんか。」

さう嬉しさうに口を挾んで、おばさまが、も一度、お吉へ眼を細めるのだつた。

だが、こんなことを考へるのは、あながちに彼女らだけではなかつた。お吉が、時々、おばさまからの姉や妙への贈り物を持つて、わざと一人で、あの義兄の草家へゆく途中、ほんの七八町だが、その道筋で、左右の二階から、見世うちから、また行きずりに、何度彼女は聲をかけられるか知れない。

「お吉さん、お吉さん、ちよいと寄つて、唄を聴かせて下さいな。」

お吉はその都度彼女の湛大な眸睛をそちらへ微笑んで、そのまゝ行き過ぎる。いちど、船宿のお神が飛んで出て、彼女を捕へて、無理につれ込まうとした。

「えゝ、おばさまに訊いてから。」とお吉はお神をまともに無邪氣に見て答へた。

「おばさまには、あたしがお斷りするから、ね、後生だから、是非一度お吉さんの唄が聴きたいと云ふお客さまがあるんだから。ちよいと寄つて、ほんのちよいとで好いのよ……」

「えゝ、でもおばさまに訊いてから。」とお吉は動かずに繰り返へした。

「そんな……ねえ、ねえ、恐いことも何んにもありはしないんだから。」とお神は彼女の手をそつと引張つた。

お吉は不思議さうにお神を見凝めた。

細筆できりつと輪廓をつけたやうな顏——どこにひとゝころ呆けた隙がなく、もし意志と氣持ちを宿したらそのまゝ尖銳な表情となつて靜にすつと現れる、——それにもう第一階級的な被布にさえ馴れた彼女で、その彼女の顏を眞面目に感應けて、お神は思はずとらへてゐた手を放し、さうして何んのこだわりもなくまた微笑んで別れてゆくお吉の、腰のすらりと伸びた後姿を見送りながら呟いたのだつた。

「憎いほど、出來のいい兒だねエ……」——

「おばさま、どうして街のみんなはあんなにあたしを呼ぶんでせう?」と、外から歸ると、彼女は熱心におばさまに訊くのだつた。

「それは、お前、それは………」と贅澤な花作りが、答に窮して、お行儀に、頬を崩した。

——ともかく、おばさまは、可憐な屯田女隊を迎へて、毎日、内輪に燥やいでゐたが、町家の低い屋根の上には、悪魔拂ひの柊が、目籠に挿さッて高く見え、ヘロリは、すでに、また神奈川へ現れてをつた。

三 O-HA-YÔ!

微風の動くまつびるま、鳥影も、葉影も、屯田女隊はむろん、何もかも閉め出した茶室に、朱塗りの行燈がともり、おばさまが、お吉をお客にして、茶の湯ごつこを始めてゐた——

おばさまが、茶碗をお吉に薦めて手をつかへて

「どうぞ、」と口の中で云ふ。

おばさまは、何か視線が抜けてゆくあとを見凝めるやうな眼をしてゐる。

お吉が、靜に菓子鉢をその茶碗の傍へ向け、やつぱり手をつかへて

「どうぞ、」と小聲で繰り返す。

お吉は、雨戸の向うの青桐の葉搖らぎを感じるやうな表情をしてゐる。

「いえ、どうぞ、」とおばさまが、身振りだけで——

「どうぞ、」とも一度お吉が低聲で云ふ。

「どうぞ、」とおばさまは、初めて聽えるほどの聲を出す。

「ではいたゞきます。」

そしてお吉が右手の指先きを茶碗にかけた時、それまで隅にちゞこまつてゐた婢が

「呀ッ」と叫んで首をあげた。

遠くに唐人笛と太皷の音が聽える。

おばさまはちらつと頬を慄はせてお吉を見る。

お吉は式通りにいたゞいた茶碗を胸もとに下ろし、右手を持ち直して茶碗を廻し、そしてもう一度式通りに…………

笛と太皷に、歩調の揃うた革沓の跫音が混り、それが壓倒的に押し寄せて來る。

「あれ、あれ、」と婢が、瞳を見開いて低く叫び、無意識に、お吉の方へ腰を浮かせる。

お吉は、茶碗を拭うておばさまの傍へ戻し、微な溜息をつく。

おばさまは、色と血の氣を失つて、衰のひゞきに聽き入つてゐる。

「まあ、おばさま!」

おばさまの脊の間から、懐劍を收めた緞子の袋が食み出してゐるのだ。

「いゝよ、いゝよ。なんの恐いことが……」とおばさまは、うわの空で、云ひつゞける。

騷ぎがだんだん家の前に來、しばあらく、みんなの心臟を叩くだけ叩き、みんなの血色を奪へるだけ奪ひ、そのまゝ渡船場の方へ遠退いてゆく。警備役人のだらう、草鞋や草履の音がつゞいて聽えて、やがてそれも消え、あとはしいんとなつた行燈のともし火で——

いつの間にか、お吉の片袖が、ぴたりとおばさまの脊を蔽ひ、指半月の褪れたおばさまの指が、宙に、わけもなく浮いてゐる。

「あゝ、」と戰慄の解けた溜息がみんなの口から流れ出す。

おばさまの瞳孔のうつろに擴がつた眼が、ふと、そこに、型通りに置かれた茶碗の上に落ち、微笑が乾いた脣に漂ひ、亂れた髮が洩れて來る。

「こんな、こんな時には、お茶を點てゝ、落ちつくんだよ、いゝかえ、いゝかえ、お吉……」

――戸外(そと)は、ぱつと晴れた外氣で、いまおばさまらを脅かした隊が、白々とした三間道路を、渡船場へかゝつてゆく。羅紗の筒袖に金の環、肩に金の房の垂れた「イホレット」、冠(カンム)りには雪白の飾り毛、腰に六挺仕掛けの「ヒストウル」、――片手に拔刀(ぬきみ)を持つた差頭役(さしつやく)が、それぞれ二三十人の「劍筒組(ゲベールぐみ)」の脇に添ひ、先頭に「旗持尉官」が、「紺地に花柒と赤白の縞」の花旗を掲げてすゝみ、その次に太鼓方、笛組、全部で三百人餘り――

渡船場には、三四十人から七八十人乘りの白塗りの「脚船(バッテイラ)」が六七艘、各七八人の唐人水夫(カコ)を乘せて待つてゐる。綺羅びやかな此の怪物共が、整然とそれらに分乘し、忽ちに向う岸へ渡り、また隊伍を整へて、火山岩の肌の黒い武山(たけやま)の裾を濱傳ひに、降り村の休憩所の玉泉寺へゆく。

間口が九町で奥入りが十九町の、松に蔽はれた島の散つた海面に、石火矢を二段に備へた「フレガツト」軍船、「チヤン」塗り木造の火輪船、それに帆前船、すべて七艘が、多彩な柱印しや船印しを掲げて此の海港を壓つしてゐる。

一　斗ヨキセン赤筋船　ほゝはたん
　　おめりか中海岸惣水師頭かもどうる・へろり（旗艦）　フレガツト
一　黒船　みすしつひい　フレガツト
一　軍船　ふはんてりや　コルヘツト
一　軍船白筋　れきしたん　コルヘツト
一　黒船　しづふれい　コルヘツト
一　キイロ船　そうたんぽん　コルヘツト
一　黒船　ませどにや　フレガツト

それらが、いま海岸に現れた「美百姓」の姿を認めると、いつせいに硝煙を吐き、そのひゞきが、海港の町家の空にとどろき、おばさまらを初め肩をすぼめて、聞くこともつてる人々の慄えた神經を、いやが上にも鞭打する。

さてこの行列の後には、役人、通詞、それにあの「中世紀の黒太子（ブラックプリンス）時代以後あちらではもう古董になつてる」具足などをつけた、あの、江戸の下谷の武具店で、一遍に高値に飛びあがつたのを買つて來て身扮へしてる警護の武士、また、今流行りの角兵衛獅子風のかるさんを穿いたものなどが從つてゐる。多分彼等は、去年のあの、久里濱一件を思ひ出す、あの時ヘロリが國書を納れて來た金の惣金物つきのタガヤサンの箱からは、國書のほかに、隅に横文字を書き入れた白旗が二流れ出て來たのだ！降參する場合はこれを振れと！

でこれらの國粹黨が、眼の先きの夷人船を見て眼を瞋（いか）らして考へる。あの胴に塗つたチャンが、天日にとろけかゝる時分を待つて、一氣に燒打ちすれば好い。あの船の乘組員をみんな陸へ誘引きあげて、石火矢を使はせずに一騎打ちに討ちとると好い…………

だが異人隊は、そんな彼等を無視して、思ひのまゝに海港町を威嚇しておいて、彼等の休息所へ行進する…………

この示威運動後、しばらく、町は、ちどかみ（虎列剌）かあかはら（赤痢）か厄病（腸窒扶斯）に蝕ばまれてゆくやうに、陰鬱な恐怖に喘いでゐた――

船問屋を除けては、どの家も戸を閉め、まるで死の家のやうで、高ばなしや笑ひ聲、三味線などはむろん聽えず、祭壇に燈（きま）しの焰が搖れ、みんなひそ〳〵と脊を屈め、時々、戸の節穴に這ひ寄つて表の氣配をうかゞひ、それから密つと土間に降りて、忍び足で隣りへ、向う家へ、お互ひの社交心を滿足させに出かけてゆく。さうしてそこで聽いた噂に、一層恐怖心と反感とを高め、それをぢつと持つてることが苦痛で、また他の家へ打ち明けにいき、結局、家から家へ、だんだん

誇張した戰慄が傳はり、町全體が一刻一刻、恐怖の深みへ陷ちてゆく。

噂は青桐の家へも、當然ひゞいて來た。

――あの毎晩、びいどろの提灯のともつた異人の泊り寺の庫裡で、彼等は折り折り、こつそりと人間の魂を吸ひとる仕事をしてゐるのだ。

びいどろの壺から紫色の焔が立ち騰り、そのそばに、メリヤスの筒袖を捲りあげた異人が二人。二人ともその腕に、赤と青で女と男の刺靑をしてゐる。一人が、角な銀張りの銅(かね)の板を持ち、それを獸の皮でごし〳〵と擦つては、その紫の焔で焙る。もう一人は、ぎやまんの徳利を持ち、その水をときどきその銀の板へ注ぎかける。そのうちに、銀板の表へ、人間の顏がもうろうと現れて來、それが例の焔に燒かれて、だんだんはつきりとした人像(ひとがた)になる――寫眞鏡と云ふもので……

……異人は始終この器械を持つてあがつて來、處女(むすめ)と見るときつと、引つ摑まへて寫すのだ。

異人は、何處で聽いたのか、處女(むすめ)と人の女房との違ひをよく知つてゐる。

――異人は蛇を捕つて喰べる。ついこの間、三人連れの異人が、山へ登つていつた。一人は腰帶に籠を提げ、一人は唐人笛を持ち、一人は何か皮袋を持つてゐた。それが山ん中で蛇の穴を探し出し、その廻りに立ち、唐人笛で蛇を誘き出し、その出て來たやつに、皮袋の男が白い粉をふりかける。蛇はぢきにくるくると輪になつて靜まり、それを籠に入れて船へ持つて歸つて――喰べるのだ。

――異人は大抵腰に六挺仕掛けのピストウルと股引の縫ひ目に時計、それから上衣の縫ひ目に、柄が伸び縮みして、小刀にも、鋏にもなる庖丁を持つてゐる。

――この間、亭主が戸を閉め忘れて出かけたある家(うち)へ、ぐでん〳〵になつた異人が四五人で押し込み、西洋草履のまゝ座敷へあがり、そこら中唾を吐き散らし、それから「SAKI（酒）!SAKI!」と怒鳴りながら、戸棚や押入れを引掻き廻

はし、結局、踏徳利一本見つけて、牡丹（釦）を二三個遺留して引揚げた。

隣りへ逃げた家族と、亭主も歸つて來、後始末をして、近所の神主を呼んで來て、お祓ひをして貰ひ、牡丹は町會所へ、名主さま連名で屆け出た。いまだに然し、家のうちに四つ足の臭ひが泌みついて拔けない。

——隣りの××村のある寺へも押し込んだ。二三日前の夜七つ刻頃で、冠りの外牡丹に車印や錨をつけた二三人が、鐵砲に狐を吊したのを擔ぎ、上官に連れられて庫裡へ上つて來た。そして晩酌中の住職の頭を叩き、その銚子を引つ奪つて、本堂へいき、寢そべつたまゝ動かなかつた。役人が通詞をつれて來て、引き取らせやうとしたが、どうしても聽かない。とうとう彼等は短筒をひねくつて本堂に立ちはだかり、こちらは庭に御用提灯をならべたまゝで、睨みあつて夜を明した。

——異人が來てから生きものが減る。鷄はもとより、犬や猫が第一、いつの間にか見えなくなつてゐる。おほかた唐人笛に吸ひ寄せられて、結局、異人の胃の腑の肥料になつてしまふのだらう……

こんな噂が、海坊主か雪達磨みたいに肥つてゆき、それがまた陰氣な被害妄想を呼んで——

「ゆふべ夜半に、唐人のハツテイラが劍筒の劍尖を月にキラキラさせて、稻生澤川を溯つていつた。」とある漁師が云ふ。

また、或る女は、よんどころない用事で夜中に外出し、道の曲り角で、ふいと出逢した例のかるさんを穿いた警備兵を、」すつかり唐人と見違へて、絶え入るやうな悲鳴をあげる。

——いまに唐人が劍尖を揃へて、此の町の女狩りを始めるだらう。彼等はたしかに女好きだから。

——いまに彼等は、町中の赤ん坊を盗つて八ツ裂にして食べるだらう。彼等は畑の牛でさえ食べたがるんだから……

で、夜は實に寂しく、江戸から來た應接掛り、奉行などの泊つてる寺々や、御用所、町會所、番小屋などを除けては、たゞ船宿や廻船問屋などに、心細い灯りが洩れる位のもので、却つてそれが、街の闇を深め、その中を、時を定めて異國

船で打ち鳴らす點鐘が、憎らしいほどにはつきりと、町の人々の耳朶をうつ。

お吉とおばさまが、毎晩、床をぴたりとくつつけて寝た。あの緞子の袋に納つた懐劍が、いつもおばさまの枕許に置かれてあつた――

ほんの暫くだが、然し、町の人々の頭に、永い印象を殘したこの恐怖時代に、とうとう終りが來た。

「市長」（ペリー遠征記用語。實は下田奉行支配組頭。但し町政の實權は、當時この「市長」が握つてゐた――作者）がこんな風に命令したのだ。

――みんな戸を開けろ。陽氣に！陽氣に！――

さうして「市長」は、多分この命令を徹底さすために、先づ六錢二厘五毛の地獄を公娼にまで高めた。それからあの屯田女隊にも、むろん、その恩惠を均霑させて、彼女らの一人を自分の官舎へ呼び寄せて使ひきりにし、通詞までにも、それぞれ見習はせた。彼はまた彼女ら三人を、ヘロリ饗應の時の給仕に出し、それから――その選ばれた十幾人を新公娼達と共に、實に、ヘロリ一行の寫眞鏡の前に立たせたのだつた！

「あゝ、あゝお吉さん、あたしはもう死ぬのよ。えゝ死ぬのさ。」とその十餘人組の一人が、お吉を訪ねて來て捨て鉢に云つた。

「まあどうして？」とお吉が不思議さうに訊ねた。

「でも、異人に寫眞を撮られたんさ。だから精々面白い眼をみなくちや。………」

「おや！………」とお吉は眉をしかめ、そして、この一層元氣な彼女を、まじ／＼と見直したのだつた。

それから給仕に出た三人組の一人は、お吉に、こんな印象を物語つた。

「さうね、異人つて、まあお猿が白癬にかゝつてるやうなものね。眞つ白で、手の甲にも赤い毛があるし、それに、髪がたき〳〵でね。第一あの眼は、身慄ひの出るほど厭あね……でも、これあ身綺麗よ。」――

「市長」のこの「英斷」は、たしかに町を陽氣にした。家數が八百軒餘りしかなく、その一割五分以上は船宿と「女郎屋」兼料理屋が占めて居り、其處に先づ幾らか悲壯ではあつたが、どつと絃歌が揚つたのだから。さうして街々の商店は、皆いつせいに見世を開けた。

異人が通詞を連れて、屢々それらの店へ來、二三割時價より高い買ひ物をしていつた。「酒場」には醉拂ひ唐人の手から、ドルラルの雨が降つた。(此の時一弗は當時の二十五錢)

此ら異人の、町へ振り撒く金は、日に二十兩を下らなかつた。だから、商人は、彼等が品物を自由に選擇する爲に、見世の疊を土足で汚しても、もう別に大した苦情はなく、一面に充分國粹的であり、もう一面により多く商人だつた彼等は、當然出來るだけ異人に近づくことを望んだ。

ある料理屋では、町の「親分」が、通りかゝつた異人の船懸り(すいよ)を呼びあげて、盃の應酬をした。子供等は、異人の後について歩き、地べたへ投げられる小錢や干菓子の破片(かけら)を、嬉々として拾ひあげた。ある漁師の女房は、亭主を通じて、こつそり異人の汚れものを濯ぎ、幾層倍かの報酬を得た。またある者は、濱に流れ寄つたギヤマンの德利を拾ひ集め、それを内密で知人に送つて、隨分割の好い交易をやつた。

小娘が、臨時に、警戒色のお歯黒をつけて、街を歩く。

「O-HA-YO!」と、異人が、太陽には無頓着に、人の顔を見ると聲をかける。

沖はそろそろ黒潮の春濁(とわり)(濁り)で、初鰹が來、「陽氣に!陽氣に!」町はなつた――

ある午後、お吉は、久し振りに姉に逢ひたくなり、恰度來た藝者にそこまで送られて家を出た。

「もし唐人が來たら、何處でも手近の家へ寄せて貰ふんだよ。歸りは、姉さんに送つてお貰ひ。いゝかい。早くお歸りよ。」

おばさまが、上りばなまで隨いて出てさう云ひ、それから、まだ不安らしく

「いつそ、お前も鐵漿をつけとくとねエ……」と云つて、ふと傍に立つてる藝者の皓齒に氣がつき、笑ひに紛らした。

「……ではお賴みしますよ、おどめさん。」

「えゝ、えゝ、そこまでお送りしますよ。」

でも、さすがに二人は、手を繫いで、小走りに步いた。ほんのり汗の滲む陽氣で——

「ねえ、おどめさん。」とお吉が云つた。

「なんです、お吉さん。」

「唐人にも、女があるんでせうか。」

「まあ、お吉さん、まあ！」とおどめさんがお吉の顏を覗き込んだ。

その仰山な樣子に、お吉は、思はず眼叩きして、だが、大眞面目で、答へを待つてゐた。

「それはねえ、お吉さん……唐人は化け物だけれど、なんぼ化け物でも、それあ、有る筈だわねエ……まあ馬鹿らしい！」

「さう、有るのね。どんな風をしてるでせう？」

「おや、そこまでは知りませんよ。でもね、おほかた……よしませうウ。」と云つて、おどめさんは、何か自分の考へにくつくつ笑つた。

お吉は素直にうなづいた。

ある露次の入口へ來て、おどめさんが、ふいと脣をつきだして

「あアばアよ。」と云つて、笑ひながら

「お吉さん、知つてますか？」と訊いた。

「いゝえ、」とお吉がおかしさうにかぶりを振つた。

「唐人がね、この頃、みんなさう云うんですつて。では、あばよ。」

おどめさんは、さう云つたまゝ、ちよいと首をさげて微笑んで、その露路の中へ別れていつた。

「あアばアよ」とお吉は、無意識に口の中で繰り返し、左右へ會釋したりして、ぢき姉の家へ來た。

黒船がどうでも、世間がどうでも、それはいつさい不感狀態の、あの兩親以來の家で、姉がひとり、裏の太陽の當つた蔬菜畑に肥料（こえ）をかけてゐた。お吉は土間をぬけてそちらへ出、腐りかゝつた椽側へ構はず腰をかけて、姉と話した。

「お前まあ、獨りで出歩いて好いのかい。」と姉がほとんど呆れて云つた。

「えい。でも、こちらが、どうかと思つて。」

「こちらが、どうなるものかね。それはね、唐人がちよいちよい勝手に來て、井戸水を飲んでゆくけれど、」

「まあ來るの！　厭だ！」

「それあお前、唐人だつてあんなに大きいんだもの、水も入れなくちやあ、ほゝゝゝそして小錢を拋り込んでゆくのよ。
　それをまた一々お上へ屆けるんだからね。」

「面倒ねえ。捨てゝしまへばいゝものを。」

「でもさうしなくちやあ疑ひがかゝるのさ。」

「疑ひつて?」

「つまり唐人と懇意だらうと云うのさ。それではキリシタンになつてるだらうと……」

「でもむかうから來るのは勝手だわねえ。」

「どう云うものかね………」と姉は、それには興味がなく、また畑へたつた。

「さうね、いけないわね、唐人は化け物なんだもの………」

さうお吉が呟いて、何となく振り返へり、その煤けきつた座敷越しに表を見た時、彼女の眼に、小さな鍔が、肉を喰ひしばり、兩手を握り締めて、駈け込んで來る姿が寫つた。

「嘉市、嘉市、」と彼女は立つて、土間を表の戸口まで迎へに出て抱きあげた。彼女の子守唄に眠つたあの嘉市で、それが髮のとんぼが曲り、そちこち草の葉がくつつき、精一杯亢奮してゐる。

「どうしたの?」と彼を下におろして、彼女が訊いた。

「ひとが、ひとが………」と彼女の前掛けを掴んで引きながら、息を切る。

「え? ひとが? 」

「ひとが死んで……うゝん、うごいてる!」

「ど、どこで?」

「あつち、あつち。」と嘉市は、彼女を道まで引つ張つて出、すぐ眼の先の丘を指さした。

「どこよ?」

「そこ。」と云うなり彼は、彼女をおいて、十間許り先の、丘の肌へ切れ込んだ道の登り口まで駈けていつて振り返へり、片手を擧げた。

彼女は無意識に釣り込まれてそちらへいき、その松や葉櫻の樹立ちに挾まつた細い道を見上げた。道は七八間のぼつてすぐ奥へ外れて居り、曲り角に列んだ樹の幹の間に蒼い空が覗いてゐる。

「あの上？」

「うゝん、違ふ。あすこを曲つてちよつと奥の笹ん中。」

「どんな人？」

「あのね、あのう……知らない。」

「知らない？」

「うん、笹ん中から白い手を出して――來い、來い……」

「いやな嘉市！」

　さう彼女が彼を睨まへた時、ふいと嘉市の眼が大きく空に動き

「ほう！」と嘆聲を洩らした。

いつの間にか、坂道の天邊へ、ひよろ長い唐人の姿が現れ、それがこちらを見下ろして、馬鹿みたいに

「おう、は、いよ！」と叫んで、白い手首を振つた。

お吉は嘉市の肩を抱き締めて顔をあげ、眸をそちらへ凝注した。

二挺仕懸けの鐵砲を肩にかけてゐる。白カナキンの股引の膝に、艶紅の際立つた山鳥が吊る下がり、そのしだり尾の先が靴の上でふらふらと動く。羅紗の筒袖、羅紗の頭巾。

葉櫻と松の影明りの中で、靑びいどろのやうな眼が大きく笑ふ。白子のやうな首と手首。猿とおんなじ髮の毛。その赤毛のしよぼしよぼと生へた白子の指の間に、膝の赤山鳥の羽を一本摘んで、弄くつてゐる。

それが馬鹿みたいに下りて來て、お吉の前に立つた。

青い眼が、變な光（つや）を湛へて細まり、また開く。片手がお吉の脊を撫で、片手の艶紅の羽が、しつこく島田の髮やしぼりの帶に戯むれる。

お吉は、身動きもしない。眸を彼の眼に据ゑたまゝで立つてゐる

青い眼の奥にまぼろしが見える——朱塗りの行燈のあかり——澁茶——緞子の袋に納（い）つた懐劍……

唐人が片手を羅紗の縫ひ目へ突つ込んで、小錢をとり出し、嘉市の足許へ投げる。

嘉市が急いで四ツん這ひになつてそれを拾はうとする。

「嘉市！」とお吉が初めて、血の迸るやうに叫んだ。

嘉市が吃驚して首をあげる。唐人も不意を打たれて彼女の顔を眺める。然し彼女は、そのまゝ口を緘んで、また彼を凝視する。

唐人は、少し勝手が違ひ、變に寒むさうに、山鳥の羽を振り振り行つてしまふ。

お吉は、地べたの小錢を氣にする嘉市の手を、ぐんぐん引張て、姉の家へ戻つた。そして入口から

「姉さん。おいとましますよ。早く歸つて、著換へをするのよ。髮も洗はなくつちやあ……いゝの、一人で大丈夫。さよなら。」

それだけ一息に云つて、あとは歯を食ひしばり、家へ引き返した。

四、風見

ヘロリは、自分がときどき泊つた法華寺へ寢臺とカーテンを、それから、ときどき憩んだ禪寺へ、十字架を刻んだ墓一

つを、それぞれ置土産にして、足掛け四ヶ月して此の海港を「あばよ」していつた。

「阿墨利加さま〳〵」と、思はず口を辷して、營業停止を食つたあの正直な江戸の武具店と同じ氣持ちを經驗した者が此海港町の一部にも、むろんあつて、たゞそれが江戸よりも賢明で無口なだけだつた。

だが、何と云つても、ヘロリ大將が鬱陶しい存在だつたのは事實で、從つてあの「陽氣に！陽氣に！」の陽氣さも、彼去ると共に、神經質がなくなり、急に自然な朗さをとり戻した。

ある晩、「市長」に招ばれて、お吉は、おばさまと一緒に海港一の料理屋「伊豆よし」へいつた。「市長」はおばさまの江戸のお屋敷へ出入りしてゐた男で、それが、先づお吉の噂を、專屬の屯田藝者から聴き、序におばさまのことも知つて、ヘロリの荷をおろすと共に、彼女等を迎へたのだ。

疊半疊ほどの白旗に、太く「魁」の一字を書いたのが此の「市長」の旗印で、その旗持ちや、兜持ち、槍持ちなどを連れ、むろんあの「黒太子(ブラックプリンス)」止りの鎧をよろひ、此の海港を押し廻つて、ヘロリの連中と、同時に海港人を大いに威壓し、それから、潮時を見て、あの陽氣の號令をかける。そう云つたもう五十がらみの、仕事師で、脂肪の多い丸顔に、厚手の脣が始終あの異人の「日本人微笑(じやぱにいずすまいる)」を刻んでゐる。

お吉は、高島田と振袖で、此の「市長」の前に坐つて、例の明烏を語つた。

「うまいもんですな。評判通りだ。」と「市長」がおばさまに云つた。

香りの高い煎茶に始まつて、またその香りの高い煎茶でお終ひになる、山谷の八百善そのまゝの料理が運ばれた。

お吉は、しなやかな手で箸をとり、教養通りに會席のコースを濟ませた。

「いや、結構でした。また聽かせて貰ひませう。それから、ほかにも、聽きたいと云つてる者があるから、招んだらどうぞ來てやつて下さい。まつたく感心しました。」と「市長」が、外交辭令でなくさう彼女らに云つた。

笹折りの包みと、使ひ捨ての小田原提灯をさげ、わざと送りを斷つて二人切りで歸る道で、小さなおばさまが、

「ほんとに、ほんとに……あゝ！」

と滿足の遣り場に困り、眞闇な空へ呟いたのだつた……

「市長」の宣傳が利いたのであらう、ちきこのあと、お吉は、「市長」と同格の、つまり「第二市長」に招かれた。

第二市長は、「陽氣市長」とは違つて、年も四十そこそこで、いつたいに華奢に若々しく、始終陰の仕事に廻つて、それをすらすらと運んで、別に、仕事をしたと自負するでもなく、つまり「陽氣市長」のやうな氣負ひがなく、その癖、心構へだけは、いつでも出來てるとそ云つた男で、從つて、表面も、すつかり砕け、自分が面白く遊ぶばかりでなく、人を遊ばせることさへ十分に出來た。

お吉が例によつておばさまに連れられて、伊豆よしの彼の座敷へ通り、小唄三つ四つ、それに評判の新内を語り終ると、彼はその喉と手を口を極めて激賞し、さて、お吉の三味線をとりあげて、

「露は尾花と寢たと」云う、ちやうどその年のハシリの小唄を、低聲で手際よく歌つて聽かせたのだつた。

そんな伊達者の半面を持つこの第二市長が、おばさまとお吉とにこんなことを考へさせた。

——おまへ、こんど伊佐さま（第二市長の名）にお眼にかゝつたら、この頃の新しい唄を出來るだけ敎へてお貰ひ。

——えい、おばさま。それに江戸の女たちの風もね………

それから、引續いて市長等の下役たちから聲がかゝる。料理屋も伊豆よしだけでなく、も少し格の下がつた、もしかすると、お吉には縁は無いが、ちやんと第二室的な段取りのついた家なども混つて來る。「陽氣市長」から聽いたから、と云つて迎ひが來れば、そちらへも出かける。一日のうちに二度同じ家の軒をくゞることもある。二軒三軒と廻ることもある。

むろんみんなこちらがお客で、向うは——やつぱりお客だつた！

屋根の上にひよいと千石船の帆柱が見えたりする街筋を、鬱陶しい二階の格子の隙間に紅いもの丶チラつく船宿の前などを通つて、水あさぎの定紋の入つた帷子を着た小さなおばさまが盛裝したお吉の先にたつて、時々駕籠で、しばしば然しわざと徒歩で、雪駄をしとしと丶、料理屋へ這入つてゆく。

簀の子の隙間から、格子の間から、見世先から、棧敷から、町の人達の眼が、みんなこのむしろ夢幻的な、むしろ狐の嫁入りみたいな二人に吸ひ寄せられたのはもちろんで、人々は、殆ど宗教的に先づその「市長の女友達」へ、今まで以上の敬意を拂ひ、それから、お吉を、より以上に讃美した。さうして、當然の結果、ある日、船宿のお神が、「唯一つある家」へ訪ねて來て云つた。

「おばさま、お吉さんをこちらへも貸していたゞけませんか。さうお上筋ばかりへ、おつとめなさらずに。」

「でも、それでは、わたしが堪りませんよ。」とおばさまは、云ふまでもなく、プライドを傷つけられて不滿な語調で答へた。

「いえ、いちいちおばさまに御足勞願はなくとも、こちらできつとお吉さんに間違ひのないやうにいたします。それに、こちらでは、みんなが申してゐるんですよ。お吉さんを遠い他國の人々に見せたい。あの聲をよく聽かせて威張つてやりたい、とさう……」

「さうですか、そんなことを。さうですか……ではまあ、考へて見ませう。」

然し、おばさまは、もうその瞬間にちやんとお肚を定めてゐたのだ

——無造作に、お吉は、藝者になつた。

島田の髷の前を高く、うしろへ低く細く結つて、鼬作のヘシリになつてゐると、流行早耳のおばさまが知り、早速それ

をお吉に試み、

「あゝよく似合ふよ。」と微笑んで、餘りにも若い「いなせ」なお吉を扮りあげる。

「第二市長」が、天城を越えて江戸へ、十日ほど留守にし、戻つて來た時に、お吉に與へた土産が、紺の荒い格子を染め出した縮緬の單衣地で

「まあ美しい！」とお吉がうつとりとなるのを、好々と微笑み、

「市松染と云う、いま江戸で騒いでをる。」と、この通(つう)な人形造りが、說明して聽かせる。

それから、笹紅(さゝべに)なども時代遅れで、白粉も淡く、どちらかと云へばつゝましいうちに生地の肉體美を示すのがモダンだと、傍(わき)から伊達男(ダンディ)が口を添える。

「陽氣市長」、「第二市長」、その他駐剳役人大ぜい、料亭や船宿の主人、町の親分、千石船の船頭など、パトロンはあちらこちらに賑かで、それが、彼女の髮飾りを考へ、彼女の持ち物を工夫し、彼女の吾妻下駄を氣にし、つまり彼女の珍しい天稟に、浮いた氣配りを八方から集注して、さうして海港一番の彼女を仕立てあげた。

そこである時、市長と市長とが、黒船の合(あ)ひ間に微醉を呼んで、こんな情知(わけし)りの社會政策を談じ合ふ。

「貴所(あなた)のお引き立てのきちですが——」と第二市長が口を切る。

「はあ……いや、貴所(あなた)にも隨分お力添へ下さるさうで、老婆も彼女(あれ)も悦んで居ります。」

「それに就いてゞすが、近頃のきちの身裝(みな)りは、いかゞでせうな。」

「身裝(みな)りと申されると？」

「どうも、ちと奢つては居りませんかな。われわれの贔負が少し過ぎたやうに思ふ。」

「あゝそのことですか。」と陽氣市長は、上機嫌に微笑んだ。

「たとへば、きちは、頭のものにも、二品三品鼈甲を飾つてをる。襦袢の襟は綸子、帯は唐織か何か、きらびやかな模様がある様子、肌のものも、どうやら、友禪などのやうに見受けます………」

「いや、細かいことですな。」

「みんな、これは、先年の御改革の趣旨に悖つてゐるやうですが………」

「いかにも、お言葉の通りです。然し、天保とは時代も違ひ、ことに當所は、いま國際的に重大な立ち場にある、つまり當所の女は、とりも直さず日本中の女の代表として、碧い眼に寫るわけですからな。それから、きちがあんな風だと、從つて當所の人氣も陰に籠つて畏縮けてばかりはゐまいと思ふのです。」

「では、公儀を蔑にしたと云ふ懲罰がきちへ來、ひいては、われわれにも、不行屆きの非難が來ると云ふことは……？」

「方便ですよ。方便ですよ。方便を無視しては仕事が出來ない。それに、こんな時代で、みんなが西洋劍術へ許りひた押しに血眼になつて向つてる時に、そんな細かいことをぢつくりと睨まへて、こちらの足もとを整へると云つた考へが、さうさらに涌いて來るものでは無からうと思ふ。むしろ、われわれが、當所の市長として、その邊まで氣を配つてることは、大いに買つて貰つてい〻と思ふのです。」

「よく判りました。いや、わたしも、さうは心得て居りましたが、たゞ萬一、きちにお咎めが來たりしては、と考へたものですから、念の爲に伺つたのです。」

陽氣市長が、例のジャパニイズ・スマイルの動く口に酒を含んで、二三度大きくうなづいた——

こんな風で、お吉は、六錢二厘五毛紛ひの海港藝者とは、もとより格が違ひ、むろん甲乙二種類のあの赤前垂などに用が無く、氣の進まぬ客は、おばさまが先に立つて、片ッ端から斷つてしまひ、それがまた却つて人氣を呼んだ。

まあ彼女は、庭鳥のあの風見のやうなもので、風のまにまに、身扮り、化粧し、唄ふので、其處にひとりでに喝采が涌

き起つたのだが、それを、屯田女隊や海港の女達が、始終振り仰いで、彼女の鶏冠の向いた方へ、爭つて轉向し、それぞれ、自分一杯の奢りをはづみ、從つてお吉は、つい識らず知らず、此の海港町へ、艶麗な流行の種を蒔き散らす「先覺者」にさえなつてゐたのだつた…………

お吉おぼえ帖一枚——

八月十五日。ならひ(東風)。朝のうちぬれえんへ雨すこしこぼれいる。

つぎさほ手ならしにひく。

島のきかへあわせおろす。

いもくりかき、すゝきけいとう、初しほのさんま、坂下より。

げい者しゆ兄さま(坂下の義兄)えんぎだなといふものゐまにつくる。こんせいさまうしまゆ玉くま手、めさましくおかし。なにがおかしとみなく\わらひさわぐ。これは山田や(待合茶屋)のをうつす。

七つごろいづよしより迎ひ。くろ川さま(陽氣市長)いさゝま。ほかく\ことわる。

六つすぎ大あんじやまのうら手に赤い大き月の出。

この月に黒ふねのゐぬがさんねんといさゝま。あんな青い眼にとおどろけば、いもは十三がけで(缺乏所相場)買ふていつたとくろ川さまにわらはれる。こんやはいもめい月。

いさゝまのつゆは尾ばな、とほくはなれて(長崎傳來はやり唄)などうたふ。もうぬすまれた、こんど來たらくろ卅へつれてゆき、とうじんのうたをぬすませるといへば、そばから、ついでにきちの聲もきかせてやるがよいなどときみのわるいたわむれ。赤い毛のはへた耳にきかせるこゑはもちませぬと<u>ひつじ</u>(黒船時代國粹黨慣用副詞)にことわる。

四つまへにおかへり。あとのざしきいつものびようきたのみもどる。えんばなへ笹おりひらく。おばさまさけ少々あがる。るすにたんざく四五まい。きちもよめといはれ、こまる。むしのこゑ、さんぼうのすゝき、いまきいたくろ舟、月いろいろ、三味せんよりむつかし。しあんごと、よろこび、かなしみ、なにもこゝろやすくあの月にむすびつけてなど、おばさまに教へられ、そんな氣でお月さまをみれば、たゞまんまるく、あくびばかりおかし。

伊せ二三まいまうしわけに。あとは枕もかいまきも、おばさまのわらひごゑもうつゝに。

笹竹と絹ふきんで毎日潔めてゐるやうな、明るい家うちで、女ばかりの生活が、季節の脚とは反比例に、賑かに美々しく營まれてゆく。

おばさまが、すつかり皮膚の光澤を増し、もうあの江戸への美文章辭さえ忘れてしまふ。彼女は先づ、毎日、次から次へかゝつて來るお座敷の夥しさをゆつくりと享樂し、それから、もち前の見識を働かせて、その中からほんの二三口「お吉に價ひする」つまり彼女自身に價ひする客を撮みあげて、あとはみんな刎ねてしまふ。彼女は第一「市長の女友達」で、從つてそんな階級的な標準に當てはめると、大抵の客はレベルをどんと落ちるが、問題は必ずしもそこに無くて、もし彼女の偶像を、彼女と同じだけの熱心さで崇拜する客なら、それで好いので、いちど、船宿からの迎ひが「利益になるお客ですから、どうぞちよいとでも。」と口を滑らして、一も二もなく刎ねられ、そこで早速コツを吞みこんで、今度は、客の代理に根かぎり舌を廻して、おべつかと謙遜のストックをありつたけぶちまけ、すつと「撮みあげられ」た。こんな迎ひの男女が、始終この唯一つある家の表に群まり、お吉を褒めるお喋べりが毎日盛んに鉢合せし、そこに妙な競爭心理を煽り、それがまた、おばさまを得意のてつぺんへ引き揚げる。

小紋の小袖を着た小さなおばさまは、表へ出て、そんな彼女の「見識」にこゝろよく疲れ、奥へひつこむと、もうお吉がいつぱいで、まるで睡婢のやうに彼女の脚もとに膝まづいて、その細腰に、まばゆい帯を纏はせて、あるひは、塗りの盥のそばにゐざり寄つて、水に解けこんだ彼女の髪の美ごとさに見惚れ、それから屡々また、お吉の前にひろげられた美々しい小間物と呉服の荷を覗きこんで、重たげに首をかしげてる彼女のために、銀と鼈甲と絹と香料その他の買ひ物をきめる。

蓋に金紋のついた團扇型の鏡——骨の細い肉の柔かな手首へ、愚劣な快さのしな〳〵と傳はるあの唐金の鏡が、毎日幾度も、華奢な濡れ椽近く、また幽艶な刺激を包んだ行燈の傍に持ち出され、そこにお吉の、光のある烏睛と、生々と紅を噴いた脣と、青味の霞んだ生へぎわと、それらがやわらかに動いて始終ひとりでにかもしだす無心な微笑を寫しとる。その鏡が、女大學風な、單なる身嗜み以上に、むしろ魂よりも大事な彼女らで、だから、おばさまは、また、手があくと、紅絹裂れで毎日その面をこすり、晴れ〴〵と浮いた生活——

内面的にも外面的にも、飾り窓風な、日に日に斬新な、それからそれへ新奇な蠱惑をそなへた、まるで第一等の衣裳屋のモデル・ガールみたいなお吉を作りあげること、それがこの家の生活原則で、それがこの海港町の「陽氣」のシンボルで、町の爲政者らさへ暖い拍手をおくつた——時代だつた。

お吉は、お吉だけにまた多忙で、念の入つた身仕舞や衣裳づけは別として、彼女は彼女の仲間達——あの六錢二厘五毛級の屯田女際、あの素凋れた鯨帯と一張羅の銘仙の半天で、繼ぎ棉の風呂敷包みを抱え、寢不足の顔に、さすがに夜寒むの季節らしい氣配を運んで來る——仲間達を、めさましい金精大明神の居間へ通して、三味線を合せ、作り聲の微塵もない冴えた聲で、覺えたての流行唄の封切りをする。それから稽古熱心なのが、お渫へを濟ませ、おばさまが座を外すと、あとは、忍び笑ひを伴つた彼女ら特有の雜談で、お吉は、始終鷹揚に、つゝましく、單純に、時折り何となく微笑み返し

たりして、ちつと聽き手になつてるのだが、その話が、ケチな一俵武士（近村から海港警備に來た農民兵）から小廻船のかしぎまで、いや、も少し上層の、紬のどてらを着た船頭や、鳥追の陣笠連（當時流行軍帽）、羅紗猩々緋の陣羽織黨など、つまり彼女らの肌へ來る男を、みんな裸にして、いつさい平等に、辛辣な、捨鉢な、神經的な、色情批判のメスを當て、それがついみだれて、密つとじやれ合ひ、捻り合ひ、じれつた結びの髷も何も崩れるほどになつて、ふつとお吉の溜息を聽き、急に、細かい、しんみりとした世帶話の本音に落ちてゆく。このお天氣な、變に濕つぽい變り目が來ると、お吉がついと起つて、金精さまの下の袋戸棚をあけ、八方のパトロンから彼女へおくつた贈り物——江戸の唐棧、京の玉川半ゑり、阿波のちゞみ、海港らしく、あちらこちらの「渡り鳥」が落していつた諸國名物女ものいろ〳〵——を、ぱつぱと皆に撒いてしまふ。そこで彼女らが口を揃へて、いつもの彼女への讃辭をもう一遍また騷々しく繰り返し、習ひたての覺束ない小唄を、上機嫌に首を振り〳〵、縺れあつて歸つてゆく。

それから半ときほど、甘いおばさまと差向ひで——仕立てあがりを着て見、締めて見、すらりと立ち、お澄ましをして見せ、あちら向き……おばさまのとろけさうな眸へあどけなく笑ひかけ——それが濟むと、ぢきにまた派手な買ひもの。

彼女が疊につく三つ指の尖の、うす紅さした貝爪、ハシリの「流行」をすら〳〵と消化して、舊い人たちを新鮮な魅惑へと誘ふ風姿やものごし、同時にあの變にとり澄ました感じの被布や文机が、ちつともちぐはぐでなく、つまり閑でお上品な第一階級人らにも膝を拍たせるだけの「教養」、さうして何よりも先づあの、海鳥と一緒に波の上で彼女の墓碑銘となつた艷麗な髮帶——

　おもひだしますお吉のこゑを
　　いそのちどりのなくねにも

——三重縣鳥羽港に殘る船歌——

玉は定まりで、新公娼に毛の生へたくらいだが、こんなお吉で、祝儀の花降銀（二十五錢銀貨）や、時に小判が、紙包みのまゝ無雜作に長火鉢の抽斗に溜り、それが米とか種油とか、「生計」の方へはてんで一顧も呉れないで、片ッ端からどんどん「貰ひもの」に消えてゆく。蕎麥は一厘六毛だし、幕府の御徒士の、お玉落ち（給料半年分受取日）の精一杯な奢り、雙丼は金一錢で、一流旅館の一泊料が二錢五厘八毛也とそんな世の中に、假に彼女のふだんの買ひ物帖を描いてみたら

より糸帶　一本　銀二百三十三匁（約三圓七十錢餘）
緋ちりめん　一反　銀二百十七匁五分（約三圓三十錢餘）
紫縮半衿　一懸　銀二十二匁五分（三十六錢）
すいしやう玉　銀かんざし　一本（銀三十匁）
京べに　一茶わん　六錢二厘五毛——

「活計」は凡うに問題外で、贅費至上に生きてゐる家——お吉の「つとめ」は、だから、パンを得るための「勞働」ではなく、おばさま初めパトロン達の贅澤遊びを「あそぶ」ことで、黒船氣分の「時代の踊り」を、おどることだつた。

海港へ來てゐる敕任官の出張費と機密費、豪奢な船頭や旅客の「縞の財布」、それにおばさまのあの四分の一世紀間の貯金と退職手當、これらを美粧の肥料にし、あとは彼女の持ち前を、そのまゝみんなに見せれば、そこに人氣の渦しほが待ち構へてをつた。

日が暮れかゝると、キンキンした金精大明神にあかしが點火り、支度の出來たお吉が、何か浮きたつたおばさまと一緒に、柔かな掌を合せて、理窟もたあいもなく、敬虔しい神信心を濟ませ、これから迎ひに箱を持たせて、陽氣に彼女の「あそび」へ——

もう野分まで、石や草や土の軒端に、糸と太鼓と灯りが、邊鄙な氣持ちを漂はせてる街を、彼女が、何の感傷も、何の草臥れもなく、あの表つきの、ぶどう天鵞絨の太い堂島下駄——あの世紀のお洒落をしなよく素足に運んで、燭のあかあかとしたお座敷へ出かけてゆく。

彼女は、云つてみれば、心もからだも一枚鑑札の「踊り子」で、それに權勢い人達のお聲がゝりだし、第一料理屋や船宿の氣配りがいきとゞき、だからお座敷はどれも綺麗で、爐邊風な寛ぎと愼しみを保ち、それが崩れて淫れて、彼女のあの開化耳を火照らすやうなことは、まだ無い。まあみんなして、お吉を大事にぎやまんの蓋ものに入れて、見惚れてゐるやうなもので……どんなに晩くても、四つには、彼女は、もう家に歸つて、おばさまと、また甘い差向ひを樂しんでゐる。もしそれより遅れたら、婢が、彼女の出先へちやんと迎へに來て待つてゐるし、おばさまは、お吉、お吉と、彼女の「人形」をまぼろしに追うて、居間と表の間を、摺り足で動いてるのだつた——

氣紛れな時代と、もつと氣紛れた環境とが、手前勝手な育兒部屋を仕立てゝ、お吉を彼等の好い具合にこゝまで哺くんだ。

だが、より一層氣紛れな手を、その育兒部屋へ伸ばして、いよいよ彼女をそこからとり出したものは、その冬の「花旗國」のさんふらんせすこの驗潮儀にまでひゞいていつた大震海嘯であつた。

五　ぷうちやん軍船から——

あのヘロリ遊藝會から、まだまる一年にならないが、海港は、もうニツポン第一番の開港場で、精々それに相應はしい粉飾を帯びてをつた。

町の出入口には墨塗りの柵門が出來、唐人の散歩と、朴齒の風米國粹家を監視し、大根畑や草家を拂つた跡に、冠木門のついた新水糧食の「欠乏所」、及び勤工場が新しく建ち、唐人は其處で、唐傘や下駄や小提灯などを買ふことが出來た。渡船場の向うの岩山には、竹の筒に玻璃板を嵌めて沖を見てる見張役がゐたし、海岸には、白旗を立てゝ異國船の送迎に出かける水先案内船が、ちやんと準備されてあつたなど……

然し、ヘロリ大將が去んでから殆ど百日間は、黒船も見えず、また、いつも黒船と同時に、そちこちから顔を見せる「鳥追角兵衛連」も——住民の五分四は不生産的な武士だ、と、ヘロリの隨行員が、この連中を喝破してゐる——現れて來ず、その間に、お吉とおばさまの、あのアダ花生活が、町の氣持ちに載つて、あんな風に花咲いてゐたが、そこへ、先づふいと露西亞のワシリウイチ・ぷうちやんがやつて來て、港灣の出口に近い入江に、淺黄に白襷の舟印をひるがへした。

特に「毛深い肌を持つ」唐人五百人ばかり。大筒二段備へ五十餘挺。三本檣の軍船。

そこで、空砲が、ふたゝび町の空を威壓し、四ツ足の皮で作つた大きな沓が、清淨な三間道路を濶歩し、その後を、背の低い Those yakônins が、「獵犬の獲物を追ふやうに」尾行けて歩いた。

當然また、角兵衛侍が、殺氣立つて入り込んで來、江戸の大官連が着き、騒然とした鬱陶しさが町を包んで、女連中は家うちに姿を隱したり、手廻しよく鐵漿をつけたり、兎も角、あのヘロリ神經の疼きを再發して、みんなが、挿話的な恐慌を起してゐた。

そこへ、地震と大津波だつた。

安政元年十一月四日午前九時——十二時　晴　凪

乳房山（大あんじ山——滿月を吐く山）に鳥の鳴き聲がかうかう聽え、しんとなつた後を、鈍く彈力性を持つ音が、町の背の丘々よりあがり、と思ふ間に、白絽のやうな路面が、そこかしこ、ひゞき破れて泥水を吐くら、かぶと蟲の家が搖ぎ

しりし、草家のハラワタが落ちる。

沖鳴りがいんいんとひゞく。寺々の鐘が鳴る。

津波だあ！

潮が、灣の中央島の根を露き出しに殘して、千石船も、木ツ葉舟も一緒に港ぐちの向うへちゞまり、たつた一艘、碇綱のがつしりとしたのが、今出來た海底の干潟へ横倒しになり、小さな人間が、轉がり出て、その水の退いた海底をいつさんに砂濱へ――

津波だあ！

土藏家から、草家から、寺から、社から、白けた、眼の張つた、脣の乾いた顔が無數に飛んで出、揉れ〳〵になりながら、ひとこと、物を言ふでなく、丘へ、丘へ――

千石船が、渡船場の向うを、ふらあと盛りあがつて、畑をのぼる。

兒の泣き聲。

波除け堤の附け根から、河を越えて、黒い山が町へ壓しかゝつてゆく。あとから、あとから、あとからと……

舳が寺の庇へ突きかける。

藁家が浮いて、屋根の上の人影が小さく、近づき、遠退き、搖れ〳〵流れ、互にぶつかつては、すつと影を消す。土藏家の間を、一本の帆柱が横ざまに四五軒づつ撥き碎いて氾濫する。

ヤッツケロ！　ヤッツケロ！　……人間の聲だ。子を負うた漁師の女房の聲さえ、さう叫んでる。舟宿のお神まで。

いや、屋根にしがみついて流れてゆく者さへ、顔をあげて金切聲を發してゐる。

いや、こんな二人まで――

若い男が、片手で老婆の脊中を抑へ、片手で棟瓦を掴み、二人とも、屋根にしがみついて、波除け堤へ流されてゆく。堤の松の枝が、ふいと男の月代の上へ。男は夢中で、それを掴む。老婆は屋根にくつついて離れない。男のからだが、片手で松に吊り下がる。老婆の叫び聲。何とも表現の出來ぬあんな眼。だが息子は、松に下がつた瞬間、松葉の向うの潟を見て

「ヤッツケ……呀ッ！」

老婆は流れてゆく――

既に遁げ了ふせた者、いま遁げる途中にある者、振り返つて潟を見た者はみんなさう叫ぶのだ。さすがに武士は口を緘んで、でも拳は握つてゐる。何をそんなに!?

あゝ淺黄に白襷の舟じるしが！　あゝワシリウイチ・ぷうちやんの軍船！

纜が切れたのだ。帆桁も砕けてゐる。三段が一段になつて、大揺れに揺れながら、大潮に乘つて、三十三間の図體を、あの入江から中央島へ流れだしたのだ。

ヤッツケロ！ヤッツケロ！

だが、不思議なことを見る――

屋根の上や、木ッ葉舟や、木の枝などに泊つて、この怪物と擦れ〳〵に流れてゆく日本の、女や男や子供のからだが、時々、あつと思ふまに、そちらへ乘り移るではないか。

この五百人の、捲き毛の唐人（カーリ・ベーバリアンズ）！

ヤッツケロ！ヤッツケロ！

空は晴れてゐる。雜木の枝がシラシラと光りながら揺れてゐる。津浪が大氣を動揺させるのか？地がまだ震へてゐるのだ。

帆柱の家を碎く音。巨濤の寄せて來る無氣味な氣配。またその退いてゆく時の心細いひゞき。人々の叫び聲。みんなそれらが裏に縮り、劇しく喘ぐ呼吸づかひと、落葉を踏む跫音とが、手近にはつきりと聽えてゐる。丸まつた脊中が、幾つもく丘を登つてゆくのだ——

くたりと泣き疲れて、魚のやうな眼を見開いてる赤ん坊。その下に、木綿のねんねこを小脇に曳きずりながらのぼる母親、米の包みや水の徳利などを提げて、傍をついてゆく心得た亭主。位牌と小間物の包みを一緒に脊負つた小娘。季節くの着物をいつときに重ねて着た分別男。衣の無い坊主。金銀證文の手筥を抱えて、たつた一人で逃げて來た商人。そのほか、いろんな人々が、荒く吐息しながら、這ふやうにして上へ…………

そのいつち後から、若い娘が、素洗足で、まあ何と云ふ力だ！足を痛めたらしい老婆を片手で脊に負ひ、もう一人、血の氣を失つた質素な老婆の手を引いて、登つてゆくのだ。

髪も亂れ、衣紋もみだれ、重味を踏んまへた素足の膚に、そちらこちら、草の實ほど、血粒が滲んでゐる。それを耐へるのか、時折り、口をきつと緘へ、また若い劇しい呼吸をつゞけて、足を踏みしめて進んでいく。

「おばさま」と、娘は快活な聲で、脊中へ呼びかける。

「もう、そこですよ。」

そして、元氣な笑顔を、片手の老婆へも投げ、ちよいとませた口を緘へて…………

おばさまが、しほれた顔を、默つてうなづき、そのまゝうつろな眼を細めて、ぢつと丘の下の凄じい氣配に慄えてゐる。

手を曳かれた質素な老婆も、ぢいつと熱い眼をし、娘の笑顔に答へるつもりらしく、時々首を震はせる。

「おばさま、おばさま、」と、お吉が――おゝとう／＼彼女で彼女はあつた――絶えず、日照つた息の下から、聲をかけ、笑顏を作り、また幾度も、そつと口を緘へて、苦しさを忍び、やつと、丘の脊の見晴しへ到着する。

「さあ、おばさま、さあ、おばさんも。來ましたよ。」

さうお吉は、改めて精一杯陽氣に、二老婆へ云つて、甲斐／＼しく、二人を、崖の傍の低い松の蔭へ籠もらせ、それから、ひとり、崖ぷちへ起つて出て、町と灣とを見下ろしたのだが――その、青に薄墨をさした冷い空の下で、何を彼女は見たであらう……町には船が、灣には屋根が、浮いて居つた。寺と、官舍と、丘沿ひの草家少々、ところどころに、半潰れの土藏と土藏家――それに、港近く、底が破れて据わつたぷうちやん軍船――

流失皆潰　　八百四十一軒
半潰水入　　三十軒
流失皆潰土藏　　百七十三ケ軒
半潰水入土藏　　十五ケ軒
死者　　九十九人（人別外二十三人、合計百二十二人、一家不殘死絶え六軒）

青桐も、舟板塀も、あの氣の利いた「唯一つある家」など、てんで記憶の破片に過ぎない。

「お吉や、お吉や、」とおばさまの嗄れた聲が、松の蔭から聽えて來る。

お吉が、喩で涙をはぢき、跛つこをひきながらそちらへ引き返へす。そしてその、落葉を敷いた上へ坐つて、おばさまの小さな頭をそつと膝へとつた。

「おばさま、もしかしたら、坂下（姉の家）は殘つてゐますからね。」

「え？　坂下？　お吉さん。」と傍に脊を屈めてゐた老婆が、彼女へ首を寄せて來て、縋りつくやうな眼で彼女を見る。

「えい、おばさん。よくは見えませんけれど、」

老婆は、節の皺んだ指で、胸を抑へ

「あア」と肩を落し、ぢきにまた、不安らしく首を振つた。

「お吉、」とおばさまが、彼女の膝の上から仰ぎ見て

「水がほしい。」

「ほんとうだ、御隠居さん、咽喉が乾きますね、」と老婆も、お吉を見上げて云ふ。

そこでお吉が、またそつと、おばさまの頭の下から、膝を拔き、松の外へ出て、邊りを見廻した。

さつき登つた人々が、その邊に散らばり、膝を抱えたり、幹に凭りかゝつたり、岩かげに群まつたりして、みんな、急に陰の深まつた顔をしてゐる。それを彼女は、足を曳きづつて、片ツ端から廻つて歩く。

「やあ、」とみんなが、いつもの通り、彼女を見て微笑む。だが、それが、當然いつもよりも、變に淡々しいか、もしくは、野性を持ち、どちらにせよ平生とは違ふ。

「水がありましたら、どうぞ分けて下さいな。おばさまにあげたいんですから。」

「あゝおばさまゝ。」とみんなが思ひ出す。

丘下へは、まだ二十分隔に波が來てゐるのだ。

「水は、お吉さん、あれだ。」と、眼の下を指す。お吉は、それに構はないで、次から次へ頼んであるく。

「お吉さんが水を？」と云つて、眼の隅で彼女を見る者がある。

「あゝその足を！」と彼女の裾に卑烈な同情を表明する者もある。

「水は惡い。」と忠告して、こんなことを聽かせる者がゐる——

つい一刻も前のこと。ある男が、水を呑みに丘下の寺の墓地へゆくと云つて下りていつた。波の來ぬ墓標の前の、花筒の水だ。が、寶のところは、津波のあひ間を、泥溝鼠のやうに、町へいき、そこに殘つてる土藏家へしのび入り、その歸り道を三の汐に浚はれた。水は呑んぢやいけない………

最後にお吉は、さつき登つて來る時に、徳利を提げてゐた夫婦者を、少し離れた樹蔭に見出し、そこへ廻つて頼んだ。

「水？お吉さん。」と亭主がお吉のほつれ毛の數まで讀み、「水は、ないこともない。が、高いよ。」

「あ、わけて下さる？」

「うん。」

「ではね、」とお吉が懷を探つた。無い、持ちつけの財布が無い。彼女は、髪に手をやつた。無い、髪飾りの一切が無い。

「では、お前、」と女房が、亭主の耳に囁いた。

「ではこれだ、」と亭主が、爪の尖の黑い手を伸ばして、お吉の膝を撮んで曳つ張つた。

「ありがたう。」

偶然、締めてゐた巾の廣い縮緬の前掛けが赤い絆紐を地上に曳いて、驚きと一緒に亭主の手に殘つた。

お吉は、半分ばかり水の這入つた小茶碗を大事に兩手の掌に納めて、戻つて來た。

「さあ、おばさま、水が來ましたよ。」

さう云つて、おばさまを抱き起して、その白けた脣へ茶碗をあてがつた。

おばさまの、白く鳥肌の立つた喉が、ごくりと鳴る。

傍の老婆が、松の葉の上へ眼を上辷らして、屈んでゐたが、べつと白い唾を、外の枯草へ飛ばして、羨むさうに口をす

ばめる。

「あ、おばさま、おばさんにも少し殘してあげて……」さう云ひながら、お吉は、おばさまの手から、茶碗をとつた。

「まだ……」と云ひかけて、おばさまが、口を緘じる。

お吉は、その底に少し殘つたのを、おばさんに呑ませ、茶碗を戻しに、もう一遍、足を曳きずつて、例の夫婦者のところへ出かけた。

頭の上の松に、夕空が滲みだし、二老婆が鼻を啜り初めた。お吉は、しば／＼おばさまの、そんな世話をし、老婆の木の塗櫛を借りて、暗くならぬうちに、膝の上の、白髮の大分混つた小さな頭を梳でた。

おばさまは、横になつたきりで、時折り、眼を瞑つて何か考へ、それから不安らしく、熱つぽい眸で、眞上にあるお吉の顏を追ひ求める。

「鶴は……鶴はどうしたか、」と老婆は、獨り言に彼女の息子の名を呼び、ちよいとその邊へ出て見、お吉の手から投げられた小菊を、無意識に撮みあげて、また捨ててみたり、ふいと切なさうな溜息を洩らしたりして彼女等のまゝ傍へ戻つて來て脊を屈める。

空明りを湛へた町の廢墟を、獲物漁りの男や、死體探しの遺族や、役人などが點々と動く。

焚出しの煙りが漂ひ、丘を下りる者の氣配がひとしきり立ち、それがやむと、ぼそ／＼話し聲に燧石の音がまじり、枯葉の火が、ちらちら立ち始め、星影が見える。

「お吉…………」とおばさまが、暗闇を恐れるやうに、枯葉を片手の掌に揉みながら呼びかける。お吉はその度に、頰で、おばさまの涙を拭ふ。

老婆が、やつぱりそこへ顔を覗かせ、手織りの半天の袖で、涙と鼻とを一緒にこすりながら、痰の絡つた聲で云ふ。

「どうせ、御隠居さん、碌なことはありません、あんな唐人が、こんなに來ては。」

それから、彼女は、また息子を懸ひ、うろうろと離れていく。

丘下に亂れる提灯の灯が澄み、寒さが小袖を泌み透る。おばさまは、苦しさうに、お吉に脊負はれて、岩陰へ小用に立つた。

その戻りに、そちこち地面に流れた灯りを避けて、お吉が、おばさまを引脊負つたまゝ崖ぶちへ出たが、恰度その時波除堤の向ふの、彼女がよくおばさまと一緒に散歩に出た砂濱の邊りに、ぶうちやん一行のぎやまんの手行燈が、入り亂れて動いてゐた。

「ねえ、おばさま。」と彼女が云つた。「いつか、坂下から歸つて來て、髮のものも、着物も帶も、みんなとり替へたことがありましたわね…………」

「あゝお吉、もう／＼そんなことは……………」と、おばさまは、どこまでも、自分の感慨に悩み、劇しく首を振つた。

お吉は、そのまゝ口を緘へて、松の下へ引き返したが、あの白癩の手首や、お猿の毛や、青びいどろのやうな眼が、ふいと彼女の疲れた寂しさを横切つたのだつた。

彼女は、襦袢の袖を千切つて、兩足の足首を包んだ。さうして、右と左に、二老婆の腹の鳴るのを聽きながら、枯葉の上へ横になつた。

しばらくたつて、ふと彼女が、眼を開けると、松葉の上に提灯の灯が見え、そこに若い船大工の上半身が透いて見いた。彼女は急いで起き直つて、そちらを見、大工町で見覺えのある顔を見出した。

「鶴よ、鶴よ、わしはどんなに……あゝ！」と、老婆がその大工の腹懸けへ飛びついて叫んでゐた。

「うん、うん、」と彼は、その母親の感傷を律義に、受け、「あゝお吉さんに扶けて貰つた、さうか、それは禮を云はないちあ……」

それから、彼は提灯を持つてしやがみ、

「お吉さん、ありがたう。お袋の命を扶けて貰つて。」

「いゝえ、夢中でしたことですもの。」と、お吉が足首を氣にしながら答へた。

「いや、放つておかれたら今ごろは浪に浚はれて何處へいつとるか、わからん。」

でまた彼は、頭を下げ、それから、おばさまに挨拶したが、ふいと、お吉等の慘めな容子に氣がついたらしく、

「あゝこれあ、大變だ。先づ食べ物と、屋根を持つて來なくちあ。」

さう云つて彼は、何處へ出かけていつたか、ちきに、荒蓆と、煮き出しの餘りでもあらう握飯の包みを持つて歸つて來た。

そこで早速、その蓆と松と岩と枯枝の小屋懸けが、鶴とお吉の手で爲され、そん中で、提灯のあかりの下へ、黒ゴメと澤庵の切れ端のついた晩餐が擴げられた。

この日はむろんお晝食ぬきだし、あれだけの疲勞で、みんながつ〳〵とその救助小屋の握り飯を嚙むのだつたが、おばさまは、お吉の凍えた指頭からひと口喰べると、顏を顰め、力なく彼女の膝の上で冠頭りを振つた。

坂下の姉のあの家が、其處の鶴の家などと共に、水浸しになつたゞけで、奇蹟的に殘つてることが、鶴の口から確かめられ、また姉達が、やはりあの丘にゐることも判つた。

お吉は、全身に震へてるおばさまを、抱きしめて、始終若々しい呼吸使ひをつゞけながら、小屋の片方に横になつた。

降りには、老婆と鶴が凝まつて、灯りを消してゐた。

四日の月はとつくに落ち、お吉が、袖でくゝつた足を踏みしめて、おばさまの小用に出ると、鶴が、小屋の前に提灯を持ち出して蹲つてをつた。鶴は、寒さに、涼しい眼をして、荒菰の切れつぱしを、せつせと草履に編んでゐたのだ。

翌る日、義兄が、例の相變らずの三匁生活者然とした顔を、この小屋に現し、それから、おばさまの夜具の菰と、水と、黒ゴメの粥や握り飯が、男らの手に依つて賑かに運ばれ、始終また、枯葉の火が、小屋の前に燃えた。

日暮れに大震一回。夜に入つて海嘯四回――だが、もうこの松の下の家にも、町にも、ほとんど、關りがなかつた。

その翌る日――おばさまが鶴の背に負さつて先へ、後からお吉が、鶴のおばさんの手を牽いて、町を渉り抜けてあの、勞働者街の端の姉の家へ移つた。

おばさまは、小袖のそちこちに朽葉をくつつけたまゝ小さくちゞかんでゐた。お吉は、袖の輕い片手に、松の家の荒菰を抱え、鶴のこしらへた草履を穿いて、始終おばさまに聲をかけながら、足を曳いてをつた……

この大震海嘯が、「天の叱り」であつたにせよ、また「天の禍」であつたにせよ、それはどうでも、たゞ一つのことは眞理だ――平凡な人間が、ふいと英雄になつたり、子供が急に大人になつたり、また老人が子供に返つたり、人が神にも、獸にもなつたり――いや、こんなことは、大正十二年九月一日後、しばらく、みんなわれ／＼の目に觸れた常識だつた……

われわれの此の海港の場合――

あのかぶと蟲の殘骸のやうな土藏家が、ところどころに、濡れしよびれてとぼんと冬の日をうけて立つてゐる。人々が、あちこちに寒むさうに群れ、町の干潟に張りついた流失着類などの奪ひ合ひに眼をいからしてゐる。

その中を、淺黄に白襷の小旗を持つた「旗持尉官」と、皮箱を下げた唐人など三四人が、かた塊のやうに呆けて、奉行所へ渉つていつた。

みんなは、ちきに、その嘲ひ合ひを中止し、彼等へ、とげ／＼と白眼を送つた。

それからしばらくして、今度は、唐人水夫の一隊が、帆張りのトイタを四つ五つ擔いでやはり町を抜けて奉行所へいつた。

みんなは、むろんまた、その劇しい饑えと寒さを後にして、彼等へ憎惡の眼差を向け、ふとそのトイタの上に、彼等が町で見知り越しの女や老人の仰臥姿を發見して、思はずたじろいだ。

奉行所で、このワシリウイチ・ぶうちやんの使が、「陽氣市長」に述べた詞——今般の大震海嘯は實に遺憾で、深く御同情申しあげる。就ては本軍船の軍醫官及歩卒をお貸しするから、自由にお使ひ下さい。尚、海嘯の際、幸に本軍船へ收容することの出來た罹災者の病人を御返送申しあげる——

赤十字社が世界的に出來たのは、幾年か後のことだし、むろん陽氣市長は、この軍醫をことわつた。それから、これらの罹災民を訊問し、彼等がぶうちやん軍船で、「からだ中按摩され」たり、いろいろ好遇されたことを知つて、例のじやぱにいにず・すまいるを浮べて、一流の獨白を洩らしたのだつた

——おそるべし！・おそるべし！——

ともかく、ヘロリ大將よ、呪はれてあれ！ワシリウイチ・ぶうちやんよ、呪はれてあれ！

此の海港では、大震海嘯は、天譴でもなく、天災でもなく、實に「唐人禍」だつたが、然も、海港は、日本第イチバンの開港場で、從つてその復興の遲れることは「御外聞ニ相拘」はつたし、また町の回復の「遲速ニ寄リ御國ノ强弱貧富ヲ

そ見透」される道理であつた。

ぢきに波除け堤の修理が始まつた。妙な名前の缺乏所も修理されて、そこにあるあの觀工場の商品目にも、ちりめんなどが加はることになつた。一方、救助小屋、施米、救恤金などが、それぞれ取計はれ、また海港人の離散を防ぐ爲に、特別の場合には、（たとへば舟稼業の舟造りなど）無期限無利息の相續借金を申出ることも許された。陽氣市長の陽氣政策は、また絶對に必要だつた。船宿連中が、あの屯田女隊を聘すべく、一軒につき五兩づつお上から借りつ放して、コケラぶきなどの假屋の新築にかゝつた。

船が新しく造られ、家が新しく建ち、從つて職人は皆好景氣で、さうして、あの勞働者街の草家――會て「唯一つあつた家」の女主人が、家屋流失慰藉金、花降銀三個をお上から貰つて、いま、このくすぶつた家の爐べりに煎藥の湯氣を嗅ぎながら、横たはつてゐた。

地震で損ねた脚に、あの松の小屋の冷え込みがこたへ、それに第一、こんな彼女に致命的な氣落ちが來、毎日、寢たつきりで、たゞ彼女のお吉の手に「人形」以上の沒表情さで殘つてをつた。

「おばさま、おばさま、」とあの聽き馴れた聲が、毎日、不思議に明るく、活き〳〵とこの家うちにひゞきわたる。彼女は、も一度あの幼女時代の勞働着に包まつてゐる。姉のもじりの半天、帶代用の前掛け、髮も無雜作に束ねたまゝで、時折り、裏の疏菜畑の實の入つた人參を引つこ拔いて、振つて見せたり、また爐の向ひ側に坐つて、焚火の涙を笑ひながら、そう呼びかけるのだ。飾り氣の微塵もない顏の膚に、絶えず健康な紅らみが滲み、光のある微笑が、眼元にも、口許にも、あとから、あとから、と詰めてゐるのだ。

おばさまは、その都度、充血した眼を見開いて、そちらへ力なく笑つて、ぢきにまた眼を閉ぢる。さうして、眼を閉ぢたまゝで、ぢつと彼女の氣配を追ひ、いつときも傍から離さない。もし、お吉が何かで、姉が代つて、たとへば藥茶碗を

慰めたり、足を揉んだりすると、實に不機嫌に押し默り、時に露骨な溜息の音をひゞかせたりする。それが、お吉を見ると、忽ちほぐれ、それから、細つた手を伸べて、お吉の綿服の衣紋を、ひとかど整へてやつたりするのだ。だから、お吉は、おばさまにつききりで、朝も、夜半もなく、善い看護婦で、善い母親で、さうしてたしかに善い人形であつた。

だが、何がお吉を、こんなに幸福にするのか。

人は、いまやこの海港中にとゞろいてゐる新生のひゞきを、この見窶らしい草家の隣りにも聽くことが出來た。板ぶきの、ほんの三間しかない百姓家式の板の障子があるかと思へば丸窓があつたりする、何處かちぐはぐな建物だが、もう木組みも屋根も出來上り、あとは細かい仕事が殘つてるだけで、其處に、日暮れ方から、夜へかけて、曾つて、お吉の子守唄が聽えた時の如く、鉋や手斧の音が、松風の間に、ひゞいてゐるのだ。さうして、人は、そこにまた、あの好人物の、勤勉な義兄が、彼の青海波錢單位の夜なべの代りに、すい、すいと板を削り、それから、若い、眼の涼しい鶴が、愉快さうに槌の音を立てゝゐるのを見る。それから、時折りまた、ふいとお吉の姿が、跫音を忍んでそこに現れ、彼等に小聲で挨拶し、出來具合をひと眼で樂しみ、ぢきにまた、おばさまへひき返すのを見る。

これが、おばさまとお吉との新居であることは云ふまでもない。二人の船大工の、船おろしの祝儀と貯金、それに好景氣の生んだ夜なべの餘裕とを寄せて、出來上りつゝあるのであつた。

「おばさま、もうお勝手を作りましたよ。ほら、あれは、いま鶴さんが、棚をこしらへてる音ですよ。」

そんなことを、お吉は、おばさまの枕許でいつも説明し、おばさまらしい憂鬱を慰めた。

おばさまは、江戸のお屋敷への、例の綿々とした手紙を、床ん中からお吉に口述し、二三日がゝりで作りあげて飛脚に托させた。それと引き違へに、見舞ひの金と米がついた。

さうして、恰度、あの港口に据わり切りになつてゐたぶうちやん軍船が、曳き船に曳かれて海港から姿を消した頃、（十二月二日――伊豆宮島沖沈沒）彼女等は、その、勞働者街の天邊の、船大工達の作つた新居へ移つた。

だが、おばさまの衰弱は、段々加はつていつた。彼女は、あの豪奢至上時代の、あのアダ花生活のまぼろしを、絶えず囈言に言ひつゞけ、眼を醒ますと、血走つた眼ぶちを開いて、執拗な、不安な、愛撫をお吉に示すのだつた。

お吉は、このおばさまの爲に、また三味線と、小間物と、ちりめんの着物を買ひ求めねばならなかつた。さうして、その枕許に、入念な化粧をして、例のお澄ましをして見せ、それから三味線をとつて、ひとかたり、かたつて聽かせ、時に、また、あの初めて、青桐の家へ天上した時代のやうに、おばさまのいひつけ通りに、彼女の床の中へ這入つて、好い兒らしく抱きしめられて見ねばならなかつた。

そんな氣紛れが、朝となく、夜なかとなく、ふと松の音などに釣られ、おばさまの頭を訪れる。そしてそのたびに、お吉は、素直に、その好い兒役を勤め、その合ひ間を見て、食事拵らへとか、藥鍋の氣配りとか、その他おばさまの世話と家うちのことをみんな獨りで濟ませるのだつた。

そんな風で、達者な三味線のひゞきと、あの船歌になつた美聲とが、ふいと眞夜中に、この家を流れだして、このまだ菰懸けの小屋などの寒風に揺れてゐる町へ沁みわたることが、しば〳〵あつて、みんなを吃驚させたし、また、ふとこんな場違ひの區域で、こんな場違ひの建築師の建てた小さな家に、時節を無視した美裝を凝らした「お吉」を見ることも、たしかに驚異に價ひすることであつた。

「唯一つある家」の女主人とその人形！

おばさまは、骨と皮になりながら、一ケ月ほど、このやうに、彼女の命懸けの氣紛れを氣紛れて死んだ。

さうして、そこに、最後の勤勞に疲れ切つたお吉が、たつた獨り、あの透きとほるやうな眼ぶちを紅くして殘つてゐ

た…………

襲が濟んでしばらく經ち、復興の「陽氣」が盛んに彼女を招き、も一度、彼女は藝者になつた。從つて、彼女の花紙袋（祝儀入れ。この海港のあの節倹ましい屯田女隊特有の持ち物。彼女等は特有の「身躾み」を忘れぬ爲に、常にこれを三德と一緒に帶に入れて持つてゐるのだ）は、例に依つて、屯田女隊を壓つしてゐた。

「陽氣市長」も「第二市長」も、もとのまゝの彼等で、それに、おばさまを亡くした彼女への同情など多少あつて、然し、もうあの、彼女の爲に、客を嚴重に撒みあげた後見がゐないので、そこに當然起るべきことが、しばしば起つて來た。第一、破瓜師がちやんとゐる海港で、彼女が、そんな客に、端然とした態度を見せることは、むしろみんなが不思議に思つた位だつた。

そんな場合が、つぎ〳〵に重なつて來、その一つ一つの場合の執拗さを、彼女の身についた被布的な、氣位で手強く撥ねつけて、夜深く戻つて來る寢床が、あの、たつた獨りの、松風の聽えるあたりで――

彼女の眸に、寂しさと、もの倦さが、だんだん影を深め、熱を帶び、溜息がひとりでに洩れ、獨り言さへ、自分で自分の耳に入り、やがて、彼女は、あの津波の晩の、避難所の鶴を思ひ出す。あの夜更けに、ひとり、默つて寒む空の下で、自分の草履をつくつて呉れた男の涼しい眼を思ひ出す、このおばさまの新居を斷つて呉れた涼しい鶴を思ひ出す。家の何處を見ても、あの鶴の眼が宿つてる……

ある晩、彼女は、山田屋の裏座敷へ、鶴を呼び出し、一緒に、呑めない酒を呑んだ。

「かうなると、」と鶴が羞かみながら、云うのだつた。

「おれは思つてゐた……」

「いつまでも、」と幾度か逢つてるうちに、鶴が、また、ぢきに赤くなつた頬を抑へて、生眞面に云ふのであつた。

「こんな稼業は、して貰ひたくない。」

「さうさ。鶴さん。」と彼女も頬を熱くして答へるのだつた。

「はやくやめてしまひたいと、さう思つてるよ。」

彼女は、大工町の鶴の家へ、あのおばさんがいつも彼女に感謝してる家へ、鶴の着物などを、せつせと贈りとゞけた。鶴は、律義で、彼女の家へ、義兄達を憚かつてあまり來なかつたが、彼女は、彼の眸と勤勉と忠實を信じることが出來た。また彼女は、眼の前にゐぬ彼を、すつかり見透すことが出來た。鶴もそれは同じで、さうして、そんな幸福が、二人の上に續き、いつの間にか、海港の一隅の寺に、コン四郎さん（Consul）が來て、そこの山門に、十五間の旗竿の先に花旗が毎日飜つてをつた。

六　コン四郎さん

——合衆國プレシデント、吾れに、能く兩國人民の間に存する懇情を守らんが爲め、力を盡す事を命ぜり
プレシデント、吾れをして、時々新なる處置を施し、兩國人民の交際彌厚くして、互の好情を固守せしむる事を命ぜり
吾れ前條の願意を遂げずして止まざる事を得ず、且帝國の政府に正實の懇心を表するは、我が焦思の願なり
吾れ貴君に願ふ。我官職に應ずべき作法を以て、吾を保護せん爲公に示諭し給ん事を——

コン四郎さんは、軍艦（フレカット）に乘つてこの海港へ來ると同時に、こんな手紙を、「帝國日本の外國事務宰相閣下」へ送つて、來作の意味と決心を先づ表明した。

それから、彼は、自分の威厳を日本人に示す爲に、長さが六尺五寸もある長大な駕籠を特別に注文して、それに乘つて

奉行所へ往來し、また、駿馬にキンキンした鞍を置いて、脊中一杯、刺靑のある馬丁を先へ、遠出に出かけた。

また彼は、ドルラルの日貨換算率を協定する會議で、奉行等の提議に癇癪を起して、傍にあつた煙草盆の火入れをとつて横に投げつけ、灰神楽を起し、この上は戰爭だと豪語して、宿所の寺へ引き上げたりする。

そんなコン四郎さんが、誰ぞや行燈の頭を大きくしたやうな箱を、寺の庭に据えて、ろびんそん・くるうそうみたいに鳩を飼つてゐた。―

時々食慾が減り、睡眠不足に惱むもう五十を越えた彼であつた。

彼が、ふいと「市長」等に、小間使を抱えたいと申し込んだ。そして、彼の通譯の若いヒュウ助さんが、こちらの通詞へ耳打ちをした名前が、お吉だつた。

「陽氣市長」は、この時もうゐなかつたが、「第二市長」はゐた。それに「第二市長」は「陽氣市長」以上に直截な仕事師で、その上また、女による懐柔策つまり待合政策はその頃の、こんな連中の常識でもあつた。なほ惡いことは、あんなお吉で、序に、手先に使ふことも出來る筈であつた。

そこで、「第二市長」が、早速名主と一緒に、お吉を呼びだして、命令を下した。

―花旗國領事館へ御奉公申しつける。ありがたく心得ろ。御手當は莫大だ。支度金二十五兩をすぐに下されるぞ――
―

―おことわり申しあげます――とお吉が、ちきに答へた。

―お上の仰せだぞ。それを背いては爲にならぬぞ。

―いやでございます。

――亂心したな。名主預け申しつける。

「市長」らがコン四郎さんに云つた。

――あれは、どうも、遺感ですが、よくないやうです。どうぞ、ほかのにお定め下さい。

――いや、わかりました。支度金まで、お渡しゝた筈ですが。まさか今度は江戸の Tycoon に伺はれるわけでは無いでせうな。いや、それなら、何度もこれまでに舐めさゝれた經驗でした。兎も角、あとは軍船に依つて………

――あゝ、先づお待ち下さい。何とか致します。

――いつそ、お吉を切つて、首にして持つていつたらどうだ――と「市長」等の會合である者が云つた。

――いや、少々考へがありますからお委せ願ひたい――と「第二市長」がとめた。

「第二市長」が、苦勞人（ツウ）な烱眼を放つて、鶴を呼び出した。

――お前は出世をしたいだろ。お前を御用船大工の頭にしてやらう。名の外に姓をやらう。就ては、お吉を諦めて唐人へやつてくれ。それが、忠義で出世だ。

――恐れ入りました。

鶴が、正直にお吉を訪ねて云つた。

――お吉、おれを出世させてくれ。おれは苗字が欲しくなつた。どうぞ、唐人へいつてくれ。

――それは、お前、ほんとうに、さうお云ひかえ。ほんとだね。ぢや好い。そんな氣なら好いよ。わたしも覺悟をしてるんだから。よくも、ほんとうに！

「第二市長」がある晩、伊豆よしでお吉を呼んで云つた。

――お前の氣性を見込んで、こんなに手をついて賴む。唐人へいつて呉れ。でなければ二三人切腹せねばならぬ。國の爲に、いつて唐人の機嫌をとつてくれ。斷ることは誰にも出來る。そこを辛抱して國の爲にいつてくれ。それがお前の鄕の出世にもなることだ。何卒いつて、唐人を宥めてくれ。いまは日本の大事な時だから。それにお前の鄕の出世にもなることだ。

「人形」のお吉が泣き伏した。

しばらくして、コン四郎さんのあの「領事の權勢を日本人に示す爲の」駕籠（のりもの）が、四人の陸尺に擔がれ、警護侍、仲間、手がはり等を連れ、この港町の南の端の勞働者街の天逹から、悠々と街を縱に通り拔けて、花旗の翻へつてる寺へ――日本ダイ一番の領事館――へ向ふ姿が、町の人々の瞻を奪つた

その簾の卷き上つた中に、脇息に輕く片肘を載せて、伊勢物語へ眼を落してるお吉の被布姿が、ぴたりとおさまつてをつた。

「お吉さんが唐人へ通ふよ。」

「唐人お吉が通る。」

そんな評判が、ぱつと立ち、毎日、日暮方になると、お吉を見る人々が、路の兩側に犇めいた。

「唐人お吉！　唐人お吉！」と人々は彼女へ呼びかけた。

あの「唐人禍」のあつた町で、呪咀の形容詞は「唐人」で澤山だつた。

餘りに騷ぎがひどくなり、お吉はコン四郎さんに賴んで、駕籠はよして、徒歩で通つた。

だが、人々は、彼女の顏を見ると、やつぱり唐人お吉と、聲をかけた。

錢湯へ出かけるとそれ、買物へ出かけるとそれ、至るところ、彼女の眸に寫る人間が、みんな、彼女にその嘲笑と白眼を浴せる。それから露骨な漫罵を加へるものさへ出來て來る。

彼女は酒に親しんだ。彼女は紛々とその酒氣を散しながらコン四郎さんのところへ行つた。

だがコン四郎さんが云うのだつた。

——そんなに酒を呑んだ日は來なくてよろしい。

それからまたコン四郎さんが云うのだつた。

——花旗國船が入港た時は絕對に來てはいけないよ、オキチサン！

松やアオ木の大木のある寺。山門の右側の椿に竿頭高く花旗が飜へつてゐる。左側に例のろびんそん・くるうそう鳩小屋。その向ふにモチの木、向ひはコン四郎さんの給仕の日本少年等のゐる小舍、その裏に馬丁の藥屋がある。お吉は、この藥屋で一憩みして、身仕舞をする。其處の小娘が、その間に本堂へ行つて、コン四郎さんの都合を訊きにゆく。よけれ

ば、「あがる」。炊事部屋、供部屋などのある庫裡を右に見て、本堂の階段を上ると、左側の幕の奥の十二疊敷が、コン四郎さんの部屋だ。細い白い蠟燭がともつて、コン四郎さんは大底、葉煙草を吸つてゐる。

眞白な髮と鬚髯。薄曇りのした茶色の眼。子供つぽい口許。中脊の小肥りにしまつたお爺さん。日本語はオキチさんだけ。

「オキチさん。此のお爺さん、あなた、風呂屋で、見初めた。はアはツはア」と通譯のヒユー助さんが、日本語で云ふ。

お爺さんはお吉の姿を見ると早速立ち起つて、兩手を伸ばす。お吉は、ふいと身震ひをする。それからみんなの聲を思ひ出す。

唐人お吉！唐人お吉！

「あゝコン四郎さん。」とふと口に出かゝり、自分ながら吃驚する。

コン四郎さんが溜らなく憎くなることがある。また變にさうでないこともある。

彼女は、ふいとあの「おばさま」を想ひ出す。

「おばさま、おばさま。」と呼んでゐたあの味が、身内のそこゝに疼き出す……

朝早く、彼女はまたあの馬丁部屋へ歸り、身扮ひして戻つて來る。それが、コン四郎さんが病氣の場合は、彼女は、幾日でもつきつきりで介抱する。床の傍の腰掛けに、緞子の帶をキチンとしめたまゝで坐つて、曾つて厭な顏をしない。

コン四郎さんは、何よりも牛の乳を呑みたがつた。それを彼女が知り、そつと人に頼んで搾つて貰ひ、切り子の筒盃に少し許り、臭いのを我慢しながら持つていつた時のコン四郎さんの悦びはまるで子供だつた。

だが、結局、彼女は、朝の明るい光を浴びながら町を拔けて戻つて來ねばならぬ。そこにまた

唐人お吉!唐人お吉!

それに、いつか、屯田女隊の一人が彼女を捕へて聽いたことがある。

「姐さん、唐人は、何んするときにあれだと云ふがどう?」

その時、彼女は、どうしたのか、變に助かつたやうな氣持ちに、カラカラと笑つて云つたのだつた。

「唐人だつて人間さ!」

さうして此の偉大な眞理を發見したのは、彼女が――このおばさまの人形が――このコン四郎さんの人形が――この時代の人形が……………たつた一人あるきりだつた。

定價

	定價	送料
一册	八十錢	参錢
六册	四圓八十錢	送料共
十二册	九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一册に付十六錢申受けます
△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい 郵券代用は一割増の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和三年十月十八日印刷
昭和三年十一月一日發行 （禁轉載）

發行人兼編輯人 島中雄作

印刷人 高木鳥三

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍

東京市丸ノ内ビルヂング七七六區
中央公論社
電話丸ノ内二〇六番
振替東京三四番
同 長野三二〇五番

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. Published Monthly.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.